近世俳諧名家集

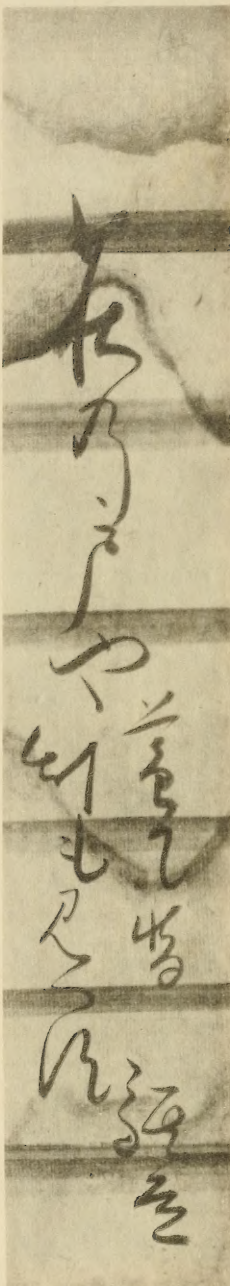
装幀　津田青楓

重厚短册

（武藤一郎氏藏）

細工刺や耳のしがらみ紅葉川

重厚

騏道短册

萩の戸や暮て暫灯も見へず

騏道

成美短册

白木槿毎日しぼむ頃を見る

成美

巣兆短册

梅香や様子のよさに芹をつむ

巣兆

岳輅書

（鈴木廉平氏藏）

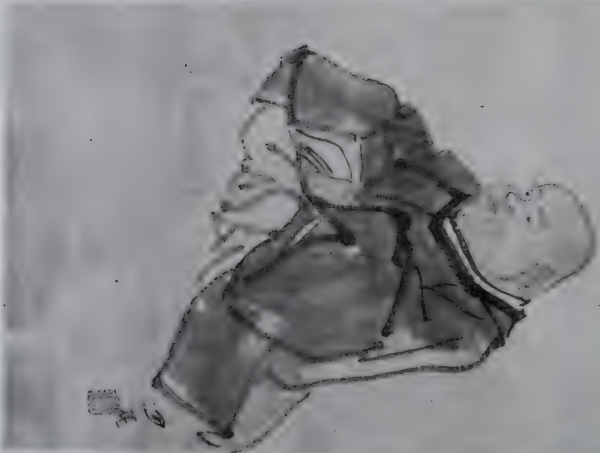
井上士朗像（月僊画、岳輅賛）　（鈴木廉平氏蔵）

菜の花にそめよそゞめの袖衣

かくいひけれども退すゞめはさせるけしきも見へず

子等は先に心得て

菜の花に口ばしそめて雀すゞめ

岳輅書

解題

つの文字

寛政三年板　　中本一冊

言葉の遊戯の行はれたかず〳〵の中で、最も技巧の進んだものは紀六林の『つのもじ』であらう。六林は尾張名古屋の人で堀田氏、『鶉衣』の作者也有の學才に服して、也有張りの『まにふんで』といふ俳文集がある。この『つのもじ』は細井廣澤の『きみまくら』のいろは歌の替哥にならつて、いろは四十七のかな文字をいろ〳〵に置きかへ、同字を一つも用ひないで、律語の形式に表現したものである。試作三ッ物及び支考の提唱した假名の詩の樣式を、いろは歌化したものゝ外は、和歌に詞書を添へ、又は琴歌・小謠・漢詩の類であつて全篇俳諧はかりでないが、かうした試みの俳諧的技巧から生れたものである事は拒み得ないと思ふ。六林の『つのもじ』に試みた作法は支那の王愼卿の詩牌を應用したので、上下平韻三十字を一枚づゝ木札に配して其の韻を分つ作詩法に基き、あらかじめ五十枚の木札を用意して、それにいろは四十七字及び京・んの二字を加へ、都合四十九枚の殘り一枚を白牌として畳字の用札にあて、それらの木札をさま〴〵に轉置して一字と雖同字を用ひず、一つの趣向にまとめる爲に努力したのである。六林の試作は安永三年の序があるので、その頃から着手して漸く一編の『つのもじ』をつくり上げるまでに進歩した譯である。純粹の俳書といへないが、也有の『鶉衣』にも紹介されてゐるので本集に收めたのである。

夜半亭の正統はその二世几董で中絶したかのようで、事實は几董の門人紫曉の力で支持され、門系の分散するような事はなかつた。昔紫が後に夜半亭となつたといはれるが、それは傍系で、號の形式をふんだ迄の事であらう。紫曉は富氏、鶴鳴と号して、几董の生前に愛され、師弟の情誼が厚かつたので「鐘實淺」及び「夢の猶名殘」をその追善に板行して師恩を忘れず、社盟のすゝめで春夜樓の二世を相續した一事で以て人物の篤實さが推知される。「松のそなた」は師の生前に「門生紫曉、はりまの國に節更て、菓が下しけゝき軒〱をつたひありきつゝ」と天明八年の几董序に記してあるように、播磨の青蘿一派と風交を重ねて勧進した發句に、その師を介して常に接近した曉臺や闌更、並に蕪村の遺弟月溪・道立その他の作を採錄したもので、几董の序に菓が下とあるのが青蘿である。題名は泉湖の跋に見える如く、紫曉旅中の句、

聲暗し松のそなたを行千どり

から取つたので、曾根の高砂や播州には松の名所が多いので内容によく響いてゐる。作者の顔觸からして、見方によつては、天明末期に於ける京坂俳壇の縮圖として蕪村時代に入れてもよい集であるが、近世への過渡期に行はれた前代の遺響と見れば、本集に收錄したからといつて不妥當ともいへなからう。

さきつる　寛政十二年板　中本一冊

天明調の鼓吹された明治時代、蕪村・太祇・青蘿・曉臺・闌更の五子を以て、「探二道ノ於蕉翁一彰二ス音ノ於己一。加フルニ以テス

新寄出藍之名ノ者ナ也。」と推薦して、其の五子の發句を顯題にした「新五子稿」の俳壇的にもて囃された事は今に記憶する人があるであらう。その『新五子稿』の編者嘉會室亭の選集と見做さるゝ『さきつる』はまだ一度も紹介された事がないので、亭その人が疑問の人物視されてゐる。しかし『さきつる』を通して、亭は閑齋と稱する京都の人で嘉會室はその号であり、亭は假名で「とほる」とあるので、嘉會、室亭の如き、もの笑ひな呼び方をするに及ばない事が分る。板本は十枚ばかりの疎末なものながら、發句の作者が或る一派に偏せず、全國的に行渉いて一茶の句をすら採つてゐるので、寛政時代の風調を知るべく、いはゆるつぶの揃つた句集である。題簽には『さきつる』とあるが、序文に「塵を苦とし塗めるをしきなとして」とも、又「ちりくほなるまじらひ」ともあるし、跋には「題塵窪」と明記してあるので『さきつる』といふのは本書の別名か、或は題簽の貼りちがひで『塵窪』が本外題であるかも知れない。併しその類本に接しないので疑ひを存じて、しばらく題簽通りに從つた事を一言して置く。

新華摘　　寛政四年板　　中本二冊

其角の『花摘』は母妙務尼の回向に行つたのだが、騏道の『新華摘』は題名こそ「其子が例にまかせて新華摘と題し」たれ、誰の結緣のためでもなく、其の願ふところは俳諧道の精進にあつたから、一夏百日その同志と詠じた發句を記錄するに止めたもので、中元には特に亡師曉臺及び故人香漠のために「香沛遊燭をかゝげ、敬ひかしづく」ところあつたが、それも讃佛乘の緣に過ぎない事を序文に述べてある。騏道は大津の人で、大村氏、青案居と号した曉臺の一門である。天明三年三月曉臺の幻住庵で行つた『風羅念佛』の時、既に粟津幻住庵社中の筆頭として其の維持に盡力したので、干當の『關清水物語』に騏道が「幻住庵のあれたるをなげき」痛心のあまり「この程は七日七夜もね

ぶらず」とあるように、古蕉門の絶對信者であつたので、此の『新華摘』も幻住庵興行の歌仙を起筆としてある。寛政四年四月八日から七月十九日に至る句錄で日記風の記事はない。「新華摘」といへば蕪村の遺稿のように思はれるが同書は吉澤義則氏の『國語國文の研究』によれば寛政九年の刊行であるから、出板者月溪は騏道に同名の書あるを知らなかつたのであらう。家藏本の置きどころを忘れたので、校正の際には西村燕々氏が家藏本によつて謄寫しにされたものを借覽して、その用に充てる事を得たのである。

はりまあんご

寛政元年板　中本一冊

行脚は俳諧の道を躰得する一修行とされたが、後には生活苦を遁るゝ方便として行脚に出た者が多い。次手を求めて行けば、それからそれへ、たゞで寄食されたのだから、こんな簡易の生活はない。『はりまあんご』の撰者瓜坊も亦その一人である。南越の杜多瓜坊と稱するので越路の者とは知らるゝが、常に一所不定でそのやゝ定住したのは播磨の鹿古、攝津の池田であつた。鹿古では青蘿の栗の本に同居して「師とかれを論じ、これをたゝかはし」と述べてゐるので、青蘿を師と仰いで居たらしい。「傍なる机上に門人の句〳〵堆く」といふのは青蘿の事で、瓜坊はその堆い句々を整理して、この『はりまあんご』を編成したのである。あんごはかの佛家で一夏九十日の戒行を守る安居の事で一所不定の瓜坊には青蘿の住國播磨が、その身のための安居であつたから標題に用ひた譯である。歳旦の三ツ物幷に春興の歌仙の外は、四季の發句をあつめた丈で片々たる小冊であるが、瓜坊は嚏居士一普と共に、行脚中で力量ある者なので、當時の選集としては內容にすぐれたところがあり、作者の國々に渉つてゐるのが殊に參考になる。

落柿舍日記

安永三年板　　大本一冊

嵯峨日記で見ても落柿舍の住み荒されてゐた事が察しられるから、そのいつの程にか頽破して了つたのは怪しむにたりない。去來の通家である重厚は「風流のすきものにしられたる古跡のかたなくなりけるを歎く」のあまり、菊亭家から庭中の腰掛と落柿舍の額字を與へられ、むかしの落柿舍とは位置こそ違へ、北嵯峨小倉山の麓にある弘源寺の旧跡が「柿ぬしや梢はちかきあらし山」の去來の句に趣の通ふところあるので、そこに菊亭家よりの腰掛一字を移し額をかけ、句碑を建立し、再興落柿舍の俤をつくり得た折から、出羽の規慶が同じ志を起して岡崎の蝶夢を訪ひ、この事を知つて重厚に力を添へ『落柿舍日記』の出板を遂げたのである。本文の落柿舍記は去來の眞蹟を摹刻したので『本朝文選』にあるそれとは文字の異同少くないので、去來が後日推敲して書きなほしたのであらう。日記といふが落柿舍で詠じた芭蕉と一門の發句・歌仙を主として輯め、去來忌懐旧の歌仙を附錄したものので日記の躰はなして居ない。出板の年代から當然『中興俳諧名家集』の中に入れる可きであるが、編者の重厚がやゝ時代の下がるため本集に收める豫定にしたので、それに從つて覆刻した次第であるから誤解なきようにあり度い。原本には落柿舍藏の藏板印が捺してある。

鴈風呂

寛政六年板　　中本一冊

雁の渡る時その翼をやすめる小さき木をくはへ來て、外ヶ濱邊に落したもので再び雁のくはへ去らないのは、その雁のつゝがによる事とあはれんで、その木を拾つて風呂を焚き諸人に浴せしむる津輕地方の行事を題名としたので、そ

のいはれは編者呂蛤の足疾にて諸國を遍歴する事能はざるため、雁風呂の行事に托して國々の作者の發句を一集としたものであるからである。呂蛤は西村氏、京都の人で大樹庵と号したが、貞門令徳の後系古拙の門人である。「誹諧家譜拾遺」の異本「尊々館誹諧点者目録」によると、「早く寺門に入る道の本陰蔵主改名月扇呂蛤」とあつて、所司代から点業を允許されてゐるが、夜半亭系統の作者と接近したので、俳諧の風格に純然たる天明調と稱してもよいまでに變化してゐる。「雁風呂」の作者を見ても、いはゆる点業者は一人もなく、中興俳諧の新人と其の後系者と見らるゝ人ばかりで、寛政時代の集とは思へない洗煉された句をよく揃へてゐる。重厚の序があり、且つ重厚と几董との三吟があるので、呂蛤がこの二人の感化によるところが多かつたであらう事が思はれる。原本は河東碧梧桐氏の許で一見して、呂蛤の著書として珍らしい上に價値のある事を信じて借覽筆寫し、再度校正して置いたものを原稿としたのである。

淺草はうご

寛政十一年板　　中本一冊

寬濶な江戸人で通を氣取るよりは讀書を趣味とした成美は、もと〳〵江戸座で育てられた人物であるが、決してその悪洒落に染まらなかつたので、古蕉風を信ずる人々と交際して、内心にひけを取るところがなかつた。札差の家で俳諧は餘技に過ぎないので野心もなく、生活に窮する俳人があればよく扶助してやつたから、すべての方面から德とされてゐた。「淺草はうご」の序に四山道人とあるのは其の一号であつて、外題のこゝろは淺草紙と同じく詠みすてられた句屑のすきかへしで、しかもそれを「人にもみたまへといふは、つらあつしとや」思はれようと卑下して附けたのである。金翠の發句に成美の脇を附けた五吟歌仙の一折は正月十日、そのつぎの五吟一折は正月十三日の興行であるから、成美の庵室で春の文臺開きに行つたこの二折の連句に、常にしたしく往來する人の春季の發句を選み添へ、更に文音で屆い

た諸國俳人の句を附錄したものである。春興又は歳旦帖は前年の暮に刷つて配冊するのであるが、これはその年になつてからの俳諧を板に起したものながら、內容から考へて春興の一つとして配り本としたものであるらしく思はれる。

俳諧鼠道行

文化十二年板　　中本一冊

江戶節の根元虎屋の薩摩淨雲が其角の戲作に節付をして、りつぱな唄ひものとした鼠の道行の本文を、成美が其の手筐のうちに朽ちて忘られ行くを惜み、節付のまゝ板に起したのである。成美は亡父の「より〳〵にかたられしを、ことにわかき頃に聞おき侍る也」と述べてゐるので、實際淨瑠璃に語られたこと疑ひないが、本文は其角の門人格枝の『綸大名』に既に揭出され、格枝は「此光陰の道行は、ふし穴よりと一軸になして、晉子が醉に送られける」といつてゐる。『綸大名』は寶永四年の刊本である。但しそれには節付はないが本文は一致してゐるから別々に寫し傳へられたのであらう。右の鼠の道行を開板する序で、成美がその身うちの者と卷いた百韻、及び諸家の發句を附載したので、『淺草はうご』にくらべると、作者の顏觸が變つてきて、蒼虬や雪雄後に梅室などの名があらはれそめてゐる。撰者は心非・車兩・久臧の三人になつてゐるが、當然成美の著と見てよいもので、久臧は成美の家の番頭であつて後に由誓と改号した人である。原本は川西和露氏の藏書である。鼠の道行の本文は頗る明瞭に書いてあるから、そのまゝ凸版にして揭げたが判讀を要する程のむつかしいものでない。

德萬歲

寬政十二年板　　中本一冊

巢兆の序に「寬文之德萬歲者、雛屋親重入道之著所也」とあるが、其の『德萬歲』は連句の作り方を說いたもので

「いよ〳〵はなひ草の名をたて丶、くさめ〳〵徳萬歳といひなりぬ」で筆を擱いた永歷二年の著作である。此の「徳萬歳」は外題を似せたゞけで、內容は全く新規のものであるから、巣兆が趣向を考へて蕪市のために、其の賀帖として開板したものであらう。普通の選集のように發句とその作者を同一に扱はないで、先づ作者名を最初に掲げて置き、本文の發句は無記名で載せて作者の誰なるかを推量させる趣向に出來てゐる。そして柱心に小さく「從一至因」といふ風に刻してあるから、發句によつておほよそ作者の誰なるかを推量し得たならば、作者名と照らし合せると、乙二から乙因に至る間に其の作者が發見されて、果して推量の通りか或は思ひ違ひであるかゞ判然するのである。巣兆は「句作と作者とを引わかちて」その句作のみを「心しづかにこと〴〵の句意を感味すべく」それによつて「初心と手だれの趣向を知る事」もまた「よき修行ならずや」と考へて、かうした奇抜な思ひ附を試みたのである。「名寄せの大例」にその事を說明して、本文の發句には「品さだめ」とあるのが、いかにも巣兆風の洒落て氣のきいたやり方である事をうなづかせる。

せき屋でう　享和二年板　中本一冊

江戸の郊外千住の關屋に書室を構へてゐたので、關屋の巣兆とよばれたゝめ、この集の題名に用ひたのであるが、大坂旅寓中の著作で、その「誹諧行脚略暦」は巣兆の性格が現はれてゐて面白い。殊に大坂は「大みやうの金借ル比、または炉びらき口きりの時せつ、すべてふさがり」といふ一項は經濟都市としての大坂と、似而非風流な贅六氣風を諷刺した言葉とも見られて深刻な評語である。巣兆は建部氏、父松圃を介して白雄門人となつたが、畫は文兆に師事したので、巣兆も師の畫號にちなんで附けたのであらう。俳諧には秋香庵、又は菜翁を別號として畫の方にも用ひ、

落款は常に父の松圃の印を斜に捺してゐるので有名である。「せき屋でう」は巣兆の俳諧畫帖と見るべきもので、雄渾な書風がその洒脱な畫と氣分が一致して、板本に接すると一入の趣味が覺える。本文の發句の例年定客は關屋の秋香庵の新春文臺開きの賀客で、柿壷亭主方は大坂の旅寓長齋亭の人々をさしたのであるから、歳旦帳として知人に配本したものであらう。原本は川西和露氏の愛藏されるもので、覆刻に際して畫は悉く凸版とし、整版に就いても板本の體裁を損じないよう骨を折つたが、活字の事とてこちらの思ふ通りにならないので、板下美の影を沒して了つたのは惜しい。

水　薦　苅

寛政六年板　　　中本　二　冊

信濃の枕ことばを標題にしたように、「後世の願の有もなきも、佛と申せば信濃の善光寺におはす」と覺えたよしみつ寺の如來、及び「月と申せば風雅に心有もなきも更科山こそよけれ」と稱する姥捨の月を詠じた古今の發句をあつめたので、信濃の名所を俳諧の爲めにデジケートした內容である。古く器隨坊亢水が『姥捨とはず草』にあつめて板行したさうであるが、その書は私もまだ見ないので猿左の跋で「古人逸洞・猿山・招山等の催し置ける草稿のうち」から抄出したものである事を知るばかりである。『水薦苅』にも亦それら信濃の古俳人の發句・逸話を載せてあるが、善光寺の猿山が大和めぐりの折、安部の文殊へ行く道で鬼貫と出逢つたところ、鬼貫はふり向いて「爾は信濃の猿にてなきや」と問ひ掛けたので、こちらも「左右の指二本を額におしあて」お前は伊丹のこれだらうと押しかへして、兩人哄笑した逸話は、鬼貫の傳中にあつてもよい好談柄である。編者柳莊は今井氏、鷗翁と号して善光寺の代官、跋を書いた猿左は戸谷氏、嗽芳庵と稱し、同じく善光寺の人である。原本は善光寺中威德院の住持である林順亮氏の所藏

で、前年借受けて筆寫して置いたが、覆刻に就いて再び借覽して校合する事を得たのである。

何袋　　文化七年板　　中本一冊

芭蕉が一時葛飾に假寓した事は芭蕉傳中にあるが、その昔を慕つて葛飾派の元夢がそこに今日庵を結んで居た。一茶の手紙に元夢法師といふ宛名のものがあるので、一茶もその人となりに敬事してゐたらしいが、元夢のなき後は「その巷しれる人さへもしたしきかぎりは、白露のほろ／＼ときえ、嵐のぱつぱと吹ちり」と一茶一流の敍景で、「いたづらに犬の臥處とはなれり」と嘆息して、その地に今日庵を再興すべく一峨の望あるをたすけて、事すみやかに成就したよしを一茶の序文に記してある。『何袋』とは一峨が伊賀に旅してたま／＼元祿三年の二月芭蕉が伊賀の蕉門と行つた歌仙の懷紙を得て、これをかくし收めた袋の事で、今日庵再興の記念に發企した本書題名に用ひた事が成美の序文によつて知られる。一峨は路齋と号して江戸の人、『葛飾蕉門分脈系圖』には一峨の今日庵は僭稱で、其日庵白芹から詰問したところ「かまへて正風の文臺にあらざれば知らざる分にして玉はらば幸ひ甚しからむ」と泣きを入れたので見逃したように記してあるが果してどうか。一峨・成美・一茶の三吟歌仙もあつて、一茶關係の俳書としての價値を持つてゐる。一峨の發見した懷紙は原本に摸刻したものを縮寫したので、蕉門の懷紙のしたゝめ方を知るべき唯一のものである。

犬古今　　文化五年板　　中本一冊

下總の椎丘太節が俳行脚の道々に、その頭陀に收めて戻つた句稿によつて、國々の風調を古き歌集に甲斐歌或はみ

ちのく哥の例あるにまかせて國別に記したのである。集中ものゝふの武藏の部に「かくれ家や死なば雁の青いうち　一茶」が第二句に掲げてあつてそれから數句を隔てゝ「名月やふたりの間に火打箱　亡人菊明」とある點から、菊明の号は一茶にあらずして別人である旁證になるのであるが、一茶の遺稿には菊明の捺印あるもの、並に二六庵菊明の署名あるものが、つぎ〳〵に發見されたので甚だ迷はされるが、當時菊明なる俳人があつて一茶以前に故人となつた事實は「隨齋筆記」と對照して疑ひない。成美・太節・一茶の三吟は發句・脇ともに無季で、第三に季を定める約束によつて一茶が正月を題に詠み込んでゐるのが注意される。作者の名を通覽して一茶の『三韓人』に記錄される其の舊知の人々である事からして、此の集の如きは一茶時代を特色附けるものとして、編者の豫期しない目的を叶へるものと稱したい。太節は青野氏、赫丘の號で通つた人で、一茶が常に下總めぐりをしたので永い間の知己であり、江戸の俳壇にも紹介され、文政四年の俳諧西番附には西の方江戸の幕の内二枚目に置かれてゐる。

俳諧 西歌仙　文化十三年板　中本一冊

師弟となればその間にお互ひに隙を見せまいとするのが人情なので、あかの他人のようではないがいくらかの隔りが出て來る。同門でも入門の前後で儀禮を守らなければならぬ。さうした幾分でも對他的の感情をはなれて、一つ鍋の飯を一つ茶碗でかき込みあふまでに打解けたのは一瓢と一茶とである。それ故一茶の仲間入りをした又は捌いた連句が百餘卷傳へられる中で、一瓢との兩吟のように、しつくり呼吸のあつた卷は他にない。『西歌仙』の「鳶ひよろ」及び「頰白」の卷の二折は殊に一茶調の著しいもので、一瓢との交情のいかにいかに深く、いかにお互ひに理解してゐたかゞ推察されるであらう。卷頭に掲げた歌仙は一瓢が「銀の散るやうにはへらぬ蕣莪」の發句を句箋に書いて、これに

士朗が膳句の「月のうき出る水を見て居る」と自筆でしたゝめたものを飛脚に托し、「みやこに飛、難波にひろがへり」其の地の著名な俳人が附句を順々に試みて、「四國にわたり、筑紫におもむき」四國筋を廻狀して「果は旦暮のうらより」前後四年を經過して一瓢の手許に戻つて來たもので、校本には一句〱作者の筆蹟を摹刻してある。「西歌仙」の標題はその意味で附けたので、作者の小傳をさへ錄してあるから、尋常の編集とは同視されない勞苦が此集中に注がれてゐる事を忘れてならぬ。

物見塚記 ・ 文化八年板 中本一冊

一茶と仲好しの一瓢は江戸の郊外日暮里本行寺の住持をしてゐた。この寺の庭内に高さ七尺、廻り五間の塚がある。むかし太田道灌が斥候臺に充てた舊趾といふので道灌丘とよばれて、筑波大人なる人の碑文が建立されてゐた。道灌の遺物としては番神堂に一口の鰐口があつて、その裏に文明十一己亥年七月吉日。奉納當城鎭守者也源持資。とあるので疑ひもない。一瓢はかうした由緒のある寺の顧みられないのを歎いて、物見塚記を草し、それと座右の俳諧日記から知己の連句・發句を抄出したものを合せて一冊子とした。『物見塚記』がそれである。一瓢は日桓上人と稱されて清水氏、名は桓雅、俳諧には知足坊、又は雪耕庵の号を用ひてゐたが、誰の門人といふ事はない。江戸では成美とした しく、多分成美から一茶を紹介されて、寺に來ればいく日でも寄食させて居たらしい。『物見塚記』にも連句は隨齋で行つた兩吟及び一瓢の雪耕庵で一茶と對坐の兩吟があり、成美が飛鳥山の虫聞に行き、本行寺に一泊した時の五吟一折を卷末に添へてあるのでも知れよう。集中の發句はすべて作國の國別に編輯にしてあるのは、當時の俳書にあまねく行はれたところである。原本には鰐口の銘を一枚刷にしてあるが、便宜縮寫して載せたのである。

的中集　　文化十三年板　　中本一冊

大磯の鴫立庵でその七世を稱した葛三は『的中集』の外題に就いて、撰者洞々が「としごろ日ごろつとめたる修練の矢數のさしつけに通りて、めでたきのこゝろを風してかうむらせし」と述べてゐる。洞々は相撲の人で蟹殿と号したが、そのいはれは「蟹殿辨」に「世人蟹どの〳〵といふが故也」とあるので蟹の横這ひから戯れたので、葛三の門人であつたらしい。さなくば一茶の盡力で今日庵を嗣いだ江戸の一峨が、本文の校合をしてゐるから共の一派であらう。洞々は著名の俳諧師でないが、國々を行脚して風交が廣く、その國々の名所にかねて輯めて置いた作者の發句を配置してこの『的中集』をつくつたので、一茶は信州に在國中で条路の橋といふ部に、「芦の穂を蟹がはさんで秋の暮」の作者に出てゐる。句中に蟹を詠み込んだのは洞々をからかつた氣味があつて、一茶が例のいたづらをこゝろみたのであらう。連句は成美の周圍の人、その中には一峨も加はつてゐるが――と六吟歌仙が一折、葛三等との三吟歌仙があるのみで、その他は前にいつた通りに發句ばかりである。相撲一國の作者は別に揭げてその數の多いのは撰者と同國なるよしみからであらう。

世美家　　文化十年板　　中本一冊

江戸で窮迫してゐた頃の一茶の日記を見ると、その日の炊きに事缺いてくると必らず旅に出る。その旅先はいつも下總である。一茶は江戸と下總とで二重生活をしたらしく思はれる。下總高藏の僧白老も亦一茶のさうした場合に快く宿を許した一人である。白老が高藏に芭蕉の「やがて死ぬけしきはみえず蟬の聲」を石に刻つて、蟬塚とよぶ句碑

を立てた時、一茶はたま／＼泊り合はせてゐたか、或は招かれて行つたかしてその相談にあづかつて、脇起しの歌仙を興行してゐる。「やがて死ぬ」の發句に白老は「何わすれ草あか／＼と咲」と脇をつけ、「むら雨の日十ばかり月さして」と一茶が第三を承けて一座満尾して、「世美塚」出板の際に其の卷初に載せたのでほゞその消息がうかゞはれよう。序文の成美、跋文の一瓢は一茶と關係が深いし、發句の作者も一茶の遺稿に散見する顏なじみの人が多い。白老の「せみ塚」に一茶の盡力した事を察し得る。さし繪の竹如意は板本には見開きになつてゐるが、こゝには一段に縮寫して掲げた。その竹如意は佛頂和尚から芭蕉が授與されたといふもので、採茶庵派の俳人杉雨の許に轉々傳へられたのであるといふ。

寂砂子集　　文政七年板　　中本一冊

文政六年七月、江戸の寓居を發足して碓氷峠の嶮路を越え、信濃の國を通つて越後に入り、翌七年の元日同國荒井で「旅人に生れて出たり花の春」と本卦かへりをよろこび、越國一國を遊杖して八月江戸に歸庵するまでの紀行を上卷とし、下卷には行脚中に接した人々及び舊知の發句を四季に分けたもので、下總の太節の著である。紀行中に「一茶法師が菴は、古き都なつかしき柏原といふ處也」とあるが、文政六年七月廿九日善光寺に參詣して、その足で俳諧寺の扉をたゝいたので、古き都とは近江の柏原と同地名であるから懐古の情を寄せたので、一茶の住む柏原が古き都といふ意味ではない。太節の訪問は中風の再發した一茶をいたく喜ばせた。「一瓦に露の命のつゝがなき」とあるやうに、一茶は愛妻菊女をうしなつて、ことし六十一の「ちる芒寒くなるのが目にみゆる」衰老をしみ／＼感じてゐた。「さすがに年のかたむくをかこち」といふ如く太節も一つ下の六十の坂を越えようとして居た。「そこに一碗の粥をわ

かつ事五日」にして柏原をはなるゝ數行の記事が讀者を惹きつける力を持つてゐる。『寂砂子』とは一具の序に「砂にこゝろなし、なくてこそ俳諧の種はつきざれ」の寓意で、旅は風雅の寂といふ心持を托したのであらう。なほ太筇の事は『犬古今』の解題を參照されたい。

みはしら　文政七年板　中本一冊

諏訪の明神は信州の一の宮で、かの穂屋の神事は「雪ちるや穂屋の芒の刈殘し」の芭蕉の句があつて歳事記にも出てゐる。その祭の一つに御柱といふのがあつて、諏訪の本社はもとより國中に遷座した諸社に今以て行はれ、「おんばしら」とよばれてゐるが、百堂の『みはしら』は此の御柱祭を見に行つて、信州の俳人と風交した時の連句・發句を一集としたのである。諏訪では「さばへなす神なかりけり柱跡」の句を詠んで、若人等と五吟歌仙を行つて一折を得、善光寺に詣で一茶の門人文路の家で、たま〳〵一茶と同座して「蓮の香にはさまれて夜を明しけり」の發句で同じく三吟一折を卷いた外、その泊り〳〵で、ところの俳人と歌仙を催したものを悉く『みはしら』の中に收めてゐる。百堂は田邊氏、大坂堂嶋の人で芦陰舍二世と稱したが、大魯の直系とは思はれない。本文に木曾藪原で士朗の句碑を營んだ春の發句「在し世の其月涼し酒と琵琶」で見て、尾張の士朗の影響をより多く受けたようである。挿入の巣兆の畵は淡彩を施して、その長刀をなゝめに突いてゐる人物が躍如してゐる。川西和露氏の藏本で、一茶の連句のあるのが嬉しく、豫定はして居なかつたが本集に收めたのである。

麻刈集　寛政五年板　中本一冊

蕉門開發の第一書『冬の日』の初裏八句目に、芭蕉の「麻かりといふ歌の集あむ」といふ附句がある。古人の註に

「寐かり」とは架空の集名で、そこが俳諧であるように說いた如く、寐かりといふ歌書が存在する譯でない。士朗はその虛實の境を覗つて題名に用ひたので、甚た側巧なやり口である。士朗は井上氏、尾張名古屋の醫者で曉臺の高弟である。別号を朱樹叟・琵琶園と稱したが、師の暮雨巷は會洛に襲号させ、名を貪る事をしなかつたので人望を得てゐた。『寐刈集』に曉臺の存命中に名古屋の書肆風月堂にある「いざ出ん雪見にころぶ所まで」の芭蕉の眞蹟に對して、「百年さびき有明の松」の脇起しを行ふべく師の內諾を受けたが、恰も芭蕉の百回忌を迎へて右の一卷の外に、同門と共に芭蕉の發句によつて脇起しを行つたもの數卷を加へて編輯したのである。發句の作者はその一門に限られてゐるが、士朗その人が寬政三大家の一人なので當時の俳壇から重要視されたようで、文化十一年梅間の序を附したものが東壁堂から再刷され、『士朗五七集』にも飜刻されてゐる。單行本と五七集と對校して見ると、脫字の補はれたところもあるので、本文の傍に小さく附註して置いたが格別の異同はない。

寉芝　　享和元年板　　大本二冊

旅の氣分、江戸までの旅の經驗、東海道の驛々の印象、旅の生活と感想を、その旅をして來た人になりきつて書いたので、あり來りの旅行記でない。旅人は尾張の士朗で、「人の旅せる道の記」の作者は江戸の道彥である。叙事は一人稱で通してゐるが、その我は筆者の道彥でなく、實際の旅人士朗であり、そして「旅におもふこゝろのふし〴〵は」士朗でなく道彥の感想といふ風に纏れて復雜してゐる。『寉芝』の題名は士朗の同行者松兒・卓池の註文である。この旅の目的は富士に添うて、行く〳〵朝暮の富士百態を見るためなので、富士の半腹にある「鶴芝と致し度ゆ」とあつて、「其形よく寉に似たり」と註を入れた手紙を附載してある。道彥が士朗の江戸下りを喜んで好意のあらん限りをつ

くした集である。道彦は鈴木氏、金令舎はその号で白雄門人である。士朗とは別系統ながら俳諧の力は互格に見られて、それ〳〵勢力を持つてゐたのである。續篇に李臺の名で士朗の江戸で試みた俳諧の正篇に洩れたものを補遺した迄である。『道彦七部集』にも收めてある筈だが、川西和露氏の藏する原本は特別仕立の配本で、唐紙を用ひて刷り、裝幀は濃い紺色の帛を表紙として頗る凝つてゐる。本文は右の和露文庫本によつて校合し、出板の年月は旅行の年を以て假定したので奥附はついて居ない。

斧の柄　　文化六年板　　中本一冊

蝦夷といへば異國のように扱はれた今の北海道には、既に談林時代に俳諧は行はれてゐたので、延寶九年板の似船著『安樂音』に松前の作者が五人出てゐる。が、蝦夷に移住した內地の人に俳諧を弘通したのは白石の松窓乙二の功である。乙二はもと修驗であるが、俳諧には早く共の力量を知られ「オツニ」を音約して「鬼」と評された人で、箇館に門人布席が渡つてゐたので、その招きを受け、いはゆる松前渡りの一人となつたのである。『斧の柄』の內容は乙二が箇館から松前へ陸路の嶮しさを冒して行つた紀行と、箇館に斧の柄社を構へて指導した門人との連句及び發句を手錄したので、外題もその斧の柄の社名から取つたのである。發句の中にアイヌ語の語釋したものがあるが、その一句は布席、一句は乙二ので、俳諧にアイヌ語をとり入れたものは蓋しこれ以前にあるまい。乙二のは

　けさ虹をかけしともいふ柳かな

の發句で、けさは「ニシャツタ」虹は「トヨツ」かけしは「アツケ」いふは「イヌキ」柳は「シュ〳〵」といふ風に片假名を振つてゐる。乙二の箇館・松前に生活したのは前後三年であつたが、斧の柄社は布席・草裾の中心人物に維

持され、乙二の追善に『萍の煙』を出してゐる。北海道で板行された俳書としては『萍の煙』などが古い方で、現に函館圖書館に藏架されてゐる。

花見二郎　寛政十二年板　中本一冊

青磁色の表紙にさくらの花を銀でちらし、本をひらくと、ほんものゝ櫻のおし花が三ところに出て來る。その一つは芳野のさくら、一つは初瀬のさくら、殘る一つは嵐山のそれであるがこの分はおし花が剝落して、さくらの嫩葉のあとだけが殘つてゐる。芳野のおし花のあるところはよし野の卷で、歌仙が一卷と春季の發句が載つてゐる。初瀬の卷は一順下略、あらし山の卷は一歌仙と一折と二卷で、發句を添へてあるのは前同樣である。『花見二郎』と題したこの書は意匠の上に、新意を出したもので大坂の黄華庵升六の撰である。升六は二柳の門から出て正風道場を構へ、一茶の『寛政紀行』にその家を宿とした事が見える。その升六がさくらの三名所を見て廻つて「花あるかぎり風狂を盡して」といふ前書で

　　行春に捨る反古はなかりけり

と詠じた如く、三山の花びらを俳諧のつとして封じ、諸國の風人の句々をあつめて配本したのである。升六の丹青のおし花を復寫するには特殊の技術を要するので、覆刻本の性質上やむなく割愛したが、本文は原本の通り省略した個所はない。發句の作者は全國的によく行屆いてゐる。『花見二郎』の二郎に意味のない事は井眉の序に「たゞおちこちの吟詠をかざして廣くみな兄弟といへるなるべし」とあるので知れる。

新かはづ合　　寛政十二年板　　中本一冊

貞享の『蛙合』は深川で衆議判で行つたのであるが、これは大坂の奇淵が常に蛙の句を愛して古今人の作を抄錄して置いたものから、左右二十番に配し、その一番づゝを一人の判者に批評させたので、『新蛙合』といふのは一人一評の變つた句合であるからであらう。師二柳の不二菴判を一番とし、十二番の嘉會室亭が漢文で評語をかいてゐる外は出色の批言もないが、十七番の大江丸は判者に選れたのは「めいぼく有ゆにてかたじけなくゆ」が、今後十二年の修行をしてからでなくては「判談いづかたへも、づらりつと御斷申上ゆ」とあるのが、怒じの評語より大江丸の性格をよくあらはしてゐる。蛙の句は「句合」に配したものより遙かに多く、殊に蛙のさし畫は寂色掬すべき淡彩刷であつて、蛙の句をその上に配置した編輯の技巧もすぐれて見える。奇淵は菅氏、七杉堂は別号で、芭蕉終焉の南久太郎町近傍に庵を結び、花屋庵一世として評判のあつた大坂俳人である。附錄は蛙の題に限らず、諸家の發句・連句を收めてあるが取立てゝいふべき事もない。川西和露氏の藏本によつて、さし繪の淡彩を施した處は網ふせにし、原板の味ひをなる可く保存するにつとめたつもりである。

俳諧新深川　　文化年中板　　中本一冊

升六の撰いた夏五歌僊を中心に置いて『新深川集』と題したのである。洒堂の『深川集』と同價値に扱ふ譯に行かないが、時代の傾向がこの五歌僊を通じて考察される。第一の梅が枝の卷を作法の上から見ると、發句・脇は夏季で、五句目から初裏の折立まで春三句をつゞけ、再び茂り・蚊帳の夏季二句を配し、戀句は至極あつさり撰いてゐる。

初裏の七句目には誂へ通りの月があり、十一句の花の座も約束の如くで、その花前の唐がらしは雜に扱ひ、花の座から二の裏への三句は春季で運び、「しぐれ來て」の冬季は夏・冬は一句ですてゝよい慣例により、その八句目の「いばらの花」は夏季で、花といつても正花でないから二の裏に詠んでも差閊ない。十一句目の月の座、二の裏移りの三句を秋季として、匂ひの花といひ、擧句といひ、定例に對して格外の捌きをして居ない。形式的には整然として難ずべきところないのが、升六の技倆と評してよからう。内容よりは寧ろかうした作法の形式に關心したので、連句は此の時代に早くも無内容のものとなつたのである。附錄の三歌仙及び諸家の發句を四季に分けて載せてある。文化以後、大坂に貞門系統の復興を見たが、先づ『新深川』を差合ひ・去嫌によつて更に拘束した程度のものと見て置いてよい。

女百人一句　　天保三年板　　中本一冊

俳諧で一家をなした婦人は元祿以前、女六歌仙と評された人々及び蕉門には智月尼や園女、殊に園女のように点業生活をした者もあるが、女六歌仙の後は『俳席兩面鑑』に女卅六哥仙の名目を見るのみで、蕪村の『玉藻集』の如き婦人の句を漫然あつめたものが行はれてゐた。鶯卿女の『女百人一句』も亦、偶然の言葉が發句の形式に叶つた爲め、大人を感動させた少女もかぞへて百人としたのであるが、『女百人一句』といふ名が、女六歌仙や女卅六哥仙よりも女俳人の勢力を擴張したように聞えるので、その外題に先づ興味を引き寄せられる。鶯卿女の父は江戸の札差で豪侈な生活をなした森村抱儀で、家庭的に俳諧の薫陶を受け、九才の時に師の何丸が何合の判をさせたところ、「おもしろき評しき」といつて何丸を驚嘆させたが、後日二條家から允許されて女宗匠となり、莫愁庵と号したのであるから、『女百人一句』の選者の資格は十分持つてゐる。序文の秋香亭去留は祿高二万石の小大名ながら著述の書の多い松平冠山

子である。又、桃磯漁者とあるのは鶯卿女の女婿で書家として當時知名の文人であつた。本書の題簽に前編とある通り中後の二編を續刊する豫定であつたらしいが、それは草稿のまゝで開板されなかつたようである。

關清水物語

文化六年板　中本二冊

近江坂本の旧家で曉臺の一門であつた干當は、常に俳行脚の望みを持つてゐたが、家庭の事情が許さないので、或人から「大津の驛より、みやこ三條のあたりまでを折〳〵ゆきかひ」かの宇治大納言の古智をまなんで「往かふ人々の物語を聞とらば、おのづからゆかしききく〳〵も見る心地せめ」とすゝめらるゝまゝに、「ふところ紙、ふでの具など」を携へて、いとまある毎に逢坂の關を越える國々の俳人に接して、俳諧に關する物語を聞書とし、逢坂の名所『關清水物語』と題したのであるといふ。簡潔な文章が隨筆としての躰に叶ひ趣味の溢るゝものある中にも、蕪村が鴨川のほとりを吟行しつゝ、ふと「たけたかき法師の墨の衣まくり手に」小唄をうたひ行くを堤の袂から辻君の出て、その袂を引いて「むげにはえこそ過しまいらせじ」と挑むを、法師の迷惑してふり放さうとするが、女の無理にからんでかゝるのを怒つて、罵りざまに逊け出した可笑しさに「花芒ひと夜はなびけ武藏坊」と詠んだ話の如きは甚だ出色である。その間々に挿んだ連句も干當の技倆の侮り難いものがあり、發句の作者も多方面で、その風交の廣かつた事を思はせる。原本は西村燕々氏及び中邑秋濤氏の藏するものを借覽したのである。

美佐古鮓

文化十三年板　中本一冊

鶚のように鋭く鳶のように大い猛鳥で、高く翔つて海中の魚をとらへ、岩の窪みにかくして置くと、それに潮が泌

みて鮓のようになる。其の鳥の名のみさご鮓とよばれるものである。撰者士由はあたかも信天翁（アホウドリ）がそのみさご鮓をぬすむに似て「産の破り家を失へる」境涯の「人中の信天翁也」と苦笑して、この書を「美作古鮓」と題したのである。

士由は大谷氏、仙臺の人で蕪村系統の東皐に師事したが、時代は近世に移つたので、『美作古鮓』の句には天明調のひびきを傳へるものはない。たゞ集中の

春風やアマコマ走る帆かけ船　和蘭陀人

和蘭陀人の發句は、士由の異國趣味からめづらしく思つたので、跋文の和蘭陀文字が海外文化の一反映であると同じく、今日から見ても珍奇な記錄である。ドーフは文化年間長崎出嶋の和蘭商館を支配し、日本人に信愛された蘭人Hendrik Doeff なる可く、蘭日辭書の著作があるので其の日本語通で、『美作古鮓』の跋を書く位は自由であつたと思ふ。齊藤阿具氏の『ヅーフと日本』に彼の事蹟が詳しく考證されてゐる。原本の所藏者は川西和露氏である　和蘭陀文字の跋とその譯とは、原寸大に凸版としたので板本と同一である。

はたけせり　文化元年板　中本一冊

江戸の十時庵は六度びその扉をたゝいて兩吟の歌仙を行つた。成美の隨齋では「かしらつどへて、ひとつふとんを奪合ふ」二三子と四吟一折を催した。乙二の江戸行は箱館へ渡る八年前で、俳友の快い待遇を謝してこの『はたけせり』を旅寓で選集したのである。「徒にあるゝ蘭生のはたけ芹佗しげにてもある世なりけり」の感傷的な歌に心を動かした乙二は

旅すればそれさへうれし畑せり

と口吟して集名を附けたが、發句の作者は江戸で交際した人、文音でお互ひにこゝろを打解けた國々の人、奥州でその門にあそぶ人、それ〲に結縁の動機を異にして、隔意のない人々なので風格相一致してゐる。乙二の常々感慨にふける句作の道を附錄に述べてある。「百人が百人に思よるべき景物を、百年の今日に引出して」古き迹の覺めぬ徒輩をあざけり、許六・去來の俳談に就いて感想を記し、「我胸中のみをたのみて古人に才をかりる處を學ばざる」固陋を誡めて、蕉門作者の句を例にその「古き趣向の句作に圏點を」うつて味解せしめ、且つ「古人の心を用たる」ところを悟入すべく敎示して頗る親切な說き方をしてゐる。

俳諧廻文帖　　文化六年板　　中本一冊

歌にもそれから殊に韵をふむのが條件の詩にも存在する廻文が、俳諧に行はれたのは貞門時代からの事で、立圃の『空礫』には曲折の複雜な組入り回文さへ見えるので、發句はもとより歌仙の試作いさして困難な技巧ともされず流布したのであつた。素更の『廻文帖』はその技の絕頂に達したもので、廻文の歌仙十二卷、百韵一卷を收めて、その悉くが連句の約束を守つて、たゞ假名づかひの無理な位ですべて廻文の躰に叶つてゐる。廻文とは一句をかしらからよんでも、逆さに讀みかへして見ても同一であるのが絕對條件で、たとへば

をるなえたうくひすひくうたえなるを（折ナ枝　鶯　低ウ　妙ナルヲ）

といふ風になるので、それを三十六句の歌仙式に表現するのは確に一技倆であるが、より多岐の百韵にも試みて單行本としたのだから驚く。內容も技巧も一樣に行詰つて了つた近世の俳諧には、かような技巧本位の廻文の一體が存在

權を持つてゐたのである。六林の『つの文字』と共に書史學的に逸し難い材料なので、價値の問題をはなれて採錄したのである。

繪 哥 仙　文化七年板　中本一冊

連句は二句のうつり、三句のわたり、それより進展して一卷の見渡しとなるので、二句の變化のみを求むる者にはいはゆる打越しの存在が不可解なものとなる。豈んや歌や詩の形式に慣れたものには二句のうつりさへ、前句から必然的に聯想さるゝ場合でない限り、二句間の氣分のつながりの解し得ないのはあはれむ可きである。それを一般的に理解させるには直觀に訴へるより外に道かない。宜麥の『繪哥仙』はその點を意識しての意圖か、單に添景としての繪本に過ぎないか明瞭でないが、連句の約束を知らない者に早解りさせる結果は同一點に歸著するといつてよい。宜麥は川路氏、蓼太の門人で、老鶯巢の二世となつたが、幕府の御家人であつて或る事情のために佯狂し、四十歳になつて本然の性にかへつたといひ傳へらるゝ人である。『繪哥仙』はその兩吟の發句

初鷄や衞士の篝のいかばかり

より三十六句の哥仙を一句づゝ、句中の人物のうごき、背景、趣きを繪畫化して、附ごゝろと變化を知らしめ「初心の頓に附安からん爲を」日的として「さくら木にのせ道の栞に」あてたのである。川西和露氏の藏する板本によつて覆刻したが、繪だけを刷つて哥仙は宜麥の書いた大本も流布してゐる。これは宜麥が急に金のほしい事があると、望みの者に書いてやつて金と替へたのださうで、宜麥の同門樨柯の嫡孫になる故松本篤齋氏の談である。

續繪哥仙　文化八年板　中本二冊

鑑賞者を直觀的に導き、作法の規範ともなり、連句の註解ともなるので、宜麥はその前著『繪哥仙』を梓行したつぎの年に、芭蕉の捌いた歌仙三卷を以て『續繪哥仙』を出板したのである。元祿四年の秋、琵琶湖に舟を泛べて十六夜の月に興じた「既望の卷」に就き、その場、變化、起情、その人の姿等を句前に註したものを先づ掲げ『去來抄』の響の例にあてた銀土器と太刀のそる方との句が反對で、『去來抄』の響の解釋の前後轉倒せるものがこの卷でも知られるが、次の「振賣の」卷は元祿六年の冬、深川の芭蕉庵で行つた四吟歌仙である。甲の卷は右の二卷で了つてゐる。乙の卷は同じく元祿六年秋の作で三吟の「芹燒」の卷と、宜麥が三河西尾の城主松平和泉守の公子で蓼太門人の蓼々亭靑牛その他、一門の作者と「春に明るひと際ならん君が波」といふ發句で、その年の春、文臺開きに執行したと思はるゝ歳旦の卷とを載せて、孰れも「既望の卷」と同樣の附け指針方を前書としてある。これ亦『繪哥仙』のごとく繪を刷つて、歌仙は宜麥の書いたものがあり、家藏本もその一部であるが、川西和露氏の藏本は、繪も書も板に起したものなので、それに據つて覆刻したのである。原書は縮寫して二段に組むつもりであつたところ、凸版の寸法が板本そのまゝに誤つて製したので、止むを得ず一頁大にした結果、本集の頁をいちじるしく超加させたが、その爲め板本と同一の體裁となつて甚だ見よいものとなつた。（勝峰晋風）

日本俳書大系 第十三巻 近世俳諧名家集 目次

つの文字(もじ)

六林著

つの文字

序

むかし〳〵蒙恬といへる人始て筆を造りけるより、和漢に能書の人こゝかしこ出て、我朝の高野大師は五筆の名をふるひ給ふ。されば五筆の譽は蒙恬かつて知る所にあらず。かつ其大師、四十七のいろはを造りて和國に自由の働をなす。しかるに今また六林子出て、其四十七字を配りて文を綴り哥をつらぬるに自在を得て、人の耳目を驚かし、つもりて一巻の小冊子なんぬ。是また假名を始し大師のしろしめさゞる處なり。聞ならく、むかし世に文字てふ物の始りし時、かく人の智のさかしくなりて、已等がかくろへて住かたなからんと、鬼の目に涙して泣けるとぞ。それもかばかりの事とは思はざりけむ。思ふにむくつけき姿は似もよらねど、もろこしの鍾馗と我朝の六林子を、鬼一口にいひて畏るべし。さらば此一巻をたくはふ家には、鰯の頭も何かせん。柊もたのむべからず。奇なる假名、妙なる哉。攝津の老隱感嘆の餘り、戯れて此端に筆とる事しかり。

乙未春　　蘿隱

かの周興嗣が千字文、わが菅博士の續千字文などは、一字におほくの義理をふくめる漢字をもてつゞりなせば、心もことばもあやをなしやすからむかし。こはしどけなきやまとかなのかぎりある文字をもて、かぎりなき心の

にしきことばのたてぬきおり出せる牛のつのもじ、いかにして世にふたつもじまたありなむ。何がし翁のきみまくらも、ふねのろ犬はのみじかき心地なるべし。

巴人亭

凡例

一此戯や廣澤子、きみまくらおやこいもせにゑさむれぬと賦せしなもとゝして、且中華には明の王愼卿か詩牌の趣なかり用ひて、雅會の餘興に備へむとす。

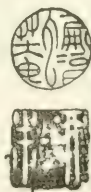
一いろは四十七字を牌に記し、これを敷並べて詩哥・連俳・文章、其餘、謠・小うたの唱哥までならざる事なし。一字を遺さず、一字をかされず。但かなづかひのたがひめは、詩牌の假借の例に做ふ。

一たまく重ろかなは許すべし。たとへば、はゝきゞ・かゞみ山・笹耳・父母・楪など、これ又詩牌疊字の例に隨ふ。意をかへて別物にはかりにも許さず。

一時宜によりて京の一字を借事もあるべし。又むの字の外に、んの字を許す。定式にはあらず。

一一人わが此戯を難じて曰、かなづかひをしらずとそしれり。

予もとより、てに於葉・かなづかひ等の沙汰は學ばず。只一時醉餘の興なれば、識者の譏もむべなり。さはあれども、わづか四十七字をもて森羅万像を摸寫せんとす。嗚呼の甚しき也といへども、かの詩牌假借の例をもて、いゐひえゑへのたぐひ通じ用ひざれば、餘不足をつぐのいがたし。見ん人それ是を思へと云。

未足齋識

○ い ろ は 牌は木をもて四十七枚を造、外に京の字・んの字二枚、また白牌一枚、これは疊字の印に用ゆ。惣而五十枚、疊紙に包て懐中す。牌の寸法はおのく好に隨ふ木を撰、筆跡を撰。其外清雅のもふけは人との心を用ゆべし。予が懐中なるは蘿隱翁の書て給はれり。

○假借法 ○こ ゐ し（徽し） ○え た（又枝）

○疊字法 ○か □ み や ま（鏡山）

つの文字

張州　未足齋六林著

序

いろはのもしほぐさに。けふむ(戯文)をまねあゐせるお(愛)。よ(世)ひと(人)すべてうちゑみぬめり。これわつたなきゆえからぞや

安永午冬至日

○奉寄蘿隱君　擬五言律詩躰

けふ(今日)ならちやさむ(三)こく(石)にて。
はるをもとめ(求)あきよまた(待)れ。
いろ(色)うつり(移)ぬわか(歌)のすゑ(末)。
せひ(是悲)おそみ(見)ねほゐ(本意)に(得)しゆへ。

○題鉢扣

そし(祖師)くう(空)や(也)たわ(戯)れねん(念)ぶつ(佛)。
ひろめ(弘)なら(習)へのり(法)おぼ(覺)ゑる。

かせ(風)もさむるゆき(雪)にあけぬ。
こゝ(爰)にてい(丁)と(東)をみち(道)まよ(不迷)はす。

△ていさたは假借也。なうにかり用ゆ、下これにならへ。

○題寒梅

ゑならぬかほりねやおとつれ。
ゐけ(池)はおし(鴛)にわのむめ。
いろそ(添)ふあさこゆきちるよ(宵)へ。
まだうくひすみにもせで。

○題節季候　絶句体

ござれやせぎぞろうたふ　いゑゐ(家々)におわら(笑)ひもよほす
ゆくとしのあけかねなりつ(鐘)　めにみへぬはるをまちてむ

△これ迄四章は、東華坊がかなの詩の躰にて、はいかい也。

○試筆三ッ物

ふて(筆)はしめ(始)いろ(色)やわ(和)らけるかな(假名)よりぞ
ゆき(雪)おれ(折)まと(窓)のゐほ(菴)へうぐひす(鶯)
たつね(得)ゑむみ(見)にもせぬ京をあさこち(胡東風)に

△この章には京の一字なそへたる變躰也。

○寄節分茶　俳偕哥

△みそくさるほろゐいのゆゑかきなす
こよひねぬをにもわらへりせつふあむ
おれうちまめとはやしたてける

△すべて和哥躰は、三十一字の殘り十六字のつかいやうなき故詞書に用ゆ。因て難字多し。こゝ葉なさぬは見許したまへ。

○素兆が廻文短哥行の末に贊す

△まねられぬこのゆうひをみせけり
あとさきへよめてそはなもいろかほる
ちゐおしたゑにやつすくわるふむ

○細井氏蘭陵井に題す

△ちむれうをなつけしほそいをよめり
すゐみゆるちとせやかねてこゑぬへき
にわはあさくもひろふたまのゐ

○中川氏　東都にて子を失ひしを訪て

ゑふるますこほろひうせしときけり
わかれちをゆめさへたゐてあわぬよそ
みもおいつるのねにやなくらむ

○送田子蕪之東都

酒滿兼攀卿　征衣天遇春
飛花路傍笛　未是駐遊人

○金龍道人到府下賦贈

奇才世待許　乘浪木杯浮
蓮社虎蹊路　醉嘲尋友遊

○贈羅隱君書　余此時在金華

あやめのせちゆゐそらわふりぬゐ。ゐなかおみつねにいとさびしけれ。きおうはくをもたまへ。ゑてよろこばむ

○琴歌　與藤尾句當

はるごろうゑしあいおゐの。ねまつゆくゐにほふなり。よわひをすへやかさぬらむ。きみもちとせぞめてたけれ

○夏の初　三線哥與藤尾句當

ころゑてうのはなあをすたれ。ちり

しゆきそへつらむ。おゐせぬよわひまねけとや。ゐめるにほいもふかみぐさ

○小謠

いろうびめつれはなをさへしにと
みよしのたねうゑてこすはふけ
たほめかわせにあまる。ゆきやち
りぬらむ

○紀行文

け(氣)か(賀)をうちすぎ(過)しころ。ふもとはれ(晴)ま(間)におひ(帶)へ(經)めぐ(廻)るゑのあせ(淺)み(見)ゆ。いわて(不謂而)ゐなさほそ(細)ゐ(江)やらむ。たづね(尋)よりぬ

跋

いろはをわけてつらねゑ(得)。
ちゐがほおこめきするも。
とりのあしたへぬよせなれ
むま(午)ふゆ(今)ひ(尾)や(易)うみ(未)そ(足)くさゐ(蹄)

補遺

けふ(今日)つのもじをゑ(得)てまね(學)ひち(智)いう(優)に
な(名)よ(能)ゐたはれ(戯)こと(言)わさ(業)ゆゐ(故)
あからめせずおぼ(覺)へぬるぞや
ろくりむきみ

右は東都太田南畝先生より此書添て贈らる。

己酉正月

○東都なる問屋酒船が御遷宮に詣でゝ、東海道紀行濵荻てふ一篇を見しまゝ、たはぶれに例のつのもじにて贈る。

六樹

おほ(大)な(名)やあわ(未會)ぬゐい(詠)よ(好)け(矣)れかむ(感)せり(焉)
いろ(色)そ(添)ゑぬちさと(千里)こへ(越)み(見)るたひ(旅)まくら(枕)

ゆめをもうつすふでのにしきは

○酒船許より返し　　予於上春蟾
　　　　　　　　　　雪屋嵐之住

ひちまれろふせいへ江とゆけるわす
つのもしよやなぎさくらをねにこめぬ
はるありがたうおぼゑてそみむ

右酒船

濃州於中邑正傳寺撫名和尚は奇石を愛せらる。その中に蟠龍石といふを、洛の月樵圖に寫しに題して、東都の遊客婆阿叟に贈る。　六林

わだかまるいしのゐきおひこれにせよ
ゑもをぼろけなりやうとみゆらむ

△ふでさへそめあにすつくねはぢぬ。

○奥州二本松安達郡本宮といへる所より出たる西光坊といへる行脚の僧、過し丙午の夏土佐の國光福寺薬師示現ありて錢一文をたまふ。その錢の穴を口にあてゝ吹けば、凡笛聲を出す事奇なり。己酉の夏予が草菴をたづね寄しまゝ、しばしとゞめてかの錢を吹かせけるに、横笛・篳篥・洞簫及び音律玲瓏と澄わたり、且今やう・小うた・虫鳥の聲迄好に随てあやをなす。越天樂など望しかば一曲一奏す。感ずるにたえたり。生涯一處不住、これより難波を歴てつくしの方へ趣(赴)よしいひて去ぬ。

せるらひほむまつこゑおみたさすと
めてぬるもゆきわかれけりなにはにや
あしうちそよぐふへのいろねを

△これをかきつけてあたへぬ。

○春興

嫩草雨晋珠　飛花風嫉雪
春分遅暮思　詠詩渾笑悦

○前津の蘿隱也有子横井暮水翁は、莫逆の交りを許されて、予久しく其門下に遊ぶ。此序書て給りし比、贈られし眞蹟をこゝに附す。

和 六林雅伯題俳諧所寄歌

はせをおきなまちにぬる。
むべもよにいろねのこらず。
わかやしつくりゆゑあれど
さそひうけてたみほめゐふ。

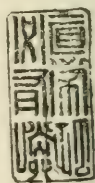
雪中寄懐

いまゆきよりあけそむる。
たれうゑぬはなべてさく。
ゐにほわねどゐやめづらし
ろのひをかこみせちおもふ。

餘白題早梅

むろたのまでよべゑみつゐ。
いちはやもさけあにとゐふ。
これをほめゐぞおりせね
ゆきながらぬしわうぐひす。

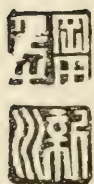
ふゆひとよろくりむしの
うたをみきけにちゐやさい
あれらばこそゑわせめ。まな
べゐも。ておつかねぬ
ほする

跋

射中柳葉騎就蟻封而後人知不可復加也六林翁之於詞藪既盡謦控支詘之技今試其難於斯遣辭言志不出四十七字之外莫不如所欲也可不謂奇乎弘法大師創立字母隱括祕旨千載而下無窺其奧者至翁始極變態大師有靈當斂襟稱善世之覽者不作棘猴玉楮觀則可矣

寛政辛亥夏五

蓬萊外史

松のそなた

乾・坤　紫暁撰

門生紫暁、はりまの國に笻曳て、栗が下しけゝき軒〳〵をつたひありきつゝ發句を勸進し、あるは俳諧の連哥などせし反古どもを懷にし歸り、夫をもとゝして集つくらむことをおもひ立しより、猶知己・友人にもとめて句をこひ、はた遠き境より聞えたるは、わたくしに拾ひなどして二冊子に首尾し、これに序詞を添よといふ。余夏の比より草まくらところ定めずさまよひありきゐて、其稿を閲するのいとまなく、いたづらに過ゆきけるに、此比浪華のやどりへ、あまたゝび雁の使して、ひたせめにせめけるにぞ何と言加ふべきゆとりもなくて、たゞおこたりを謝すのみを帋のはしに書つけて、京へのぼる人のたよりにとづてやりぬ。

天明戊申冬臘月　　夜半亭（花押）

松のそなた（乾）

冬之部

此こゝろ誰とかたらん初時雨　　播州 青蘿

飽むくけふ又沖のしぐれ哉　　佳棠

追分や博奕の上を夕しぐれ　　杜栗

枯し行草は何〳〵初しぐれ　　道立

口切や北はしぐれの手くらがり　　播林田 雨人

稚子の醫者に隠るゝ巨燵かな　　高砂 李冠

冬の蠅いぬきが手にも取れけり　　菅鳥

手枕の絃に崩るゝこたつかな　　攝灘 月丘

うたゝ寐の枕に近き火桶哉　　播曾根 令茶

片隅に冬の落着巨燵かな　　兵庫 佗輔

野行

松虫の亡キ魂よばん枯尾華　　播曾根 松溪

暮かけて雨の氣のぼる冬木立　　浪花 廿三

茶の花や霜みな燗る朝ぼらけ　明石 化麥
縫はぬ袴すがたの十夜かな　尾州 呼道
前帯に女房更行十夜哉　月溪
開んとしてけふもあり冬牡丹　攝津 千溪
三人の手習子淋しや枇杷の花　兵庫 巴耕
山茶花は咲出すより盛かな　高砂 瓜凉
寒菊を引捨んとぞしたりけり　信州 路人

神送りさなんいへる日のいさ穏ならぬに、高雄の山踏して

雲早し水より水に散るもみぢ　紫曉
染さして秋に後るゝぬるでかな　巴耕
酒桶にちる音寒し柿もみぢ　池田 星府

於幽松庵興行

茶の花やありとも人の見ぬ程歟　青蘿
　二十七夜の曉の霜　紫曉
出船の蓆のむらさき色榮て　〻
　うれしなみだに盃をとる　蘿
六月(ミナヅキ)に皆の子供をならべ置　〻
　たなばたの扇闇に曳する　曉
長橋の使三度に及たり　〻
　勇者の晝寐衣いはゝばや　蘿
引あへる袖の薫りのしのばれて　曉
　身は賣もせん忍ぶ生ふ里　蘿
此ごろのあさなゆふなの村雨に　曉
　はや四七日の墳の細道　蘿
はらからの兒をすかしたる松の月　曉
　鳩吹起せをきよ尾長よ　蘿
切出す石にちるなる秋の霜　曉
　飯の白キにうつる雲母(キラ)の香　蘿
死ナばよき花のかけとて哥枕　〻
　虱をはなつ草の陽炎　曉
曳猿の面へたばこを烟らせて　〻
　閏四月の晝の待遠ふ　蘿
うき江戸もたゞをる儘に戀心　〻

袖すり稲荷佛に立　曉
雨の泥狐川にて洗ひけり　蘿
扨もことしは買にくき綿　曉
母親を店の留主居に呼び取て　蘿
能の日延に稽古忘るゝ　曉
下駄履て初夜をうつ間のなら通ひ　蘿
橋は螢に水くらきなり　曉
月の入るあたりは人を焼けぶり　蘿
風ひき添し風呂のさめ口　曉
馬沾も宿の博奕に打負て　曉
女房のなみだ鍋蓋に落ッ　蘿
大年も雪のあかりに明かゝり　、
杉静なる神の廣前　曉
花曇巣に啼初る子規　、
待ば都の人に逢ふ春　蘿

金閣の金兀として星や霜　百池

木母寺に鴉も啼す枯柳　兵庫 清夫
寐莚のゆふべに替る寒さ哉　仝 其跡
牧方の三線ふけて鴨の聲　浪花 鳳卿
淺澤や笹に羽を打曉の鴨　李冠
朝しもや伏見の船の小挑灯　浪花 檮室
二朝の池のけぶりを初氷　南部 五來
霜白く障子夜明てみそさゞる　播 林田 香蝶女
あたゝかき鶏の卵や霜の中　浪花 銀獅
脱で着て立わかれ行頭巾哉　呑夢
蛭子講海老藏秀句でかしたり　仙臺 東皐
雪の口にくろい頭巾の出立哉　池田 籬雪

中村富十郎東へ下りけるに申贈る

無事な兒春は書に見ん袖頭巾　紫曉
人眞似に着て出るしのび頭巾かな　尾州 岳輅
袖口に椿の見ゆる紙衣哉　菱湖
兒見せや曉る棧敷に濃紫　菅鳥
落ぶれて關寺謠ふ頭巾かな　几菫
水に降る雪見て明ぬ網代守　攝津 士川

舟人の五器にふりたる霰哉　杜栗
炭竈や烟のかよふ雪の松　播藤井 湛露
こがらしの跡を追ひ來る雹哉　宇治田原 甘菜
十一月や宵曉の鐘の聲　五來
銀鉢に雪もる夜の酒宴哉　明石 五齡
こがらしや壁をはなるゝ蔦かづら　攝灘 青牛
炭竈に老木の松のあらしかな　高砂 思問
沈ほどは積らぬ物歟雪の舟　閑更
あき人のよき藏いやし雪の朝　几董
約束の松見に雪の旦かな　攝灘 杭舍
枯藪や遠き音ある夜の霰　松溪
凩の星も吹よするけしき哉　播野延 脫負
石高くあらし流るゝや冬の川　紫曉
降る雪の黄昏人の來ぬ日哉　桃睡
鷹狩や掛かゝりたる丸木橋　播魚崎 玄駒
大雪にあつい飯喰ふ山家かな　佳棠
雪深し人は世わたる栫をたへて　尾州 曉臺

河黄室の冬ごもりに對酌の卽興

こがらしや鴛にあまれる角力取　李冠
膝の落葉を拂ふ山もと　紫曉
澁茶煮るけぶりの中を鷄啼て　、
五ッにちかき窓の日うつり　冠
又寐せん月の御遊の琵琶の役　、
ふはとにほふも寒き蘭の香　曉
川霧や艫に紬の行あたり　曉
きつは廻せし阿波の侍　冠
言ほどく胸へ泪のせきのぼり　曉
袖のにしきに假粧みだるゝ　冠
いざやとて忍ばせ申莚戸に　曉
菱もる器寄麗なりけり　冠
地に沈ばかり精舍の月澄て　曉
露もちるべき聽の聲　冠
覺ある作の刀のさしをもり　曉
こゝろとほしき金一片　冠
花まだき櫻がもとに荷を着て　、

泥嗅きほど田螺喰ひつる　曉
輕〳〵とてふの飛立八ッ晴や　、
ひとゝせぶりに開く米藏　冠
たのしくも古稀の祝ひを諷ふらん　、
燭のひかりの畫を欺く　曉
海士の身をかゝる役陣に召出れ　冠
跡さきながら地理を書取る　曉
樹の下の闇よりもれてほとゝぎす　冠
瀧に隱るゝ雨のあし音　曉
いとをしみみどりの髮をいつしかに　冠
記念に見よと筆に言せつ　曉
藏人があくびをしのぶ月の前　冠
露のきゝやうに馬の噬　曉
松の尾や梅のやしろの烋更て　、
小博奕うちの錢かたげ行　冠
此ごろの喧嘩の次第打かたり　、
橋の灯を引水はやき也　曉
花に暮て夜のむら雨もたゞならず　、
春はやゝひとうかれ合ふ友　冠

稀人にぬりごめ開くふとんかな　浪花　仙興
戰やゆふべあしたの長廊下　攝津　銀臺
羽織着て葱洗ふ女脛白し　伊丹　東瓦
こゝろ破れしてや二瀬に啼千鳥　曉臺
寫書の畫に英がちどり哉　紫曉
五條からは竹にも啼や川千鳥　東湖

熊野へおもむく舟路にて

夢を裂く淡路の千鳥紀の月夜　浪華　二柳
冬ごもりある夜川越す忍び駕　高砂　布舟
翌の夜は船で鰒煮るちぎり哉　湖南　騏道
麥飯に身を肥しッヽ冬ごもり　攝津　二松
鳥喰はぬ八幡の人よ納豆汁　城南　丁方
寒月や裸にしたる男山　芙雀
鳥啼て高臺橋の寒の月　青蘿

郊外

寒月や低に落る水の音　士川
人寒く月頂を照る夜かな　尾州 埜分
水かれて翔が中の冬の月　紫曉
早咲の梅見ゆるなり施薬院　宇治田原 毛條
水仙の花たつ霜のちから哉　尾州 稻城
寒海苔や五日便の文の奥　紫曉
納豆の重箱に謝す薹菜哉　東皐
煤掃や蝙蝠の這ふ雪の上　伏見 鷺喬
寒聲や雁金組に投らるゝ　浪華 蜂友
物遣れば常の人也節季ゆ　兵庫 敏馬
雨の日は雨の用あり年の暮　千溪
馬の脊に金遊ばして年くれぬ　之兮

松のそなた

秋之部

銀河槙の梢にしらみたり　廿三
たなばたや踊ゆかたをきそはじめ　東瓦
落んとす岩をかゝへて花すゝき　雷夫
蛇の衣かけて芒のみだれかな　曉臺

白須賀さ二河の際より顧すれば

伸上る富士のわかれや花薄　几董
夕暮や尾花かげさす川向　仙興
川雫の底ほの赤し蓼の花　杜栗
片かげや草花賣が通るほど　浪速 蝸大
犬蓼や降ば流るゝ川に咲　星府

立秋

起されし寐覺にあらず今朝の秋　士川
我庵は三日月の夜より烁立ぬ　尾州 士朗

京馴てひとり歩行や角力取　毛條
角力とりの虫歯に落す泪かな　攝魚崎 洗洲
かき抱く妹が日まひや若烟中　東皐

於杉月亭興行

小刀の刃に流るゝや梨の水　毛條
月の莚にふたり句を次　紫曉
鹿を追ふ聲もかなしく雫込て　、
滿汐時や桿をおろさん　條
釣るしたる油の樽のもり出し　、
はしり智惠なる新參の者　曉
初雪に夜ごみの屏蔽れて　曉
今冴るなり山崎の鐘　條
道連の人は薩摩の哥よみや　曉
箭疵かあらぬ深くかくせる　條
しら〳〵と御堂の踊明わたり　曉
ますうまそほの芒亂るゝ　條
川鱸月待ふねに釣あげて　曉
若衆かたみに肩をうたする　條
閣に引初音の伽羅の一二炷　曉
子の日の空の長閑なりけり　條
白梅もかざしの花よ宮うつし　曉
涅槃に近き寺を隣に　條
夜晝に鍬うち習ふ槌之助　、
あはれ母なく口吃なり　曉
仇蔭穗麥かくれに迯さりて　條
川長〳〵と水わたる蛇　曉
其昔きつゝ馴にしから衣　條
喪家に詠る大内の空　曉
榲桲を煮させる暮の月寒し　條
蓑虫が鳴蓑虫が鳴　曉
もとあらの萩ほろ〳〵と散かゝり　條
今や寄來ん風の旗色　曉
恐しき海に日の出をふし拜み　條
かばかりつらき人も忘れし　曉

つれ〳〵の冬に咲なるふぢばかま　、
とかくしぐるゝ維摩會の頃　條
なら坂や名主が家に風呂焚て　曉
ひとりの大工茶にむせびけり　條
土鳩の目をさましたる花の中　、
眞晝静に羽返す蝶　曉

傍にさそふ水あり女郎花　月溪
蝶死せり續て散れり蘭の花　雨人
萍の蝶もさそひつ落し水　二松
供水に流て木津の案山子哉　春坡
もの書て道教おくかゝしかな　池田 竹外
夕暮や刈田をはしる雨の鴫　瓜涼
稲づまに山越て逢ふ戀路哉　銀獅
月入て暗ともならず蕎麥の花　江戸 鶴女
鶏頭にあはれぬ印むすびけり　芙雀
秋風や黄ばみ初たる鮎の腹　三井寺 千影

酒止るこゝろ狂ひぬ秋の暮　廿三
秋風にうごかぬものはこゝろ哉　在江戸 楚山
人急ぐ庚申そらや宵の秋　浪花 嘯風

所思

眉吹て白くななしそ秌の風　儿董
秋雨や一聲牛の人よばひ　明石 鷺山
遠の田や誰やら呼る秋のくれ　播州明石 癸風
秌の暮もとより彌陀は不言　紫曉
金屏に來て見て過る蜻蛉哉　菅鳥
新わたや遊行の輿に一つかね　廿三
秋の日を追ふや機織家つゞき　浪花 霞外
狂哥殘して盗行かほちや哉　東阜
傾城の細き願ひや放し鳥　麥湖
せわしなき礎のはじめ終かな　銀臺

良夜

月と我中にこよひのけしき哉　靑蘿
滿月の心はなれず闇の鐘　湖南 菊二
大名をとめて蘇鉄の月夜哉　池田 田福

名月や我家ひろきおもひ有　在京 桃睡
月明きあまり砂撥鶏の聲　百池
迯水のはづれ／＼や草の月　檮室
入る月や船待門に杯の霜　攝灘 士巧
月に臥すあるじは人歟蔦かづら　尾州 閭毛
稲妻や総には明て朝の月　浪華 交風
いざよひや水はどちらへ流行　掬影 至齊
十六夜や四五反行ば稲の花　淡州 此道

清光にうかれ歩行もて聯句せばや
さゝ、聽鶴のぬしにいざなはれて

大橋の月に更行小橋哉　百池
雁がね遠く千鳥立見ゆ　紫暁
袖寒く調も律に吹替て　、
奈良の都の人去て後　池
風はらむ温泉口の幕の二重三重　、
眠氣しのびて刀守り居る　暁

評定も既、和睦と極りぬ　池
舟さし登す雨の谷川　暁
花樗老木のけしき顯して　池
七ッの鐘歟先ッ一ッ鳴　、
なまなかに待テとの謎を解おふせ　暁
死ナば死ねよと酒過しけり　池
簒打の家さし覗く月影や　暁
杯風あらき坂の取つき　池
水早し蔦に蹴るゝ鵙の聲　暁
哥よむ事も捨し防人サキモリ　池
旧郷の空猶花の明くれに　暁
楽の太皷をうち鳴らす春　池
舳先キより日は暖にさし込て　暁
寝て焚く飯のさは／＼と吹　、
乳呑兒につめる手見せる親心　池
海津のひきやく音信て行　暁
夕兒の花のび出る雨上り　池
落かさなりてよし切の啼　暁

旅やつれ互にいはず涙ぐみ　池
　寐もせで明す皮剝の家　曉
五六尺七八尺と水まさる　池
　大鯛の[illegible]拿かりけり　曉
あはや勝角力を月の照らすらん　池
　早稲刈入れし在の休に　曉
刀魚の箔に刄ものゝ錆移り　曉
　母に仕へる木村又藏　池
搔合す帋衣の襟の霜更て　曉
　正月寒し節分となる　池
しめかざり頓て花咲神垣や　曉
　人は手をうつ商ひの春　池

白ぎくや月落かゝる露の上　播竹根 宇竹
酒盡て菊活て置陶かな　月丘
白露やめぐりて落る竹の節　姫路 木水
一日の旅に寐る夜や今年米　浪速 作女

角文字やいせの便にことし米　蜂友

畫讚

爰かしこ鳴に女鹿の迷ふ哉　紫曉
わたし舟に乘んとしけり晝の鹿　芝風
鳴鹿の歩行ともなきあゆみかな　定雅
百舌鳴て風腥き木の間かな　閑更
船洗ふ淀の日の出やわたり鳥　夏田
夜寒さは橋の色に見へにけり　尾張 蟻域
盜人に目ざめて後の夜寒哉　壽室
瘦て出る安居の僧や夕もみぢ　江戸 完來
もみぢせし梅に老ふむ胡蝶哉　浪速 閑山
秋深し須磨落し行田舍船　兵庫 酒石
日補張る傘も興なき日南かな　舞閣
六とせぶりに出公事濟ぬ九月盡　紫曉

まつのそなた（坤）

夏之部

菜の花のさびしき空や杜鵑　士川
暮行や鶴はかくれて時鳥　其成
鶯も來ぬ曉やほとゝぎす　攝津 銀甲

静座

睡氣さす魔を蹴て行や子規　儿董
長き夜哉短き夜かな郭公　西京 可友
去ルものは櫻も疎し不如歸　二柳
白川の關こゆる日やころもがえ　凤卿
旅立や春の夜かけて更衣　攝津 金波
更衣今朝たつ雁も三ッふたつ　紫曉
鉄炮の山路に答ふ若葉哉　酒石
見付たり軒端の枇杷に麥埃　青牛
小原女も葵かざしぬ加茂祭　杜栗

柴門

誰訪ひて留主の釣瓶に杜若　紫曉
うの花や後下りに日枝の垣　桃舎

於向陽亭興行

夕皃や念佛始る門涼　青牛
簟こしの風の薫る衣手　紫曉
ふたり乘る舟に鷗の二羽下りて　、
埒もなき狂哥又よまれたり　牛
移徙の祝ひこめたる月の宴　、
垣根に松のいろ換ぬかげ　曉
使者ぶりをひたと繕ふ肌寒く　曉
うしろ渡りに交る稚女　牛
町並もよき橋かゝる白須賀や　曉
二十日續て凪もなき空　牛
命毛も書盡したる無量品　曉
土鍋の粥の吹こぼれけり　牛

月のほる竹の林の霜冴て　曉
　冴もさむき山犬の聲　牛
五七騎の勢も左右に別れツヽ　曉
　うら返る身のうらなくも見ゆ　牛
あさよさの花をほだしの柴の戸に　曉
　衾をつゞる八旬の春　牛
霞分てたとき聖をしたふらん　ヽ
　問はゞ答へよ雲路行鳥　曉
しどけなく戀に狂ふをざればみて　牛
　膝うち崩す伊達の關守　曉
吹つのる風も物うき醒　牛
　まだ積切らぬ浮ヶ前のふね　曉
雫の返しを諷ふけさの烋　牛
　瘦の着たる露のかりぎぬ　曉
女房にも見違られし月の暗　牛
　君をとゞひを負つ手引つ　曉
討せたく討たき敵つかの間も　牛
　陰さへ暑く中茂るなり　ヽ
蓼を追ふて淸水にのぞむ蛇の面　曉
　神輿わたれる跡の靜けさ　ヽ
起て居て見し夢語るをかしくて　牛
　汲置の茶の又こぼれたり　曉
雛店の花のかざりも三重四重に　牛
　灯かすむ本丁の暮　曉

蝸牛行衛を笹の葉末かな　明石 梅舍
かんこ鳥深山樒の葉隱に　浪速 沙月
三井寺の門にもかよふ水鷄哉　歸樂
湖に行止りけり蟻の路　百池
砂糖蒔て牡丹に登る蟻取ん　紫曉

津の國なる何がし長者の跡にて

百兩のなきたま燃る牡丹かな　几董
あらばやのまひとつも哉初茄子　播新延 風虎
飽果し雨の中より初茄子　嘯風
夕蟬や花坂もどる豆腐賣　仙興

草分て見れば流るゝ清水哉　摂津 寸松
葉柳に鷺の火を曳雨夜かな　紫暁
樹に中に遊び余る歟飛ぶ螢　浪花 一瓢
焼石にはやき毛虫のあゆみ哉　春坡
片羽燃て這ひありきけり夏の虫　闌更

閨怨

蚊を焼や人目なげなる丸裸　月溪
蚊の聲や頬につのる山かづら　桃睡
月と雨と別れ〳〵や須磨の夏　尾州 入素
山梔子の花咲つくせ五月雨　姫路 菰春
さみだれや海へながるゝ鵜　摂津 佳七
みじか夜や牡丹の露の置たらず　士巧
明安き夜明て飯のにほひ哉　士川
月は月夜は短夜とわかれけり　暁臺

青樓

殿ばらよ女に負し扇打　青牛
三線の撥で追けり酒の蝿　東皐
玉むしの糞おとしたる扇かな　交風

夏痩やほこりの見ゆる鏡立　千溪
夕皃の曼陀羅ほしぬ小方丈　之兮

無常孔(迅)速

箒して暗き鵜飼が後かな　摂津 士喬
有明と朝日の間や蓮匂ふ　仙與
ゆふがほやうしろは闇き瓜畑　湖嵓
夕顔や上に布干す人は誰　明石 蝸國
榎裂て白雨抜し嵐かな　甘菜

三とせ以前紫暁法師と三本木にあそび、半にして止ぬる巻の今其末を次て首尾なし侍る

水見へて夜は果しかな川涼　桃睡
　雑さむき瞿麦の露　紫暁
千石の米を施す奉行して　丶
　墨含ッ、文字書せけり　睡
すら〳〵と月さしのぼる窓の前　丶

馴ぬ鵜の篭それて啼　曉
頓て刈る稲踏あらす小畷ばら　、
新田の鄕の古風殘りて　睡
初緣にみそじの眉のはらかしや　曉
夜深き酒を無理にすゝむる　睡
討死の首途と知らで哀也　曉
凪しづまりて雨のひた降る　睡
さまくたる假橋かゝる淺野川　曉
ふたり仕て持魚馬（マグロ）一本　睡
そり立のあたまへへたと鳥の糞　曉
永キ口くるゝ花の下かげ　睡
遠里の灯も打かすむ月しろに　曉
御法弘ん此圀の春　睡
たらちねの知られぬ尺の髭撫て　、
ひそめく聲や玉簾のひま　曉
難面くものかはと吹小夜の風　睡
誰ヵ白衣を戀し神杉　曉
ほた／＼と紫陽草の花咲にけり　睡

から入梅ながら雷のとゞろく　曉
貧くも馬脊を業にいとなみて　睡
拾ひし金を置ぞわづらふ　曉
積るともなくて雪降る年の暮　睡
またぬに來啼藪の梟　曉
無盡講月なき夜半ぞ口惜しき　睡
借衣羽織を茶のかり着に　曉
折くるゝかばいろ菊も愛相にて　曉
座一ッなき釋迦堂の前　睡
荷付牛轉びし儘にむくと起　、
若き男のでかし皃なる　曉
木隱の花を覗けば哥舞妓ぶり　、
豐さみつる改元の春　睡

角上て牛人を見る夏埜かな　青蘿
夏の野に足もとうとき鶉哉　在江戸 荷裳
黄ばむ瓜にうか／＼と花は咲にけり　尾州 珉丈

瞿麥に晝の螢のしのびけり　交風

なでしこや駕の内より見て過る　浪花 魚三

瞿麥の晝をいねむる家鴨かな　芙雀

なでしこや石に手を焼日の盛　銀獅

雲の峰粟津の嵐なかりけり　芝風

洪水の荒田過行あつさ哉　佳棠

炎天に消ゆべきものを心太　蜉友

川蓼や紅の茶屋か一夜鮓　浪速 石田

納涼

腰かけて淺き水蹈美人哉　東皐

すゞしさや中をはなるゝ夜の蝶　千渓

すゞ風の嘘に立けり夏の雨　菊二

凉しさや明家の門へ又もどる　士巧

すゞしさの月に狸が皷かな　星府

折〳〵は烋を見せけり門凉　寸松

まつのそなた

春之部

わか菜野はかすむ五日となりにけり　春坡

難波江や小ぶねさし來る若菜賣　播 魚崎 洸洲

懸(想)相文睦月けふとぞ書れたり　銀臺

法眼となりし醫師が門の松　桃舎

初子日

手を添て引せまいらす小松かな　几董

七種や曉かすむ銀河　紫曉

月はやき運びや梅をふくあらし　菊二

鶯や人も聞氣になる日より　下方

一枝や梅も小柄もこほれもの　浪 花 泉明

うぐひすに宿かさふもの萱が軒　伏 水 賀瑞

風折のうめも莟て哀なり　信 上田 雲帶

鶯やあらし吹日に聞そむる　春香

入相の池に響て梅白し　机尺
木曾路行駕に鶯啼にけり　金波
瓶のうめ開んとしてやせる哉　春香
鶯や日の出の後の霜くもり　几董
甍からの梅のみだれや風の筋　在江戸 重厚

竹の下路をたどりて山科の郷に趣(赴)く

うぐひすや酒にあさるの内藏介　紫曉
万歳の皷かりけりいもの神　仙興
まんざいに吉野の花を尋けり　政女
凍どけや草履捨たる妹が許　鬼丈
逢ふ坂や佇向ばうつむけば春の水　紫曉
なら坂や古銅店の福壽中　毛條

屠蘇酒に胸裏の凍を解て手枕の即興

五十年稽古もはてず諷初　其成
　松もみどりに若がへる春　紫曉
御拳の雉子いろ／＼に調すらん　、

鎌倉といふ酒造る卿(鄕)　成
　盗人も住ずめでたき夜半の月　、
稲穗たはゝに露昇る見ゆ　曉
　秋深く神樂の皷谺して　、
沈金彫を習ふつれ／＼　成
　聖護院岡崎などは名利の地　、
苔に花さく熊谷の墳　曉
　四日振りに夕日を拝む皐月晴　、
さかやきを剃る船の窓前　成
　憎き迠も逢ふとおもへば氣輕也　曉
短き烁の午時も過行　成
　月花の大津の祭山曳て　曉
角力取多ふき所なりけり　成
　色濃くも羽織を殿の物好に　曉
牡丹に遊ぶ蝶を射て見む　、
　人丸の祠をへだつ小柴垣　成
ともし火睡る雨の曉　曉
　わたし守呼べど答ぬ川浪や　成

軍あてなる餅仕込たり　曉
女房も嫌ひ出家もきらひにて　成
風さら〱と文机をふく　曉
霜さきになれば下り來る鶺鴒　成
圍あらたに嵯峩の口切　曉
膝崩す三人が中に月冴て　成
又今様をくり返しツヽ　曉
衣の香の折ふし匂ふ物のひま　成
溫泉のやどりに晴るゝ村雨　曉
四五本の竹にも來啼ぎやう〱し　成
いもを病む子に呉る白銀　曉
十疊の座敷もせまく住ふらん　ヽ
月の三日を尺八の會　成
庚申のかならず巡る初花や　ヽ
雲のはやきに雁かはし行　曉

白うをや辛き命をかへる波　星府
しら魚や尾鰭を立る椀の中　播（魚崎）常和
白魚も洗へば水のにごりけり　鷺喬
川上へ柳流るゝあらしかな　播（荒井）淇筍
寐よとすれば柳みだるゝ夜の聲　尾（州）紀鳳
淺澤や柳〱の間のいろ　仝　岱青

金谷の驛にて

水をちす嶌田の柳かすみけり　紫曉
大和路や地黄畑の春がすみ　佳七
草に寐てはやき夜明の霞哉　池（田）左言
東風ふくや矢橋をわたる村烏　松洞
やぶ入の都はなるゝ小哥かな　下方
養父入や人に見られて草臥るゝ　浪（速）岸松
やぶいりの宵から替る日和哉　紫曉
都邊や小袖にきゆる春の雪　闌更
うき人に榓(蜜)柑つぶてや春小袖　銀獅
寶引の敵初午の夜を覘ひけり　紫曉
紅梅に睡れり衛士の又五郎　几董

紅梅も火ともし頃や二日灸　自珍

二日灸花見る命大事也　几董

そと力入て手折し椿かな　兵庫 旻比

古寺

曙や落葉が上の落椿　李冠

太秦(寺)にこゝろ覺の椿かな　杜栗

櫻さく娑婆を佛の別哉　之兮

耕や櫻にうときよし野人　兵庫 里由

苗代の畦や河内のかよひ路　毛條

京の燈も見へて鳥羽田の蛙かな　二柳

放ちたる蛙うれしく闇夜かな　正巴

飛込で水にしづまる蛙哉　自珍

虫の條おもはるゝ夜半の蛙哉　道立

春行

道芝や遲き日を踏なら中履　千溪

舟に乘ればありく氣になるや春の空　廿三

轎の間や痱兒にあたる春の風　播 荒井 如桐

春風に米磨流す小川かな　浪花 凡十

春色にめでゝ北埜・平野に吟行し、終に三國屋が水樓にいたり、對酌の興を催す。

散るうめの香も流入よ紙屋川　菱湖

東風ふくからに袖寒きさま　紫曉

稚君曳猿ちかく召るらん　、

在府の留主の籬也けり　湖

鵜の羽干す松にかゝれる朝の月　、

妹が棹さす菱とりの舟　曉

うき戀を哥に諷ふも身に入て　曉

姿も法に染換やせん　湖

闇を啼高野の奥の山鴉　曉

よどまず水の流行也　、

分やる青蚨が錢の數拾貫　湖

中にひとりは瘖の大兵　、

しら〳〵と土俵にしらむ寒の月　曉

加茂の社歟煤を掃音　湖
烏帽子着て子をいだき取いつくしみ　曉
花の御遊の旣はじまる　湖
うらゝかに日は照りながら通り雨　丶
閻彌生の蟬の初聲　曉
帳閉し佛を京へ送るらん　丶
二度に二石の米かしぐ宿　湖

斯て初更を告るに、歸路のちゝ〴〵きをいとひて筆をさし置ぬ。

春風の夜はあらしに亂れけり　曉臺
腥き阿蘭陀ぶねや春の風　酒石
春の風うき世の須磨となりにけり　士喬
あさぢふの蓬戸轉けて猫の戀　尾州 沙漠
横槌とところび合けり猫の妻　嘯風
さしもなき風巾心よく揚りけり　芝風
風巾を見る皃むつかしき西日哉　芙雀
切󠄀硲蔦の夜を吹るゝや梅の月　竹外
風巾の緒に城の太鼓の聞へけり　檮室
御厩の軒端〳〵の燕かな　之兮
朝茶のむ家睦じき乙鳥かな　佳棠

野徑

ひとつ眼に付ばいくつも〳〵し　千影
故郷やあはれふし立土筆　尾州 白圖
蒲尖公や薪もどりの瓶の原　江 日埜 芦牛
獨活山や倘燒立るおぼろ月　攝 林田 李雨
入相の後に華あり朧月　其答
小雨して朧くせつく月夜かな　攝州 無腸
陽炎や鐘鑄の跡のたまり水　五雲
陽炎や紫染る手もとより　湖南 蓑聞
春の夜や禿が戀のあらはるゝ　銀獅
炭の香の夜をみだれけり梅の後　紫曉
春の夜を上戸の中に明しけり　江 存 成美

重三

花を踏んで雛に隱るゝ鼠哉　月溪
曲水や龜の生るゝ砂の中　嘯風

抱とる勝鶏の觜に血汐かな　千溪

塩もどす鯖に桃ちる流かな　紫曉

畑守の娘妖たりもゝの花　嘯風

住よしに遊びて

はまぐりの肆を吐汐干哉　紫曉

野はづれの酒屋起たり雉の聲　百池

戸口迄鶏追へ來るきゞすかな　士巧

きじ啼や峠にきゆる雨の雲　雪巾

呼に行た人も戻らず春の雨　降友

春雨のふりしづめけり海の音　鳳卿

浪花下向舟中卽興一折

能き友の哥あらそひや春の雨　春坡

ともせば燭にかよふ梅が香　紫曉

三ッふたつ雲雀啼なる月かけて　ゝ

いそがぬ旅に身はほたれたり　坡

市人にもの尋れど答なき　ゝ

笹に分つ魚の刎出る　曉

繋たる舟あたり合ふ朝嵐　坡

松よりもれて宮幽なり　ゝ

百里經し戀にこゝろを運ぶらん　曉

目馴ぬ城につらき起臥　ゝ

初雪の消ぬが上なる床の霜　坡

牛も染ずもみぢかつ散　曉

御法聞夕〳〵を月澄て　ゝ

笏も冠もよしやよしなや　坡

志津原の質屋ら年の急ぎなる　曉

二十の丁稚(デッチ)角を入けり　ゝ

水瓶に向へば覆ふ花の陰　坡

鐘もかすみて明はつるそら　曉

郊外

嫩荻に雉の羽風の残る哉　紫曉

きじ啼や王照(昭)君が輿過る　和州 可翠

人の親の焼野のきゞす討にけり　曉臺
山吹を踏折鶏の逆毛かな　臥央
たはれ蝶地に組落てわかれけり　桃睡
大原野に昔兒なることてふかな　菱湖
鳥の巣のこほれかゝるや志賀の里　二松

曉天春望
月落て雲をもれ出る櫻かな　定雅
夜も既あさぎ櫻と明にけり　淡州 玉屑
元日の雲かさなりて櫻哉　几董
立寄れば山鳩去りぬ夕ざくら　義仲寺 沂風
いざゝらば花より華の奥に寐ん　女 紫蘭

よし野の山踏して
忘んと水にのぞめばさくらかな　舞閣
賭にして花盗けり白拍子　園女
歸らんとすればさくらに月かゝる　春坡

定家卿の夢中にぼさちをいだき給ふは、いづれの時にかは。此夜月朧さして現のごとし。
佐保姫をいだきとむれば櫻かな　東皐
ちるときは花に埋もるこゝろ哉　淡州 柴山
散る花の花より發る嵐かな　青蘿

凉及をおもふ
起されて寐て見る櫻散にけり　士川
夕風や松打こして櫻ちる　其成
散るはなを引波曳やいづこ迄　百池

此句は過し春、予が敏馬の浦に旅やどりす折から、大來の主が書信に聞ゆ。我又三日ばかり先達て京へ文のぼすさて、海邊眺望と題して左の句をかいつけて贈りぬ。されば句兄弟の途中に行逢ひたるはさうち笑ひぬ。
打揚るはなやいづこの春くれて　紫曉
ちる華や烏帽子のかたぐともしらず　布舟

雨日嵐山の花を見る
花とちるは雲なり雨のあらし山　浪花 旧國
海棠や雨をはらめる月二夜　紫曉

寐轉びて渉し待けり春の中　青牛

菫野や鳥居作りし石の屑　東皐

鹿の角拾へばそこにすみれ哉　交風

棟上の餅ころびけり春の草　巴耕

社守る人とても仕ず菫さく　橘仙

降る雨に濡〳〵菊の根分かな　二松

南より風ふく藤のくもりかな　月溪

忘來し藤おもひ出る野川かな　紫曉

御影供や分て靜けき日枝の山　之兮

旅人や鐘に石打遲ざくら　紫曉

藪かげのいつ迠草や春の霜　月丘

暮春

春惜しとかきたぐりけり中の薹　左言

行春や橋造る間のわたし舟　田福

揚鞠を蹴とめて春の行衛哉　東皐

いつの春か阿叟が勞せし雨吟の有けるを、こゝに拾ひて卷跋とす

雪に折し竹の下行春の水　几董

動くくるせに暫し燕　紫曉

馬下りて馬を睡らす陽炎や　、

岐の家の壁に物かく　董

月の客甕の酒を盡すらし　、

燈下の菊の盛かたぶく　曉

音を入て又一しきりきり〳〵す　、

門敲せん遲く來る君　董

とけ落る袴うらなき心にや　曉

連判狀をおもくいたゞく　董

松ともす菫の宿のさむしろに　曉

はれぬ不思儀(議)の今やさし汐　董

月しろに響き後るゝ鐘の聲　曉

伽羅冷じき密葬の露　董

身や烁のかき合す袖も寒けくて　曉

けふの御能に勘氣許たり　董

移されし八重の櫻も花の時　曉
山吹にほふ藤の下陰　菫
盃に春の小うたを書流し　、
中に二人の禿さかしき　曉
我ものを我盗み出す戀の闇　菫
すくせいかなるゑにし結びて　曉
今既刄の下の佛菩薩　菫
座せるすがたの膝も崩さず　曉
ほんのりと夜は明かゝる山の原　菫
兎かあらぬはしる水音　曉
公達に中鞋めさせていそぐらん　菫
わすれはやらじ老が情を　曉
奉納の和哥九百首に月更て　菫
鵆啼なる住の江の烁　曉
さら／＼と芦の穂をふくうらかなし　曉
煮賣つめたき芋に蒟蒻　菫
新吹の錢を古錢に換てとり　、
若侍の舌疾也けり　曉

俳諧の深川探れ花の雲　菫
源氏一部の春の草／＼　曉

聴亀菴の主、ほ句を選して集あむとて予に題号を冠らしめよといふ。されば何かれといはむより播磨の記行に見侍る千鳥の句こそ、我も人もめでたく聞侍るなり。これを以て號かしと、第四橋のほとりなる水樓におゐて書あたへぬ。

交淡齋

泉湖 [有][支]

京三條通御幸町西ヘ入町
蕉門書林　菊舎太兵衛

さきつろ
亨編

（さきつる）

塵を苦とし窪めるをしきねとして、いさゝか世をいとふ
心ばへを樂しむものから、よそのかゞやかしきは、かの
金馬門にかくれしたぐひともいはめや。

庚申春　　芹　水書

さ　き　つ　る

ちりくぼなるまじらひは、うきたる名のよしなしごとに
はあらざめり。はるのはな・あきのこの葉の、あくたの
ごとちりまどふをかいやりすてず、ねもごろにかつゝ
かきよせて、これはあらし・おとはのやまざくら、それ
はをぐら・たかをのもみぢよと、そのをりゝゝのあはれ
をひろひとゞめはべりて、すなほにあつく、みやびに雄

ゝしきほく・れむかをくちずさむたよりにせましとおも
へるは、いみじくもおかしきともどちのまごゝろになむ
ありけるよしを、二洞のほとりにすめる可董しるす。

こゝろあへる友どち二三子と、東皐順参の旅といふ事をはじめて

春の色木の間〱に見ゆる哉　亭
曉の雲散山雉の聲　丈左
長閑さやふり髪かつぐ馬つれて　芹水
汐うつ濱を人つたふなり　驢丹
月遅き翁が軒の荻苅よ　漢水
ひやりと風のさはる横顔　可董
行秋の箒にかゝる白露や　魯竹
木曾の相寐の僧尋來る　桃江
戀妻をさきの夜鬼に打喰はれ　壺丸
(須)蜩もる雨のつれなかりけり　亭
生壁の崩れかゝるを押かゝへ　左
杉の木の間に甑(モノソウ)をほす　芹
冬枯の月に財布を打叩き　丹
駕籠が寄場の神無月哉　水
水つけて梳る白髪のつや〱と　董
襟數五ッ手もさゝずある　竹
ちる櫻疊の上の花ざかり　江
天氣過たる春の夕空　丸

とばかりいひて此日はやみぬ。

後坐通題

春の雪

うつくしき水に降けり春の雪　驢丹
春の雪ひたりと枝にかくれけり　芹水
はるの雪降とてけふも遊ぶなり　亭
鶯の息に消けりはるのゆき　可董
兎角して積ば崩れて春の雪　五原
上京の地に見る日あり春の雪　漢水
春の雪よい子連たる人の行　桃江
其中に雨をふくみて春の雪　魯竹
ほた〱と物に附けり春の雪　壺丸
夜歩行の髩になだれて春の雪　丈左

蛙

雲うごく夜より蛙の啼に鳬　五原

句	作者
山路入て家ありけなり啼蛙	桃江
はつ蛙くらき方より二聲す	壺丸
行水を踏張て啼蛙かな	魯竹
茶の水のきれし夜せちに啼蛙	可董
人やりてそしてから啼蛙かな	漢水
塊に並びて啼る蛙かな	亭
しぶ〳〵に日は暮てより啼蛙	芹水
町川やしづけき闇を鳴蛙	驢丹
蛙啼てうごくばかりよ夜の山	一無菴

是は人〳〵の文のはしより拾ひて

年の始の句

句	作者
春立と人のいへばぞ淺黄そら	陸奥 秋夫
晴天の富士こそよけれ年儲	東都 春蟻
掃始や詞の花の塵ばかり	、午心
あふほどの人に禮あり花の春	浪華 奇淵
二日たち三日たち只のことし哉	伊勢 丘高
若〳〵しおなじ事して同じ春	千讀堂 丈士
朔日や久しき世より春の空	浪華 八千坊
正月は宗祇が髭も初音哉	、不二

天地紅一點なし。おなじ題に遊べるな

句	作者
明星のてらして白し梅の花	イセ 聽雨
春ならぬ家とてはなし梅の花	信濃 希言
梅に出て風情添けり三ケの月	ヒメヂ 周泉
俯向ばこぼれてもあり梅の花	馬印
闇のうめしのぶ戀ほど薫り皃	池田 瓜坊
梅白う咲けり寺の空屋敷	イセ 官父
梅の花梅が香はまだ聞しらず	イセ 楚雀
うめが香に師走の心忘らする	上州 鯢思
白過し花より梅の亂れけり	浪華 瑞馬
夜に入ば梅の月夜と成にけり	伊丹 東瓦
雨の梅匂ひをしほる風情也	月居

いで羽の何がしが詞にたれ〳〵もつどきて

句	作者
白魚や老て契らむものは是	秋田 五明
白うをや是も小町か何をたね	芹水

白魚の白さよ水の春邊より　亨
白魚のからびて老を見する也　伊勢 左鐵
白魚のそれが中にも親よ子よ　丈左

これもめでたき文のはしに

春の雪鳥のとまらぬ枝もなし　ヲハリ 士朗
はつ春の雪掃やれば鳥も來て　ナニハ 長齋
羽二重の袖に消けり春の雪　湖[illegible] 騏道
松の雪拂ふも春のいとま哉　桃江
はゝ木ゝに降裸せけり春の雪　ナニハ 大江丸

春風吹わたる風情にくからじと

立出て見れば夜深き柳哉　東都 完來
明て行水より煙るやなぎ哉　伊達 竹冠
東風吹や夜の日當の門柳　信濃 柳莊
浴室に柳見て居る夕かな　ハリマ 梅廬
醉ふたれば一入青き柳かな　五芳
人聲の何所へわかれて柳哉　蓮和
近道は未だ雫する柳かな　蒼虬

草房の春色

鶯の今朝は機嫌に身輕也　伊勢 豆乍
うぐひすを長う鳴する朝寐哉　甲斐 臺眠
戸なき家鶯人の上を啼　八千里
寐過して鶯細く諷ふなり　花城
うぐひすのむし喰事はなくも哉　粟津 祐昌
うぐひすに起かたれけり又今朝も　二本松 玄來菴

青黄押なべて

花菫何處から來たぞちいさい子　伊予 樗堂
心なのさく〳〵切や初若菜　東都 成美
白雪のとける中より水仙花　二本松 丈蘿
そく〳〵と並び出たり蕗の臺　陸奥 南陽
菜の花や朝日さし込小家原　敦賀 堯曦
若草や順か後に人はなし　陸奥 冥々

花はいつ咲やらむなどおもひつゞけて

春の雨門に出れば志賀の鐘　ナニハ 白樂
矢脊馬の脊に流れ皃春の雨　壺丸

野邊の氣色の又なくおかし

雲雀啼下は巣くろの暮早し　甲斐 可都里
光れとて月に酢や乞夕雲雀　貞士
長閑さの鳥にうつりて高音哉　ナニハ 升六
曙の海にむかひて燕ひとつ　イセ 卸云
春の夜も寐られぬものよ鴈の聲　丹波 武陵
野心になれとて來た歟窻の蝶　伊達 見車
燕の二日見に來る戸口かな　ナニハ 井眉
春の鳥皆妻持と成にけり　東都 美知彥

あはれにおかしみなかへたるものは

蛙只水の四隅を啼めぐる　可董
佐保姫の裾踏まへたる蛙哉　上毛 微風

くさぐさうちまじへて

雪とけや灰に突こむ火吹竹　粟津 重厚
つんぼりと火燵明けり春の宿　イセ 蒼山
藪入の鴨居にちかきかもじ哉　城南 下方
目先まで霞る暮のしづか也　上毛 霞竜
春の日を酢貝に遊ぶいとま哉　林亭
陸尺の袂大きしはるのかぜ　、 一魚

觜洗ふ雉の下りたる流かな　羅月
野遊びや草のむしろも讓り合　東都 雙鳥
春の夜の明てあふみの水の上　鹿古
青きもの是にはしかじ門柳　其成
うたゝ寐に風引初る二月かな　五原
陽炎や山の井隱る草のたけ　イセ 竹丸
鳥と遊び蝶と狂ひぬ春の夢　、 五蓬
春の月淺茅が宿を起さばや　、 柏水

こは春にいまだ聞えざる人々の
ことの葉

鶺鴒のぬれて觜とぐ木の葉哉　陸奥 露秀
はつ霜のかゝれとてしも壁の蔦　律太
霜の月我懷に入むとす　下總 月船
猿曳の肩に猿なく時雨哉　武藏八王寺 老女 星布
初雪のおもふサマ降らで止にけり　換之
樹々の匂ひ時雨と降てかはる野歟　シナノ 伯先
年の暮友なつかしうおもふ也　ヒメヂ 葵堂
水取の竹にかゝるやよべの雲　北巠

一無菴

住やすき世に夕暮の寒さ哉　越中 汶弄

秋の鵜の濡て吹るゝ入日かな　下總 祇來

夕露やいつもの所に灯のみゆる　東都 一茶

冬の夜や炭拂ひし小杯　高砂 布舟

よゝのさゝうつり行氣色なあまんじ、予も日々うつゝにうたふ。聞人そしらばそしれ、嗚呼ちりくぼのちり

出て見れば乞兒す花の聖哉　驢丹

花と我と淡しき中を水の行　可董

花に通ふ鳥か朝日の前を行　とほる

雲水の瀨ぶみやつゝじ菫艸　芹水

題塵窪 〔信而好古〕

混沌初闢。覆載乃成焉。兩曜而明。萬類流形。於是乎海陸界別。中州蠻夷。各安其所分。此之謂人間。人間之外。別有一州。山舒水淸。春有花。秋有月。凡晴曠此土者。其心則玄元南華。其言則淳于東方。衣塵充錦。家窪比宮。長也少也。無爲而化。幾與穴居之世似矣。因號曰塵窪。余已生人間。偶得遊其都。乃歎曰。嗚。仙境不他。無何有之鄕邪。華胥之國邪。將吾塵窪之都也。

寬政十有二載庚申季孟春採筆於嘉會室

平安 鼎齋 亨 戲誌 〔鼎齋〕〔亨印〕

京三條通寺町西ゑ入ル
蕉門俳諧書林　菊舍太兵衛

新華摘（しんはなつみ）

上・下

駄道編

新華摘序

人能道を弘む、道のひとを弘むるにあらずとなむ。蕉翁人を教るに滑稽を主とし、野夫牧童の鄙哥よりしをりして、大哉向上の一路にいたる。そも此一路といふや、遠くは六合の外に彌り、近くは睫のさきをはなれず。陰を負ひ陽を抱き、動靜また其中に備る。其靜なるものは、靈明にして不易の全神也。其動くものは、言葉となりて流行す。實に此さかひを明察せずんば、大象の尾足を撫していまだ其全身を知らざる瞽者の語にや落む歟。さるを翁一世の格調、機に解、縁にしたがひ、其變體あるに泥み、彼動靜をもわいだめず、古調の俳諧などゝおし當るは、たとはゞ浮嚢を帶びて水上を行がごとし。其器放るゝ時はたゞちに溺る。流れに沿ふておのづからうる時は、漂ゝ然として本覺眞如の浪に浮む。誠に頓悟の直路とやいはむ。力めずんばあらじ。一夜風談に接し、二三子の曰、夏は草木宛蟻のために法は禁足の居にあたり、浮屠氏結制の因にあれば是にしたがふて、おの／＼その好る所にかへて風藻を結び日ゝ千句をいとなまむといふ。予が曰、是ル好ヒ矣、しかはあれど眞の修行は舌上の沙汰(注)にあらず、言の葉のしげきを捨て椅下の玉をさぐらむにはしかじ。貫之は一首を廿日に詠じ、公任卿はほの／＼の歌を三とせ案じ給へり。老太齋が三都集も千日にしてなれりとかや。不用意にしてうるといふも、能沈思のうへなるべし。さはなりといへどもまた何にかかせむ。一句一章のみやびこそあらまほしと。それより日ゝ記錄しけるそが中に、中元は盂蘭盆得食の供養ありて、祖考天堂にのぼると聞ば、棚をまうけて先師が魂をむかひ、おくの呑溟誰かれとふるきを懷ひ、ありし世の高喩を靈位にならべ、香油遊燭をかゝげ、敬ひかしづくもまた讃佛乘の縁といふべし。すでに解夏の時におよむで草稿かいやりがたく、晋子が例にまかせて新華摘と題し、是に他邦の玉藻をまじへ、木上して同志にあたへんも亦をこ也。斯いへば己人を知らざるを愁へず、ひとのおのれをしらざるを愁るたぐひならんと、あはたゞしく筆を閣く。時は　寛政の四とせ、壬子に次るたのむのあした、淡うみひと騏道、青雲居に識し侍る。

昭孔　騏道

（新華摘　上）

卯月八日
於幻住菴興行

灌佛や品くだり行鉢かつぎ　葛巾
袷りうとく露の夏艸　慈周
水淺く眞砂流るゝ有明に　麒道
鳩ふくわたり槇の戸隱れ　吾兮
燒栗にけふの命も恙なし　巨洲
夜嵐しのぐ藤おりの衣　故常
かり初の戀にもさとき都人　百萠
憎や出ふねの時をはづして　五英
持てあぐむ榎のもとの力石　規風
篝松明にくづるなま土　二蓋
盃のなかへ大手の陣太鼓　干當
いまぞ破戒の世を顧る　馬圧
篁かけに紹吹まくる空車　艸斧

肩脱さげて袖に鈴虫　吳鼎
月くらくうとふ平家の聞覺へ　經一
男ゆるさぬ萩の席守　樂二
いさ川のはなに對して炷伽羅や　素考
むらさきしるき春の曙　蓼化
文車にかげろふの糸結びかへ　元鄰
こゝろときめく君がながしめ　烏孝
薄ぐもりきのふの簔のもしほ草　蘭蕙
敏馬の沖に群る彭魚　桐吾
めし時にかねてしらせの筑うつ　東甫
足代かけし塔の二重目　漁更
上弦にむかふ彼岸の入日影　周
水汲こぼす菊のきりだめ　巾
年かくす角前髮の秋闌て　兮
宇佐にちからの願ひわびしき　孝
まつ風になびく芳野ゝ遠篩り　常
しのゝ小雪の降とけもせず　蕙
取わくる鯨あぶらのさゝ濁り　英

また雫する蛋のもとゝり　萠
萬歳の皷しらぶる廣庭に　薑
矢（柄カ）栖のこりし卷わらの仕（注）連　風
華の春吾妻の空のしのばしく　匡
海見ゆるまでのぼる山端　斧

九日

更衣髮の亂れに櫛いれぬ　樂二
酒くさき水に夜越の花柚哉　騏道
いな川にはしぶね下す煮酒かな　漁更

十日

ひとのうへヶ見てはづかしや鍋祭　經一
みごもりの夢見しあすを更衣　、
篁のにほひや風の青すだれ　巨洲
卯の花や曉ちかき遠かゞり　中斧

十一日

ねいらんとしてはうごかす團かな　規風
水鷄啼外堀の水あまり皃　馬涯（匡カ）
なべ祭かゝけて尋む恭朋友　百萠
麥秋や稀に人行むかし道　騏道
卯の花や水かゝりよき里の坊　蘭蕙

十二日

君が代やあくまで白き鮓の飯　中斧
晝釣し艀のうちより狂女哉　馬匡
衣がへ登城の先手揃ひけり　二薑
三貫の家に香をなす花柚哉　經一
木造が見すかして居る若葉哉　五英

十三日

雨蛙樫の廣葉をすべりけり　葛巾
蜘の子を濯ぎ落せし江蒲哉　樂二
紫陽華にさげくらべけり頭陀袋　百萠
雨二日ひより三日の青田かな　キ道

十四日

散けしの華にゆふべのうつり皃　千當
汐かぜにわたる煮酒のかほり哉　二薑
軒にたつ矢文のあとよほとゝぎす　經一

十五日

蟬丸の御にも啼驫杜宇　五英

瀧口に沙汰聞へけり一青鮮　漁吏

香に匂ふ淺茅が宿の新茶哉　見風

十六日

卯の花に精進酒のほだしかな　吳鼎

紫陽花や襌袢乾かねる小啼　慈周

更衣きぬかさ山のみどりより　亘洲

かきつばた纓洗べき水の色　蘭蕙

十七日

曉や水鷄のたゝく二月堂　中斧

夏の夜や前司が傳ふ男舞　經一

文のはしに

ほとゝぎすくちばみ櫻落ばせり　東武 成美

子規あかつきがたの八聲かな　若狹 沂山

十八日

靑鷺やかねて降べき雨今宵　干當

江の舟や人遠呼す夏の月　故常

ほとゝぎすけし散すます朝曇　鳥月

郭公きゝとめて我靜なり　百萠

十九日

しのび路や墻の卯花かつぎあけ　二薹

ふは〳〵と燈心賣の袷かな　漁吏

瓢簞の水こぼしけり靑簾　慈周

廿日

若竹や或はくだる夜の雲　騏道

髮切て我のみ寒き蚊帳哉　蘭蕙

悟たるうしろすがたやひきがいる　中斧

閑古鳥都の空をしのぶかな　鳥孝

廿一日

雨雲の煙は低し芥子のはな　亘洲

狛蟻飛ぶや伊勢は家賣合点也　漁吏

廿三日

打水のめぐみもあらん苔の華　樂二

きりばたけ花さく迄に成にけり　、

就中地にをりてけり閑古鳥　蓼化

麥秋や猫の子を産む男部や　馬匡
入梅ばれや虱見て居る般若殿　絽一
芍藥やくれはに給ふ家づくり　漁更

廿三日

ある灘君の絹のはしに、梅亭薔仙の
筆をくだしけるかたはらにかいつく

薄すみの願ひあどなき夏書哉　駅道
碁に向ふ疊ざはりや夏羽織　樂二

廿四日

松明に焦し若葉の梢かな　素考
ものいみに富樫の留主を若葉哉　絽一
ほとゝぎす猿の亭かせにすがる哉　駅道
大蓼や脊つきながす及ごし　、

廿五日

墓碑や景清が母のわび住居　馬匡
慎の品を盡して夏書哉　五英

廿六日

午蠅や祭小袖のかちんぞめ　二葦

麥秋のなかば過けり旅芝居　百萠
越瓜やもの喰あきし魚の店　葛巾

廿七日

油ひく傘やつるみし蠅の影　百萠
遠のりに鳥羽の嵐や夏羽織　漁更
宵月の袂もるゝやなつばおり　元鄰

廿八日

うたんとす蠅見れば行燈の兒　漁更
合觀(歡)の花木陰きよめん浴衣がけ　百萠
ものかげや百合にひかるゝちのしめり　駅道
子子や温公が破し瓶の水　葛巾

廿九日

免されてしとぎ賣けり合觀の下　、
合觀咲やはせいたしたる川原先　千當
子子よ井筒のおうな覺ゑぬ歟　千當
ほうふりの水や帋燭のともしさし　慈周
あるよまた月にうかめり子子　絽一
口にうくや數を盡して子子　漁更

あめつちのたゞよふ中や子子　騏道

石山に詣て

萍やこもる式部が筆すさび　中斧

石菖に釣瓶の雫つたひけり　二盃

日にうけし砂の匂ひや合歡の華　巨洲

尼の身を蚊に施すとかたりけり　馬厓

かづらきの神をも見たり螢影　中斧

硎あけし釼にうつる石菖かな　騏道

切かけし椋のくさりやわすれ草　百荫

五月朔日

痩まじき身をも願ひの夏斷哉　規風

ふのりほし朝日にうごく貝は何　丶

あぢさゐや今も崩ん垣ひとへ　千當

行過て戻る夜道やむばらの香　慈周

業平がまくらのあとやわすれ中　中斧

萍やはつかに水の濁より　樂二

二日

人賣た小判にかへり初がつほ　葛巾

淺はかに世を夏菊の盛かな　慈周

藪椿散るや狸のおとしあな　冠良

蝙蝠やしのぶふたりが中へ來る　馬厓

舟まちの客にも粽まかせけり　樂二

三日

水書の臂を藪蚊に喰れ晃　吳鼎

君見ずや露を命のわすれ中　樂二

四日

ふりとげぬ雨に五尺のあやめ哉　蓼化

かはほりや鐵ふきやみしながやだて　五英

短夜や流れわたりのうはき者　五英

蓴菜や卞和がすゝる水の味　漁更

五日

羅に拾ひかねたる蓴かな　二盃

蚊遣火や八夫の出村の家五軒　中斧

書たらぬ畫もなつかしやなら團　百荫

吳竹の雪にも折ず落葉哉　蓼化

茂り逢ふいとまを松の落葉哉　故常

閑居端午

裏に蓬生門にあやめの流れ有　騏道

珊瑚珠の玉ひやしけり水あはせ　二蘿

更科の夜は有明て麻ばたけ　吾兮

六日

うきなかのうさや鮓くふ小くらがり　經一

宇留岸かむかし屋鋪の蓼かな　葛巾

雲と見る海しづかなり夏木立　二蘿

ほとゝぎすかねて哥よむ心より　經一

夏木立廬生が夢のなかばなり　中斧

陽炎の皆はなれぬ夏埜かな　蘭蕙

七日

人強き吾妻のはてや紅の華　烏孝

ものはなに届くあしたの日脚哉　五英

ほとゝぎす鞠は静におりかゝり　吾兮

むらさきのあけや茄子の一宵漬　呉鼎

八日

箒に鳥羽の水屑や蛇の衣　干當

木履はく、迠にも降ゟ扇が雨、　規風

風車果は吹れてちりに皃　蘿

河骨や廓はなれて朝手洗　桓吾

九日

夜あらしに神(コロ)通はん蛇の衣　キ道

ほとゝぎす聲に露をく月明り　巨洲

子規齒朶の朝露ふくむかな　成憲

ほとゝぎすうつゝに移る人の顔　漁更

京まではまだ二日路や麥の飯　中斧(匡)

ほとゝぎすうき世の耳のうとき哉　馬涯

十日

落人のむかしがたりや眞菰刈　中斧

たちばなの香や菊の間の後より　騏道

短よやあすまつ華も水のうへ　(ナゴヤ)羅城

十一日

竹植て中鞋とゞくや條の先　規風

おもふとなかばにやみぬ杜宇　百蒴

子の親のいくよをかぎる火串哉　吾兮

筆とれば月かけ叩くくゐなかな　中斧

十二日

蕉翁の忌日なればとて、おの〳〵
華なゝみ香なひねりて題たわかつ

屋根ふきの見つけし畫の水鶏哉　二葉
冠の緒に違したるほたるかな　吾兮
麥めしや小角來る親在所　馬圧
清輔がふくさに包むいちごかな　故常

十三日

いさゝめに紅さめしいちごかな　馱道
篭もれて千疊敷のほたるかな　葛巾

十四日

華苔に百圍の松の雫かな　千當
青あらし海見るとの近き哉　丶

十五日

淺川や日を負て行ひとへもの　吾兮
人魂や五尺隔て飛ほたる　二葉

十六日

壁際やたゝみ屆かす莓いちご　葛巾
子の日せし小松が岡の葵かな　馱道

十七日

早乙女の尻北向に揃ひけり　吾兮
大鳥の翔すれたりなつ木立　二葉

十八日

月草にあらしかゝるや飛ほたる　中斧
梟をすかして逃る水鶏かな　吾兮
照射山人はくらきにまよひけり　漁吏
あだ花をかつぎて瓜のふとりかな　慈周

十九日

夏の夜や肌へをとほす月の水　馱道
村雨に笠なきひとやひとへもの　漁吏
羽ぬけどりかくれんとする哀也　馬圧

廿日　文音

蓬生ふく軒に古代の風義あり　長宿 牛眠
浦ざとや戸ざせし門の紙幟　馬圧
流れ木のうつほに畫の螢哉　漁吏

洛の定雅剃(刹)髮しけるをほぎして
粹か川の深きにひたり、飛鳥河の
淺きを觀じ、最上醍醐味を人に及
さんさ、九華に巣くひし鳥の髻を
拂ふ椿花眞人をあふぐ

木のはしと思はせぶりの掛香哉　騏道

文晉

牛多く吼る四月のゆふ邊かな　南卜平角

廿一日

蓋伯父が室(密)事を聞つらん　馬圧
一休に活てもらはん干鰒哉　經一
ひるがほやなみうちぎはの小松原　蘭蕙

廿二日

見世ものゝ小家は流て水鷄哉　經一
賣ものゝしのぶのせたり朽木盆　騏道
さし汐におさるゝ水や羽拔鳥　樂二

廿三日

旅舟沖の嶌にかゝりてめぐり歩行、
あすやせうぶのいさなみさて、はつかなる軒ならびも、みよをほぎ
するのためしなるべし

蓬生つたふ雫うけたり小杯　二董
羅にすきとほりけり孕蚤　蘭蕙
夕がほや玉章投て行なら飛脚　故常

廿四日

野のいきれ南京瓜の花の亂より　干當
たゞ中へたらひ直すや夏の月　規風

廿五日

薄雪を降せて見たし紅の花　、
蜘の園に花南天の雫かな　干當

廿六日

ゆふがほや一里隔し京の鐘　蓼化
ほたる狩る竹によなかの螢哉　經一
風蘭や翌日をかぎりの月かこひ　樂二

廿七日

藍の香や矢春がはれぎの單物　騏道
あみうちのまくり手白しひとへもの　百茄

廿八日

中鹿のねらひはづれて立水鶏　呉鼎

汲置の水にもどせし干ふぐ哉　台麓東市

廿九日

石菖や雨一粒を葉にうける　規風

ゆふすゞみむかふへわたる橋もがな　故常

澤瀉や游がせて見る馬二疋　桐吾

晦日

ひとの世もかくぞありたし蚫の衣　五英

散ものは流影は御秡の清き哉　吾兮

天漢の水に味もつ早桃哉　中斧

何がし、子孫にめぐりむつびあひて、世に三夫婦などゝうらやまれ、いまや其業をゆづりて剃髪しけるを賀して送る

藜より杖になるべき子孫あり　駄道

文音

紅作る家に娘のほしけなり

虚無僧の兇見付たり青簾　古高鄰子

右二章

於青雲居興行

鳰の巣にからむ經木のひわれかな　蘭蕙

皐かへす葉柳のもと　規風

君が代とわれをわすれて唱ふらん　干當

齢たつとむ數に撰ばれ　百萠

苅残す木賊の中へ暮の月　中斧

露に邪見し北向の門ン　樂二

稗⿰麦差く臼のあたりの小脇指　漁更

齋まちかねて覗く朝腹　五英

佐保川の水に濡たる簑のはし　二葦

ほのかに匂ふ袖のおくもみ　馬圧

恨いふこゝろだくみの空鼾　經一

そむけし灯影うつる若竹　呉鼎

ほとゝぎす雨晴んとす月代に　蓼化

潮汲込む須磨の浴室　吾兮

としたけて延しかけたる兀あたま　故常

たか七石のあらし譲られ　元鄰

散花にふすべ出せし古狸　葛巾

からたち多き遅き日の前　素考
或はそれあるは霞める曲輪に　烏孝
魚荷とほさぬ寺の抜道　桐吾
裸身に嗽ぐ流のなまぬるき　牛眠
からすの塒くさき入梅東風　東市
しらみ行庄野ゝ里の薄煙　松笠
小判かぞへる懐のうち　騏道
打よせし舟に五人は活のこり　風
鐘の音嬉し南極の空　蕙
穀ならぬ國にもしめす浮居の説　萠
月に三ケ日は鳥うたぬ沙汰　當
宿がへの茶がま汲干す雪明り　二
町造りせし木津の川上　一
ふた升にたらぬ米賣越後獅ゝ　英
旅につれなや痘のほとほり　更
くれなゐの幕引社司が軒低き　匡
和布刈の海のたへにしづけし　薹
月華に猶もむかしのかんばしく　鼎

春を、老行鹿の爪黒　中

書信

藪かげや蚊遣過たる水の月　イセ白子 無曲
むら雲の高根を出る暑かな　ワカサ 鬼雀
帋幟五日の露のしめりかな　ノト 岸芷
ひとを戀て啼音に似り閑古鳥　兵庫 章古
つかれ鵜や暁の雲にきそふべく　ハリマ 玉屑
濡色は竹の雫歟かたつぶり　姫路 葵道
花もなき我家若葉にくらき哉　筑前 青人
草むらやおもはぬかたのかきつばた　金澤 馬來
百本に過ざるけしの盛かな　備後 何笠
夏の月貞女の肌を見たりけり　筑前 花情

（新華摘下）

六月朔日

氷室守されど烟はたてにけり　駅道
能因の留主は實か竹の皮　經一
風蘭や脱て捨たる絹袴　慈周

二日

さばかりの武士も扇にしのぶ哉　樂二
　せうそこのはしに聞ゆ
杉山に鹿のそらねや夏の月　洛 定雅
閑古鳥それさへなかぬ山路かな　洛 月居

三日

瓢簞（竊）の酒ひやしたる清水哉　二蕉
蛇の衣ふくるゝ風のなぐれ哉　馬圧
行抜る塗師やが脊戸や紫蘇畑　五英
　書信
五月雨のかたよりて夜は明に鳧　洛 桃睡
雷におとさぬ箸をほとゝぎす　浪華 無腸

四日

青天にけぶる煮酒のかほり哉　規風
ねらひ狩ある夜密に情知る　千當
ひる兒の蔓曳きるや石くるま　馬圧
煮冷や江湖みてたる聾下り　五英

五日

晨明にこぼるゝ露の青田哉　二蕉
川狩や生るを放つ水の末　きの

六日

河骨や水なつかしき西の京　蘭蕙
南瓜や葛家をもるゝ月と雨　吾兮
掛香や狂女がかつぐ蟬衣　葛巾

七日

川骨や江口の君がみづかゞみ　中斧
牛ひくや氷室の使者の跡や先　蓼化
撫子を見越水越の岩間哉　吾兮

八日

木枯風の古葉を出る清水哉　吾兮

我つゝむと誰書し團かな　馬厓
黑ほねの扇めでたし三之助　樂二

九日

宗桂が駒のせてをく團かな　中斧
葛水の臍のあたりをめぐりけり　吾兮
哥給ふ氷室の使者の白髮哉　蘭蕙

十日

虫ほしや松二日吹等持院　蘭蕙
夏木立誠の誠見初けり　南畝
龍骨車に川骨の水ひかれけり　左梁

十一日

夏の月浮木にうつり流れけり　馬厓
茜さすは鬼こもるかと雲の嶺　經一
僞りをいひおほせてや汗ぬぐひ　中斧

十二日

澤浮の影くずれけり夕あらし　百萠

書信

日の夏や菲をのぼる蝶の息　イヨ　蘭芝

明やすき一宵に竹の二葉哉　ヲハリ　兎石

矢矧川を渉りて龍城をあふぐ

青あらし吹おさまりぬ角櫓　、臥央
たちばなや和國に三ッの岩ひとつ　中村　烏月

十三日

日のひるやからりと落る竹の皮　馬厓
抱籠やたが世の夢を店ざらし　經一
廊のうへに富士の陰をく旭かな　蘭蕙

文音

卯の華やなかばゝ見ゆる水車　洛　杜栗
紅白の露うつり逢ふ牡丹かな　、雷夫
鐘響く曇りのするゐやほとゝぎす　信州　雲帶

十四日

蚤飛ぶや未進訴訟の膝のうへ　經一
さらし井へもどす守宮の番ひ哉　駅道
鯖釣や月を朧の手松明　二臺

書信

見込なき女となりぬ麥の秋　筑前　士澤

下さがや木立詠て夏すぐる　ナニハ 晝京
鴨の子は紫竹は痩て下ながれ　越中 蠶臥

十五日

新井の内寂莫としづくかな　馬圧
佛より蓮に美人の黄昏かな　蘭蕙
夜る降た雨のしめりやあさばたけ　百萠

文音

狩衣に日をよけて見る牡丹哉　辻村 りき
萍の花かいわりぬさゝらなみ　丹波 武陵
水あぐる雲筋きつて夏の月　洛 闌更

十六日

何ゆへにかりおくれけんあさ畑　象圧
麻の葉や揃ふてうごく夜のしらみ　二蘆
留主の間にさがしあたりし煮梅哉　駅道
朝清め新井の水うたせけり　蘭蕙

十七日

さらし井や月は三尺下に澄む　百萠
ゆふがほやあるは靜る物ぐるひ　經一

文のはしに

しのゝめや水もうごかず杜若　洛 孤秀
二三町竹輿に後れて清水哉　信濃 花牛

十八日

寐鳥ねらふ兒ハ落たり竹の皮　二蘆
葛水にしばらく遠き心かな　經一
蓮の露ひらくを待て置にけり　百萠

十九日

散はすのあすまでたもつ風情哉　駅道
客去て出しおくれたる煮梅哉　馬圧

書信

ゆふだちに浮巣の鳰の巣立哉　洛 定雅
雨も終にすゞしき月の野風哉　、青阿
川蓼の日にこがれツ、みどり哉　、一峰

廿日

鯖釣や片眼しゐたる六太夫　百萠
鯖釣や二十里沖は夫の火歟　蘭蕙

文音

すゞしさや音なき風の草を吹　管鳥

誰いけて留主の釣瓶に杜若　洛 紫曉

廿一日

一念三祇　三祇一念

觀彼久遠　猶如今日

空蟬や齡石に入る達磨塚　中斧

故暮雨巷の一させあづまにありて、吉原のたいふ人町さかいひけんふみな送りけるが、やまと文にはあらで、こさくにの水くき清らにして、そゝぐがごくなれば、めでゝひそみおきけるものを、漁子がもさめにあふじければ、そのうまし佛をしのびて句つくりけるまゝに、ひとまきさはなすものならし。

於六觀堂後園興行

ひとまろがはし居の跡の園かな　漁更

ふせごにかほる風の羅　經一

唐とりの彩うるはしき葉隱に　象匡

尾上をかけてひらく裏道　中斧

近星は雨にならんとゆふ月の　二蓋

鱸いけたる水かへてけり　吳鼎

萩原は一二の木戸の間にて　樂二

會釋こぼれし君わすれかね　巨洲

うたゝ寐に重き衣を打かへし　牛眠

聞はづしたる參向の鐘　烏孝

小雪もつぼかりに閻の花茨　慈周

しかとはしらぬ宗鑑が宿　百萠

打まけた圍碁を悔のひとり言　五英

厠へつたふ竹のかりはし　干當

井の底へとゞきかねたる新階子　素考

燒つくしたる栗の生枝　吾兮

あり明の花見んまでと琵琶抱て　蓼化

山葵にこぼす淚めでたき　元鄰

呼ば來る孕雀の掌に　規風

折かはりにし連歌靜けき　桐吾

上帶をしめて圓居のさばき髮　冠良
　根はいしとなる楠の下陰　故常
雨やさめ又水まさの登る也　東市
　篭道出る蛸の市ふり　松笠
長舟がふいご祭りの朝清め　きの
　かたさがりなる妹がまゆずみ　騏道
難面としはきかけたる潮(アサシホ)に　一
　濟だすふねの月に眞向ふ　匡
突上る蔀に蔦の蔓切れて　斧
　響をゆるす秋の玉琴　蘆
たがためにけふも斧とぐ徒然や　孝
　なかばは水に濡る岩橋　周
裏門のうちもかうちのとほりすじ　蒴
　神につかへる僧の黄ごろも　英
齋の間に華も散すまし　化
　巣のほとゝぎすたのみある中　筆

文音

むく手から川へながさん瓜の皮　洛　其成
三度なく夜をさかりとやほとゝぎす　、月居

廿二日

青麥の中を鐘鑄の群集哉　騏道
山伏の髭を剃たる土用かな　規風

廿三日

音を入る鶯や人のためしにも　干當
梅干の莚に塩ふく日南かな　規風
しのぶ夜は月にもかざす扇哉　きの

廿四日

ひるがほのけふも一輪咲にけり　樂二
西念が壺の白蓮咲にけり　蓼化

柑子のもとに垣結ひ廻し、吉田の法師が誹謗をうけしは、上代のことにや

苣かくや和尚が姉のまぎれもの　騏道

廿五日

蠶の棚のぞいて見れば人もなし　冠良

鮓賣のかつらのわたし越てけり　孔昭

墓遠藤武者にふまれけり　騏道

薏苡仁や南隣は日蓮宗　、

せうそこ

みじか夜をみな開きけり杜若　浪花 銀獅

男等が戀やこもらんならざらし　其成

廿六日

爺父にいきのうつしや漆かき　干當

筐のりて流るゝ水もがな　規風

策請し僧の行衛やあさ畑　きの

誰人の弦の響ぞなつの山　蘭蕙

廿七日

鵜遣ひの魚召れけり二の廓　樂二

柿の木に朝日へだてゝ麻畑　蓼化

書信

住吉の御田にまかりて

さをとめや傾城の名はわすれ草　月居

廿八日

美人之賛

涼風やみすじ後れし髮の艶　騏道

世帯する身になりそめて一夜茎　、

日の暑羽黒修倹(驗)の胸毛かな　干當

廿九日

夜や明む鵜のかゞり火の煙みゆ　桐吾

月鉾や四條どほりの朝朗　東甫

文音

岩ふぢの青葉をひたす清水哉　月居

老そめて戀おもふ杣や閑古鳥　銀獅

晦日

くず水をことく二椀召れけり　干當

ひとにぎり切てくれたる江蒲哉　樂二

夜にうつる雨の若竹けぶるかな　孔昭

蒜の匂ふ地より雷の發すらん　馬匡

七月朔日

澄渡る水に落けり初あらし　蓼化

萩の華わくれば細き流れあり　百萠

桐一葉落てながむる梢かな　騏道

いとなみに斯情はいらず菊の花　柏山

二日

朝がほの露におごりを極めけり　千當

逢ふとてか別るゝとてか鹿の聲　五英

三日

朝霧やいさごがちなる造り道　孔昭

兒にはなすむつひも淋し秋の暮　慈周

鉄砲のまくらに響く夜寒哉　規風

四日

蚤のきぬた共夜は海も靜也　騏道

秋の水雲なき空のふかきかな　故常

初あらし魚なまぐさく覺ゑけり　千當

五日

けふもまた鳴たつ迄に暮にけり　東甫

蔦照やゆふ日流るゝ水の上　桐吾

關守の膝へ飛つくいなご哉　樂二

六日

水賣の水に柳の散りはかな　二蘆

荻くれて露の光となりにけり　騏道

山伏のふみわけのぼる薄かな　馬匡

七日

國原や月のなか空薄散る　中斧

酒臭き衣干す陰の芙蓉哉　百荫

和讃ひくあしたの窓や菊の花　樂二

九日

嶋原を痩て出たり秋ほたる　千當

古郷の旅人にあへり今朝の怺　蓼化

推ばあくひるの戸ざしや溢れ萩　キ道

十日

裏枯や何を啄むめくらどり　百荫

假に世を捨るに似たり萩の宿　樂二

秋の雨闇の夜かけて降にけり　慈周

十一日

澁鮎やさのゝ舟橋とだへして　巨洲

はつ秋や夜るを流るゝ水の音　百荫

ひとしれず我名呼けり秋の暮　騏道

十二日

稲妻や瓜盗人の飛すさり　馬厓

波止士濃にて

けぶりみる横川の空や夕紅葉　騏道

谷川や紅葉放れし水のすゑ　百萠

蟷螂やあし曳かぬる泥の上　馬厓

書信

しのぶ音や虫の小さき心にも　鉄船

十三日

秋のよや噺とぎれしちしごとき　百萠

しみ／＼と月下に濡るゝ瓢かな　故常

十四日

朝寒や帚日立し下の森　規風

ゆふされを田螺やなかん秋の暮　、

漁子が母の身まかりけると聞て

秋は誰ものに駭くことのみぞ　騏道

十五日

先師暮雨巷病中の吟を一軸にものし、壁上にかけて、あら聖靈をまつる。

前文略

喉は鎌倉海道といへるは、天下知ゑ和尚の頓挫也。我ひさしうやみつかれし、そが上にかの海道ふたがりて苦痛すること十餘日、夢さなくうつゝさなく、今は蔦のほそみちのほそきかぎり、命にかゝる物さては、はつかに露の潤へるのみ

冬ごもり我世の道はたえ／＼に　暁臺病床苦吟

おくの吞溟は江南の産なりしが、いへありてしのぶの里の朝市に歸すといへども、雲行風施の間に神をゆだね、花舞月笙の仙たり。暮雨巷の門にありて風騷のしなりをさぐり、ひと度平安にあそびて俳歌をうたふ。予は同門の因ありて爐中榾火にひざをなら

べ、風談やゝとしあり。實に溟が喝に置ひて聯傳灯なうるに似たり。一日わかれなつげて奥に歸る。其情千里をへだつといへども、嘗筆談こまやかなりしも、今ははたとせあまりのむかしとはなりぬ。其後むさしのゝ月にめでゝ吾妻に漂泊し、せうそこも繁〱なりしが、いつしかいたつきの沙汰重りて、終に黄なるまろう人とはなりぬ。先師が招魂の棚にならべ、追福せばやとさぐり出せし柏翁兩吟の一卷あり。柏翁また泉下の客たれば、ともに死の緣のおぼろげならざるもの歟。

義經腰掛松といへるを見にまかりて

潜入て身にしむばかり松がもと　柏翁

眞晝をくらき山間の月　香溟

鹿の革莚につゝむ秋更て　、

落もやすらん髻のふで　翁

あきらかに流る音の涼しさは　、

人去てのち和琴調ぶる　溟

何變ぞ長橋殿の御使　、

世につながるゝ僞ぞうるさき　翁

麥二俵かくし置なる庭のすみ　溟

野陣纏に聞ゆ聲〱　翁

夜嵐や椋鳥起て星曇る　溟

晦日に近き炼と成けり　翁

折句添て玉兎の如き物の來て　、

えほしを三とせ捨て塞　溟

あら神の小社崩れて人遠き　、

そも濡色の狐に狸に　翁

此ほどは花の中なる我庵　、

重げにおろす酒樽の春　溟

小童も翌を壽ぐ年一夜　、

馬の行かひ氷凛ゝ　翁

帶もせず火を焚付て暖まる　溟

博奕に痩て淺ましき身ぞ　、

傾城は買へと疾心中されて　翁

あら恐しの何某が戀　溟

キヨンとして石の立たる筑紫浮　翁
網曳の聲す朧ゝと　溟
寐もやらで棋が香ながら有明に　翁
盗ふとまゝ春の大根　溟
陽炎に葛西わたりの女子ども　翁
藏も建たよ鬼婆ゝが家　溟
洗ひ流し貧に就たるこぼれ米　、
鳶はきよろりと烏かしこき　翁
油賣り城の北なるぬかり道　溟
遷宮とてわれも〳〵と　翁
君しばし腰掛られし花の本　溟
華もおくある陸奥のおく　翁

鴨の法師が方丈記の發語にたよりて

水やひとや朝がほもとの花ならず　呑溟
鹿の音や翌告來るおほれ鹿　柏翁

ありし世のちなみに水をそゝぐ

魂棚をほどけばもとの坐敷哉　蕪村

うぐひすの二度來る日ありこぬ日がち　几董
黄鳥の塒うかごふさゝねかな　如雷
あさがほや夫婦居並ぶ老の秋　鯉遊
窓はりし双帋匂へる小春哉　雨石
ほとゝぎす笛に吹れぬ聲音哉　露州
苗代の水にかゝれり二日月　圖雲
養父入につれ立歩行妹かな　雨篁
罪つくる世にながらへて魂まつり　騏道
たま棚に我影法師のうつり皃　斑布
露あり〳〵置く魂棚の中むしろ　漁叟

十六日

送り火の消て頻になつかしき　石垣八兵衛
送り火の流れ出たり汐さかひ　草斧

十七日

日はしたや雁ゆく京の町はづれ　騏道
行水としらで飛込いなごかな　馬匡

十八日

秋風や何を見付てからす啼　騏道

十九日

朝がほやとても世に咲ものならば　片田 米角
日ぐらしや灯ともしのぼる檜原　百萠
蚤のたく藻に乗せり月の影　巨洲
根曳して宿の露見ん女郎花　干當
朝がほに茶を濃くにたる老女哉　鳥月

四季混雜

淋しさの中にものあり閑子鳥　ナゴヤ 士朗
ものゝ哀れしればぞ秋の寐覺がち　羅城
立枯や五尺のうへに虫の聲　サツマ 完而
菊咲ぬ縣二とせみとせかな　ワカサ 北雅
橋本や遊女戀するかきつばた　沂山
秋の風引板に殘して暮に兎　イシベ 雁淵
廣澤や霧に落込夜の鳥　武陵
寒菊の枯あがりたる下葉哉　中村 霞川
おくり火の消てほく〳〵戻りけり　柏田
凩やとまりなほして啼鴉　ましらす

湖南客中

めし時の舟見おろして夕凉　洛 月溪
夜をかけて旅立そらやはるの霜　田原 毛條
明はてぬ空に雪はく關屋かな　伏水 鷺喬
西と見へて日は入にけり春の海　洛 百池
鷺の水すんで舞出す田螺かな　、佳棠
ものいはぬあふむ睡や春の暮　、如瑟
うぐひすや松に吹るゝあらし山　、春坡
我門や人の來ぬほど中茂れ　、蝶夢
鹿啼てながめられけり夜の山　、瓦全
かげろふや鐘鑄の跡のわすれ水　、五雲
月くらき汐干の海のかぎりかな　、嵐月
雁の列俄にたゝむ山邊かな　、湖美
今朝の嵐比良吹きつて霞ける　芦涯
あさがほも白き扇にのせにけり　、東湖
乾鮭に木魚の響應じけり　海津 志好
人しかる聲も聞へて軒の霜　手原 而友
三合に水したゝりて櫻かな　中津 可能
行ちがふ人なつかしや旅の雪　洛 桃之

正宗が刄をわたる清水かな、 正巴
嵯峨に寐て人より先の初紅葉、 熊三
春のゆふべ山こと〴〵くひくき哉、 一峰
見へ初る家の間の柳かな 城南 秦夫
寐亂し髪もはづかし朝櫻 洛東 そで
万歳の皺かざすや春の雪、 りう
古庭や雪はあれども梅の花 東武 素月
春雨や孕雀の軒つたふ 片田 千羅
海人うたへうけ給らんけふの月 みちのく 溟ゝ
楪の門柿の小袴ときめかで 南下 素郷
秋風や夜間におとろふ鶴の足 仙臺 白屋
蕣や喰へるものなら二日醉 洛東 芙雀
濡るゝとも此道ゆかん雨の萩 浪花 二柳
木枯風や海も千鳥の村紅葉 三州 蘭室
行まゝに華見へやみて花白し 神都 清秋君
詩に斧の跡あり梅の花 池田 田福
かへる雁低き羽音やおもひなし 高砂 布舟
麦の葉に口は斜也きじの聲 ナダ 士川

足代に結れて桃のさかり哉 ヒコ子 縫扁
春の野や人の心をさそふ水 ハチマン 蘭之
小貝つきし海苔は御僧いかにせん 日枝 晋智
ほとゝぎす鳴や念珠の幾廻り アハツ 壺山
かはほりのあたりて過ぬかさの闇 瓜州
斧いれる木神はいづこ花の山 龜石
番頭のうたひ聞たり蛭子講 杜凌
畑中やたが折しあとの溢れ梅 湖萍
錦木の朽て燃か飛ほたる 蘭功
篠の音やうしろに落る竹の皮 加庶
雨の芙蓉雪もつほどの撓かな 梅亭
春の海鯛の腸ながしけり 笙洲
我園の隣も少し枯埜哉 春樹
どちらから見ても裏也冬の山 菊二
ふところに入かとぞおもふ夏の月 五來
かくれ家の又かくれたる雉かな 井子
雨の日の泡とも消ず蛇の衣 得往
木枯風や宥寐まとひの犬奉行 義仲寺 重厚

起出て炭わる夜の巨燵哉　簑聞
白砂に光りあふたるぼたんかな　何木
さゞ浪にふは〳〵かるし鴨の尻　千影
行燕や巣にへらしたる蝿の腹　シナ川 雀村
薄衣の袂かひなや秋の風　セタ 雨橋
白ぎくの露に醒さん二日醉　イセ 甘谷
老ならぬ夏を變たり罔雨　洛 車蓋
月を待心出來けり冬のあめ　青崎
雨雲の入日に赤し村燕　岸池
溢れ出る水に湯氣有初櫻　文耕
笛止みて月落かゝる柳かな　唖玉
帚杖や大津畫をかく店の先　鶴竹
住あれし壁のほつれや蓋　女 哥柳

勢田川にて

獅子飛や細き岩間に霧よどむ　芃支
袖の雪妹が戸明て拂ひ鳧　元鄰
面白く塗ばしすべる蓴かな　坂もと 一我
尺八に口細めけりすまひとり　みちのく 東皐

名護や社中

蝶や水や赤土見へて野の光り　万岱
梅が香の見ゆるとやいはん夜の風　間毛
うぐひすの歯朶ふみならす夜明哉　他節
風つら〳〵柳のすゑの幹さはり　桂五
后の月あらはれて夜の深く見へ　五周
柳一木荆の中に安げ也　紀鳳
曉のくもりを雁のわかれかな　沙漠
閑を責て蛙の聲の夢に入　岳輅
淡雪や鳥の踏けすわらの上　計之
若葉山圖に日出度ひとつ哉　騏六
鈴虫の聲立てけり星月夜　不墨
行水や水を放れて中の霜　臥央
有明や法相院の鵙の聲　狙乃
蟀の髭見る壁の朝日哉　白圖
鮎うりの聲ひなびたり西の京　斑布
美しう年寄花のあらし哉　浮 竹里
行春や布子代ロなす旅の人　中村 不存

華摘の集中ゟ察し侍りて

花と呼雪と見る世の月涼し　看石
よる浪に根は枯たちて楸かな　文鬮
ふせ貝をふくは野分か狩の犬　十時雨
青あらし加茂の氏人吹れける　得往
春の野や雨になる雲見て歸る　芦鄉
ほとゝぎす軒に宿かす木ゝも哉　東舟
黄鳥や霜の湯氣立枝の上　五浮
水筋は氷りて赤き野川哉　甲賀 會秋
蓮の香や葉に抱たる宵の雨　田原 野竹
花鳥の世にすねものよ冬牡丹　洛 桃李
雲を見る小庭も月の今宵哉　、 維駒
灸すゑていでやながめん春の山　台山 蛙聲

はりまあんご

瓜坊撰

移レ風易レ俗莫レ善ニ於樂一とぞ。誠に唐哥のしらべにおける、大和哥のながめにやはらける中につきて、俳諧ぶりの樂に近きは、貴賤の雅俗をもらさず、是に醉てこれに遊ぶものは、かならず思ひよこしまなかるべし。爰に鹿兒のわたし守の中にかくれ、はい諧の祖意をさぐらむと腸をたち、禪に趙州の茶味をあぢはひ、三寸の舌頭に天外を動し、或は金鱗を得むと正風の釣ばりをたれ、栗のもとに淵をなして雲水の往來をとゞむ。そのきこえ遠近にかくれなく、此栗の本を一たび訪ふものは、一たびの功あらむ。予も此風雅の道をつとひ、去年の臘八の雪降る夕、鹿古のわたりの扉をたゝき、師とかれを論じこれをたゝかはしめて、夜の梅のひらくをまつ折しも、傍なる机上に門人の句〳〵堆くあつまり有ける中に、おかしげなるを一くさ二くさ拾ひて、四時をわかちて櫻木の塵となさむひまを、はりま莽居と

南越の杜多瓜坊題す。

寛政巳酉端月

（はりまあんご）

播鹿兒川栗之本　行脚瓜坊撰

歲旦

明星のいろを外山の花の春　青蘿
誠にかすむ遠近の里　其良
干菜飯にわたる鶯人なれて　瓜坊

其二

蓬萊におもひはじめよ海と山　其良
花さま〳〵の寅の一天　瓜坊
舞は今若草衣袖榮へて　青蘿

其三

松月庵に春をむかへて

松の戸や初日さし込む膝のうへ　瓜坊
不傳の色を匂ふしら梅　青蘿
山鳩は岨の枯木に巣をくひて　其良

歳旦

又ひとつ千代をかさねんきそはじめ　林田女 香蝶

太箸をあぐれば春の雫哉　淡路 寫涼

花の都より高砂の古郷へ歸りて春なむかふ

都にも中／＼かへじ宿の春　布舟

春興

鶯の木瓜もいばらも初音哉　青蘿

住ば都の春の山もと　瓜坊

百年の枕の垢の凍とけて　、

手拍子ひとつ聞すましたり　蘿

月出て風もわたらぬ海のうへ　、

里は鰯を引しまふ頃　坊

油採る木の實のかます作り立　、

冬のあれより頭陀も捨ける　蘿

餌に盡て霜の狐の啼あかし　坊

七騎八騎に細き火を焚　蘿

流されてながれしだひの舟の中　坊

神の奇特も有明の濱　蘿

有明の影より人を戀そめて　坊

身は起臥の萩のむら花　蘿

竹立し假の住居の露けさよ　坊

なぐさませ給ふ琵琶も世になき　蘿

咲散りし芳野ゝ春も夢なれや　、

霞と見しも越のしら雪　坊

撞捨る彼岸の鐘の幾ところ　、

唄に和らぐ婆ゝが挽臼　蘿

さられたる丹波の園部なつかしと　、

蚊のおふき夜のいとゞ暑くて　坊

うち寄せし津波の跡のわるくさき　蘿

子ども交りに木をはこぶ也　坊

北雨の降来る寺の西明り　蘿

納豆汁の冬もちかづく　坊

菊の香も月の夜すがも若き時　蘿

小町が哥の身にせまる秋　坊

すい〳〵と只風の吹宇津の山　蘿
　ねむれば起す駕の息杖　坊
今朝の戀思へば獨笑はれて　、
　うきはわすれじ三百の錢　蘿
居風呂のわく間に飯を喰ふてのけ　、
　八六はりの家の生壁　坊
花垣の庄にもうつす栗の本　、
　ほそくも巡る水の長き日　蘿

春の部 一

薺うつ里を見るかに小田の鴈　青蘿
しら梅にしらみかさなる東かな　魚崎 玄駒
梅咲り春二日たつ花の數　別府 葵風
子の日とて門田の麥も眺哉　、 巴紋
七草や春の日數もつもりそめ　上田 田旭
朝はらの目にかすかなる柳かな　林田 李雨
世をにげて鶯も今朝庵の友　赤穗 白岐

雪どけやたび〳〵はねる笹の音　上田 雅巾
梅も松ものこらず月の朧哉　上月 馬肝
住かへて隣の梅をあるじ哉　、 麦父
梅が香や心調ふ二日醉　作州 蛙聰
朝日影魚ものぼらむ岸の梅　淡路 綠翁
梅が香の筋引結ぶ溪の庵　磐昌 一馬
原中やさかりの梅の薄ぐもり　、 螢溪
梅が香に錠おろしけり鉢坊主　備倉舗 桃葉
凍とけや背戸の椿の葉のひかり　龍野 臥菊
春の夜やすみれに莟む我心　雨人

春の部 二

遣り梅のほさきにかゝれ二日月　玉屑
ひら〳〵と菫吹けり春の風　姫路 耳香
春風や小魚の登る水の上　、 菰春
礒山やしら帆にとゞく雉子の聲　、 雪巾
明ほのを川よりさそふ柳かな　、 路秋
鷄のたれ尾匂はんこほれむめ　上田 雪柱
行水に月はかゝるか芦の角　高砂 右契

曙やかすめる山に鳥の聲　洛 得終
菊植て花の色問ふ童かな　淡路 左水
いとゆふのむすぼれもせよ几巾　釵坂 米五
世の業や追はでも行ん春の雁　明石 起蝶
雨雲に背をすり行や春の鴈　、 五齡
きさらぎをさかりや梅の北面　、 湖月
心なき梅や椿や明屋敷　鹿古川 歸木
水音もあちらこちらや朧月　備倉鋪 玉井
苗代の水の曇や歸雁　寄人
馬さくりに躓にけり朧月　、 里芳

春の部 三

清水寺焰魔堂にて

みるめかくはな此世は花のさかり哉　洛 芭蕉堂
汐干せり流の末の三日の月　鹿古川 其良
牛眠る畑かしらや桃の花　、 可雄
田樂の酒も名所のさくら哉　、 魚寸
三日月のさし入る雛の光り哉　姫路 木水
長閑さにたそがれしらぬ胡蝶哉　、 五川

春風や茶屋かけ並らぶ六田の口　那波 嵐外
蝶よ來よ香をきかせて友にせむ　青角
長閑さや嶋根を巡るふねの數　上田 梅明
鳥飛んで心にくさよ夜の花　上月 撲龜
あだならぬ契を並らぶ雛かな　、 馬肝
陽炎の中に羽をうつ胡蝶哉　淡路 此道
塵の世のあれもたぐひか鳥の巣　、 無疊
櫻鯛酒よき里を賣にけり　、 青岐
蝶飛ぶや奉行の眠る土手普請　備倉鋪 露朝
菜の花の散頭おふし古手買　、 暮杉
鎌提て桃に彳たる女かな　、 素郎
菅笠の賣聲高し春の風　、 路草
翌日の事思はで床し散る櫻　、 龜几
一人づゝ霞から出る汐干かな　、 山笑
雨の日や木魚の音に椿落ッ　、 鳥夕
春雨や釣する人の枕たこ　、 南枝
時めくや藤の夕の青女房　玉嶋 桃佐
行春やまた樂しみを藤の浪　、小童 桃重

行春や子供のすなる筏さし　笠岡 文里
行春や草も臥りて六田の里　、鯉風
日最中の桃は野かげの美人哉　作州 有磯

木曾の秋塚に詣て

散る花も身に経る秋か木曾の塚　、

夏の部 一

ほとゝぎす無弦の琴にうち亂る　但馬 梧堂
等閑にくらすうき世を更衣　魚崎 洸洲
ぬれいろに月を持こす若葉哉　、
更衣けふは伊勢路へもうつる也　淡路 我白
細節もかくるゝ垣の若葉かな　、櫻瓦
卯の花は闇をかさねて月夜哉　、柴山
とく／＼の水にとく／＼螢かな　、可君
松陰の小家四五軒蚊遣り哉　、梧秋
淋しさやきのふけふなるはなの跡　、五陵
しめやかに糸とる先の蚊遣り哉　、言花
一里の蚊遣り行合ふ夕かな　、我白

植るほど涼しく見ゆる青田哉　、瓢瓦
草枕引むすぶ夜の蚊遣り哉　、可群
かくれ家や麥の葉のびの朝朗　、左水
我戀の山道たえてかんこ鳥　歸木
夕月や下は卯の花垣の照り　備 倉舗 李蹊
行くれし蝶の姿よ木下闇　、孤竹
花よりも葉がちにくれぬ杜若　高砂 李冠
短夜や寐顔に見ゆる旅つかれ　言花
若葉して夏もおく有須磨の寺　曾根 宇竹

師が淡路より歸り玉はざるたゝ夜
舟に待わび侍りて

ほとゝぎす淡路を夢の枕元　雨人
短夜や綱手あらそふ淀のふね　沂風

夏の部 二

石菖に蚤飛びうつる朝戸哉　几董
下駄の歯に露と散らすな苔の花　明石 梅合
横槌も世に有ものよ麥の秋　瓢瓦
蚊遣りして直に山家は踞る也　今市 愚寒

曳綱に散り行淀の螢かな　岡山 孤蘭
ひとつ家やたゝく水鷄も夜のたより　馬肝

夏の部 三

中〱に心を肥す夏の月　蝸國
涼しさや月を背おひし板びさし　巴紋
日車はたそがれ時ぞあはれなる　魚崎 常和
古郷は浮世の嵯峨よ竹夫人　化麦
千鳥飛ぶと見し川風や秡串　浪花 凡十
蝙蝠や貫はゞくれむ家二軒　洛 紫暁

秋の部 一

たつ秋を蚊にさゝる間寐たり鳧　蝸國
はりかへし燈籠や月のうつるまで　一樂
七夕や男をふなも秋津國　憐鶴
稻の葉に露のほりけり登り鳧　今市 雨柳
身にまとふ蚊やに秋たつ朝哉　東圃
うら盆や經讀み捨る草の中　瓜坊

秋の部 二

言の葉も啐とやならむ月こよひ　小野 君中
名月や木々の葉ごしに小夜ぎぬた　撲鶴
結ぶ夢の露にぬるゝか山田守り　淡州 巴州
すかし見る桙の蕎麦や薄月夜　嵐外
しら萩や手折ば袖の露となる　曾根 松溪
名月やひそかに寒き比良が嶺　高松女 歌童
きぬ〴〵の耻はむかしや月こよひ　鹿見川 五双
家うらの木槿咲けり佛の日　在明石 椤雲

秋の部 三

きり〱すきのふ戀しと啼もの歟　瓜坊

宇治逍遙

秋寒や鷺たつ跡の椎が本　明石 鷺山
夜のふける數のあはれや虫の聲　泊川 竹圃
時雨せん色もふくみて後の月　淡路 狐頂
思ひ寐のねやへ碪のひゞき哉　、二春
山川やふねにこぼるゝ萩の花　上田 麿雪
后の月蕎麦に時雨の間もあらね　青蘿

冬の部 一

中〳〵に根づよくなりぬ枯尾ばな　姫路 曉臺
朝霜や柳にたるゝ日の雫　宗居
あやしさに起て聞けり初しぐれ　備岡山 子坤
凩やのこる瓢も吹われぬ　馬肝
木の葉散る氣色ばかりを冬の寺　今市 花澄
よく見れば心に寒し枇杷の花　湖月
影坊や枯野つれだつ白月夜　釵坂 五嶺
放ちやる鷹の羽先や行しぐれ　玉屑

冬の部 二

枯ながらまた這あがる霜の蔦　瓜坊
朝鷹の聲や野先の雪の雲　明石 逆來
生垣に雀かたまる寒さかな　水谷小童 瓦三
小夜衛吹あけらるゝ祇園町　淡路 其悠
夜あらしのつまり〳〵や初氷　柴山
つむ雪や炉には崩るゝ炭の音　備福山 李岱
鯨見て屯す海人のきほひ哉　高松 嗽石
寐かへれば松風落る襖かな　明石 集雨

耳に目に入み込む月の衛哉　備倉舗 白扇
時雨るゝや翌日もやゆるく齒のぬけん　二柳

冬の部 三

いろ町の亘達(越)に朝の日影哉　洛 葵
寐るときは夜や明ぬらむ鉢扣　生野 諸香
はく跡へ雪降るとしの一日哉　米五
籠ばや身を炭竈の小野ゝ奥　高松 楚畔
音なしにつもるもうきぞとしの雪　姫路 壽以女
ふた親の年もおそれずとしのくれ　花瓦
凩やおのが野髪に狂ふ馬　魚崎 素功

はりま菴居終

書林

(原本闕書林名)

落柹舎日記

重厚編

（落柿舎日記）

むかし嵯峨に去來先生の別業落柿舎あり。芭蕉翁もつねに行通ひ給ひて、嵯峨日記を書給ふとぞ。されど多くの年月を經て、所の人だに其跡をしらずなりにき。さしも此地に定家卿の時雨の亭、去來の落柿舎と風流のすきものにしられたる古跡の、かたなくなりけるを歎く事年久し。予もとより去來先生にしたしきゆかりあれば、かの迹再興の思ひ頻にして、過し明和のはじめ菊亭殿に參りて、その序そのよし申上けるに、いにしへをしたふ心を哀れと聞し召上給ひて、御庭の御腰掛一字を下し賜ひ、またむかし落柿舎に額を賜ひける　故内府公の舊例を思召出給ひて、落柿舎の三字を染筆し下されける。こゝに北嵯峨小倉山の麓、山本村に弘源寺の跡といふ所あり。嵐山にむかひ野々宮に隣て、しかも柿の古木數株今もありて、梢はちかきあらし山　の吟のその景致にまぎるべくもなければ、やがてかの賜ひける一字を移し、御額をかけ、傍に石を建て、あらし山の發句をえりてその世の面影をうつす。さる事の遠き築紫（筑）のはてにも聞へて、長崎なる聖堂の祭酒向井元仲老人は、まさしく先生の猶子なるが、再興の時にあへるを悦びて、眞蹟の落柿舎の短冊に、先生の事實一軸を著述してをくらる。また越の敦賀なる白崎琴路の家に、自書給へる落柿舎の記を傳來しけるを、同く寄附せられけるにぞ、その記といひその短冊といひ、ふたゝび落柿舎の什物となれる事不可思議の緣なるべし。かゝる舊物のいたづらにうせなん事を惜みて、その御額・その記、短冊とゝもにねもごろに影寫し、またその世に古人の此所にして吟詠有ける發句、俳諧の卷をも書あつめて一冊となしをけるを、ことし出羽の規慶のぬし、梓に上して不朽に殘さんといふまゝに、落柿舎の南窓に雪厚みづから序をかく。

安永みつのとし甲午臘八

何事も古き世のみぞしたはしきといひける時もしたはしく、遥かにその後をさへ今はなつかし。嵯峨の落柿舎はふるとのおかしき名なるを、其跡だにしらず成ぬと遠きわが國にも聞て、無下に本意なきとに思ふ折から、ことしはその嵯峨の方にも行なれば、しるしの石をも殘さんにやと道すがらもいひ出つ。さて嵯峨に行べしと、まづ岡崎の蝶夢法師に見ゆるに、そこの重厚入道その人にゆかりあるにてその碑を建て、はやふたとせを經るとぞ。はからずも此志の同じき事をとて、ともに語りてともに喜び、いざやこの碑の名をも世に顯はさんにと、頓て集つくる事に成ぬ。さるは此人など在世の頃は、はいかいとてみだりならず。まいて集ども作れるには、題の次第より發句の立やう、手爾於葉・假名遣ひをも心づかひし給ひぬるとを、かく愚かなるものゝこれを著して、その人の德をなみする罪の多かれど、古へを好める癖のやむとを得ず、つゐに梓にのせぬ。

規　慶

落柿舎記

さがに一つの古家侍る。そのめぐりに柿の木四十本有。五とせ六年へぬれど木の實も持來らず。代かゆるわざもきかえ（マヽ）ねば、もし雨風におとされば、王祥がこゝろざしにもはぢよ、もし鳶・からすにとられなば、天のみかどのめぐみにももれなんと、つねは屋敷もる下人をいどみのゝしりける。ことし長月のはじめ、かしこにいたりぬ。折ふしみやこよりあき人の來たりて、木立に買求めなんとて一くわん文さし出し、悦かへりぬ。予は猶こゝにとゞまりけるに、ころ〳〵とやねはしる音、ひし〳〵と庭につぶるゝ聲、よすがら落もやまず。明れば商人の見まい來りて、我むかふかみのころよりしらが生るまで此事をわざとし侍れど、かくばかりおちぬる柿を見ず。きのふのあたひかえしくれ給ひてんやと佗ぬ。いと便なければゆるしやりぬ。此ものゝかへりに、友だちのもとにせうそこおくるとて、みづから落柿舎の去來とはかきはじめける。

柿ぬしや梢はちかきあらしやま

於落柿舍古人發句

柚の花にむかしをしのぶ料理の間　芭蕉翁

五月雨や色紙へぎたる壁の跡

ほとゝぎす大竹藪をもる月夜

あらし山藪のしげりや風のすじ

能なしのねぶたし我をぎやう／＼し

麥の穗やなみだに染て啼ひばり

竹の子や稚き時の繪のすさみ

朝露によごれてすゞし瓜の泥

手をうてば木魂に明る夏の月

六月や嶺に雲をくあらし山
長嘯が墓もめぐるか鉢たゝき
千鳥なく鴨川こえて鉢たゝき　其角
今少し年寄見たしはち扣　嵐雪
木がらしに梢の柿の名殘かな
瓢簞は手作なるべし鉢敲　桃隣
水仙の花のみだれや藪やしき　惟然
初花や猪ふりむかす嵯峨の里　支考
破垣やわざと鹿の子のかよひ道　曾良
すゞしさや塀にまたがる竹の枝　卯七
澁柿のつらつき出す葉陰かな
世の嵯峨と人のいへばやならず柿　先放
野の梅のちりしほ寒き二月かな　尙白
卯の花の麥藁にちる垣根かな　昌房
椀家具のたらぬ住居や菊の花　李由
竹の子や喰殘されし後の露
栗柿の花に隣なり草の庵　如行
紅葉ちる屋根の木の葉や石まじり　氷固

眺望

宇治木幡京へしぐれてかゝる雲　曲翠
竹の子に道のふさがる客湯殿　浪化
柿つゝむ日和もなしや村しぐれ　露川
小夜時雨屋根のちかきに休べし　玄梅
またや來ん覆盆子あからめ嵯峨の山　羽紅
山陰の藪うつりしてきぬたかな　素行
戸障子や何所の時雨のあまり風　魯町
木がらしにかくれすますや四疊半　素民
痩藪や作りたふれの軒の梅　千那
清瀧の音やそら／＼ほとゝぎす　野坡
此中の古木はいづれ柿のはな　此筋
秋空や日和くるはす柿の色　洒堂
羽拍子よどむ茶畑や雉子の聲　正秀
秋風にむしの聲ゝあはせけり　乙州
菊の香のそゞろにゆかし藪屋敷　芙雀
なつかしう桐にならぶやことし竹　史邦
笹一葉ちりと成けり雪のうへ　土芳

妓王寺の鉦かあらぬ歟秋の雨　吾仲
柿陰や鮎もとるべき網のやれ　風國
初雪にかくれあふする菜の青み
しぐるゝや黒木つむ屋の窓明り　凡兆
豆植る畑も木部屋も名所かな
北嵯峩や町をうちこす鹿の聲　丈草
柴の戸や夜の間に我を雪の客
竹伐の外には見へず菊のぬし

落柿舍すたれたるころ

澁柿はかみのかたさよ明屋しき
目をむいて梟すむや菴の留主　野明
猪の藪ほりかへす野ひるかな
桐の葉は黒みて寒し内畠
たゝきあふ角見て啼や女鹿の聲　閑夕
狐火のしらけて過やそばの花　荒雀
名月にもたれて廻る柱かな　野童
じねんこの藪ふく風ぞあつかりし
諸角に月いたゞきて出鹿かな　來几

月影にうごく夏木や葉の光り　女 可南

落柿舍普請のころ

屋根崩す鎌のしり手や柿もみぢ
井の底に蛙をもどす釣瓶かな　爲有
煎茶の湯氣にしめるやけさの霜
鴨の觜そむる熟柿かな
春や祝ふ丹波の鹿も歸るとて　去來
月のこよひ我里人の藥うたん
柿買や見ればぬいたる眞桑賣
箒來せ眞似てもみせん鉢たゝき
名月や椽とりまはす黍のから
藪の根や明てゆり出す茶つみうた
早稲干や人見へ初る山のあし
旅人の馳走にうれしはち扣
うぐひすや内のも啼ば野から來る
山藤のもとのゆがみを机かな
放すかと問るゝ家や冬ごもり

芽立より二葉にしげるさ丈草申さ

れしも、いつの頃にや有けん。かの落柿舍もうちこぼつよし

やがてちる柿の紅葉も寐間の跡

題落柿舍

芽出しより二葉に茂る柿の實　丈草
はたけの蓙(壟)にかゝる卯の花　翁
蝸牛たのもし氣なき角ふりて　去來
人の汲うち釣瓶まつなり　凡兆
有明に三度飛脚の行やらん　乙州

落柿舍亂吟

柳骨折かた荷はすゞし初眞桑　翁
間挽捨たる道中の稗　酒堂
村雀里より岡に出ありきて　去來
塀かけわたす手前石がき　支考

月殘る川水ふくむ舟の端　丈草
小鮎かれて砂にてりつく　素牛
上を着てそこらを誘ふ墓參り　堂
手桶を入るゝ御通の跡　翁
瘡にも食はいつものごとくにて　來
大工の邪魔に鋸をかる　考
竹樋の水汲かゝる庫裏の先　牛
便をまちて酢徳利をやる　堂
ふり出してわするゝ雨のした〳〵と　艸
總ゝやめにしたる洗足　來
打鮠を燒となますと兩方に　堂
くろみて高き樫の木の森　牛
月花にちいさき門を出つ入つ　翁
巣をろす兒の登る腰板　來
陽炎にねぶけ付たる醫者の供　艸
新茶のかざのほつとして來る　翁
片口の溜りをそつとさし出して　堂
迎ひをたのむ明日のわかれ端　來

薄雪の一ぺん庭にふりわたり　考
御前はしんと次の田樂　翁
追込の網を鼠のあらす音　堂
隣の明家あらし吹なり　牛
葬禮のあとで經よむ道心坊　來
手拭脱ておろす牛の荷　考
川ひとつ渡りて寒き有明に　翁
岩にのせたる田上の菴　艸
正月もいにやれば淋し廿日過　堂
種つけに來る爺の名代　來
咲花に片へら殘すしほ鰹　牛
彼岸をかけて御際さゝやく　艸
白粉をぬれども下地黒い顔　考
役者模樣の衣の薫物　來

蕉翁落柿舍に偶居しゐ給ひけるころ

葉がくれをこけ出て瓜の暑さかな　去來
野松に蟬のなき立る聲　浪花
歩荷持手ぶりの人と咄して　翁
かごと御供の間とぎるゝ　之道
半時ほど夜のかゝりたる月の入　丈艸
火のはちゝと燃てやゝ寒　支考
軒口は蔦這のぼるふしん前　惟然
兄弟どもが兄をあがむる　野童
切立て畠見わたす丹波やま　野明
そろゝ出す冬のうり物　來
寄合は鯨のとれぬ沙汰ばかり　道
あかうすゝけし行燈のさや　艸
ちくとした風呂敷提て戸をたゝき　考
こそりゝとそよぐ黍の葉　然
砂川の淺く流るゝ夕月夜　童
露しぐれとも輕荷ふらつく　明
百遣ふ花の木陰の店屋もの　道
菜種朧に西を見はらす　來
此寺に楞嚴よめしこその春　艸

獵場の公事のむづかしうなる　考
朝のうちむす子に馬を追せやり　然
餅つき上て汁粉もり出す　童
はた(二)板の寄て一間にあまる程　明
潜(僭)上いふてめかけたづぬる　道
茶小紋に絽の十德のすんかりと　來
手船さつさと秋は來にけり　艸
この夕べ月を野にとり山にとり　考
しづが畠のなるこからつく　然
雨氣つく鉢の戻りのはら／＼と　童
はやふ出來たる市の小屋がけ　明
此ごろの化ものばなししづまりて　道
聟と舅のなをる挨さつ　考
御局の里下りしては涙ぐみ　艸
ぬつた箱よりものゝだし入　翁
花の香の暫くやまぬ宮うつし　然
日がな一日鳥のさえづり　明

落柿舍に會して夜もすがらものがたるに、小倉の山の梟・大堰河の千鳥のこゑまで、こゝもとに聞へければ

梟に數よまれてやむら千鳥　先放
海も聞ゆる木がらしの月　去來
膝皿のひゆる机を押やりて　支考
おとこ世帶のいま味噌をする　放
松の有ところ／＼坂のあがりたて　來
合羽たゝめばすゞしかりけり　考
狀箱に髭籠一荷の瓜の色　放
あたりの嫁が寄て追從　來
たま／＼の晝寐に屏風引まはし　考
盆の用意の箸にかはらけ　放
蜀黍のこなたは月の葉がくれて　來
秋風そよと木に登る猫　考
白壁の目にたつ岡の番所　放
錢一文の念佛尊とき　來

奉公にくるしき木履提まはり　考
　日くれて覗く市のうり物　放
此神の衣更着寒き森の花　來
　雪の果とやむらがらす啼　考
藪入の馬と連だつ在郷みち　放
　芝居の札にしつた名がある　來
雨の日のほろみたしたるところてん　考
　見事な帶に繻半一まい　放
君はなつ我は清十郎と冬の來て　來
　その餅つきのあかつきの戀　考
鷄はなく臺所には有明し　放
　いつでも風のあるゝ白須賀　來
浪人を面しろがるはうそのかは　考
　芋名月もやはり饅頭　放
あのどく荻は錦と咲みだれ　來
　惟喬ばかりうらめしの秋　考
文よんで顔とかほとを見合する　放
　夜はほの〴〵と無緣寺の鐘　來

咲初る花に名殘の橋の霜　考
　下向のみちをのぞく苗代　放
日中に雲雀の聲の遙なり　來
　この長閑さは京も田舍も　考

落柹舍に於いて

京入や鳥羽の田植の歸る中　卯七
　うれしとつゝむはつ茄子十　去來
さはりたる御腰の物をいたゞきて　、
　霧たちのぼる庭の椽さき　七
朝月に鱸分るとよむなり　、
　痩たる胴をさするやゝ寒　丈艸
うき戀にわり子もてなす草の上　、
　室の遊女のとし〴〵に減る　來
はた〴〵と湯殿の内を吹あらし　七
　奥の千手は燈をとほしけり　艸
立臼をかへしがてらに荷ひ出し　來

蜂にさゝるゝ片頬のはれ　七
花咲や跡四角なる大屋敷　艸
種籾下す水のしづかさ　來
やりてはる山田土産の張かは子　七
物からかひも宵の雜談　艸
戸障子の繪もすごう成秋の月　來
露けき簔を腹まきの上　七
かたそぎの眞銅さびてしのぶ草　之道
鰯もらひの桶もちてまつ　、
山石を道すじ立てころばかし　七
國は周防の女四五人　、
錢賣の腰にさしたる箱秤　琶扣
庭鳥の毛をちらす供部屋　、
着ものゝ裙引のばし丸寐して　七
若菜短氣に涙ぐみけり　道
夕顏の畠隣に立しのび　扣
寸駕籠をかきて歸るひだるさ　七
月影に流す伽藍の柱よせ　酒堂

一息野分あるゝむら雲　車庸
雙六の簺ふりこほす草の露　道
舟に朝熊を拜む鳥羽浦　堂
笠の雪猪首になりておしまるゝ　七
むねにたゝみし日蓮の御書　道
折釘の一歩めで度花ざかり　庸
やがて雉子の戸をたゝくらん　堂
放すかと問るゝ家や冬ごもり　去來
霜のかさ(き)ねの落葉ふかつく　風國
朝の荷を川のあちらで勝負して　、
けんねもないに寐たといはるゝ　來
三日月の細いなりにて光り出し　來
奇麗に爪のきるゝ初秋　國
盆の事弟夫婦にふりまかせ　、
牛の來ぬ間は便もきこえず　來
白濱にすこし榮たる本明石　國

春ものとろに日のさゆるなり　來
咲花に頭痛かゝえて起上り　國
あさつき一種あれば珍重　來
在郷まで次第に人の肥て來て　國
あとの月より家賃あげらる　來
大きなる聲して歸る粉糠買　國
蚊のたかりたる宵闇のそら　來
胴背中とんとたゝいてしのばるゝ　國
もえたつ様な紅染の振袖　來
おとなしく髪そぎたまふ傍で泣　、
けふはなんにもしとむなきなり　國
隣から得てはからるゝはしりもと　來
はつの亥の子に丁と時雨るゝ　國
生鯛のひちくするを臺にのせ　來
何所へ行やら裏の三助　國
袷でも餘程こたゆる月の秋　、
御旅の森はもみぢしにけり　來
大分の石切こかす川霧に　、
ことりくと荷ふ乘ものの　國
つきものゝ睨てかへる夢ごゝろ　、
叮嚀になりて難義する戀　來
よりあふて飲ばのむほど青うなる　、
やがてのうちに鷄もなくべし　國
雨のもる下をちくくいぢりのき　、
烏帽子も着ざる男長閑き　來
ほり出しはたはしね山の花の旅　、
さてくく春は歩む事かな　國

九月十日於落柿舍興行
去來忌 懷舊之俳諧

柿實に問れてかたるむかしかな　重厚
色紙まくれし壁の秋風　規慶
夕づくよしだいにあかく影すみて　蝶夢
とんく揃ふ駒の足なみ　用舟
いつの間に腰の扇を落しける　吾東
笑ふてくらす此としのくれ　鯉風

炭二俵榾の葉柴も一つかね　瓦全
　温泉の煙の地を這て行　厚
待わぶるあまりにかしら重たくて　舟
　袂の綿のむしれどもふく　夢
りう／＼と雲雀の上に几巾の鳴　風
　是濟が家の春ふかき庭　東
御手づから花の御題を書給ひ　厚
　われし跪に起居くるしき　全
燈籠の油をねぶる狐來て　夢
　月はわづかに露しぐれする　舟
菊に栗荷ひつれたる男ども　風
　何所も茶汁に飽しこのごろ　厚
折ふしはいと寒げにも鳥なく　東
　雪ふり落す塚の松が枝　夢
よく見れば野上の宿の小傾城　全
　米にしろなす箔のかたびら　風
世の中は遷都の噂さう／＼し　舟
　萬事無心に釣竿のいと　東
眞白う大きな鳥の二つまで　厚
　旅はいかさま喀の色　全
山伏におそろしながらものいふて　夢
　瘡のあとの汗くさきなり　舟
きら／＼と蜘の巣光る夏の月　風
　皿をならぶる熊笹のうへ　厚
金堀の習をたのみに日出たがり　東
　暦の博士にねんごろになる　夢
雪中に犬ほへしきる辻子の奥　舟
　濁りて來るは何あらふ水　風
花の雲けにおもしろの時ぞかし　全
　長閑にはやす延年の舞　執筆

重厚六句　規慶一句　蝶夢六句　用舟六句
吾東五句　鯉風六句　瓦全五句　執筆一句

源明知常父書

蕉門俳諧書林
井筒屋庄兵衛
橘屋治兵衛
版行

鴈風呂
呂蛤編

多く鳥獸草木名をしらんがため、先たのむ椎の木かげにやどりて蕉翁の骨髓を學び、終に京師一人の詞宗とはなれり。しかはあれど生涯足の痛ひありて、しらぬひの筑紫・外が濱の鴈風呂を見ざれば、つねに遠近の風流をふみのたよりにきゝ傳へて、且は古き人の言捨を探りあつめ、歌人は居ながら名所をしれりと、ひとり事足れるおのこは、大菊庵のあるじ呂蛤也と、木曾寺において重厚序す。

寛政六ツのとし
とらの晩夏

鴈風呂集

春之部

花の春誰ソやさくらの春と秋　蕪村
麥肥す空ほがらかに明の春　几董
元日や常も淋しき嵯峨の奥　粟津 重厚

蕪村翁の門に入りしとき、向ふ春

わざとならぬ初曙や神の春　伊丹 紫狐
元日や櫻に近き人の顔　孤秀
はつ日影心の杉の眞上より　呂蛤
鶯にしのぶ紙衣の立居かな　蓼太
うぐひすや花子がもとの川手洗　紫曉
鶯の啼ずに飛し羽音かな　伏水 蘆村
梅が香や神崎もどる夜の駕籠　座笑
嫁つれし老の化粧や梅月夜　鈍來

雲曉叟知命の賀

百とせの半句ふやむめの人　伊丹 志撫尼
梅柳古くなるもの我こゝろ　善光寺 路人
燕を謡にかくころの柳かな　東都 道彥
青柳に玉の緒ゆらぐ二階哉　闌更
我しれり富隱しける門柳　嘯山
とまりては柳に沈む小鳥かな　都雀
白魚に梅折添へて文もなし　菱湖
七草や日枝からみゆる大內裏　春坡
雪解て麥三寸のひかりかな　里蜘
落かゝる日に亂れけり春の雪　呂計
小式部が机の上や朝霞　寸砂
樓の伽羅よりたちて夕霞　菱湖
駒かける右近の馬場や松の花　粟津 夜來
寶びきやうしろへ廻る鈍太郎　春坡
うき人の寶引にかつ憎さ哉　志燕
めでたしな万歲五代名もしらず　橋仙
萬歲の中へ和尙の御慶哉　呂蛤

夜や深き雪ふる中の春の月　路由

　　阿彌が樓上の酒に暮て第四橋を過る

春月やしのぶと見へずふたり連　風磨
春雨やすましおさめが宵エミ　一鳳
春雨や三日の旅を夢ごゝろ　池田 雛雪
春雨や鼻つき合す尾花駒　桃李
初午やおもひ染てき布子着て　田福

　　師の改名を人々の祝し給ふうれし
　　さに

はつ午やあまたの人のそなへもの　志燕
眉とつて嫁も連だつ彼岸かな　情化
釣がねにふと飛入りし胡蝶哉　伏水 あし丸
夜步行の身にきさらぎの嵐かな　之尺
落かゝる月に飛つく蛙かな　南呂
草鞋で行惣髮や春二月　文暢
春の水ちいさき鳫のうつり鬼　杜栗
三味線の質屋を出たり朧月　蓼太
嫁入の通らぬ橋や朧月　呂舟

幾久が世がたり聞ん宵の春　東都　成美
半道は旅路おくるゝ鶯かな　鵠舌
春風に眠たき砂のあゆみ哉　尾州　臥央
餅みどり饐くれなゐに春の風　呂蛤
二月盡四月も春と思ひける　浪花　舊國
朝山や雉子の一聲山を裂　無腸
くもり行里や遠雉子遠雲雀　几溪
青空や舟に聞ゆるきじの聲　錦羅
雉子啼やこけのこりたる枯尾花　蝶夢
見渡すや蕎麥に並ぶ人の尺　寸砂
鳥雲に入て風まつ千舟かな　梅斜
出代りや階子をのぼる大またけ　几董
菜の花や舟のねむけの未さめず　文席
廓出てうい子もふけて壬生念佛　自珍
菜の花の絶間に壬生の面屋かな　鈍來
初ざくら饅は喰じと思ひける　呂蛤
盃に影うごきけり夕ざくら　粟津　瓦好
芳野にてないもの喰ふ櫻餅　嵐山

遠き花に近き櫻のくもりかな　春坡
花さくや額ぬすまれしきのふけふ　柴狐
祇王寺を尋て來るや花の客　熊三
みどり子も盃まはす花見かな　サガ　魯哉
死る迄活むと思ふはな見かな　但馬　木姿

春夜の興に乘じて

春の夢花と櫻の外はなし　虎嵒
たゝみ直せば蝶のたつ袖　呂蛤
鐘ほのか霞の底に雨帶て　車容
藍より青く浪しづかなる　几溪
夷等によき酒くれて余所の月　呂計
「秋色」ふくむ笛に泣出す　鈍來
風の露芙蓉の上をいくしきり　呂舟
あなおそろしの蛛のふるまひ　一吹
いや〳〵と何もまいらぬ物思ひ　自懷
使またせて代筆をする　橋仙

初茄子翌の祭に出かしたり　出
　簾の前へ宵の月落　蛉
讀書する隣琴ひく下河原　容
　千雨もちて今の丸腰　渓
朝ぼらけ空々として南無あみだ　計
　立出る宿の壁にざれ哥　來
大和路や花もさくらも時めきて　菱湖
　藥品をのぼるかげろふ　執筆

下略

歸去來花瓶ものせよ花の庵　几董
花に來て詞すくなきすまひ哉　池田 星府

花のちる日はうかれこそすれ

花守は寐ころんだとき花見哉　伏水 斗孝
白妙や夜をちる花に手傘　孤秀
また今歳まつ人にちるさくらかな　播磨 士川

播磨路の浦邊に古戰場をよめる

散々や花の跡ふく草の尺　杉雨
遲き日や天狗のもどす伊勢參　月渓
躑躅活て眠た顏なり扇折　之兮
海棠や月もあやなす棚曇り　南部 三力
雨したゝか山吹しづむ夕かな　丹后 武陵
むらさきに春は暮けり藤の花　鈍雅
けふのみの春の暮六ッ聞へけり　車容

夏之部

橋ひとつ出がけに寒し衣がへ　蓼太
綿ぬきて蚊の啼一夜二夜哉　芭洛
盗人にめし振舞ぬほとゝぎす　浪花 二柳
麥かれて雨のそら豆ほとゝぎす　池田 左言
ほとゝぎす人は上手に聞れける　丹后 黛山
蜀魂きくや嵯峨野の薄月夜　夜來
長廊下官女もきくやほとゝぎす　熊三
杜宇月はむかしのありどころ　呂蛤

卯の花を血になよごしそ郭公　來之

人も哭く鰹の血合ほとゝぎす　几董

勿レ謂有ニ明日一　勿レ謂有ニ來歳一

初がつほ先喰ふけふの命かな　呂蛤

翌ありとつい怠りし夏書哉　車容

書さして母に仕へる夏書かな　南呂

ひとゝなりて啞の娘の夏書哉　紫狐

白きより散はじめけり芥子の花　湖南得往

白罌粟や佛作りし石の屑　呂計

楠公碑

橘や野路に散ても芳しき　梅斜

寐ほれたる顔は出されぬ牡丹かな　化山

夜牡丹や美女と見へしは菊之丞　几董

片屋根や賤が牡丹も常ならず　移竹

絶頂に雪おく里の青あらし　飛鶴

酒煮るや雪見る頃のしのばるゝ　一虎

人間の四月となりぬ瓜茄子　一鳳

三日月に晝の雨もつ若葉哉　孤秀

葉柳の露にかさなる夜明かな　錦哥

若竹やかたへは松のあらし山　呂蛤

茂り樹や油ながるゝ金燈籠　春坡

笋や脚胖まくれて脛高し　路曳

短夜を皆ひらきけり杜若　浪花銀獅

草の戸や蚊の聲もそふ念佛講　宇治田原毛條

子の手足嗅の天窓に噛せまし　寸砂

蚊の聲や淺茅が宿の薄煙り　几溪

蚊遣りたく中に樒の匂ひ哉　重厚

能因が庵に細き蚊遣りかな　熊三

綿弓のたるみを晝の水雞哉　南部平角

我を愚にしてたゝくも朝水鷄　共成

鵜もそゞろ遣ふもそゞろこゝろかな　伏水幾行

勞れ鵜や旭に佗るうしろむき　魯哉

五月雨や御溝に出し山桝魚　菱湖

人の氣は腐らぬものか五月雨　狸原

沖はれて鰐のつら出す早月かな　桃李

螢火や濡身にうつる瀧のもと　左言

螢ひとつ月よりそれて吹れける　東都 春蟻
我かげを月に見る迄田植哉　鈍來
軍ある中もむかしの田うた哉　其川
植る田に三ッ子の娘並びけり　呂蛤
あり侘て京へ出しなしのぶうり　東都 巣兆
いさゝめに紅さめし覆盆子かな　大津 騏道
孤のたもとに重きいちごかな　其石
老鹿の夢をむすぶか合歡のかげ　毛條
世の人のうつろひやすし紅の花　志燕
牛の尾に梻入（二字蠹）り夏の月　几董
奥深き灯のかげや夏の月　青峩
なつの月時雨櫻の影とはむ　白懷
人涼し蓮の上行山かづら　東都 宗讃
母供してふた日參りぬ寺の蓮　春坡
余所をふる雨に蓮の匂ひかな　馬蓼
帷子は曉起のあらしかな　大津 五來
晴きつた空おそろしゝ夏の朝　時扇
暑き日に文覺風呂をいそぎ鬼　紫狐
一しきり人聲もせぬ暑かな　虎嵓
そよと風たのしき夏の夕かな　志燕
白雨や花屋が店の濡しだい　菱湖
艸分て孤村に入るや園うり　無腸
葛水や女房のしらぬ連ひとり　座笑
葛水を得たりかしこし酒の口　車容
走井や水底寒き雲の峯　孤秀
白山や霽のそなたの雲の峰　橘仙

秋之部

秋たつや大きな家に人もなし　重厚
疾起て月代そりて今朝の秋　呂蛤
蔓ものゝあだ花多しけさの秋　波静
さだまらぬ雲の中より初嵐　春坡
下染の儘にちり行一葉かな　吐山
水晶の尾上に近し銀河　あふひ
大德と古鄕を語るすまひかな　几董

ものゝあはれしるやしらずや相撲取　道立
すまひとりむかしは書寫の若衆とぞ　呂蛤
蕣の花こそ見ゆれ奥山家　曉台
朝顔の人を笑ふか口明て　旧國
あさがほに老を見せけり白拍子　南呂
あさがほや踊浴衣の袖だゝみ　虎嵒
頃入に栗喰ふ娘かくれけり　几溪
つと入やうき君に逢ふ胸ふくれ　呂蛤
露にちり雨に後れつ萩の花　魯哉
誰落す芥子人形ぞこぼれ萩　寸砂
萩垣や隣も似（蠢）人の住　閑空
荻原や秋さま〴〵の山おろし　五來
雨の夜や操崩るゝ女郎花　几董
おみなへし折ても露の置所　杜栗
蘭の香も閑を破るに似たりけり　青蘿
魂祭り瓜盗人を遁しけり　杉甫
棚經に來るや小僧の人となり　毛條
六齋や大前髮の繪かたびら　鈍來

大文字に月一点のひかりかな　五雲
さし上て群衆の中を西瓜哉　杜栗
踊子や日ごろはひくき母の鼻　舊國
傾城の身のうへ語るきりこ哉　馬蓼
嵯峨に寐て吹れそめけり秋の風　（彥根）巣臺
淋しがる乞食も見へて秋の風　菱湖
秋の風曉ちかきともしかな　紫狐
岩くらや狂女が顏に秋の風　蒲月
大津畫の鬼うりされて秋の風　孤秀
さゝがにの糸のくるひやあきのかぜ　志燕

言捨給ひし一折を得て、同じく重
叟と其跡を次侍りぬ

秋の風川二筋に流れたり　重厚
とまり定めぬ暮の蜻蛉　几董
新酒の斗樽造れる月かけて　仝
もの云ひつのる童こざかし　厚

案轄もむかしまゝなる眞名暦　仝
冬あたゝかに草庵の梅　董
かう〳〵とよく寐る人をゆり起し　厚
幮に蚊入れてつらき夜を守　董
磯の香の南吹來るやなぎ町　厚
蕎麥切うりの逃るむら雨　董
かゝる時兜の鉢に狂歌あり　厚
百濟境の稻盜みとる　董
下弦の月落かゝる雲の透　厚
馬に睡りて風をひく秋　董
傍に立さらでのみ妹が顏　厚
筆も得とらず(壹)しのぶらし　董
空低きかきあけ城に花ちりて　厚
日のちり〳〵に雲雀猶啼　董
入あやに納蘇利の拍子打霞み　呂蛤
衆徒めん〳〵に太刀を横たふ　厚
山かづら數の松明白けたり　蛤
川浪高く車おし出す　厚

乞兒にもものゝ心得し翁かな　蛤
市にかられて箸を商ふ　厚
一霰富士を見なくす駿河町　蛤
藥師參りを出しに戀する　厚
空泣の泪や袖にひたすらん　蛤
瓦燈の光りのうすき油火　厚
雨の月奥淨瑠璃の小夜更て　蛤
涌温泉に足の冷をわするゝ　厚
燕の余波をおしむ人もなし　仝
隣の寺の喧嘩しづまる　蛤
日に乾く夜尿の蒲團打かさね　厚
金賣どのゝ御宿もふさん　蛤
咲花の香もこきまぜてもみ平鱚　厚
黄な鸎も囀りの中　蛤

ものゝあはれは秋こそまされ
秋のあはれは夕こそまされ

なけ〳〵と我を責けり秋の風　樗良
畫行器や土佐が繪の具のすりはがし　之兮
不夜城を出る挑灯に蚤かな　幾行
古御所や詠のこされて花すゝき　社牛
蓼摘に來る人たへてきり〳〵す　播州 布舟
おもひ寐や夢さく閨の虫の聲　志燕
吹れ〳〵地にもつかで秋の蝶　春坡
芙蓉さく今朝一天に雲もなし　紫曉
身をよせる柱つめたし秋のくれ　鈍雅
廣澤や霧に落こむ夜の鳥　武陵
下枝の寐鳥起さんけふの月　万容
櫻なき唐土かけてけふの月　蕪村
名月や産れかはらば峯の松　蓼太
月今宵ひづむ瓢をうらがへす　呂蛤
悋の月旅せぬ人ぞ恥多き　東都 完來
墨染の袖にかゝりし鳴子かな　孤秀
ぬれ鹿に有明の月の光りかな　曉臺
うら山の懷寒し鹿の聲　夜來

草の家の障子喰さく雄鹿哉　青峩
思ひきつて歸るか曉のひとつ鹿　閑更
漕出せば遠里小野の碪かな　玉淵
はらからの娘向ふてきぬたかな　鈍來
小夜きぬた辛き世帶も君と我　呂蛤
雲はやく不二を動かす野分哉　春坡
雨の鴫一羽もたゝず暮にけり　大魯
淋しさの中より鴫の羽音かな　里蜘
三吉野の秋思ふ程老にけり　鵑舌
風につけ雨にわりなし夜半の秋　紫狐
うき夢もなつかしき秋の寐ざめ哉　鈍雅
したしめばともしに秋の時雨かな　麥湖
何も〳〵秋ながめなし須磨の里　無腸
からし酢の泪つめたし後の月　三井寺 千影

擬古體 三首

南天の珊瑚霧の海底に沈むらく　几董
夢を啼虛勞の鹿や晝の聲　仝
夕紅葉三千人の戀ごろも　呂蛤

あなにくやもみぢに糞す夕烏　羅雪
筆柿の紅葉見事や光悦寺　來之
盗得し柿こと〴〵く澁きかな　孤秀
紅のうき名立けりからす瓜　三力
若莨菪待夜〲の空たのめ　鈍來
白菊の露そほちとる硯かな　呂計
しらぎくに露のまことを見付たり　橘仙
つゆ寒や榎の木のもとの塒鳥　桃李
露霜や手をひろげたる榎茸　寸砂
菌の大さあきの一夜かな　南部其黑
白菊のみだるゝ秋と成にけり　毛條

冬之部

此こゝろ誰とかたらん初しぐれ　青蘿
でゝむしの石にもならずはつしぐれ　春坡
しぐるゝや葬あれて君見へず　左言
干店に風呂敷かぶるしぐれ哉　菱湖

うつくしき日を追て行時雨かな　志燕
時雨るゝや根こぎの莖に花見ゆる　雷夫
しぐるゝや野に百とせのおみなへし　呂蛤

東都吾山師の七回忌

時雨るゝやその七とせの夜の心　志燕

蕉翁百年忌

百とせの時雨染るやその日より　仝
鑪鞴ふむ末の桶より冬ざたつ　桃李
冬ごもりひづむ障子に弓はらん　嵐山
秋成は三味線彈て冬ごもり　定雅
魨汁や殊につらよき女がた　杜栗
河豚の旨さしらじ隣は念佛講　孤秀
古妻の男紙衣を着なしけり　菱湖

黑人多レハ財益ニ其ノ過ヲ

紙衣着て銀の垢ふく世は憎し　呂蛤
奈良足袋に小春の蹴上かゝりけり　春坡
火燵からおしむ障子の夕日哉　飛鶴
見へがしに君にかくるゝこたつかな　菅烏

こしかたの夢くり返す巨燵哉　鈍来
むつまじき火燵まくつて迯にけり　銀獅
桐火桶無絃の琴の撫ごゝろ　蕪村
追かけて禿がわたす頭巾かな　熊三
あやまつて溫石つゝむ頭巾哉　仙台東阜
諷ひ連て雁金組の冶遊頭巾　几溪
老聲の江戸淨瑠利や夷講　几董
あの人の來ぬ年もなし蛭子講　星府
ある夜また納豆たゝくや千菜寺　粟津斑鳩
莖漬やうか〱京の水遣ひ　化山
仁和寺に小春の櫻咲にけり　一吹
歸り花櫻と見へて哀なり　黛山
かへり花遠近人に物中す　紫狐

鵬風呂

渺々と枯野果なき月夜哉　呂蛤
骨髄さむき狼の聲　扇嵩
住は侘庵いくつも建かへて　仝

萬葉躰の歌を二首よむ　蛤
漕いそぐ舟は霞に消てけり　仝
遠歸啼百の囀り　嵩
春知らぬ君かしづきて隱家に　仝
みそかに召る嶋の千歳　蛤
羅の袖につれなき風吹て　蛤
日枝を廿に白雨の雲　嵩
飼鳩のそろふて戻る土蔵の上　仝
十露盤嫌ふ兄みやびなる　蛤
醉中におの〱ざれ書ちらし　仝
火影を奪ふ庭の木がらし　嵩
膝丸の威徳を今やまの當り　仝
御傍を去ぬ童子かしこき　蛤
花に暮月に明さむ彌生山　仝
雲をへだてゝ鐘長閑也　嵩
氣違ひの靑き踏しく是も春　仝
佗阿上人を松の下陰　蛤
餅あぶる店にもぬけの鳥提て　仝

調子しどろに三味線をひく　　嵐
うかれ女と落しも戀の質より　　仝
思案變りて書直す文　　蛤
年既に暮行夢の五六口　　蛤
市へ切出す雪の白梅　　嵐
兄弟の子の行末を神かけて　　仝
傳へ祕たる景(系)圖一巻　　蛤
月の秋あのゝものゝと曇りがち　　仝
荻を散露荻に置露　　嵐
霧深き山手に競ふ鯨波　　仝
漸盗み出し佛重たき　　蛤
酒醸す家をねだりてあぶれ呑　　仝
繋ぎ捨たる馬に日のさす　　嵐
悠然と花にもふけの延喜樂　　仝
烏帽子に落る藤の白露　　執筆

まく麥にしたがふてふく嵐哉　　あし丸
枯艸や置まどはせる霜の露　　車容
霜千里琉球かけて芋の蔓　　月溪
鴛鴦ややもめ鳥は啼て居る　　白懷
千鳥啼朝風寒し紙屋川　　席嵐
夕闇や千鳥啼瀨の浪がしら　　夜來
月夜とも闇ともしらぬ生海鼠哉　　南呂
蜆子にも逢はでたゞよふ生海鼠哉　　蓼太
水仙や水には遠き咲どころ　　伏見不醉
熊の膽と瓢箪釣て榾火かな　　魯哉
消がての榾にさし入るや峯の月　　路人
子を捨る鬼に逢けり鉢たゝき　　几董
あはれ見よ若衆ざかりの鉢叩　　巢臺
鉢たゝき竹林に遊ぶ日もあらむ　　河内青橘
翠入に行夜もあらむ鉢たゝき　　橘仙
夕顏の五條も過て鉢敲　　呂蛤

寒山の讃

乾鮭は佛くさくもなかりけり　　重厚

凩や一瀬は涸るゝ大井川　春坡
こがらしや淺間に啼る晝狐　甲府 石牙
こがらしやさのみいそがぬ峯の雲　尾府 士朗
凩や湖水をはしる流星　呂蛤
初雪や隣に孤婦の泣あらむ　麥水
はつ雪を下に積なる越路かな　楚汶
雪の日や心ほど高きものもなし　尾府 羅城
賣卜の机たばしる霰かな　呂計
寒月や鯨の鰭の片ひさし　几董
寒月に手元ひかりぬ紙洗　青蘿
更科や寒月ひとつ雪の上　斗雪
寒聲や廓はづれに犬吼る　鈍來
年わすれ扨も人には精進日　大祇
有明の階子にのぼる煤拂　買山
たのもしき詞のさまや厄拂　紫狐
春待夜常もありたき心哉　志燕
妻持てとすゝめられけり年の暮　呂蛤
柳活て師走の嵐いとひけり　仝

人々みづからが袖をひかへ、極樂と呼び給ふに、むかし泉のちもりに地獄とかやいへる遊女ありしときゝ、我も極樂と呼るゝは此世にうまれしかひならんと、かくこたへ侍る。

極樂女志燕

極樂も地獄もうれし身のさちや
むかしのちもり今のあり岡

辭世　仝

夢の世のうきうれしさをふりすてゝ
きよくも歸へる彌陀の淨土へ

地水火風かへして花の佛哉

かゝる辭世をのこし、此春やよひ廿八日に、いと清くも往生の素懷をとげ給ふと聞へしかば

散花の跡や日は西月も西　呂蛤

杖てふものは誰人か突そめしものやらむ、藜の杖の仙人ぬきたるに、檢校のしゆもく杖は唐島のさまり

木ともみへ、千代をこめたる一ふしに昔が齡をことぶき、辨慶に金剛杖に忠儀の葉を殘し、春は鞠杖の戯れに笑をこぼし、秋は華山の九折にわかき女も杖に媚き、既翁も、杖つき坂を落馬かな　と頓悟し給ひ、雪見にころばぬちから草とはなりぬ。爰に我かりそめのいたつきより、杖なくして大原のほとゝぎす、姨捨野の月を見んことあたはざれば、生涯杖をもつて予が寶させんに、かの牡丹花老人が牛の角の風流には似氣なければども

元日や杖に黄金の箔置む　山鳥房

平安書肆

橘仙堂
橘業堂　梓

淺草(あさくさ)はうごこ
成美論

小引

もゝすぢりゆがみまがれること葉をつゞけて、見る所おもふところを句につくりいふ。古人いへる事あり、文臺をおろせばふるはうご也と。げにも先達のいひすて書すてたるちりやあくたをあらひうち、すきかへして人にもみたまへといふは、つらあつしとやあはれむべし。

白片の楮先生

四山道人書ぬ

（淺草はうご）

正月十日

淺草は額のうへの御かな　金翠
元結車に小風ふく春　成美
売あさりかげろふくさく蝿出て　心匪
けふより鐘のあたらしき也　空阿
引かぶる夜着の中まで月夜さし　燕石
一こゑ鳥の秋ぞうれしき　翠
眞間の井をはじめて覗く野菊時　美
脊高い人の提る塩もの　匪
朔日の痒かゝえて立まはり　阿
宮も鼓も霜に破るゝ　石
水仙にうす／＼冬のおしつまり　翠
喰ては寐ては片おもひする　美
浦の月帯の細きを引まいて　匪
たゞほつしりと鳴の影ふむ　阿

辨慶の證文見せる秋の宿　美
明たる口を松にふかるゝ　翠
世の花にかくれ養きてありく也　阿
春の旭をぬける柴舟　匪
金翠四句　成美四句　心匪四句
空阿四句　燕石二句

正月十三日

鶯の啼ふるしても柳かな　心匪
旭たけたる梅のかくれ家　空阿
たどん臼海苔とる頃を休むらん　金翠
小刀賣の顏あたらしく　成美
欠て行月のはじめは寒いもの　阿
夜まで青き山のうら枯　匪
菎蒻の鹿嶋は露の汐くさく　美
鴬の小づらのうつる塗笠　寸來
初老をすこし嬉しく打はをり　匪
桐の木ほそく六月が來る　翠

とり／＼に佛を洗ひまいらする　來
飴引のばす契なりけり　阿
うき事につむりはおもく家鴨なく　翠
雨さへふれば物借りにやり　美
山神を窪い處に祭るなり　阿
袴もとらず花にはせこむ　匪
月蛙むせるばかりの夜の体　美
窓の多きに春ぞをかしき　來
心匪四句　空阿四句　金翠三句
成美四句　寸來三句

雨といふものふり初て柳かな　春蟻
春風や波はねかける皷箱　吹石
山吹や煩ふ兒を馬だより　梅夫
陽炎のひとつ／＼や蕗の臺　金翠
ひきよせて見べきかたちや春の山　尋車
青柳とながむるも此二三日　万都

鶯やさむきけしきの茶碗賣　雲乎
春寒や蜆の息を三日のかけ　礎一
雛市は簀の中も雛かな　一蕙
梅が香を飯にかけたる伏家かな　容阿
正月や炬燵ふとんの四ツたゝみ　巢兆
鯉鮒の口までふくや春の風　心匪
朧夜や鶯水に添てなく　松琴
野の梅のちるまで人にをられけり　乙因
さく梅に月の暗のとのさばりぬ　菊明
芽柳も古みにおちる春邊哉　みち彦
うぐひすや白粥さます朝ぼらけ　董坡
紙漉の柳をかぶる眞顔哉　民玉
鶯のうす黒くなるゆふべかな　成美
鳩啼や椿の花に雨が降る　汀鳬
海中に人しづかなりはる霞　寸龍
此ごろや朝すこしづゝ桃の雨　里秾
わか味噌の口きりそめて朧月　寸來
白桃ににぶき人かな夕ながめ　曲阿

諸彦文音の反故ちらへ

夏菊のまざ／＼しくも匂ひけり　騏道
花を見て戻ればせまきわが家哉　菊羽
枯原やさもなき草のあはれ也　露秀
寄生の青きかぎりや冬の雨　知梁
正月の灯ひかるや浦の家　升六
生海鼠／＼尾上の鐘の鑄なる歟　可來
雪ふらでなにかなにはの浦淋し　舊國
五月雨や庵の灯ははやくあれ　羅城
月かげをおつとり卷て衝かな　雲帶

みやぎ野にて

それを見に來れば出たり萩の月　雄淵
淋しさのほだしや月の青芒　長齋
行秌の雨ふり出して物まぎれ　丈左
春の風柳がなくばふくまいぞ　如帛
歸花あたら夕日の人にさす　尋風
雪の笠此まゝ貰ふ人もあれ　柳荘
きらず汁秋も時雨となりにけり　五明

倣巣兆筆意
十三童久次郎画

けふの月おくそこもなき山家哉　希言
香久山にむかへば風もかほるなり　詠歸

大佛殿回祿の時

稲妻や佛やく火の雲にちる　瓦全
澄ものゝかぎりつくせり水の秌　猨左
むかふより長刀鉾や雲のみね　吾長
鳥立て杉のおぼろはやぶれけり　都裘
もれ出る影こそ月のからひなれ　素郷
乙鳥の糞かけてけりむしろ織　祐昌
はつ秋や湖見たきおもひあり　化碩
星崎の月夜にねたしなく水鷄　可董
五月雨の暑くしてけり竹のおく　馬涯
春の日やゆふ月ごろの茶振舞　長翠
草臥し身に打つけて鹿の聲　墨尙
闇の梅人も隔ぬうつゝかな　草蘿

あらし山

山ざくらあまりに咲て水曇る　方廣
さみだれの流れ出たり大井河　自樂

春の霜石切町の夜明かな　書牛
おもひ入ば雪かしましくつむ夜哉　梅價
茶の花になれて小鳥の朝日かな　尺艾
白木槿靜に見ればしづかなり　瓜坊
葉にものゝうつりもゆくを秋の松　八千房
遲櫻竹の小橋もなかりけり　可笛
梅が香を三ッにたゝむや駕籠ぶとん　重厚
夕立にすはや心の深山めく　乙二
人は年露見てゐても暮さるゝ　五什
世を捨にありく櫻の木の間哉　士朗
鹿啼て闇の深みぞしられける　曉桂
戸あくれば雪のおしこむ山根哉　苫庵
春のおもひ庭鶯の閑をよぶ　五來

しばし打絶たる人にあひて

燕虫と菜虫相あへるさくら蔭　冥ゝ
友ほしき日も九ッや松のはな　平角
墻べりやことし花もつ梅一木　魯隱
白雪よにぶき心もふりかくせ　旦ゝ

夜〳〵はしぐれてひくし京の山　一草
雨二日梅のつぼみのうき立ぬ　遲月
なる音の萩よりひくき家居哉　馬印
つらぬいて月の出けり紅葉山　雨塘
風走る萩白〳〵と夜にうつる　玉屑
葦先に雲かゝるなり遠蛙　月居
雪にこけて瓢のあとをわらひけり　杜石
夕あした隣の花やよろこばし　月川
ちればこそ小米の花もおもしろき　莫二
踏出せば春の小口をなく衛　燕石

寛政己未孟春

俳諧鼠道行

成美編

どきどきめくすゝんとゝと

うつてかゝつ。うちかへんはの。

まつまりもけふのやもり。に

もありがたやよのなかのはかりごと。

思ひきりぬる御すまひを

やりはなち。ひきちらし。まては

せんかたなさよ。一夜はゆめのせきとめう

むかし隆達がうつくしかりし聲も、入齒にしわがれ行たるに、次で出るもの江戸梁雲あり。これまた梁のちりをもたてつべきによりて、人もかくあざ名せしさかやっ渠、節はかせにくはしきまゝに、晋子が戯れ書せる物に章句をなして、うたひものさせしよしは、亡父翁のより〳〵にかたられしを、ことにわかき頃に聞おき侍し也。今は渠等の賦が君の手筥の中よりさがし出しとて示さるゝに、何となく昔なつかしくて、此ほど友どちの夜話の序に、いひつらねし附句をあはせて一冊となし、同好の人〳〵におくるよしを、二子の需に應じていさゝか筆を加ふ。

名月や光をちらす粕小鯛　成美
苅萱焚て人を待なり　久藏

秋はこのひとつ車に入ならむ　心非
鳩を追つゝかへるほそみち　車兩
梛の葉の物かくほどもなかり鬼　山阿
しぐれさら〳〵城の米うる　素玩
挑灯もすらりと冬のもやうにて　藏
だまつて居る船のとりかぢ　非
西風にすこし聞ゆる錢の音　兩
佛につかふ卯の花の時　阿
飛彈山を横に宵からかや釣て　玩
鳥しめて來る兄弟のやつ　美
小酒屋に霜はひらりと置はじめ　非
ふる書ものを貰ひつくされ　藏
尺八のひと手とのぞむ萩ちりて　美
身を遠く賣る明がたの月　玩
蜻蛉をあだなりと見る時もあり　藏
かべもたゝみも秋の長谷寺　非
雨あがりきざみ藥を呼あるき　玩
家鴨おひこむ公家のお通り　美

赤幟うれしくもたつ花咲て　非
　鴈かけたる春の門〳〵　臧
懷旧の茶の湯に泣し若菜汁　美
　人のをしへる久米のさら山　兩
丸合羽雀の顏も見ぬ日にて　非
　寒入そめる大鐘のおと　臧
葬のからみし垣を子に讓り　兩
　伊丹池田の青空の月　非
はしたなく鶉の筥をかゝへ行　臧
　苔ばかり見る法然の門　兩
薄ものにどんな思ひをつゝむらん　非
　長い梯子のなかばなる戀　臧
遊ぶ日もとかくはなさぬ篗と笠　兩
　青蛙なく風の不破ごえ　非
忘草消しそとばを立かへて　臧
　軒は豆うる浮世ひそかに　美
らちもなく醫者のまねして欠廻り　非
　小春の空に龜流しやる　臧
盃にお詞かゝるなみだなり　美
　誰がかくれてとほる傘　非
加茂川の水は元和と改まり　兩
　金ひろふたる朝のしづかさ　美
五年ほど哀に秋を煩ひて　臧
　あさまになりし星會の宿　兩
藤豆もたくさむ見へる月の露　非
　崩るゝまゝに炭竈の土　臧
一村へあづけられたる狹(挾)箱　美
　むごくも浪をあびし山伏　非
早蕨のけぶるやうにて花は過　兩
　はるの名殘の町の名をとふ　美
おちちりしから巣に人を呼あつめ　臧
　鯉をもち込神の御供所　兩
狹萩のうへのみぞれの夜明哉　非
　主の草鞋をやわらかにうつ　臧
とりあへず饅頭を燒うらかたに　兩
　若葉つめたき大日の堂　非

ひら〳〵と羽折にうつるおもしろさ　臧
三絃すたるたてばやし領　雨
露時雨藍かき棒を立かけて　非
人ちり〳〵に月をみに出る　臧
籠の虫遠く近くとはなちやり　雨
高観音は木や艸のうへ　非
あず〳〵と半月ばかり遊ぶらん　美
こゝろもなくて舞の家つぐ　玩
打豆を狙の親子にいはゝせむ　臧
枯芦一把はるも待べし　雨
木がくれて夜は經木を流しやり　玩
すむもうれしき志賀の辛崎　美
十ばかり四月の蝶のはつと出て　非
勅のおりたる石をほるなり　臧
女郎花念佛くさく咲みだれ　雨
肌寒くなる新町の朝　玩
袖の香の手拭かぶる月白く　美
鶏をたゝきにそつとたのまれ　非

桃櫻上田百石もちつたへ　臧
山吹さして通る長櫃　雨
明かゝる小庭の下も汐干也　玩
寐つけぬ夜をさま〴〵にねて　美
ひだるさも熊野に近き竹の雨　非
坊主とがめる木戸の明たて　臧
燃る火のちひさく見ゆる午の時　雨
何かにつけて橋がちる　玩
つく〴〵と土人形の淋しくて　臧
夜にいる膳に居るちかづき　非
古狐桶の檻をふみかへし　玩
穂屋の芒の氷るかたはら　雨
元日を八十も見し人が出て　非
鶯かけし弓にひきかつ　臧
梅のちるあたらし御殿拜む也　美
扇にも似て海のひらめく　非
すむ月に皷の妙を打てみせ　雨
小草のはなを荷ふから樽　美

ぬけ寺はとし／＼露にかたぶきて　感
　日はつれなしと霍にちかづく　雨
なまぐさき袂を人にひかれつゝ　非
　籔をたのみに家越してくる　感
木津川の船にのりたき朝もあり　美
　一羽からすをしかるさびしさ　非
鉄錫のむかしにうつる花ざかり　雨
　霞かゝし一筋のみち　執筆

五百崎の雨はまことか夜の花　蓑丁
宇治殿の柱にかけつむすび稲　寥松
根からぬくちからやなくてをる櫻　梅壽
先生といへばはかなし角力取　一瓢
后の月水さへあれば鳥のうく　老鴉
日ぐれにも門はく冬の隣かな　百之
うり茄子くふほどさけや五月雨　泊兮
一休のしの字はいづこ秋のかぜ　夯貨

春風やはしらをめぐる寛永寺　諫圃
みずしらぬやうにならぶや艸の露　道彦
菜の花や家のひとつもつゝむほど　車雨
何かりて待するつれぞ露の門　巣兆
雛の餅つくや霞のそこがくれ　春樹
出てみよやみよとて門の柳ふく　竹里
とりあへず白菊にほふ砧かな　素玩
稲づまも我朝がほにはひり皃　心非
鉢たゝき大内山も霜夜かな　久感
みじかよや橘にほひ月はさす　成美
ひら／＼とはや初蝶のこがくるゝ　季道
喰飲も鵜に出る宵のいそぎ哉　國村
夏草を花さくものとしらざりし　對竹
しづかさのあまりて露と也にけり　凡魯
海苔とりの舟に棹さす童かな　梧非
新年や夢みた顔は誰もせず　よ一
ひと踊すむやさゝげの土ほこり　蕉雨
藪梅やあたりの春を咲なくす　蕣六

下總へかた足かけし案山子哉　一裳
鷄頭のいよ〳〵赤し枯るゝとき　長閑
灯籠に人かけさすや草の家　いと
朝がほや淺草の塔にからませむ　仙骨
鳥の來てくぬぎを春にしたり㒵　角子
はき〳〵と筑波はみへてしをに咲　曲阿
門たてゝ夜にしてしまへ秋の昏　永矢
水のうへに木の葉降けりふりに㒵　不一
若艸の一日ましやうみのおと　周化
ひとつ灯の夏はらへめく礒家哉　甫人
蓋なけとて植し小ぎくかな　詠歸
はるの風帆にたゝまれて暮にけり　魚道
草の香に野を行人の暑さ哉　錦成
ぬれたなりに寐るつかれ鵜の哀かな　松杜
ねてみれば戸口まで來る霞哉　醉月
若草のはてやちひさき海のへり　文蝶
鴨の舞ふ水もちながら梅の花　雲蘿

和哥題忍戀
東叡大王之命
百年莫必泣前魚　縱作貞松意有餘
雨靜深閨又不識　血盟燈下數行書
谷神齋

雀ふむ草のにほひやはつがすみ　素廸
きく咲や田舍哥舞妓が宿につく　雨塘
うつくしやとく人なるゝ春のあめ　太節
かまきりの斧にかゝるな二日月　蒼峨
山吹にながれよりけりから玉子　青岱
萩にでもちられに行む宵の月　惟平
涌里や火を焚たてゝ夕すゞみ　素月
扶持米に雀もつくや彼岸過　李峰
淺草の鐘に宿かれおくれ雁　素英
日にあてゝ着かへる衣や石蕗の宿　藏六
蚤をさへはかで忍ぶや不破の月　杉長
夜あけまでぐあひのわるきふとん哉　一茶
是を見て翌は何せん三日の月　素檗

朝がほやとりつくものも艸の花　若人
蓮の葉に露のあまるや玉祭　梨月
出たさきに日は暮にけり梅もどき　武曰
草の葉にめし喰こぼす寒かな　葛三
おし出してやりたき山や夏の月　かつり
かたつぶりそなたの家もおもげ也　有斐
三日月をみかけて出るや燕引　草鳥
嵐雪が朝がほ見たし冬籠　重行
燒のりをもむ音す也雨の中　百二
おもしろや淋しやひとつなく蛙　梅閒
一村が川くみに出る柳かな　士朗
我に罪あり四月になれば時鳥　竹有
妻や子が植てことしも菊の宿　丘高
月の客雁立をして歸りけり　路白
聞すてにすればふたゝび郭公　文常
ひと聲にやま作る也不如歸　斑車
何の木も氣に入ぬやらみそさゞい　五來
夕陽にひきもどされな跡の雁　蒼虬
門ふたつあればひとつは梅の花　雪雄
鶯の糞にものこるあつさかな　武陵
ちる事はならはぬくれを菊の露　滄洲
行としのさまや一筋芹のはな　奇淵
啼そめし日はわすれ皃さよ鵆　井眉
大空のあづかりものよ雪の松　米彦
春のゝち卯の花白き山家かな　魯隱
年ふれば涙もろいぞとらが雨　長齋
あの人も七種摘か小道來る　星譜
起て出ぬうちや柚釜のわく様子　万和
卯の花やおぼつかなくも蟹の道　竹齋
あはれめよ鬚髭株のきり〴〵す　喜齋
こしらへたけさの寒さか初若な　篤老
はるの日のひそか事也はつ櫻　玄蛙
ひとり蚊屋あまりにはやき夕哉　樗堂
かりの世に心とむれば花すゝき　菊也
かすむには日がみじかいか枯尾花　幽嘯
出るものに見るものにして秋の月　雨考

さびしさの我よりおこる紅葉哉　北岱

縁ありて蛙とりつく經木かな　冥々

木槿こけて葉かゝりの花誘ひ皃　与人

木がらしのこりよとばかり旅寐ふく　乙二

親里へゆく日みじかし女郎花　雄淵

夕がほや蚊になかれても年はよる　巣居

虫の髭雨の柱をたゝくなり　平角

この集のなれるをよろこびて

しる人の名もさま〳〵や百千鳥　諫圃

撰者　心非

車雨

久藏

文化十二乙亥

德萬歳

巣光著

（德萬歲）

寛文之德萬歲者、雛屋親重入道之著處也。亦寛政庚申春三寸造燕市編二賀帖一而倶諷二德萬歲一蒐集二一曲昇平人一者、是卽野店之正月也。不磬

巣兆英親

作者倣二句順一

乙二　里由　長齊　平角　蓮志
双鳥　五什　眠鷺　升六　吳楓
千影　梅夫　大江丸　紫曉　乙因
○蕪川　八風　古吾明　雲帶　臥梅
午心　青花　東踞　一草　井疇
古侪青　可來　方中　波万藻　臺鷺
英里　可都里　吾長　○杜厚　素郷
猿左　李喬　有麥　左阜　文兆
三壽　蜂二　亘茶　葛三　南山

青楓　春蟻　歸童　自樂　五明
東子　○琴臺　竹冠　空阿　益雄
寸來　希言　芳志　心匪　吐牛
國村　三巴　道彥　斗入　巣兆
瓦全　渭虹　素檗　珍羅　○魯隱
重厚　笞菴　廉々　且且　文卿
春鴻　吾周　分宇　路川　柴路
親里　柳荘　莎徑　金翠　凡化
和調　吳山

都八十余人

○成美　完來　呂蛤　猿子　文蘭
范庐　夫山　豆箕　白麻　二童
曉桂　其黑　語竹　如蘭　菊明
○里江　一雨　秋夫　不逮　雨塘
春魯　一蕙　冥々　蛙眠　宜麥
花藍　群人　虎杖　荒河　野遊
雲蘿　蓼翠　燕市　○大呂　兀雨
阿陵　佳笑　佐耕　長翠　車兩

芳中寫之

喜川　宣召　作笠　素十　百露
碩布　喬驪　魯卿　尙達　祐昌
律大　○柳翠　常南　麥宇　路人
彥貫　路竹　榮市　時雨晃　丈左
峯鳥　成雅　瑞馬　素尺　栢翠
野松　蕉雨　春坡　桑蛩　○調々
一董　千車　士朗　莫二　古梁
艸司

都七十余人

荒陽酒肆燕市小夫集之

名寄せの大例

今參の侍の御園に鳴、はたおりを詠て奉るに、青柳のとはじめの句を申出ければ、折にあはずとおもひて諸人わらひをふくみけるに、みどりの糸をよりおきて夏經て秋ははたおりぞ鳴　とつゞけたりければ、いち坐しづまりて、しきりに感じおはしましけるとなん。名もなきものゝ詠メなりとも、首尾全く聞はてずんば、徒にこれを捨べからず。爰に句撰の面々はかるに、かの彥根の事知りの申されけるごとく、連綿たる中に當世家がらの先生達おはすれば、まづ其隔点の坐なみに限かゝりて、其餘の達人に高雅第一の趣向ある事を辨へぬなりけり。是人を愛し道に心入るともがら、殊にはへなき至りならずや。おほむね名は人品の花にして、おのが年の姿かたちにもかゝはらず、或は江淮邊地の草木までも、器をしたひ德を呼續ためしはおほかれど、人のこゝろの種を拾ふ道にとりては、名に愛てのみひとかたに思ひ寄すべきものかは。假そめに我友達のいまだしるしらぬ人をもつて、しづかに其たとへを引に、

長齋・五明は帋衣に綾の火打をとりて、しかも痩かたちなるおのこの、茶の花垣などに物好して住る人達歟。又重厚・大江丸など聞得る時は、恒にも法被に中啓を持て、秋の花野にうかるゝ人品にやとおどろく。柳荘・梅園の類は誰も大金持の別号とおもふなるべし。士朗は髭の美しく、乙二はつぶりの靑き名なりけり。魯隱・猿左は花の盛に

くゝり頭巾着て、自樂は酒を好む人かもしらず。あらかじめ共實を探らずしては、風俗すがたをはかるにさへ百家ことく\く思ひ違ふるよしも侍るめり。小僕ひそかにおもふに、抑句作は集編の本体にして、作者はのちの撰用たるものなり。しからばなかく\に先句作と作者とを引わかちて、心しづかにことく\の句意を感味すべくは、句撰は時にゆずりて初心と手たれの趣向を知る事、おもひく\によき修行ならめや。左もあらば乙因をして醫者歟と推量し、升六を商人とこゝろ得る違ひありとも、素檗・雲帶を山寺のあら法師とはおもふまじければ、つるに可都里を萬葉家とし る的當も侍るべし。ひがごとながら世間おほかた爰にまどひありと聞ぬ。此集また何某大名の著述にもあらず、只く\今參のおとがひながきやつが名薄(簿)のはし書とおもひ給へや。

恐惶謹言

品さだめ

(從二至四)
春雨の空や爰等に塔ほしき
雨ながら暮ても行歟花に鐘
春雨や隣在所を竹の中
就中雨に長者の柳かな
はるの夜はぐすと寐らるれ雨の音
春雨の夜も機織河内かな
はるの雨降を名とせん草の菴
鶯や遠く聞日は丘の雨
かきたれし雨の中より木の芽かな
肩杖や野風にあへる雨あがり
村雨の玉藻をしほる汐干かな
春雨にわりなき竹の姿かな
雨たゝく嶽の花の日暮かな
日はあとに初村雨やけしそよぐ
(從川至長)
庭の松寐て見る雨の四月かな
みじか夜の良何喰ふ窓の雨

朝雨のよきほど動くわか菜哉
五月雨は門に藪蚊のまどひけり
竹の雨降や月夜のかたつぶり
五月雨や樺の生たる鳥の糞
五月雨や何運び來る軒の蜂
鮒釣の笠もかぶらず五月雨
帶賣の雨をかこちぬ青田比
五月雨やあかしの浦は島見へて
五月雨や三日かぞへし枝の梅
夕だちや雀うちこむ竹の中
ゆふ立に面を出しけり細大根
白雨や二町は過ぬうらの山
ゆふ顏や花いつぱいに夜の雨
花芙蓉一日おきに雨のふる
降雨の宿をば貸さず花むくげ
わざくれに山の灯見へて月の雨
有明の見へてあめふる茶舟かな
（從厚至子）
ふる雨の中に成けり荻の聲

秋雨や山もとにある人の文
秋雨に澤蟹ふむな跡の人
埋井に秋の小雨のたまりけり
獨よき釣場を得たり露しぐれ
初しぐれ庭木貰ふて歸りたり
とく歸る人なら寄せじ初しぐれ
初時雨惜さや風がさらひ行
鶯の服あたゝむる時雨かな
葛枯て時雨足らざる穗垣かな
しぐれてはもみぢにしたり往生寺
腰越にいさかひのあり夕しぐれ
楠炭のおこり兼たる時雨哉
槇植てつく／＼時雨聞夜かな
我菴へ時雨とゞきて啼かもめ
宿とればしぐれの舟の通りけり
萱ぶきの門降ぬけるしぐれ哉
馬の尾の振しづまりし時雨哉
（從臺至羅）
黍売の厠つくるや初しぐれ

山風の顔ふきおろすしぐれかな
世の人は松の竹のと時雨かな
水仙の家根の頼みや庵の雨
更る夜や櫚にしみる寒の雨
大宮司の傘さして出るあられ哉
曇る間もなくて霙の降にけり
三日月のまてしばしなきあられかな
小霙に鶯の聲わりなしや
飛鳥野に雉子の入より霙かな
初鰤や片荷に雪車のあら木取
はつ雪や宇治の小茶師の獨釜
初雪や梅の難波のよしあしに
おもひやる竜田の禰宜が雪見かな
雪の花灯ごろのやしろかな
はつ雪や娘眉とる天社口
山里やすこしの朝も雪の門
春を待つ雪の夕や鴈の啼
(從隠至山)
水鳥の一羽下りけり雪の松
佛物をむさぼる雪の起居哉
宮城野ゝ雪をことしも踏にけり
白雪の松山よりぞけぶりたつ
白雪ににぶき心も降かくせ
おしまるゝ雪の中より摘菜かな
まつの葉の針さきにふる春の雪
ちからなや笹の葉垂るゝ春の雪
鶯や今朝の小雪をやり過し
雪解して鳥の跡見ゆ麥の緣
橋の雪わらひはづみて通りけり
ほの〴〵と碇おろすや雪の船
降雪や夜汐の跡の闇まぎれ
鍛治(冶)が火に踏込雪の踵かな
我宿や雪はよごれて日のくるゝ
煤拂や雪にたゝする裸馬
大雪をかゝへて昏る師走かな
松の齢めでたき雪の朝ひらけ

笠やどり

（從華至明）まづひとり旅人通る子日かな
綱引や蠶が黑髮よりあはせ
燕や脊戸は湖水の明はなし
かげろふのほのかに立やにはたづみ
錠明る音は非にこそ江戸の春
正月はつゝまやかなる寒かな
海苔柴に寒さほどけぬ磯邊かな
山人の萬歲ほめて歸りけり
御薪やまとふて代々の松蘿
村中の榎に春の入口かな
春來れば阿武隈川の水長し
丘の月一筆柳見ゆるなり
河柳しかし夜舟は風邪ひかん
腰かけて物喰ふさきの柳かな
三日月に柳見て居る人獨
（從江至市）鳥さしがねらへば動く柳かな

青柳の空に起すや朝がらす
鶯が嚀鬧〳〵華仲ん
うぐひすに小藪かりたき隣かな
うぐひすの脊中撫たくおもふなり
尾長來る杉間の梅の咲にけり
梅が香は見ゆるやうなるにほひ哉
白梅の香に我ならぬ袂かな
梅散るやすこしの酒に醉がしむ
むめ散るやまだ三寸の去年の稻
花見んと群つゝ來ぬぞ梅なりき
傘持が腹さびしがる花見かな
さくらには倦ずも山の日昏かな
山の井や花咲ころを朝ぐもり
假橋に花ものいふて手すり哉
苗代や華に徑も水の泡
牛の子の寐よげに見ゆる菫かな
門守が明りさしけり春の草
（從呂至大）わか草に尋て見ばや鷹の鈴

若艸や大勢出たる客おくり
春風に向ふて酒の醒やすし
洗ふても香のある髪か蝶の來る
三四反耕あとやゆふひばり
雲雀啼洗馬の宿引我を引
夕顔の宿さへ花に替かな
狄若葉小貝拾はゞよき便
ものゝ名をいひあらはさぬ木の芽哉
四阿に燈のとぼるまで接穗かな
おぼろ月雲もかゝらず明にけり
ほの〳〵と三日月見へて藤の花
朝戸出や若葉の外は家ばかり
ほとゝぎすきのふの枝に啼ときく
ゆふ顔の暮戸口に狩螢かな
飛ほたる行〳〵消て仕舞けり
けし咲てにげなきものよ瓦葺
けし散てめうが畠の月夜かな
（従翠至鐵）
世わすれに京の酒のめあやめ賣

手を伸て引や我家の蚊やり草
桐の葉やちいさき庭に夏の月
胡麻売におさるゝ門の凉かな
月のさす所はすゞしどこまでも
風道の見へて凉しき青田かな
澤浮や水行末は田草とり
明をまつこゝろ富らん氷室守
武藏野は未だ青草に秋の月
川合や露ふきむすぶ芦の月
膝たてゝ水音きくやけふの月
夕暮のけしきゆり出す芒かな
又鳥の見へず也けり秋の暮
秋寒やつれなく見ゆる峯の寺
水長しきぬたの奥に礎うつ
朝霧に丸ふ出たる榎かな
水鳥やひと群わかる汐ざかひ
黄昏や風の木の葉のたゞも居ず
（従調至司）
神に備ふ水汲朝のおち葉かな

十月やさびしきものは竹箒
古家も冬の見ものや釣干菜
夕暮や炭こぼしたる門の草
山里は今ぞと咲衆石蕗の花
寒空や眉にかぶさる[illegible]路山
住よしの松は男臘鉢たゝき

建部巣兆、德萬歳の社を撰みて、小工燕市に與ふ。燕市是に糸を張り、かねを定て、爰に槇木の板屋を造り、竹林に高く帘をさゝぐ。宅の大さわづかに蟭螟の巣をいとなむがごとくなれども、裡に俗あり、山臥あり、張笠着たるくすし、鞁さしたるものゝふ、山賤は山柴左右にして櫻をかざし、女は練の帽子かゝはゆくかゝげて、ともに春色を弄ぶ。もしそれかたはら柳巷に牛をたゝく牧童、小船に四ツ手をたるゝ漁翁あらんに、たちまち此肆を見かけて漕よせ來たらば、おなじく黄鳥一聲の味ひをたのしむべし。笠やどり・雨やどり、誰か此闕屋の里に千里の中舍りなしといはんや。

藻交路川頓書

闕屋文臺開

鬼でも御ざれひと擧八十の春　三壽
我もましらか花うつほして　巣兆
旅はまた雪車の早緒に冴かへり　燕市
連衆萬々歳

寛政十二年庚申正月吉辰
東都台嶺下　江川八左衛門壽梓

せき屋(や)でう

巣兆編

誹諧行脚略曆

尾張　立春のゝち、屋しき〳〵の柳みどり立たらば、その氣さきをはづさず、行脚はじめしてよし。正月廿二三日ころ歟。

伊勢　二月つごもり過〻そろ〳〵よし。はだか行脚たりとも、神路山のあらし凌安かるべし。

江戸　三月五日出かはり過をよしとす。かつしかの花も石町のかねも、うらゝかなる時節なり。關屋のさとに宿かす便りもよろずよし。

奧州　彌生すゑの二日比江戸を立て、むろの八島・日光參詣して、夫〻は足早にしら川の關を越すべし。本みや・白石邊にてはいかい隙入とも、松島の月ほとゝぎす便よし。
〇卯月八日あたりには南部の梅も盛なるべし。

總州　兩總ともに汐干をかけて行を亭主の仕合とす。おもひかけぬよきほ句などの浮む時分なり。

甲斐　三月七日八日比より。

大坂　八月中旬〻誹かい熟す。但し大みやうの金借ル比、または炉びらき・口切の時せつ、すべてふさがり、明の方にむかひて兵庫に行事大によし。

出羽　九月晦日を刈上のいわるとて、家〱に餅をつく。此日はたして大雪ふる。秋田の誹かい手早くして、象浮の一見由斷すべからず。

京　未考。

近江　十月十二日粟津に行て冥利を祈るべし。

信洲　善光寺は重陽のきくを摘て後、直さま發足すべし。いのしゝの門堀ころに至りては、たとへ亘燵の上にて酒酌とも寒氣つよかるべし。○飯田は九月まつりの頃別てよし。○諏訪の氷は愛らしくとも、松本の師走心なく行べからず。

播磨　年中さはりなし。

右旅暦は年ゝの行脚ニ考置たる所を大略しるす。然れども主客來往の出違ひ、親疎の差別、猶また人のこゝろの花ならぬ時節も侍るべし。上段の行脚、風流の足もとをしるを以て全く功者とす。

旅窓春興

秋香菴　巣光

高砂に
親の書もあり
筆はじめ

なにはにて
柿壺や奥に老木の梅の花

句順任先例

野も山も梅に薫を初けり　八十二翁三壽

菜の花に錢買かねる小粒哉　南山

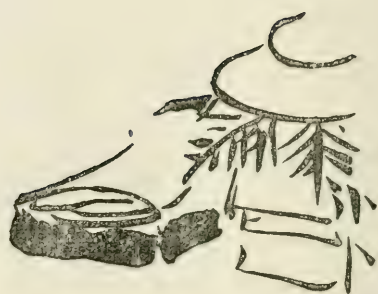
約速(束)の長芋とゞく子日かな　燕市

米臼に山吹かゝるながれかな　里江

春の雨花をわすれぬ思ひせり　三巴

咲初し日をこそしらね松の花　李喬

鳫がねのわかれに菊の二葉哉　青花

山深き心や杼におぼろ月　柳翠

南極星の

杣が家も油灯すや松の内　莚志

啼止しかはづにしのぶ心かな　有鄙

柳見て舟を揚れば梅寒し　雷吼

能ほどに酔て出れば柳かな　野遊

夕柳欝とうしくもなかりけり　すみ

うぐひすも手習をして初音哉　登志

籥かけのいづ地行らん夕がすみ　桑蛾

鶯に村山伏の門出かな　二童

山里や梅に見返す家かゝり　東霍

遊ぶ事知つて雲雀の鳴空か　東滄

居ごゝろのよしや春邊の砂の上　一兩

茶びたしに友呼姥が春日哉　千車

椋の木の朽葉積や鳴田螺　親里

年ゝの代句もひさし門の松　荒河

春の霜笹根の水に分れたり　五周

釣の竿鯉にとられし柳かな　豆箕

闘の戸や未だ明ぬのに巣立鳥　宜召

こゝろ永く牛放たる堇かな　井[illegible]

柿壺画

しと〳〵と合歡の芽をふく小雨哉　語竹

蔦や風に裂たる柿ころも　青楓

雉子啼て羽織着にけり坊が妻　巨茶

猶そだて鉢木の松の若みどり　益雄

蔦やよき事積し門にさぞ　不逮

調布の水に鰭ふる小鮎かな　阿陵

砂あびる鳥を遊すあそびかな　支山

白梅に磨く茶釜の光かな　莎徑

雪汁のとろひ(氐)屁や落椿　有麥

かきのもとゝいふは
一社の自号也
哥に
老松か
丹波の風か
すゝにまさて
梅か香咲かす
此やとそるなり
在別墅曾根崎北郊
寛政中草創

春雨に蠣売配る伏家かな　和水

筆とれば鶴も消行霞かな　路山

鶯や未だ春馴ぬ艸の色　蘭秀

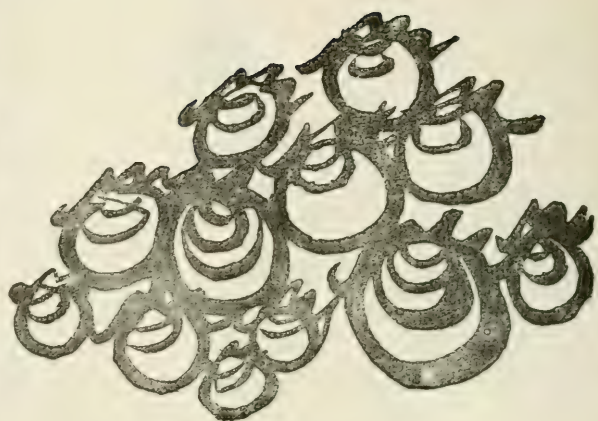
梅が香に鶯かよひけり二三日　雙卿

指す陰を待たぬ日もなし梅の花　雫山

松柳初三日月の門面かな　助友

きじ啼や月より明て小松山　露月

能き男日暮に來たり梅の宿　花曉

朧夜や歸戸ひかず人の行　雲蓋

撓れて鳥　逃たる柳かな　知龍

陽炎や炙等せはしき水車　楚明

夕がすみ海の底なる鐘の聲　閑鷗

淡雪や野中の清水音のある　山翠

雨雲の二夜こしけり初蛙　山樂

川上に舟漕音やおぼろ月　柳川

下戸ならぬ爺こそ能けれ月と花　棠市

從是東奥之連

ぬるみあふて石の淡吹入江かな　八風

金華

山畑やあらはに出て啼蛙　梅卿

近道の山越かねる雲雀哉　柴斎

夕晴や野に鳴きゞ子山の雉子　梨同

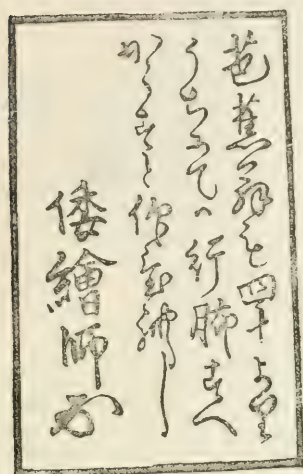
春の雪門田の水の青きかな　八虫

春の雪箒うとおもふ隙もなし　硯柳

玉柳さして宮守門邊かな　魯管

葛城や霞の中の朝秡　時雨晁

歸る鴈風さへ吹かで哀なり　彦貫

青柳のゆかしき閻のそぶり哉　尚逸

寐時分や霞ながらに山の月　英里

雲國の社中未だ飛脚の來らざるは略す。

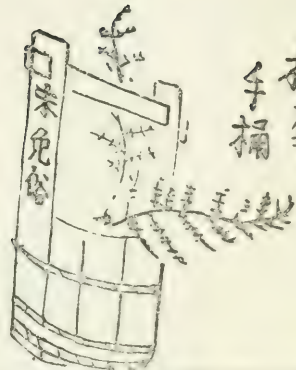
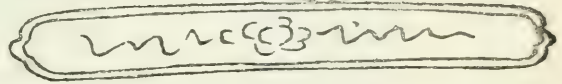
例年定客

松寒き眞砂の濱や春の風　臥梅

おもふ顔のこは夢ならず朧月　東子

夕空のその移りして柳かな　故六

松かぜは松に戻りて春の海　湖水

折ふしに出ては酒のむ春の艸　和調

忠岑のあり明ならず梅の花　春蟻

春の水春のさゞ浪いづこまで　完來

結び昆布春のもの迚解安き　寥松

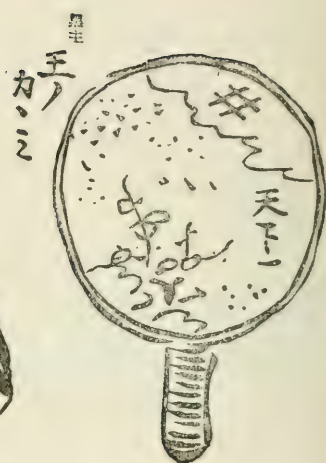
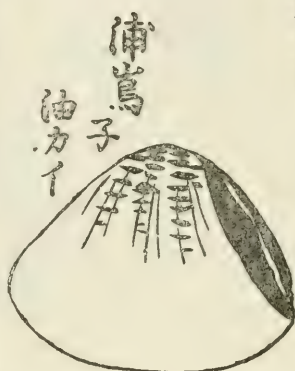
尺八のけい古はじめん梨子の花　寸來

柳ほど春なるものはなかりけり　梅夫

いつの年も月夜なり兒わかな摘　はまも

鶴龜のうぐひす聞て居に兒　道彥

居ねぶりのうちも梅咲日なた哉　成美

鳥追ひが寐せてはおかぬ門の春　共堂

新年風交　兵庫

鶯やちらと旭のおよび越し　秋湖

正月は佛まうでや須磨の蜑　五齢

暗の梅は梅さくたより哉　和田柄

つか／＼と門に日のさすわかな哉　乙村

梅が香に暮れば月の戸口哉　古陵

大和路や馬の上吹春の風　文海

日暮れば又春風の垣根哉　邦居

鶯を面白がらす流かな　蓬雨

萬歳の覗て通る野井戸哉　子龍

春の風夜明の松を出る也　呉來

柳より小さき不二の日和哉　芝桂

在京

鶯の聲の下なり智音院　桐栖

ぬる蝶にさはりさはらで蝶飛ぬ　一草

明石

夜の明る松見て居れば霞けり　桃下

蜑の家に立こむ梅のあらし哉　野泉

今朝見れば朝のもの也門柳　南汀

春雨におもふ事なき寐覺かな　春省

青柳や加茂の川蓼おもはるゝ　蝸國

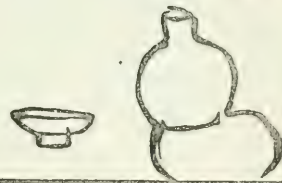
魚崎

白梅の暮ひや〳〵とにほひけり　洸洲

喰ものも皆はるさめの匂ひ哉　素明

初藥師白魚賣も出るなり　淡路 青岐

高砂

鶯の啼もののからに雨くるゝ　三草 文山

松かぜに梅が香くもる野中哉　左龍

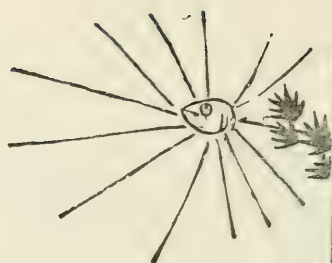
その蛙やめて奚より啼かはづ　金磯

初花に貞柳訪へば酒の中　李冠

正月や雀の馴るゝ大廣間　沈月

三日月に獨り歩行や春の艸　雨蓬

夜ややみや春哉村の梅の花　布舟

春哉村は當國にあり。徴　素雲の中にきゝ子のおとづるゝや、實に春哉と古人嘆美のこと葉ありしより、かくは名づけ侍ること也。昨なる哉集兆、此たび

かしこにまかりて、そこ等の人々さ面なあはせ風交萬歳又萬々歳。

柿壺亭主方

光琳もかうながめてや梅の月　長齋

雲は皆梅にすがりし夜明哉　瑞馬

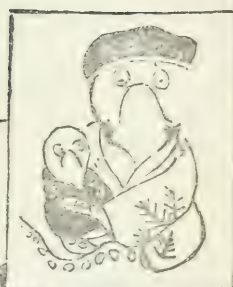
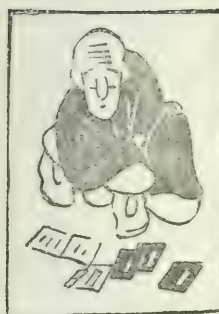
脊戸門に月が指なり梅の花　自樂

月となる戸口や梅のやたら散　國瑞

片さとの春を見よとよ梅林　有中

窓明て見せばやあたら梅が畑　遲竹

香にしるし潮打土手の梅の花　魯堂

臨時客

須磨同行

蛋の家は師走もしらぬ月夜哉　岳輅

青柳にそろ〳〵と夜は移りけり　方明

梢から春は嬉しや藪の梅　莫二

世に住めば灰吹青し梅の花　瓜坊

山に居れば山鳥來啼霞かな　稲丸

春雨や山鳥の尾に暮かねる　半輪

山ざとや隣をつなぐ梅の花　浅生尼

窓しら〳〵瓶の梅が香春をはく　二柳

朝な〳〵松の葉青しはるのゆき　左蘭

朝夕の春になりたる霞かな　石兮

朔日のひさしき世より春の空　八千

年徳の神は此家に居つゞけ給ふ

　これは友國が句なるよし、

　　何菜の中居が中。

瓢箪を西に出るやわかな賣　兎江

わかな野やそこの男は牛の爲　月居

ふたり出みたり出つゝわか菜摘　奇淵

きのふ見し鶯ならん初音哉　松菊

松かぜは吹ものにして春のかぜ　斗入

梅の花正月おゝきところかな　升六

はる雨の氣色を黑む畑かな　馬印

我に嬉し八十三の今朝の春　大江丸

連面の外、隱者・福者又は智惠ある

友達の句もあるべし。猶永日の集

中に加ふべきもの也。

菫野や見かけて遠き山一ツ　松風菴路川

風花も降う氣しきの柳かな　霍擘居國村

在于時享和二年壬戌正月吉辰秋香菴主
大坂柿壺客中就需飛校畢

壽梓

平安　勝田芦涯
東都　江川八左衛門

京御幸町錦小路上ル
書林　勝田喜右衛門

水薦苅（みすゞかり）

上・下

柳莊編

れば、やがて國人の句のさはなりといふならむかし。かくこたび集し物のいはれしるせよと、遙に都までけしきばむに、おのれ若きより其寺にまうでし事三度、はじめは前の撰者元水房に宿りしこし方の因み、まして佛に奉る縁を思へば、耻となるもうちわすれて、言こしぬるまゝに、

蝶夢幻阿彌陀佛

菴に筆をとる。

（水薦苅 上）

そもや、この日の本にうまれと生れし人は、後世の願の有もなきも、佛と申せば、信濃の善光寺におはすと覺、月と申せば、風雅に心の有もなきも、更科山こそよけれとしれり。さる國なれば春淺き朝より、木曾路のさかしきに殘れる雪をふみ分て御佛にぬかづき、秋ふかきゆふべにも、桔梗原の露にぬれながら、名月をながむる人引もきらず。をのづから其言草のしげれるを、過し延享の比、元水法師といふ僧つかねて、とはず草といふ集をあめり。されど其頃までは其國に貞德老人の俳諧のみにて、靈佛に法樂し、名山に吟詠するこゝろを得ず。寛政の今の時は、芭蕉翁の俳諧行れて心を先にし、詞をもとめずなりぬれば、古き集は見るべくもなしと、何がし柳莊といふ人、あらたに一ツの集を作りて水薦苅と題す。こは萬葉のみぐさかる信濃といふを、近き世には水すゞと訓し、水篶の文字とす。なべて篠の子の事にして、其國に多き物な

善光寺奉納

善光り寺の月見る今宵かな　宗祇
月こよひ法の花ちる光りかな　宗鑑
月影や四門四しうに只ひとつ　芭蕉
金魂けきやうしたまひ善光りある寺櫻　陸奥 三千風

洛東眞如堂にして善光寺如來開帳の時

涼しくも野山にみつる念佛哉　洛陽 去來
遠からぬこの極樂やほとゝぎす　美濃 支考
冬がれて臼も撞木も殘けり　伊勢 凉菟
朝がほやみな同音に口をあく　東武 麥阿
参らねばならぬ國なり寒うても　伊勢 曾木
山の眠り覺すや堂の朝御帳　美濃 盧元
見わたせば蓮臺廣き花野かな　尾張 露川
莊嚴の飾りや秋の野も山も　、五條坊
夢かとよ笙歌遙にねりひばり　洛陽 雲皷
風薫る爰こそ御手のつな渡し　伊賀 芦船
よし切の目より覺けり蓮の花　尾張 呉人

芦わけて千曲に凉し舟後光　浪華 歸白
まよはじな庭にも法のをしへ草　東都 三朝
御佛の臼見付たりことし米　、梅如
ほろと泪伊勢の內外や難波江や　、知大
何品へ夏を咲のぼる葵かな　肥前 一路坊
其數にうかみ出たる根芹かな　當國 破水
南して薫るや御手の船わたし　尾張 東鷲
凉しさや爰ぞ淨土のはいり口　越後 無端
臼になる木も尊しな蟬の聲　、都翁
むく起のこゝろ凉しや堂參り　、慈竹
善光の御影や白き藤ばかま　尾張 共考
尊さや七卷まとふ蓮の隈　上野 潭水
人間で居て面白き蓮の花　豐後 谷水
たのませる松の他力や藤の花　遠江 文波
有明や堂を高根に居り替り　越中 倚彥
外になし北も南も月の門　、麻父
ゆふ顔の窓にもかりの臼坐哉　當寺古人 元水
明方や一時に蚊のむせぶ聲　洛陽 蝶夢

朝どの法や旅寢の一大事　、几董
蓮の實やこゝを去ん事遠からず　武藏 柳几
十方十夜御佛の前さりがたし　尾張 曉臺
よごれたる我にも法の光りかな　加賀 闌更
霧にさへむせび安きを朝御帳　上野 一音
あら涼し四門ひらけて朝御帳　加賀 佛仙
夜念佛や律の聲すむ善光寺　伊勢 宗居
菜のはなの色や佛の御國かも　筑前 梅珠

善光寺如來東武にて開帳の時

あさがほの露こそ願へ善の綱　東都 完來
蚊の聲もともにたのもし朝念佛　、成美
目に遠く花ふらせけり御戸開　洛陽 重厚
浮草の華に花ふる念佛かな　安藝 五鹿

父母の位牌を負ふて此御寺に詣す

なき親に拜ますや秋の朝御帳　近江 馬瓢

○

心なき花も紅葉もよしみつ寺
もらさじの誓ひはよしや善光寺

右二章は國ぶりの夢揭歌なり。言傳ふ、大磯の虎といふ遊女の作なりと。此とら女尼となりて善光寺に赴くと東鑑に見えたり、其古跡今に存す。

春之部

元日に田毎の日こそ戀しけれ　翁

信州の何がしに元日戸をたゝかれて

福わらに田ごの春ぞおもはるゝ　伊勢 乙山
はつ日さす疊をあゆむ雀かな　猿左
蓬萊や幾國よせし物の數　五什
越年の乞食さり鬼梅の花　文光
さえかへり〳〵咲野梅かな　路人
梅開や業なき人のぬる巨燵　信濃 止靜

畫讚

紅梅や櫻は帶をせぬ風情　古人 逸洞
こう梅や夜の車のかた違　守一

○

信濃路の雪や彌生の忘れ梅　浪花 二柳
細川や月に消行雪の音　洞芝
あわ雪の降もかくさず水の月　五什

淡〻の句合に

野火の影うすらぐ五夜の小窓哉　古人 猿山
佐渡雲の雨にもならず春の海　几半

川中嶋懐古

一備あれにも山のさくらかな　涼莵

筑摩河

ちくま河春ゆく水や鮫の髓　東都 共角
種ひたし春の千曲をまた濁し　鶏山

淺間山

夕山やけぶりのするの春の雲　東都 長翠
山の端や煙の中に啼ひばり　近江 去河
春雨やこゝろに煙る淺間山　重厚
桐の實の雪にも落ず春の雨　呂吹

春の比諏訪の御社に詣けるに、御食所とみゆる所に、鹿の頭をならべて備ふ。八ツの耳ふりたてゝさいふがごとく、見もなれぬ御食すさまじ。

贄の鹿背に霜ふりし夢やみし　洛陽 瓦全
聲になく秋より悲し鹿の顔　日向 可笛
湖や氷のうへに春の雨　東武 完來
春雨やあぶらうきたる掌　兎月

〇

木曾の情雪や生ぬく春の草　翁

木曾深阪といふ所にて

下もえてあつもの富る山家哉　浪華 旧國
そよ吹やすみれ〳〵の花の陰　猿左

元祿午の春、洛の新住吉にて集會の時、鞭石・怒子兩子へ答ふ。

行先も結ばず花のむらつゞき　逸洞
余所ながら思ひしまゝの櫻哉　路人
夕ざくら寢に來る神も有氣也　柳莊
春寒き人參園や遲ざくら　共六

年々此山中の春を尋て

我顔を花もあくらむ七十度　洞芝

一させいせの園友、此地に杖を曳
し時附合に

牛ひきつれて矢脊の芝賣　逸洞
子供衆よ花が咲たらござりませ　凉莵

此句こそやうなる句作りなりと、逸洞等言
あえりけるに、凉莵の曰、予は天晴附たり
と思へども、いたし直すべしとて替句を出
しけるが、其後外の附合のうちへ此句を出
されしなり。日を經て思ふに、かゝる輕みも
新百韻の体なり。壯年の間はかやうの麁忽
まゝありと、おり／＼逸洞の雜談也。

暮の花一休づゝ遠ざかり　文兆

雨晴や花に淺黄の風わたる　守一

うか／＼といつ登りしぞ春の月　路人

古ル戀に風与逢ふ春の月夜哉　五什

善光寺御堂戒檀めぐりといふ事を

彼の道もかふかと悲し朧月　蝶夢

犬になる人もありとや朧の夜　豊後 菊男

炭屑に足袋よごしける朧月　柳莊

〇

さくら咲ひとへに彌陀のひがむ哉　支考

かう／＼し戸隱の花松檜木　凉莵

信濃路は雪間を彼岸參り哉　尾張 也有

堪かねて窓さく音や猫の戀　洞芝

こがれつゝ猫ならぬ音を鳴夜哉　文兆

諏訪湖春望

鴨の巣や不二の上こぐ諏訪の海　素堂

湖解て富士の白雪影遠し　但馬 木姿

御渡りも過てや湖に鳥の聲　梅珠

乙鳥は土で家する木曾路哉　伊賀 猿雖

つげの宿にて

猫の蚤に前髮こぼす端居哉　猿山

寢ぐるしや春の夜風の戸のさはり　丶

この比の茶に價あり春の風　呂吹

たんぼゝや雪解の泥を帶ながら　洞芝

諏訪法樂

青柳や春の宮居の手向艸　宗祇

春の野に折ちらしたる柳かな　五什

留守勝にくらす庵の柳かな　路人

猿山子の誹勇を示す

もろ〳〵の心柳にまかすべし　凉莵

掃ども塵を落す鳥の巣　猿山

春の門犬も長閑に耳たれて　逸洞

かるひ旅出のうらやましけれ　未格

兀山に少し宿卩の月の影　招山

萩吹風に今朝は身にしむ　元水

○

善光寺のかたほとりに、大磯の傀儡虎御前が跡を隠せし庵有

悲しさの石に答て夕きゞす　重厚

山寺の鳩の餌喰ふ雉子かな　呂吹

予七十、猿山と後會何れの年ともしらず、さればこそ

程百里おもひを馳ッ雁の雲　洛陽　方山

かへる雁田ごとの月の曇る夜に　蕪村

連翹や平家うなりて只獨　守一

春くれむ〳〵とて鳩の啼　猿左

夏之部

木曾川のほとりにて

流木や篝火の上にほとゝぎす　尾張　丈艸

富士浅間中にかけはし子規　東都　隣郭

晩山を尋て

ゆふ暮の山ほとゝぎすなけ聞ふ　猿山

猿山に答ふ

ほとゝぎす誰とても皆三ッの猿　浪花　晩山

鳴聲やほぞんかけ橋ほとゝ木曾　洛陽　重賴

願かけがねせり戸隠山の時鳥　三千風

木曾峠をこえるに、母のうせしむかしを思ひ出て

はゝ木々の影は見ださず夏木立　伊勢 班鳩

薗原山を見わたして古歌のこゝろを

山櫻ありとは見へて風にほふ　備中 李山

途中乙由と別る

相互すつるや旅の不如歸　逸洞

貞徳翁の語り玉ひけるは、閨にて時鳥の初音を聞ば死るよし古來言傳侍る。其禍をまぬかるゝは犬の聲を白まなぶと、唐の文にも見え侍るよし。

鵑文字もむべかの犬の聲　胤及

予は此事まぬかるゝに似たり

ほとゝぎす闇のとぼししめす時　柳莊

雨乞のしるし有夜やほとゝぎす　呂吹

籾子蒔ていく日になりぬ子規　馬十

更科の月をどふ鳴ほとゝぎす　支考

招山を訪ふ

あつめて見せん卯の花の雪　古人 招山

此脇を聞て、支考は宿をもとはず去りしとなむ。

鬼つらの方にて句合、都の富士

卯の花の雪や都のふじ詣　猿山

人も來ず卯の花月夜更に鬼　僧 呉笠

木曾路にて

山吹も巴もいづる田植かな　近江 許六

寢覺床 二句

夏山は寢ざめの枕屏風哉　浪花 宗因

鶯の寢ざめや四月五月まで　支考

ゆふ立に燒石涼し淺間山　東都 素堂

郭公けぶりときえて淺間山　上野 素輪

雲の峰と見しも淺間の煙かな　五什

ふしたる龍の風を起し雨を洒ぎて、春の山花の朝をわかち、ゆふべを尋て淵底の玉を見るものは、信府の誹士猿山といふ、涙の字を以て句を買ふ一道の鮫人、言の葉の自由、欲するに随ふことを稱嘆して

此道の鼻は捨るな夏の月　浪華 來山

ゆふ月に夏忘れ草咲に鳬　猿左
かけむすぶ水引草の夕かな　逸洞
なつ草や雲をたよりに岩のうへ　〻

須磨寺にて

今もそのかね黑に咲苔の花　猿山

達磨寺

浮艸や根はあるでなし無きでなし　〻
梅干や天の香久山興善寺　〻
尻ゴザのきれてうき日を蓮の花　〻

○

うき人の旅にもならへ木曾の蠅　翁
信濃路や蠅にすはるゝ痩法師　許六

信濃へ參らるゝ人、暇乞せらるゝ餞に

梁の蠅をおくらむ馬のうへ　其角

東都なたちし時

別路や楊柳を折る蠅拂　古人 巴鷗
かけ橋や一方は山ほとゝぎす　凉菟

棧や蠅も居直る笠のうへ　東都 鳥醉
靑蠅のまだ死ぬかとせむる也　路人

老懷 二首 晝はものうく夜は淋し

痩脛は蚊も格別にこたへけり　〻
血をはらむ蚊の腹憎き行衞哉　猿左
きぬ〳〵や雨を見て居る蚊やのうち　五什
ひらかむと葩うごく牡丹かな　几半

戸隱の山坊に宿す

なつそばや辛味のぬけぬ瀧の音　逸洞

枕欒を訪ふ

夏芦のことの葉いかにみほつくし　猿山
一きはましら風薫るやま　浪花 枕欒
すゞしさや橋の下行夕がらす　守一
闇を行水音凉し寺の裏　夏玨
すゞしさやかつみもて結ふ髻が髮　希言

伊丹の鬼つらと猿山と文通はたび〳〵なれども、知る人にはあらざりける。此度は登るべしといひおくりて、其比先京へのぼり、浪花の

來山が方に居り、夫より大和めぐりせんとて、安部の文珠へ詣でける途中にて、鬼つらと互に行違けるに、おにつらふりかへり見て、爾は信濃の猿にてなきやと尋けるに、猿山もふりかへりさまに、左右の指二本を額におしあて、爾は伊丹の是なるべしとて互にうちわらひ、時うつるまで語りけるとなり。其時

あるべきはなく我に角あり蝸牛　猿山

角引てまろきへ戻れかたつぶり　猿左

けさまでは水雞をしらじ夜もすがら　洞芝

題扇　許六を送る

木曾路とや涼しき味をしられたり　其角

千鳥たつ夏の氣色や諏訪の湖　東都 奚魚

木曾の谷柳さくらにほとゝぎす　近江 月川

五月雨にかゝるや木曾の半駄賃　許六

木曾川の材に待得たり五月雨　東都 山川

さみだれや砂ふみあたる風呂の底　文兆

石灰の俵裂けり五月雨　反古

善光寺にて、みる喰ける尼に

海松ふさやかゝれとてしも寺の尼　東都 嵐雪

足もとに影ほうししむ暑哉　古人 元水

六月や石に照り附鳥の糞　五什

むしかゝる雲鳴さくや蟬の聲　古人 洞水

門立の人にかくるゝ團扇哉　文兆

うつてこい河中嶋の澁團扇　東都 椎莛

ゆふ立よする冠着の嶺　巴鷗

右、市川海老藏東都え歸りて後、善光寺土產戒壇草履といふ狂言を作り、舞臺にて此附合の句を詞にあらはせしといふ。

當國

ふかき谷あさくなりけり夏木立　玄仍

なつ木立いとゞ木曾路の空せまし　蝶夢

法隆寺にして、しなのゝ猿山に別れて伊丹え歸る時

清水かけ鬼のぬけがら見にござれ　攝津 鬼貫

夏川の音に宿かる木曾路哉　尾張 重五
桟や我らはかろきなつごろも　近江 五來
なつ河や石傳ひするゆふがらす　二葉
あら川や鶺の脊を越る水の月　柳荘
風落て流れんとする清水かな　路人
きゞす鳴や片山陰のむかし道　古言
窓の火や砵を隣の藪の中　兎柳軒 逸洞

（みすゞかり下）

姨捨山

あひにあひぬ姨捨山に秋の月　宗祇

同じ所にて

雲霧を分しも月の山路かな　、
誰も見よ名高き月は雲もなし　宗養

越人を供して木曾路の月見しころ　留別

おくられつおくりつはては木曾の秋　芭蕉

姨捨山

俤や姨ひとり泣く月の友　、
十六宵もまだ更科の郡かな　、

更科にては翁の句をのみ吟じて

霧はれて桟は目もふさがれず　尾張 越人

さらしなに行人〳〵にむかひて

更科の月は二人に見られけり　荷兮

越人の旅立けると聞て、京よりまうし遣す

月に行脇ざしつめよ馬の上　野水
どふ見たら姨捨山の月を月　三千風
さらしなや馬の恩しる秋の月　洛陽 言水
姨石の肌目冷しやけふの月　、方山
雪の犬箒に啼や姨捨やま　東都 四友
佛だに姨捨山や五月闇　支考
さらしなや曇るといふは花の事　凉菟

凉菟老人と姨捨山を尋る

おばすての山の匂や獨活わらび　雲沈
姨捨や子捨は得來じ月の前　肥前 魯町
月の鏡おばすてにあらすさまじや　浪花 才麿
雨の月餘國の隈のなきよりも　洛陽 友元
さらしなや目ざむる夏の月にさへ　、鞭石
月夜よし田毎の數を小盞　、如泉
さらしなや田毎の星の化ごゝろ　美濃 木因
更科はまだ手も付ず風薫る　洛陽 雲鼓

十日路のてんほや月の照り曇り　、晩山
さらしなの月四角にもなかり鳧　東都 不角
月の雲鳥の啼は何郡　加賀 萬子
踏あらす我や田毎の稲すゞめ　共考
鎌いるゝ田ごとの晝の光りかな　五條坊
姨すてやせめては秋の日の光り　麥阿
姨すてや伯父は田毎の苗配り　鳥醉
笠の影田ごとに寒し時雨月　東都 三朝
姨捨やしぐれも常の山ならず　伊勢 圃室
聞たより見てこそ月の更科や　慈竹
雲に乘る我か田ごとの月の照り　露川
名月や冠着山口明からす　文波
夏の月たゞ短夜ぞ泣れける　越前 梨一
姨捨てまた連て來て後の月　也有
捨てなき我なればこそ月こよひ　伊賀 浮流
月やあらぬ蔦の錦を姨が石　女僧 錦工
影ひとり頭陀に拾ふて田毎哉　肥前 由也
身は一人影や田ごとの亭主ぶり　美濃 芳麻

見減して戻すな月は姨が友　倚彦
姨捨やあゝ石となり月となり　伊勢 麻父
おばすてやあだにかなしき夜半の月　伊勢 樗良
何告ておばすて山ぞ行々子　東都 凉岱
月やいづこ姨捨めぐる雲早し　、白雄
ひとつづゝ月見た痩を田毎哉　、蓼太
よしや今姨捨るとも春の山　蝶夢
ゆふ暮や田ごとの水に啼蛙　備前 子坤

九月盡の日姨捨に至る

月の夜を泣つくしてやはての秋　几董
姥すてやひとり老女の月に泣　丹後 無評
おばすてや月はむかしのまゝに照る　五來
夜すがらや石に置身も月の爲　闌更
鏡臺に横顔見たり后の月　東都 龜成
我身をば麓に捨む雨の月　、金羅
名月や田ごとにどれを拾ふぞ　、蝶々坊
片われや有明山に霞む影　備後 古聲
更科や月は千曲の瀬々にまで　一晉
姨すてやかんこ鳥春の住處　伊勢 仲宣
月こよひ腹に入みたる信濃そば　洛陽 紫曉
更しなや月が晴たら寒かろう　上野 女 一紅
山も川もけふ更科や月の書　越中 可久
姨捨や雲置まどふ雁の聲　東都 涓水
姨すてやたゞ殘されて月霞む　近江 曾秋

凉菟が更科へ案内はしながら

さらしなの月のどこらか國のはて　古人 未格
更科や何から暮て明る夜ぞ　、五明

秋の部

木曾路にて

雲水を色に秋立深山かな　宗祇
月に眼さらしな川の文月哉　貞德

はつ秋の比より病に臥て

何となふ今朝は荻なり芒なり　逸洞
目なれたる山に秋立入日かな　几半

はつ秋の比、信濃ゝ猿山を導てみ
つの浦邊にあそぶ

片桶は月に浮けり塩乙女　浪華淡々

みつの浦の戻りに、淡々とある樓
に登る

長兵衛に羽かれ星の迎駕籠　猿山

出雲の可圓子に逢ふて

三条の橋や二人が天の川　、

ほし合やすげなく明て笹の露　五什

〇

中に居る女や巴木曾をどり　洛陽定重

盆中はうちには今井木曾躍　伯耆常成

草むらに迎火青し人の顔　几半

夜も少し寝あまりぬれど暑哉　古人芦錐

雲の根もうごかぬ秋のあつさ哉　、東伯

秌もはや三十日に近き高燈籠　とみ女

更科記行に

身にしみて大根からし秌の風　翁

人喰ふ蚊の口裂て秋のかぜ　二葉

輕井澤にて

ゆふ日照るくゞつの顔や秋の風　柳莊

うす井權現にて

稲づまにけしからぬ神子の目ざしやな　嵐雪

いなづまに浮桶見ゆる波間哉　共六

信濃の元水、予が門に入る。是迄
孤立の風流家なるよし

山萩に添竹はなし去ながら　言水

萩ふくや燃る淺間の荒殘り　東都太祇

木曾路行ていざ年よらむ秋獨り　蕪村

寂さのその色見たり木曾の秋　東都宗讃

伊賀の芦船を送る

秌涼とゞめて別の夜寒かな　逸洞

かけはしや先おもひ出馬むかへ　翁

駒ひきの木曾や出らむ三ヶの月　去來

三ヶ月や越のあら波たつ上に　猿左

旅だつ空の名殘をおしみて

峯に雲を明日こゆべきか十日月　東武 堤亭
うしろ吹るゝ風のほと鳴　猿山
枝柿に腥ものをむすばれて　故一
根からの垣をつくろはれけり　正與
孝行と覺へず人にうたがはれ　青山
雨の机のかりそめの筆　執筆

右は猿山が東都出立の時の吟也。

まつ宵や歩みよせたる一重山　麻父
待宵や夜のへだての一重山　長翠
夕月に笛吹峠こへにけり　宗讃
山杉をはなれて月の嵐かな　守一

更科記行に、
いでや月のあるじに酒振まはむさいへば、盃もち出たり。よのつねよりも一めぐり大きに見えて、ふつゝかなる蒔繪をしたり。都の人はかゝる物は風情なしとて手にもふれざりけるに、思ひもかけぬ興に入て、𤭖碗玉巵のこゝちせるも所がらなり。

あの中に蒔繪書たし宿の月　翁
さらしなやみよさの月見雲もなし　越人
名月や淺間が岳も壽なり　許六
月を語れ越路の小者木曾の下女　其角
明月や更科よりのとまり客　美濃 凉葉

家に三老女といふ事あり、亡父將監が祕して傳へ侍るを思ひ出て
姨捨を闇にのぼるやけふの月　東武 沾圃
名月や兎の渡る諏方（訪）のうみ　蕪村

此地の人〳〵に對す
姨捨や仕なれてこそ月の友　楞良

逸洞病中の物がたりに、吾死になん〳〵とすれども、更に病苦もなくまた餘念もなし。唯うつら〳〵と山水に遊ぶ心ばへ、面白き事なり。是は七十年餘俳諧にあそびし德なるべしと云々。

辭世

埋木も花咲にけりけふの月　逸洞
名月や遙にひくき宵の山　文兆

○

木曾の痩もまだ直らぬに後の月　翁
岐岨の栃うきよの人の土産哉　丶
膝がしらつめたき木曾のね覺かな　鬼貫

洛の友元を送る
やゝ寒しにげ給ふのも道理なり　逸洞
鷄聞て子をかきよする夜寒哉　元水
炋寒や眞綿ひき居る夜の音　夏經

夜座似清溪
近う啼ケ今火とほすぞきり〴〵す　洞芝
片鳴に啼けり夜半の蟋蟀　路人

二川樓に更科の戻りを訪ふ
居ごゝろもまた更科の稲むしろ　几董
脱ばぞ嬉し月の旅がさ　洞芝

信濃　催馬樂
君來ずばね粉にせんしなのゝ　嵐雪
眞そばはつまそば

名月は蕎麥の花にて明にけり　近江 李山
それそこに更科河やそばの花　伊勢 その女
いざ宵やさらしな河を小くらがり　伊賀 杜音

讀甲陽軍鑑
あら蕎麥のしなのゝ武士は眞ぶし哉　去來

河中嶋
そば畑や平かゝりに啼烏　巴鷗
宮城野の萩更科のそばにいづれ　蕪村
そばの花峰は淺間のゆふ烟　旧國
曙や田ごとの外はそばのはな　但馬 東走

哭團友　此坊常に言る事有
殘る名や根なしかづらと申されず　逸洞
炋の日や穗がらの音にくれかゝり　五什
秋の暮味なき口をそゝぎ皃　文兆
船岡や火も伽になる秋の暮　古人 我迅

○

吹とばす石は淺間の野分哉　翁
高山に日の出る國の暴風かな　完來

草もなき烌に狂ふや淺間山　洞芝

烌をうらむ雲の深さよ淺間山　猿左

洛の眞如堂にて、如來開帳の支度さして、去酉の秋より登りて居にけれど、世用にさゝえられて風雅も聞す。此度漸く開帳もすみければ、重荷なおろせしこゝちして、洛の諸彦と嵯峨野に遊ぶ。

あつめてもゆふ荷やかろし荻芒　招山

花すゝき秋のかぎりをみだれけり　路人

軒だれに一本すゝきうたれけり　守一

此句は長嘯の歌を思ひ合ていひ出ける、しら露を誠の玉にぬかんとは思ひもよらぬ糸すゝき哉

松の火の尾花に篭る野末かな　五什

天津雁なくや尾花の八九月　呂吹

諏訪　秋の宮

花よりも紅葉にはこき涙かな　蓼太

穗屋つくる秋は烌ならず花薄　陸奥 素卿

父逸洞、戸隱の紅葉見んといざなはれしを、いぶせく覺て

おそろしき里に夜をこす紅葉かな　五明

寄謠無常

霧ひらけ社僧の顏のおもしろや　逸洞

紅葉狩

日をさませ後しらぬ世の紅葉狩　鬼貫

切込て太刀の火を見む岩の霜　其角

紅葉がりの古跡を尋て、紫角面てふ里に宿る。是は謠曲のちの名なるべし

峯にかけり谷も紅葉のしかくめん　柳莊

鹿一夜聞て山邊の朝日かな　文兆

日本記に、兎餓野の鹿の、己が妻にいめ物語せしといふ事のあれば

まろ寐して夢や見るらむ萱の鹿　猿左

○

かけ橋や命をからむ蔦かづら　翁

懸はしや葉ごとの露のいく休　五明

露のきく玲瓏として明にけり　呉笠
菊の花つく〴〵見れば又淋し　洞芝
大ぎくや樵此うちこのあたり　猿左
雞頭華きり杭がちに成に鳬　文兆
行烋をかり初臥の田守かな　呂吹

冬の部

雪ちるやほ屋の薄の苅のこし　翁
雪國やはらはで穂屋の花すゝき　陸奥 等窮
檜の香や木曾の旅宿の冬籠　許六
霜にまたすゝきほのめく冬田哉　洛陽 紹巴

宗鑑の圖に題す

霜がれの枝や笑はずものいはず　逸洞

江都桃靑の三回忌とて紫柳亭に會す

拾ばや枯墅に捨し杖と笠　丶
木がらしや三ッに裂たる千曲川　几董
薗原に人にも逢ず冬木立　女 一紅

鐘の音やしぐれふり行跡の山　曉臺
　おくれ鳥の羽音寒けき　猿左
しぐれする里や都にうしろ向　文兆
馬市の跡もの淋し冬木立　洞芝
こほらむとしては春西日かな　守一
水霜の野竹を傳ふ朝日哉　丶
霜かろし元結に置とよめるなり　路人
冬の雨肥滿の肩をもませ鳬　呂吹
妬ある人うつくしき火桶かな　馬十

此地の古人等いまだ蕉門の俳諧をしらざる比、書留置ける中に、附合秀逸の拔書　百句

　恨てきやす灰のうづみ火
むつ事も聞かで煙草やまいるらむ　洛陽 立圃

○

　いくつになれど死れざり鳬
はやし置うなぎの切レのひくめきて　貞德

發句 百句

おくすみはいみじの數寄のしわざ哉　季吟
うづみ火はつながぬ猫の引緒かな　維舟
だいて寐ても肌はゆるさぬ火桶哉　貞室
まつ風の炭吹おこす廣間かな　柳莊
絕交の書をやく雪の火鉢哉　路人

雪國の風景掛ニ御目ニたきなど、言
水師へ申遣す狀のはしに

ありやうか雪はつめたき物ながら　元水
みの虫よ聲あらばなけ今朝の雪　文兆
名月の硯洗はむけさのゆき　柳莊

病中

はつ雪や重き枕をあけて見る　芦錐
くるゝ日や鳥のけて入る雪の枝　五什
暖かう成て降けり夜のゆき　路人
誰が門ぞ雪に燃入る捨紙燭　几半

杯盤狼藉たり

下戸どもは人參しらず夜の雪　逸洞

吹よせやわざとならざる雪の山　猿左
降ふるや雪をたぐりて渡し守　闌更
千鳥の聲に暮かゝる空　猿左

○

晨鐘に人の角ふむ十夜哉　友元
夢をさへ行香串の音　短棹

○

磯馴松海に益なき雪ふりて　未格

○

三子に別るゝとて

雪が降らば行まじ物を旅の旅　几董
巨燵ふとむにちぎりおく春　路人
梅がもと根深の苗もくゝだちて　柳莊
朧にくるゝ宵々の月　猿左

○

むつまじき隣もちけり納豆汁　猿左
爐開や晝の紙燭の影よはき　路人
ろびらきや五月雨比のしめり灰　五什
寒月や杉にこもれる海の音　反古

諏訪湖冬景 二句

しなのなる歳暮車や湖の上　沾涼

湯上りに氷ありかむ諏訪の海　近江 千影

まつ風を五夜の炉に焚く寒哉　米格

子葉忠士とふ、古主の仇をむくはれしと傳へきゝて

刄よりするどき鷹の氣さし哉　招山

右子葉は俗名大高源吾とて、淺野家四十六義士の一人なるよし、其角の五元集にも見へたり。この子葉の方より招山かたへの書こゝにしるす。

。

以手紙致ニ啓上ー候。昨日谷中迄御尋申候得共、御他行不レ得ニ御意ー候。然ば御頼の儀宜方に御座候。就者來月四日大助方まで御出可レ被レ成候。

一晉子宗匠ぇ申入置候間、いつなりとも御尋可レ被レ成候。餘は期ニ面上ー候恐々。

九月廿七日　大高 源吾

山崎藤兵衛樣

野心をしづめかねけり夜の鷹　呂吹

追るゝや追ふもあまぎる雪の鷹　とみ女

遊子行

留守にして机のうへの頭巾哉　几半

息才な鼾なり鳧紙ふすま　文兆

富にさび貧によしある紙衣かな　洞芝

けふまでに降せまりけり雪の市　五什

痩るほど富士見るとしの飛脚哉　呂吹

年内立春

軒だれやとしの内なる猫の戀　文兆

から臼の竿に御燈や大三十日　猿左

雜の部

母を供して東へ下る

三度まで棧こへぬ我いのち　蝶夢

かけはしと母に申さで渡り鳧　重厚

箸ぬれぬ膳に給仕の泪哉　逸洞

けつ戀や鮎ねぶりあふと思ふ間に　路人

伏水の佐藤子、八ッ橋の切にて作れる文臺ひらきに、みつの津の俳士ども集て會あり。予も幸に其席につらなりて

はしの名のくちずもあれな筆の花　羽女也室 猿山

ふりにし年をかぞふれば、十づゝ八ッの昔、此地の古人邉洞・猿山・招山等が催し置ける草稿のうちをとりて、半百のむかし器隨坊兀水、焼捨とはず草といふ集を撰む。されども悉く邉洞等が志をはたさず。今や是をもとつことゝして、古人の贈答、あるは近き名家の此地によれる連歌の俳諧、あるは社友のほ句などかい加へて梓に物してんやと、若き輩にほのめかしければ、やがて此集はなれり。蝶夢老法師の序に糸ぐち委しければ、只しりへに結ぶ事を嗽芳庵において、

猿左述

寛政甲寅早春

皇都寺町通二條
蕉門書林　橘屋治兵衛梓

俳諧

何袋

一峨編

を涙もろき一峨老人、しきりにむかし戀しがりつゝ、ふるくありける元夢佛の木像を安置せむと、則法師のゆめの跡に、ふたゝび今日庵むすぶべきこゝろざしを起しぬ。おのれかの世のあらしに吹のこされ、此時にあへるよろこびに、やがて再建のかうがしらとなりて、とも〳〵乙鳥の土をはこび、木つゝきの穴ほりて、一簣のちからをあはすものなり。

一茶誌

狙橋草鳥
相良保葉　仝校

なにぶくろ

今日庵編

序

橋町といふ所は、芭蕉翁の袖の香なつかしとて、元夢法師そこに今日庵といふをいとなみて、うき世の月の見果どころとなんたのまれける。しかるに法師なくなりてよりことし十三年、その菴しれる人さへも、したしきかぎりは白露のほろ〳〵ときえ、嵐のぱつぱと吹ちり、庭もまがきも烁の野らとなりて、いまはそれとさすべき青草だにもなく、いたづらに犬の臥處とはなれりけり。さる

叙

今日庵にひとつの俳ありて、それが名を何袋といふ。そも／＼何ぶくろとは、なに俳なるにやといひしに、いにしとしの春、山栗の伊賀の國にあそびしとき、ふる反故の中よりめでたき俳諧の懐紙をさがし出て、これをかくしもて來しふくろなりとぞ。さらば春俳とも句ぶくろともいふべきを、おほめかして何俳とよぶ事は、六条河原院を何某の院と書るおもかげにて、しかも賦物の文字をもちひながら、例のふるみにおちざる婉曲なるべし。これにいまの世の作者のことどもをつゝみいれたれば、清輔朝臣のとりこみふくろも、嵐雪がものくさぶくろも、たゞこの中におもひこめたり。いますこしいはまほしき事もあれど、嚢を括るにとがめなしとかやきゝおきぬれば、いさゝかそのかたはしをしるして、くちびるをつぐみ侍る。

随齋成美 [成][美]

いにし丁卯の春、伊賀越しけるおりから、上野ゝ城下なる何某がもとにてふるき懐帋を得たり。このはいかいまだ世に流布せざればとおもふものから、その懐紙其筆のまゝをこゝにあらはす。

元祿二年二月六日

有明らしあの里まで文とゝう　百歳
殊んろりをゝと残次歳関　武之

掛る袴小袖の
女まに縫ふくこ　村數
三味糸しころく
なるゝ元含　桃之
東山中にこを
それを浸しみる　飛木
けふのとゝなる
知足浣れぬ　一桐
連こす卿　花桜を
わたる春の宵　武之

すゞしさや庵の葛亭　呉吉

桃之五句　梅容三句
飛木五句　一桐五句
百歳四句　槐市三句
村數四句　呉吉三句
武之四句

秋之部

水の色は水にもどるや秋の風　（古人）元夢
あきかぜのはや吹初る蓬かな　元朝
夕かぜや碇も痩る秌ごゝろ　至鳳
秋の風我をわが見るこゝろ哉　（郡内）宜樂
秌風の木母寺あたり來てみれば　（美濃）千阿
あきかぜや割木のうへを這ふ螢　（兵庫）一草
高燈籠三十日にちかく成夜哉　保葉
粟稗の風の中なる燈籠かな　（上毛）鹿太
魂棚に蟬の來て啼夕かな　（甲斐）椿舍
緣ありて蛙とりつく經木かな　（本宮）冥々
ふぢ豆に引たふさるゝ萩の花　（信濃）若人
つくねんと畧する宿の小萩哉　あゑむ

父の十三周に

三日月に御日にかけうぞ萩こはぎ　（元夢娘）八重
人ほしくおもふ月夜や萩の下　（二本松）麥市

譏の馬士どのや草のはな　（カヒ）一作
不器用も又よいかして我木香　（、）巴岡
蕣やたゞ咲事をうれしげに　（、）草丸
あさ顔の八重にさかぬぞ秌の花　（ナニハ）升六
きぬ〳〵に結ぶ柳の一葉かな　（郡内）卜阿
三日月に水なさゝれそをみなへし　（、）自笑
けさまでも見るや芒は月の草　（ナイヤ）竹有
芒よりうまれし山をすゝきより　（南部）素卿
むらすゝき雨のやうなる朝ぼらけ　（エチゴ）鄕久最
八朔や雀がはやす梅雄　（安房）其文
花芙蓉さびしいはわが心にて　（古人）恒丸
このごろは毎日菊のこゝろかな　心匪
心ゆく不二は遠くてきくの花　（ヤマト）客阿
明ほのや白菊一荷黃菊二荷　一約
水背やこんな奥には菊と家　（白石）乙二
神垣の物にして置野菊かな　（甲斐）一市
人の住けぶりのかゝる紅葉哉　（ナニハ）豐鄕
塩買の馬にしぐるゝ木實かな　栢舟

栗売に日の入かゝる蜻蛉かな　曇潮
あきの蝶水のこゝろに行かひぬ　好古
鴈ぞ來る戸口／＼の日なた水　凡骨
御佛に蓑引きせよ雁のこゑ　郡 東内々
遠山の寐覺しらすや虫の聲　仙 曾ダイ臺
きり／＼すあきの虫にはちがひなし　カ 可ヒ童
蓑かけし柱に來たりきり／＼す　ハ 木ハリマ海
秋たつや高野聖のうしろより　元風
犬蓼や秌立顔のふじの色　下 南総道
明ほのやあきたつ風の鎗しるし　古 如人水
星こよひあはれにもなる一しきり　朶年
とし／＼や星のうしろの朝あらし　浮船
めづらしく成よことしの天の河　甲 太斐年
七夕やまだ草であるをみなへし　長 天サキ外
夕暮や秌のからすの一羽飛　松井
あきのくれ覗てすぐる酢賣かな　一應
白露のこれをのけても秋のくれ　サガミ 叙來
蓮きれの蔦にもならずあきの暮　、洞々

雀色といふ暮もあり秋のそら　センダイ 文卿
うしろにも人の立けりあきの暮　伊 爲勢德
わが庵はすゝきも植ず秌のくれ　越 喜後年
しら露の眞間に髮剃る人ごゝろ　武 燕蔵市
置露や手にとるやうな夜の空　上 子総盛
木魚うつ音から霧ははれにけり　扇之
山陰や烏が立ても霧臭し　京 素玩
秌の雨の跡や今秋(朝カ)見る山の形　カ 桂ヒ瓢
あきのあめ二日になりしゆふべ哉　秩 卦父叟
閑さや小草にのせる三日の月　下 元毛沙
蘆の穗のまばらにくねる三日の月　カ とヒしを
兎も角もふたつの窓を三日の月　春樹
いざよひや坂東大(太)郎またゝくま　麥宇
待宵の浪のちからぞ面白き　郡 草内鳥
山里は罪なき月の見やうかな　シ 蕉ナノ雨
すみ／＼てやがてかなしき月見哉　浪 長花齋
あそびたい夜が重りてのちの月　カ 漫ヒ々
野の花をいくらもちぎる月夜哉　州賀

明月の入江にのぼるかもめ哉　（ムサシ）斗月
庵のある山たのもしき月夜かな　（仙ダイ）東斉
見せ申厄介はなし月一夜　（サガミ）南謨
皃に野分を殘す月夜かな　（陸奥）可理保
月出てかはるや海の鳴どころ　（岡ザキ）卓池
白湯わかす音や夜寒の松のこゑ　（サガミ）三芝
茶蕎麥に白箸たらぬ夜さむ哉　布谷
一しめり有ての後の踊かな　（古人）一方
稲妻や五十を越せばあぢなもの　昨烏
長き夜やそれにつけても杜宇　（郡内）牛止
目ふたげば耳にこたへる須磨の秋　（名ゴヤ）岳輅
月待か小田のかゝしのあみだ笠　、梅間
親子來る鶴も愛たし里の烁　（下フサ）桐我
朝寒や片側町のこぼれ錢　（ムサシ）麻生
藪陰や野分の軒の時あかり　（甲斐）野鹿
ちら／＼木葉について烁の行　、眞恒

冬之部

庭つ子の机とり出す時雨かな　袞丁
四方からしぐれよせても不二の山　春蟻
野の駒の人見送りてしぐれけり　白芹
しぶ柿のしぐれつぶれて仕舞けり　一和
しぐるゝや御寺の前のはなれ鶴　陶賀
爐の灰の落つく夜半を時雨けり　（甲斐）方匠
唐松に白眼おとすや初しぐれ　、物成
鴈鳴の聲うち込て霙かな　（カヒ）蟹守
草の戸は腹のすくほど鍾れけり　（仙ダイ）巣居
瓦ふくものを高めるしぐれ哉　（ナニハ）奇淵
霜の夜や甲斐に居なじむ膝頭　（カヒ）嵐外
草の霜砦／＼の崩れかな　、松風
はつ霜や障子明れば小鳥たつ　（ムサシ）葵洲
朝しもや灰をふるへば何處へやら　（サガミ）錦子
初霜のあかりに年を算へけり　（安房）也草

あられふる夜とて都の夢もなし　夯貨
霰にもひるまぬ鴉の氣轉かな　古人　素嶠
雪あられ降てはなくす淺間山　ムサシ　梅夫
大雪のあらし山からふり初る　諫圃
よくきけば降音たかし夜の雪　深長
おもしろき使は來たり蓑の雪　下總　柑翠
大息で雪車ひくものを朝寐哉　、　吹人
挑燈の遙にゆきの三十日かな　ガヒ　漁蓮
月一夜まかせておけば小雪ふる　南下　平角
雪籠しては過行山路かな　イセ　椿堂
忘れ居る木草もあるにたひら雪　ハリマ　玉屑
蕈のわらふて來たり雪の門　古人　東里
寒ければ雨の手づまも變りけり　石ノマキ　曰人
さむければ棚の菅蓑さへそよぐ　共堂
冬の山ひとつ〳〵に日のあたる　來會
物いはぬ事にしておく冬の山　カヒ　可得
何ひとつ缺なき老や冬ごもり　青牛
譽らるゝ山を持けりふゆごもり　相摸　雀子

はね炭や月夜〳〵の草の庵　古人　浙江
不拍子は炭がはねてもひとり哉　一瓢
妹許の巨燵さかるや二階うら　百我
小鴨にもよそ〳〵しさや都鳥　道彦
はつ河豚や無盡取たるもどり足　巣兆
鰒喰て寐物がたりをする夜哉　郡内　花醉
水鳥やはな輪の松の風かはる　サガミ　松宇
鳩見ても年はよらぬか鴛の妻　下總　太節
親のある鳥か冬住きたの海　秋田　五長
菅菰やちどり啼夜の馳走ぶり　郡内　連雪
鳴千鳥月夜は人も肥りける　吉田　木芽
何の木も氣にいらぬやら鶺鴒　大津　五來
老僧の酢和すきなり歸り花　保葉
馬蝿のいきはたかりし枯尾花　葛流
二冬もかさねたやうなかれ芒　仙ダイ　美圖良
芒ほどさむい物なし手を切て　花マキ　鷄路
枯原や膏藥賣の吹れ行　郡内　來歸
唐破風に鳩の出這入冬木立　サガミ　峨月

世の中は夢の事なり冬木だち　アキ田 野松
妻なしのひとへ山茶花咲にけり　兀雨
連翹や其身そのまゝ歸り花　理峨
いやさうに枯蘆そよぐ日暮哉　上總 白老
さびしさの底たゝきけり冬のすま　京 瓦全
十月の花の下なり炭一駄　ナニハ 井眉
埋火も後のたのみや善光寺　友國
冬の日のとり落しては海くれぬ　ヒタチ 翠兄
寒聲やされば小松の育やう　カヒ 安男
物書ぬ屏風にさむき寐覺哉　苔菴
木がらしの中に御ざるや角大師　郡內 貫珠
冬の月豆腐のうへにとゞまりぬ　桂塢
冬來ても木隱れ安し三日の月　仙臺 雄淵
鳫鴨の啼聲すでに海の月　カヒ 千波
戸明れば天窓の上よふゆの月　咏時
世を行も拍子ものなり鉢敲　サガミ 葛三
臘八や月は眞上にして寒し　下總 雨塘
弓賣し去年は來にけり大晦日　郡內 圭兒

春之部

猿といふ呼子鳥あり花の春　伊賀 若翁
元日や草鞋はきても春の人　守靜
水かけ菜一二把ありて明い春　郡內 猪鹿
人の來て元日にする庭かな　下總 恒丸妻
羽子板や桑名こえたる詞つき　山松
寢ごゝろやうめに成べき雨の音　女 一翠
梅のかぜ麥飯ばらをさらす也　青樾
月影にしむるも梅のにほひ哉　カヒ 樋村
野鼠が米引くうめのさかりかな　平歡

宇治の大宮に年を守りて

ほのぼのと東をみればうめの花　イセ 滄波
梅の花立よるほどに蓉けり　路白
しらうめに東堤の夜明かな　サガミ 豐女
梅が香やそもよし原の薄月夜　律器
ひよ鳥の拾ふて行やうめの花　下總 鶴老

梅若菜室也の痩も戻るべし　水戸 遅月
青柳にして曡けり不二の山　カヒ 重行
或人が問ふや柳のおもしろみ　名古屋 李臺
蔦の輪の下に野中の柳かな　百枚
春の草お七が墓に人見ゆる　成美
蚕が火の蟄はきえけり春の草　イセ 鶴鳴
何處でやら見た人にあふ春の草　甲斐 きの女
蕣の二葉に出し庵かな　出羽 眞都良
菜の花や犬もよろこぶ鼓うり　一溪
なの花に猫の子抱てあそぶ也　秩父 圭夢
菜の花や舟からほかす塩俵　沼津 壽山
片壁の庵の小草も菫かな　荷京
抹香のこぼれては咲すみれ哉　安房 杉長
見るほどのすみれ摘たく成にけり　はまも
海苔の香や波は風よりをとなしき　露臺
海苔麁朶に小雨のかゝる夕かな　郡内 三甫
石に成やうすはあれど木芽哉　、遊耳
人しらぬ旅を泣なり花薊　、如窓

日の影や蒲公英にたつ傍示杭　、兎園
野の宮の風除つばき咲にけり　上総 里丸
椿さくや小村へはいる赤衣　カヒ 吐雲
古家がけふも賣れたぞ桃の花　鬼洞
花さけや佛法わたる蝦夷が嶋　一茶
まんぢうのけぶりもかよへ花の雲　久藏
年〳〵の花にくやしき刀かな　五風
丸くして心をかへせ花のかげ　ナニハ 米彦
夜ざくらやあちら向たる顔にちる　里遊
人聲の月にちりこむ櫻かな　八起
山深し霧にぬれたる遅櫻　京 月居
夜は露の幻におくさくら哉　丹波 滄洲
男とは生れたりけり山ざくら　酒田 河道
柴の戸や雲になるまで櫻人　鶴朝
山吹の花の宿かる行脚哉　イヨ 樗堂
毎日の夕ぐれなれや藤の花　アキ 雋老
日の道や氷の下の魚の顔　夜及
ちらし書ならひ初るや櫻草　女 醜我

青くさきものや彼岸のそなへ物　郡内 省雅
柊の葉もつゆけしやねはん像　、喜水
一日は餅もちらばふ芳野やま　ナニハ 三津人
石山や瀬多へも一里朝がすみ　閑巣
是とても霞めるはしよ小盃　鼠伯
しほがまの底もゆるさず霞けり　司風
分ゆけばかすみも露のあるものか　九烁
朧夜や生海鼠のやうな淡路島　越后 幽嘯
おぼろ夜やはなしも須磨の籬越　カヒ 洪青
親船に乗て見て居る春の山　、百鳥
山姫の眉のにほひや春の空　カヒ はつ女
腹の減る鐘が鳴る也はるの山　沼津 自口
はるの海眞水〳〵のみゆる哉　草鳥
春のうみ一寸見よ斝かゝぬうち　肥後 對竹
鼻そらす馬の氣相や春の風　サガミ 玉珂
これほどの寒き中にも春のかぜ　長崎 鞍凪
春風やうき名も立し古地藏　下總 雙樹
はるの月寐しづまりなる間の村　、一堂

西の京や春の最中の月見にと　カヒ 道尼
見し鐘をやどりに聞や春の月　午心
吸物の椀も響るやはるの月　虎溪
大津畫の繪の具こぼれて春の雨　松夫
春雨のとく垣になれ濱の草　秋中
春雨の見付どころやすゞり箱　カヒ 習之
はるさめにみな寐た家か伏見あたり　シナノ 如毛
鶯のなくほど啼てお歸りか　車雨
鶯に見られんものか我疲(瘦)手　龜山
うぐひすの尾をそらし啼野風かな　下總 素迪
うぐひすの丁子含める音色哉　ムサシ 莊丹
美しや巣のうぐひすの啼ぬ事　サガミ 方斛
鶯の鳴ぬ朝あり藪のうへ　、女 さゝ雄

豐宮崎の御文庫にて
雨にほふ硯のうみになく蛙　カヒ 貞恒
陽炎の我にひたしき蛙かな　白巣
野の宮の風をなくする雲雀哉　柏子
芝原やあそびごゝろを鳴ひばり　司泉

老らくと見てやくはしく啼雲雀　サガミ澧水
舟あがりしてから雲雀聞にけり　ムサシ其樂
鳥どものおし出されけり春の水　カヾ眉山
蛤の戸尻にさはる夜頃かな　百之
田螺との梅の柳の世なりけり　曲阿
井戸端の豆腐に移る小蝶かな　ムサシ國村
行雁や暮かゝりたる小雨村　崇峨
尻かるにちどりも歸る朝南風　シナノ湖光
汐波の心かはゆしはるの鳥　安房宗拱
二日灸さよの中やま又越ん　完來
春の夜のとりちらかりし枕かな　ツクシ雪市
爐を塞ぐ心誘ひぬ椽の先　甲斐一作
燈の見ゆる戸も正月の宵寐哉　ナゴヤ士朗
はるの夜や鼠のきやすあり明し　京蒼虬
住よしや松にかぶさる春の空　ナニハ規外
川上のはるの便宜を崩れ泡　サガミ不騫
さゞんざの松とは春の名成べし　長崎菊也

夏之部

更衣ひた／＼水の流かな　雲阿
瀧を見に罷出けり衣がへ　直材
晝過の槇の高さよ更衣　下総月船
折かけの笹など見えて更衣　ナゴヤ東陽
御内儀の子をかりに來る袷かな　四交
夏羽織はらのたつ日もなかり兒　老阿
江戸に生れ男にうまれ初松魚　泰里
あそびたし寐たし生鯛生松魚　仙ダイ旦々
御内儀の鮓買ふ友や月の松　有圭
雨の香のあさかにちかし子規　巴岡
ふし染の袖ぬれやすしほとゝぎす　郡内專阿
ほとゝぎす暮ゆく水のあらし哉　アキ玄蛙
閑居鳥土鍋の底を啼にけり　下総可蔦
貝割の大豆に啼やむかんこ鳥　カヒ夏木
山間の水に移るや布穀　壽好

手沸かむ跡へ来てなく水雞哉　郡内 眞澄
鵜ひとつを追まはすなり船のもの　下総 一白
撫子に腰ぬけて居る鵜飼かな　甲斐 有斐
わか葎我蚊とすれば月夜かな　荷涼
蚊の中に立すてゝある燈かな　出羽 長翠
蝸牛足も手も出せ月夜なる　寥松
竹にふる雨や月夜のかたつぶり　シナノ 雲帶
今朝啼てそれきりみえず草の蟬　ハリマ 文哉
雙紙干す子供に交れ行ゝ子　故園
あふぎ賣何ぞうたふて見せまひか　季道
露の世と書ちらしたる扇かな　秩父 五粒
青蠅に手のうち見する扇子哉　椙雨
うれしくも淋しくも成る夜川哉　少年 徐柳
灌佛や世の白露を見せ申　仙臺 きよ女
取次は松王丸かはつ茄子　梅蒔
三尺のはたけに花の茄子かな　カヒ 李道
小蕨の伸て四月にかゝりけり　、 池有
麥秋やとしよりくさき寺の馬　、 鶴遊

馬の尾の麥なぐりゆく徑かな　ムサシ 柳古
牛馬も出代りするや麥の秋　沙羅
冷〱と月もさすなり苔の花　丹波 武陵
極樂の繪にも書たし芥子の花　東鳥
抄子とる嫁が作りしけしの花　下フサ 見直
白けしのめづらしく夜に入にけり　イセ 丘高
竹の子やぬすまれ盛ほめて行　カヒ 子謙
竹の皮朝〱人に落るなり　下總 近嶺
夏ぎくの見ふるさぬ程さきに鬼　ナニハ 瑞馬
紫陽花のたま〱闇にかゝりけり　、 竹齊
夕顔や大めし喰へば花盛　下總 升入
嶋山の茂りに入し潮かな　ムサシ 星布
よる泡のきゆとおもへば合歡の花　一阿
うつくしう留主を遣ふぞ杜若　安房 都賀
蛙啼朝の間長きあやめ哉　信濃 田年
小家葺て一八さきぬ二三本　センダイ 三及
木間洩るほの明ほのに見る蓮　ノ旦
鯉鮒もまめそくさいか五月雨　一美女

さみだれや理屈はなしに白い鳥　甲斐 可都里

二三本竹植させて明やすし　周化

竹藪を鼻にかけるや澁團扇　万布

上毛草津にて

夏山や日和さだめぬ温泉のけぶり　下フサ 斗囿

往道に淸水の風のかゝりけり　シナノ 素驥

河べりの暮くらからず夏の家　サガミ 雉啄

越路にて

憂身等も夏を嘸すか船奉加　悳口

暑き日や負れて通る猿の尻　一牛

身ひとつの暑をさますかげもなし　シナノ 虎杖

夏川や米炊て居る大男　下總 素綾

すゞしさをまとめて入る夜汐哉　郡内 鼠十

涼しさに覗て見るや岩の穴　ムサシ 踏若女

すゞしさや月に横ぎる鳥は何　文裳

六月の蜘の巣顔にかゝる哉　呂安起

水無月や蝶も小浪もうごく物　ムサシ 僂鳥

鷺の子のまぎらはしさや御秡川　受淸

折杖記

ひとの國の禮といふものには杖つく事のさだめありて、五十のとしには家のほかにつくことゆるさず、六十になりてぞやう／＼杖して里には出べしといへり。旅の杖はそれらにたがひてたゞかろきを專とし、つよきをたのみて吾家のしきみをこえ、ぬさ佾花とちらすよりあすはの神に小柴さし、また歸くるゆふべまで手のやつこにともなひ、あしののりものをたすけ、しばらくも此ものを外にせず。されば旅する人たれかは杖のたすけによらざる。一叟老人いぬる丁卯の春、伊せの御神にまうでゝ、また上もなき杉のあらしを袂にかけ、それより伊賀の國に至りて、はいかいのふるき跡をたづね、よしのゝ花をよしとよく見て、わかの浦なみに足をひたし、梅のなにはのわか葉をあはれみ、ゆき／＼て安藝・はりまなどまで見めぐらひて、京に出しは百余日の後なり。かのたづさへしものは、佛印和上の木上坐といひしたぐひならで、いかに

もほそき竹枝にて、かくつきめぐり〳〵ぬれば、千世をこめたるふしなれども、いつとなくちびれへりて今は無下にみじかくなりぬ。かゝればうちもすてむとおもふことたび〳〵なりしが、あまたの日吾ちからをたすけしものをとおもひかへして、まづ京まではひき來りけるなり。さて京中もかたのごとく見めぐりて、大佛のふるき跡にいたれる頃は、すでに携ふべくもあらずぞなりたる。そも〳〵此方廣寺は豐太閤の御願にして、その御胤大坂の君の再建ありてより、奈良の佛よりも莊嚴たちまさりて、都めぐりのものゝはじめの指には、まづ此御寺をこそかぞへしが、十年の昔雷火のために燒うせて、殿堂ひとつものこらずなりぬれば、白毫のひかりながくうせ、慈顏ふたゝび仰ぐ事なし。たゞその世のかたみとては、洪鐘ひとつをのこせるのみ。法滅のありさまめのまへに見るといひ、またかの杖のなごりもたゞならねば、此竹をかねのあつさにくらべ、その末をばおしきり捨て、その折たるをはる〳〵江戸まで持かへりぬ。かの旅ねのあらましをも、此折枝を見ておもひもし、また都ものがたりのおもかげにもせばやと、ながく是を家にかくす。むかし芭蕉のおきなは、杵の折たるを花いるゝ器となしぬとかや。今の折枝は花もなき無用のものなれども、そのあはれはすくなからず、かならずやよくをさめて、龍と化しさらむ事をおそるべしと也。

文化庚午仲秋　　隨齋成美誌 〔印〕〔美成〕

三吟

人も見るや桐の一葉のけふもちる　一峨

月のほそさにいふ事もなし　成美

白露のかた山しぐれ壁ぬれて　一茶

しらぬ小鳥が來てもうなづく　峨

節季候のかろくすませし浮世也　美

障子のはしをわたす門川　茶

へこ牛の狂ひたがりし乳ばなれに　峨

まゝ子の君のあぶらかけたり　美
けふこそは鍋かぶり日ぞ百合の花　茶
餅をくはせてかける謎〳〵　峨
附木つく隣並びの店はりて　美
茂助佛が開眼の炼　茶
もろこしの芳野も月の廣き世に　袋
椎さへあればすまんとぞ思ふ　美
年のよる藥に松葉けぶらせむ　茶
花やちれ〳〵雪やこん〳〵　峨
古すみれ死はづれたる嬉しさは　美
東河内のおひがんの鐘　茶
あてなしに翦ゆく鳶の旅ごろも　袋
傘にかくるゝほどのわが宿　美
紫陽花につゝじも文に書込て　茶
うそつき初し末の松やま　袋
門乞食いかなる人におはしけん　美
ころは安元三月の空　茶
山吹を湯水にちらす時津風　袋

寐て夏をまつ小酒屋のおく　美
淡路舟わらは一人それたのむ　茶
蘆とはいはずよしと答へし　峨
月影や御所の御ふるの茶の袷　美
泊瀬の山霧櫻井の秋　茶
摺小木も引板の相手に成果て　峨
いとまごひぞと比丘の出らるゝ　美
あらしふく黑葛蘿の朝氣色　茶
へなつく舟をわたし始る　袋
誰かしる花のあちらの隱れ里　美
ちから一ぱい雲雀さえづる　茶

俳諧 續何袋 嗣出

東都
本銀町四丁目　大和田忠助
同　梅澤伊三郎藏
橘町四丁目　伊勢屋彦兵衛
文化九壬申初秌　朝倉吉次郎刻

犬古今（いぬこきん）

太節撰

小集之次第

一古今は今古にして新古をへだてぬいひ也。すこしく國ぶりをふりわけたるなるなど、かの甲斐歌・みちのく哥等のありけるゆかりにも、まねびつるおもひなりける。

一犬は犬也。卑下のたとへ也。犬つくば・犬蓼・犬山椒のあるにひとし。

一卑下は延喜・元久の古今あるにはゞかる、おのれが心の卑下也。もろ國の人物、新古の句作者を卑下するには、きはめてあらざる也。

一此集もと持て企おもふてねりたるにはあらず、海道一の頭陀物とはやされしに、そばへて其儘別坐鋪の腰ばりせんよりはと、あはたゞしく蒿山房が厄介とはなしぬ。されば序なし跋なし。頭陀物のまに〳〵のせて、帋中にあまらざるは、其人〻のふみてのあとをすりける也。是また〳〵其人がら其家の風のせばき廣きに預る撰にはあらざるをや。ともかくも犬古今なりけらし。

太節いふ

大和竹に目をあけたる艸刈笛も、弘法大師のせみをれも、用ゆるにあたりては呼子鳥のいづれをかへだてむ。是に跨かふつる物ならば、龍の都にもまいらでやはと、五尺の竹づえきりて戯れやりしを、おのが名にさへとりつけてをかしがりしが、宿望とゞきこの年この夏此節を馬の上にもつきちらし、ひがごとならぬ伊勢まいりいたすとなり。そもそも、神路山に名利を捨よとの示現は蒙らずも、けふを忘れて明日の俳諧いたせのおふせごとをうけ玉はらば、なむほうありがたき物語ならずやとて、四歳むかしのたけづえを今日のむまのはなむけになし、金令舎の十六疊にさつしやうかまへ、順の盃くだし、逆のさかづき飛せければ、ひとびとさゞめき興じて、今を千代のはじめと句鏡つくり、うつし繪いろどり、から歌つゞくれば、さて海道一の頭陀ものではあり。

みち彦

つばくらの　ゆく空　見する紫苑哉　　金令

茄子見ても　夏は　ゆふべぞ　おもしろき　　隨齋

(犬古今)

ものゝふの武藏

時鳥まだ見に來ずやすみだ川　巣兆
かくれ家や死なば簾の青いうち　一茶
ほこりだにみへぬ夜中ぞ鳴鵆　其堂
韮にまけて月すむ水を濁し鳧　以足
山里や霧の中なるひとしぐれ　寥松
名月やふたりの間に火打箱　亡人 蒴明
戀猫もしたへ難波津淺香山　李臺
朝日さす野とはおもへど枯にけり　一瓢
にはとりの飛こむ冬の垣ねかな　心匪
夜歩行の袖やたもとも麥の秋　浙江
秋の夜の相手がましき燈かな　春蟻
椰の木やうごかして見るおぼろ月　莚蕊
蝶鳥になぶられもせず蓮の華　梅壽
馬刀貝も夜は口明くはるの雨　素桃

青柳のおろかにのびて暮る日歟　夫山
梟よいくら啼ても梅の花　古辨
青柳や鷺の目ぬひし人の門　蔦記
百合咲て麥糠くさき天氣哉　金河
かり〳〵と鍋かく音や秋の暮　守靜
水を見て居れば暮けり歸雁　鷺雪
道づれは余波あるもの夏の月　不知二
白桃や葛飾に蚊の啼初る　朽木
春風や馬の瓜とる小松原　起鳳
投つけたやうに居並ぶ蛙かな　まさゝ
やめうとて枕焚けりあじろ守　可丸
正月も片道つくや墓參り　白太
はつ花は萩にもあるや草の家　菜波
おもふ事さつぱり捨て冬の月　濱藻
水仙にはかま着てみぬ恨かな　千勢女
松葉ふく風もいとふ歟親すゞめ　右雄
明日もありとおもはれぬなる白魚哉　波靜
年〳〵に降まさるかや五月雨　双湖

霙るや裏を見せたる佃島　ましを
かくれ家やおへともいはず花椿　翠嵐
年寄のそゞろがましや料のもの　無說
舟ひくやかやつり草の葉隱れに　よし周
山葵喰ふ人のこゝろの寒さかな　梅夫
家ひとつ山のしぐれの相手かな　一蕙
水鷄なくや曉月のさすほどに　胡準
炭の香やくるゝ障子に不二の影　護物
雪ちるや人の柴垣過がてに　秋守
山かげやふいと千鳥に日の當る　碩布

樵夫

薪をこりてかくまで老ぬ翠もまた　成美
我と我ゆく橋の下水　太節
拾果の牛に正月いたさせて　一茶
錢こぼしたる春のあり明　美
福壽草袖長かれとこそおもへ　節
ふくら雀もかすむといふらむ　茶
住よしの隅にかくれし世中に　美
端居のゆめをちらすたちばな　節
めら〳〵と焚焦したる戀をして　浙江
秋の余波を雉子追に出　美
月てらせ貧乏祭り過にけり　茶
めでたき箸に白萩のちる　江
浮雲の舟のまくらをかたるとて　節
入相またば小はしらもあり　茶
麁相なる膳の先なる安積山　美
蝶にわかれて歸る吉六　節
花ごゝろ松風吹て暮安し　江
欵冬あさく禪にかたむく　美
餅搗てとなりの壁をたゝく也　茶
耳のあかるき雨の片濱　江
乘ものゝ人の涙を鳥が啼　節
二度あふまじとわたす榊葉　茶
夏の夜の水臭きまで更かゝる　美
伊丹は風のうつくしうふく　節

米買のけぶりの中につゝ立て　江
事觸のいふとはまこと歟　美
花芒穗に出よ〳〵とうち粧ひ　茶
こゝろのはしをなかぬ蟀　江
鑵窪を飛してみたき秋の月　節
辻の榎にお茶たてまつる　茶
寢起からあたらし疊嬉しぐて　美
小春のやまの跡しさるかな　節
寒空の燈心買に舟をやり　江
襟のあたりに大鐘をつく　美
二位どのゝ薄花さくら咲にけり　茶
鳶もよろこぶ籾のはへくち　執筆

面〳〵に我ものらしや花の陰　立志

宇治川に夜の眺望して

明日はとく蟬なかせよや朝日山　仝

猫のすゞみれて

猫の妻いかゞなる君のうばひ行　嵐雪妻

さゝ舟の甲斐

大かたの月夜にあへりうめの花　可都里
こがらしになほ有明の哀なり　蟹守
散つきてよい日になるや芥子畠　漫々
芒見て後は寐られぬ月夜哉　麥阿
はる風や鰯のひかる千草濱　來雅
鼠尾艸や咲えぬもけふに折れ鬼　有斐
山里やまだせはしくもなき芒　嵐外

なゝ竹の信濃

藤の花ほとゝぎすきて咲にけり　蕉雨
時鳥己が初野ゝ行もどり　素檗
山の春行水よりも暮遲し　扇杖
うぐひすが腹くゝりけり小春山　仰莊
海へむく山末枯をいそぎけり　如毛
野越する人のうしろや春の風　雲帶
いつ來ても夜のおもひぞ夏木立　壺伯
鶯の首をひねるや古すゝき　希言

からむしの越後

紅葉せぬ松もよけれとかけの家　宇瓊

わが葬は芒も植ず秋のくれ　喜年

老松の加賀

朝の間は酢も醒し燕子華　廿谷

むだ山に比良のつゞきて春暮ぬ　眉山

夕紅葉丹波

うぐひすのおりてありくや苫の上　武陵

八重がすみ出雲

棒突て僧たてりけり五月雨　花叔

松風の播磨

菊かれてすら／＼と日の暮る也　布舟

卯のはなや書見て夜のおもしろみ　一草

歸雁聲なきうちは春の鳥　桐栖

八束穂の豊後

門に田はあれども人の蛙かな　月化

清水くむ家見て過ぬ松の間　葵亭

赤牛の肥前

炉閉て一日高き木ずゑかな　祥禾

星の夜をものまち兒にふかしけり　簾風

柿の葉に秋のもろさのみへにける　菊也

小富士の筑前

綿弓の下にしづまる乙鳥哉　卮詞

玉櫛の薩摩

見殘すもあるらん花のあらし山　闢叟

舟唄のいよ

奈良七夜降やしぐれの七大寺　椤堂

岩はしの大和

鳴鹿の奈良にはしたり朝の山　空阿

つゞり錦山城

生て居ていつまでもせむ靈祭　貞室

亡執の雲ぞや余所の峯の花　蝶々子

子規聲遣へかし寒の中　貞德

ものもたぬ長者となりつ老の春　貞恕

終日の雨めづらしき彌生かな　信德

雞合尾に櫛とるぞ人ごゝろ　言水

乙鳥の巣を拜みけり風破の關　仝

如月や老が世となる雲と水　瓦全

元日は嬉し二日はおもしろし　丈左

腹のたつ日はなき萩の盛かな　土卯

家近くなれば宵なり冬の月　鷺少

春をまつこゝろで苔む椿かな　葛年

さゝ竹や嵐みだれて春の月　茂良

萍に聲乘せつらんほとゝぎす　居然

杜若帋燭ともして見るあたり　千崖

ほとゝぎす容せばくとも京の町　鳴雄

しる人にあふこゝろなり初櫻　其成

辛崎がなくばどこまで麥の秋　蒼虬

夏の夜は机のしたにかくれけり　玉屑

さゝ栗の伊賀

初雪に見たさよ簑の我うしろ　若翁

烏帽子魚相撲

竹の戸や繩をひかへし霜の影　葛三

旅すれば寒くて梅のあたらしき　叙來

帷子を着る日だになく老にけり　玉珂

小すだれの上總

いざよひの月のぼりたり色の濱　輪之

起あふやあたらし娵と鶯と　一醒

すり石のひたち

春の日や草に寐よとは習ねど　湖中

やる人につんでもらひぬ菫立茶　翠兄

月かけの木兎にも鳴歟猫の戀　芷雯

木のもとや牛に飼ふさへ花の水　祇三

晝も蚊屋つりて庵の奢せむ　得雨

七夕や七色草も花をもつ　阿量

ふるければ何木もゆかし閑子鳥　左文

鵯もどこへ歟いにし小春かな　九雨

月を寐ぬこゝろは持たじ鵜飼人　山之

獨活にのび杉菜にのびる日影哉　竹里

うぐひすの寢所見し歟茶筌賣　遲月

白雲の上野

年寄の家路のみいふ十夜かな　霞樵

木兎も音ぞしるかはしは帋子　壺半

紅梅の門には入るな生海鼠賣　浦人

甲斐の猿はしにて

橋下の雲にも入る歟ほとゝぎす　對竹

笹子峠を打越る

はつ蟬や日をうけはづす山の松　乙因

酒折の宮

鶯の啼たあとなりかむこ鳥　太節

朝眺望

裏不二のかるみを見する四月哉　乙因

信濃路を過る時

卯のはなの卯月はなしや山ざくら　對竹

ひと日ふた日木曾路を打めぐりて

山水の音も馴よき若葉かな　都牛

かたみにつく杖のたよりに契りなせる乙因は、小笹の風のあゐなくみまかりて、夢さなく現さもあらぬ空蟬のもぬけのからを名古屋にとゞむ。さらぬだに旅はあはれのあまたあなるに、己が身に己がこゝろ打そはぬおもひなりけり。きのふのかなしびにひきたがひて、けふはあやめの節句なむかふ

軒あやめものがたりめくかり寐哉　太節

甲斐が根を過るとき

をりしもや機屋が家根のかきつばた　太節

雨蓋なく消かたの月　士朗

這ふ蟹をしばしと舟に生置て　岳輅

紅葉のやまへ使たてける　對竹

しづかさは葎たふしの秋の風　松兄

砧をうたぬ夜とてはなし　すゝみ

巾着に小粒をひねる旅寐して　朗

雀のよはひをかりる分別　節

初雪に竹覆かゝる細ながれ　大阜

小原の寺へ火をとりにゆく　輅

被衣着ぬ髪は白髪の淋しくて　竹
　つれなき事をかたる舟人　朗
どさくさと月に更たる中やどり　進
　小笹に露をつゝむ山ざと　阜
米搗も鹿のいのちや惜むらむ　節
　酔がさむればかへる宮守　竹有
花のむしろ疊む間もなき嵐山　梅間
　雨さへ春はおかしかりけり　竹
鶯も翌は老行壁やれて　轄
　嘘の聲のひゞく鍋ぶた　兒
山伏の起も揃はぬ篠まくら　朗
　蘭のにほひにはしる白雲　節
月のこゝろ門の柱に書つらね　竹
　伊勢の廿日はをどりそめたり　轄
いざわれもふくべたゝかんきり／＼す　兒
　父に笑ひをうつすゆふぐれ　朗
小坐頭の袖に櫛笥も壘る也　節
　情の市に名を流したる　竹

木がらしの吹しづまりし長岡に　轄
　佛かたぎの夜のうづみ火　兒
槌賣がもの怖にみな驚きて　朗
　空が見たさに迯すやま鳩　節
松の香に押ひろげたる朝朗　竹
　華の日かげはなほ寄麗なり　轄
荁汁に年よる人の五六人　兒
　霞の衣を給ふきさらぎ　朗

袖簑のあふみ

殘月や雲井の雲雀草の雉子　蝦州
綿ぬきややがてこそばき耳の穴　祐昌
我ながら我なつかしや花雪吹　志宇
麥秋や稀に人行むかし道　騏道
見あけてはまた見おろしぬふじの山　亞渓
飛／＼にころも打なり艸の中　五來

蛤の安房

春がすみくわれぬ草もなかり鳬　郁賀

寐て起て大晦日と成にけり　杉長

文月や硯水ほど今朝の露　保友

烏帽子なき人丸見たや春の夢　來山

小むすめよ桃の木うへて桃のはな　西吟

左義長やむかふに見たる人の皃　仝

花をやる櫻や夢のうき世もの　すて

こまりけり浦の苫屋の秋の暮　一鉄

散花の世や蕎麥切を喰仕まふ　越人

すゞしさを養ひたつる暑かな　椿子

文机や花ちる梅の筆返し　幽山

歸華咲けり麩屋の尻合せ　仝

月のもと陸奥

夕げしき鶉のあし水にはじまりぬ　乙二

梅柳世は木がくれて見ゆる也　雄淵

花鳥の中うへもなき朝日哉　巣居

卯月とは花に別れし名なるべし　冥々

朝空の目にすりつくや雪の山　文卿

一くねり寥し青葉の秋のやま　芳之

花咲て芒のさまは荒にけり　巣也

鹿の聲人は夜更る噺かな　鶏路

ゆく秋や信夫の山の道みゆる　東卿

明行や霞の端の浮寐鳥　百非

汐風や日のむつまじき春の山　天民

いやしくも赤菊花を急ぐ也　冥也

陽炎に土實京のほとりかな　秋夫

こゝをされば水となりゆく清水哉　きよ女

猫の戀草嗅てけり後の朝　与人

梅もてばくゞりにくさや蔦の門　曰人

人更にかすかなり山ほとゝぎす　平角

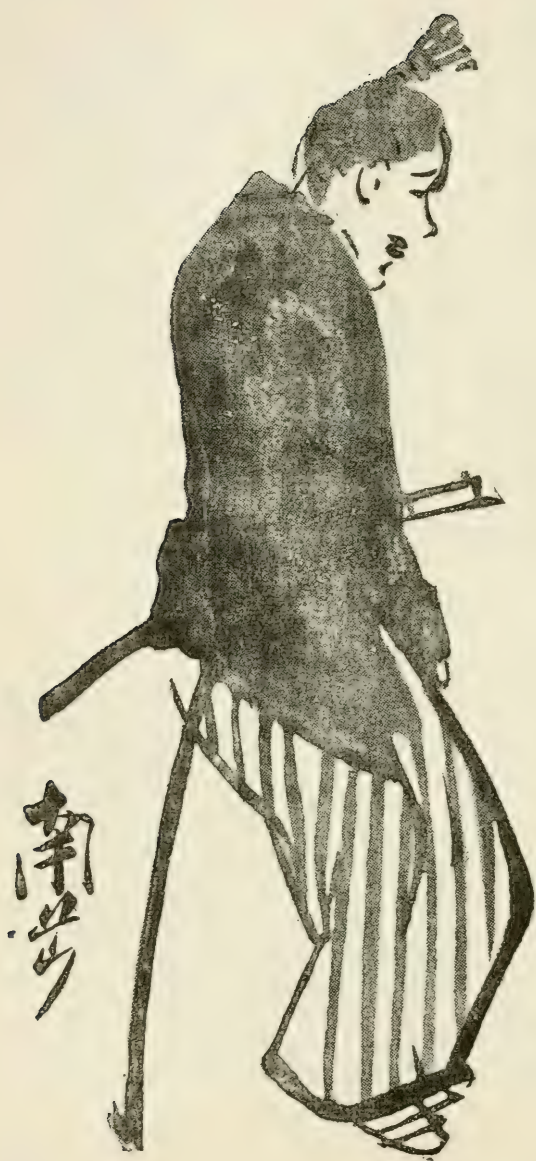
夕紅葉赤きはものゝ盡る色　素郷

水鳥の出羽

夕雉子が戀する草歟きじかくし　長翠

おもひやる蜆の味や山紅葉　可來

秋の山ちかくもならず馬のうへ　野松

芦鴨の河内

春の山雫するほどかすみけり　未紀

諸白の和泉

癖ふりのさむきはしより櫻さく　キ齋

紫の三河

雪はよきものよ木の端竹の折　卓池
ものかげを見ても鳴たつ巣鳥哉　秋擧

檜の薫るいせ

十日立て十日ふるびぬ青簾　青川
山鳥のかげさへ見へず花楞　孔阜
舟は行ものよ芦の穗芒の穗　推己
湖は山の中なり苔の華　翠川
ちる紅葉何も申さず戻りけり　菊所
雁かもの目もさめぬらん梅花　椿堂
鷺眠るよりはしづけき水雞哉　丘高

鶺鴒の尾張

春の人これも柳にかくれけり　臥央
ちればこそ友はほしけれ山櫻　桂五
うぐひすに心あづけしあした哉　少汝
ちる〳〵と囃すな花のむら雀　七人 松見
提て行夜の山吹哀れなり　方明
朝明や萍にみる魚の道　梅間
垣ひとへへだつばかりよきじの聲　天老
やまざとや薺の菜も梅の花　五雄
松に雀の局持けり縣もり　すゝミ
時鳥めでたき花の散しより　大高
押あふて人は何くふ里神樂　吐山
啼田にしうきくさはゆる水やこれ　大巣
花けしやおもへば遠き翌の朝　谷臥
よく燃てやゝ哀なる落葉かな　沙鷗
鳴やうもない欺師走の鳶鴉　月庭
あり〳〵と菜の花みゆる垣ね哉　國水
花園はもし鶯の名所歟　東陽
夏の月名もなき處こそよけれ　騏六
山かげや何がほどけて春の風　大阜
旅のもの十日も食へば遲ざくら　羅城
花によき言葉づかひやあらし山　竹有

月のない夜を寐て居れば蟋蟀　恒丸
葛の末葉のたゝくむしろ戸　太節
湖のあかるきまでに秋くれて　仝
ひとりしぐるゝ紹鷗が影　丸
苔もつ梅は寒くも見へぬ也　仝
みさごの觜をぬらすあけぼの　節
水汲に出るたび拜む箕面山　仝
ほろし（疿瘡）の痒き夏は來にけり　丸
葵とは待夜かさねし名なるべし　節
馬にめしたる戀の見事に　丸
さゞなみのけしきをくづす鐘の聲　節
露の卒都婆にものはいへども　丸
月薄き廂のたもとを蚊にさゝれ　節
鴈きゝ初るもじの關守　丸
やき塩のうへにも風のなじむかと　節
銀屛ふるすとし〳〵の花　丸
朝陰に蓮の根をほる火をもやし　節
鯰の髭の寒ききさらぎ　丸

俤のかくるゝ傘に霰飛ぶ　仝
茶のはなほどき情賣るかや　節
阿彌陀寺に夢の平家を啼鴉　丸
舟のゆふべに日のさしまはる　節
さかづきに風薫らせむ松のかげ　丸
田の神舞へよ牡丹さくころ　節
舁揚る駕籠の隅まで夜の明て　丸
半井殿をまてばさびしき　節
時めかす菜に鶯の名もあれば　丸
六田のかはづ高圓の月　節
春雨に草履ぬらして遊ぶらん　丸
假のすまゐに小笹むすびて　節
十露盤の相手にほしき星もある　仝
京が見たきと牛の吼る歟　丸
ゆく年の水のやうすもひとよ川　仝
もの忘れうにつく杖もなし　節
初花におどろかされし人の來て　仝
海苔のくづゝく鮓桶の蓋　丸

寄梅の攝津の國

隺下りて春の浪とは成にけり　升六
落る葉は落て月ある山家かな　鷺雪
あした苅蘭ともしらずよ鳴水鷄　霞蝶
たかうなる木槿の奥の蚊遣哉　吾雀
春の夜のあまり木深し淀の松　萬和
人の見る曙はなしなつ木立　非眉
おく山や戸の明たてに露が降　三津人
ゆく水の音明安き夜のはじめ　尺艾

朝憲の下總

家〱に世が更行や木の實わる　雨塘
世にふるは我よ野蓼よ秋の露　双樹
ちる桃に鍋めしおろす戸口哉　一白
かくれ家や蠅にまけたる人の來る　月船
將衾人のためにはつくらぬぞ　素迪
此梅の花はいつさく小松引　升入
一日の名に限るべし初ざくら　森々
筑波根に時雨こんだる夕日哉　道明
柴の戸にあり過たもの冬の月　夜白

春暮てまとの嵯峨と成にけり　之綱
ほつ〱と椺の實煮るよ五月雨　胡蝶
芦の芽やふいと飛だる蟹の泡　古彥
むし啼や舟に積たる萱莚　淮南
よい程に紅葉しておけ蔦の門　斗橋
竹臥て雪の遠山見へにけり　梅後
どの鴨が無事で明日又逢ん哉　竹葉
萍を見る間に秋のわたり鬼　蒼峨
春の雪ふるや生海鼠の命まで　亡人 風笠
行年や人の業より見へ初る　金堤
冬の日や誰おもかげの川卒都婆　東洋
名月や何に火ともす山のうへ　秋左
ねぶか堀る人を啼の敷家鴨の子　鱗々
おもしろき使は來たり籠の雪　柑翠
初汐や月をのせゆく草の上　蘇覺
雪の朝侘しくおもふ家もなし　猊母

白川を越て

旅人になりすましたり閑子鳥　兄直

しら濱やこがらし凪し星月夜　魚房
露寒や太刀佩てくむ清水井戸　滿良
衾着て花見る命かゞめけり　さ彦
壁落て影押こむや山の雪　一阿
朧月軒端の低き住居かな　吐雲
山かげに痩稲干し小春かな　巴水
雛のなく隣むつまじすゞみ臺　菅美
しぐるゝや篠の鹿火屋もくづさぬに　其明
逢坂の山越來し歟なく千鳥　樗白
寒ぎくや日かげの冬も捨られず　路哉
七夕やはしたなき夜の草枕　榮松
如在なく月もさす也梅どころ　梧雲
芹川を越れば夏の月夜かな　圃石
石菖に風の曇りや鳴田にし　玉宇
朝凪や鴨をかぞゆる馬のうへ　雨隣
夕がほやすぼめて這入日傘　淡月
朝の間や千鳥のとまる捨筏　素鳳
いとまある人に咲けり初ざくら　酉水

常夏やあちら隣は相撲とり　吟水
椎柴のつたなくなりぬつぼ菫　東騏
新酒酌て又見直すや角田川　田稚彦
笹の雪みばや雀の起ぬうち　礒丸
漁すと聞さへ寒き夜頃かな　如翠
扇にもかよふや松の嵐山　仙虎

城山懷古

春を泣日もあるはこゝ山ざくら　鳴僑
おぼろ夜やゆかしきものは須磨簾　もと女
初蟬の露戀しい歟竹になく　きせ女
春の日やはてなし坂を牛こゆる　馬逸
ほとゝぎす老を啼ぬ歟秋の雨　麻山
朝の間に都出る日の芒かな　半星
くだら野や鴫の喰折る芒の穗　眞澄
花芙蓉淋しいは我こゝろにて　恒丸
都にもこんなとこありかむこ鳥　長齋
鳫の聲月を寐てまつ夕より　魯隱
もの間に來易き門の柳かな　八千房

さみだれをおしのぼる也野路の雲　月居

志賀の山越してむかしをしのび、
むさし野の草まくらに露の袂をか
たしきたる友人太筇が、冬ごもり
のこゝろは

衾着てたゞ月華を寐言かな　其明
　松さへあれば雪の下庵　太筇
浦鵆波間の貝をほりかねて　柑翠
　酒のさめたるゆふぐれのそら　魚房
小籬に薺の露をふるひかけ　蘇覺
　箒の先も東風になりけり　蒼峨
蝶鳥の毎日ふえるくらぶ山　兄直
　鐘の聲にも情こもる歟　巴水
百合の葉にゆかしい假名を書はつり　滿良
　翌の御秡のみるふさを刈　樗白
降雨の火をたく家もあればこそ　さ彦
　曾良に別れる牛に後れる　路哉
擬負し鷹を飛せて見る月に　圃石
　軒端ならべし京のあき風　吟水
雜魚賣も彼岸參りに立交り　東騏
　ふくべかぶりて皆を笑はす　磯丸
伊達殿の坪の眞萩の花ざかり　田崔彦
　獺の嫁入のさたも薄らぐ　覺
琵琶洗ふ水に鳥居の影さして　峨
　素湯たくほどはひろふ松毬　明
朝皃の蔓に霜おく我なれや　筇
　をし鳥も憂き數にかぞへて　翠
白雲に扇さしたる白拍子　房
　若葉青葉に埋む鎌くら　直
一文に橋わたらせる宵の雨　白
　猿にひかるゝ木食の袖　良
扇杖の秋をたばこにむしる也　巴
　月の朝から駕籠舁に行　さ
毛見衆の立れた跡に雀の聲　哉

甲州金に替しふらそこ(硼子)　田
帆ばしらに日の出〱のあり難く　吟
母の白髪もはやせ節季ゆ　騏
鶯もへら鷺なども春は來る　丸
雪解にぬらす足袋の爪先　石
楽阿彌があみ戸は花の留守がちに　恒丸
小桶ほしたる皂角の枝　執筆

鶯は啼ども月は山の上　岳輅

荒たる園に餝をとりて

花ことに菊にもあらず八重葎　士朗

三上山をひだりに打みやりて平松にたどるほどは、むまやの道つゞきにもあらで、篠の千押わくるばかりの細道なり。其間三里に過ぬなかばもこえずして、日ははや松の木ずゑをたかうす。かゝるあたりにては、ひと夜のやどりを乞ふだにもあやしまるめれ、などつぶやきてかたへなる草の戸を驚すに、あるじにもこものにも、たゞ六十まりの叟のひとり住なせるなるが、さうなくこゝろよげに敷衾のむしろをゆるされて、古きふみなどあまたとり出し、夜さら打語りつゝ其儘落ちりしも、いたづらになくや蛙のおのれが例の袋に拾ひ入しが、今はたこゝにもらすなりけり。

潤はしき稲のほなみの朝日かな　路通
雁もはなれず溜池の水　呂房
しら壁の内より砧うち初て　芭蕉
らふそくの火をもらふ夕月　正秀
たのまれて銀杏の落葉うち落す　野徑
すがりて乳をしぼる爲のころ　乙州
關守にはや馴染たる咄しずき　晝好

身は脊うりと成て悟りし　珍碩
あたまつき春と秋とは定らず　盤子
金ほりに入洞のともし火　里東
田の中にいくつも稚の打ならび　探志
芝居の札の米あつめけり　游刀
御嶽より駕不自由に旅の道　秀
夜寒にしむるおひのほころび　通
月かげに二階の軒をつきあけて　好
そばの匂ひのむせるしたづみ　東
かげろふや海手のはなのさかり也　刀
東風ふきしほる菊水のはた　子

此集のなりけるを
つくばねもとなりにもちて犬古今　葛齋

文化戊辰秋

江戸日本橋通二丁目
書肆　小林新兵衛

俳諧 西歌仙

一瓢著

東都 知足坊一瓢著

俳諧 西歌仙

校合 有鱗 兎一 徐柳

この皐月は例の年よりも雨いたく降つゞきて、明暮の小窗もたゞ蝸牛の家をかつぎ、寄居虫の扉を守るに似たり。あまりつれ〴〵なるまゝに、年ごろ諸州より風交せしふみのかたはしをもひらきて、一日の憂をわすれむと、文庫のそこかたぶけたるをりから、ひとひらの巻たるものをさぐり出せり。とりあけてこれを見れば、いまの世に涼しくも聞えたる風士たちの筆の跡にして、五とせ六とせも先の事にやありけむ、尾陽の士朗やつがれが殘暑のほくへ脇を起してより、神路山のぬさとちらし、あすはの神に言傳て、鴻の浮巣のながれもとゞまらず、みやこに飛、難波にひるがへり、安藝・播磨はいふまでもなく、ゆき〳〵て四國へわたり、筑紫へおもむき、天涯海隅を經て果は長崎のうらより、四とせばかり先に屆にたり。されば西歌仙とも名づくべきにや。巻の首尾三十六句は三十六人の筆のあやにして、是をひらけば風雲のおもひにこゝろを動かし、是を巻ば狹室のうちに海内の友を遊ばしむ。それが中に或は誰彼はひとつ蒲團に足をさし入れ、互の推敲に情をこらし、一盃の烟にとく〳〵の佗を盡したる、或はいまだ面會もなく、たゞ折ふしのふみにとひかはして、つゆのこゝろをも汲しり、とし比の思ひ、花に戯れ月に嘯く根なしごとなど筆にいはせて、ちかづき兒なる、或は風狂の名のみしりしられたるまでにて、消息さへなきも其人の墨跡を見ては、なりかたち顏のかまへなどそらにおしはかられて、なつかしき事いふばかりなし。さるにても士朗ははや五とせもさきに黃泉の旅におもむき、樗堂もその跡よりときけば、なほその外も覺束なし。この次に往ものは誰ならむと、無常迅速のいそが

はしさもおのれにかへりみられて、そゞろにうしろ寒し。かくあぢきなき世中のためしに、この筆のあとを摺て四方の風士におくる。きのふはけふのむかし、けふは翌のものがたりなる事を、誰もたれもわすれざれとなり。

文化丙子夏　知足坊一瓢　〔知足坊〕〔一瓢之印〕

笹の散るやうにはへらぬ暑哉　一瓢
　月のうき出る水を見て居る　士朗
雲けしきすれば雨呼ぶ鳩の聲　梅間
　兄弟ながら斧提て行　翠川
菜の花の奥にちひさき戸をあけて　推己
　鯏ほす縄をゆする春風　椿堂
山伏の來てはほしがる雛の膳　五雄
　永野の馬をかへす夕暮　桃林
糠雨に狐のよめりいそぐらん　奎鳴
　くちなし咲て足のつめたき　省我
しばらくは人なき窓にとり付て　曉浦
　ふつに拍子のぬけるから竿　文常
今朝入し月が又出る橋の上　甘谷
　をどりにからん通圓が門　雪雄
しら露の玉にもぬける欄して　魯隠
　ゆかりのいろのみゆる蕎麥きり　長齋
何の樹の花といせ路に泣に來る　鷺雪
　共てふ鳥も彌生望の日　米ひこ

あらにくや心殘さぬ田螺売　桐栖
寺の氣に入男おもひに　脱負
冬の雨筑波の神に食負て　玉屑
落葉にくらき海のなる音　化貝
白菊の琵琶は枕にはけ殘り　百明
鳥に哀といふことはなし　武陵
つぶ〳〵と豆振る飯の焚あがり　扁道
小言の中に空耳をして　樗堂
馬の尾をむすび直して笑ふ也　鹿門
ことしは寒い閏名月　才坡
上人の言葉のはしも萩芒　篤老
ひと里越て匂ふ小鰯　羅風
酒おけが十づゝ十も川べりに　丁國
口のてり詰る廿八日　自山
煤とりしあとはめでたき青筵　凡坡
夢の敎の節に年よる　四軒
また花のさかぬうちから鈴つけて　葵亭
苔の疊のぬける陽炎　幽歡

一瓢　釋氏、号知足坊、亦雪耕庵、亦橋中居、住于江戸谷中本行寺
士朗　井上氏、号朱樹、亦琵琶園、俗稱専庵、尾州名古屋人、七十有余歳而没、于時文化九壬申五月十六日
梅間　梅間氏名發、字子龍、号張古、俗稱牛十郎、尾州名古屋人、居于梅花園中
翠川　瀬古氏、号花鳥亭、俗稱喜左衛門、住勢州松坂
推己　淺原氏、通稱牛十郎、住于勢州松坂
椿堂　徳田氏、号東竹庵、俗稱長兵衛、住于勢州山田
五雄　号萩亭、俗稱錺屋文助、尾州名古屋人
桃林　勢州古市人
雀鳴　松田氏、名幸慶、号雨竹庵、俗稱與吉、勢州山田祠官
省我　勢州山田御師
曉浦　勢州人
文常　姓源、辻氏、名用信、字府留、号茘亭、俗稱平右衛門江州堅田處士
廿谷　号丹頂林、亦萱菰庵、加州金澤人
雪雄　号梅室、加州人、來居于平安

魯隱　山形氏、名長康、号繩海子、俗稱用助、住于浪花今橋通

長齋　姓巳五三、名公濟、字廷美、号柿蝱、俗稱作左衞門、住于浪花淀屋橋南涯

雙雪　俗稱茨木屋和助、住于浪花心齋橋上人町北

米彥　長谷氏、号白雀園、俗稱米屋彥太郎、住于浪花堂嶋濱三丁目

桐栖　仁木氏、号五彩堂、通稱竹輔、浪花人、居于攝州兵庫

脫屓　播州人

玉屑　釋氏、号栗本、住于播州米田神宮寺

化貝　播州人

百明

武陵　号杜陰、通俗西尾吳四郎、住于丹州篠山城西大山

帋道　備後人

樗堂　栗田氏、号息隱、亦二疊庵、豫州松山人、遊于藝州御手洗沒、于時文化十一甲戌八月二十一日

鹿門　俗稱松嶋屋常十郎、藝州御手洗人

才坡　竹原氏、藝州御手洗人

篤老　飯田氏、号篤老園、俗稱完藏、居于藝州廣嶋

羅風　俗稱油屋仁右衞門、住于長門赤間關

了國　齋藤氏、俗稱東四郎、豐前小倉藩士

白山　大野氏、名瓢風、筑前福岡藩士

凡坡　曾我氏、稱養庵、住于筑前潟加多

四軒　田口氏、俗稱儀兵衞、住于筑前福岡

葵亭　姓佐藤　俗稱藤屋藤右衞門、住于豐後日田隈町

幽嘯　越後長岡人、來居于肥前長崎

よろづ病がちに老くちて、友もさし〱になくなりぬるを

露の身をもてあつかふや五月雨　成美
うづみ火を鼻で尋るひとりかな　裒丁
茶ばたけや年貢すまして花盛　壽翁
里の子や正月疊つめたがる　老鴉
鰒の毒けしたやうなる月夜哉　心非
ひろげても寒菊さびし古茶巾　車兩
うぐひすのめでたく〱し夕暮し　夯貨
寄やすし枳殼もいまは花に咲　守靜
御油までは往て來た兒や雀の子　道彥
花にさへかゝれば雨のさはがしき　百之
三つほど寄たき夜とはなりにけり　一裘
人並に朔日をする若和布かな　周化
誰が露のめざまし草ぞ花御堂　桃隣
白露や十日に一度掃もする　太民
はつ蟬の鳴日となりぬ草はゝ木　巴濤
連立て後は紛るゝ鹿の子かな　秋耳

白魚や五歩ほどたらで結ばれず　對竹
ものに倦て霜夜を覗く眼鏡かな　諫圃
はるの雪顏つき出して降らせけり　文屋
五月雨や文とりかはす家のうち　久藏
橋かけてさもなき水も夏の月　芝山
かへり花蝶はほとけになつたやら　鈍齋
十月の日に横たふや瀬田の橋　宇橋
塩釜のはなれやま吹咲にけり　長閑
みじか夜は鴉の背に掛はれし　永矢
青臭き雀の聲よ蓼の雨　太笻
花ざかり地獄の使おびたゞし　仙骨
古家がけふもうれたぞ桃の花　鬼洞
何處までも秋をのさばれはな芒　寥松
茶の花に咲なくされなそこの家　一阿
山を燒くうしろも雪のあかり哉　雨籟
まほろしや牡丹の花もたのまれず　孤山
かはせみの声にちよいとや角田川　蕉雨
野風呂して煙もてなせ藤の花　竹馬

篝くさきもの焚明の船渡かな　午心
夕がほやゆかりがましき人の來る　明良
かすむ日や拍子もかえずいその浪　可麿
鶯にはたきかけるな畳の粉　竹妓
桃さくや家ほり建る浦の人　完來
きり〴〵す鳴けとて植し小菊かな　詠歸
蚊屋釣ておもひやみけり升落　護物
長閑さにまけて淋しや浦のやま　芳洲
はつ雪や笹にしぐれて何地ゆく　胡準
暮るゝまでたのむ木蔭や夏の月　一蕙
うぐひすの見なれ聞なれ端ちかし　其堂
ちる花はつもらぬものを降こゆき　鷺雪
十月でおきたきものや道の家　采年
梅が香の峯にとゞく歟雪おろし　宗瑞
知足坊閑中
御月夜にしかられさうな千鳥哉　米堂
春風や關の手形の横にとぶ　蛙足
はるの夜はうなされてさへ面白し　少年　雀人

景清も覗くひけり五條坂　兎一
紛れ込四角な錢も花の中　和扇
蝸牛なら大きいぞ我いほり　徐柳
扇にも曲てかきけりなつの月　省己
米袋おくや柳の瘤のうへ　徐風
霜枯をほのめかしたる菜汁哉　春成
夏の月とりはやされてちさくなる　有鱗
、
蟹の目のおろかにたつや五月雨　國村
黄昏や花のむかひに待乳山　斗月
野の空や噓かけてもひつかすむ　東雀
麥の穗に膽つぶしてやかへる鴈　靚市
猫の戀鳥居にかけをかくしけり　梅仁
夏に入し脩をこそぐれ閑子鳥　其杯
墨染の身をまくり手に蚊やり哉　雅長
松風を袂にいれんころもがへ　青凉
口あいて不二ものむ氣歟小蛤　可良久
菫にも添たけしきやふじの山　五渡

霰とははんじそこねつ宵の空　也好

山城

夕陽に引戻されなあとの鴈　蒼虬
むく起や稲荷やしきの麥ひばり　茂良
日表をみなかみにして春の水　土卯
さゞ浪の調子崩すなはるの風　其成
明て行さき／＼鴈のわかれかな　月居

大和

ほとゝぎすあふせかけ鳴死嫌ひ　空阿
宿かせと鳥の來て踏む深雪かな　拾葉

河内

はや人の家建に來る野うめかな　耒紀
陽炎の直にのぼるやはるの空　寶雨
蛭ひとつ水縫ふやうに動きけり　花史

和泉

傘さして出れば柳に日の目さす　喜齋
松の戸や風はとばねどはしり炭　背笛

攝津

とゞまらぬ春に海老汲むみなと哉　万和
けし咲や箸とる隙も浮世にて　木老
十月の花の下なり炭一駄　井眉
山風の押へつけるよ鶺鴒ふたつ　尺艾
あけぼのや露も浮べきはつ鰹　三津人
鶯に見せてやらうぞ炭あかり　星譜
咲日から草木とは見ぬ牡丹かな　奇淵

伊賀

塩賣の鐘撞てゐるしぐれ哉　猶來
春風やまだ晝過の松の風　士得

伊勢

涼しさや人の望の果もなき　丘高
大年や炭挽て居る相撲とり　耕圃
寄付の松のはしらも小春哉　周総

尾張

夜通しに降名なりけり年の雪　竹有
草の戸に見遁す月はなかりけり　少汝
山の月わかれて來ても庵の月　鹿野

植る間もはやかくれたし竹の蔭　東陽
祇園會や人の心は花に鳥　逸人
散り來るを名にして庵の花鱠　杜堂
死殘る人の多さよ盆の月　岳輅

三河

月の出てかはるや海の鳴る所　卓池
山口や秋をしるべの栗のいが　岱呂
鳥籠の棚つり直すかすみ哉　棊老
煎豆や雨の若葉に京ばなし　秋擧

遠江

事なきをけしきに持て夏の月　木甫
梅さぶし何をきるにも菜庖丁　露岳
咲く花を眞向にこくや鯛の鱗　三枝
雛店やすり拔て出る二日月　露喬

駿河

夕凪や汐家の合歡のさりげなき　書牛
飛鳥は鴉ばかりよゆき二日　石雅

甲斐

雁出つ御潜りつ日ぞ永き　可都里
春雨や今宵の宿も海松海雲　有斐
梅柳捨られぬ世が何處にある　漫々
尼寺のけしはちりけり蓮の花　重行
捨られた母に逢ふ夜や春の雨　百二
あさな〳〵草鞋賣とや柳ふく　一作
やるせなき影は寐てさへ秋の月　眞恒
冬の夜のつもるや青き松の月　草丸
氣のつよい蚊の生れけりかきつばた　才馬
掛てある大長刀やかきつばた　草烏
泥に身を捨たこゝろの巨燵かな　嵐外

伊豆

涼み臺月あるかたをまくらかな　雪髭

相摸

船をりやとりはやされて更衣　葛三
浦の山ゆふべは秋のうしろつき　玉珂
簑かりに來たら見せうぞ菊の花　澧水
みの虫も何ぞにかへれ花のはる　洞々

月を見るはづみに來るや老の波　うつほ
馬さしと錢いさかひや春の雪　維賒

安房

笹の葉のさゝやきやうも四月哉　杉長
ゆふ立も待間のありて笹のちる　共文
美しく留守をつかふぞかきつばた　郁賀

上總

凉しさにさく〳〵ふむや蜆がら　三化
野の宮の風除椿さきにけり　里丸
象潟や菫のたねは誰が蒔た　白老

下總

ふみ込て染つてみたき青田哉　金堤
苗代に玉のやうなる月夜かな　雀老
とりしめぬ盆のはなしや宇治拾遺　雨塘
竹の月はや鮓賣の來るころぞ　尼素月
朝風を尾ひれにもちぬはつ鰹　北尼
加茂川につゝかけたりや心太　素廸
やま鳥は何と寐にける鹿の聲　青酒

年かくす人のうしろやきり〳〵す　維平
はね上る羽織の土もうめの花　蒼峨
あなどりて雨に逢ふ日ぞ鶯の聲　青岱
閑こ鳥脊戸から人の來るかして　李峰
花ざかり生れかはらば濡ほとけ　此蘭
もの忘るほどよ鶯野に鳴日　晛齋
枕にも正月させん朝寐して　茶彦

常陸

いなづまに迯たやうなり二日月　李尺
葛の葉のうらなきもの歟猫の戀　柿麿
花の草履輕くつくるを手がら哉　杜年
松風もさら〳〵時やけしの花　祇鳴
春うれし茶水捨ても草になる　松江

近江

このうへにあやめもふく歟八重葎　中齋
月影のしみこむ松のはしらかな　千影
花の下人はひとりも捨られず　宇洋
雲雀なく海へ捨るや足袋の砂　斑草

温泉のすゑの水になり行田にし哉　烏頂
あら鷹や吹雪の中を雲に入る　女 志宇
明やすき夜やちら〱と青すゝき　士明
名月の雨にぬれたる畳かな　千當

美濃

煤はきし空に鰯の匂ひかな　千阿
見所のなきにしもあらず枯尾花　草人

飛彈

鳴蛙人のこゝろをあまくして　備史
二度三度月が出たとて鉢たゝき　乙鷹

信濃

寐て起て手柄がましや今朝の秋　素檗
休まする馬の面まで菊のてり　武曰
我ものになれば掃れず門の雪　若人
涅槃像錢見ておはす兒もあり　一茶

上野

鶯のこゑかきまぜる繪かな　蘿月
人傳のかしこの山やはるの月　柏翁
落栗やかはたれ時のいさゝ水　阿兮
隣までけし畑行や旅もどり　碓令
雀子よはしりくらせんころゝがへ　鹿太

下野

むかひ火や山根を過る露の音　魚とき
柚の花やひとつ咲てもものゝ數　北岱
いつのまに實にはなりしぞ女郎花　雄尾

陸奥

かの草にうちはやされて咲くや梅　平角
から鮭を本尊にして冬ごもり　冥ゝ
夕紅葉赤きはものゝ盡る色　素卿(尼)
梅柳世は木がくれて見ゆる也　雄淵
寒ければ雨の手づまもかはりけり　曰人
これさへも春の青みや豆腐串　雨考
涼しさの見へて歩行や磯の人　沾橋
寐た門の柳潜りてもどりけり　與人
都見てうの花垣をつくりけり　秋夫
水あれて仲上るなり春の月　溟溟

住ふるす月や今宵の八重葎　布席
水かけて明るくしたり苔の花　乙二

出羽

世を捨る人眞似もがな萩すゝき　野松
走り出て露にむせたる小庭哉　五瓢
馬柄杓にひつかけて見る櫻かな　豆英
六月を取て投たりすまひ取　巴陵

若狹

鶯はあつぱれ鳴て老にけり　春哉
みじか夜やされども月の廿日ほど　蟻行

越前

春しらぬ里とはいはじはこべ草　白鱗
蝶來ねばにべなし庵の小菜畠　振ゝ

加賀

うの花の下掃はゝき持にけり　眉山
種ひてゝ餘めでたき命かな　音人
をみなへし名にもおくれず咲にけり　鹿古

能登

冬の日もあかるくあけて鳴雀　晩籟

越中

江戸のさくら大錢はらり〳〵哉　乾夫
ありたけの夏のうまみ歟杜若　處白
母人に巾かねたる雪見かな　白年
溜池の鯉ははねけりほとゝぎす　關蘿
藪入の煙にあかぬなみだかな　虚白
青嵐こぼれのこりの奥齒迄　素樸

越後

くずおれて鶯來ぬぞかきつばた　石海
海老賣の斗りこぼすや門の霜　史千
如月や人にもくれる赤肴　篪永
鶯に筆とつて見ん手六十　竹里
更科の月や草木にかゝはらず　年眉

佐渡

木がらしの吹ほこりけり不破の關　文雄
かはほりの翅かくまで涼みけり　洪竹

丹波

さみだれの中にもみゆれ竹の露　白路

ものいへばはや秋の日も木槿ちる　滄洲

丹後

親と子の中に日永き雀かな　蕪良

はるの雪書降るものとなりにけり　万籟

但馬

から鮭の目にいれ霜のきりぎりす　菊萃

この土にならばや花のよし野山　尚古

因幡

鴬鳴てしづかにしたり春の水　李謙

つまづきし人のさそひて歸雁　雷師

伯耆

むし鳴やぶらさげてある草箒　豐明

琴彈て入のにげばやとしの暮　沾雪

出雲

陽炎に添て出したる菜汁哉　冬賤

蓬生に蚤は入けり雲の峯　花叔

石見

鶏の出ては砂ほるあつさかな　古徑

鉢たゝき待ば來ぬ夜となりにけり　露月

播磨

寐てゐるや木の葉の奥を春にして　木海

透通る海の廣さやかれ尾花　田賓

美作

正月は奇麗過たるさぶさかな　龜年

春の蚊のものになじまぬ風情哉　月麿

備前

しら梅のちるや余寒の星明り　素江

備中

簑虫の巣はつみ残す茶の木哉　閑齋

備後

しをり戸のあかり過たり花ざかり　喜林

安藝

咲までは夕皃の名もなかりけり　玄蛙

花散て庭は反古の雨ざらし　竹葉

周防

若竹に水は汲よくなりにけり　一葉
口癖の暑い中からむしの聲　馬來
火を焚て暑さしづむるひとり哉　青海

淡路

鶯の鳴なり松の下しづく　烏秋
はるの夜の史を見るにも霞けり　青城

阿波

夕がらす鳴や千鳥の淡路島　葦伯
あたらしきとは鳴かねど時鳥　土芳

讃岐

梅咲て脊戸の通ひや炭俵　南之
しづかさのあまりて花のちる日哉　梅堂

伊豫

音聞て巨燵を出たり福沸　石鼎
海山を動して居る團扇かな　呉天

土佐

灌佛やけしも一りん咲そめて　灑江
唐さきの松より雨はばせを哉　松青

筑前

淺(茅)芽生に扇うしなふ清水哉　五朗
夏菊や藪蚊ふせぎの絹はらん　康哉

筑後

畠にも花のちるなり京近所　文角

豊前

春の行奥山里や猿田彦　北溟
さみだれや佐屋のうら家の流しもと　木父
峯の鴈落來るうちや鐘ふたつ　石亭

豊後

山伏の宿は雜木の若葉かな　月化
蝸牛世にあるかひに動く也　有篁

肥前

枯尾花いまは折れるが手柄かや　菊也
炉開て一口高き梢かな　祥禾
星の夜をもの待兒にふかしけり　鞍風

肥後

舟乘がねぶか持行吹雪かな　岫丸

猿曳が猿とりはなす柳かな　一集

日向

けふをしらば小松にあそべ草の蝶　眞彦

薩摩

青柳になるとほしがる柳かな　青梁

高波に誘ひ出しけりふゆの月　琴洲

壹岐

川風のかよひごゝろや松のゆき　三千雄

對馬

影たらぬ影のやすさや后の月　戯蝶

冬年の冬、わが物見塚に旅寐せし
信濃の一茶が、たぬきの夜話さい
ふは

蔦ひよろひゝよろ神も御立げな　一茶

ちれ〳〵もみぢぬさのかはりに　一瓢

大草鞋小草鞋足にくらべ見て　、

一番ぶねにはふるぶちねこ　茶

あくた火もそれ名月ぞ名月ぞ　、

芋喰ふわらは御代を贔屓か　瓢

彼岸經さら〳〵さつと埒あけて　、

草の廣葉につゝむ壁つち　茶

あさがほの種まく日とていそがしや　瓢

子をかりて來てさはぐ藪入　茶

留主〳〵と陽炎もゆる黄檗寺　瓢

ちらりほらりとうれる山の圖　茶

泰平と天下の菊が咲たちて　瓢

三百店もわが月夜かな　茶

うそ寒の腰かけ將棊覗くらん　瓢

すはや御成とふれる小鼓　茶

花の錢こぼれかゝりし隅田川　瓢

霞て來るはれいの其角か　茶

下略

頬白の丸いぞけさは寒いやら　一瓢

二軒もやいに咲る山茶花　一茶

かんな屑ころげどまりに川堀て　、
つくり習ひの酒五百石　瓢
隆達が口にまかせし秋の月　、
おどり法度の辻の立札　茶
みよし野の吉野の里へ錢かりに　、
子おろし草は目にもかゝらで　瓢
僞りのくゝり枕や流すらん　茶
う月八日は剃こぼつ日歟　瓢
今植た松になけ〳〵ほとゝぎす　茶
膳所の生洲に名視ひをいざ　瓢
なけなしの白手拭に穴あけて　茶
あかずも見るや妹がよこ顔　瓢
うす霞うかれ祭の有明に　茶
花のたもとのよしや焦ても　瓢
長閑なり足利流に仕なして　茶
曾呂利といへばめでたがらるゝ　瓢

下略

草庵四時

われたのむ門ものらくら柳かな　一瓢
蟻も出てもてなし振やうす疊　、
むしの來るしほにもなれや壁の草　、
胡麻三粒はねても嬉し霜の朝　、

待宵辭

橘中居

それ待宵といふを、何れの時いかなるものがたりにや呼そめけむ、かの侍從が名に傳へたる、わきて風雅のうへには、まつに心のせちなるや。すべらぎの高きうてなより、賤がふせやに至るまで、老たるも若きもをのがさま〳〵もてはやさゞるものやはある。さるにても、或は棋圍賭ものになづみたる明暮さへわかで、手のまひ足の踏ところも覺束なく、宵まどひがちなるは公の大事、ちゝはゝのいまはもいかにやあらん。或は妓女・遊君にふけりてまつに佐夜姫が泪を忍び、槿花一日の榮を願ふ。ま

して親のいさめ世のそしりをつゝめるものは、心のいとまなく、月を余處の待宵を花とも團子ともおもふらめ。されば廬山にかくれ竹林にしのびたるどちは、今の世に偏屈とも片意地ともまうすべけれど、これらの人々には、しろがねの猫も邯鄲の枕も本意ながらまし。誠や月日は百代の過客にして、行かふとしもまた旅ならぬかは。われは今宵の空にかけて、夢中のうつゝをかこつにこそ。去年の秋は病雁の夜寒におちて、此世の旅寐もあはたゞしく、障子を隔てしその光りをさへ、灯のあるかなきかのうつゝなく、與趣のおもひ不思議にながらへて、今日に至るもまたまぼろしならずやと、籬邊みづから水をほどこし箒をきよむ。黄昏より前栽を掃らせて、供の備へいと淡し。かねて天津閣と名づけたる机前の樓に登り、燭を塞げ盃を擧て東南萬里に魂を放つ。侍座の三五輩左右より酌をすゝむ。方外の知己たれかれも今宵の空にほだされ、風狂のあまり訪もやすらむと、わがおもひ過しよりもの待兒なるも笑し。日は不二のふところにかくれたるも、いまだ餘映の消るさへまたで、月は床頭の階下より出づ。おすひの波もとゞろくばかり、眞間の入江に影をひたし、頓て鴻の臺のまつ原に光りをこぼす。そのたゝずまひ、さながら騒人墨客をしてその處に待に似たりけり。世々のことの葉もさることながら、軍のにはの葛飾と灌公の口ずさみより古戰場の名を傳へて、つはものどもが夢のあはれも高館の面影なるべし。たゞに狩野の地藏のたちあかさむより、玉藻刈てふ手古奈の袖はすがりても見め。市川の關は出張てうるさからむを、布施の辨天は引こみてしほらしなど、口から年貢も出さでまた三盃の興に入る。月ののぼるにまかせて、人々とともに欄干に葡萄(匍匐)すれば、眼下の渺忙(茫)も今宵の清光に白日をあらそふ。しら髭は森に黒く、うめ若は柳に老たり。秋葉のやしろ興福寺はおのづからゆびさすに及ばず。鯉の綾瀨・田の三囲もそこらかと見ゆ。待乳山のまつも難面からむに、橋場の渡しの夜をや明すらん。松崎の田樂は上戸の噂に聞え、衣紋坂のけぶりは曉を侵して、下萬の鼻をよろこばしむ。淺茅が原はうしろさぶく、八町の土手は居所のひつじのあゆみたるかも。根岸・坂もとは木立にまつはれてさだ

かならぬを、三河島のひとゝりさし出て、筑波を尻にところ得兒なるも小憎し。鴈をり鷺飛て光琳が墨色を補ひ、すべて二千里の外にさはるものなし。空はをりふしのむら雲にかつかくれかつ顯れて、月は今宵此樓の眺望をしも惜むに似たり。たゞほめるも誇るも、眼界のおよぶきはゝ方寸の間の泉石にして、縦に横に心を遊ばしむ。いでや見ぬもろこしも相手にとらば赤壁・洞庭をはじめ、漢魏よりながめふるし、唐宋にいひ盡し、明に果て、五湖も三湖も月下のしやぶりからしならん。樂天が氣虚も子美が痩もあはれむべし。いざ來たらばきたれ、此ところへ腸を抱へてよと、拍子に乘て壁をたゝけども、四隣は火の氣を絶てものおともなし。笠森の團子に鴉も鳴ねば、山屋がとうふも手をうつによしなく、丈草が勝手の夜中なれば、宗鑑がはたごも時のまにあはず。有鱗は宵ながらの銚子を傾けて額をたゝく。和扇は例の茶をもたらす閾にはあたりたれ。兎一・雀人は双紙を枕に白川を渡り、徐柳は筆をとりつゝ燭をもきるべき役ながら、文臺も西の海へ突出して、何を弘誓にから櫓おすらん。それが中にも蛙足はひとり賈嶋の驢馬もなく、頬杖にうづくまり、宵のほどよりの推敲にくたびれてや、皆中〳〵なるなまうかびにはあらで、文藻・水烟にこゝろをせむるならし。われにおいては韓愈が才もたのまず、たゞ月に對してちゞにものこそと、大江の主が歎息のあたりに眼前のおもひを述るも、こよひは今宵の遊びに盡たれば、翌はあすの浮世なるべしと、待といふ字の訓を看破して如幻のおもむきを味ふ。西上人を荷擔人に伴なはゞ、隣の鼠にも何をか笑はれんや。あだし野のつゆ・舟岡のけぶりも身のうへにおもひとらば、今宵の眠りはこゝに醒べしとなり。

有鱗いふ、この一章は眼下の景色にめで給ひて、師が今日たゞいまのことばなるを、物見塚眺望の潤色にもなれかしと再案の猶豫もまたず、ひたすらに乞てこゝに載るもの也。

あかるき処にて眼をふさぎてみれば、閉たる眼の中に物のちら〳〵と見ゆる、是を空華といふなるよし。なべて世中のあとはかなき事、此ものになぞらふべしとかや。一瓢上人の西歌仙は、此國より西の方の諸風士に各一句を書しめて、かせむ一巻なれり。あはれにみゆる水莖の跡と、西上人の詠るごく、その人をしのぶには手筆にまさるものあらじ。是を机上におしひらく時は、かの空華にひとしく、人〳〵の心操・形貌たゞちに眼中に入、遠方の人こゝに入來らずといへども、机上にあまたの友を得る事また樂しからずや。

隨齋成美跋

物見塚記

一瓢編

東都日暮里本行寺

物見塚記

知足坊一瓢編

物見塚記

東都日ぐらしの里に寺あり、本行寺といふ。庭にひとつの塚あり。周廻五間、高さ七尺、頂に一株の松を植て十かへりのみどり、とこしなへ也。塚のもとの斷岸三五丈、東南北の眺望は須彌の金輪をかぎりとす。彼大鵬の雲翼をかり、こゝろを優游にあそばしむるの地なり。筑波大人の碑文に道灌丘といへるはこれにて、江戸の地誌には物見塚と出せり。さるは後人の多景にうちつけて名づけたるなるべし。主人名は桓雅、字は日桓　別號は境修といひ、又風狂して知足坊の一瓢と稱す。こは許由に捨らるゝとも、清貧を顏回にならはむ事をよて名とせり。巣鴨・そめゐ、乾に近く、東叡山感應寺は南にならびて隣れり。都鄙の境に出て寢食を甘じ、耳目の閑を領するの所也。むかし〳〵灌公、江戸の城をはじめ給へる比かとよ、此處にもの見の樓をまうけられしとぞ。本月百首・江戸哥合・慕京集など世の人のしるところにて、文武かたつ〳〵ならず。干戈のいとまはむさし野ゝ月をながめむとならし。日往年移り共跡一字の精舍となりて、籬一重をへだてゝ太田歷世の墓をきづく。隋柳楚臺はさらにして、無常迅速皆かくのごとし。げにや、花はその世をあらしかな　と嵐蘭が惜みたるも、今はよそならぬ記念となりてあはれふかし。日比は人の訪事さへまれに、いとゞ物ふりたる庭の菫にいにしへを忍び、根笹に枝をわらはる。永き日の霞める空は膳の先に筑波山を愛し、逆水のゆくへに雉子の寐處をしる。古く詠せしみなの川は白しとも黒し共いへ、眞間の旭は鴉と共にうれしく、玉藻刈けむ手古奈の跡は万葉集の古ことをおもふ。そゞろに塚に攀のぼれば、利根・

關屋・隅田河一望にほのめき、孤松・老杉のくま〴〵まで帆影なゝめにこぼれ、鴻臺の反照に畔をさく。今少し南へならび、淺草寺の塔は雲をしのぎて、阿房の俤にかよひ、眞乳山夕暮近く、橋場・今戸に瓦やく業は、小野ゝ炭燒・赤穗の塩竈も外ならず、淺間山に遠近人のと詠けむその烟より幾筋かまさらむ。沼田の鴈・尾久のわたり、無量寺の晩鐘は、日ぐらしの花に暮かね、御殿坂の鶯は春夏となく啼わたる。蜀魂・水乞鳥は若葉の眠げなるにも似ず、鳩の聲は懷旧のおもひを勸め、閑古鳥はうき我を淋しがらする姿也けり。田家に蘆火たき、水鷄のみか月を喫ふたぐひ、下谷中に早苗とる比は、上野の宿り鳥におくれて諷すます。田畑熒澤の宵闇は、車胤か練嚢をまねびて兒女の戯れに亂れたり。たま〳〵六月の雲嶺におけば、蛙は植田に沸、天地は蟬の聲に無人聲となる。されば肘を曲て樂しぶたぐひにはあらねど、松風の寢ざめに鼻くそをせゝり、簟一脚に焦熱の世中をしらず。銀河の横たひて燈籠ともす夜比は吉原を指さし、箕輪・坂本・根岸より王子へぞめく狐火は、砧の數に指ををる。そばの花に水あびむといへるをのこは、喃に更る事をしらず。團子は失て芒は痩たり。道灌山の秋の月は、うば玉の夜をくさ〴〵の蟲にかなしみ、光陰、長明がゆく水よりも速かに、業平の記行に不二をみぬこゝちしたり。生前の年月をかぞふれば、葛のはの恨みもいつしか露にぬれ霜にきえて、時雨の簑笠は貧の有げにもみえず。水郷・幽村の砌には鳧鷗の影をはこび、叢樹の靄ゝたるには寺觀の屋根をかさぬ。一朝三河島を雪になして、尾ばなの末まで曇るものなきは、此土の見ものやあるべき。難波の芦のあしさまに枯ても、墨書の不易なる風情あれば、丹青のその數奇をきらへる淵明か遺骨を盡したる、探幽も筆をくはへ、貞室も天窓を撫るならんと、手味噌の獨塩からく、四時の眺望を拾へば、たゞ此物見塚に媚をつくして、さらに瀟湘・洞庭もなつかしからず。煤の曉・餅の夕と暮はてゝ、一とせの造化も大ぎりと成ぬれば、しづかに寺ゝの鐘に枕を引よせ、又來る春の眠に正月をさせむと、しばらく無何有の郷にあそぶ。

文化八年辛未　　物見塚一瓢誌

道灌丘碑文

筑波　石正猗撰

里曰日暮。寺曰本行。在東都郭北。寺有丘。曰道灌。丘奚名道灌。太田氏之號乎。里人思太田氏也。里人奚思太田氏。無忘其惠也。寺西北有山。亦曰道灌。蓋山則太田氏保鄣之遺、而丘乃其斥候臺之址也、故無丘。唯址耳。有之。殺自里人之思太田氏也自有丘。二百有餘年于今矣。相傳昔太田氏既亡。里人過其墟盡爲禾黍。閔壘壞毫圮。(記)彷徨不忍去、而丘其址焉。故丘與山皆用其號名矣。寺舊在谷中里。太田氏葦屏攝之所在。而資灌之曾孫今懸河侯世世相承。以守其祀也。寺與群屏攝遷於斯里者係寶永中也。遷則得斯丘、蓋不幾得矣。可不謂奇也。稽諸譜牒。太田氏多持資官左衛門大夫道灌其號。源光祿賴政十世孫。父道眞名資清以永享四年壬子。生道灌於相州扇谷。少恢廓有大志。博涉經史、善兵法。明韜策。是時天下戰爭。諸國瓜裂各據其黨。迭爲屏蔽、道眞道灌二世。屬管領上杉氏。府中推道灌贍智豪邁。有文武之材。專委兵機之要長祿二年戊寅、城武州江戸焉而鎭之、正其封疆。險其走集。每與鄰國戰。利在以寡勝衆。兩毛二總諸城聞風震慴。降者不絕。大半爲上杉氏之有者、皆其力也、既而州界寧謐。百姓悅服。以道灌增脩德信、以懷初附、王畿國諸將、皆謂彼專爲德。我專爲暴。是不戰而自服也。寬正中、道灌入京、王人采道灌所詠國風奏御、天子乃　賜　御製歌一章、以褒揚之、迄于今世所傳稱、其人英武而文者可知也。寬延三年庚午。寺主僧日忠與懸河大夫古屋孝長四宮成煥圖樹石于丘上。俾余屬厥事石子曰、昔灌公之德及武州人。豈猶荊人之思羊叔子乎。不然、何至斯里之人、亦無忘其惠。丘其址焉。以貽諸後世也。吾聞之、羊叔子死無子。襄陽百姓於其平生游憩之所、建廟立碑。歲時享祀。望其碑者、靡不墮淚。唯灌公者異於此。國初時。其五世孫資宗始寘茅土之封。食邑五萬石、寔爲道顯公、繇顯公又四世于今。瓜瓞綿綿。奕葉昌阜。其斯爲盛矣。方今懸河君大夫以歲時朝東。則春秋齊肅。有事群屏攝、遂登斯丘望之、必有若親當其時。褐裨分隊。愨勒戎馬。旝旌繽紛。白羽若月、赤羽如日。壁司徒。銑司徒。各愼其守猛士發揚、踊躍用兵乃皆延頸企踵。以待斥候之擧燎者焉爾。於是乎君大夫慨然無忝爾祖、聿脩厥德。將愼其四竟。完其守備、訓有司以義、施小民以惠、而光昭令名。以示子孫。無亦監於斯乎、然後知里人丘其址焉、寺主碑其丘焉、皆有由也夫、

一瓢上人の新室は俳士をあそばし
めむれうなりさぞ。われまづ一夜
ふた夜のまくらに疊を汚さむとす。

夏ちかの誰も柱によりやすし　成美
不二川の浪をとりなす茄子かな　夯貨
板の間やつかみ豆腐もはつ氷　百之
春風や小坂のぼりに家がたつ　鹿太
或人にとへば寒しと山の月　袁丁
立花にこすりてやらん猫の鼻　舟雅
草の戸や蝿にかまけて年の寄　守靜
いくたびも風の吹しかきくの花　曲阿
手をかざす火となるよりぞ初水鶏　永矢
ほとゝぎすまたもはじまる月夜かな　心非
名利にはしれるものもおもふべし
節季候の氷柱折ゆくあたまかな　凡魯
懷にする手も春や隅田川　朶年
時雨たらしぐれた儘よ丹波山　一峨

木がらしや地藏の塩を盛かへる　鶴山
松風の小口へまはる芒かな　（少年）兎一
ゆくとしや大盃の手もとより　（亡）浙江
曲りこむ藪の綾瀬や行螢　巣兆
風雅の野狐心作麼生
寒き日の野山に似たる心かな　老阿
穗芒やうれしきとも果のある　素嶠
ぬく〳〵と親の居ぬけを冬籠　梅壽
啌つきが口もそゝがず蓮の花　周化
山ぶきや蟹やく家を中にして　一阿
起ふしや我ものとては露の玉　諫圃
あだしあだ波あだなる風もこそ
隆達が節にふけ〳〵花すゝき　仙骨
末枯を鳥に啼るゝ榎かな　素岳
菜のはなのこぼれかゝるや鳰の海　麥宇
人聲や藪の中より銀河　國村
ふんづけて春の水見よ麥のへり　宥盧
爪先にかゆみのつくや納豆汁　米堂

とし〳〵に憶(臆)病になる月見かな　一蕙
はつ月は蕣ほどのひかりかな　久藏

知足坊のみやびにまれかれまゐらせて

炭そゝぐ水も秋すむ苔のうへ　道彦
名月やはれての後の氣くたびれ　午心
うつそりとたつや土用の箒苗　理峨
淺草は乞食の錢もあつさかな　少年 徐柳
夕霞けふは二日か三日月か　李臺

妾は蕎のどしさは許子がいへり

雉子啼や不二も筑波も窓の下　芳洲
さみだれや小言男も遣ひやう　萬里
木つゝきやをのゝ小家のむかしぶり　斗月
宛にせぬ春の月さす山家かな　胡準
燒野とはたゞ四五日の名なりけり　碩布
造作なく神はいにけり大根汁　釆羽
あるほどの鹿だまらせて霜の空　車兩

心の駒さは放埓のとかしらぬ

宵〳〵や何をわするゝたかむしろ　かつミ
立臼に來てあたゝまれみそさゞい　可良久
麥蒔がせゝり出してや三日の月　春成
裏關や蚊遣にも經る松の年　護物
鶯の聲やちからを入ずして　春蟻
山をぬくちから隱して春の水　宗瑞

いたいけしたる物あり。はりこのかはやぬりちこ

我戀を笹につけばや春の風　遠志
我火桶眞向にばかり老くちむ　國步
すい〳〵と何の譯なき芒かな　鼠墨
門守が大工ぶりする雪佛かな　五渡
小僧きけ達磨も九年このたんぽ　民玉
降雪の枯木をつゝむはしやぎかな　九秋
坂口やすみれにかゝる軒の雨　燕市
盆の月山のうへにはよそ〳〵し　ノ旦

長明が閑といふが笑しい

犬吼て猫鳴て秋の月夜かな　九才 文勝

山ぶきや風おもしろうなるはじめ　雨聲
苗松に春も見えつゝ雨の降　仙菓
花の山守とおもはゞ任侘ん　完來
うちにけり行基ぼさつの小菜畠　任只
しぐれねば何の譯なし海と山　省己
とりあつめても夕暮よ秋の艸　寥松

穴ばたに腰うちかけたる人も、

纖穗して春往ねかしと思ひける　藍水
藪入やうれしき事もちりの中　和扇
からからと足駄はきけり枯柳　春樹
梅が香にあわてゝのぶか蕗の薹　亞然
蛤の口にもあまるおぼろかな　蛙足
何くれとなく野にするや草小ぐさ　也好
身のうへの鐘としりつゝ夕すゞみ　一茶

甲斐國信玄の旧趾にて

菊はみな野ぎくと成て日の細き　行幽嘯
身の秋や紙帳かぶれば茶たて虫　、巢也
夕空や紫苑にかゝる山の影　、閑齋

四月廿八日於匯齊亭

過行や袷着やうとおもふうち　一瓢
　庭は蓼つむ藪となりけり　成美
樽次がねだりにまいる御笠　瓢
　日も昏かけし下手の鞠音　美
咥ついた月夜もちかく蕎麥の花　瓢
　ひやひやとして川舟を見る　美
秋の人袂ふくらすばかりなり　、
　順に名をよぶ八瀬の居風呂　瓢
はやらかすゆふべゆふべの地藏經　美
　櫻うとしとほとゝぎすなく　瓢
醉に來て行燈張て歸るらん　、
　ひくき二階に人をかくして　美
十六夜は腹のたつほどしめやかに　瓢
　わたりてぞ見る霧の宇治橋　美
名振舞早稲の匂ひをほのめかし　瓢
　何ぞといへばゆふぐれになる　美

一拍子ぬけたもの世華ののち　瓢
めざむるばかり芥子菜がさく　美
支燭があてなき春もひろがりて　瓢
家鴨おひこむ宿がへの宵　美
ふところにそつとかくせし菖蒲太刀　、
戀のあげくは年のよるもの　瓢
簑の雨紅の神をうらむらん　美
さほとるうたに了簡はなし　瓢
松風を酒のむ客にほめさせて　美
ひろいばかりが寺の板敷　瓢
一しぐれさら〳〵さつとやり過し　美
鬼も泣べき須磨のありさま　瓢
麥餅のかたひづみなる月を見て　美
秋を惜むはいかな事かな　瓢
枝もみぢ幣にもふらむ氣のはづみ　、
わざとも足をぬらす玉川　美
てうちんのくら〳〵するが嬉しくて　瓢
正月過し人のおろかさ　美
髮にさす飴の小鳥も花心　瓢
そのころ〳〵と田にし啼なり　美

各十八句

山城

春の海淺きとまでにおもひける　蒼虬
きさらぎや老が世となる雲と水　瓦全
ちかづきのやうなり春の朝朗　丈左
はてしなき日ぞや田螺のふた明て　茂良
花にあそび水にたはれしも今たゞ
月のみの夜とはなりけり冬の山　華朗
杜若紙燭ともして見るあたり　千崖
疲(痩)藪に月はとられて鳴水鶏　岱李
陰堀らば水も涌べき若葉かな　士卯
荻に來る風方角もなかりけり　月居

攝津

天晴な一聲涼し月の前　長斎

蚊屋の月このうへもなきこゝろ哉　魯隱
鷄の喰ほどこぼせ若菜賣　尺艾
かんじきの道も若菜の往來哉　万和
あら／＼と雨のうちこむ清水かな　奇淵

すてじとすれや見かへりもせず

我ものに鸊兒のする浮巢かな　釣翁
花に來てさびしくなりぬ花の中　麥太
橘の香にもたもたぬ月夜かな　米彥
正月も過て行也山の家　井眉
我菊は撓めぬほどの詠かな　八千坊
元日になるとおもへば二日かな　稻丸
不斷來る人も霞むや畠道　桐栖
鶯とふたり前つむ若菜かな　一草

春の到らぬ所いづくにかある

野の梅の家にそはぬはなかりけり　瓜坊
鷄ばかり起てゐるなり霜の家　三津人
もの忘れして居る朝や寒の雨　竹齋
稻妻や原よしはらの馬のうへ　友國

ちとの間も晝ではおらず草の秋　升六

大和

こゝろゆく不二は遠くて菊のはな　空阿
船頭のやつともの着る餘寒かな　拾葉
つい摘に出ても川越す茶畑哉　和山

河内

すゞしさの穴があく也軒の樫　来耜
鵜のつらを上るところや山の月　八之
晴天をしつぼり啼や閑古鳥　蓬宇

和泉

一すぢの聲となる夜や蟋蟀　喜齋
はや夏といはれて月のさす處　句竜
灌佛の湯に梳直せ髮の癖　荷風

尾張

降雨をながめくらしつけふの月　士朗
手の皺をさする花見の宵寐哉　桂五
垣ひとへへだつばかりよ雉子の聲　天老
名月やはづかしからぬ松のとし　梅間

湖やきじ啼山のかけがさす　竹有
さゝなみや蛙や膳所は一重町　少汝
百年も活てくれうぞけふの月　大阜
山里や薺の塵もうめのはな　五雄

さすがに年のなしきものから

春たちてなほ正月のまたれける　黄山
松風やいつしか菴は月のもの　鹿野
日暮るやうさぎの耳の動く時　搓雀
世の人をみどり子にしてけふの月　岳輅

伊勢

木のもとや櫻を夜の衣にして　椿堂
白い花さくや夏野ゝ名なし草　丘高
待とのおほき中にも蕎麥の花　推己

今な春べのにぎはひなえうすさて

難波津の土も賣るや踏の臺　草翠
苔のはな咲や十とせの旅草鞋　孔阜
鴈鴨の無事に眞向ふ春日かな　爲德

母のおもひにて

蕣のやう〳〵に過行月日かな　路白

志摩

ころもがへうか〳〵はいる御師の宿　紺山

伊賀

うちこむで尻ふる鴨の雫かな　清江
乙鳥のみちにかけたり檜笠　猪萊
大佛の肩に二月のあらしかな　羅十

遠江

大井河といふ關ありて夏の月　嵐莊
襟もとにかゆみのつくや梅のはな　露喬
巣のとりに寐ぐせのつくや晝の月　蓼秋

閑爐を守るにも

雪の日はそれも寄かれ火吹竹　柔克
白梅の空は篝焚明りかな　繡扇
揚雲雀ひとつは舟へおちさうな　帒月
達磨忌や朝日一筋茶のけぶり　露琰
うめの花笄にかけて長閑也　其白

駿河

啼蛙翼ほしけにうかみけり　沾吏

戸をさして遠山にせむ鹿の聲　郎裳

伊豆

罪なしや花の中行うた乞食　書牛

雉子なくや明はなれても月の暈　雨吟

猪のほく／＼行や明の霜　素石

三河

名月をはれに山家の祭かな　卓池

ものかげを見ても啼たつ巣鳥哉　秋擧

こゝもまた浮世なりけりと、兼好の詠をおもふ

山ざとへ逃ても麥の五月かな　岱呂

松風のやめば啼なり閑古鳥　普天

秋風に月吹あけて山のうへ　百秋

凩や人は無事なる影法師　佳雄

むめのはな飛あがるほど咲にけり　楳堂

甲斐

一錢の茶にうつりけり八重霞　可都里

山吹や雉子の啼音もほど拍子　有斐

ちりつきてよい日になるやけし畠　漫々

凩になほ有明のあはれなり　蠶守

蝸舍さらに長物なし

春寒し月に見らるゝまくらもと　重行

鹿の聲夜は嶮岨もなかりけり　思誰

炉にひとり頓て十夜の鐘のこゑ　嵐外

相模

川やしろとかくする間にこぼちけり　葛三

帷子を着る日だになく老にけり　玉珂

浦の秋朝日の出るばかりなり　徐來

枯ぎくの焚るゝゆふべしぐれけり　來之

數鑓や用心もなきほとゝぎす　石年

芽柳のむしもふるはぬしだり哉　方解

旅人と見えるか花の尻からげ　雉啄

下總

ぶつつけたやうに下るや霜の鳥　雨塘

ねぶるさへはした／＼や秋の風　双樹

さゞなみや煙にはいる夕つばめ　太笻
松風に出て吹せばや蚤の跡　亡人 恒丸
浅(芽)芽生や寐れば寒さにかち巾　兄直
八月やまるに夜にしてほしいもの　柑翠

孫葉が枕せむさいふもの譏ぞや

すゞしさに石もこけ込ながれかな　融州
踊れ〳〵翠になるまで月夜まで　鶴老
かたしろにけふこそ流せ旅の杖　素迪
うぐひすの尋ね過して枯木かな　維平
木がらしや麁相に成りし山の月　箕輔
朝〳〵の茶売や飛てみそさゞい　和十

春到て品物すべてあらた也

鶯に鳴れて明る小窓かな　竹人
門口に雉子あそばせてまはり道　兎什
下萌や茶のこの癖も五十年　此蘭
盆の月明るきとのみおもひける　一聲
身のうへのゆふべ〳〵や華に風　右耕
鶯に起も起たし寐もねたし　兎乙

行ゝ子ひとつと成て暮にけり　巴陵

いざよひ、さらしなのたぐひには
あられど

三日雨四日晴天ほとゝぎす　亡人 寂阿
涼風や生れながらの蚤飛　一叟

安房

親の夢旅寐の盆もしてとりぬ　杉長
汁の實にむしり込たし梅のはな　郁賀
汐くみの心かはゆし春の鳥　宗拱
盆過をまつや何ぞの有やうに　也草
夕立やこんなところに亀の甲　呂風
暖も山家ははやし足袋の土　其文
茶のはなや夜もほかつく壁の際　桃阿

上總

二日灸吉野たつたにひと火づゝ　輪之
行春や笑しう成し猫の腹　楳柯
舟に出て日をへらす也春の風　野翠

常陸

膳だての箸ころげしも本の春　翠兄
たゞ居ても暮る日なるを木葉散　湖中
鶯も粥あらためよ薺粥　遲月
しら露や湖かぎりなきゆふべ　千万里
朝起し事迄花の日記かな　得雨

上野

月雪に稗の團子や大播磨　米室
盆過や雨を見て居るはなれ家　月鴻
鶯の巣守になりぬ柴の菴　蘿月

養在深閨人未識
紅梅や窓はいつもの窓ながら　根菅
鶯の啼眠さをはぢけ十團子　朴哉
うぐひすに若葉がくれの小家哉　玄耕
ちり出て人に見するか山ざくら　阿兮

下野

七種に鶴の蹈ざる草もなし　雄尾
腹のよき犬がおくるや花もどり　和井
山里やわすれたやうな梅のはな　五雲
筆結の朝寐も淋しすみれ咲　魚と岐
きけや世は鶯にさへ上手下手　魚文

信濃

今朝喰へばはや夢に見る若菜哉　素檗
陽炎やきのふすげたる木履の緒　雲帶
はなの香にまげて靜まる夜汐かな　武曰
山の春行水よりも暮遲し　虎杖

心を師とする事なかれとはいへど
ものに倦ひとのこゝろも長閑なり　如毛
米河岸のかた隅もつやけしの花　湖光
山ざとは罪なき月の見やう哉　蕉雨

美濃

闇の夜のおほきとおもふ師走かな　千阿
里人はたゞ拜むなり不破の月　楚雀
梅がゝの筋にもよらず猫の戀　良平
寒月のまばらに桐の立枝かな　桃源
蚊の聲のまぶれて太きはしらかな　一居

加賀

むだ山に比良のつゞきて春暮ぬ　眉山
朝の間は酢も醒し燕子花　甘谷
木がらしや出る日の艶をふくばかり　万栖
長き日や蠅もとまらぬ牛の角　不友
月に名もたてず柳はしづかなり　五葉

越中

春の野をもどりて人の宵寐かな　鼠丈
きり〳〵す啼ぬ夜もまたあれかしな　如岡
うぐひすのうへや誰見る朝の月　大奚
名月やちどり戀しき浪がしら　棊風
夜明てはあはれ小鴨の友わかれ　白年

近江

爐ごゝろになりぬ松風竹のおと　五來
傘のしづくおとすや春の海　千影
田畠のものとも見えず秋の月　芳之
兩國の灯に逆ふなよほとゝぎす　可盈
寒き日のわづかに残る戸口かな　重塊
家鴨みな梅が散とて寐にもどる　干當

けふの日を菊は忘れず八重葎　志宇
このもかのものかげよりも
何處迄もみちのくにして青芒　柏羣
十月と見ゆる小家の構かな　五粒
尻すゑて鶴の守する春日哉　籠山
さゝげ飯秋を匂はすむしろかな　文常
山ざくら二人になればさはがしき　仙風

五月四日於雪耕菴

夕暮や蚊が啼出してうつくしき　一茶
すゞしいものは赤いてうちん　一瓢
露しぐれはら〳〵松も寶にて　茶
筆一本に秋は來にけり　瓢
月かげの翌日は湖水のなきやうに　茶
蒲團の下へ草鞋かいこむ　瓢
西念は願の通りなられたり　茶
雨の相手にかきたてる灯賦　瓢

桐のはなしのび車を筋違せ　茶
　繪かきの袖はひくによごるゝ　瓢
蕎麥切の寐覺の里に年寄て　茶
　丸くなくとも八月の月　瓢
召給へ蟬響きり〴〵す　茶
　しびれさましに河岸へふと出る　瓢
肥後米の買そこなひを笑はれて　茶
　人にかくして笠に字をかく　瓢
おほとけの花を〴〵く咲にけり　茶
蛤のもれば崩るゝ大坐敷　瓢
　蒙古追討このかたの東風　、
　よい夢見する藥くれたり　茶
ひとりでも馴れば旅は歩行るゝ　瓢
　あらこと〴〵しつごもりの雪　茶
膳棚は鼠のものかとばかりに　瓢
　二人がふたり京きらひ也　茶
碁にまけて詠むる空も青くこそ　瓢
　野なら山ならみなころもがへ　茶
押出す七里の船に素湯焚て　瓢
　南無觀世音ありあけの月　茶
白露の足はいづれへさし入む　瓢
　代をなかれ窓の葛華　茶
宗旦が末の弟子とも成たれば　瓢
　深山しぐれのうれぬ日もなし　茶
をしまれて死るは人のまうけ物　瓢
　そのきさらぎのみどなる空　茶
うめぼしの核をはうるも花ごゝろ　瓢
　文化八年日暮里の春　茶

各十八句

陸奥

すゞしさや願のいとの吹たまる　乙二
たゞ居れば螢に袖をかられけり　冥ゝ
あさがほの遠山いろに咲にけり　巣居
銀河秋一すぢの夜のけしき　雄淵

青柳のさく枝つかむ雀かな　曰人
草の戸や迯かくれても秋の暮　百非
(五)蟈ふくやいなの篠原越やうに　文郷
蟋蟀明れば松もしらぬ人　平角
ほとゝぎす蘭女が顔に明りさす　きよ女
老けりな花見るまでを人まかせ　雨考

口あれば喰、眉あれば着る

三日月に乞食の蚊遣かゝるなり　春翠
鼻かむでうぐひすもなけ冴かへる　旦ゝ
山伏の斧とる夜也山やける　與人
色も香も桃のうへ越せ秋の雛　八風
翌日こそと待日ももたす鶏頭花　沾橋
ぬすみ來て見れば酒なき青柚哉　北溟
わが家のものにかぞへる蛙かな　冥也
はつ袷ゆへなく二日延にけり　秋夫

白うるりとは何物をいふにや

しら露やへちまの蔓のはからしい　素郷
なでしこのもて來て秋のあつさかな　雛路

松の木の細くもならずきり〲す　里棠
はつ雪やほろりと落る烏瓜　桃径
寐て起て錢なき花のたもと哉　亡人 乙因
歸り來て燕のくぜる筧かな　彦貫
世にふるき曉なれど初ざくら　英里

出羽

秋の風ゆくへは星の林かな　長翠
萩芒いろ〲の名も枯にけり　五瓢
鶯もはやよしあしの二月かな　成雅
三日月をおどろかしたる時雨かな　野松
鐘を撞ちからよせてぞ蚕捨る　和鳥

佐渡

つい〱と杉ものびるやけさの秋　白波
空寺のほとけなめけり蝸牛　可圭

飛彈

夕立の過て人すむ菴かな　儲史
月よしと名のりて盗む瓢かな　一左
散もみぢ我きたなくも老にけり　歩蕭

越後

傘しぼる人のそぶりのあやめ哉　宇琅
行春や呼にやりたき泣上戸　祖明
幾日か風のたつたる尾花かな　左琴
春の水むかふ上りに流るゝ歟　年眉

一片氷心

涼しさになくなりさうなこゝろ哉　子功
木がらしに大根のからみうつしけり　竹里
一日の菖蒲になほれ髪の癖　時来
或時は蝶たてこむや庵の戸　つくも
青柳の影ふむころと成にけり　喜年
雀までわたるやうなり秋の風　山都留

能登

春風やすゞめ吹越す鞠かゝり　茂十
きのふまで水際ありて芹薺　得三

越前

八月は京の入日も芒かな　仙草
涼しやとおもひ初たる早苗かな　友甫

若狭

大根といふつはものや冬ごもり　北雅

丹波

うちとけて見ゆるは華の木間かな　武陵
夜は露のまぼろしにおく櫻かな　滄洲
夏の海暮るけしきはなかりけり　三笑

丹後

六月を高う釣たる蚊帳かな　萬籟
十月や綿木踏をる青鵐　盦山

但馬

行先についてまはるや秋のくれ　菊莽
遲し早しありて櫻の日數かな　南飛

因幡

つまだつて我菴にふくあやめかな　馬陵
入月のあとゝても秋の夜なりけり　梅村
薄雪に兎のかげや山はたけ　李謙

伯耆

煤掃し夜のしづまりや鐘の聲　白章

出雲

さりげなきものは師走の月夜哉　華叔

夕立の草木にものるあぶらかな　元日坊

隠岐

紫陽花を咲せに來たか閑子鳥　豊川

石見

まつ風のひろがるかたへなく蛙　可成

播磨

藝あれば猿も正月小袖かな　玉屑

菊かれてすら／＼と日の暮なり　布舟

みしたびに草はわすれつ花菫　蝸國

美作

水仙に寒さそへたるいほりかな　安洲

備前

陽炎のつまづくまでに草臥る　陶士

安藝

膝の上こすりて行や青あらし　竹栗

追ずともたつべき物を麥の鳫　玄蛙

あさがほも這出て交るはな野かな　可友

すゞしさや何處の家にも一ところ　路宅

家建るはじめにいふやかきつばた　篤老

周(防)訪

春寒し竹に囀る鳥は何　天民

崖の月おちて蚊屋つる獨かな　鯨牙

長門

往ても／＼みちこそなけれ萩の花　羅風

雀子や朝日くり出す藪の前　冬蘿

氷る夜の軒端に近し鶏の聲　橘川

備後

大雪や何處に隠れてほとゝぎす　寄居虫丸

冬の野に冬の月また出たりけり　岱雨

今までの雪を見に出る月夜かな　浴蘭

備中

行燈の消れば蚊屋の匂ひかな　斗外

霧こめて夜の長かれよ銀河　蘭香

春雨やこゝろうかるゝ京の水　巾婦女

阿波

蕣のはなのうへにも秋のくれ　夷柏
雪を踏て早苗植けり田子のうら　蘭秀

伊豫

水うつや掃や植たる竹のもと　樗堂
夜あがりの空をさだめて秋の風　蘭郷
蟀の夜をこしらへる草屋かな　遊月
霜のふるほどは樹もあり里の家　其梅

讃岐

麻の葉にわたる風あり夏木立　桃里
秋ちかき夜半や鵜舟の灯の細り　芝峯

土佐

何處やらに風呂焚嗅や朧月　路右
七里來てまだ峯に日や藤の花　里青

筑前

秋風のおどろかしても月夜かな　此原
早松茸芒の莖はよわ〳〵し　龜陸
桃の實の無下におちたる暑かな　文志

筑後

念比に山をしへけり眞菰刈　文角
月の顏見ぬ夜からなる柳かな　富柳
小庇(庇)はいくらもあれなあやめ草　輅兆
花さけとうめの木たゝく子供かな　鉄舟
水鳥の水に流れて日は永し　石狗

紀伊

萍や魚追ふ獺に根をたゝれ　塊亭

伏水の陶蛙を築山におきて

這いでゝおのれもなけよ五月雨　糸亢

豐前

瀬は耳の外にひゞいて鹿の聲　如柳
祖師の忌のけふも茶汁や白つゝじ　木父

淡路

湖につれてゆらぐや芥子の花　青城
うぐひすもこゝに宿かれ今年竹　五陵
むしの音のやみて夜あさき嵐哉　冬柱

豐後

門に田はあれども人の蛙かな　月化

火ともせば二度の哀をちる櫻　眞澄
朧夜の底にあるなり花すみれ　霞城
足もとが近江の海ぞ鳥おどし　葵亭
荻芒朝からをどる在所かな　羅川
鶯の來ぬ日も竹のたわみけり　有篁

日向

大かたの月をもめでゝ藥喰ひ　倘故
みのむしの孝行たらで啼夜哉　圃友
水をもて水に投ず、誰か其味なしらん
散花にまたちる花やはなのうへ　蝸牛
水音ははるかに遠し閑古鳥　蘆笛

肥後

紙燭して垣のうの花くらうすな　對竹
桐のはなゆふべ動かす物もなし　如風
降ならばたゞ降出せ秋のくれ　瑚璉

肥前

今更に月夜なりけり枯尾花　菊也
さしもなき、もののゝちる也柿の花　祥禾
皆に成秋を芒のさかりかな　鞍風
一井戸を汲ほす町や盆の月　南無
はらみ句は皆消にけり不二の山　天外

大隅

春の水野鍛冶が宿をめぐりけり　雅松
古脊をかけても出ばや春うらゝ　万川

壹岐

鎌倉や北條どのをなく鶉　紅雪

對馬

うはすべりしておもしろや若菜摘　凡魯
ほたる見や向ふはたしか茶の木原　曙堂

薩摩

生れしもこの小筵ぞ冬木立　闘叟
八重葎軒はあやめの日なりけり　琴洲
ありとあるよき事なけよはつ鴉　巴水
おしくて雪の戸を押明にけり　一翁

若き人と同じく飛鳥山の虫聞てかへるさ、物見塚にやどりける夜、主人一もとの草花をもてなされたるに、人／＼杯ゝ共に膝の上をめぐらしける。

走り咲萩やほつちり灯がともる　一瓢
　寐るも起るも相住の月　成美
露の降船に小舟のすりぬけて　久藏
　蔦なきふるす椎のたちがれ　諫圃
ひら／＼と藥にさしたる風車　袁丁
　泊をそひく砂はらの闇　一瓢
大龜を養ふ家と人はいふ　成美
　ふるき内侍に手をとられつゝ　久藏
こひといへば小河ひとつも越かねて　諫圃
　草のいきれや苦桃の時　袁丁
風の神送ればあとは隙がちに　一瓢
　からかさ肩にもどる箔うち　成美

花すゝき破れやすくも茶に染て　藏
　たらいの底のそれも名月　圃
栗寺の綱を引はる坂の上　丁
　手をたゝいてもかすむ頃日　瓢
藥賣花の中まで狂ひ來て　美
　わらひ法度と書し春風　藏

一瓢四　成美四　久藏四　諫圃三　袁丁三

草庵四時

小ばたけを雉子とふたりの春邊かな　一瓢
朝めしに思案もいらずけしの花
夕月は何處にもあれど草の門
おちばしてなほ捨がたし赤疊
埋火のそれから次は極樂か

打碑の法にしたがひ、点畫いさゝかもあやまらず、此所に寫し出して是をもて跋文に換るものなり。

随齋成美

これは上人坐右の日記をしたてゝ、そのまゝにあみつらね申されし也。もとよりすきの名の世にもれいでむ事をいとひて、かゝるかた山里にひしりいり居たまへど、おなじすきものゝあながちにたづねより、また遠きさかひよりも書をよせなどすゝめれば、かくのごとく吾おほみ國にのこる處なきまで、紫蘭の香にひかれ、楠の千枝にひろごりけるなり。これに跋のことばそへよとあるに、われかゝる物に蕪詞くはふる事あまたゝびなれば、あな見ぐるしの例の朽入道が筆づかひやなど、みむ人さゝめき給はむも我ためにはなにならねど、かつは此集の眉目をやそこなはむとおもふからに、其こと葉はしばらくさしおきぬ。こゝに此御寺は文明のむかし灌公にはじまれる事、すでに上人の記中にあり。かの公のかたみとみるべき物多くつたはらず、わづかに番神堂にかゝけたる鰐口一口のみなり。(徑)經五寸ばかり、紫銅ふるくさびて古色愛しつべし。めぐりに志願のおもむきをしるし、公の諱・年月まであざやかに鐫付たり。これ第一の寺鎭なれば。いま

按ニ紫一本ニ云、西ノ窪、昔此所に小堂ありて、土佛の釋迦一尊安置す。往來の人法花堂と名付たるとぞ。中頃豆州玉澤法華寺の僧日朗上人の持念せられし墨畫の番神一軸をもち來りて、衆人に結緣せしめ、あまねく人を利益す。後に北條家の祈願の事ありて、社檀を建立して番神を勸請す、則其山を番神山といふ。今仙石越前守屋敷のよし。道灌の求によりて番神の社を今のしん堀の池の邊にうつす。云々

的申集
洞々撰

序

窓に虱をかけて其大キサ車輪のごとくなるは、見る事を明らかにして後に弓いる事を學ぶべしといへり。洞々が的まうしの卷は、梓弓はるののり弓の勝負を論ずるにあらず、國々の哥まくらに作者のいひいづる趣向を正鵠として、修行のちからを五人張に引たわめて、きつてはなさば多くあだ矢は有べからず。是此集のあらまし也。

はいかいの矢ひろひ隨齋
成美、まとまうしの聲
はりあげて是をいふ。

成美

文化十三丙子秋

附言

一卷中諸君の住所、その地名にこと〴〵くあたらざるもあれど、是は古人よりいちじるき名所をあらはし、唯そのくに〴〵の的になしたるのみ。

一近世の古人を加入したるは、さきのとしやつがりが遊行の折から、たいめしたるがゆゑ、その世にありしごとくす。

一この集にもれたる作者もあまたながら、是又乙矢の卷にあらはすべし。

的中集

相撲　蟹殿洞ゝ撰
江都　路齋一峨挍

あさ虹や寒たけ立し箱根やま　洞ゝ
　麥ものびよとあそぶ鍋鶴　成美
蜩とり草のたもとをふりはえて　一峨
　のりものおがむ軒の夕ぐれ　諫圃
なつの月丸くなうても大事なし　一瓢
　蛙よぶとて靑ざしを蒔　久臧
うす〳〵は里居の君が名も聞て　美
　をしやる帶のはしたなき閨　洞
赤坂の宿は柚の香に明はなれ　圃
　手がるくわたる山雀の顔　峨
月も漏る佛の屋根を繕はせ　臧
　栗三俵に代へし落くぼ　瓢
敷皮もとしのよりたる氣はひにて　洞
　貧をつたへし宿の豆まき　美
おもしろいはなしの果が浪の音　峨
　星月の井を覗く折〳〵　圃
汁の實に鰹も交るや花の中　瓢
　飛ちる紙に陽炎を追ふ　臧

下略

霞が關

大竹もなびくや鴈のわたり初　成美
あけぼのや花の情の人に來る　道彥
見し人の鍋かいて居る清水哉　巢兆
枯木折人にも匂ふさくらかな　其堂
榾の火に書て見せうぞ鬼が島　一瓢
はつ花におつとり出る田植かな　寥松
露に出る蓑とてもてり坊が妻　對竹
うぐひすや松に七度雪かけて　護物
花ざかりいつもの春になりにけり　完來
人に付て鹿のくゞりし茅の輪かな　蕉雨

木がらしや首さし入て鶴眠る　袁丁
袷着て落に行ばや条の橋　車雨
つゆのまと芥子の一葉ものこらざる　應々女
捨子にはまだそまぬ也けさの秋　壽翁
夕がほやむかし役者の覗かるゝ　諫圃
見るうちに散ゆく花となりにけり　久臧
餅の粉を踏來しあとやふたつ猫　可麿
宿とりに先へ出されし暑さかな　一蕙
花鳥やをのれをゝのれそゝのかす　太節
門しめてひとりや聞むつゆの音　守靜
落葉ほどのいたづらものはなかりけり　芝山
爰はこれ百姓わたし月にせん　四買
朔日や起出て先稲のつゆ　嵒峨
五十町一里と聞しあつさかな　一溪
蓑ほして見れば柳のやなぎ哉　一秋
しぐれては〳〵鳴からすかな　閑峨
きり〳〵す風呂の薪のもへのこり　雨桐
馬蝿のいきはだかりし枯尾花　葛流

青柳のふところになる小家かな　秋禾
鴈の音の冴る夜や灯の青く照る　元風
ゆく秋やあしにからまる草の蔓　露水
菊の香にあふて黿むかひきかへる　太民
とし頃の人の朝がほ咲にけり　燕市
胸さきのきたなくなりぬ春の鴈　來蘇
雪の中に居ても高峰の雪しろし　万外
海山の月の案山子と我老ぬ　三世平砂
十月へ持こす田にも人がゐる　昨鳥
夕立もしぐれさう也那須の原　有麟
物殖る音してぬるむ水田かな　宜風
赤馬が雨にぬれても春野哉　風谷

武藏野

初秋の風もとまるや松蘿(サルヲガセ)　園村
寫し繪の筆をそゝげば鶯の鳴　一澄
ほち〳〵ともの縫音やはるの雨　万岳
正月を笠に着るらし惡太郎　碩布
川狩の草履をさらふ鴉かな　五渡

永き日や瓢に風のふく見へて　也好

猫の聲(マヽ)紅粉付られて戻りけり　蘭山

虫の秋おさへ所のなかりけり　とし守

鐘かすむ江戸は何所から日の暮る　菊歳

つゝきの岡

道すがら碓うたの十夜かな　綠水

蛙鳴止て田もなし月もなし　岩芦

身退いても追來るよあきのかぜ　後水

青柳や手をはなす時芝の鐘　はまも

萬歳を聞なり道のかはくうち　寶水

眞間の江

酒のみの窮屈になるひゝな哉　雨塘

木がらしや底の見えすく銀河　素迪

野菊にもとるや朝〳〵桑の箸　廣陵

ひとなみの戸口をもてば秋の風　斗圃

寐て怪我をした人はなし涅槃像　稻彦

阿取防(アスハ)の宮

きさらぎや迚も櫻がさくならば　一白

さみだれの顔につかへる柱かな　月船

いとまなき垣根なれども薺咲　鶴老

香取の海

芒ほどほそりもせぬよけさの雨　蒼峨

餅の音來りても世はよかりけり　青岱

かすまれに行か手紙の又たのみ　惟平

はつ鰹生て居さうな騒ぎ哉　李峰

衾着れば夢はうき世の裏を行　桂丸

夏の月こゝろの庵のさし圖哉　名村

團扇うり榎の家に入にけり　半兎

青梅を袖からこぼす暑さ哉　秀雨

寐所まで呼で置也なつの月　汶里

烏帽子着た人から霞み初にけり　其伯

降露を見たくせものか寒念佛　茶彦

すゝはきの仕あげ見せけり竹の月　水魚

三日月とこゝろくらべんはつ袷　北尼

千草の濱

下戸になり躶せて柳見歩行歟　白老

冬ごもりたばこがやまば丸佛　しら彦

音信山

目の前の秋や栗の葉蕎麥の莖　輪之

山雀の尾も流れ出ん落し水　東之

かけろくに春は來にけり梅柳　三化

野島が崎

青芒不二のけぶりの根がはへて　郁賀

大いそや小礒の波も卯月めく　杉長

鹿島の浦

鳴鴨の下りしづめたる鳴子哉　李尺

しらぬ木やこれも紅葉といふ斗　仙雅

白湯焚て時雨ふらす歟根本寺　利根旧

筑波峰

髪つみて下り居る窗や鹿の聲　素英

刈頭やすぐり立たる麻の風　隨和

阿加木の社

雲が出て落つかれぬやあきの月　壺半

下京や笠のはづれを春の月　茅麿

野と山と語るけしきの四月哉　まさ岐

松の花ちるや彌生のほとゝぎす　月鴻

水仙をきるや大事の墓まいり　羅月

はつ音とは山路のこゑ歟ほとゝぎす　碓令

物聞山

芝浦やくれても見ゆるうめの花　鹿太

草刈に貰ふてむすぶ清水かな　浦人

ありふれて大きな石や門かざり　米水

此うへの是非はかたらじ霜の草　葛松

木兎や老をつぶやくちからにも　川二

うめ咲や野を見るために明た窗　鳳石

淺間の里

黄鳥に見せうか庵のかくれ蓑　葛ふる

花のやれ月のやれとてたつけぶり　旅人

筑磨川

行とゞくこゝろのさきやはつがすみ　吐丈

我家の見えて耻かし雪のくれ　牛堂

蟇鳴や何かひとふしあるやうに　二峰

道ひろし山よりやまの花ざくら　治泉
鴨番ひおなじ事して暮る也　雪帶
節季ゆやなれもさすがに世の餉　菊成
松風の濱名も過て蝶はらひ　玉馬
飛影の何に似つらん草の蝶　呂允
秋の蚊の聲なしとまでは氣もつかず　令德
花見るを不斷にしたる山家哉　椿老

姨捨山

爺婆ゝも柳ひと木の世に出し　梨翁
山寺や猪に喰れし稻をかる　八朗
はつ花に世話しき春ぞ耻かしき　起悟
秋の雨夜もせまうなる心地せり　雨紅女
ほつ〳〵とうれしき夏よ夜の雨　鳳秋女

粂路の橋

起てたつ人にそゞろと草のつゆ　草司
あさがほやひとり咲ても秋の主　呂吹
朝はものゝまぎれやすさよ蝶の飛　文翠
薪割が繪ときしにけり涅槃像　魚淵
見し人の念のこりてや花たもつ　武曰
芦の穗を蟹がはさんで秋の暮　一茶

諏訪の湖

菊買ふやけふは誓でまをあはせ　若人
むら雨によい名がついて初しぐれ　正阿
名月やいつもの宿はあけてある　阿上
さびしさは人にこそよれをみなへし　ふと根
ものいへば露のこぼるゝ草の宿　其齡

信陽寒殊切

旅人にひと夜かくしぬ夜の雪　素檗

甲斐が峰

水浴るからす淋しや暮の春　可都里
苅ひまの名なりしばらく麥の秋　有斐
春の海へ流れ出たりみやこ鳥　漫ゝ
きぬ〳〵や蚊屋つり草も起直る　一作
水際の梅はちりけり流れけり　眞つね
棒かりて並で行や鵙のこゑ　巴岡
さみだれや人も無事なる繭の蝶　淇青

春風の來て動かすや琵琶ぶくろ　百二
雲に入杉一本のふゆ野かな　松保
夢の世となすもはたすも鶯よ　みち尾
青柳に末の三日月かゝるかな　草鳥
つゆ霜や竹の下はく男ども　方居
桐の木に音吹上る芒哉　草丸
行秋や礎に居つく草の宿　會人
青柳にして靜也不二の山　重行

那須の原

ほし蕪雪の遠山暮かゝる　北岱
口下りや男過たる早苗取　午山
朝東風の噓になるほど日和哉　鷺月

走湯(ハシリ)

日の入やさすがに松も冬木立　吾千
秋風のためにも松を植にけり　さほ女
無造作に秋の過行糸瓜哉　すみ女

清見が關

人はいさ大晦日の雪見せむ　桃壺

月はまだ山陰にあり風の萩　菅雅

濱名の浦

口はちかく落て紅葉の林かな　文耕
蚊の夕音して汐の來たりけり　史鳥

鳴海潟

春雨の中の月夜や軒の山　竹有
灯の影に見れば雨降芒かな　梅間
雪丸げもひとつまはせ勢田の橋　東陽
笹の葉のうごきもやらでかへる鴈　逸人
降くらすさまや老木の雪の聲　岳輅

つくしの果まで見めぐり來て、さがみのくにへかへるさいふ洞〻に

見なれたるものこそよけれ不二の山　士朗

八ツ橋

家五尺あとへひかばや梅のはな　卓池
枝をりや箕に入てあるうめの花　秋擧

奈古(ナゴ)の繼橋

ころもほせすがれの雲雀暮るまで　石海

穗芒の風まで白き小家かな　玉芝
秋の夜のあまる栖となりにけり　陸守
うぐひすの北にはむかぬ朝氣かな　里紅
海鳴やどこまで秋のとゞく音　松花
さみだれや蚤と蠅とになる庵　竹里
したしみに鶯鳴ぬ禰宜が塚　馳舟
千代の間に鶴のまたぎし菫かな　幽嘯
つゆの身は人にこそあれ菊の花　喜年

最上川

見ずしらぬ春にはあらぬ梨のはな　河道
髪ゆはぬ里の童やあきの風　竹市
咲かへて花野のはなの長さ哉　松童
紅梅やとりもなをさずつゆの宿　佐ひら
霜枯の市に持出す戸板かな　長翠

阿武隈川(アブクマ)

しばしやめて夢はんじせよ傀儡師　冥ゝ
花すゝき穗に出て後の名也けり　秋夫
寒がりて朝〳〵拾ふ槿花かな　与人

紅白のちりくるまりし牡丹哉　紫明
葱作る宿にも咲か玉芙蓉　松堂
我宿は凉し栢の葉榎の葉　旧臺
旅人の馬のり替るかれ野哉　多代女
花の夜が明かゝるなり雨ながら　雨考

信夫の里

月の輪のわたしあがればほとゝぎす　蘭叟
假に栽し松にはつ雪かゝりけり　さそ女
白雲や包で落す鹿のこゑ　秋水
はし居せん芭蕉に月ののぼる迄　大峨
秋風や暮るこゝろのそこを吹　旧友
尾花分て清水の月を見付たり　如山

宮城野

狼も喰はでめでたしやまの春　南山
風立や萍におくこゝろより　雄淵
聞うとて空寐したぞやきり〳〵す　百非
山寺やひと吹風の花をまく　きよ女
手のくぼの藥になるか松の露　三醒

狩野桶におされながらや芒ふく　松兮
かんこ鳥寐る事は唯すき次第　士山
田の番の水の番のと稲になる　旦ゝ

（磐）盤手の岡

きり〴〵す明れば松もしらぬ人　平角
よき水の走る音する若葉哉　素郷
むら杉のしのゝめかふる寒さ哉　楚山
鶴下りてふみあらしけり土筆　洪水
かけ初し虹鳴崩せ雉子の聲　子龍
老のつむものにしておく黎かな　谷雄

名取川

波くれて紅葉の影を戻しけり　十竹
春の夜の露ふまんかなひがし山　大呂

あら海や佐渡に横たふ　とありし
翁の吟も、此地の哀れにくらぶれ
ば、なか〳〵ものゝ数ならで

こさふくもこゝろもとなしあまの河　はこだてにて　乙二

うそついて梅見に歩行師走哉　澧水
世にすむ業の鬼を追ふ聲　洞ゝ
川尻の漂木をさゝぬ朝もなし　葛三
おもしろさうに焚火ほのめく　水
名月はうらなくすみぬさりながら　洞
あつさをかへすおしろいの花　三
欞の實のひとり伏見にかくまはれ　水
いつのゆふべをいせにくらべん　洞
若武者を情しりとはいひがたし　三
霓ふれ〳〵かくぶつ（杜父魚）の腹　水
めづらしき冬にとりつくあたゝかさ　洞
麴の塵を拾ふ窗さき　三
蔦つりて名もなき草を召れけり　水
茅の輪をくゞる人におされて　洞
たのしさの宿さへあらば寐て行ん　三
ひばり囀るはつ月のころ　水
花の木にまけじと育つおとこの子　洞
門をならべてはるの煤掃　三

観音も餅を買れし夕空や　水
垢のぬけたるまつ風がふく　洞
のめ〳〵と鷺もとらずにから糶　三
紅につらきと葉のこせし　水
六月の氷を誰か礫して　洞
竹四五本のめでたかりける　三
しばらくは身をよせばやの稱名寺　水
承和の秋をきのふとも呼　洞
あれそめし月夜をかけて稗を苅　三
渡しもあへず橋のつゆ霜　水
犬の子のそれのひとつも捨られず　洞
このたびこそは江戸の見おさめ　三
雪の不盡雨の筑波を招くらん　水
汐のながれも八ッ下りなり　洞
初花にうけ給りし御使　三
はるにめでゝや山鳥を追ふ　水
子日にも未の日にも酒の事　洞
やすませまうす鋤鍬の神　三

神路山

宵やみの空にせかれて秋の暮　丘高
鳴出して己が音にのる蛙かな　椿堂
すみよしの松もやせけり秋のくれ　省五
くむ月やひと切足らぬ梨子肴　周終

鳰のうみ

此うへにあやめをふく歟八重茬　中齋
鶴立し跡の七日も萩の花　仙風
人影のかさ高になる柳かな　鳥頂
いかほども雪たくはへよ比良伊吹　千影

賀茂川

柴折れば鶯いぬるゆふべ哉　雪雄
あふ坂やあとへかへるは鉢たゝき　凡仲
桃山はもゝにかたぶく日影かな　牛道
朝がほをしるしにいふや勢田の家　若虬

御芳野

蓮の香やものよむやうに鳴雀　可翠
春の草岸崩すほどもえにけり　和山

交野

人の氣の欲なき時ぞかきつばた　來紀

堺の浦

公の式にならいてや、よし原のお
いくつ女ども、一やうに白妙を着
つれて人の心をさるさぞ

その夜降雪のかさねや八朔衣　喜齋

三津の濱

雀にも鏡居う歟松のかげ　奇淵
紫陽花のひとはれするやひとり客　星譜
方除の御札汚すなすゞめの子　非眉
明くれの蚕の行方に蔦の這ふ　方鼎
料理場の鰤は睦月の柱哉　長齋
山守の宿のさくらは老木哉　米彦
我秋によく似たものよ鴫のこゑ　竹齋
枯芦のこれほどまでに吹れけり　八千坊
栗などが出來て後也犬の聲　萬和
枯柳水にうつればみどりなり　月居

武庫の山、

茶の花に代はこれ〳〵ぞ炭の折　桐栖
朝戸出や傘の内より遠柳　一草

大江山

夏の夜や草のうへにもありあかし　武陵

白山

朝〳〵は表にしけり若楓　眉山

高砂の浦

むら鴨のさのみさはがぬ月夜哉　左竜
立出てうき名たつともうめの月　くに女
春雨やつや〳〵暮る竹ばしら　かす實
春の鴨まれに北ふく闇の聲　布舟

松賀浦

山茶花や閑阿彌とふてはいらるゝ　玉市
朝霧に宇治の里人あさ寐哉　芦山
庵の戸や花もはつかにふゆ椿　古月

飽田の津

いそちどりつめたき足も唯おかず　椿堂

新田の池

立やまのまた／＼うへや秋の空　雋老

行としのしらべを聞や松の庵　玄蛙

赤間が關

庭はけばけふの日もなきしぐれ哉　憐霞

白つゆを出ぬけて露の在所哉　桃宇

外の海しぐれがすめば暮るなり　古硯

はつ袷麥のたけ見て戻りけり　巴水

生の松原

はじめての二月の夜也鳴蛙　瓢凰

二日降雨のひまよりはるの山　水起

すめばこそ女鹿男鹿に鳴れけり　凡馬

鳴もよく歩行もの也はるの草　吾來

水鷄なくや心すませば水音も　三顧

千年川

松風のうへに山家のきぬた哉　文角

椋に羽をたゝみて淋し露の鳥　化石

椎の葉に夜風動てしかの聲　歸來

文司が關

鳴聲のそれだけ居らぬ千鳥かな　石亭

きり／＼すあすの夜鳴は何とせん　徐六

雪空や春の心を立ふさぐ　不成

はつ霜やわすれし門の古莚　琴水

宇佐の宮

寒菊のどこに咲てもしづか也　露竹

落かゝる日をなく蛙／＼かな　枕流

安蘇の御池

若たけの形に似たるゆふべ哉　砂童

松越して芒を越してきぬた哉　岫丸

鳥ひとついづこへ飛でゆきの山　櫻阿

松浦浮

鹿の聲うちつけて來る嵐哉　李薫

秋の風寐て居る顔にかゝりけり　有無

閑子鳥晦日しらぬ小家かな　梅芽

魚つかむ鳥の行方や若葉山　井市

嶋根まで花となりけり秋の草　羅良

みじか夜の草山ちかし五位のこゑ　忍口
若竹について入なりやまの月　左來
ゆら／＼と野をゆり明す葛の花　至長
出て見ればさのみさはがず秋の風　貞雅
六月や是ほどのびて名なし草　維石
かたびらに起／＼安きこゝろかな　如柳
ふち澤や菊植るにもお念佛　天外
もひとつもふたつもほしや雪の山　鞍風
ちるぞいま花の心をあてゝ見よ　菊也
夕風やおもふ所を月の出る　祥禾

海外なつかしき所

青嵐ふくやあるじも山家ぶり　布席

蟹殿辨

かに殿といふは、世人蟹どの／＼といふが故也。やどなき産家にかよひ、佛涅槃の日に這出したるたぐひにはあらず。まして長門の平家がにが、猿が島にわたりし蟹右衞門が子孫にてもなし。あはれその行狀をいはゞ、たゞにまよ引の横步行して、玉ほこの道の直なるをしらず、角目立てゝうき世を覗き、人の穴ばかりそしり、をのが腹の味噌をすりならべ、我に諂らふものには臍犢鼻褌をあらはし、あなのかり寐のひと夜をさへ、さよごろものふた夜とかさね、そのしたがはぬものには、鋏みきる／＼と怖す。その面は懼氣にして、欲のふかさは爪のながきにてもしるべし。しかはあれど學び得たる術あり。釣のつり針を見ては、かしこくも餌をぬすみ、戀の網をかぶりては、八足飛に迯ゆくゆへ、いまだおさへられて白泡もふかず。今年文化丙子五十年の春をむかへしは、幸にしてまぬかれたるものなり。親蟹たちのすみすてられし崩れ穴を、をのれが甲に似せてのすみかなりと、奇(寄)居虫のきざししきりにおこり、ゐねぶる時は闇がにとよばれ、さめてはながれにうかれて月夜蟹と呼れん。このかくれ家を穴かしこ、人に沙汰ばしするなと婆ゝ蟹にいふ。

と、をのれが書たるやうに落書せしは、しらず、なにものゝ仕わざにや。されどわがこゝろに的中すれば、いさゝかふち矢の數にあぐる。

會(アヒ)の中山

あさがすみ陸奥までもつれだゝん　澄水
松杉の鐘つき堂もしぐれけり　三芝
能因のしのびし宿や夏木立　青蘭
咲花のふところ鳥歟月を鳴　臨江
玉味噌の宿にもひと夜明やすき　伯蔆
年とし花を遲しとおもひけり　可矸
苗代にねぶりをこぼす松の鳥　白扇
ゆき僻や狸をしばる寺おとこ　大旭
七種の數にもなれやいそのなみ　柳淵
つて有て虫ほし拜む旅人かな　三松

立野の山

あさがほにものいふ年と成にけり　南謨

霜月の庭より見ゆる野山かな　みち雄
御降りに二日おくれてはるの雨　岩甲
古郷の霞を見越す松植ん　嗽石
霧降るやこりたる事は捨がたき　渭水
まじ〳〵と市は立けりはつしぐれ　楞風
暮たらばひと先やすめかんこ鳥　爲旭
家持のよまれし山を小野の炭　宇光
南天の花に裏家のかげり哉　淵光
青柳投た礫も鳥になれ　窪子
さはらずにおけよ雨まつ草若菜　ふち女
鬼とりの仕返しも來る春の月　川雅

鎌倉の里

稻の香のとくさも秋のよきためし　豐秋
くたびれて余所のきぬたを聞夜哉　米社
蝶飛や草鞋の賣れる山七里　梅豐
手まくらの人に科なし春の雨　宗慶

相摸の市

鰒くはぬくせもの也と譏りけり　玉珂

夜經に起すは神も守るまじ　春翠
待宵はたらぬ所の風情かな　梧井
永き日や藪の中まで帶して　亮几
うかむ時蛙の春は遂てし歟　九皐
三日月のほどもみじかき夜也けり　年ひこ
人戀し春の山路に雪を見る　朱簾
つまづきしはづみや春も盡し空　芝得
鳥の巣をからぬばかりの旅寐哉　薫岱
きり〳〵す寮主の錢の置所　都雀
合歡の木の思ふに遲き芽ばり哉　隣松
蝙蝠の網に打るゝ川戸かな　麗之
夜ざくらに見合す顏が佛かな　東舍
槇の戸や花見の客の暗りもの　雄扇
行秋やいたづらならぬ鐘の鳴　聲玉
我宿の妻になれ〳〵かきつばた　文的
むかひ地は田植も濟歟鷺かへる　露丸
汐濱のゆふべ過たる小春哉　浦唄
鳥影の雲にもたるゝ汐干哉　江水

春の風山の、ふかみの見ゆる也　湘水
鶯の尋て下る泉かな　菊雄
何の露かの露佛まつり哉　五朴
寐た蝶はねさせて棹せよ薪船　松調
月のなき暮を判鳥(カケス)のわやく哉　壽杏
今朝の夢誰にかたらん枯尾花　半素
もの陰にきつね眉かくはるの雨　丈水

御浦の里

鴈がねに乾ける木地の佛哉　吳雪

江の島

袖すりの垣あたらしき柳かな　鳥流
世中のゆたかさ見ゆる櫻かな　龜洲
けしの花ちらぬ處があぢきなき　皎ゝ
めつそうな喧中上る夜の雪　案内子

日向(ヒナタ)山

夏の月賀茂はあそぶによい所　智玉
せみ鳴や口もあかれぬくさいきれ　秀山
朝の蝶袖にはとてもとまらぬ歟　さゝ雄尼

草臥の日にこそたゝね夕の雨　友比呂
よく見れば柳は人のくすりなり　鳳尾
張上が原
春はものゝ杉茶を見ても遊ばるゝ　也水
明る夜もかほど長い歟衣擣　方斛
行春の宿屋に並ぶまくらかな　以與
梅はやき便りよろこぶ在所哉　植ふる
此奧の梅たしかなる筧かな　會登
やよ千鳥としの寄たる聲もなし　石年
鯉洗ふ庭の小松に雪が降　桂志
ちる事の櫻に耻よけふのうへ　豐女
足柄の御坂
板敷に飴ふみつける十夜かな　凡和
手細工にとりつく日より櫻咲　府尺
藪蔭やうぐひす聞に十朝ほど　仙馬
箱根山
袖の月はらへば草とわかれけり　烏採
夕ぐれを見うしなひけり春の海　規矩外

笑ふとは愛をいふらん東山　嵐雪
はるの月花に用ある人通り　あやめ女
園ぶりのなまりも師走男哉　有隣
雨降山
家ざくら富のひとつに咲にけり　宇良ゝ
凉しさは名にもある也神樂岡　丁几
鳴もせぬ顏を並べる巣鳥かな　洪溪
情うる宿に隣りて小夜ちどり　苔丈
朔日の別にあかるきぼたんかな　杉溪
わかれ路の二すぢ道や布穀　松席
盃の月子の友だちも來たりけり　左右
十月の道ばたにあるさくら哉　叙來
愛甲
蔦の宿なしと答へて茶もくれず　子德
名月やさめて盞とる蜆汁　木屑
我ものにせし木のもとを布穀　帋立
佛にも近づくもの歟蝸牛　棋方
桃咲やねだりごいふおとこの子　茂林

神の國花に櫻に咲にけり　祇石
露といふ花を持けり草の庵　忠輔
秋の日や山のちか道かけ下る　素明
こよろぎの畑は麥也かすみ也　美年
枯野とはうけ給れど松ひと木　淇水
あのやうにありたし霜の朝鴉　水砂
はつ雪や羽をりの上に羽織着て　岷山
よき事の明日もあらふぞ春の月　芹江
行鴈や松に日の入波のすゑ　たもつ
にぎやかな秋をもて來る小鳥哉　周里
冬の山望みももたぬ鳥が鳴　露竺
霞ませて行や野町の蜊賣　石老
鶯さきへ生れたやうに春の山　李翠
水くさき筑波の空や卯月立　雄也
山鳥のふりわけになるもみぢ哉　菊哉
唯居ても秋のこゝろを風にもつ　芦尺
飴賣の身ぶりして居る春邊哉　里蝶
掃除する宗祇の墓や時鳥　美闘

綻びしやうなり入梅の松ばやし　祇學
秋やいま十三鐘の跡にたつ　其水
人胤をふやせ〳〵と山わらふ　左明
かれ柳雀がよし(由緒)をのこしけり　路完
朝がほや一夜住持の永平寺　而來
持まへの風情はすてずかれ柳　花紅
朝虹に春を諷ふて人の來る　不磷
字によぶ松のかたき(傾)や蔦もみぢ　東弓
雪の日や盃自慢の人の來る　柳翠
浦島が夢はさめた歟枯尾ばな　白阿

前取(カトリ)の里

何たゝく渚の宿ぞおぼろ月　五城
松蔭の添ずばいかにをみなへし　檜路

小餘綾(コヨロギ)の磯

見るものゝむかしをいまに雪の松　春珍
草の戸に錠のをりたるあつさ哉　麻佛
日にましてやさしき聲や巣の雀　仙花女
あたらしき松風來るやゆきの朝　三保

あらましに秋のすみしや松葉散　桂路
正月といふたばかりも福壽草　喜鶴
大家の行燈もて出る野分哉　佳喬
天晴の帆影見よ〱年の行　漱古
虫鳴や佗を習はゞ草の菴　月年
鶯の居直る聲や余所の門　芦經
涌人の傘とづかるひがん哉　百龜
さるにても名のめづらしや佛の坐　安成
うしろから鴈が來にけり草の庵　其外
橘の陰にてそだつ巣鳥かな　牛佛
山の井の椿はき出す二月哉　雉啄
花の世や家にありては家ざくら　葛三

四時坐右

はつ花やそれにもくせの胸さはぎ　撰者　蟹殿
こゝろあらば嵯峨へくづれよ雲の峰　〃
蔓草や何處まで伸て盆になる　〃
大鳥の雪にものさり〱かな　〃
ぬる蝶や舞ふ蝶や野のこぼれ錢　跋者　路齋
むらさきのお七がかざす團扇かな　〃
姿ある人に逢けりはなすゝき　〃
乞ふ宿もあらじ霞のうつのやま　〃

西行上人笹が岡參籠の砌、鎌くらどのにめされて、弓馬の道たづねられしを、黒主の歌のやうにこそとまうしけるを、鎌くらどのふかくうなづかせ給ひしとかや。いかなる奥儀にかなふ處やはべりけん、愚心におゐては不可思議の事なりながら、劍を舞すを見て筆の法を悟りし人もはべりしとさへ承れば、あながちによそ事にのみ聞すてべきにもあらざりけるか。爰に洞ゝが的まうしは、かれがある一卷のはいかい集の名なり。としごろ日ごろつとめたる修練の矢數のさしつけに、通りてめでたきのごゝろを風して、かうむらせし老婆心のみ呼鳴。

鳴たつ庵葛三

世美冢

白老編

（世美家）

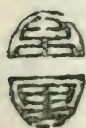
孔なき笛・糸なき琴も、心たかき人は必もてあそぶ。かの無聲三昧をきくものは聞との至なり。されば萬象森羅ひとつとして音なき物はあらず。それをすべきゝたまひて、衆生をたすけ見そなはすは、施無畏大士の悲願なりとぞ。ゆゑに觀世音といふ御名もおふせ奉るならむか。上總の國高藏といふ處にたゝせおはしますは、坂東何番とかやいへる靈佛にて、御堂の古きとそのはじめをしらず。東海の眺望は弘き誓にたとへつべく、木立茂りかさなりて薰風不斷の香をたく。吾友白老法師こゝにかくれすむ事年あり。此お山の花ちり、わか葉にうつれる頃より、なは蟬・うませみ・寒せみ・日ぐらし・くつ〳〵ほうしなど、耳もとにかしがましきをきくにも、これらの虫の春秋をしらぬもあはれに、かつ觀念のたよりともなりぬべしとおもひそめしより、はせをのおきなの句に感ずる所ありて、やがて石のおもてにかの句をゑり付て、まうでする人〳〵にも、しりがほにしてしらぬなり、とよめる無常の心をもおどろかさむとなり。ちなみに佛頂和尙より翁につたへられし竹如意の圖をあはせしるせる事は、馬祖の一喝に、たゞちに三日の耳しひる事を得たりといふ心をよせて、かの蟬の句をしむしちにきゝ得る人のゆかしければと是を集につくり、遠きちかきにおくり、こゝろみむといふ。われあなゝき笛に音を入、糸なき琴をかきならすたぐひにあらずといへども、人〳〵の句をみるにつけても、その作者の心をきゝしるべきはいかいのかたつかたを、こゝろえがほせるにまかせて

文化癸酉　　随齋成美漫序　［成］［美］

千丈禪師竹如意記云、夫如意者、釋氏之器也、而世時諧倫遁客者、多持如意、以資談柄、更有一種俳諧家者、蓋其所吟、乃國風之變體、而有使人感歎不已者、方其苦吟冥搜、必以如意、支頤拄頰、而不自覺夜將日曛、豈風雅之尤乎、幾有俳人芭蕉翁者、蓋諸歌之絕倫也、今也、海內言俳諧者、莫不以翁爲師、翁參佛頂國師一絲和尙、頗有得于禪、故其片言隻句、亦自然有餘味、其持如意、蓋國師之所許也、今茲丁未秋、余寓東都、適有僧某、以竹如意一枝、授余曰、是芭蕉翁所持也、吾友某爲翁弟子、因得此如意、寶襲有年、既而歸吾、〻今遺師、〻請持之、余以謂凡物各得其所爲貴、今此如意、竹枘菌首、雅則雅也、與其徒懸我室纏畏蛛網、孰若轉贈誹人慕芭蕉者、於是、贈大槻侯臣馬場杉羽者、杉羽得彼如意、喜不自勝、乃請爲之記、余竊念杉羽孜〻慕古與一枝如意雖至微物遂得其所、不能無感也、故一夕挑寒燈、記此贈之、

玄〻堂主人、頃著一集、而示余、〻偶憶禪師竹如意記、因書之卷首、而贈之、

文化十年癸酉秋日　太一庵橋水並

磐梯谷時鳴書

やがて死ぬけしきはみえず蟬の聲　はせを
　何わすれ草あか〱と咲　白老
むら雨の臼十ばかり月さして　一茶
　秋のはじまる番傘かな　老
鳩のゐるはら〱垣のうそ寒く　茶
　人まつ船に籠を吹せる　老
子ども等が曲突神をはやすらん　仝
　元祿五年夏のゆふぐれ　茶
膳立も牡丹の花のさかりにて　老
　あらさがなしや瞽女のさげ帯　茶
おとゝひの夢を筏に押ながし　老
　須磨のけぶりときゆる相談　茶
我やまの櫻を人は花といふ　老
　三文もちもみなつゝじ也　茶
陽炎のちよろ〱川に棒さして　老
　はした無盡を觸る夕月　茶
よは虫に角力とらせて笑ひけり　老
　萩の下から美濃の大垣　茶
鳥が飛風が吹とて普門品　仝
　宮司の聟のまいりさぶらふ　老
野邊の松のべの榎にかくれ合　茶
　あられの玉をいはふ君が代　老
埋火に化もいたさず年とりて　茶
　豆腐つくりの星をおぼえる　老
一番の大聲あげる葛西船　茶
　鳥も見えず塔の足代　老
あらし吹草の小隅に住ならひ　茶
　親の羽織を二度おがむ也　老
月てらせそれ世の中は十五日　茶
　露にふられて戻る獅子舞　老
べん〱と百日紅のふがいなく　仝
　はなし披露の大鐘が鳴　茶
けし炭にかへて曬ひし生ざかな　老
　二日寐たればほんのはつ春　茶
加茂川の華よ囀る朝すゞめ　老

ひら〳〵狀をはさむ狗(枸)杞藪　茶

五十年の夢のしるしにさゝ、白老坊のつくれる翁塚に杖を曳て

月雪の跡をつくれ閑子鳥　しら彥

けし咲や賣れるともなき赤藥　白老

それでこそ御杜宇松に月　一茶

わがかみつふさのさかつは、おちこちのへだてなく、四時をわかつのみ、大かたの春にほのめかされてさかけるも實にや。

春雨や鼠出てゆく壁の穴　あや彥

ひよ鳥の梅に醉たる目つき哉　祇笑

霞む日や田中の松も祭らるゝ　雨十

鶯の聲にならぶや天城山　梅枝

酢を買に醍醐を出たり春の月　抱琴

隱家の外は春たつ草木かな　姝柯

竹齋が粗放淸し三ッ葉芹　あき雑

家根に置蠅がら得たりうめの花　呉柳

小男鹿もけふは花見る仲間哉　保慶

山吹の露に育つ歟雀の子　直文

謝甘露法雨

蝌蚪の蛙になるや小ぬか雨　寬志

蜑が家に山のひつつく霞かな　五友

法談のうしろの櫻咲にけり　默艸

世の中はことに月夜ぞはつ蛙　生雅

戸をあけよ山の間から春が來る　竹童

山鳥のわかるゝところのさくら見ん　梧林

鳥の巣や九輪のうへに夜の聲　芦仲

無如此處學長生

春めくや山の小家に魚を烹　雅堂

何喰て猿はそだつぞわかれ霜　一壺

春風に肥るやうなり淡路しま　亡人佃青

さし頃おもひねぎどにしける翁塚

笑となりて

我恵方べろゝの神にまかすべし　白老

おてら(寺)わかしよ(若衆)さやまぶ(山吹)いにはな
はさ(咲)ぶさもみや(實ハ)ならぬと高くうた
ひ、麥つくも鄙のむかしぶりさや

夕すゞみ蛙まじりの蟹の足　砂明

翌日ありと鳴やみぬる歟かんこ鳥　民古

粽結ふ日は大納言どのでなし　可好

あけやすき事はともあれ海の月　馬童

音信の京ちかなれど閑子鳥　總丸

田植うた男の殖てくるゝなり　和考

おなじ心にしら蓮のそよぎ皃　よし古

蚊やり火のあとすさまじや朝の月　子遊

夏篭やわすれかねたる唐がらし　雛賀

不二筑波見わたす里や杜若　兎教

淋しみも別よ螢のすみだ川　御風

何艸を尋てやみを行ほたる　青州

暑き日や富士川の船つゝはしる　蘭丘

ほとゝぎす鍋とはいはじ笠一ッ　子賢

藻の花やありたけ伸す馬の首　里丸

笠じまも見たかほで鳴閑子鳥　白川

しらけしの夢を見ならへ野罌麥　眠扇

さびしさの日かげこもるや茗荷たけ　貞窩

葉櫻となれば酒屋もそこ一里　貫道

鯉はねる音のみ明て皐月あめ　白鷺

傘張が門の日和や麥のあき　滑水

振舞や油扇も名主めく　棠雨

庵の夜をくるり〱と螢かな　亡人女 花嬌

笠は菅杖は黎にしくものはなし

雲の峰哭れもしそふな家ばかり　あや彦

葵ひよろりとゆふぐれに成　白彦

風乾く藍の火縄を手操せて　仝

世をにげ尻の兎そだてる　文

松の香を洩てひろがる月影に　仝

から竹三把それもやゝ寒　白
蓮生が苓餘子拾ひに雇はれて　文
　小諸の市の雨のあと先　白
風の氣儘上戸を寐せこかし　文
　ちよいとはしらの穴におく鍵　白
覇王樹の日かげ勝なる戀の果　文
　八菅の御山杖にうれしき　白
涼しさは鍋の鑄形のひよい〱と　仝
　まい〱虫に舐られし月　文
さあおれが年をあてたら酒買ん　白
　撞木こつそり汐に取られし　文
咲花に注連を引張朝催ひ　白
　蜜柑ころりと砂の陽炎　文
切凧がふは〱してもいふ念佛　仝
　穴の明たる瓶は吳けり　白
小栗栖の庄屋が袴譲られて　文
　かしらの雪を震ふ木兎　白
漁火も難面數と申かや　文
　夢の披露を見合てゐる　白
大空の底のぬけたる十五日　仝
　茶碗たゝいて人を呼なり　文
萩すゝき乙隺丸に筆とらせ　白
　盤の鉄をむけるあき風　文
月ひとつ屑家三ッ四ッ雁啼て　白
　おかしきものゝ古箒かな　文
時雨ふる幽靈坂に行かゝり　仝
　羽おりの紐に藥ぶらさげ　白
へつたりと手形を付し赤い紙　仝
　彼岸の鉦に雲の片寄　文
吹けやふけ石鹼の玉も花ごゝろ　仝
　鳥の栗も萠る二ン月　白

蕎麥好はうんどんをにくみ、下戸は醉ざめの水の味をしらず。我にはほれやすきものなり。己を知れ

るな、もの知れる人さいふべしさは、むべなるかな。

雨ふるや蝶の手足に秋の行　文鯉

しら露をはき込門の流かな　槐里

葬に申わけなきしら髪かな　桃人

鹿笛の上手になるぞ已がやみ　植ふる

七夕や角力のならぶ橋のうへ　民直

遠聽江上笛

秋の雨身退ふとおもひけり　許白

菊の名よせ人の名寄と讀なして　埜白

朝寒や宿のはづれの小茶畠　青花

しら菊や一段高き川けぶり　芦道

山川の砂あたらしや九月盡　兎水

しら露や骨髓見せて石の上　亡人老帋

棲や桐の一葉も夢の跡　一芝

鹿のこゑいやます闇と成果し　午川

味噌汁の匂ひも高し今朝の秋　梵馬

名月や笛の聞ゆる小一条　亡人杜流

行秋やとりひろげたる茶碗賣　總人

散事にかゝつて居は楓の木　輪之

萬の遊びに勝負な好は、かちて興あらん爲なり。負て本意なき人の心なたのしさ思ふは、風雅なしらざるにや。月のゆふべ・花の曙なひさりたしむこそ、蕉翁の流なしたふ人さいはめ。

大雪や死なぬつもりの朝煙り　和鳴

馬士の馬に乘ゆく枯野かな　千あき

砂濱や黒くもならず冬がへる　野雀

冬の月玉子の売も捨かねる　梅山

臘八や心のさくら峯にさく　紫夕

十月や嘘のやうなる晝の鐘　泉玉

したゝかに寐たれば雪もふらぬ也　何有

冬枯の脊戸にかけたる鶉籠哉　一瓢

掌ラにしぐれ見て居法師かな　雪亭

木枕に身も雪折て旅寐かな　亡人山冬

筥根山追つおはれつ幾しぐれ　呉竹

冬枯や鷺ほど白きものもなし　車来

日のあたるかたつら山や寒の入　麥雨

柿の木は杪子にならず冬ごもり　菊人

納雛しぐれの鳩にまじりけり　五柏

旋覆花の夫ともしれぬ枯ざまよ　しら彦

雨しほ〳〵と降まさるに、さしこめたる草の戸をあはたゞしく敲くものはたそ、しら彦坊也けり。あはや闇の灯に逢る心地して、膝をつきつけ額をあはせ、うぐひすの音を待も杜宇に通ひ、罌麥は女郎花にふれるのとは、いまだ格にくはれ理をのがれざるはいかゐ也。そのもの〳〵に對し心をもちひて遊ぶさかひは、彼蓮の糸莖の目に見えざる緣をつゞるといふは、今更なりと高嘶の折に、遠き國より坂東觀世音順禮なりと眉をしはめ鼻をいからし、竹椽にすりあがり、我ひとふたつ聞覺つるをとはめ。

顔に似ぬ發句も出よ初ざくら

凉しさを繪にうつしけり嵯峨の竹

といへる古き句のはつ櫻は、うめとも蓮とも通はん。嵯峨の竹は、松にても瓜ばたけ抔とありても句なるべきぞ、いかにやとのゝしりける。されば延寳の頃の句に、

春と夏と布子と袷と猿が餅

江戸三吟の連句の中に、

萬代の古着かはうとよばふなる

質のながれの天の羽ごろも

田子の浦浪打よせて負博奕

斯のごく理を盡し、曲を專らとせば能聞えてん。されば先師一代意の通ぜぬ人とはいかゐせず。歴〻の門人に俳諧の手筋通ぜぬ人多し。其人と終に言捨もなしと、宇陀法師に見えたり。祖翁俳諧の玄〻は、鳳凰も鳥也、鳥も鳥なりと手を打て笑ひ給ふと申せば、扨も口は堅く調法なるものにて、家のまへにては犬も吼るものとつぶやき、かほをふくらかして去りぬ。

國を隔つるはその到るまゝなのする

水戸船の小あけ揃ひぬ單もの　其文
青芒不二の裾の根がはへて　郁賀
孵釣ん余所の雀に成てより　卜鷲
青あらし淡路の島の鶏うたふ　烏周
大磯や小磯の波も卯月めく　杉長
ひた〱と潮にとらるゝ清水哉　雨塘
氣のうつる木もないやうに蟬の聲　太笻
海棠や唐人おもふ夕月夜　少年 鞍丸
我庵や春さへ來ればみな雀　升入
泥足に過て仕舞ぬあやめの日　可都維
三日月は高野聖の脊戻行　兄直
星合の沙汰も明行楸かな　素迪

みちのくへ行を送りて

松しまにいふて下され我老ぬと　亡人 恒丸
穢多村の曙もよしうめのはな　鳳梧

草麥の中やいづこのちり櫻　瓢斗
雨はら〱松の霞をこしらへる　鳳羽
納豆の朝は大きな噓かな　少年 徐柳
小雀の又啼こほす家根の雪　兎一
鳴ないて草になるなよきり〱す　桂裳
賑かに秋たつ里の千蘭哉　八富
露の世と見えてさつさと蓮の花　車雨
釣さげて小手干す庭や葵咲　米何
蘡薁の花からくるゝ小雨かな　葛良
くり返す月の前なる踊の手　宜麥
夕顔ややがてなりなせ屛の圖　梅壽
入梅も終るかはきや猿すべり　護物
夜の扇虫追捨てたゝみける　敬國
こゝらから秋も見ゆるぞ我木香　能阿
松がえの序かわれに秋の風　萬外
草の戸や鴫に啼れて余所へ出る　紀逸
とほ口に日の寒嗅し雛の籠　方堂
名月や晴ての後の氣草臥　午心

のべつけに咲ても秋ぞ垣ね艸　氷黒
花見てぞおもへ椿の咲どころ　完來
八条の薄垣くゞる十夜かな　素玩
晝顔や二尺すさらば山の影　對竹
しら露や鶏の女夫の呼かわす　五陵
松島で引た風ふけ鮓のうへ　來蘇
梓にもかゝるべらなり雨の鴫　一峨
朝雨やふせう〳〵に櫻ちる　橋水
胡麻三粒はねても嬉し霜の朝　一瓢
梵論の行ふもとしづかに落葉哉　巣兆
葬に寄麗な人や髭宗祇　道彥
淺草やすゑは稻葉にみかの月　成美
山茶花や三日月過の鳥のこゑ　寶（むさし）水
なか〳〵に身は捨られず枯尾花　寶義
噓は旅せぬ人かさくらかげ　黍且
乙鳥のついとぬけたり仁王門　卜花
蓮見れば蓮より外の花もなし　俊水

伐捨し竹の長さよ夏の月　如水
蚊の聲や立添竹は見事にて　芳國
暮六ッの萩にぬるゝや硯筥　林書
夕空や何をたよりに秋は行　岩芦
道すがら碓唄の十夜かな　綠水
追つけば知つた人なり雪の笠　文丈
秋たつや山は日頃の山にして　几石
とても行年なら春もしかるべし　星布

うぐひすのはたけに遊ぶ二月かな　他（さがみ）阿
　笠もてらつく青海苔の莭　松調
山かすむ釜のうなりに水かけて　白老
　笹葉の風と狂ふおとこ等　阿
霜がれの荷鞍を月に矯直し　調
　納豆桶の冬がかさなる　老
造作なく酒屋の松に名を送り　阿
　四十しら髪をこぼす角兵衛　調
窓薦のさら〳〵雨を聞度に　老

うらみつらみの撫し子が咲　阿
船のりの言ぐさもなき別して　調
　赤とんぼふも地震をしるやら　老
三日の月等閑に見し欅やま　阿
　ほそり芒の三春念佛　調
捨五器のふわり〱と潮先に　老
　すゑの従弟の名を思ひ出す　阿
咲花の行燈はりに雇はれて　調
　鼬のみちをふさぐ陽炎　老
行春の草鞋をいくらはきなくし　李翠
　竹の奥から水のとく〱　雄也
撫て見つころがしてみつ大瓢　里旭
　袴の皺にとしの暮ける　石芦
赤玉の藥がぽつと弘まりて　也
　山ほとゝぎす人をそらすな　翠
さみだれの三島を立しきぬ〱に　芦
　茨の匂ひも袖のうはかぜ　旭
幣ふりか鼠の戻る頃なれや　翠
　誰草笛にのするさゞ波　也
西空の苦みもぬけてよい月夜　旭
　廣葉袙に豚つゝみて　芦
露霜の葛の松ばら見に行ば　也
　風のゆるみの小鼓が鳴　翠
あけぼのゝ紬に布をひらめかし　也
　粥すゝるにも親を言出す　旭
花に添軒の燕を大事がり　翠
　野田の豊しづかなりけり　也

知りあふた中歟雀と蜆うり　李翠
湖をうしろにもてり花菫　里旭
大根の大味になる霞かな　雄也
のどかさや小龜の遊ぶ岩のうへ　少年 其徳丸
椎の戸や晝の椿の落るおと　利角
夏隣る山に追るゝ心かな　卉文
春雨を訾て降せる牧士哉　二泉

うつり氣や花に行日の物忘れ　葦玉
菜の花や沖の方から日の暮る　浦唄
こつそりと朝潮見えて春の雨　祇學
春雨に廣ふ成たる世間かな　花虹
春風のものいそぎかな柏の木　亡人 時人
卯の花やおごりのつきしむら雀　凡和
掃立て産家をひらく若葉哉　左右
夕立や三日の月を降殘し　叶水
卯の花や序がましき朝詣　路完
澤瀉に唯ゆふかげの殘りけり　可亭
ひと夜かる宿の牡丹も咲にけり　杉溪
草も木も鳫啼朝のやうす哉　五れい
あさ霧や出ぬけかねたる山の家　女 さゝ雄
蕣の花のうへ見て草臥ん　從之
とりしまる人のそぶりや月の雨　主艷
萩の花散てもおなじ日のうつり　鳳尾
夕ぐれのありたけ抑や赤蜻蛉　草水
常盤木の中から明て秋の風　府尺

いな雀つゞく日和が嬉しい歟　東隣
ねがふ事はまとまるもの歟露の玉　宇良ゝ
鵙啼や人ほとめきの婆ゝが背戸　木屑
山小屋に別の日よりや秋のてふ　都ゝ羅
蕣のふるみは持たぬ垣根かな　周里
隣から戻れば門を雁わたる　及助
なが／＼のたよりになるや荻の聲　湘水
撫し子の節の間遠し后の月　きく雄
月も見ず何の命ぞふくろ蜘　文的

福聚海無量

蝶も來よ二百十日の酒盛ん　川雅
長谷寺をうしろに夜たゞ砧うつ　菊也
蕣にあさ山うつる流かな　完里
片山の日和あづかる紅葉哉　左明
向ひ路の船よどれから秋の來る　五卜
さゝ吹けば命を啼歟きり／＼す　淵光
一　風ふけば嶺にわかるゝしら雲の
たえてつれなき君がこゝろの

けさの夢誰に語らん枯尾花　半素
朝催ひ時雨過行大井川　壽杏
はつ雪や羽折の上にはをり着て　岷山
木がらしや山雞の尾の取まわし　石芦
君が代の癖ともおもへはつ時雨　眞彦

行衞のしれし旅ごおもへど

木がらしや利根の筏の何處泊り　松調
冬がれや川形にゆく鳥の聲　楞風
嬉しくて耻しきもの炭だはら　洞々
花に鳥ひとかたならぬあした哉　芦尺
了簡の幾ッも替る春日かな　芝英
七夕のさゝ水いはへ孕牛　他阿
鐘ならす夕下に茂れ花さゝけ　叙來
鴈がねに乾ける木地の佛哉　吳雪
此雨をたのまずとても梅の花　雞(雉)啄
咲花の互ひにおしめ沖の船　澧水
名月や老を名のりて高笑ひ　葛三

松杉の男ぞろひや夕しぐれ　しなの いわほ
寐て起て手柄がましや今朝の秋　素檗
山里やいかい事ある冬の空　嵐外
なか〳〵に人と生れて秋の暮　一茶
笠おけば草のうへよりあきの風　ひたち 由之
假初に見て行人や花すゝき　隨和
花の宿かたじけなくて風ひきし　左姑無
散れとては植ざりけるをちる柳　みちのく ふみ雄
はつ秋とおもふたり扨忘れたり　草也
椴の木に蜩啼て日の暮し　掬明
川霧につゐて引込小鹿かな　冥也
今しやは月もなくなる秋の暮　与人
精出して樛の樹そだて岩淸水　秋夫
案山子にはなられじと泣和尚哉　冥々
柚の枝をとつくとみれば鶍の飛　秀泉

庵のぬし雞頭植て居ざ(マヽ)りけり　祥風

葭雀の居處見たり秋の雨　夜六

井けぶりのとゞく苫也松の霜　蘿月

山しざる如し雨夜の引板鳴子　古桐

待宵や雨をこゝろのよせ豆腐　三徑

花ざかりおもひ出しては風のふく　雨考

朝貢の餠はあざれて梅のちる　南史

園へ散松葉踏ても深山めく　曰人

宮城野にて

降はづの雨にあひけり萩の花　雄淵

大寺や疊に遊ぶはるの鳥　巣居

友ほしき日も九ッや松の花　平角

降雨に位つけたりほとゝぎす　乙二

草まくらはるかにたのめてし信夫山も雨につゝまれて、月のあすもいはざりければ

柿ぬしのむしろたてたる刈穗哉　幽嘯

しづかさを引込月の小窓かな　眞澄

夕日やら撫し子やらの戸口かな　木海

嬉しさを包む艸ならかきつばた　可都里

呼ば來る螢や何が淋しくて　五芳

行年や馬をよければ牛の角　青良

身ひとつにし(盡)かな盆來りけり　吾來

寒き夜と夜寒のさかひおもしろや　雋老

名月をうしろに庵の曲突哉　玄蛙

筑波へものぼるこゝろか蝸牛　閑齋

霧ふるや朝からとける草鞋の緒　寒涯

はつ雪のおとついは雪の見もの也　一艸

脊戸の菊植た覺はなかりけり　丘高

山里や膳の先まで朝霞　月居

なつかしや加茂の卯の花くれたらず　蒼虬

春の日は毎日ながら惜みけり　升六

梅ぬ(マヽ)るむ人はおほかた月夜哉　岳輅

柳青し水長し笠を手に提て　七人 士朗

しら波の上まで露の夜明かな　樗堂

愛石

ある日淺茅が原の秋見んと、みたり杖をひき鳴らしたり。白老が初雁のはつみを失(矢)立のはじめとして終にひさ巻とはなりぬ。あながちに、莚をもとめしにしもあらざりし。

はつ鴈や上野を寒くして通る　白老
のつそりのびし桐の有明　橋水
土器にとし米盛宿とりて　五陵
茶柄酌(杓)削る香の幽なり　老
そへ〳〵と潮のさし來る四ッ月に　水
二万のたよりも聞かぬ夕ぐれ　陵
あとも見ず嘘つき殿は歸られて　老
雪を丸める孫ふたりまで　水
へら鷺の涙に枯るゝ柳かも　陵
そは〳〵とする山田戀かぜ　老
角袖のちり打拂ふ旅なれや　水
焙錄(碌)すてる人にものとふ　陵
月の今鷄の觜の呼つかひ　老
芋盜れし寢のやゝ寒　水
西山へ角力の太皷響かせて　陵
秡麻袋とく川の名のみに　老
花の咲雨をほて〳〵はやすらむ　水
つい出代の世とはなりけり　陵
春風の三郎太夫馬にのせ　水
松の尾寺の鐘が鳴ゆ　老
三ッふたつほかしてありし豆腐箱　陵
漂ふ船や人さばへなす　水
雪舟の噂とり〴〵ほとゝぎす　老
鯉の鱠に晝のきぬ〴〵　陵
なよ竹のくねるがうへのざんざ降　水
何いそぐやら雀ちゝめく　老
風入る白き鎧に秋の來て　陵
とし〴〵山の宮を葺月　水
とろゝ汁取巻宿の夕あらし　老
屏風に露の袴引ずる　陵

國からの猿も踊の手を覺え　水

筏を誘ふ雲のむく〳〵　老

いさかひも陶がこけて直りける　陵

水引染る門の朝東風　老

蜂の子の聲も揃ひし花盛　陵

代〻をもてなす筆津草かな　水

山越に鍛冶が谺やふぢの花　苗秀（かみつふさ）

浮世なれ盆の來るさへさはがしき　東都 兎丸

燕の囀ながし奥の院　只一

夕櫻何を巾もひとり旅　野翠

茨垣も春にとりつく小雨哉　五陵

秋のくれ衣奉加の鬼が來る　橋水

手に入し寶よ雪の茶大根　白老

鹿野山のふもとの路行人の口ずさみけるを問ふに、儒家何某の辭世さいえるに歎じて卷末に記す。

あめつちやいかゐおせはに成ました　きくの十三

添述

羽ね落て土にかえり、又來る春秋を待らんとおもへば、生れながらにして聲なきものは、聲あるよりもまして、木の根の茂くからみたる下に生じて出保せず、化して草と生ひ出るもの、本草とかいえる書にのせたる。猶〳〵野鴉の背、あるは蜘の網などにかゝりて悲鳴するをきくに、あはれふかしと觀じたる舊友白老法師、こたび一集を編て滅罪のこゝろとなし、高くらの大士にたてまつり、又は四方のすき人におくりて、露のこゝろざしをしらしむ。將無常迅速のいしぶみ、竹如意の由來は序に委しくあなれば、今いふにやくなし。余は唯老のひがことを恥て申さず。不備。

今日庵
一峨

東都台嶺麓
誹書店　星運堂
花屋久治郎刊

寂砂子集（きびすなごしふ）

上・下

太節編

僻官途の人に羈旅のわびつくしたるあらましをも、しらしむるの老婆心にこそ。

文政七年きのえさるの九月

一具菴夢南 佛

霸橋の雪のあした・法輪の雨の夕は、やごとなき人の洒落にこそあなれ。身を浮雲のさだめなきにたぐへ、樹下石上を家とするも、また高き人のこゝろなりけらし。椿丘老人、たかき人の高き遊びをしたひて、關左に笠かたぶけ、北越に杖を伴ひ、身を山雲泉石のあひだに置て、茶のみたばこふく間も心は世塵にそまじとぞ、かまへたるにやありけむ。まだらなる髮そりこぼち、蓮葉の丸天窓かゝへて大江戸に歸られしは、過し八月十五夜のころなりけり。さて葛飾なる月屋敷にて、一夜三吟の變化に窓の戸早くしらみわたり、淺草の鐘ほのかにひゞきぬ。これに旅のあはれをもそへつゝ、その卷を名づけて寂砂子といふ。砂にこゝろなし、なくてこそ俳諧の種はつきざれ。はたつひに板にゑりつけなどするは、いと〳〵いまめかしく、高き人はおもひよせなきわざなめれど、帙をひらけば花、大堰川にながれ、月、廬峰にのぼる。しばらく心の友として世態を忘るゝ工案ともなし、また同

寂砂子集　巻之上

秋風やもどる處も旅の宿

これはいにし年、東西の國〳〵さまよひめぐる事三とせ餘りにして、江戸の草庵に歸りし時の口ずさびなり。もとより一處不住にして、萍跡によする身の道祖神のまねきにひかるゝとにはあらねども、はせを翁の杖のあと頻りになつかしくて、文政六のとし文月末の一日、明の三日月まだいらぬ頃、わらづの紐引しめて立出るに、したしかりし人〳〵の送りにつどひて、咄つれつゝぞゆく。板橋の宿に至る。かぎりあればとてさらば笠引かづきぬ。今更名殘のおしまれて跡の振返らるゝは、例の心よはさなりけり。暮近く大宮の宿に着ぬ。宿の名の逢ふ身といへる詞に多みかよひたるもたのもしくて、そこに一夜を明す。此送りむさし野の古きかた處〳〵に殘て、萩芒生茂りたり。翌はとく起出る。道のほとりに露のいろ〳〵におき添て、見る目めで度眼睚輕し。

初秋や露にさはらぬ朝あらし

横川の關をこゆる、碓氷の嶺は嶮路を上る事二里、頂上は上毛の國と信濃の國の堺とかやいふめる。しばしこゝに笠うち敷て崎嶇の喘息(アヘギ)をやすむ。妙義中の嶽の山〳〵巉巌崖削り立たらんがごとく、鴉(カラス)・甘樂(カンナ)の二川帶のごとく唯足もとに繞れり。來し方の村里眼の前にかぞへつべし。草庵を出てわづかに四日、江戸ははや目の及ばぬ處となりぬ。東海一片白、列岳五點青、と、香山居士の詠けん上天の夢も思ひ合せられて、

雲寒し萩も芒も空の草

輕井澤にとまる。さだめなき秋の空降出ぬさきにと、まだ夜深きに舍りをいづ。雲歟霧か、たゞ重〳〵とたちこめたる中に、淺間の烟立そひて、滿天の紅焰頭の上へ落かゝるかとうたがはれて、心・きもゝつくるやうにぞあなる。黼の雲のまた赤き空とは、此あたり見ざらん人にはいかに語るとも信ずべうもあらず。やう〳〵明行まゝに、さばかりの嶮嶬も雲とゝもに晴渡りて、一縷の白烟長閑に立登りたるは、畫に見たらんやうにていとめでたし。

二十六日は坂木の宿兒玉氏を訪ふ。あるじのまめ心もだしがたくて、そこに草鞋をとく。

　蘭の香やぬくみのつきし秋の雨

　秋の蟬しばし行燈を廻りけり　如水

我心なぐさめかねつと聞へし更級の里に分入て、

　姥捨や昔もさながらをみなへし

廿九日の曉、道者に立交り、善光寺如來の前にぬかづく。

　秋風や朝は出て行蚊の行衞

一茶法師が菴は、古き都なつかしき柏原といふ處也。互に露の命のつゝがなきをよろこび、さすがに年のかたむくをかこち、なきみ笑ひみ萬うち忘て、そこに一碗の粥をわかつ事五日。

　なす事のへるにつけても秋の月

　ちる芒寒くなるのが目にみゆる　一茶

前途三千里、方寸をせめて、八月四日盡ぬ名殘の袂をわかつ。妙香山。黒姫山を左りに。野尻。關川へ下る。此河は信濃・越後の境にして關あり。小田切といふ。關山。二本木。荒井など驛〳〵の嶮岨を經て高田に着。人〳〵の集ひ來て、しばらく路の勞をやすむ。

仲秋無月

　油わく山はあれども雨の月

　けふの月まことを語る雨の宿　完有

　ともし火のとゞけば動く芒哉　子山

　まねきあふ尾花が間の流かな　左角

　鷺にかす柳もちるよ一葉づゝ　魚國

　蜂のはたらいてゐる晝間哉　甘雨

廿日といへるに。高田をたつ。淨土・眞宗の旧跡小丸山に上り、春日山の古城跡を望む。國分寺の方丈に一宿す。勅願のかしこき伽藍もいづれの年にや祝融の妒に失て、今は形ばかりの假御堂のみいとあはれなり。左りの松の間に碑有。蕉翁の、藥欄にいづれの花をといへる句を彫る。これは高田の醫生細川青庵のもとにての吟なりとかや。今町にやどる。ふるくは直江津とかいふめる。逢岐(アフキ)の橋は船渡しに成てそのあともなし。文月や六日も常の　と翁のこの處の御すさびなど申出して、何となくむかしなつかしき折しも、二夜枕ならべし甘雨・魚國がいまはと

て、わかれを告るにいとゞ心細し。

　あふ罪歟別るゝ科か荻をふく

廿二日、空よく晴て。春日新田より。來井片町まで。犀濱門里が間、ゆく〳〵裾に浪かけられてと、乙二が書殘したる風景も辰の刻より雨降出て、木の葉を震ふ横しぶきに、笠引かたげつゝ辛うじてしぶ〳〵柿崎に宿をとる。あるじの心熟したりけり、と親鸞上人の興じ給ひしふるともおもひやられて、

　こし簑のあるじもどりて露寒き

廿三日、雨風しづまりて礒邊傳ひゆくに、旭ほの〳〵と波に映じて。鉢崎。上和までは足もとも忘るばかり、眺がちなり。雇ひたる荷持の男の九郎判官殿の陸奥へ下り給ふ時、直江津より御船に召れしに、風あしくなりて、なでうにもすべきとあらねば、此處へあがらせ給へり。かゝるほどに御供にさぶらひし上﨟の俄に御産の氣付給ひ、産水なしとて辨慶の御房、八幡を祈念し、金剛杖たてたる所より涌出し清水あり。胞衣を納し處は。三本松村の東南の山に、胞衣孃大明神と勸請して今にあり。又辨慶御坊の瓶割坂とて有など、だみたる詞にはなしつれつゝ米山の麓をめぐり、逢見川の茶店に休ふ。

　佐渡山の日和を見せる紫苑哉

道興准后の廻國雜記に、あふみ川・笠島など打越て鯨波といへる濱を行けるに、折ふし鯨のしほをふきけるを見て、

　わきてこの浦の名にたつくじら浪
　曇るうしほを風も吹なり

としるし給ひし所は、ひとつの農宿ありて俗に鬼穴とよぶ。里人等は此歌のかみを、この浦のほらによせ來る鯨波とつたへ誤り、讀人をも宗祇法師とひが心得をぞしたる。

柏崎に寢佛・立佛と唱る石佛二体有。ともに地藏菩薩の像にて行基の作とかや。いとすさうに拜まれさせ給ふ。爰より妙法寺越といふ山路にかゝる。黒雲俄に白日を奪ひ、冷風膚を透すに驚かれて。かみのそきと云在所に泊。

　雨は風を打て秋へる山家哉

信濃川は。千曲川。筑摩川ふたつの流の末にして、越後の國の洪河なり。廿五日、此川をわたりて長岡に着。まづ年

頃文音のちなみある杉阪石海を訪ふに、かぎりなく悦び、やがて客舍を儲くるに、むさしの貞秀・趣中の千崖も來りあはせて同宿す。それよりしては日〻同社の人來とぶらひ、又は、千手。寺島。左近。攝多邑。小千谷數村の人の招くにうちまかせて行つ戻りつ、日數も既に百十餘日、かき捨し反古ども山をもなしつべし。この遊びに世をも旅をも忘果て、俳仙窟なるべしと戯興す。

粟稗に命くらべてきくの花　石海
名月の朝からふむや草の露　松畝
迷ひ子の歸らぬ宿や后の月　霞江
のちの月たばこの花の咲あはせ　春坡
蓮にあらず牡丹にあらず后の月
秋のくれ我足あとに汐のさす　千崖
簑ぬいで後松虫の聞へけり　貞秀
露ちるや雀に米を蒔時分　梅仙
荒海のくもりをはづす菊白し　石車
白菊や中〳〵低き夜の山　里秀
觀音の堂からもひく鳴子哉　雪齋
ひや〳〵とするや小萩のみだれ口　竹笑
鳴たつや雨にかくるゝ岡の家　菅詩
澄きつて月の中なるくもり哉　三交

雲臺
初しぐれいやしからざる木の鴉
溝川や底を流るゝ葱一把　積翠

雀栖 はし書有略
古さとのこゝろにもどる巨燵哉
初冬や藪潜りして鳴ぬ鳥　天涯

小千谷 二句
羅を織る音ゆかしつもる雪
夜は夜とて夢もゆるさぬ寒哉
鶴死て薪になるな枯尾花　青市
一株の茶の木花さく菴かな　樂茶
まち〳〵に小鹿の通る時雨哉　莊村
とり分て時雨の中や坊が杉　鴛虹
笠の雪宿かる迄はちらすまじ　梭魚

雪國のならひとて、家は軒端に近く芦茅を編て雪構し、

庭の木竹は薬菰に包み、牛馬は厩を出ず。市には専ら雪の具を商ふに驚き、霜月十七日船よそひして立出んとするに、人〳〵川岸まで送り来り、纜をひかへて餘波をおしむ。我も又あかぬ別に頭を低て、天涯が慕ひ来るもしらず。船は与板のわたりに着。此所の悟明といふ騒士をたづねて十日ほどとゞめらる。同士の人〳〵来りて題を望めば、雪の通題を出すにまづよみ出せり。

雪の日のけふもたゞるる日也けり　悟明

明星の山からつむや門の雪　朱潤

嬉しさに掃てもみるや門の雪　士栗

寝るさうな雀の盈す竹の雪　文帶

親もなし子もなし雪の朝朗

外山に三度雪降て、四度めといふに根雪ふるとか此里人にきゝおけるが、きのふより夜をかけてそのまゝの雪降て、廿六日は天よく晴たり。いざゝらば雪見ばやと、已が心にさそはれて此菴を立出るに、山林田畑玉に埋み、日は白雪に映じて浄瑠璃世界に入かと疑はる。足ありて地をふまず、翼なくて中天にあるがごとし。此風興に神を奪れて更に言葉なくなく(ママ)、見附の宿に入る。

廿七日よりは日ゝ雪荒とかいひて降つゞくに、心ざすかたもあれば止る事を得ず。行脚捨身の身ながらも乗物に老足をたすけられ、如法寺村民家に立よるに、炉の隅に竹筒を立て陰火をよび、燈火に用るを見て、

めづらしと見る間に寒き火影哉

と心のうちに唱へ捨て。加茂。大安寺。水原など三夜二夜宛泊りて、十二月十日、新發田牛閑亭に暫く旅の労をやしなはれ、十四日、このあるじの親族荒井町今井氏に移て、年籠の枕を高くす。

小笹生の風も忘るゝ圍炉裏かな

雪車・雪沓などめづらしさに、

橇をはいて見たれば倦にけり

雪を掘る鴉もせまる月日かな

あくれば文政七年、齢も本卦にかへる元日、

旅人に生れて出たり花の春

今井氏の前栽(栽)は自然の泉石・草木數を盡し、森ゝたる松杉雪に雪を降かさね、唯眞白なる春を迎ふ。

雪の上の霰をせめて梅のはな

九日よりは又半閑亭に歸り移りて數日滯留す。

さたなしに宿かる鶯や朧月　了々
炭の香やさはさりながら春の月
さら〳〵と水はながれて梅の花　鼓吹
夢に入るものゝはじめぞ春の草　春兮
春雨や折〳〵覗くひがし山　攀桂
鴉より鷺の多さよ春の水　花國
春風や世に星あかり水あかり　貞風

廿七日、同所半日菴に移る。

梅〳〵といふ間に船は下りけり　之徳
雨氣つく空もちこして梅花　玉聲
山を脊に田持が梅の咲にけり　亭園
松柏四尺の空にうめの花　藍洲
黃鳥やこがね乏しき奥山家　春翠
枯枝に來て鶯のとまりけり
春風に松葉も搖ず山の家　素兆
赤つゝじ山の寒さは水にある　野人

きさらぎ十六日といふに新發田を立つ。道は縱横に開ヶ草木綠を顯し、福島潟蒼ゝとして隈なく、はじめて春色を得たり。

堪忍のおもしろくなる雪解哉
わすれたる我に逢けり春の水

再び水原に戻りて睡鷺洲をあるじとす。

山風の床柱ふく子日かな　季琨
若菜つむ野にむけて焚柴火哉　靜寬
浦浪や扇おとせば霞ひく　乙良
明るやら海はさわがし花の雲　弄山
旅笠や雲の匂ひもする菫　箕雲
春雨や船で習ひし茶の給仕　左來
山櫻ちる時人に逢にけり　蒼岱
雉子啼や船からみゆる草の月　田都喜
春のよや汐の明りが木にうつる　卓二
花に月いく世かさねし大和ぶり　蓬杣
大鐘を舟から揚る彌生哉

上巳の日もこゝにありて、

雛の日や國の筑波が目にみゆる

親鸞上人手づから植させ給ふ小島村八房の梅案内がてらにとて、水原の人〴〵送り來るに、折しも花の盛なれば、

梅の花佛臭くもなかりけり

八日、大案寺大溟亭を訪ひて、しばらく爰にとゞまるに、緑樹影高く池水壘なし。春鳥おのれ〳〵が音を囀り、櫻・山吹色を爭ひ、興ある風情筆に及がたし。

花よ〳〵旅の心の木がくるゝ

人を待て櫻もちる歟夜の山　東栽

寂蓮のなつかしくなる茅花哉　文冲

流とる家の上より春の風　松韻

蝶の來てさながらいやし鳩の豆　月亭

松の木に蟹の登るや春の風　歸鳶

十八日、加茂に移る折栖(ママ)聞へたる句を書つく。

をし鳥をさびしがらすや杜若　義珍

棧(ママ)櫚さくや香炉の灰を置かへる　雪堂

廿二日より見附杉亭に遊ぶ。ある夜狐の婚姻と云ものを見て、

嫁ときけば狐もおかし春の宵

町うらや蛇のとりつく梅花　杉亭

鶯に松も柏も藪木かな　五嶺

芹の香や日影のうへの朝嵐　御愚

洛外や蝶に別れて小雨降　石柴

琴つけた馬の通るや宵の春　疊山

晝過の雪に春あり魚の棚　宇弘

行鴈や雨吹たてる麥畑　北洋

四月六日、長岡に歸る。翌日石海・霞江・春坡等にともなはれて、悠久山より西片貝の山寺に遊ぶ。各〳〵句あれども聞もらしつ。

卯の花に驚く旅の布子哉

十六日、雀栖より船にて下る。北に彌彦山眺望して十七日午時新潟に着。月敏が客屋に移る。此地を逍遙して日和山といへるに登るに、廻船の帆柱は秋の野の芒にひとしく、漁舟は鳥の群るがごく、吟眸觸る所すべて句に入べし。

夏の夜や砂山こゆる舟の下駄

にくさげに烟草ふく子よ麥の秋　閑澤

山百合のおのれひとりの匂ひ哉　月斂

新浮にありて龜田の音信をきく。

雷の鳴る雲かるし合歡の花　芝蘭

五月二日、又新發田に出て五十公野(イチミノ)町花國が方に宿す。十一日、出羽國をさして立出るに。加治。中條。黒川。大島。關などの宿〳〵を過て。ふたい峠。鷹の巣峠。大里峠、此頂(イタヾキ)に大里權現跡を垂給ふ。越後・出羽の境とぞいふ。それより萱野峠。朴の木峠。槌峠。昇降數里人家稀也。わづかに一里二里を隔てはあやしき小家あり。其名をたすけといふは、人を助るといふ心なるべし。國の守より建置るとか聞へし。市の野より。櫻峠をのぼりて。白子澤へ下る處、

岨道やあやうき聲の時鳥

五十公野を立て手の子へ出るまでの道は、峯にのぼり溪に下り、山行三日世外に遊ぶ。連山をぬけ出るひとつの高峯あり。山頂には猶雪を殘せり。

淸水くむたびに明るし飯豐(テ)山

十四日、手の子宿横山五左衛門が方に宿るに、はからずも江戸にてあひし人にて、ひとりふたり居合たるも、心ゆるびうち語るに、隣家のあるじは初老なりとて、

さてことし疲(瘦)しとおもふ給哉　咫雲

凉しさや藻屑にさはる下駄の音　杜(あるじ)園

小松宿不材亭。

門出れば秋の隣の柳かな　もとか

草刈れば袖にうつるや蝙の聲　其明

常に見る鳥やらしらぬ行ゝ子　不材

十八日、大塚村古翠を訪ふに、夢南法師もこゝに在て過こしかたの物語に、去年の僻をとしにくやみ、昨日の謬をけふ驚き、六十一年の塵つもる頭の霜を拂ひ捨て、

入梅晴や又行さきの秋の雲　夢南

喜椿丘老人之薙染

有水有月一嗽盥
迷悟元來任汝身
百億煩惱百億髮
一發截斷全無塵

椿丘老の剃髪に草菴の北窓を開きて

乘好がむしろしかばや夏の月　古翠

猫頭菴主落髮の朝

松すゞし心にうかぶ岡の堂　松徑

風かほる水茶處や薄月夜　仝

老を啼鶯さすがうぐひすぞ　古翠

しづかさのふたつに成ぬ閑古鳥　宇喬

よし切や氷降たるあとの空　涼沙

手枕に遠山低しかきつばた　李闕

蚊をしらぬ宿やひや〳〵水の來る　知兮

小海老くむ庭の撫子咲にけり　可久里

百合の外哀をもたぬ荒野哉　不鮮

俳諧終りて蕉市亭を立。小出。成田。新戸の境に遊ぶ。

水無月なかば。小出を立て。赤湯に宿す。此所に靈泉有、丹波湯。あまゆ。大湯。森の湯といふ。又上の湯といへるは常に鎖して國の守の料とぞ。夫より。二位宿に二夜泊。

牡丹切人や心のうつくしき　文河

十八日、二位宿峠を越て湯の原に至る。爰は陸奥と出羽との境なり。峠田。滑津。關。渡瀨。下戸澤。上戸澤。小坂。桑折。保原掛田。月舘。手渡。小島を經て、廿日川又大内氏にやどりて數日留杖、興致わすれがたし。

客僧のたてば水鷄に七日月　半路

坂口や水をはなるゝ蟬の聲　仰木女

水涌て蟻もすませず夏木立　壺山

葛松原にて

くさむらや卒都婆にすがる蟬の聲

二本松・郡山などひと夜ふた夜と宿りて、文月十三日に須賀川市原氏に着。たよ女はかねてしたしみ淺からねば、萬まめやかにさたし、別業晴霞にうつるに、とりあへずこよひは、

人の火の影さす露を魂むかひ

いつの頃よりのならはしにや、此驛の若きもの等が十五日の夜は左右に分れて、石火矢といふ蜂(烽)火を放ちて鬪ふときゝて、樓上にのぼり見物するに、闇中火燃(焰)を飛し來り、袖をくゞりて席におつ。あはれ面を焦しつらんには命をも失ふべし。愚心のかくて後危きに近寄まじとぞ

おもひける。

草よ木よ身に降露としらざりし

探題

三日月や客の出て行松の中　多代女

銘曰朝皃日ゝにあらたなり　雨考

ある院へ舞子連入りぬ秋の夕

晴霞を立て鍋かけの驛過る時、

蠅よけの草それながら秋の風

殺生石

苔の香のおどろ〳〵や露の玉

廿八日、氏家宿石川氏に宿す。

草深しけふの日和を飛螽　百僊

秋風の疊ざはりや長袴　嘯山

八月朔日、氏家を立て。大町新田星谷、小山陶里、下舘五陽齋。關宿魚淵の人〳〵に二夜三夜づゝとゞめられて、夜に入て江戸に着しは、十二日の頃とぞ覺へ侍るかし。

太笻

人よけてたてば月さす袂哉

水掃ちらす町中の秋　夢南

新藁の匂ひに雞もくつろぎて　孤山

榎木の間の木綿干あがる　笻

飴うりのかゝさずに來る小六月　南

(三)筑地ぬりたす霜静なり　山

乘替の馬の尾併懸かはり　笻

三室の杉に塩だちをする　南

子の出來ておかしな物になりにけり　山

うはの空なる船泊りして　笻

ひと頻りひつそりとする賽の音　南

力味のとれし豆の買おき　山

めた〳〵と黄色に成し銀杏の木　笻

和睦の沙汰に腹のへる月　南

鎌入も安土の分は跡まはり　山

雀のとまる酒の肴板　笻

御降を花よ〳〵とそやすらん　南

大椀の座のかはる相談　山

去年から礪山の公事の持こして　笻

妻帶寺へ家鴨あづける　南
あらためのすんで厠へ繩をはる　山
　すはつた膝の見える帷子　節
壹分入る伯母の手紙の節句過　南
　蒟蒻うまき眞間の古町　山
射て取た枯野の雉子を手に提て　節
　さらりと幕をおろす振袖　南
うつゝなく髭をぬかせる御國もの　山
　月夜さびしく無筆なりけり　節
請狀も庄屋まかせの秋の風　南
　盛ならべたる數のそば切　山
門前へ雨の乘物舁おろし　節
　熊野へぬける案内乞はるゝ　南
算用の珠にはづれた花ざかり　山
　瘧の落てへらす蚕筵　節
紅毛のとしは遲く渡りけり　南
　どれもほうけた土筆蒲公英　山

稻かりのもどる處や山の上　太節
　草履ながらに旅をする月　李尺
わたり鳥盃かくすひまもなし　節
　柳の陰の馬眠げなる　尺
つほ〳〵と霞をかぶる一軒家　節
　二百の錢の重き春の日　尺
門跡のあと追ふ役にあたりけり　節
　ざぶ〳〵鯉を活す大瓶　尺
相やけに藏の勝手の自慢して　節
　堅く隣とかしかりもせぬ　尺
へつたりと雪の降たるおもしろさ　節
　禿ふたりが春をかぞゆる　尺
物縫の月の出るとてもどる也　節
　はやうおぼゆる寺の秋風　尺
初鴈の横になぐれる懸り船　節
　巳の日〳〵に通る菓子賣　尺
山科の梅より花に咲つゞき　節
　淺香の田螺鳴そめる池　尺

本膳のひけてくつろぐ春の雨　桂丸
御秡のせて出す三寶　節
かいわいの狐追るゝ扣鉦　丸
つれた女をかくす明家　節
憎まれてかしこくまはる小商内　丸
白髪になれと笋もくふ　節
大佛を左へぬける河内道　丸
人の拾ふた金の立札　節
乳もろふ子は懐に暮かゝり　丸
秋の螢の草に落つく　節
扱ひのすんで御城の月の宴　丸
今摺米のいれる川口　節
四五日は瓜も茄子も切盡し　丸
來年まではおけぬ雨もり　節
店向へやつた息子も登り前　丸
師檀の中の今に直らぬ　節
石垣のなかばは花に埋れて　丸
夕邊をつける雉子の一聲　節

さびすなご集　巻之下

春

正月はみなが足袋はく月夜哉　道彦
正月の行燈くらき礒家かな　啓山
うすあかりさすや睦月の炭俵　下總 夜照
元日の朝からさくや草の花　屋烏

諸侯の行粧を拝みにまかりて

しかられて和田倉を出る二日哉　孤山
雨をみる日さへ出來たい庵の春　塊翁
東風ふくや馬もどしやる鶴見橋　常陸 春雨
蓬萊を膳にかざりし住居哉　双湖
人の日やをしまれそめる山の月　總丸女
鳩の聲七種すぎとなりにけり　有隣
松すきて町のひろがる月よ哉　掬明
万歳の袖に風なし丸の内　仝 里芳

万歳や傘買ふてうちかたげ　雪雄
かさかりて万歳ひたとぬれにけり　（全）安隣
火に倦て覗きに出たり山椒の芽　（近江）凡鳥
御燈見へて梅の下道奥ふかし　椿堂
梅ひと木雪にかくれぬ匂ひ哉　あさ女
垣ごしのうめや鏡の天下一　きよ女
木町をさげて通るや梅の花　山峰
舟からは柳ごしなりうめの花　瓜生
大空のすむにまかせて梅花　雉啄
さきよさに梅もはやいか片在所　雄淵
紅梅や百戸ばかりの夕ながめ　夙也
天の川はやくもぬらす柳哉　心非
晝過になれば落付柳かな　杉長
手にとりてみる正月の柳哉　宇洋
あたらしき宿札寒き柳哉　雨考
青柳の雨みて立り茶の給仕　御風
上總から月さす門の柳哉　（常陸）名花
近江路や柳さしたき山ばかり　葵亭

鵜かきの來るもめづらし落椿　園村
大嶺の乘て流るゝつばき哉　鹿太

葛飾の旧居のなつかしきに

住し藪の鶯かいま聲するは　成美
うぐひすにうきは見へねど來ぬ日あり　碩布
鶯のこゝろかりたしひとゝ旅　百堂
うぐひすの小舟見てゐる入江哉　（常陸）素英
鶯やよくあきらめた籠の聲　一茶
やぶ入やよく覺ゐる墓の道　碩斎
鷹匠の晝間宿とる余寒哉　梅令
舟きらふ馬もてあます霞哉　（尾張）桃鳥
奉納の松うへわたすかすみ哉　碓嶺
脩ひとり霞にきへて仕舞けり　李峰
裸子の御油へ來てゐるかすみ哉　士山
三里來て馬の顔見る霞哉　淋山
本尊まで霞せたりな瑞巖寺　十竹
山ありて霞のさめる小橋かな　（田日）蓮久
手ばなして霞にもどす浮木哉　白圭

西院むらを出て霞ぬ小長持　草也
法輪に長刀みゆるかすみ哉　夢南
春風やほめられに出る都鳥　常陸野蕉
あんかんと日の照畑や殘る雪　寥松
沫雪やのり合舟をしひらるゝ　鶯笠
辛崎の松につもるや春の雪　一蕙
雪解やあれたきまゝの小笹原　武蔵魚連
雪とけやきのふの山になくからす　臥鴫

大空に鳥の際なき二月哉　士朗
ひとしきり春を見ふるす二月哉　雪丸
きさらぎや老にはなどか成そめし　不轉
とり谷て柳みてゐる彼岸哉　仝湖山
朧夜を岸に見せけりすはのうみ　重行
井戸ばたにみゆる山あり春の月　蕉雨
勝手からよき人いりぬ春の月　杜英
鶏も木に寢る春の月よ哉　常陸器友
賑やかな娘もらふて春の月　武陵

はるのよの、近頃になし月の出來　萬外
はるのよを行かたにふむ扇哉　嵐外
鍋かけて小橋わたるや春の宵　仝乙人
行先は雉子一聲の野中哉　秋耳
仁和寺へ糊賣入るや鳴雲雀　月底
戸田川に蝶のゆきゝや人ふへる　仝山渚
明星に闇のかたよる蛙かな　下総東騏
泥にうく物には輕き田にし哉　信濃蕣鄰
船路せぬ覺悟で寐たり山やく夜　茂推

遲日や白う咲たるかきつばた　夢南
物いへとゆすぶつてみる櫻哉　南湖
鳩の目をほち／＼たゝく櫻哉　史千
遲ざくら咲やたう／＼と瀧の水　尾張呉山
隣からきのどくがるや遲ざくら　陸奥卓堂
曙をおし出す花のほてりかな　玉屑
夜の家花に遠くはなかりけり　久臧
花に來てぬるゝを直に發句哉　梅令

後世ねがふ人の寒しや花盛　五老

夕暮の花に旅の心を思ひ出て

ゆきくれてひとり木の間の花見哉　文晁

こらへかねて出る駄賃より花の月　秋擧

責馬のすくみとれけり花雪吹　常陸 青蓼

花の下立されば旅の夕卩哉　出羽 可貞

山吹や荒鵜に暮を見せに出る　乙二

桃ばかり花の名を持さかりかな　武藏 石鷄

朝酒に相手はいらず桃の花　下總 古彥

屑杖やはらり〳〵と旅の雨　草玿

うるはしくなりぬ柳に春の雨　公路

水影も明る栗畝はるのあめ　加賀 草均

鳥なくや春雨あがる茶木畑　多代女

春もはや至り過たり夜の雨　常陸 五介

野の末や雨にはなるゝ春の水　信濃 米丸

山住の僧にあひけり暮の春　桂丸

囀や田面に白き三月盡　常陸 只界

うか〳〵と木母寺過ぬ三月盡　李尺

人なみに水ふむ浦の春邊哉　世竹

旅して見たきところはやまずながらも

木瓜薊年〳〵山の高うなる　太節

夏

窓ひとつ持て楓の四月かな　葵亭

雨はげば蝶の邪魔がる四月哉　禾木

麥刈やはこべがくれに鳴蛙　雨塘

麥かれる日和の中や桐生市　上毛 乙人

鶯に明て小寒き牡丹哉　近江 蕉布

腥き海士がうの花さきにけり　下總 魚淵

時鳥寶の雨をふらせけり　平角

何事もあとの祭りや時鳥　江戸 倚山

ほとゝぎす月を目あてに待ばかり　卓池

晝中に露ちる木あり閑古鳥　陸奧 芳齋

浮前の船にかけたる粽かな　袁丁
祭にもあはで垣根の二葉草　篤老
竹うへてみてものかぬや歩行神　宇橋
二三本切そこなひぬ花あやめ　阿波　盧一
萍にうつるや彌宜の供廻り　秋擧
橘の香に盃とりぬ親の櫃　与人
若竹の宿に奈良みてもどりけり　陸奥　葛父
蚊の聲を破りて出たり松の月　雨柳子
行燈の火より蚊遣りにうつしけり　楳老
ともし火に來て眞黒な螢哉　閑齋
螢こい／＼と振ても簑の袖　鶴老
朝雲のきへて遠のく浮巣かな　北映

西近江

植田まで浮巣もこして鳰湖の雨　恒丸
戸をさして見てもみゆるや鵜の篝　馬年
うしろむく鮓のはや付鹿子哉　鷗里
五月雨の月とてさたもなかりけり　佐渡　後川
五月雨をわすれんとつぐか后の炭　武曰

角力とりに夕月のさす入梅かな　平雄
山風のふけて冷つく蚊帳哉　護物
蝸を出て遊ぶ處も八重むぐら　奇淵
かやうりの聲から明る日和哉　赤守
鳴たがるむしもあるべし夏の月　百非
下部等に鞠場かしけり夏の月　野揚
爼板に浪のかゝるや夏の月　茶彦
湯あがりや松を遙に夏の月　桂丸
星ひとつはや水無月の芒ふく　夢南
六月や寐てしらぬ間を我骸　可布
六月の江をわたしけり鵙の聲　宇橋

題范蠡

雲の峯かくれ處は見ておきし　成美
關宿や柳の奥の雲のみね　李尺
いふ事のとゞくやう也くもの峰　出羽　渭貞
蔓草の末すゞしとや機の音　桐栖
すゞしさや火を焚海士の亂髮　星谷

凉しさや僧と語れば口のくるゝ　呑山
松杉の影かさなりて月凉し　上風
島から酒屋呼はる納凉かな　琢旦
蓬生に近し夕ㇷ゚の大團扇　李長
河骨に浅草のかねしづかなり　相模 松羅
鐘ついた手でつみ行や葛の花　車兩
貴顔や尾上の杉はかれにける　茶靜
夕皃にさしつけて出る雨後の月　佐渡 良談
ゆふ皃や煙の中のふじの山　玉光
江の島や傘さしかけし夏肴　巣兆

秋

文月やいつにくらべん夜の空　葛三
ふみ月や七色揃ふ香のもの　安房 海翁
ふみ月の幹むけゝり竹の空　阿波 草史
はつ秋や撫廻したる櫻の木　尼 冬色
夜ごと見ぬものゝやうなり天の河　南非
山淋し水さびし里は盆の月　靈寺
これ見よと手の裏かへす一葉哉　一瓢
方丈へ持出しけり桐一葉　子容
朝皃の月をこめたる匂ひかな　四軒
寺を出て別れ〳〵や草の花　常陸 山之
折れやすき盛持けり女郎花　茅丸
目につくを花のさかりや女郎花　信濃 見國
五六日萩の暑となりにけり　護物
塗盆にのせてすゞなや萩花　昭眉
稲の香の風つゞきなり萩花　啓山

壽祝

山里は月日も長し花すゝき　楞堂
きゝ〳〵す夜はすゞしさのつもりけり　恒丸
髭立て鏡に寒しきり〳〵す　空口
門島に匂ひ出たりはつ尾花　省吾
尸の雫露と呼ぶまで秋更ぬ　文常
花ありと見へて夜明ぬ草の露　祇杖
夜はものゝ上手めく也草のつゆ　沙鷗

露催ひして遠のくや夜の外山　藍外

稲妻に寐所さまさん八重葎　卓池

いなづまや飛氣の付し池の蓮　詠歸

挑燈に添ふて通るや秋の風　長崎 其映

秋風の吹もつのらず暮にけり　佐渡 箕山

怺風に倫ふかれ行麓かな　相摸 鳥沙

下總やどの關こへて秋の風　李峰

松窓兀座

明月はすゞしき苔の匂ひ哉　乙二

名月や膳持歩行山の町　信濃 文路

めい月や分別ぬけし草の家　相摸 鳥流

橘の匂ふに似たりけふの月　菊也

かたむくを月のさかりや高臺寺　夢南

松の月寒さ殘して人の去る　佐渡 眉米

すむ月の藪をはなれぬ雫哉　仝 淇翠

出る月の曉ちかき野風哉　西月

山里は一軒づゝの月よ哉　一宵

三日月や秋のおよぼす波頭　佐渡 菊古

ついそこの山に奥あり秋の月　常陸 笠山

秋もはや彼岸になりぬ壁の蔦　上毛 雛周

大空の氣ざしあらはす紫苑哉　攝津 寥々

鷄頭や火をかりたれば犬吼る　帷平

ころもうつ音に散けり山の雲　谷雄

砧よくうてど衙にまけにけり　世南

何鳥のまたるゝ艮ぞ露寒み　下總 孔桀

啼鶉朝さく花は何〳〵ぞ　魯隱

ひや酒にからりと鳴ぬ天津鴈　十丈

鴈無事や我は春見し古頭巾　佐渡 可圭

花のある夜よりあかるし鴈の空　安房 素共

遙にもおもひし鴈を声の雨　常陸 嵐兆

鹿なくや森のひとつ火立ふさぎ　雪雄

秋葉山の華和田の屋といふ處にやどりて

鳴鹿の聲より深き栖かな　士朗

長月の秋や小松もあれにつく　道彦
長月や雨の中なる西明り　台ゝ
菊の花山はかならず筑波山　李尺
白菊の白くてけふも暮にけり　常陸 千宵
菊ありて風吹のこる朝戸かな　佐渡 和逸
貧しさは親にあやかれ菊作　仝 楚弓
叱られた門とおもへどきくがさく　仝 己明
暮たれば菊一色となりにけり　常陸 兎柳
うらがれや風に吹るゝ臼の鳥　蕉雨
後の月茶人の後架みゆる也　多代女
行人もなしやあからむ山の柹　久臧
いつからかたまる道ある木の實哉　布席

六十万人決定往生

一杖をひとりにあてゝ唐辛子　夢南
茸狩や果は淋しき水の音　常陸 化迪
秋霜や岡になりたる杜若　可丸
日に一度秋のゆふ暮たのもしき　若助
雲のみねつくり捨たり秋の空　井眉
山門に公郷(卿)立れつ秋の雲　太笻
日の暮るかたへ續くや秋の山　五緇
早稲粥や年〳〵おもふ秋之坊　北溟

病中

梨柹や膳に野山のある斗　壺山
ひともとの松さへ見へず浦の秋　青良

冬

十月の奥あるものは小笹哉　中齋
宿をかす家のならびて神無月　琢旦
村中の夜着かり盡す十夜哉　一蕙

月屋鋪

時雨るゝや六疊一間廣過る　孤山
しぐるゝを見つめてゐるや海士が妻　陶里
沖みゆる障子の穴も時雨けり　雪雄

嵳峩にて

ゆかしさや落葉かぶりし佛達　尼 素月

舟を見て素もどりするや落葉みち　布雪
焚ほどは客も掻來るおちば哉　鷺雪
雲歸り盡て裾野の冬木立　蒼虬
冬枯や一段高き寺の庫　多代女
心よりいそぐ月日や枯柳　意橋
山茶花の寒くぞみゆる黒羽折　漫々
角力とりの襠提行枯野かな　起星
星ひとつ出て暮遲きかれの哉　常陸 聽雨
鶯の頬白とならぶかれの哉　若人
水仙や寺に不沙汰な小百性　長崎 雀堂
目ざむれば火桶の底に鳴千鳥　茶靜
雲なき夜高山こゆる千鳥かな　無物
鳴千鳥しばらく早き客行燈　幽嘯
鳴かして空のひろがる衞かな　きく女

短さ日は輾うつもの丶手もさにもみゆる繁榮の都に丶かくれ家なしむるは丶あながち人な深山木になす德もなく丶市中に閑なしる高きこゝろにもあらず、唯住なれたればこゝ住よしとおもふのみ。

若い時聞ぬ千鳥ぞ町の中　太節
水鳥や畑はづれに庫ひとつ　千路
葛飾や遠山ふたつかもの聲　此航
藪陰や引導すんで鴨の聲　蘭叟
戸口より筑波にむくや鷦鷯　常陸 苔山
寢つかれぬ舟に聞よの神樂哉　蒼峨
霜月や暮ても見ゆる塔の影　孤山
雞の聲にうれしき霜夜哉　秋兎
初雪の寒さや關の棒ちぎり　壺牛
大雪に鼠狩する木部屋哉　仝 よし各
雪空やむかふ下りに鵜のもどる　兎鄉
馬の尾をむすべばとけて小雪ちる　呉老
大雪や隣の窓に鶏みゆる　柿广
近よればおもしろげやむ雪の人　近江 虛白
氷る夜の窓から捨る茶屑哉　小嶺

芦田鶴のやがて背ふる霙かな　東瑶
牛かくす大樹の陰も漏る霰　太橘
師走めくふみや米二斗酒五升　道彥
ひよどりの鳴ちゞめたる師走哉　備中 又介
有明や寒さ喰入草鞋の緒　千影

旅

一人と帳面につく寒かな　一茶
堪忍のならぬ寒さや梅もどき　尼 應々
切株に月の落たる寒かな　加賀 年緒
花に寢し我影恥ぬ冬の月　來車
凌むほどの日もくれたれば冬の月　推己
碁の音にいよ〳〵遠しふゆの月　仙草
寒月や庖丁ひろふ納屋の門　鶯笠
けふもみて通るや人の冬がまへ　曰人
衾なでゝ更行をしる月夜哉　呂作
煤掃や帆柱見ゆる臺處　而后
蠣殼の巖となりぬ年のくれ　玄蛙

除夜の星大和河内は綿所　二川
年のうちの春が見たくば不盡の山　守光

雜

鳥はきへ〳〵けりふじの山　孤山

みはしら

百堂編

(みはしら)

百とせの老嫗が大欲は、かへつてをさなき童の無欲に似たりといふめる、かしこきためしに倣はんとにはあらざらめど、ことし浪華の蘆隱舍は、いかなるねがひの欲にや有けん、みすゞ苅しなぬの國に杖をはしらせ、諏方のおほむ神にもうで奉りて、實、みはしらのひかりたふたきおほむ有さまを、猶もつまびらかに綴りものして、終に一集のおもむきとぞ成せりける。こはひとへに此集あめるぬしが、年ごろ日ごろの大欲にして、風雅のための無欲なりけり。

文政甲申夏四月　　禾木識

信陽一の宮、寅申年御はしら祭禮のおこりは、元來明神へ祈誓をかけたてまつり、其式嚴なる神事也。傳に弓箭美男ヲ埒女埒など、言る故實もありけるさ歟や。此所謂老翁の夜話仄に聞つたへ侍る。

ゆほふひの的や扇子の音高し　柳平

諏訪宮

さばへなす神無りけり杜跡　百堂
月を脊負へば鳴杜宇　周行
売樽に共人の名や殘るらん　十鵞
ちさき言葉に何枝折せむ　若人
松杉の束は壁のかたぶきて　吾三
鯉のうろこの焦る朝芽(芋)生　堂
二度に聞越かたのさたいかなれば　行
飛鳥のさとのこがらしが吹　鵞
折〳〵はすげなき事の俤かけ　人
情しらずが塩こぼしつゝ　三
篝焚煙もさては十五日　堂
月に甲斐ある須磨の中汲　行
かさゝぎの巣に居る鳩の秋更て　鵞
世にへつらはぬ坊主成けり　行
我儘に過たるとしの色黒く　三
華表の筋に見ゆる足形　堂
不足する花も彌生は香ばしく　人

屏風をつとふ音風の音　行

善光寺

蓮の香にはさまれて夜を明しけり　百堂
鳴けほとゝぎす天下泰平　文路
ともかくも瓢のうちの世界にて　一茶
はや文政も七つにぞ成る　堂
月の照る其道筋をいもの這ふ　路
ざぶりと露をあびし小男　茶
寐て延す足の先より蛛の来し　堂
入相つきに登る石壇　路
きのふまで有しみやこの川澄て　茶
松にさらりとさはる前髪　堂
兆(ウラツタ)に星かぞふれば雲かゝる　路
腹一ぱいに涼むうら窓　茶
西東帆の上下を指南して　堂
人のりちぎな安藝の宮嶋　路
妹は大竹原をゆづらばや　茶
からくれないに霞む三日月　堂
むだ山も上ゝ吉の花咲て　路
胡てふだらけに成し庵哉　茶

戸隱山

深山路は花の莟を四月かな　如水
黄鳥老をものさびて鳴　百堂
吉口を繭商人の連だちて　水
新酒さもあれ船のふるまひ　堂
殘る月只ひや〱と冴わたり　水
霧こまやかに草むらを吹　堂
徳本が世話をやかれし杖の跡　仝
鳩飼ふやす祖父が隱家　水
ぬれ衣を廿才の人に着せ申　堂
起臥つらき霜のともし火　水
山茶花に寒き三國の月がさし　堂

こゝらも流行實蔭の筆　水
白檀の匂ふ柱はどのはしら　堂
いづくもおなじ鷄の聲　水
文選の太良が馬はちんばにて　堂
七艸つみのおきぬけに行　水
山遠く笑ふははなの片心　堂
灸〳〵に春更にけり　水
徒士町の黄昏いそぐ女子達　仝
兀て尊ふとき蟬丸の宮　堂
みそさゞゐ來ては隱ゝ笹の中　水
納豆たゝく隙さへもなし　堂
黑髮をおしみてつゝむ疊紙　水
三とせ見にくき箕作りが戀　堂
椽はなの松より霧の消かゝり　水
蟹のはさみは何の誓文　堂
寐ながらも遠き香取の社にて　水
大手廣げてはしる傘持　堂
色〳〵の豆腐ちめたき月の前　水
虫きゝ直す庫裏の行燈　堂
現在の陰の瘧に蔭の鉞　仝
茶に合ふ水と玉川を汲　水
いそがしや又本鄕の鐘の聲　堂
北さしてゆく鴈のひと面　水
はなの彌生花の曇の晴渡り　仝
幣たてまつる峰の陽炎　筆

眼の前の大竹こして暑哉　仙市
暑き日に見ゆるは百合の重みかな　魚阿
ひとつ葉に夏のとゞくや鮓の味　照樹
白雨や小庭の松も匂ひもつ　雨山
たち花に反古をしらべて哭にけり　雨曉
ひとしぐれ雲にもよらず冬の月　正六
我ばかり虚手にかへる螢狩　武曰
むだ草の生ひかぶさるや入梅の庵　叢
神風の早そつよそよ植田面　白齋

むしの巢をむすび合せよ夏木立　硯齋
日和よき音のするなり落葉山　伍什

柏原中村氏のもとにて春秋八十才

辭世

雪凪や雲井にひとつ月の在　古人　若翁
若竹やとしより竹も友いさみ　一茶
じつとして袖に這するほたる哉　文路
鶯のきては吹るゝ枯かづら　きく女
行としや買すましたる薪一荷　芭軒
掃すてん塵だにもたゞ歳の暮　竹亭
はつしぐれ隼人の汐におされけり　目丸
朔日のあさ露やさし初茄子　乙五
おし鳥の寐處ひろし我門田　里鳳
諏方を出て杖を忘れな時鳥　青以
鯉はねてそれから夏の遊ばるゝ　裏梅
白雨や骸は垢のぬける音　嵐外
初螢墨よしの蘆ぬいて來る　若人
灌佛や空にあまさぬ指の跡　古人　子文
若竹を褄に拵へて首途哉　仝　万俗
寒梅の春まちかねる匂ひかな　かつみ女
落葉して日の脚早き垣根哉　至丈
夜たゞ降雨の名殘をはつ時雨　花陶
雨になるやはやく悟りし行ゝ子　車雨
木〳〵にさす日をかき分て氷室哉　久臧

愛日詠

見にくるは植女をいとふ心かな　米丸
所は月に淸水くむ里　百堂
鵆おのが鳴音ににげかへり　丸
おなじ摸樣に三日立秋　堂
濱の子がけふの使に參るとて　丸
手もぬらさずに拾（マヽ）ふ蝶貝　堂

かさねてあとをつゞる

眞蔦蘭高美氏家父（追）逐善、正式誹諧
於安樂亭五月廿五日興行百韵

有がたし汗で垢離とる暑かな　常慶居士

三とせの記念常夏の月　照樹

下略

捻香

貌しらぬ佛尊し南無皐月　百堂

朱樹の翁が自筆の碑を、木曾藪原なる極樂精舎不宍室にうつして、遠芳忌の法筵をいとなむ。其詠

よろづ世や山の上よりけふの月　士朗居士

露そのまゝに色かへぬ松　旭哉居士

自他平等一順下略

満尼

在し世の其月涼し酒と琵琶　百堂

涼しさを行けば闇でも無りけり　松舍

音に聞ゆる岐嶋福嶌の群馬萬疋、馬どに四蹄輕して、駿骨の名を留といふ良馬市

御毛附や馬ですしする半夏生　百堂

鷹の巣おろす峰の凉風　石羊

轆轤ひき古哥のこゝろに家建て　冽(洲)香

膝の上まで汐のさしくる　春明

月の隈秋海棠の匂ひなき　千尋女

余所のきぬたの拍子もち込　堂

むし賣の白髪をかくす去年ことし　羊

しとぎを解いて夢を占ふ　香

山かづら小闇き三輪にふる小雨　明

船に千鳥の聲せまるなり　尋

蠟(臘)八の粥をうまがる尼僧達　堂

笛ふき習ふ油つれなき　羊

桐の窻榮耀らしくも月とりて　香

さすがすゝきの伸る一むら　明

藤ごろも腰から下はひや〳〵と　尋

たばこも呑ず金堀に行　堂

棚雲のたへ間の花は鼻の先　羊

田ごとのなりに賦る沓日　香

朝な〳〵心ひろげる牡丹かな　八朗

山中無暦日といふ題を探りて

月も日もしらずに居れば牡丹咲　天姥

土ふみに鶯の下けり夏木立　烁擧

殘月や雨戸もひかぬひとり蚊帳　塞馬

ひとかへし吹くらむ雪の山路哉　游鳧

ゆられながら舟べりたゝく扇子哉　蘭所

山はみな青葉となりぬ替障子　霞石

山蜂の人聲につく茂りかな　眞文

十步ほど水鷄に近し芦の雨　露丸

松かぜの空に來てある四月かな　易足

掃除して棟のちるを待日哉　物我

花うりの雨の朝出やかきつばた　雨好女

此うへのけしきも有歟雪の松　文思

廿日ほど牡丹にひらく御門かな　菅鳥

蔓くさの末すゞしとて機の音　桐栖

鷄のよこみてたてり靑簾　武陵

何ぞよる浦のさわぎや若葉吹　貞風

ふゆ籠されど鼠のつきもせず　了ゞ

竹植て小雨を寐もの語哉　ふと根

靑嗅吹や小鍛の夏隣　菊老

暮ゝまで草に癖なし雲の峰　奇峰

卯の花や何ごゝろなく川瀬踏　韜光

よし切にたゝぬ枕を見られけり　因山

ぬしなしといへど牡丹の折にくき　石羊

郭公なくや東は夜の明る　春明

素檗老人に別をおしみて、塩尻峠へかゝる

靑麥の波やうしほの風つゞき　千尋女

後の夜も根づよき雨の螢かな　百山

十月のおくあるものは小篠哉　巾齋

ふゆの月不性な事がおもしろや　都布年

ふうはりと草の花咲四月かな　雙峨

夏の夜も永ふなりけり花菖蒲　梅隝

夫婦して氷たゝくや小田の鷺　不石

夏ぎくや置より乾く露のふり　廬汀

朝雲の散やてらつく若楓　祇枝
とりあへぬ景色や雪の八重葎　きくえ女
冬籠鐺の水も替させん　若助
うき旅や寐ても古郷の夏の月　照月
よき智恵の出さうな日也冬の雨　得芝

岩村霧城夜景

鳴水鶏戸ざゝぬ御代の戸を叩　百堂
出て見れば月は曇らず蚊遣焚　松傲
梢には常のおとあり散松葉　古鏡
冬の日の南天のぼる戸口かな　宜雄

立ふこの五尺にたらぬ草の菴

旅寐する人ならかさん雪の宿　其齢
みそさゞる妻子もたぬか身の軽き　緩貢
名のうれて隠れにくさよ青簾　日人
蟬にかす木は雨晴て日の残る　羅文
戻ふぞ清水の酔のさめぬうち　百非
眼の見ゆる瞽女憐也いちご取　宇喬
我こゝろわれに遊ばず蓮の花　抱儀

神の名もあらたになりぬ夏木立　魯石
只涼し水も昇らず月も来ず　何丸

きへかねて二聲見せつ不如帰　北尼
亦もかぶらん卯花の雲　鞱光
曳みだす麻を野川の姿にて　尼
わすれ火細くうつる窓の戸　光
我駒の立たうしろに月のさし　尼
釣瓶の綱をかゆるはつ霜　光
院蓼の花さく瓦いく代經り　尼
雲こすばかり袈裟かけの松　光
きのふまで弓手に波のおしかゝり　尼
明地に牛も寐せぬ片時　光
身の上にかえる谺と知らずして　尼
木の折口につゞく陽炎　光
花筐やよと櫻につゝみかくし　尼
所謂はとけし永き日の旅　光

放ちやる龜の價をいゝつのり　尼
何やらゆかし籠りくの人　光
桐ひと葉月に思ひのもられたし　尼
ねもなき夢をさます蟀　光

夢の蓮香にあかぬ花なればこそ　百堂
たゝく水鷄の夜を替る月　蕷光
菅簑のことしは早く綻びて　堂
杼のもちつくやど取にけり　光
薄から葎へうつる冬なれや　堂
穴ふさいでもみゆる日の脚　光
中絶し壺の石碑とゞろかせ　(全)堂
けふ剃眉にふくむ風流　堂
指がねを戀のもつれにとり替て　光
正月言葉すても置れず　堂
摠み茶のつまみ心をいかにせん　光
淀の小ばしはいづこ佐保姫　堂
有明の露にかたぶく地藏堂　光

啼よりなかぬ鶉まばゆき　堂
蒜の實はどちらの風に匂ふやら　光
選集の沙汰にもれぬ盃　堂
押花をみやこのつとの忘草　光
はるはいくつもほしき八五原　堂

夕立のしたるさわぎや竹の音　敬山
まつ先にしぐれかゝるや磯並松　樂只
早過たよふにも匂へ寒の梅　熊耳
引こんだ家の夕日や土用干　敬之
降はるゝ雨や五月の旗おかし　蘇齡
親の耳近くてうれし不如歸　哂我
無慾なる人と呼れて梅手折　雄飛
水うてば早着て歩行給かな　素玩
大根を曳て寒がる御寺哉　柯江
梅干は聞ても寒き名也けり　玉光
白雨の噂の多き榎かな　空阿
小一月さく色見せて冬椿　對山

川ばたやさし出て白き茨かな　一蕙
いなづまの夜にはいつ逢ふ蝸牛　桂丸
しぐるゝや公事場の松を中にして　月躬
はつ雪に登りあはせしみやこ哉　周馬
卯の花や丁子を切てひと寐入　月洲
青鷺や草に聲ある宵月夜　青裳
青鷺やうすく成ゆく不二の雪　眞彦
軒低く雫をたれよあやめ艸　五岳
なく聲に影さすもの歟閑子鳥　意橋
ふるさとの碓氷も見へて衣更　碓令
大空を相手にとるや杜宇　巍道
とゞけかし心のたけを掉(棹)の花　寓水
世義寺でゆふ飯喰て時鳥　塊翁
楠に月は殘りてかんこ鳥　雪丸
雪に聲くばりて窻の夜明哉　菁峨
水賣が尾花むしりて歸りけり　呉老
青嵐ふくや畠のたらぬ國　葵亭
かたびらに品よくうつれ竹の庭　千鶴

繁花閑居

市中できくぞ誠のかんこ鳥　芳汀
朝すゞみ桑うる男書にかゝん　五清
きのふ見し鼬の妻かみそさゞる　魚居
啼水鶏汝も心のあまる夜か　牧士
蜂のいた窓が出なり雪の明　蕪城
言ふ事も氷ばかりや夜の八ッ　凡鳥
木枯の入日にたてり伊賀の山　省吾
荒海や松葉吹よれ杜宇　百慈
山里とかたづけられて時雨けり　一之
若葉よと植てくれたる榎かな　壺伯
枇杷の花さくや昨日の雷のさた　何頼
しづかさを殘してかへる涼かな　ひさめ
夏川やとびこすほどの爪あがり　丘耕
五月雨や松葉焚家の壁人　如陵
脱かへてすてた布子の重たさよ　米丸
萍は水のひまより咲にけり　奇流
夕皃や世の俤もはなの上　負松

靜さをのぞき當たる牡丹哉　其然
水鳥の行衛やあはき雲の波　貫志
うら門を家鴨のたゝく時雨哉　燕匡
はま人のいふやことしは千鳥年　五錐
短夜や百足はき出す一さわぎ　千崖
夕凉ござれ田の家茶の花香　昏人
煤はきや梅は帋も着せられず　桃所
宵闇やはな橘の遊び神　路宅
木下闇傘の下やみもそひにけり　莚史
若葉かげこれにも曲突すへまほし　雋老

涙速人に謁して往事な思ふ

ほとゝぎすおもひ切ても不如歸　一張

蕉像賛　九老山人梅亭筆

旅寐しつる道とし〳〵の茂哉　古人月居
駈のぼる山より近し蜀魂　敬齋
　氣をひきたてる卯花の空　百堂
紿買に出たちの酒を祝せて　禾木
　はやふ忘れる晝の草臥　齋
もてはやす月の用意も園の内　堂
　鳴子にひゞく汐のかはりめ　木
高ひ木はなくても秋の行わたり　齋
　耳なれてくる溪の念佛　堂
傾城を夢のうつゝに見るばかり　木
　越の別れのつらき今日翌日　齋
足もとに城の柏(拍)子木つがもなく　堂
　羽蟻が飛べば登る月しろ　木
すゞしさの的にも成し八重葎　齋
　こゆる尾上に近づきの有　堂
吉六も吉次も同じ噺ずき　木
　あかねをすりてかりる汁鍋　齋
競逢ふ花のあはれも垣隣　堂
　ひがんがすめば隙な春日　木
駒鳥の啼約束のさゝ濁り　齋
　鹿尾藻ひらひにつれる乙の子　堂
あくまでも浪花ヒイキのてふ〳〵し　木

塀におくまる放下師が家　齋
南天も枇杷も茶の木もみな老木　堂
うそか眞事歟神の旅立　木
坊主めが戀の心になりすまし　齋
にくや鼠の我をあなどる　堂
三絃をどこへやら遣る壁の穴　木
露のあかりとゞく名月　齋
ほち／＼と水引草の錦して　堂
鴫突ひとり足駄ふみこむ　木
あら鷹に染飯ちらして慰ん　齋
みやこの不盡を思ひ出す日ぞ　堂
跡もなき施薬のさたのしらせ鐘　木
荒まし霞む松のいり口　齋
鎰提て花を見に行下屋敷　木
防風鱠あたゝかに盛　筆

草まくら

吉備津詣御な拜して丸龜眺望

松に鶴雪に旭や象頭山　百堂

頭巾の四國似あふ寒かな　、

大咲居士惠見氏の墳墓をひろしま
専勝寺に訪ふ

此人やおしみてもなを暮ゝとし　、

宮嶋より岩くにへわたる

八十嶌も春がくるとて帆の走る　、

備前藤戸のわたり

しら雪や其盛綱は何佛

寒夜月光

冬籠すまの簾に灯ちら／＼　、

舞子の濱

凩や松より吹て松をふく　、
水鳥の眞向に白し淡路嶌　、
高砂よ曾根よと鴫の立さわぐ　、

草菴に松嶋の松もてきざむ翁の像
あり、また岡ざきの青ゝ老人より
贈りくれられたる矢矧のはし板も
てつくる大黒天の像さゝ、ならべ安
置する事年あり

家つとにせばや洲はまにたつみどり　、

みはしら

萬代の
　よき事諏訪の御はしら　才广呂

みはしらや長刀持の顔の汗　闌更

神宮寺
涼しさや鐘をはなるゝ
　かねの聲　蕪村

夏山や得も
　しらぬ花の
　　香に匂ふ　几董

若葉して不盡に
　やさしき諏方の海　士朗

文音、

鴨は行家鴨はかへる時雨哉　田年

雁下りる畠も持たず寳寺　草坡

三日月の冴ておかしき柳かな　武貫

どの馬の鈴も遠音や春の雨　素鏡

月を吹ほどに風なし花董　呉融

散かして櫻のゆめの三夜程　端雄子

麻刈集

士朗編

俳諧の正風は、わが尾張の國に吹おこりて冬の日の五歌仙成ぬ。そのかみ芭蕉翁、侘盡したる侘人われさへ哀におぼえぬとて、身をこがらしに風狂して都鄙をり／＼の吟行には、かならずこゝに來り給へり。其ころ熱田に詣で給ひて、社頭の大に破れたるを、蓬・しのぶこゝろのまゝに生ひたるぞ、なか／＼に愛度よりも心とゞまりけると申されけるが、其後磨直す鏡に造營をよろこび、水鶏啼と人のいへば佐屋の泊りに假寐せられき。海べの鴨の聲白く、千鳥啼星崎のやみに心をよせて、笠着てわらじはきながら其年もはやくれにけり。代かく小田の行もどりに親き人のなつかしとや、粟稗のおくに草の菴を尋ね入、刈田の鴫に清閑をめで給ふ。其歸るさの夕ぐれには、有とあるたとへにも似ず　と古寺の月をあはれみ、艸まくら犬も時雨るゝ夜をかなしむ。或日書林風月と聞し名もやさしく覺えて、しばし立よりて休らふほどに雪の降出しければ、

　いざ出ん雪見にころぶ所まで

丁卯臘月はじめ、夕道何某に送ると興じ給へるぞかたじけなき。

　眞蹟は風月堂孫助が祕藏也。いざゝらばは再案なり。其句の古きをとひよれば、其家の久しきも亦めでたし。不肖士朗、百年の遠忌をとぶらひはべらんと、此句に脇つけてわが師暮雨叟にうかゞひけるが、第三・第五とひろごりて其卷半はとゝのひぬ。われ何の幸ひぞや、吾何の幸ひぞや。されど其師も今はなくなり給ひぬ。けふわれ風月堂中に席を設けて人／＼を會へ、ともに翁の眞蹟に禮拜して、こゝに其まきの後を次ぐ。

麻刈集

雪之巻

いざゝらば雪見にころぶ所まで
百年さむき有明の松　士朗
塩筵小鯛いくら脊裂らん　曉臺
又さし出す薪の燃えさし　朗
山吹の花を分入菴にて　臺
鶯に皃ながめられたり　朗
桶の底がくりとぬけて春の水　臺
あかるき雨が日半降行　朗
請戻し伊賀の石切夜逃して　臺
是なくばとて紅皿を破る　朗
執着の雲井はるかに下居つゝ　臺
けふも燒場の鳥啼歸る　朗
ひは〱と竹おし曲る月代に　臺
貝売柱こける秋かぜ　朗

露霜や巣にかきちらす鼠の子　臺
木賀の溫泉に獨り馴たる　朗
刀賣る人に出向ふ花のかげ　臺
破れ泥障を陽炎に敷　、
春の空一時般若の鐘が鳴　朗
なみだぞはやき戸びら推聞も　臺
御扇人目がくれにまゐらせむ　朗
梅青くさし門阿彌が酒　臺
畑そふて柳凉しく成にけり　萬岱
垣より出る水のちり〱　羅城
光さす物を玉かと手にとりて　岳輅
國主下向のちかき朝明　闇毛
父を松母を栢と詠めばや　岱青
浮世の盆は風の送り火　蘭水
暮る夜の月は波より上る也　臥央
ねまらせ給へ鴈の啼宿　彪門
脱て干す衣一ッもなき身にて　紀鳳
目の盲るまで覗く日本記　朗

鈴の音の天の戸渡る山かづら　城

青を踏ぬ人とてはなし　青

木の下に汁も鱠もさくら哉　白團 丹吟

蚯の鳴日は今も長閑也　白圖

雪のはじめて降ける日、枇杷園に對酌して

雪もてる雲の尻兀ちからなし　曉臺

梅一葉初雪まではこたへけり　(チタ)㯃梅

都の燒土を見めぐりはべるに、人〳〵の家居はいまだ三ツか一ツにもたらず、石くすぼり木く枯て、草色ひとり蕭くたり。

初雪の都にうれる杉戸哉　士朗

茶室

枝炭に見ゆるはいつの薄雪ぞ　(ツシマ)岱室

薄雪やまだ白菊のこゝかしこ　(サヤ)梅呉

白雪をわがものにせば東山　聊于

有明と成けり(イ本、たり)松の雪落て　杜常

つく〴〵と分別もなし雪の山　西川 琴波

奈良坂や鹿の尾に見るけさの雪　靑峯

衣を着ば濃紫よけさの雪　岱青

ぬく〳〵と雪に寐過す藁屋哉　閭毛

書懐

身に老のつもるは早しけふの雪　白圖

降る雪のものにさはらぬけしき哉　文陵

人の行方より降か風の雪　騏六

雨尾山にて

老松の雪もち馴し風情哉　(チタ)木人

つく〴〵と雪の古寺詠めけり　(信スハ)自德

閑か也草の雫に晝の雪　(ツシマ)木吾

呼續・松風の里を過て

雪に出て晝の宿とる獨り哉　臥央

荻の聲跡なき雪によわり鳧　紀鳳

雪の雲よぎるや月はありのまゝに　沙漢

雪の日や心ほど高きものもなし　羅城

凩之卷

木がらしの身は竹齋に似たる哉
　壁にしみつく冬のよの月　白圖
礒うつ遠山本の年くれて　士朗
　魚俵漕舟ばかり也　徐英
夷等に古き風情や殘るらん　圖
　櫻をとはぬ人とてはなし　朗

登八事山

木がらしに佛の皃のしづか也　岳輅
こがらしに隣のほしき日暮哉　臥央
凩や身をおく山のさわがしき　ツシマ 吟幸
こがらしに山又山のくもり哉　古常
夜の明て木がらしやどる吾家哉　ツシマ 啓甫
木がらしにとりはなしたる夜明哉　大津 騏道
凩に寐髮吹るゝ破戸哉　五周
こがらしの吹つめて又のあした哉　岱青

虎足菴の(イ本(冬の))冬げしきは、岸高く稍寒し。土橋をわたり謠すさころ、小几による。

木がらしのけさより苔む椿かな　白圖

市原にて

こがらしは小町が死で幾世ふる　三岡ザキ 趙皃
木がらしや海一盃に出る月　士朗
凩に落來る深山つぐみ哉　三岡サキ 入素
こがらしや夕山鳥の啼わかれ　同 卓池
こがらしのをかせをからむ眞柴哉　曉臺

木曾山中

片てるや日も木がらしの行あたり　桂五
木がらしや後架にも神のあればある　羅城
こがらしや瓦の上の月寒し　ツシマ 丹戎

千鳥のまき

星崎の闇を見よとや啼千鳥
　時雨の中に落る三日月　岳輅

小腕を捷す芝射の弓冴て　士朗
人のどよみが松に應へる　呉井
けふの御賀うろくづまでもをどるらん　輅
寶の舟をかざる綾巻　井

串に鯨をあぶるといふ海士が家に行むかひて
高浪や千鳥亂てよりかねる　万佁
伊勢の海士の夜をあかゝりに鳴千鳥　臥央

送別
啼千どり硯の海の氷る夜に　閑毛
加茂川や北へ啼行小夜千鳥　京 芦涯

醉起歩溪月
目の覺て見れば寺也川千鳥　素外坊 玄ゝ
かは〲と明はなれても啼千鳥　巨川
いそ千鳥あゆみながらの小聲哉　京 桃睡

湖邊
古道やねぶか畠も啼千鳥　羅城

夕千鳥浦啼ちどめ〲　雨滴
夜はしりの沖に楫かふ千鳥哉　素兄
磯千鳥沖のちどりと入かはり　木人
波の上もむら〲曇る千鳥哉　安之
むれ行ば跡に又來る千鳥哉　風止

三河にて
生海鼠干す袖の寒さよ鳴千鳥　士朗

冬嶺江上に臨むといふ鳥羽のみなとを見廻りて
夕闇の松風のぼる千鳥哉　曉臺
むら千鳥風の花とも見ゆる哉　李臺
啼と見しものをつひ行千鳥哉　岳輅
むら千鳥うち越えて笹のぬれ葉哉　岱青

鴨の巻
海暮て鴨の聲ほのかに白し
煙りて跡の寒きわちの火　沙漠

檜皮むく苔のしたゝり踏〆て　曉臺
また來る人に雨かすりけり　漢
初秋の月をしたしむ半簾　、
老馬やしなふ白萩のかげ　臺
七束の鉾のさびする宮うつし　、

訪隱者

芦鴨の足水かゝる岳子哉　墨山
水鳥や汝住江の初時雨　岱青
夕月にむかひて鴨の流けり　嵐桂
水鳥の尻吹おこせ日枝颪　庭市
水鳥の水にくるしむ嵐哉　帶梅
鴨啼てほの〴〵見ゆる火影哉　延至
うき鴨や戯男に射崩され　曉臺
ぬれ〳〵て沉か雨の浮寐鳥　青霞
水鳥や小笹がくれの朝曇　沙漠
水鳥やたま〳〵うごく人の影　士朗
水鳥のうきも流でねる夜哉　岳輅
かるの子に青海苔かゝる磯ゞ哉　旦明
をるまじき府にゐたり春の鴨　紀鳳
夕川やのぼる小鴨に春の聲　白圖

冬枯の卷

信夫さへ枯て餅かふ舍哉　蘭水
霜の枝木の光る日の朝
鷹したふ遠山人の聲冴て　曉臺

出柴門

冬かれや日はへら〳〵と西の海　闇毛
冬かれて川煙立夜明哉　看古
吹かたへ吹れて枯るすゝき哉　白圖

難波入江に古きを尋て

かれ芦に洩る影寒し三日の月　閑虎
冬枯や何を見送る鹿の耳　岱青
捨果し氣色でもなし冬木立　京　闌更

冬かれや鐘かた〳〵の夕畑　仙兒

青天に河邊の芦の枯葉哉　曉臺

霜かれて鳶の居る野の朝曇、

枯草原頭有感

いろ〳〵の心盡しや冬の雲　少如

けふの日も霜の雫や枯尾花　三山止

一ツ家の軒に積たる落葉哉　芝麥

畑中に柿一色の落葉哉　士朗

冬籠の巻

金屏の松の古さよ冬ごもり

雀來て啼けさの木がらし　岱青

呼聲や網引の綱手分つらん　曉臺

腐れし杭瀬踏崩しぬる　青

薄衣に稻妻かゝる月は閣　臺

蔦もかづらも拂ふ長刀　青

秋悲し見れば柱に一首あり　臺

枕ぬれたる明方の雨　青

鶴の聲能登の浦波遠からず　帶梅

妙法花經を埋む蓬生　大阜

他の子の老に成しを驚きて　青

尾のあたりよりほどく濱燒　臺

月の爲に假の四阿けしきどり　阜

わがね捨たる露のわり竹　梅

笠結が屋に籾する小俣邊　臺

そら眠たいも病なるらめ　青

花落る主殿司のかけむしろ　梅

はるかに鶴の聲かすむ也　阜

如住菴に冬籠して

火桶抱てかたねがち也小夜嵐　臥央

世を蟻のすさみ語らん冬籠　曉臺

冬籠うしろは日枝の鐘の聲　岳輅

むしろ戸や身はならはしの冬籠　龜六

狄にこゝろよする夜もあり冬籠　士朗

二三日は寐所しらず冬ごもり　昆明
冬ごもりする墨にほふ夜や寒き　京 嵐月
山の奥にも田一牧(枚)冬ごもり　羅城
此奥に人もすみてや冬ごもり　ツシマ 兎石
或人の油くれけり冬ごもり　チタ 北橋

閑歩

一休の戀病とはん冬籠　白圖

わが友閭毛致仕して後、飛鳥川の水手づから汲て、茶を煮るわざをなん樂みける。

五月植し竹の奥也冬籠　岱青

旅寐の巻

旅寐よし宿は師走の夕月夜
市のほこりのうごく埋火　昆明
歩行人の鳥つけてゆく白梅に　曉臺
雨も若菜の日は風情あり　明

八月十四夜湖上をたどる

夜をおもふとしきり也波の秋　白圖
春の旅草の枕もおぼろ月　播州 玉屑
わが旅はけふをかぎりぞ子規　岱青
一日の旅や野路行萩の花　ツシマ 仙布
春風にねぶたき砂のあゆみ哉　臥央

刀禰川夜泊

霧に明て松戸の鐘を夜の行へ　彪門
さよの中山正月ごえも命哉　亡人 一晉
木がらしの笠をつゞくる旅寐哉　買友

九月十三夜も今宵になりぬ。今宵の清興うたげのまうけは、好〻舍中のこともがら也。共に手からみて科野川の支流にのぞめば、ひさりひそかに古園の感あり。

水日夜北にせまりて後の月　曉臺
旅はものゝだゝくさなれど新扇　少如
哀なる人にすれたる尾花哉　仙臺 巣居

萍や伏見は水のちかき家　桂五

三日月よ鯛よ筵ちる伏見脇　岳輅

大岡寺縄手にて

吾聲のわれにはあらぬ寒哉　沙漠

馬上吟

冬の日の猶うつくしや石部山　士朗

虫の音やおもへば高き山の上　巴江

柊に霧のしたゝる山路哉　物哉

片濱は淋しき月のうら手哉　伊奈支

箱根山を下り〳〵て長光山にのぼる。上總房州を見下して閑寂又たぐひなし。鉄牛和尚の開基といへば

鉄牛をのむ蚊は寒し山の上　大阜

蚊屋釣らぬ宿にも秋は立にけり　昆明

瓜買て奈良の七條覺えけり　チタ聴呉

河原菊蓬が中に咲に梟　ミ非如

うつゝなや舟路をかたる濡蒲團　岡ザキ桃生

子吉が東武に行を岡崎といふところまで送り來りて

雁の聲同じ夢見て別れ梟　士朗

あかどりや宇都の山への廿日月　紀鳳

年暮の巻

年くれぬ笠着て草鞋はきながら

川尻寒く青むしろほす　紀鳳

梅柳ほろ〳〵と枇杷の花ちりて　曉臺

けさの連歌を書付ておく　士朗

盃にうけてこぼさむ三日の月　紀鳳

常に對す五六羅、人はいふ魚か水か

明暮の人にも年の名殘哉　羅城

火を焼て年を惜むか沖の舟　閑毛

年の口はをしく夜は又頼もしく　騏六

さりげなふ年も行也片折戸　岡ザキ魚日

をしめども身に添て年は暮に鳬　（京）青阿
落る歯の初て年のをしき哉　暁臺
似合しや年守人の革羽織　沙漢
煤拂て梁高く見ゆる哉　徐英
くれ竹の菴にあまる煤拂　闌曉

市上に立て童戯を見る

年暮ぬ松葉角力のあらそひに　士朗
年の市人わけ行ば牛の尻　臥央
年の奥又ゆきゆかば花の奥　五寅
行年の行もことわりよ煤拂　蛙聞
燕の巣をあやまつな煤拂　買友
人間の彩色兀て年の暮　彪門
嵯峨に行人は稀也年の暮　（熊本）里榮
年もはや日あり月あり天津鴈　岱青
行年や人も落つく髮の霜　紀鳳
年の暮梅の有間を仕居哉　岳輅
おもしろう（イ本く）更たり梅を除夜の花　昆明

春雨の巻

笠寺やもらぬ窟も春の雨　騏六
水ちら〳〵と梅の花皿　士朗
時しらぬ鳥を柳にへだつらん　滿子
人もどかしと碁を作る音　六
月の霜おもき蒲團に目覺れば　六
夜のはつ〳〵にふくむ一陽　朗

山居

梅さくら共間遠し春の雨　岱青
春雨や山のうへまで月よさし　岳輅
花の香のうく夜とみれば春の雨　物哉
春雨のほろ〳〵と砂に交り鳬　羅城

逢坂を越る日

はるの雨牛の額を流れけり　桃睡
春の雨礎闇夜に似たる哉　庭市
よく聞ば春雨の降藥屋哉　越毛
二日降て春中雨の心かな　騏六

幼子の夜中遊びや春の雨　士朗
梅の木のだゝくさに成て春の雨　大年

鈴鹿山

春雨や薗栞の枯葉に日はくるゝ　玄ゝ
春雨や夕日にうつるいぶり炭　閣毛
春の雨よく見れば笩押人よ　昆明
春雨や朽葉おし出す龍田川　圃曉
春の雨松のあなたに松や有　蘭水
はる雨や枯木の上を降くらし　曉臺
春雨の果みな合歡の雫哉　雨曉

水鶏の巻

水鶏啼と人のいへばや佐屋泊
　雨降殘るうの花の門　閣毛
篠の束亂れやすくてみだれけり　曉臺
　枴ふり廻す肱のひかいす　、
曉の月をうしろに雲さわぎ　毛
　白粥すゝる折箸の露　、
女郎花靭に袖をぬきかけて　臺
　野上は情風破はつれなし　、
うき風の霜吹返す夜の聲　毛
　母にかくれて魚とりに行　、
七五三切らば榎の本の神罪すらん　臺
　明智が名殘屋敷七反　毛
月の前われに飛鳥の思あり　臺
　灯きゆるあさがほの風　毛
芋俵野あらしおとす貝吹て　臺
　小錢ためたる佾哀なり　毛
花盛十日も前の疊がへ　、
　夕汐ざるに藻魚釣みゆ　、
砂原におもふ事書く春霞　臺
　人にはつらく車遣り皃　、
朝みどり神の皺の音寒し　毛
　榾の火ちかく目白啼よる　、
雪落の牛そきわけるむさぼりに　臺

せんすべなしの歸俗なるらん　毛

あらし吹醍醐の藪の薄疊　、

縄つけておく橋のうき板　臺

獨坐

門さゝじ水も汲まじ水鷄啼　楚分

仰向て啼か水鷄も月のもと　闌更

水鷄啼夜は薄雲よ天の川　岱青

醒井にて

水鷄さへちからがましき旅ね哉　帶梅

水鷄啼夕にちるか笹松葉　騏六

白砂や草にもどりて啼水鷄　五周

晝の水鷄尻こそばゆき姿哉　雨滴

水鷄啼竹の中川水くらし　青阿

水鷄啼宿と答へり姿もの　曉臺

二人とは人またぬものを啼水鷄　紀鳳

啼やめば水鷄みえけりちらほらと　士朗

水鷄啼や燈心引か一ツ家　白圖

佐屋の泊にて

舟に寐て聞ば水鷄の舟たゝく　ツシマ幹亭

池のめぐり又降雨や水鷄啼　閭毛

大風のうらへ廻りて啼水鷄　桃睡

むら雨の過ると見れば水鷄啼　物哉

鴫の巻

刈あとや早稻かた〳〵の鴫の聲

十日の月の光る柿の葉　計之

落る齒を包む袂に露みえて　士朗

西行の賛

鴫立て暮行墨の袂哉　闌更

ひは〳〵と鴫の立行西日哉　青阿

時雨るゝや田縁の鴫のいそがしき　万岱

捨小船鴫のつく〳〵並び皃　ツシマ梅虎

竹垣の竹くさりけり鴫の聲　昆明

鳴立ややがて露けき足の跡　羅城

水ちよろ〱鳴の足跡流けり　桂五

三日月寺にて

鳴立て昼の三日月見付たり　ツシマ 乡宜

同じく

月落ていよ〱鳴の夕哉　サヤ 之楓

鳴啼て霧のはびこる埜哉　雨曉

月出て鳴啼や水のすじかひに　南溪

夕暮やものゝ片よる鳴の聲　サヤ 米汁

鳴啼て船の夕飯過にけり　騏六

草菴の巻

粟稗にとぼしくもあらず草の菴

秋のこゝろしるむら雨の丘　臥央

うちあぐる鴴の頭に月出て　士朗

漁の海士に盃をさす　素兄

すはされば都ちかしと諷ひけり　央

藤の花ちる夏の曙　兄

間居

獨をればひとり万歳來り鳬　仙臺 丈芝

檀溪

露におとあり誰住なれて茶の畑　士朗

此句の閑なるおもむきにひかれて、われもまた檀溪山中に尋ね入ぬ。時は二月の二日也。溪のあなたにそれぞさおぼしき菴の見えければ

水こえて柳あり誰が住所　岳輅

隈〱の明るき秋のゆふべかな　蘭水

山吹のみだれて淺き栖哉　閬毛

月代や帋帳にかゝる萩すゝき　白圖

秋の夜の深がうへに間垣哉　信州 素檗

屋根の雲夜はみじかくぞ成にける　同 芸門

行脚などとゞめてさらに附る枕さす

春の夜や生花落る枕もと　俗青

けさ方は時雨しか秋の寒うなる　魯衛
長閑さや朝起宵寐庭せゝり　帶梅
啼ぬ時つがひ見えたる雉子哉　京 百池
白萩は手もなき秋の光哉　キヨス 滿子
吾軒の松を見てゐる師走哉　騏六
門口に松笠拾ふ野分哉　チタ 大阜
きり／＼す啼や葎のぬきな汁　岡ザキ 圃來

題畫

簑虫の櫻戀しと啼音かも　入素
淋しさに蠅も出て行菴かな　羅城
わが宿の梅はいつさく梅花　曉臺
春寒し海苔燒ほどの薄月夜　桃生
夕皃や這渡るほどの菴と菴　岱室
萩咲て蛙掃出す小庭哉　巨川
鹿啼てしをり入たり山家集　チタ 也梁

月の卷

有とあるたとへにも似ず三日の月
見ゆるものみな露けかりけり　羅城
ひよろ／＼と小艸がもとの米花　曉臺
兀て久しき山の中道　城
梓弓眞弓つき弓弦はりて　臺
心にはなど年のよるべき　城

林臥

萩丈(イ本、花)やそこにもしばし二日月　士朗
二日月後の波にはなかりけり　羅城
三日月の笹(イ本「の」)にすれ合ふ光哉　騏六
三日月は玉のかいわる姿哉　蛙閒
根なし草引けば夕月傾キけり　卓池
月落てまだ宵ながら閑なり　岱青
鷺の聲月のかなしきあたり哉　桃睡

林何某の家の庭の松のいと珍らしく見えければ、しばしさてこそ立

ごまりつれ
松影のはや月にてぞ有にける　士朗
暮雨叟に具せられて、三河のさかひに至る
二むらや三河に出る秋の月　岳輅
月の中にものゝ影あり淡路嶋　呉井
月はこゝにけに小車の花の上　閻毛
松にかけつはづしつ歩行月見哉　滿子
月見れば悲し古人も月に醉り　岱室
平かに夜はみどり也秋の月　五周
代ゝに見し人の泪か月の露　白圖
行〳〵て帆筵からんけふの月　素兒
見失ふほどに明るしけふの月　青霞
さやけさに空の限りをけふの月　逸セイ漁
秋の夜は月からもわく嵐哉　桂五
風の萩とかくして月をひるがへす　臥央
出る月や海こえ野こえ面さし　蘭水
琵琶橋
月出て稻妻遠く下りけり　万岱
月の出に聲なき秋の子規　南陽
秋閨怨
おもひあまりて月有明と成にけり　撫松
懷へ月のさし込寐起かな　大阜
曇れば、うし晴れば寒し后の月　芦涯
后の月長きことしの命哉　丈芝
ひさり今宵の月に對すれば、只おもふ所年比むつまじき人〳〵の八九はほろびうせて、さありきかゝりきと其俤をむかふるのみ。さなにてもおのれ五十こえし齡のほどに、ことしや月の見果ならむか、けふや清興の名殘ならむかと去年は旅寐に一入おもひ入て、秋の露もいと深かりけるが、何くれと同じさまして又此秋に逢るなり。扨しもつれなき命ともおもはざりけり。
おほかたは逢ふまじと見し月を友　曉臺
寛政五年冬十月

雀(つる)芝(しば)

正・續

道彦撰

雀芝

江戸　金令みち彦撰

一男もすとかきいでゝ、をうないすさみなしたる貫之の
うそと、烌風ぞふくさよみて、窓に日くろみし能因がう
そさ、いづれぞ。我また人の旅せる道の記をつくりて、
うそを万人にくらぶるに甚かてりさ云べし。文才の拙
き、かんな手のいやしきは、見人の不運によるにも歟。

一記中我さしるせるは、筆者みち彦が我にあらず。旅人
士朗がわれを云也。

一旅におもふこゝろのふし／＼、すべて七朗が心にあら
ず。みちひこが思を士朗が心になしたる也。両吟の一
巻、主客の位を齟齬せるにてしるべし。

そも／＼東海道の記行、あけてかぞふべからず。うきに
つけ嬉しきにつけ、うち聞えける人々のあとなつかしく、
此春ゆくりもなく出なんとぞ思ひなりぬ。伴なふ人ふた
り、手足つかはれんとてつきて行わらはにあらず。いづ
れも頭はまろけれど、くつきやうの茶湯者・信實の念佛上
人也。心の月の寂しさは同じわびがさこそよかめれと、
享和紀元のとし如月はつかあまり、霞こめてし空の覺束
なき夜より、馬にものらずまづ歩よりぞゆく。

いかめしく思立たる花見かな　士朗

熱田の神をうぶすなにとりたるわれ／＼なれば、まつか
ぜの里・夜寒のさと、知立の市も八はしの寺も常事に覺
て、ふみでをそむるに心なし。

藤川過るほどにも、

みのゝ毛の顔にかゝるや春の風

と大聲に吟ずる人あり。おどろきてふりかへれば岡崎の
卓池也。此行のうらやましきに、あづまの旅寐をともに
せん迚、つとめてかけつけたる勢ひなるべし。

よし田へ出る。

長百二十間の橋あり。此水源はしなのより出、長しのゝ根を流るゝ瀧川なりと聞に、人ゝ善光のみほとけおがまむと、ちかひまひらせしよしあれば、いでやこの大河の露と滴るところまでゆくことかとて、前途千里の思をなさゞるはなし。

伊良虞崎も見やらる。はまなのはしいつの世にや。道運の法師が創る難もなくて、天竜をすら〳〵とわたる。さよの中山になりぬ。ゆくもかへるも旅人ならずと云事なく、命なりけりとよめるもあはれに、さま〴〵のこと思つゞけられてしばし休らふ。

　よき程に花のかげある山路哉　士朗

袋井。同行の茶人がうれしがる名也。

　すみれさく道もありけり大猪川　松兄

水いとあせて、聞しには似ず面白かりけり。

　這出て蔦も芽に出ようつの山　士朗

そのかみうつの山こへはべりし時、蔦のたねをとりて菴室にうえてはべりしが、年ゝ紅葉したるを見て、

　うつの山こへしやゆめになりはてむ
　　かきほの蔦の色に出ずば

艸菴集にはべり。

このわたり、右もひだりも、あとも、さきはな〳〵見處多し。

　うつかりと寐られぬ花の旅寐哉　松兄

　草臥てまくらにしたり雛のはこ　士朗

千壽のまへが古里など、心によせてつくれるにはあらず。宗長の墓吊らはでやは過べき。

　倉澤や不二にふたがる春の空　卓池

　今日も見え今日もみへけり不二の山　士朗

うどの濱・許奴美のうら・清見・うきしまがはら・三保のまつ、朝暉夕陰氣象千萬なり。

定福寺、宗祇を葬し所、自書自讃を拜す。

　うつしおくは我かげながら世のうさを
　　しらぬ翁とうらやまれぬる

　世にふるはさらにしぐれの宿り哉

かゝる記念をいとなみし昨日の宗長も、是をあはれとよ

みなす今日の我等も、いづれか時雨のやどりならざると、
例の念佛上人の尻聲につゞきて、南無〳〵と申て出ぬ。

はこねやま。

鶯のしのふりはへて高音かな　士朗

はこわうが手習のあとなど見ありく。

春の日の永きもしらぬ筧かな　松兄

大礒にくだる。

年ごろなつかしかりし葛三坊、他に出てなし。空菴まことの鳴たつさはなり。

遊行寺の鉦は、けん〳〵となりて雉の聲に似たり。松風のひまに聞なしたれば、父はゝの頻りに戀し　と申されし高唫にも思かへて尊とし。

繪嶌夜泊。

かねて無言の茶人が、

嶋守と月をみるめの長閑なり

かくひねり出しにおされて、各申さぬ事になりぬ。

腰ごへやあはで止ぬる貝の口　士朗

とばかり思ひつゞけはべる。

崔岡。

廣前にて人〳〵句あり。そは　神に奉りしなればこゝにはぶく。

軍兵甲乙人等亂妨停止之事

としるせる禁札の見ゆるにも今めかぬこゝちす。公暁が身をひそめしと云木陰、聞におそろしく、雨につけ風につけ懷古の思を致さゞるはなし。

神奈川。

申酉にあたりて富士又晴たり。馬刀つく男　藻魚つる子、道のほとりに立まじり、嘴と足と赤き鳥の人にも懼ずふるまふのどけさはや。
御代のすみだ川に來つきしおもひ、みな人酒はたふべる、あし十の字にふみて、夕日繁華にいる。

百里來て芝に笠しく花見哉　松兄

花に先わらじとく也御殿山　卓池

品川や海手にかたぐ山ざくら　士朗

腰に十萬貫をまとひて、雀にのりて不二にのぼらむと云願は誰も有べけれど、かくたらひたるは、かへりて興なき心地やすらむ。集などあめるものの一文字をもこゝろにいれて、人に点つかるまじとおもひたる、いとくるし。たゞとりあへぬさまに書つらねたるがよしとて、みちひこのふでのまゝにしるせるものゝ、さはいへどおのづからたてたる趣ありて、ひそかにをかしとおもふひとふしはありぬべし。むさし野の芝生がくれのむらさきも、ふみわけたるひとによりて、艸はみながらあはれなり兎。されば高きにもひろきにも、遊ぶべきものをや。

大必山人夏成美

集名之事、此度は不二記行ニ而御座候間、鶴芝といたし度候。こは富士の半にあり、其形よく雀に似たり。何とぞそなたのを鶴芝初編と御出し可レ被レ下候。

三月廿三日　松兄

たくち

みち彦先生

尿檄先生、長に鉄如意をさつて諸生を机下に坐せしめ、是に誨へて曰、詞は續くに成てつゞくに荒み、趣向はひねるに新らしく、ひねらざるに古し。夫ひねるとは、譬へバ聚沫無常の有さまを綴り、實物集と名づけゝるたぐひ、惣て思がけぬ一ふしにさるを云。行成郷（卿）の扇あはせにかち給へたるも、思かけぬひねりのをかしければ也。等こせ眞似ても見せんはちたゝきな、瓢こせさあらば尤也、常事也。常事は只事也。吉田の法師が相見ぬ戀こそをかしけれさ聞えしも、みな是常事にをかしみはあらじさ覺たるひねりなるべし。さりや迚ひたひねりにひねりて、譬へば薪の中に、丹つき箔つきて見ゆる木のわれおひまじれるやうに怪敷いたすべからず。甚あやしければ殺風景にいたる。古人いへる事有、好手は悉くなさずさ。是忘るまじきの一言にして、詞のつゞき又しかり。かの方丈記に、火もさは樋の口さみの小路さかやなご書るごさく、宜敷天然につゞくべし。あながちに續けんさて、長蛇の艸間に入ごさく、懐素が艸字のごさく、いつまでもつゞくべからず。黒崎の松原をへてゆく所の名はくろく、松の色は青く、磯の

涙は白くとめるべきを、雪のごとくとうちかへてし拍子を見過し、いでや、凡夫の悪業は黒色なるに、聖者の赤色と合して紫に見ゆるごとく、下手二人が艶なき色に、上手三人が艶ある色をあはして、紫の雲のやうなる巻は出るぞ。是悪びれり、こと〴〵く續けざるのいはれにして、留學第一の蜜(密)法也。人このことはりを了知せずんば、無月の村に落穂を拾ふのはてしなく、野狐身に墮して五百生をふるとも浮ぶせはあるべからず。若はやく此界を悟らば、斷橋の水を過に翅をたのまず、高く百尺竿頭に坐して自由自在なるべし。今や鬼神とよばるゝ尾張の人々に對する我赤髯胡の面々、このことばを肝に入て、かりにもひれりなき古みをとりいで、永くわらはるゝ事なかれ。

右、この尿榧先生放膽文、記行の事に預らずといへども、をはり人に對するの詞有をもつて、載てこゝにある歟。筆者の推擧によるのみ。

一珍客江戸見物之事

一發句贈答無用之事

一席上書畫停止之事

一人品令不論貴賤事

三月八日　　　金令舎 執事

墨くろ〴〵と書て承塵にはりつけたるに、あるじの心、今をはじめずうちとけてやすし。

墨田川舟せうよう。

ちる花をゝしみて惜き日かげ哉　　伊勢 青川

此人この日の事々をあるじせしなれば、心ありてきこゆ。

いやがうへにつどひ來る風客、三ツの舟にゐいしれて旬り合たれば、詩も歌もしるさずなりぬ。首尾の松のほとりにて、はまもが今やうかなでしは、しとやかにこそ。

成美亭

年々に花の見やうのかはりけり　　士朗
　重きわらじをすてるめすゝき　　成美
獅子舞の約束多き春風に　　みち彦
　酸はゆきものゝよき天氣なり　　朗
ゐいさらと月の小舟をひき出し　　美
　木賊かるべき露かしぐるゝ　　彦

窓ふたぐ御射山祭とく過て　朗
宗祇をとめし咄をぞ聞　美
惜まれに生れて來たる眼なしひめ　彦
総に今としも暮ゝ熨斗たば　朗
家を出る名ごりの茶湯見ごとにて　美
ほのめかしたり唐崎の雨　彦
一聲は山ほとゝぎす三日の月　朗
乞食になりし身の果もなき　美
誰やらが姿に似たるはかまきて　彦
千束のふみのけぶるかたはら　朗
何と云池ともしらず梅のちる　美
はつ午ごろの晴きつたそら　彦
のつほりと春を見えたる峯の雪　朗
笠ぬひひざをくづす暮方　美
吉内も吉次もやどりそふらはん　彦
一人棧ひけひとり棹させ　朗
無縁寺の木葉を薤にかきあつめ　美
もれておゆびの寒き革足袋　彦
目に見ゆる物から河豚は命也　朗
新し家に人をまつらん　美
口くろみし旅の調度をおしかくし　彦
藪をもり來る月を見る哉　朗
題目にひたとかたぶく荻の聲　美
蚤のゆくゑも冷じき床　彦
わるくさき雜炊つくる軒の雨　朗
おさなき二人なにゝなるべき　美
髻ふりが袂しばしと引とゞめ　、
小さき橋の繩ばかりをとく　彦
咲花に風ももてこぬ角田川　、
鴈の歸ると云そらもなし　筆

各詠十二句

花の咲たる花の木をうえて花の林をこしらひ、花ちれば又ほりすつと云、別世界の花を見にゆく今日也といさむに、雨いたく降來にければ、いかにやいかにかくこそ思

らめと、主じの書て出せる句、

雨にとはからざりけるを花の宿　みち彦
　眼をすりながら蕨そろゆる　士朗
どこもかも雲雀囀る田をほして　彦
　小しのひまに崩す土ばし　朗
者共が名高き月見するやらん　彦
　千艸を白き臺にそよ〳〵　朗
露までの命ひろひし染殿に　彦
　糸ぬき川のふみのせはしき　朗
節分の鰯の焦る日くれかた　彦
　はしごをのぼる鼠おさへる　朗
おろかさをほとけ佛と呼られて　彦
　終の敷寐にしたる撫子　朗
五月雨の空にも月は出る也　彦
　をり〳〵足をあらふ池水　朗
青くさき物のみくれる山の奥　彦
　咋日の連哥あらひたりけり　朗
茅(芽)柳を結ぶたよりの旅に居て　彦
　見かへる方ははやすみれぐさ　朗
春風に何の匂ひのあるやらん　、
　灰のなきまでかまど掃出す　彦
片すだれたれて寐たればうす月夜　朗
　露も實の入あきになりゆく　彦
つぐみ鳴野路のしのはらほく〳〵と　朗
　荷ふてもどる名物の瓶　彦
百とせをちぎり捨たる友ひとり　朗
　鉢に出ると聞がまことか　彦
ふれば降時雨の雪の吹卷て　朗
　芦も枯ふす荻のかよひ路　彦
引汐は又來時もあるものを　朗
　舟岡山の雲ぞくやしき　彦
蝙蝠もそろ〳〵出ばる夕かげに　朗
　坐頭の二人自刺(剃)して居　彦
何事も鄙の伏家が面白ひ　朗
　ほりかねの水野火留の艸　彦
啼小鳥花のことばを申かと　朗

三月ひと日たらで暮ぬる　彦

集兆、不時の筍をおくる。大さ龍の牙のごとし。

一薫、一品を出す。月餅のあいさましたる物を洲濱にのせて、五葉の松葉をちらしかけたり。何と申煉物にや、味最上也。仙傳なるべし。

其外、かたじけなふ給はるもの、慮ふよりなればしるさず。

金令連のあそびは、深川ゑびすの宮のほとり、大來の別業、尤酒軍也けり。くさ〳〵は下戸の茶波にぬすまれ畢。來る日もくる日もはてしなければ、筆硯を袋にこめ、ひたすら江戸見物をはじむ。三月十七日。

雀芝 續篇

李臺撰

三月十五日、己が木公亭に入まぜもせず古里い友どちうちよるに、千蕪の廿過たる句も取なかず、出すかはらけの形もみな古里にかはらず、心にくうはあらざるなめりさあるじぶるおりから、垣い外に嘘く音して、すはやといふに卓池・松兄の二人、先ッ來るなり。朱樹の翁は江戸人になりやおはさんなど興じあへるぞ、古里びこの言葉なるべし。中にもあるじの小男は、たゞ居る事のきらひなる癖ありければ、松兄が脇なせがみ出して、さて文臺なおしすゆる今宵にはなりぬ。

綸爲にて

海を見て居てはもの喰櫻哉　卓池
月片かげに落る春風　松兄
寐る鹿のひたいに角のなくなりて　李臺
左り勝手にたゝむさむしろ　良久志
酒壺はこける音さへおもしろき　士朗
我名をかへし口が二日ある　杜石
住吉の松を一枝をり提て　秋園
此けしきみなむら雨の空　朗
夏の夜に恨をかけて鳴くるな　志
具足抱へてかえる山口　臺
さまぐ＼と鞨鼓の撥を取亂し　石
十日の菊もめでたかりけり　園

春の雛は目覺るにはやくてやみぬ。
さて歌仙一折にみたぬもほいなければとて、爰に六句をしるして其不足を補ふ。

東叡山
ちる花は皆人につく上野哉　卓池

世のまことあらん限は櫻哉　松兄
我人が見ても日出度さくら哉　士朗

本誓寺
ちればこそ柳にまじれ桃花　松兄
花に鉦いかなる罪のほろぶらん　士朗
帋漉が家もめづらし散櫻　李臺

はじめゑびすの宮にて、熊井の柴波がぬすみたるを、うばいかえしてこゝにあらはす。

前書あり
新敷享和の花の咲にけり　未比等
富士の氣色をはこぶ春雨　卓池
なしぐ＼と田螺の角をふりはへて　みち彦
笹の小道の末なかりけり　なはまも
松かげのひとに聞たる月の宿　士朗
風が吹ても歌になる秋　一茶
いつまでも戀してあれよ露の鹿　雙湖

平角をよべば土器を出す　等
汐滿るまでと小舟をかへし來て　池
古き都に油うるなり　彥
女めが羽織を着ては憎まるゝ　も
けふは一日句ふ七艸　朗
眞東風たつ淺香井を見にいざゝらば　茶
乙鳥の來べき簾まきすて　湖
自然猨の藪を殘らず切にけり　等
夜明〳〵にはれる遠山　池
西須磨の月はことさら大きうて　彥
扇おかるゝ御達さびしき　も
夢にだに袖ははらはず花の塵　乃ふ輔
いづく朧の月の有明　松兄
子雀が鳴ならひたる五六　梅夫
夏をはじめしおもだかの陰　みち彥
蛩が家は西も東も門なれや　玉之

旅のけしきのすきな人にて　士朗
松柏風さへ吹ば夜が明る　兄
墓をならべし岩倉の山　り輔
錠おろす莟り一ッのはづかしや　彥
罠の鳩の豆まきに行　夫
とう〳〵と波うち寄る冬の空　朗
蒲生の旗が搦手になる　梅壽
いついつの酒の恨のつのるらん　輔
あからさまなる閨にかくれて　之
針うりの通る斗の嵯峨の町　彥
月にめさるゝ法師四五人　兄
散華にうえける芋を掘出して　壽
鴈に千鳥をむすびてぞ聞　輔
月きへて遠山櫻咲にけり　士朗
繼尾の鷹の進む一風　みち彥
米字書翁が春を借に來て　無說

わらの箒をくゝる夕雨　一蕉
をとつ日の竹睡日やわするらん　茶波
いさりの宿の松をながむる　胡準
忠則のおはせし世こそ哀なれ　彦
夜の法度にものも喰はさず　朗
ねがはくば山にてほしき本願寺　蕉
いかにわびしきをり琴をめす　説
見ぬ戀を蟬の片羽にくらぶとて　準
むらしが占にひた／＼と乘　波
秋風が蓑毛のやうに吹にけり　朗
煉馬入間の蕎麥の最中　彦
月さまを神主どのがおがまゝ　説
からげ合せて荷ふ幕串　蕉
ちる花の迎に來るかさゞら波　波
蝶にかすべき笠をつくらん　準

此續編は前編の不足を補なふにあらず、また補なはざるにもあらず、たゞ只居事のさらひなると云、李臺のぬしが心によるのみ。

みち彦云

斧の柄

乙二著

去年の秋、松窓と書たる大旗を吹なびかせ、大入道太呂をぐして松前・箱館へおしわたる時、予が楼上にしばらくとゞめ、大盃をとり〳〵にめぐらして見はやし侍ぬ。老と成、年はたちかへりぬれど、まてども〳〵歸らず。此烁、御當家蝦夷地クナシリ詰交代の大將の部伍のうちに托して、一封の書をおくりぬ。とくひらきよむに、斧の柄といふ集つくる序者たらん事をいふ。さてこそ斧の柄の名に長居するはあらはれぬ。そも箱館にはわかゝりし時の社裏の魁、布席といふものあるがうへに、草琚・來車、其外のすきものども、我も〳〵とゞめて、三ツになる孫の七ツになるまで、かへさぬこゝろだくみもはかりしられず。あはれ、はやく松窓の翁のまめなる顔つきを見たき、といふ事を序とせんと書て、あくまで有力のものをたのみ、こなたの矢越の崎よりかの嶋の矢越の崎まで、くろがねの弓しばしと引しぼり、矢文もて是をおくり侍りぬ。

文化八辛未のとし
初冬ちら〳〵雪の降日　楳園平角述

斧の柄

御子等子に參らするなりかきつばた　青標
藤ちるや瀧見に着たる笠のうへ　精年
茶めし焚宿を持けり壬生の猿　如萑
すゞしさや野鳥の下りる淀の町　松圃

雨石・大膽が相もちの、牛若丸と名づけたる舟のいわゐに招かれて

そも旅にときんもかけず武さし坊　太呂
一しきり霜にあかるき檜原かな　菊人
卯の方にうさぎをみる日枯野はら　梅月
十六夜の月に見直すこよみかな　波靜
からし菜の花ともしらじ啼雀　龜兆
なきやめと釣瓶もるなりかんこ鳥　李邦
狩野桶の蓋もとられず散さくら　太龜
子のたもと母の笊や散木の葉　野柳
みのむしの下る所にすゞみけり　星左

山里は茱もたくさんにきくの花　月岬

碓が關にて

山伏も雪車もとがめぬ關屋哉　春窓

散花におくひも寒け琵琶法師　洪風

罌さしにからまる糸やかぜかほる　呂川

砂道や粥煮るやうにわくしみづ　呂洲

菊の日もちまき賣なり山の町　其鳳

いわゐ日のつゞくあしたやうめの花　湖帆

すゞしさや雀の嗇むやうす莚　呂圭

立のぼる月より松よりふくあらし　几村

卯月十日ごろに、庭のうめのさかりなりければ

袷着てほとけうまれて梅の花　市來

桂女のおとこもつ夜や灯とり虫　雀子

辻うらにながめられけり小松うり　湖畔

燈籠がきえても來るや水貰ひ　乙二

すゞしさや榮耀がましきひの木笠　一口

松かぜにならへ扇のわすれやう　みつ女

にぎやかに聲のへるなり春の雁　乙園

月により日によりいくら時雨の句　かりほ

月の夜はまたるゝものや木草うり　三笑

家鴨等に枳殻の花のこぼれけり　志顧

三條は小鍛冶も寐ぬや鉢たゝき　市十

きくの香や冥加に叶ふ藪の家　雨石

芥子くさき雨のふりこむ住居かな　文質

九月十三日は箱館より引通しの馬雇て松前へゆくとき、馬士は辰五郎とて、とし十五の悴にて、予と太呂と、酒田の人ひとりと能登の塗物商人ひとりと、荷物三箇と、そで子といふ雁(ガン)の字と已がのりうまと、七疋の手(タ)づなを鞍つぼよりくらつぼへ結つけつゝ、馬士は第一の先馬に乘てあゆませ出るに、その馬どものさすがに五調(ガンチヤウ)にしもあらねど、野にはなち飼道を引連來りて、かゝるときどきもちゆるゆへ、一里ばかりの間は、列をみだして踊ゆく事たびたびにして、やゝ落ぬべきこゝろ遣ひやすからず

侍るが、いつとなくしづまりぬ。海邊十里余は石ばかりの所あまたありて、其上を過る足音は氷をふみくだきゆくひゞきに聞なしぬ。山路にかゝりては馬峰(マサクリ)のたかく、ひぢりこのふかき、行〳〵木の根・巖石ともいはずあゆみ行ば、くろがねもてつくりたる蹄にやとあやしまれぬ。馬士が時〳〵危き所〳〵は下り立て牽過るとあるに、乘てさき立よりもあゆむ事おそければ疑て問ふに、のりながら追るゝに馴ぬれば、かくてははかどらずと答ぬ。府下まで二十五里が内に、知内・福嶋の間七里の山中はあらくまのすみて、たま〳〵馬・人のいのちを落すといふ恐ろしき道に、したしく熊のあとを見るは、魂きゆるばかりにありき。凡大小の川五十余ありて、乘ながら馬を打入れぬるゆへ、馬士とても馬ならでは叶ふべしともおぼへず。知内上下の三ケ所は・キシヤリ・一の渡・等は、道にも馬の腹ひたすほどの川〳〵に急流もありて、山水のならひにすこし雨降てもわたりがたき事ありとぞ。一のわたりは一時ばかりさきよりの雨にて、木の葉まじりににごり來る水のいろすさまじければ、馬より下りてつとためらひ居るうち、馬士ひとり事ともせず乘入て、ながれわたりにそなたの岸に着ぬ。しばらくありて木の間に家の屋根みゆるかたより、辰五郎は步行よりし、ひとりはこの悴がうまに乘ていで來るを見るに、アイノをたのみて連立しなりけり。あさしとみゆる川上より、アイノ馬打入てこのかたの岸に着、われ〳〵を引てわたり來し瀬をわたらせ、我乘たる馬の右ニつきて危急をたすく。あげ荷へあたりてさかろふ水音に、猿の木にかいつきたるやうに、ふとんはりにとりすがり、からふじて越ぬ。越果ると酒(シャケ)〳〵とはたるもこゝろにくからず。

この馬士が家には二十四疋馬ありて、晝夜野飼して置ぬるより、飼料の勞なく畢するともなきはこの嶋のひとつの奇にして、馬士が先立て乘るは二ツの奇といふべし。この馬士にかぎらず、ひきつるゝを見るに、十二三疋、八九疋、五疋より少きはあらず。

きのふは泉澤の礒にやどり、けふは一の渡にやどる。こゝは知内より五里の深山、最高頂なり。公義より府下筥館の往返の官吏のやすみどころのため、南部家・津輕家

の諸士、蝦夷地行役のため、旅人・商客等の御たすけに、ちいかさからぬ家ひとつ建置、年々御金・御米等を宛おこなはれて夫婦の者住居りぬ。ふくしまへは二里へだてゝ、山背泊、溪谷せまりて、四十八瀬をふみ過る外には道なき所あり。かゝる山中へ續なれば、知内・福嶋より御用状、馬觸抔の先ぶれ等は、この一の渡にて中繼して遞るためにも建置れぬるよし。サルト云地よりアイノどもを呼のぼされて此あるじに預られ、中繼はアイノ等がつとむるよし。彼等が躰たらくをみるに、おなじ家の北に大いろりありて、髪ひげむさくるしく生たるがならび居て、酒うちのみ、むね打たゝきて、何やらうたふをきくに露わからず。わかきはひげのむく〳〵ともはへず、この地のはやりうたうたふはそれぞときこゆ。メノコシ二人、二十にもたらぬが、我人のやどりたるによびあげて夕餉の支度などさするやうす、よくもの馴たり。火を焚ほこりが勝にかゝる、あたらしき箸がたらぬなどいふも、シャモにたがふ事なし。あつしの着物に同じ前だれをかけて、髪は禿に切置とみゆるが、ふろしきをふたりながらかぶり居れば、耳のほとり、ほんのくぼのあたりより少し出たるがみゆ。口のあたりに入墨したるが、黒きあざのごとく見なさる。腕にも彫物ありときけど、人なれて遠慮するか、あつしの筒袖よりこぶしだけ外出さねば見えず。メノコシによりて、ほり物に網の目、綾のごとく成もさま〴〵ありと云。ひとりははなといひ、ひとりは七といふ。ふろしきをかぶらせ常躰の女の名つけたるも、シャモを學ばせ侍るなるべしとおもふ。明れば山陰の野にはなち置たる馬を、辰五郎なるもの一疋の馬のくつわと手綱のみを携ひ出づゝ一疋見つけるかいなや、くつわをはめ手綱かけて、裸脊に乗歩行て、そこゝにわかれ居るを呼あつめ、追まはして連來る事常也。此朝は馬二疋いづ地へ行たるか尋さがしがたしとて立歸り、出起の遲なはる事をわびてまたさがしゆくに、あるじも共に氣の毒なるさまして外に出て、そこら見廻して居たり。はなといふ僕のメノコシを呼出していふやう、おのれが内の馬に轡はめて二疋の馬を早く尋べしといふに、野飼し置るがやす〳〵と牽出しきたりて、裸脊にひらと打乗るよりはやく、尾

花・高かやとらいはず、さは／＼はら／＼と乘込てゆく影うしなふ。跡はたゞあらしふきさはぐのみなりけり。あるじと彼のけなげなるをはなし居たるうち、彼馬を見付出して、手綱もて追なぐり來るありさま、よのつねのおのこの及べきにあらねどまた哀なりき。

この嶋に年をむかへて、門ごに松立わたしたるを見るに、竹といふものなければ、熊笹をふたかゝえほど宛、左右の松に結まはしたるが、根をはなるゝ事三尺ばかりにして、異やうなるけしきのめづらしく見なされぬ。禮者の入くる坐しきに例の蓬萊・喰つみの具の類を置、床には雛を飾、菱餅をそなへ、また雛もたぬは京の人形にうつくしき衣裳を着せ、あるは伏見・庄内・秋田より舟にて運び來る土人形を立並べる家ゝもあり。はた江戸の錦繪を繪紙と呼ならはし、鴨居ごにすき間なく張つらねて、兒女の目をよろこばしむ。是は雛まつる比はわけて鰊の漁獵のいそがはしく、ものくふひまだになければ、彌生三日を取越すまなびといふ。鰊のむらがるを方言に群來(クキ)ると唱ふ。ものゝひゞきを恐れて渚近く寄來ぬゆへ、むかしより春の彼岸より卯月朔日迄火術は勿論、時守が鐘つく事、子供の紙鳶を揚る遊をさへゆるさず。群來るは子を産ためにして、この魚の居るみぎりは、海水おくまでしろく變じぬるよし。その中へ棹やうの物をなげ入るに、突立たるごくうごかず倒れずといふ。今は箱館・松前も群來ル事なく、松前より十八里東北、江刺にうつりて大漁有はありとぞ。そこも千のいらかをならべて江州の出店多く、諸國の舟つどひて、夏はとまら繁昌の地のひとつの内也。かゝる事も雜錄のはじめに、屠蘇の盃とりあへず筆を採ぬ。よしつねの千鳥がけ、道ある所は七面山にとなりてちどり山といふ。頂に人住居せし跡のごくなるものこりてありといふ。龜田の千代が丘あり。川の邊より遠くのぞめば、ちどりかけのかたち顯然としてまがふべくもあらず。その道をたどり行ば、雪積して夢裡に鹿跡を認(トム)るがごくなりといふ。むさしのゝ逃水・その原のはゝきゞに類したれど、いさゝかをなり。雁來合の前にありて日ゝ吟髭に對せば、我はこれ主人、山は是賓客のごし。千代が丘は仙臺家の陣の假屋ありしところなり。

斧の柄と名づけて僑居にうつりし時

折柴のなほはそかれや爐のけぶり　乙二

おくるあした

さむけれどたのもし月のもりし跡　仝

ぬぐひまもなくならぶ雪沓　來車

舞〱が謠に入し川ありて　二

まつの長者の松のかぜふく　車

薄ぐれは夏の日暮をいふやらん　二

きたなきまでに羽のぬける鷺　車

迷ひ子を見つけて歸る親を見て　二

蹴あげの砂のほろ〱とちる　車

笹垣に住くろめたる宇治の家　二

うたのやうなるきぬ〲である　車

秋もはや鏡のうらをしぐれゆく　二

雁をささふてうつるむしろ帆　車

まねく間にすゝきは月をはらむべし　二

扇ならして旅をなぐさむ　車

朝かけはとに彌彦の三足不二　二

さくらを花と手折る兒達　車

鎌賣のあいそに笠を縫さして　二

ぬるむしみづのわく音がする　車

身まかりて幾日に成し秋の坊　仝

鳥がさはればきゆるしら雲　二

藻屑火を面白がりてまたぎこし　車

賓くらべのおそなはるらん　二

さかづきもちいさ縣とよびかえて　車

誰がまつやら十月がくる　二

情しる宿ともしらず寐て仕舞　車

むぐらの水のよりもつかれず　二

山遠くかへる谺のあはれなり　車

弓とるかたのひだり手の月　二

狩むしを見せうと人の立むかひ　車

北野ゝ神のすゝはきがすむ　二

繩すだれひとつむすべばひとつとけ　車

夜明〱をのぞく活鯉　二

老夫婦花の日和をよくおぼえ　車

茄子の苗も木瓜にくらべて　二
ひばり啼野邊を御鷹の通りけり　車
筋違にさす腰のゝこぎり　二

是はこの雨陰につくり入たるをいさゝかしるして、かたはらに蝦夷のことばをつけぬ。しかれども東西の蝦夷地とよぶ嶋〳〵若干の上、數百里を隔たる所〳〵ありて、同じ鳥獸・艸木等の名、常のことばにも大に違ふ事ありとぞ。こゝに書のせたるを證とすべからず。たゞ雅人圍爐の時の談柄に備ふのみ。

抱籠やともしきえても物いはず　草瑶
あやめ戀しきしづくなりけり　乙二
つぼみくふ野鳥の來啼樗にて　瑶
追やる蟹のすがるしきもの　二
三日月に人のありかもしられけり　瑶
おどりにもれて寒き風ふき　二
うつり行桔梗刈萱おみなへし　瑶
瀬のほしげなる水でこそあれ　二

さもなきに馬飼ふ宿のあるじ哉　瑶
ひざのあたりへとゞく山彦　二
巽からかぞへてまはる雨のまつ　瑶
須磨のたかへは月とねるらん　二
ものたらぬやうに火桶の火がのこり　瑶
小猪わづらふころの寂蓮　二
白雲にむすびて解し草鞋の緒　、
折かけてある枝に芽をはる　瑶
母のすむあなた〳〵と花うゑて　二
いつもかはづの聲がきこゆる　瑶
三輪の夜にまぎれて入し注連の内　二
つゝぱりかえるふところの笛　瑶
芭蕉葉はものもかゝせず枯仕舞　二
あわれすゞめの寒がつて居る　瑶
ひとりヅ、とめてはかへす濱ひさし　二
山は高かれ山はひくかれ　瑶
陸奥と出羽とわかれしそれの年　二
ほうづき畠を見て歩行けり　瑶

寛の夜くよる人にも月がさし　二

誰がなみだより秋はなくなる　珪

逢ふ戀を味噌漉ふせて覗ふらん　二

ふけばちるほど卯の花がさく　珪

ちりひぢの念佛のつもる小丸山　二

子のうれしがる尾長とぶ〳〵　、

幾すぢもしら髪のふえる旅の上　珪

引出す棋のさはる尸の尻　二

花の香につぶれみかんも匂ふ也　珪

五形をうれば買もする春　二

蓬萊はくづさじうめの匂ふ内　草珪 [illegible]

ふさがれば萩すらくらし壁の穴　春岱

番鳥のうす〳〵くれるみぞれ哉　南臺

卯月末の四日、七里濱を過るとて、

老婆の蛤をふみありくこなたに孫

さおぼしきが、遊び居たるをみる

紙鳶の尾や浅にぬらして干てある　杉亭

烏賊つりをみるも蓮きて舟の霧　恒二

草鞋はく旅もたのもしきくの秋　[illegible]

この二人は[illegible]へ賣[illegible]ところに住り。おゝぢちゝの代より此島へわたる絹商人也。

山桜や賣方まつり寒うなる　一至

これもおなじ所にて、たま〳〵下れども同じ絹の目利もれぬ人なり。

流るゝをながして芹をそゝぎけり　三松

水けり鮒にくりあけしいかり綱　曉雨

日くるゝほど七面山をくだるとて、

斧の柄のかたをながめやりて、

あの月のもるにははやすく住れける　文彥

風ふきもしつたかほなり池の鴨　共流

これは[illegible]、手船にのりて[illegible]方へ來りて遊ぶ人ゝ

眼ざはりの木もなき宿の恵方哉　江遠

紫陽花や野中の蒡はいつも留守　共水

蝿よせの西瓜もほしのゆふべ哉　來草

舟路ながら山鶯滝をになむけにお

くりて

つゆいとへ岩手の山のみゆるまで　佳升

夢よりも夜はみじかかれ古ぶすま　月圃

女子にはみぬもの多し早苗舟

としぐ夏の昆布とるころより下りて、露つる舟のはじめてこぎ出すといふ冬迄、はこだてにありて商買の波にたゞやう筑紫の乙隆が、この地のことをつくりたる句なり。

桃の花折てもくもとの枝　風叟

三日月や稻つむふねの片あかり　不流

加賀西瓜くとよびありくを聞て

あさがほの千代をしつたか西瓜うり　梅山女

さてこれはせまいざしきに小との原　李冠

猿のおくらず成し雫吹かな　招月

日ごくり言を申て

わすれてもかたびらめすなやみ上り　素月

火桶等にやがてしたしき櫛笥哉　桑女

老師が予が鵡跡居にとめて

汗拭ひ頂白に月は出るなり　有水

まだ花に寒し野末の酒はやし　升女

雁來舍に冬ごもりして

大雪やみた事のない朝ぼらけ　仙風

蓬萊の麓に乘るや酒の醉　路秀

久米の岩はしにはあられど、松前より何がし公のわたらせ給ふさきく。

置露のしろくなるまで橋つくり　草珸

春立てまだ九日といふころより思たゝぬ病にふして、彌生なかば過るにもいまだまくらをもたげず。

蛭子とも波をはなれし蜊とも　乙二

髭しら髮おもへばはるにうとまれし、はるより亞叟の例ならぬ臥床に侍りて

梭投るうちぞさほ姫たつた姫　太呂

あたらしや蝦夷が千嶋のさくら花ながめる人もなくてちるらん。さいふ慈鎭の歌にて、花ある事は世

にしろ人もあるべし。ゆくさしに
みかんひさつゝ錢五十にて買さは
しろ人あるまじ。

節季ばの來ぬぞ眞事の御嶋ぶり　布席

御嶋とは蝦夷のわたり給ひしによりて、むかしよりいふとぞ。

(ウリヽ)鵜の(ナノ)つらに(ユア)もそつと(トナス)いそけ(イヨス)跡の(コイ)波、
(ニシヤソノ)けさ(トヨソ)虹を(アツケ)かけしとも(イタキ)いふ(シユツク)柳かな　乙二

大野の里、招月が許へ行途中

芽をはりて大かた鳥の木にしたり　來草

海外にありて

このやうに菖蒲葺ても寒かな　乙二
旅のこゝろは芥子かよる藻か　布席
浦島が子のたよりなきころなれや　二
更ぬけしきに出ておはす月　席
ぬかごやくけぶりを風のさそひゆき　二
木槿の花のとくきりもせず　席
小佛といへばあはれな關屋にて　二
しぐれのかげのうつる皿鉢　席
ふろしきの側へすゞりを出して置　二
松は折〳〵しら波の中　席
をしさうに鳥に啼せて花のちり　二
椎うりながら蝶をまつなり　席
袂までかゝるかすみをしらずして　二
淀野に梅を落してぞ來る　席
北へむく閨のしづくのとく〳〵と　二
山をひらめてほしがりにけり　席
ふくかぜにうさぎか月のきえかゝり　二
柄杓の水をかぶるむしの音　席
すき通る袋の茱萸のなし〳〵に　二
何を簸やらひとり箕をひる　、
落くぼや道つけ替る龜の居て　席
簔干ひまもあらぬ草好　二
蕎麥食の神はいかなる神やらん　席
まくらのうえにのこるみじか夜　二

しつけ苧をぬかぬうらみを申かけ　席

　露みるたびにとしがよるとて　二

さゝ栗の伊賀は尊き月なれば　席

　(西)朽ぬさきから卜治すくなき　二

ほろ〳〵と外に聲なき鳩のこゑ　席

　算てありく名どころのはし　二

きのふまで鐺にあめのふりかゝり　席

　ぐるりとならぶ酒の鬼ども　二

千代經よといふ間に竹を皆うゑて　、

　日のさすかたへまわる花の香　席

下の句に蛙のうたをよみおほせ　二

　菊多へ出るみちのきさらぎ　席

そも古人のひとり〳〵の風韻を得て、句作を一途に落さず、流行になづまず、人に逢たしと思はるゝ、天下の下手と呼れよと申さるゝ、我が師の坊の口ぐせを耳にふれながら、其境のおほつかなくて年月を過しぬ。あるは落柿舍の句集を見ても•歸るとてあつまる雁よ海のはた•ぬりものゝ上にちよほ〴〵時雨哉•といふ直なる一途に眼とゞまり•鷄のをかしがるらんきじの雛•の新奇の躰•湖の水まさりけり五月雨•のはたはりひろきしらべ、白木のゆみのあき風にその人を想像し、つるぎをふるふとなみやまは、撰集を賀して氣先をあらはし、聞まいといふ田家の案山子のあだなる洒落なる、里かせぎするしぐれは、中七字の草躰にちからあり。初雪や比良が嶽の格律、としの夜の三の膳の狂質の類ひに、大家の杢躰をみる事かたく、龍ツ飛•白神のうしほの涌かへりて流來るこゝ筥舘の嶋人と、老の果ぬるも無念のいたりなりけり。師の坊をこの嶋にむかひて、十とせぶりにてしたしく小言をうけ玉はるうれしさに、立圃翁が直なるものこそよけれ、

まがりて何の益かあらん。いやとよ馬のくら骨・鷹の爪などは、まがりて德あらはせりと書のこされしもうれしくおぼゆ。あはれ直なる上方にはのぼらで、こさふくところへくだりつゝ、不用にまくりたる此集を見ん人、よし〳〵猿は先へゆく尻を笑はゞわらへといふ事を、しりえに書けとあるにまかせて書。

布・席

雁來舍さは
人の呼に隨ふ

花見二郎

升六編

よき人のよしとよく見てよしといひし吉野よく見よゝき人よく見つ。それ此山の花のひかりは、龍が岡の法師のむかし書ける賦にうちまかせ侍るなり。さればこの僧もよしといひしよき人なればなりけり。

玄　國

(花見二郎)

飛鳥井の君は瀧の糸ににしきを織なし、慈鎮のひじりはゆく水に花のおとをよめり。布瀑によれる花・水に浮べるはな、いづれ百樹のおなじきより出て咲そめ、散そむるの次第のことなるにや。そのさきそむる花のころなつかしとて、蒋の廣葉に粮をつゝみ、篠竹の青〳〵しきを杖にきり、三よし野やよし埜ゝやまに笈を荷なふ黄華のあるじ、さくら木の隈をめぐり、枝折の道にあくがれつゝ、あやしのものつくりて花見二良といふ。されば太郎三郎が趣は、角が傍をしたふにもあらざるべし。たゞにおちこちの吟味をかざして、廣くみな兄弟といへるなるべし。

なには江
井　眉　誌

寛政庚申春

よし野の巻

親の墓おもひ出らるゝ花見哉　升六

　はるの行あふ一日の雲　友國

川上はみなのどかなる網ほして　目禾

　嵐をしのぐ杉の小丸太　魚眠

有明のあけてしまひしけさの月　國

　毛なみの揃ふ駒を牽つれ　六

うそ〳〵と妹を見あるく荻芒　眠

　ふたつ撞たる黒谷のかね　禾

めづらしき餅に粥の鍋かけて　六

　隣の人をおくる小ともし　國

松風のなんどゝなしにうちしぐれ　禾

　しもふさ船の蒲團うるさき　眠

翌しらぬ妹脊の中の物わらひ　國

　おもはぬかたに妹は去めり　六

青雲に月の消行むら雀　眠

　早稻のにほひの嬉しかりける　禾

土器を十枚ばかり洗ひあげ　六

　富士をながめて下駄の齒をかく　國

朝風呂は桐の若葉の時来り　一草

　刈らぬうちから麥の算用　國

ふた夜さに竹の簀の子を編おろし　草

　さら〳〵雨に砂がしづまる　國

身はつらく鳶にからすに餌をくれて　草

　草にもしのぶ名は殘りけり　國

はつ月の今より影の細からず　草

　經木かく子をつく〴〵と見る　六

ゆつたりと生れ付たる橋の番　國

　八重山越えて恭をうちに行　草

けふも叉雪にもならず暮かゝり　眠

　はしらの煤のいかめしき程　國

から臼に脚の揃ふておもしろき　六

　肴やいれぬ二十八日　眠

見て通るところ少なき濱越後　草

　春ともしらず梯子脊おふて　六

あらましの梅は葉になる花のまへ　園
蝶鳥出れば日和さだまる　草
友國十一句　升六八句　一草七句
魚眼六句　田禾四句

早春十一句

春たつてなを埋火のさぶさかな　不二
たつ春は雀かぶりて居もすまじ　エド巣兆
待〱し元日もはや夕かな　越中壺仙
はま弓やそも〱須磨の物がたり　エド完来
よき事にこゝろのうつる睦月哉　河南李郷
正月も月の夜と迄成にけり　イセ青川
春はやく不盡のしら雲出に皃　シナノ素檗
錦木やよべ掛とりし今朝の門　淡紫暁
藪入にわらひかゝりぬ軒の山　方廣
春寒し同じところになく雀　ヲハリ方明
いたぶりて寐る鴨起せ春の波　エド長翠

うぐひす十二句

鶯を聞ての後の寒さ哉　瑞馬
うぐひすの小嶋わたりも二月哉　魯隠
鶯の眼の見えぬ迄居にけり　萬和
草の雨鶯ぬれて音になかず　和州馮月
鶯の隣迄来て来ぬ日かな　サカイ芦月
うぐひすの啼初てなを春の鳥　淡鹿古
大原に鶯ひとつ啼すまし　、瓦全
鶯の啼なをすおもひあはれ也　シナノ雲帯
うぐひすのふたつ居て音をゆづりけり　エド午心
聞入て啼ぬ鶯の可愛けれ　アハ青橋
鶯のむし喰ふ事はなくもがな　アハヅ蒲呂
うぐひすや京へ入たる日のこゝろ　秋田五明

春風六句　春雨七句

飛〱に草履でゆけや春の風　イケダ瓜坊
出て見れば我十分の春の風　雪濤
春風に吹よせらるゝかもめかな　銀獅
春風のわたり初けり神路山　大和可文

我菴は竹のあらしも春の風　ヲハリ 竹有
東風ふくや車やるべき鞍馬口　洛 芹水
春雨にぬれて啼也山がらす　、芦涯
春雨や夜明に似たる夕けしき　、甫尺
寐がへれば蒲團つめたし春の雨　兵 玄ゴ黄
とく／＼の清水よりふれ春の雨　河東 来紀
春雨や遠火ににほふ串艾　栢後
植かへし菊のうへ降れ春の雨　杉光
春雨のけふは橋立へ出ぬけたり　友國

春雪二句　霞三句　若艸五句

雪どけて低しとおもふ山もなし　アフミ 重厚
春の雪もとより月はおぼろ也　洛 闕叟
門さきの松よりかすむ夕かな　洛 桃江
霞まねばならぬけしきを夕也　エド 葛三
朝ゆふの春になりたる霞哉　田禾
むかし／＼男のつみし草は何　デハ 吾長
青空にすがりて蔦の若葉哉　アフミ 五来
垣根よりあけぼの添ゆる菫哉　兵ゴ 西李
若草の水にしたしきゆふ氣哉　三日市 鯉白
ふうはりと鶯は來にけり春の草　ヲハリ 士朗

春月八句

西になりて朧ぬけたる月夜かな　月居
大鐘のおぼろにせまる響かな　タンゴ 圃能
おばしまに露や置かとおぼろ月　、蹄山
なつかしき春の栖やおぼろ月　タンバ 東亭
猫をよぶ氣疎き聲や朧月　古江 化蝶
暮ぬ間の春の月かな隅田川　エド 春蟻
妻鳥の寐ぬかほろ／＼春の月　駝岳
春の夜を鴨の毛ふみし小隅哉　洛 其成

芳野山四句

二日見て見たらぬ花のよしの山　大和 田居
佗に二日よしのを戻るうしろ神　イセ 秋屋
月もなし夜もなし花のよしの山　魚眠

人しれぬほだし心にふたゝび山蹈して

みよし野や正月よりの花ごゝろ　升六

いきとし生る人ごとに雲に衣裝を思はざらんや、華にかたちをおもはざらむや。厥おもひのきざし、こもりくの初瀬の花の余波をおしみ、よく世とおしうつるうつしごゝろの玉のをも、けなばけなんの世を棄人のそが中にも、黄花主人のものごのみこそ、いと興ありとおもほへける。

くれはの里
瓜坊書 〔五〕〔桑〕

はつ瀬の巻

我戀の花にひと夜をこもり堂　升六
　そゞろにかすむまほろしの月　魚眼
呼子鳥ふるきけしきをうつすらん　布石
　茶の風呂敷を肩に懸たる　友國
ふたつみつ濱の小貝を手に乘て　一草
　大かた麥は蒔てしまひし　井眉
かくまでも、聟のこゝろの美しく　田禾
　御堂の太鼓午をうち出す　桃源
てる〳〵と巽あがりの傘提て　瑞馬
　牡丹の花の八歩咲たり　甫六
海ちかく川にも近き中屋鋪　巴龍
　奉公なれぬ顔をわらはれ　李丈
朝の月油をぬぐふ塗まくら　奇淵
　扇のうへをふくは秌風　乙人
松むしをやしなふ程の草かりて　雪濤
　やなぎの下のいつもかはかぬ　夜人
梅の句を案じに出たる夕霞　巣雨
　ちるさ刀の長閑なりけり　吾雀
俎板の一日鳴らぬ事もなし　擣室
　銅の鳥井の海べらにたつ　魯水
雪深き馬の脊中を掃てやり　東雲
　置わすれけり積の木くすり　夜靜
ともし火にあかづきかたの物おもひ　杉光
　まろ屋はつらく潮さし來る　桃水

月すゞは雲のゆきゝもせはしなき　春紫
たゞひといろに茶がはやる也　鯉千
一順下略

梅 十二句

野の杭の人とも見えて梅の花　エド成美
月の梅あまりたしかに咲に皃　カイ可都里
梅咲ていよ／＼ふかき山家かな　イセ椿堂
正月のなくなる梅のさかり哉　兵ゴ一草
山さむく海寒く梅の咲てある　サカイ矩竜
うす／＼と冴へて梅ちる月夜哉　若翁
寐て見れど覗けど梅は莟けり　長齋
梅の花折人もがなと思ひゐる　自樂
大かたの梅は男に咲にけり　巣雨
梅咲てうとき月夜となりに皃　富林巴龍
なつかしと見れば梅より日暮たり　、市六
紅梅やどこかの野火の日のかけり　エド三千彦

柳 十二句

大かたの雨見よふなら柳かな　布石
いつとなく柳は春となりにけり　夏江
明がたの空にしづまる柳かな　河東楚山
艸と木の間になびく柳かな　アフミ騏道
松風におしならひたる柳かな　ヲハリ羅城
雨あがり朝飯過のやなぎ哉　エド一茶
まる／＼と豆ほとびけり門柳　デハ馬丁
青柳の動きつめたり春三月　アキ俊彦
氣短と氣長むつまし梅柳　、凡十
梅柳としのよる日はなかり皃　シナノ蕉雨
うめ柳爰迄來ませ月のかげ　ヲハリ騏六
梅柳ひと夜とまりの足駄哉　越中子丑

蝶 四句　蛙 五句　猫戀 二句

蝶／＼のぬれ／＼出るひがし哉　夜人
絹ものを着たるやう也蝶の袖　祠冠
蝶嬉し蝶おもしろし蝶淋し　器水
てふ／＼にけぶりのかゝる燒野かな　一透

あぶら火をなきほそめたる蛙かな　二蝶
京を出て来る夜となれば蛙啼　洛 可董
なく蛙火をたく家の見へにけり　、斗入
雨がちに小田の蛙を聞夜かな　丹波 平亭
蛙なく宇治は朝日のながれかな　、武陵
やとひ猫うかれごゝろと成る夜哉　カツラキ 烋香
猫の妻うちに居れとてうたれ皃　イヨ 樗堂

春雁五句　**雉**二句　**春山**五句

行雁や六田のあらしにおとづるゝ　富林 友郷
けふも我うへを啼也春の雁　洛 管鳥
帰るさへ雁がね寒し伊吹山　ヲワリ 少汝
春の雁どれがさきやら見よふぞよ　一峯
行雁や人に二月の海のうへ　竹雄
山里や雉子にうつりて明わたる　乙人
雉子啼て山城のやま見ゆる也　大和 吐雲
隠れんとしてもにほふよ春の山　、孤周
春の山これなればこそ人すめり　ハリマ 蝸国
風が吹たらば見やうぞ春の山　孚舟
風わたる橋のうへなり春の山　十左
春の山遠くなる日をながめかな　井眉

春日四句　**春水**二句　**春雲**二句

日暮れば翌まつ春のこゝろかな　越中 呉山
春の日の日にはびこりて入にけり　アハ 藍堂
永き日を棒持てゆく男かな　イセ 杉蓋
暮かねて釣する人の静さよ　桃夭
遊びくれて我足もとに春の水　洛 桂郎
春の水鶴の眠やうつるらん　越中 壺仙
不二の根や雪の中より春の雲　イセ 官父
春のくも限りのあれば暮にけり　富林 馬羊

混雑

ものゝ香は雨に含し彼岸哉　兵ゴ 秋湖
鳥の糞かづきて光る木の芽かな　イケダ 鹿楓
むら雨は松のみ降歟蜆とり　ヲハリ 昆明
蛤やつめば崩るゝけしきあり　南ブ 素郷
きさらぎに木陰〳〵の寒さ哉　陸奥 恒丸
土拍子といひ初ける芝舞臺　ナラ 綏鶴

糸ゆふに二日たもちぬ雨の空　河東 蓬宇
萱中や雀のさかる藁びさし　紫笛
陽炎や籠ぬけの鳥の砂あびる　桃水
春みちて動かぬ水を見付たり　氷几
人見ゆる花菜の中の小徑かな　洛 亭
菜の花の末より出たり二日月　羽觴（サカイ）
なの花やまく／＼暮る人の顏　柳莊（シナノ）

もの〻べのおとゞのさからひのはげしきより、むまや戸の皇子のひじりの徳はいやまさりぬ。か〻る例しはかぞふるにおゆびもそこなはれつべし。むら雲のさはりなすに、晴て淸光のたときをあふぐ。されば物に敵ありて其かぐはしきをあらはすは、山の名の嵐にかちて、めでたくもにほひわたれる花の、風騷の心をさそふはむべなる哉。

瑞馬

あらし山の巻

花の山水の音より夜明たり　升六
　啼よる鳥のみな春の聲　瑞馬
旅ごろも肴ぎれなき節句して　井眉
　どちへむけても狂ふともし火　六
まへこみのしめりに月のさしか〻り　馬
　黄菊ばかりに秌はくれ行　眉
浦山の大きな柿は皆澁し　六
　ほとけと二人寐たるむら雨　馬
ほと〻ぎすいくらとしれず啼さかり　眉
　なでしこ手折る戀となり皃　六
つや／＼と典侍が小顏の薄くれて　馬
　笘おく船の浪あらしとや　眉
冬がれの青菜ざまくに刻こみ　瓜坊
　かくれかねたる梅のはや咲　六
追／＼にこ〻ろたくみの春の月　田禾

きさらぎごろも引かづきたり　坊
淡雪の小關をこゆるしほ俵　六
神はましますさゝの葉のうへ　禾
紅さして雀をはなす片おもひ　坊
いつもしぐれの降はさかづき　六
家普請のとんとかたづく鐘の聲　禾
松もと馬の五三十來る　秋屋
所化衆の旅をたすける川越て　六
秌風ふくと中そめける　禾
梟のひとよさ啼し朝の月　眉
胡椒にむせて霧は晴ゆく　六
世の中を二階のうへに住なれて　禾
京の師走も夢のやう也　眉
どれとても兀たかしらとうち笑ひ　六
中にもふるき峯の松かな　禾
しづけさも唐めかしたる瓦葺　屋
伊勢のしらみの手のひらを這ふ　六
太刀持に雇はれて行麻ばかま　眉
西にながれてすゑのなき水　禾
縣ふる俳諧治郎花に寐て　坊
春のにほひの盡ぬ明ほの　執筆

升六 十一句　瑞馬 四句　井眉 七句
瓜坊 四句　田禾 七句　秋屋 二句

藪かげやともし火うつる梅の花　甫六
闇になるより冴かへりけり　升六
つばくらめ彌生にたゝぬ顏出して　乙人
酢甕の口をひらきはじめる　甫
かんかりと明はなれても秋の月　六
彼岸日和のつゞく西風　人
鳥わたる津輕の町を羽織着て　甫
下駄のかたしをふら〳〵と提　六
花芥子の高きところは咲じまひ　人
沉香刻む人のなりゆき　甫
うす暮を手船に乘てかへる也　六

壁に書て見せる譜語　人
賣きれし餒をたび〳〵買に來て　甫
寒のはじめの十五夜の月　六
おかしさを和尚ひとりに見付られ　人
ふた股竹のおなじ年ごろ　甫
咲花のさらさ小紋ににほふらん　人
干しを貝よる春の嬉しき　六

甫六 六句　升六 六句　乙人 六句

桃出代 八句　椿 田螺 四句

人顏の暮に入なりもゝの花　甫六
しら桃の咲しづまりて灯のうつる　巴龍
しら桃の梢ゆかしき青葉哉　吾雀
赤〳〵と眞晝を桃のさかり哉　子衡（タンゴ）
みつ〳〵と家かげを桃の盛なる　喜齊（サカイ）
出代の今さら寒きあしたかな　芝丘（カヅラキ）
出かはりのなれぬ板間の寒さ哉　帆風（ハリマ）
出代の箸つれ〳〵と殘けり　思山
大せつな椿咲けり落にけり　桃源
山中の寒いところぞしろ椿　呉來（兵ノ）
雨降の星につくまで田螺哉　石人（イセ）
松風のすゑを濁すよ田にし取　尺艾

混雜 十三句

三月は家のうち迄日和かな　普宥（富林）
竹の秋稻負鳥をしられたり　仁輔
かはゆさは袖のみじかき雛哉　紫金（イタミ）
うどの香や鷄の啼たつ朝月夜　祠冠
畑うちのうち崩したる雨氣哉　花洲
松の花見なれぬ卯子拾ひ兒　鯉千
まつ山や小雨ははれてわらびとり　東雲
顏あげて人見て居るや春の鹿　再賓（洛）
鳴雲雀こゝろにかゝる雲もなく　馬卯（、）
夕暮のかさなる春の林哉　如六（タンバ）
雨風の春さだまりて飛ぶ燕　玉屑（ハリマ）
帋杖にかしらすりたる雄鹿哉　八千里（富林）

椋橋の花と呼れし大根かな　大江丸

花櫻 十六句　暮春 五句

しがらみに見る迄花の嵐やま　タンバ 翠賓
ちる花に水寒氣也あらし山　、夏口
酒樽のにほひ乾て花ぐもり　洛 春坡
川水の乏しくておかし花ごゝろ　イケダ 稲丸
風がちに日和かたまる花の雲　蜂友
雨の日をありたけ花の咲にけり　春紫
はつ花の風あるあした咲にけり　瑞馬
こがね生ふる山かさなりて櫻かな　檮室
冬至より繰ためし日や糸櫻　奇淵
我も春の人となりけりはつ櫻　イセ 丘高
馬士醉ふてあぶなき水の櫻かな　タンバ 弘三
さくら狩乞食のねぶるところ迄　、似月
川隈に春は盡たりちり櫻　タンゴ 烏雪
ちれやちれ〳〵ば散ほど櫻哉　富林 浪連
有明は櫻やしなふ氣色かな　フシミ 芦丸
寐過して雉の出てゆく櫻かな　洛 丈左

にほひなき花ながれけりくれの春　、驢丹
あふみから蝶もどり皃春の暮　雨萊
行春のとめどころなき日和かな　兵ゴ 嘯月
菜の花の白きを見れば春くれぬ　イケダ 李杏
行春としるやよし野を出しより　イタミ 東瓦

遲來混雜

なゝくさのあだに咲ふる二月哉　河陽三日市連 鯉水
あれるほど荒て二月の日より哉　風器
雨の後茶の花ひかる月夜かな　鯉石
うす雲の花ある限り動けり　鯉卜
京の蚊に喰れ初たる彌生かな　翁雄

花あるかぎり風狂を盡して

行春に捨る反古はなかりけり　黄花庵

剞劂 村上求古堂

新かはづ合

奇淵編

（新かはづ合）

叙

語云。子絶四。毋意。毋必。毋固。毋我。蓋聖人雖大乎。以虚爲主。而所以不認實也。　本朝。輓近有俳諧者流。其源出於和歌焉。今人頗以芭蕉翁爲宗。其所道。亦以虚爲主。而不苟認實也。今浪華有不二老人。卽翁之流亞也。所謂游於向上之一路者也。其徒有奇淵氏號七杉堂。嘗輯錄古今稱蛙鳴俳句若干章。加之以自他之判詞。乃將附剞劂以公世焉。一日袖此稿來。求序於予。予卒業曰。昔南齊孔珪。風韻淸疎。好文詠。門庭之内。艸萊不剪。中有蛙鳴。居常愛之。語人曰。我以此當兩部鼓吹。王晏嘗鳴鼓吹候之。聞羣蛙鳴曰。此殊聒人耳。珪曰。我聽鼓吹。殆不及此。晏有慚色云。可謂孔珪能愛蛙鳴人也。　本朝嘗有桑門能因者。好和歌。毎藏于蛙榧於囊底云。此豈愛于榧乎。愛蛙鳴之極。蓋至于此爾。乃今有此撰也。慕芭蕉翁之古。而以虚爲主。不敢認實也。雖亦與孔珪能因異所爲乎。於其愛蛙鳴也一趣致而已矣。可謂好古以遊向上之一路者也。予亦有好古之僻。因以嘉其志。而爲之序。
寬政十二年。龍集庚申。夏六月望日。讃岐散人。居然。
題於浪速上街僑居。

可般圖安婆瀬之序

貞享の頃、古翁が正風のしるべとせしふる池の一句を卷の初とし、蛙合てふ事を選び、素堂・其角・仙化の人々に判させられしは、深川の庵にありし時なり。さるをものかはり星うつるといへども、人皆これをもてはやせるは、後の亂れをすてゝ、百とせのあがれる世のふりをたふとめる故なりけらし。こゝに七杉庵のあるじ、其古池の跡を深くしたへるあまり、おなじ流れに遊ぶおのれらがともがらをもさそひツヽ、とし頃ひめ置し蛙の句の、しらほしのもの迄を囊よりとふでゝ、彼むかしにまねび、左にみぎりに分ち、打つがひたり。さりとて西上人のみづからの歌をあはせて、俊成・定家の兩卿に判を乞れしとはや

うかはりて、今のもむかしのもあれば、おのづから時代不同のためしにはなりぬとこそ見へたれ。扨うち合す聲の、玉川にすむもの、荒小田に鳴ものをし、衆議のけぢめをしらんと、諸好士に判詞を乞ぬ。されどそれも甲乙の勝負をさだむとにもあらざるは、己〳〵が百の唇を練りしかの禪意の吟魂にして、あるは濁し或はすませるなま〳〵の聞悟りのひがめるごときも、皆池水の淨きをあみて藻がくれにさしのぞき、ころ〳〵とまろび出せるうたかたのあはれ〳〵也ければなりけり。抑おのれひとり是をおして、かの一機頓に發して諸有を空す大雅の松風にも此聲なしなど、この篇のことわりをいはむとするも、又おこがましき也。

庚申の暮春蜂友

竹瓦樓の竹窓の

もとにしるす　詩韻情緒　竹瓦樓蜂友

古池や蛙飛こむ水の音　芭蕉

雨の蛙聲高になるも哀なり　素堂

とりつかぬ心でうかぶ蛙かな　丈草

炙かして蛙なく江の星の數　其角

よしなしやさでの芥とゆく蛙　嵐雪

いくすべり骨折岸のかはづ哉　去來

玉川や蛙ながるゝうまの沓　言水

何のやくにたゝでつらるゝ蛙かな　來山

草の灯もみえて
鳥羽田の
かはづ哉　不二

風落て山
あざやかに啼蛙　大江丸

あかつきの雲さく
眞野ゝ蛙哉　丁江

ふと聞てふと
なつかしき
かはづ哉　夏江

もろ聲に
おのれわからぬ
蛙かな　氷几

鳴そめて
一夜寐さゝぬ
かはづ哉　柏後

おもふこと
なしとも見ゆる
蛙かな　井眉

一日の春を
雨ふる
蛙哉　雪濤

廣澤を
我ものがほの
かはづ哉　都女

一番

左 勝

玄賓の心しらずやなくかはづ　野水

右

歌よみとうまれはつかぬ蛙かな　雨菜

此僧都は道心堅固のひじりにて、いともかしこき勅にだにもしたがはず、とつ國は水草清しことしげき君が都はすますまされる、と詠じて晦二跡潤一雲二凝二思練一若二、ひとへに名利をいとひ給へるに、世上の僧侶のあゝまでに官位を貪り、塵俗に媚へつらへるや、さながら小田にむらがるかはづのごとくなりと諷諫せるにや、意味幽遠なり。

こなたは古今の序に、花に鳴鶯水にすむ蛙の聲をきけば、いきとしいけるものいづれか哥をよまざりける、と書けるにもとづきて、もとより田野に生れぬるはさる心はなけれども、たゞ一ぺんに蛙のうへをいひたるのみ。いさゝか作者の自己を卑下したるにや、ともあれかくれて聞べき深意もあらざるか。よて山田守僧都の勝とす。

不二菴判

振れば江にうつる火縄や鳴蛙　尺艾

なく蛙寐られぬほどにしづかなり　左逸

短檠の花さく時やなく蛙　梅後

二番

左 勝

たちよれば水になりたる蛙かな　蘭里

右

藻にうきつ沈みつ雨に啼かはづ　麥士

左、清水流るゝ柳陰の蛙、人音に驚きて沈たるを、水になりたるといへる一作、ちからあり。

右、藻に雨に浮沈の變相をつくせり。されど此場は千眼一到の蛙なるべし。

右　長月菴判

三番

左 持

もちつとになつて流るゝかはづ哉　麻父

右

こゝろして行とや道になく蛙　蕉里

最少とになつてとは、さばかりの大河など渡れるにそのちからたらでやながるゝならむ。これまたく世上の諷諫なるべし。右句も我によりかれをおしはかりて、ほのかに惻隱のこゝろあはれにきこゆ。いづれ持とや申べからむ歟。

桃　處

蛙聞て椿うるさうなりにけり　升六

すゐのこの夜を蛙の鳴かさね　一峰

尻かしらわからで沈むかはづ哉　隺雄

蛙啼て春の心をふるびさす　魚眼

四番

左

曉をむつかしさうになく蛙　越人

右

鳴蛙聲のうちより月のぼる　亨

瑞馬曰、車につめるばかりの方丈、苔に鎖せる扉鎖しもやらず、眠りに飽て起出たる圓窓のもと、盥漱にものうく、唯空行雲に宿もとめてんと打ずして、あさけには何煮るともみえず、田づらの聲の閑情をさそふに、万乘の位も叢履のごとし。

同じさまなる庵なれども、折にふれて友どちの、高き山、流るゝ水を互にしらべかひて、巍々たるを批し洋々たるを議して、さゝかきならしつゝ聖を樂んで、みき酌かはせる、山の端に閑々として、風のまに〳〵興趣のひかりを添　半弦を斷交りにこそ。

五番

左　持

一思案出來てとび込かはづ哉　鶏山

右

ひるしばし聲のとぎるゝ蛙かな　李杏

左は分別にわたり、右は無分別をあつかふ。賢愚のさかひ、案情いづれにかあらむ。優劣たゞ觀む人にあるべし。

黄華菴判

六番

左

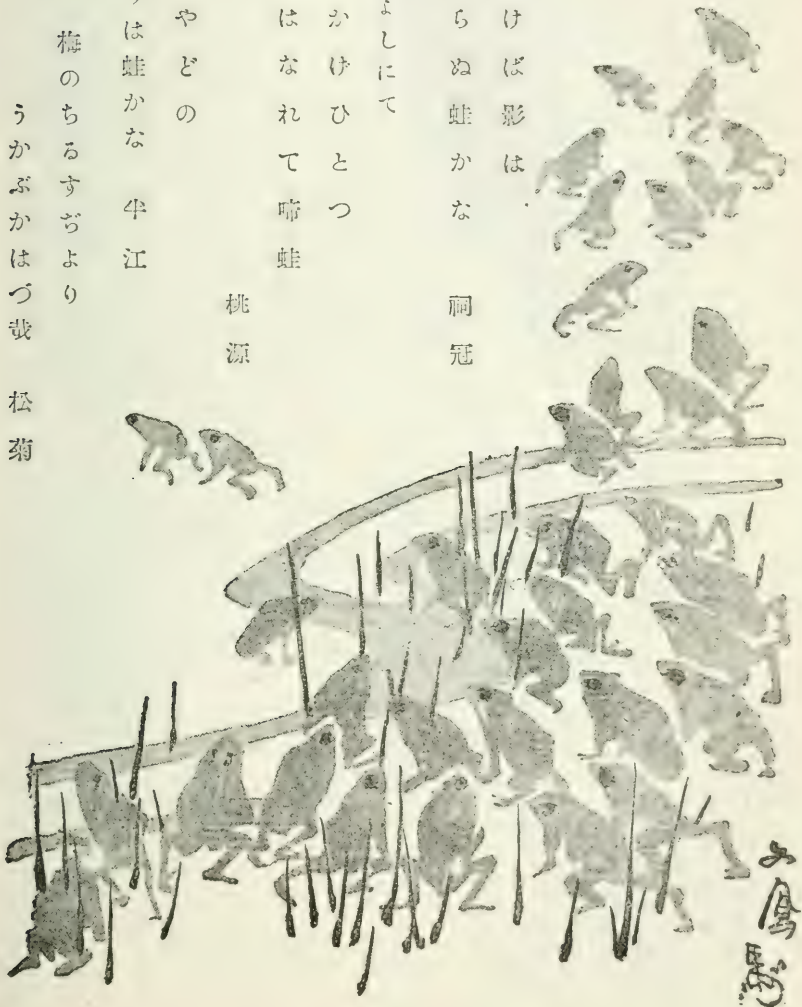
連歌してもどる夜鳥羽の蛙哉　蕪村

右　勝

北嵯峨へ一すぢみちやなく蛙　鹿楓

佛家にいふ南無とは、みな身なくにてふばかりの無我の教とぞ。なき我をあると思ふを、北なしとも又さがなしともいへりとかや。名聞利欲に迷ひて一すぢにあしき道に入とを歎くならむ。左、連哥の席に終日つらなり、案じ煩ひもどる夜、鳥羽田の蛙の哥よむと聞ば、門がつたなきも恥ぬらむ。夜といふに深き意味の聞ゆれど、右、同じ流れに淵の名を得たるならむか。

綏鶴判

井のぞけば影は
うつらぬ蛙かな　祠冠
住よしにて
松のかげひとつ
はなれて啼蛙　桃源
楊名のやどの
ぐるりは蛙かな　牛江
梅のちるすゞより
うかぶかはづ哉　松菊

嶋原を中にして啼蛙哉　竹雄

蛙ひとつ飛うつるまでを　見て過る　花洲

柿つぼ

かはづ鳴夕〳〵ぞ月戀し　自樂

飛乘て蛙啼なり捨小舟　魯隱

旅の夜をとりまいてなく　蛙哉　長齊

みやこのたより

まち川やしづけき闇を　啼蛙　驢丹

朝月に

腸あらふかはづかな　管鳥

七番

左 持

ゆく水に足手をのばす蛙かな　芦本

右

溜池の月鳴こぼすかはづかな　遲春

彌生の空のどかなる水面に、足手をのばすかはづ見るやうに侍る。右、雨後の蛙のかまびすく、月しろまち出がほに、池のさゞ波ゆりこぼせるさま、またおかし。左は晝の蛙の姿をつくし、右は夜の蛙のけしきを調ふ。甲乙いづれにあらむや。　桐蓬宇

八番

左

蜂呑んで已となやむかはづ哉　和賤

右

蛙啼佛足石のくぼたまり　自積

左、雨さなる雲を見る／＼山越て心からこそ身はぬれにけれ、さよみし心ならむ。右、いにしへのきふくた丸が片はかまその御裳をやわれぞ縫けむ、よき佛緣もさめたるさいはむ。　杉堂評

九番

左

暮るかとうつむく船にかはづ哉　希因

右 勝

まじ／＼と雨にうたるゝ蛙かな　蜂友

御階のひだりみぎりに並ゐる上達部の、あけにむらさきにみやびをつくせるに似たれど、うつむくものおもひあらむよりは、ことなきおもゝちこそよかめれ。　五十槻園門人　漫々

木枕の夜頃になりぬ啼かはづ　蓼太

蛙肥て芹ふしだちぬ日なた水　曉臺

ならびゐて鍬にからるな田の蛙　闌更

田の蛙足ぬるゝほどの水に啼　大魯

桐油くさき駕に蛙を聞夜かな　几董

垣もなし蛙むら啼奥の家　若翁

さき／＼の闇をまかせる蛙かな　漫々

濁江の草に舌うつかはづかな　春紫

昏のかはく間もなきかはづ哉　仁輔

夕ぐれの垣ねをくゞる蛙かな　葛年

拾番

左

日に飛んで月に鳴出す蛙かな　玉峨

右 勝

朧夜としらで田毎のかはづ哉　柳化

左、晝夜の姿情をつくし、右、春暖の時候をはづさす、ともに月に鳴蛙ながら、田毎といへるに聲まさりて聞ゆ。

絮香漫評

十一番

左

鳴たちて入相きかぬかはづ哉　落梧

右 勝

啼蛙水のけぶりをふまえ鳬　来耜

相ともに鳴さかりたる蛙の姿情を得たれば、左もあしざまに沙汰申されど、右、ふまえものに理屈をいはず、鳴ときは啼、飛ときはとびなむ、二念なきなれが本情を感じて以て左に勝りしといふ。

雲根舎

十二番

左 贏

夕やみの唐網にいるかはづ哉　一井

右 輸

麥ふますあたりよしなき蛙かな　綏鴛

田家蛙雖レ非レ無ニ旨趣一、未レ及下網裡蛙新奇有中幽味上。是以左句爲レ優。網蛙也田蛙也、莫レ嗤ニ余井蛙見一幸甚。

嘉會室、亭評

十三番

左

ふと飛むで後に居直る蛙かな　松下

右 勝

月影の丸太をすべるかはづ哉　蓬宇

居なほる蛙のまじめなる顔つきまで、ありありと見ゆるは、まさに詩中の畫ならむか。右、もふけ得て幽艷なるに、俳諧の手だれといふべし。抑左、言外のおかしみ愛しつべしといへども、丸太の危きに遊べるをもてまされるとすべし。

巖耕舎

芹水撰

かづらきのにし
ほつしりと蛙閑居る雨夜哉　八千里
まつ風の中よりくれて啼蛙　市六
松風にさはるほど啼蛙　叢巴龍
遠近に雲のおこりてなく蛙　好山

おなじくひがし

夜はしづかなり

井手の蛙の聲きかむ　松翠

閑寂な習ふ折からに

分別もなしに浮たる蛙哉　孤周

蛙鳴てちら〳〵水の月寒し　松匡

古池や星の影見て飛蛙　詳樂

さのゝわたり

池の鴨ひき初てより蛙かな　和山

朝やけの雲やうつりて啼蛙　其杉

くづれ井に世間しらでや鳴蛙　逸民

陽炎に押出されし蛙かな　馬阜

初蛙古今講ずるその夜より　涒花

いこまのふもと

片足は藻をふみぬいてなく蛙　四端

夜あらしに身をかゞめたる蛙哉　莆笛

朝影の樋棚にせまき蛙哉　有秀

降出して一時うなる蛙かな　燕禮

ぬか星の水くむ宵や啼蛙　一芳

身をせめてなくや水田のもろかはづ　洞雫

月影のうごき出しけり啼蛙　花養

野あらしの柱とりまく蛙かな　江松

なくかはづ四五寸へりし池の水　悟笑

田へおとす水に添たる蛙哉　吉並

月代に居直る畦の蛙かな　時習

浮草の上に妻よぶ蛙かな　駒峰

窓の灯の田に廣がりて啼蛙　楚山

なくかはず青きをふむもあはれなり　止陶

十四番

左　勝

傘張のはり合になる蛙かな　貞佐

右

鼎を水に見て啼かはづ哉　桃處

右の句たけ高きやうにて、水面の鼎を見て鳴といへるを、いさゝか見出たる所ありと聞え侍るを、かさ張のはり合になるといへるは、おかしき一ふしありて、しかも余情あまり聞へ侍れば勝と申べからむ。

洗花園
可董評

十五番

左　持

乞食にもものくれてきく蛙かな　六花

右

蛙啼竹の細道うそくらし　宅來

さすがにきゝすごしがたき鳥羽田の蛙、いにしへ人もいまの人もあはれなきゝ得し作意、左なまされるともおぼえず、右はおさるともきこえず。

長齋

十六番

左　持

朝づく日脊中の光るかはづ哉　乙州

右

野ゝ末は月も照なりなく蛙　瑞馬

左の朝づく日は、夕づく日とおなじく、月日のひかりたいへるといふ一説も侍るを、わがてかがあぶらぎりたる光りにいひなせる、尤おかし。蛙の鳴出たる姿はおほくいひ古したるに、鳴やみたる顔つき見るがごとく、西上人のうれしがほもおもひ出らる。右は、春甸一千里のはるかなる末に月も照るといひて、蛙なくあたりの朦朧たるなきかせたり。照もせずくもりもはてぬといふふることさ、おのづからひゞきて作意遠からず。よき持にや沙汰し侍らむ。

成美判

たち去れば松の月夜や鳴かはづ　蒼虬

蛙なく門田の水もあれにけり　斗入

摺ばちに似た家に寐て啼蛙　成美

あかつきにかゝり〳〵てなく蛙　椿堂

蛙ゆく水底までも見ゆるかな　士朗

十七番

左

橋わたる人にしづまる蛙かな　京菟

右

夕ぐれをわするゝ比や鳴かはづ　芹水

一　蛙合の判者に御かぞへくだされ候段、めいぼく有げにてかたじけなく候。さりながら今十二年の修行みて不申うちは、判談いづかたへもづらりつゝと御断申上候下略

大江丸

十八番

左持

鳴口へ花のちりこむかはづかな　柳居

右

つらをうつ嵐のかはづ啼そゝる　可董

むかし芦屋の里に妻どひしけんみやび男のあらそひにひとしからむ。

左はちぬをとこ

みぎりはうなひ男

墓のうへの木の枝なびけりと聞ど、今はたゞ持とすべきか。

菁笛判

十九番

左

菜の花を身うちにつけて鳴蛙　李由

右勝

蛙啼野はくもりゆく月夜かな　絮香

菜花を身うちにつけし蛙、いはゞ濃躰なるべし。右、小田の蛙のもろ聲に鳴たちて、南下りにくもり行春の夜のありさま、行雲躰ともいふべしや。右のかたおのづから情のつよければこれに心をとゞむ。

来耜

廿番

左

結構な日を鳴くらすかはづ哉　乙由

右

降つのる雨の中なる鳴かはづ　奇淵

左右脩衛之政也。

楞道人

散はなを見て泪ぐむ蛙かな　大阜
蛙なく夜河や馬にひかれきて　羅城
渭へ手をうちかけて啼かはづ　岳輅
蛙鳴て松はたのしく成にけり　素檗
さびしさは人にこそよれ啼蛙　蕉雨
水うらゝ蛙のこゝろも見ゆるかな　卓池
田の蛙鳴ばうごくか峰の松　樗堂
陽炎や眼さまして出る田の蛙　玉屑
向ひあひて大きな蛙鳴にけり　一草
廣澤に蛙の聲のあまりけり　文雅
萍のうく朝夕を啼かはづ　月居

柿つぼにて月居・長齋・烏隱・白樂・樗亭などあつまりて、分題蛙辭を得たり。

わなみ祖とあふげる古池の音を天下に響かせしより、此道の風韻いやましぬ。さは拙きすさみに春におへる事をせざれども、仙人の名によばれ、帋に乾物を貯へざれども、羅谷の譽れをむさぼる。其聲をもて琴・三絃・尺八にもかへる耳にあやからんと、瀧の水をさがしありかんよりは、おのが跡に國ぶりみせる、住の江の岸におふなる草をむしりて浮世の塵をわすれ、半日の隙盜人となりなば、花のあした・月のゆふべ、かの水音のぢやふりなる味ひを聞得むこそ、ねがふべきことなりけらし。

瑞馬

つま鳥の寐ぬかほろ〳〵春の月　大坂 八千
月にふく山風かけて明やすし　友國
うめ折て盜人いぬるにほひ哉　百堂
足音に魚は浮けり椶櫚の花　巴洞
短夜やわきて小家のひがし向　巢雨
眠たさの午時も過けり扇折　銀獅
ほとゝぎす淀一口またゝく間　桃夭
四月山夜あけるきはもなかり梟　学舟
入梅しらす石のしめりや蝸牛　石水

箕面の山ふみして

千年を經れども瀧の音涼し　芦角
日のさすかたの松にはつ蟬　奇淵
菅笠の女づらりとならびゐて　麥士
末略

うぐひすに心のゆるむあした哉　松眞
花とよむ梅の古道もどりけり　青雅
翌おもふ人になみせそはつ櫻　初丸
花木瓜に袂かけけり女の童　素孔
はるの雨はれて行衞や吉野山　如稻

上巳

鷰のやどかへて啼三日かな　雪人

心ある鳥の高音か初ざくら　奇淵
春の寒さをたてこめし家　楚山
くれ遲く棧留機のわくくりて　蓬宇
嫗と見れば男なりけり　背笛
有明の西のかぎりにふみ迷ひ　来杞
きりみだしたるしでかけの花　淵
初烋に人の井戸堀差圖して　山
年が年中風邪こゝちなり　宇
山國は火のなくにも雨氣づく　笛
胡桃の臼の挽木重たき　杞
おもふこと額の髮のむすぼるゝ　淵
くれ〳〵にくしかはかふの聲　山
月影のうすらぐ方に蟬鳴て　宇
古葉こぼるゝ大寺のまつ　笛
御侍みかさとまうす花ぐもり　杞
我は寄居虫の家とてもなし　淵
晴明の節にかゝりし須磨明石　山
見る間に消る一片の雲　宇

夕ざくらあすの命も大事なり　京　花城
さみだれやくるゝけしきは松の上　馬印

下つゆと見れば咲たり苔の花　其成
春の水春のさゞ波いづこまで　江戸 完來
笋や塌て置間も夜のつゆ　午心
花しろくまことに梅の月夜哉　素外
やぶ入の妹が脊過ぬさし柳　大和 吐雲
つばくらや鬼灯をふくやうに鳴　河内 りん女 十才
幾度も春は來にけり宿の梅　和泉 石兮
わか葉もる月うすぐらきちみ地哉　攝津 東瓦
なれも來ておもふほどなけ閑居鳥　其鳳
梅匂ふ太平鳥や孔雀茶や　雲卿
けしきある小雨の中や蜆うり　瓜坊
松風に追れて出る鵜舟哉　稻丸
記行に寺とばかりやゆふ櫻　五鳳
なの花や同じ一田の向ふ高　南湖
夕ぐれやわれと牡丹の影ばかり　四角

草吹てわか葉にもどる嵐かな　架香
　夏至あとさきの遲き夕ぐれ　寄淵
馬牛の脊うつ蘖のふしとりて　宅來
　杭から杭へ繩をひくなり　南湖
朝の月脇坂どのゝ持やしき　四角
　鳥あつまる空のひやゝか　文雅
篁の露は雨ほどそぼちけり　淵
　爐の間日は碁盤かゝゆる　香
きら〳〵とくろき袷の油垢　湖
　ものやおもふと酒をくれたり　來
内外に戀の心をはかられて　雅
　ことしといふもう十日なり　角
月しろく氷とぢ行水のすぢ　香
　戸はたてながら鍛冶の灯火　淵
いか〳〵と艾の匂ふきさらぎに　來
　九條あたりは咲そむる花　湖
さる引の猿に蓬をむしらせて　角
　御庭神樂のさゝら尋ぬる　雅

嶺ら見えて雉子鳴ふもとかな　士川
賤の女のいやしからざる田植哉　布引
庭の雨ふるもはるゝも若葉より　仙舟
入月の影卯の花にのこりけり　イガ 未塵
うぐひすや旅に居眠る朝の窻　イセ 淇舟
ちれば咲並木の花の日數哉　東河
船の醉ついさめにけりほとゝぎす　三河 茶筵
それ〳〵の緣あり韮に糂粏味噌　木朶
初花のけしきはたえず梅の花　甲斐 可都里
寒山が箒にかけなふきの臺　近江 重厚
きさらぎのあらしは地をも吹ざりし　祐昌
三日月の膝にかたぶく團かな　干當
ゆく水に影置て見る扇かな　騏道
朝風やたゞいま咲しかきつばた　陸奥 恒丸
白魚や老て契らむものはこれ　出羽 五明
かけてある弓は恐ろし雉子の聲　越中 壺仙
都邊の假居や花の主たち　、
たのしみや大かたつほむ軒の梅　播磨 布舟

春風や伊吹見よとて起さるゝ　蝸國
水鷄聞夜頃はおかし竹の庵　長門 花体
ちらほらと水草みえてなく水雞　萬井

深川旧跡にて

玉まくはいつの野分のばせをぞや　伊丹 菊潭
ほとゝぎす西行谷の朝ぐもり　三河 粡茂

秋蛙

わきてきけなかに夜寒を啼蛙　在坂 居然

松風の家ゆきぬける四月かな
　夏の氣しきのすだれ三枚
さら〳〵と竹の著木やならすらむ
　鳩も烏もみな人の中
殿様の馬にめしたる十五日
　草におちつく有明の影　余略

馬淵友湧

草合　嗣出

蕉門書林
京三條通寺同西ゑ入
菊舎太兵衛梓

俳諧新深川

升六撰

新深川集

夏五歌僊　第一

小菴におほきなる梅の木を移し植たるに、槖駝が徒、したゝか刈こみにたれば

ちるさくも庵相應の梅の花

こ申たるに、さすが若葉のめでたく、見かはすばかりしげり〳〵て、今はにくきけはひになむ。

梅が枝もきよん〳〵伸て夏の月　升六
つゆの着ものゝ何もかも入　已明
寐油に下タ火しかけてはかるらむ　昨非
だめの日雇の穴堀に來て　長江
きさらぎの末から雛に成初る　明
薺の花の時なしに咲　六
ウ　ひとからげ雑箸捨る春風に　江
寄てかゝつて美濃紙をつぐ　非
椶の木の人もなげなる茂りやう　六
馬のゆく時蚊帳かくしやる　明
もの怖(オヂ)は女の常と聞流し　非
引さくばかりわれる山板　江
名月になれどことしの此あつさ　明
角切る鹿をつける帳面　六
はしたなう構はぬ秋を鳴からす　江
うつかりとして唐がらしかむ　非
節句迄はいつかな持ぬくれの花　六
急にぬくみの見える水筋　明
二　飯(イ)沼(ヌマ)の入院究まる彌生盡　非
疊ほしくて夜から働く　江
しぐれ來て果の二十日を降つぶし　明
近ごろふへる孟宗の藪　六
大壷のひゞきにかつら入させる　江
焚火にくべて反古に紛らし　非
日外の舟の狹さをわらはれて　六
いばらの花は何處にでも有　明

鳥の毛のはらり／＼とちる榎　非
　年中おなじ水は呑ざる　江
月の夜の嬉しくならぬ宵歩行　明
　小くら祭の兒を呼たて　六
ウ
ひや／＼とも移りする柿のてり　江
　何やら雲のさわぐ汐時　非
隔番に鍵を預かる焔硝藏　六
　味噌の次手にみそ搗て來る　明
おさまつて世間が居らぬ花ぐもり　非
　財布の口の春はしまらぬ　江

右　松花社

其二

夏のはじめ、やまとの御所にありて、ひと日滿願寺山に登る。不用意に出ぬれば、小笠もなくて暑かりけるに

山に來れば空から夏と成にけり　方珠

つかむ程出る午時の蠓　升六
　蒸ものゝ行器に小笹折かけて　鎌石
春の火鉢のどこも火過る　一陽
萬歳の横に成たる宿の月　東后
　鯡(ニシン)のとれる二度の辰どし　珠
ウ
大勢を自由にまはす鼻ぐすり　六
　炭でふさげる西の空家　石
しら雪の降しづめたる世間哉　陽
　石膏もると人が怖がる　后
いひかけて脇へすべらすみそか事　珠
　星に貸うと小袖そろへて　六
秋桃のひゐわり赤きくれの月　石
　雁の聲から垂口(タレクチ)があく　陽
人の部の十五になるも最う五年　后
　うら／＼つもる陣笠の埃　珠
飯蛸のかしらも花にならぶらん　六
　呵られもせぬ春の寢不足　石
二
ぬれ紙を年中たゝく役をして　陽

隣の藍にあやかりがつく　后
大切なものは隨求の守りなり　珠
こゝろの錠をおろす短夜　六
人しらぬ戀のまことはあやめ草　石
雲のひくさに鐘のとぎれる　陽
きら土のしろき小山にもと入て　后
めでたき時も並ぶ同行　珠
張ほての捨て置れぬ冬になり　六
いくら隙でも隙は苦にせぬ　石
鷹樣の築地はづれの月夜さし　陽
雛が來うとてひゝやりとする　后
ウ
錢瘡のぐるりをたゝく秋の風　珠
深切づくでうける水はき　六
津の町は萬事を神に打もたれ　石
ほしがる雨の來かゝつてやむ　陽
硝子の花を凉しく吹あけて　后
藤（フヂ）の瘤から蟬の生るゝ　執筆

右　江南社

其三

梅鳥

四月の節よりはやき牡丹哉　梅鳥
火時の酒を利ぬ日もなし　二中
世に出る人の素性の有明や　升六
鉄屑（カナクソ）はこぶ秋の山口　巴龍
木啄の不斷來てゐる藪木にて　中
親類奉行括りつけられ　鳥
ひと壺は胡瓜の水ものけて置　竜
月の五日は筆をとらぬ日　六
ひかへめにものいふ爲のかね付て　鳥
鷄卵わるのも傳授もの也　中
瑜伽へも廻すつもりの霜の船　六
かれねば枯すわれもかう咲　竜
左りからちつくり窪む宵の月　中
金柑賣し引出しの錢　鳥
武家方の住居かはりの秋は來て　竜
眼尻さがりの横向もせぬ　六

金洗ふ大牟切にうつる花　烏
町中ふれる春の魚市　中
三月は彼是旅に人引る　六
朔日まへの株のあらため　竜
入もせぬ鍵のひとつも捨られず　中
娘の分は膳所へ借るゝ　烏
御秡が降とほさ〳〵いひ出し　竜
氷室の口をひらく朝風　六
青すゝき若い奴らに損をして　烏
戀もふるびる行燈の煤　中
蠣売の水にいてつくはつか月　六
おろすとすぐによごす革足袋　竜
ちさくても逮夜坊での檀那もち　中
有氣に入とて羊飼れし　烏
午過の花毛氈を大事がり　竜
鞠が聞えて堂上へ召す　六
青天の西から風のかほるなり　烏
水をひと桶朝皃にうつ　中

二

むつまじう他人ばかりが寄合て　六
眉毛の埃を烏に啼るゝ　竜

右　長綠社

其四

夜來

朝の蚊帳おもしろがつてふるひけり　楚堂
いくかも去なぬ客のさみだれ　二征
椵ひの木山は番木の口とめて　卄六
西は對馬の果に入る月　仙路
來る鳥は來ねどことしの秋仕廻　來
贅のうたれぬ菊を作りし　堂

ウ

うつくしき瀬戸の小茶碗十ならべ　征
袖のあぶらを皆がとがめる　六
煤とりの夜には男の眞似もして　路
正月ものゝしろき市中　來
茶戻りのいふ事わらふ山がらす　堂
いつも襁褓のぬれる暮がた　征
直の出來ぬ双盤たゝく壁どなり

あとのへるほど夕立が降　六
三尺の陰に日雇の膝抱て　路
戸の建られぬ世界成けり　來
賀次手に勝負分やる月と花　堂
つごもり切の宗旨印形　碇
海苔の香に足半草履はき通し　六

二

猫のやけどに無二膏を張　路
宿替をするも時〻はやりもの　來
蘭のよくなる祕密聞出す　堂
雷をやめに寄たるたのみ寺　碇
印部の煙たゝぬ日もなし　六
ほとゝぎす啼度〻に火を打て　路
眞菰刈のはどこもいつ時　來
注文の番からかさをせり歩行　堂
死ふといひし詞わすれぬ　碇
待ゆびを折らぬ間に出る三日の月　六
氣の毒な程擂盤を借る　路
放生會まへに成たる鵜飼町　來

挑灯の火をうつす挑灯　堂
取際の大盃が出たりけり　碇
さら〳〵と行淺川の水　六
咲うとて一端さむき華の空　路
盃の紙の塵を見て置　執筆

右　青龍社

其五

夏の山露も輕みはなかり皃　白涯
蔓にふさがる夕皃の月　遲柳
祝義日の祝義ばかりに爪とりて　春哉
岩國十丸ほどくはつ秋　二有
箕ほどな窪みも汐の滿る時　升六
黒く見ゆるは菱喰の城　涯
かしこまる御犬の脊を撫さすり　柳
風呂のわく間を時雨しに皃　哉
薄色に日は暮しまふ枇杷の花　有
去う〳〵といへばいなさぬ　六

出次第に嘘でまるめし京の事　涯
　年恰好も揃ふ峯入　柳
鶯のおくれ啼にも胸のすく　哉
　花も若木はすか〳〵と咲　有
深川は鱸の旬に向て來る　六
　中直に落す家の賣券　涯
とし〳〵に壹歩三きれの月見して　柳
　蛸のおどしもかける芋畑　哉

二

しら露を出家の役に先へ踏　魚眼
　乞食仲間が振舞をする　六
かた店にあまる碇を店に置　有
　青竹ひしぐ六月の照　柳
山の井の盞とる女なかりけり　涯
　口利ものは雪踏引ずり　眼
緣切ればふたり長者が出來る也　哉
　涙がすぐに虫の音になる　有
うら浪や弓張月の横に入　六
　濡たる稻を懸わたしたり　涯
北面の家に瓦はのせられず　柳
　けづり鰹をたつぷりと置　哉
此筋は半分懸る橋の割　眼
　人の頼まぬ寒垢離をかく　六
いつからか絶て沙汰なきはうき星　有
　春に向ふてさびる鎌の刄　柳
小文庫をひらき初たる花の莟　涯
　執持がてら茶盛にも出る　眼

右　桂石社

附錄

文月や人の哭たる女郎華　升六
　月の出ごろを竹緣の露　比良
はつ鷹のほろ毛を亂す風起て　升岳
　九ツ像の梟つまみあけ　六
うす霞もらひ休みを觸て來る　良
　柳に成てしまふ柴漬　岳
夕暮に海雲の小桶踏かぶり　六

戀のせつぱに間に合をいふ　良
むら時雨佞物わたす判取て　岳
　赤鶏頭のさむき赤はげ　六
有明に西の大寺見て通り　良
　野分がやめば木兎が啼　岳
あつめても集りかねる麴蓋　六
　何處もまつりの煤掃をする　良
猶に黑みをつける雲の峰　岳
　程ヶ谷からは馬も近づき　六
花最中不時に腹へるさゝら浪　良
　赤玉こねる蝶ゝが出る　岳

二

陽炎の挨拶事につかはれて　六
　竹の根節の横にひろがる　良
壺山の燒そこなひも多いもの　岳
　負ひ死にする肩のせり箱　六
木がらしのひまに聞ゆる人の戀　岳
　肝のつぶれる鰒の書出し　良
萬力の揚り工合に日のくれて　六
　畑がしらへながすしろ水　岳
名塩まで遊行を送るむら芒　良
　秋の土用は茱萸の出さかり　六
雨風のぬけたる月のあざやかさ　岳
　よる晝つめる川奉行して　良

ウ

肉桂の口にひりつく冬がれに　六
　蒟蒻糊を鼠いやがる　岳
なゝつから何する隙もなかり鳧　良
　繻伴(註)一枚取てゆく浪　六
惣ゝが花くたびれに草臥て　岳
　薪の下から栗の芽が出る　良

捨舟のあかりに出たり神無月　千崖
　日和かたまる宿宵のこがらし　桃里
花になる垣は茶の木の雫して　崖
　畚つくるとて隙おしみする　里
はつ月は鳥の羽につく程のもの　崖
　ちる稲妻の根のありやなし　里

ウ
身にかゝる露もいとはぬ旅まくら　崖
　御輿の公の若くましますゝ　ゝ
噓して鼻毛ぬかるゝうた合　里
　ことば揃はぬ文をうたがふ　崖
かづらきの神に御苦勞かけ申　里
　若葉の月の影あまりけり　崖
おほかたの麥はうれたる雨あがり　里
　盥のもりをたゝく雜巾　ゝ
見しられて雀の宿もざまくさよ　崖
　雪の涅槃のものしづかなる　里
咲初る花に月日の早うたち　崖
　牛の子走る野邊の扁杖　里
ニ
追ゝに綿荷かせ荷の來かゝりて　崖
　内は埒なき人こみの客　里
癪持に藥あたへる夕間ぐれ　崖
　竹のあらしにくもる蚊の聲　ゝ
北嵯峨に手のひら程の家をかり　里
　櫃の鎧はかくす氣もなし　崖
六十を過て珠數くるばかり哉　里
　浪のたつ日は秋を覺ゆる　崖
君來ねば月の亥中も宵にして　里
　たはれて手折萩のうらかた　崖
分のぼる山は田もなし畑もなし　里
　鐘の音ひゞく池の上つら　ゝ
足なやむ鳥をうたずに返すらむ　崖
　會式のうちは雨も降ざる　ゝ
風呂吹に尾張の事をいひ出し　里
　大事にかける反古一折　崖
心しる友にあふたる華のかげ　里
　陽炎おもき蝶の振舞　崖

船出すと二度迄せつく時雨哉　金河
　ゆるぐ矢ぐらをしめる夕暮　升岳
老松の親にあらざる人もなし　升六
　鶯きけば耳の涼しき　春明
十五夜の月も共まゝ小豆粥　竹亭

かすみ踏こむ慈姑田の水　河
眞直に大宮通り行ぬけて　岳
乘物の手を擧て來る也　六
藥日の露うつくしき朝の空　明
砂糖にたかる丸盆の蠅　亭
ちよほくさと若衆倒しの中の院　河
人寢させうと先へ寐かける　岳
ない筈の月が四ツからにつと出る　六
折ゝ聲を合す茸番　明
隣まで來たる寒さの覗かれて　亭
細工のよさになぶる手吹革　河
入日さす愛染堂の華ざかり　岳
風ひとなだれ蜂ゝを逐ふ　六
二
胴築(ドウヅキ)のどたり〳〵と春暮て　明
無事につとめる江戸の金鼠坐　亭
吹あがる鉄漿の機嫌を鳴雀　河
去年のけふは溫泉の穴があく　岳
五月雨に埋れ果たる身分にて　六
神に任せる妹脊なりけり　明
朝〳〵や踏てかよひし小蛤　亭
躑躅さかりに兀る月影　河
前挽のあさりをためる若葉前　岳
与所の戸口に氣を付てやる　六
お八ツの御文をひらく尼ヶ崎　明
赤き雲出て屑魚(クズナ)取出す　亭
ウ
旅かせぎ半季は外を家にして　河
下駄の歯をぬく夢の兒　岳
むせくりに蛩(キス)の聲迄午にしり　六
うしほにつれてちゞむ干湯葉　明
とし頃を花と見られて居にけり　亭
ひとへざくらに紙結びおく　筆

右　白嶺社

夏部

ありがたや田植る聲をけふも聞　桂石社 春哉
宇治山や露はなくても蝸牛　女 遲柳
閑子鳥飽くまで肥て居にけり　二有
ほとゝぎす四月にうつる青葉哉　李友
苔の花もとめて斯は寂られず　白東
馬ばかり先へ戻りぬ蚊遣り時　青五社 二征
明がたの風にふくるゝ毛虫かな　楚堂
行水に人の影さす扇かな　壽麗
宿ゝの入口にある暑さ哉　仙路
聲もついて立けりほとゝぎす　二雀
黒谷は夏深くなる月夜かな　松榮
雨はれや水掃出せは夏の蝶　長流社 二中
宵ゝに聲等は來て風薫　調月
どちらみち夕暮はある日傘哉　召我
ほし梅の乾かぬ笘よ門の汐　巴龍
日ざかりはくらき夜よりも靜也　江南社 一陽

凉しさは浮巣にならふ旅寢哉　錬石
六月を先へ暮たるむしろ哉　有定
暮ぬ日の暮さうになるあやめ哉　一雀
十ばかり道の付たる淸水かな　蒼生
脊中には春が居りけり更衣　竹老
日中の日のはづれたる淸水哉　魚眼
うの花に四月も三日立にけり　和徊所 千杉
夏山や六月の來る水の音　暮來
大雨の降程もゆる火串哉　東后
鶯のかくれ家にする青葉哉　松花社 昨非
夜は松に聲がある也田植時　長江
鵜の篝鹿も出て來るあかり哉　已明
燕も子持となれば粽かな　ますほ
牡丹さく垣の隣のけしの華　舍亭
松風と成て明けり啼水鷄　漁羽
夕かげの夏をうけこむ柳かな　戸方
六月や夜の花さく垣もある　白嶺社 竹亭
夏深くなるともしらずかつほ鳥　春明

凉風や椶の木などが花になる　松古
此夏は順氣揃はずゆりの花　金河
ひとつ／＼牡丹がすみて暮にけり　升岳
形代や海に入ては海の音　金光社 流光
門〻や夏のゆふべの竹簾　和郡山 都祐
ほとゝぎす海すり切に汐の來る　京 不言
長雨のはるゝやいなや百合の花　江北社 何虹
梔の華のくもりや蟬の聲　桃白
百日紅末四五日と成にけり　巣夜
杜若にほふものなら夜の花　燈采
早松茸けしは猥に咲にけり　玉樹
凉しさや海のある處青くさし　兵庫 玄黄
すゞしさや日の入際に雨の降　備前 幽雅
梅雨晴て隣の砧聞夜かな　備後 東翠
夏の野は聲する物に濡にけり　春六
麥刈てなるほど秋の夕かな　寄居虫丸
はゝきゞの見えぬまでたく蚊遣哉　備中 素郎
あぢさゐや物にうつろふ人ごゝろ　讃岐 雅牧

引汐や夕日追へて啼水鷄　松年
青嵐よせつけもせぬ鳴戸哉　土佐 如泉
とし寄と春はいひしが更衣　安藝 玄蛙
ほとゝぎす啼や大ていひと處　敏彦
蝿うつや八疊じきをひとりして　雙虻
夜の殘る垣のあちらの杜若　周防 古梁
子供等に二日おくれて更衣　長門 羅風
青簾花ちらしたる風が吹　豐後 吐洲
大船の巣しなく入る茂り哉　凌英
凉風の草から出たり旅の人　机山
ほとゝぎす紛るゝ聲もなかり鬼　水哉
飛ぶ螢よる／＼濡ぬ草もなし　牧麥
笋や踏るゝものは草の蔓　筑前 瓢風
よき水のこゝも出る也夏木立　日向 習之
ふら／＼と寺見て歩行四月哉　陸奥 西河
夏の夜におもり付たり鵜飼人　下總 太笻
わや／＼と植て去けり田一枚　江戸 道彦
夏の夜は爰にも置ず山のうへ　加賀 眉山

幸は人にもよるやほとゝぎす　車大
撫子は露もこぼさず咲花か　甲斐 漫ゝ
夏の月芦邊をさして出にけり　信濃 何頼
月を見にふた夜出たる鵜川哉　尾張 鹿野
あけぼのゝこゝろをこめし夏花哉　伊賀 雲古
寐言いふ人に鳴去る水鶏かな　ヽ 梧鳥
散かけてとつくり咲や蓮の花　大阪 釣翁
さゝ山や涼風あまる暮の雨　和水
汗かいて直らぬ灸のかゆみ哉　吾萍
夏菊の涼しう垣も家もなし　外海尼
茶のけぶりなども朝なれ青簾　万和
翌も咲晝皃踏て御秡哉　銀獅
瓜茄子草家の夜もたらぬがち　京 十丈
人住や山かゝりなる牡丹畑　芙九
ひとつ家のあるじ戻りて雲の峰　蒼虬
へし折て筵うちかけつ夏肴　江戸 春蟻
宵月に瓜ひやしたる鵜舟哉　伊予 其梅
晝顔の戸口となりぬ礒の家　讃 仁社 宗徳

秋部

荻の雨なりとは兼て荻の聲　尾張 士朗
露はちれど匂ひはちれど菊の花　竹有
秋風や秋に成たるむら芒　近江 千影
八月の風ともしらぬ野菊哉　潛亭
夕皃はしろき花なり秋の風　可盈
杭ほどに刈こむ畑の木槿哉　乙都留
草花や牡丹には此露もなし　貫志
翌の夜も月はある也ことし酒　居城
稲妻や長の暑さの崩れ口　若狭 白茅
夕かげの三日月となる畠かな　柳肆
寒うなる芙蓉につくや山の鐘　越前 仙草
稲妻にむせて啼なり枝の鳥　壺優
朝霧や焚おろしたる飯の上　信濃 柳荘
蛤の松葉になくや秋の雨　希杖
花すゝき雨は野山の夜にかゝる　奥 青森 白珂

旅人の噦して來る花野哉　祇山

水にちる露其まゝに流れけり　江戸 梅夫

しら菊を手にとる浦の笘家哉　相模 葛三

天の川からきは人のこゝろ哉　伊勢 丘高

長き夜やなつかしきもの夏の鳥　奈良 杜園

秋されや人の出て行西の家　攝 國分 琴峯

稲づまやちるさき山は持てのく　共城

藤の實の皆うごきけり秋の風　、伊丹 比良

人の鼾聞てとし寄夜寒哉　、兵庫 一草

大寺を通りぬければ秋の風　讃岐 蘭舟

あらましに暑さもぬけて啼鶉　金井

眼に見えて秋も行也初紅葉　千子

鳫がねの渡ればわたる小鳥哉　花堂

三日月のかゝる木賊の雫かな　伊予 起竜

夜あかりや翌まで見ゆる秋の山　蘭孝

紅葉して古き木のなき夕かな　嵐角

山かげや月の照にもはつ紅葉　嚢橋

へし折て來るや夜寒の竹火箸　備後 李朝

蛼の秋を啼出す垣根かな　作州 竹詰

松風の盡る期はなしきり〴〵す　筑前 如來

更科や枴かたげて田苅行　豊後 月化

秋風や今來たやうに飛ぶ雀　葵亭

鶉より隠れやすきは西日哉　有篁

唯居ては勿躰なしや束ね稲　肥前 春漣

夜砧や浪の中にも人のさと　京 定雅

女郎花うしろ見る野と成にけり　雪雄

鶯に似たる小鳥もわたり鳬　宋也

朝顔や箸も拾らず老が宿　大阪 木僊

萩の風吹方角もなかりけり　月居

角力取の詠めて居たり勝の餅　可逸

松山や秋の踈きに小雨降　宜白

名月や常に用なき橋のうへ　三鹿

朝皃にもたれかゝりし小家哉　桃源

茸狩や西へ居直るひがし山　藤子

野がらすの聲も身にしむ墓參　松榮

稲の日のめでたく入て秋の月　奇淵

冬部

齒朶うりを夢にも見けりふた夜迄　奥仙臺　乙二
着る日より袴短く見えにけり　出羽　東野
浦人の下駄はく冬と成にけり　東雌
降ゝて音なく雪のつもり皃　有仙
さくら木によき日はさして火桶哉　山居
いかな日も落葉のうへに暮にけり　江戸　はまも
起臥や小春らしきはちつとの間　安房　杉長
洛陽の西は野原よ神無月　宗拱
里かれぬ山ざと枯ぬ釣干菜　甲斐　有斐
十月や松を見に出る草の道　越中　魚心
水鳥はこぼれ物なりせどの山　乙竹
ぬくめ鳥此あけぼのを忘るゝな　虚白
人の釣軒の葱も枯にけり　嵐丈
こがらしや茶の葉につゝむ鴨の脚　尾張　騏六
達广忌や冬の天氣も菊の花　若狹　鷺白

炭舟も着て大津の日和哉　省我
有明も殘り初たるふすまかな　鬼水
炭竈や曇りやすきは冬の空　英夫
あら海の音も夜にする火桶哉　馬來
雲にまで枯こんである野末かな　含來
山の家や綿子を通す夜半の鐘　完車
奥國は鐘つく度に朽葉かな　李紅
咲かけて夕暮になる歸花　渡千里
草木にもよらで月すむ寒の空　壽卜
三壺まで梅干持てしぐれ皃　時雨雄
くひ〳〵と付木突也冬の月　近江　仙風
短日やそろ〳〵苔む赤椿　、　烏頂
寒空をはなれて高き藪木哉　孤靜
寒月にちる物はなしさくら山　京　桃窠
夜の霜の骨まで冬はとゞき皃　河内　盞澄
家つけて茶の花畠買にけり　士龍
野ちかくや日中過る椹の音　来紀
松かげや船つなぎ置く雪の家　梅居

降もの丶外にも冬は雪の下　播磨 山來
春は見ぬ藪木成けり歸花　讃岐 桃里
寒菊にぬくもり入る雀かな　白羽
降ずともしづけき冬を山の雨　卜仁
大釜の底はぬけたり冬の松　墨山
臘八や七ッ起する鍛治(冶)が門　隨鳳
更科や冬の田毎の朝ぼらけ　萬言
三日月の土に入けり冬木立　南之
菴の夜は落葉するにも音冴る　風尙
網代木やけふも流るゝ鐘の聲　風朝
かれ芦の水に折こむ月夜哉　糸瓢
有明の皆になる迄啼ちどり　島芽
雪ふかき道はなじみの畠かな　安藝 宇柏
夜によりて替るかしらず炭の嗅　路宅
鷄が踏からしけり門の草　伊予 素亭
水仙の眼を寒がらす戸口哉　起六
旅宿や落葉せぬ木の夜の音　素橋
暮かけて御廟の紅葉散にけり　豐前 共嵐

かしこまる娘淋しや戎講　豐後 楚濤
翌もなき程に枯たよ葎草　筑前 石池
小家みな千鳥に飽て宵寐哉　肥前 吾友
寒ければ千どりは夜の物といふ　伯耆 湖水
かれ草やたぐり當たる暮の松　攝 兵庫 桐栖
聲よきはぬるゝ千鳥と思ひけり　大阪 尺艾
小野山は冬に成たぞ暮かすむ　公路
ひともじの都にも似ぬふとり哉　桃雫
いそがしき中に春ありとしの市　よし輔
かれ竹のから／＼年は暮に皃　甫水
隣からもらはぬ梨の落葉哉　帋竹
煤掃や箒ではうき掃て居る　三霞
口切やことしも踏し松のかげ　瑞馬
初しぐれ時雨ぬ門も夕かな　非眉

春部

花のやよひ一日花のなくもがな　江戸 宍來

菜の花に霞そこなふ山家哉　、成美
今少したしなくもがな菫草　一茶
紅梅に月もかしこし御鷹宿　巣兆
行燈のふり向てある若菜哉　木海
春風のたゝぬ日はなき濱邊かな　若翁
井の中も月夜となりぬ梅の花　羽最上 長翠
梅の華苔がちにて折られけり　龜年
鶯の啼や朝から不二の山　奥松前 布席
草の戸の一足踏ば芹若菜　奥仙臺 巣居
晝過や二階から見る人の梅　、森岡 三豆
はつ午の日に踏初る田みちかな　斑皃
蛙鳴て暮さだまりぬ春戸の水　松晁
山ざとの世間廣かれはつ櫻　東雅
しら梅のうへになりけり三日の月　雲臥
仰向て口をひらけば歸る鴈　平直
我菴を横向て啼蛙かな　福岡 吐屑
何事を呼かけがまし雉の聲　如扇
元日はあまりに淺し不二の山　信濃 素檗

孕鹿月に照られて隠れけり　遠江 橋夢
春の夜は素湯の甘みの付にけり　美濃 千阿
長き日や松山さして行烏　尾張 岳輅
八重櫻花に日數を埋みけり　梅閑
寐る迄の月夜成けりはつ蛙　梅葉
菜の花や伊勢と大和は春の國　黄山
どこ迄も春にしにけり雨の山　月孤
捨てあるけしきに暮る柳哉　近江 五來
見殘して山路にかゝる柳かな　千當
藏びらき鳩米喰に這入けり　故常
暮る迄黄昏のなき春邊かな　芳之
菜の花や海津は曇る青葉空　丹波 武陵
出代や一日拾ふ松の塵　京 佁李
雨二日あたら椿の腐りけり　高野 杉聽
春風もなければ寒いぞ川千鳥　播磨 玉屑
ふる寺へけふも行ふぞ梅の花　以文
鶯と相住するや籔の菴　淡路 義倉
蝶見えて氣のつく夜の山邊哉　冬柱

鶯や忘れて居れば夕啼す　阿波　慮一
ものに氣の狂ふ鳥也松むしり　伊予　樗堂
鶯やはつ音の後は又と來ず　安藝　篤老
春の戸や朝の機嫌もよき小鳥　豐後　南溟
朝きけば鐘もよきもの梅の花　筑前　一萍
元朝やきつとつゝみし膝頭　筑　玉峨
山かげの春は椿にあまりけり　後　芦月
梅の木の鳥と成たる雀かな　文角
畑がちに見ゆる二月の埜哉　肥後　對竹
うつくしき言葉の春や百千鳥　長崎　菊也
落付て降出す春の雨夜哉　田上　雀仙
三ッ四ッも靜にはなし春の鴈　攝池田　瓜坊
かすむ家は皆草の戸よ朝の里　五陽
松かげやふたつならびし春の家　李杏
めづらしき花でもなくて梅の花　大阪　竹齋
薄雲もやぶらぬ月や花の上　米彦
近付のやうに月出る梅の空　長齋
香のぬけて蔭に成たる野梅哉　孚舟

文化の時にあひて、風雅のさかんなる事上古に愧ず
わたくしの朝にはあらずけさの春　正風道場　升六

流行百家句集　近刻
文化十歌僊　全

心さい橋筋北久太郎町南へ入
大坂書林鹿葛猷可堂　塩屋忠兵衛

女百人一句

前編　鶯卿女撰

女百人一句前編序

和歌に女百人一首てふさうしあれば、はいかいにもあるべきわざなるに、いまだその聞えなきは口をしきことなりと、海棠主人、ふるき句集よりひろひ選びけるに、是をのすれば彼もすてがたく、自らもゝの數にあまりぬるを、まづその數をかぎりとして梓にちりばめんとはかれる折しも、其このかみ抱儀のぬしやつがれをうながして、其よしを此集のはしにものせん事をのぞまる。げにやみそ一もじはいふもさらなり、十あまり七もじの歌はいとたやすきやうなれども、てにをはあやまりなく、心こと葉とゝのひたるは稀なるわざにこそ。殊さらにたをやめの口よりいひ出せるますらをには劣るべきを、かく多く傳たる事めでたき世のためしなるべく、且はこの編者いにしへを好み、かしこきを妬ざるこゝろのそこいとやさしく、たをやめの敎ともなるべきわざなれば梓にちりばめ、ひろく世にしめし永く世にのこしてんは、たゞにむかし人をしのぶのみならず、人のよきは我よきにて、本より自他のへだてなき道をわかき人ゝにしらせんは、ひとりたをやめにかぎるべからずと、天保みつのとし如月のはじめ、

秋香亭去留其よしをかいつけおくりぬ。

女百人一句

万木や千草にしる花の春　朱宮 玉

啼にさへわらはゞいかにほとゝぎす　伊勢 光貞妻

筆のさや焼てまつ夜の蚊遣かな　尼 芳樹

かゞみ餅の輪やぬけ來たる犬の年　河内小野氏 見伯母

大ひならふかずとおこれ鞍馬炭　大佛住 清水氏母

花の兄や何で世上の奔走子　肥前今田住神尾氏 正利妻

朝よりやます夕べにの花のかほ　伏見住 正房妻

舟の繪あるあふぎに

船の繪の楫かきしめく扇骨　江戸住神田氏 貞宣妻

よる年はおもはずうれしあすの春　河内叉南村住 玄了妻

あらざらむ今宵のほかに月の影　堺住 保壽妻

告わたる風に鷹つくや秋の空　伏見住 蕉松女

庭に散て下﨟となるや上﨟花　和州八木氏 光淸妻

寒紅粉やくちびるひらく花の春　姫路住村松氏十二才 辻

人ゝはあらたまずさの吉書かな　山城 貞之妻

楊貴妃のえがほや花のさくらいろ　和州今井住 正盛妻

ふく風は何の科にや花あやめ　同八木氏 宗通妻

なくこゑのいふにいはれぬ筆つむし　姫路幸田氏 正全息女

わがはねの雪もやおもきにほひ鳥　名古屋 友交妻

荻は聲もしほらし伊勢の濱そだち　伊勢 是哉妻

月弓のあらてなりけり秋の月　妙圓尼

煩腦の垢をおとすや水せがき　名古屋 隱

ふる雨の色を見するやもみぢ笠　京 六蔵女

秋の夜の八千よをはなせひと夜づま　京嶋原 遊女八千世

君はいま駒かたあたりほとゝぎす　江戸吉原 遊女高尾

姫瓜をぬすむはよるのちぎりかな　よしのり妻

咲て春をしらする梅のきとくかな　泰弘妻

縫そめを賤もいはふや花の針　千里氏 心松妻

太箸や持手もたゆむ雑煮餅　松意妻

水を酒とくるゝもしらぬ花見かな　大坂 不必妹

あめつちのたからくらべや月と花　範弘妻

東山や高きいやしき御忌参　大阪 宜休母

井戸の水はとう〳〵汲そあつ氷　仝　茂宣妻

みち月のおかほのしほや空の海　大阪　伯貞妻

爪先につんつさいつや紅の花　仝　宜休妹

からをりをめせとや杉の青山椒　仝　不三母

いけし床の卓やたかき花の王　仝　宜居母

別れてやゆめかとおもふお釋迦さま　仝遊女　夕皃

丁字かとかをる扇のかなめかな　伏見長嶋氏　家

わざとひと筆をとゝむか惠方かな　さい

かほつきやあら布さらし夏ごろも　なか

佛名を唱ふる役とくちのうち　金

いたづらに過る月夜の酒宴哉　堺　遊女

うの花や風にちりしく雪の庭　小倉女

さい寺の山より月がでつちかな　大坂女

家のうちも丸く見ゆるや鏡もち　三州吉田住小野氏　愚侍妻

さりとては手の風もよき試筆哉　姫路住　ふり

あたらしき年もわが身も莭小袖　松坂　まん

戀の海はすゞりか筆の懸想文　江州住宜貸婦　なつ

目さむるほど念佛したまへ法然忌　江州　孝

香のけぶり立わかれ行ほとけかな　名古屋住　清親母

門松に我名も遊べ千代の鶴　安藝　つる

若みどり立かさなりてや老の松　廣嶋住足助氏　まん

今宵見るは果報や月のしろ鼠　尼ケ崎　まん

折ふしも移れば買つけさう文　堺　宗賢母

をしやをし折なば露のこぼれん蓮華　備中　清在妻

親よりも生れあがるやましこ鳥　安田氏　つる

あふのいて見るや雲きり月の弓　村主女

日を見ずにたつは霞のころもかな　京住　並川氏女

つもじにはよきをり紋やいせ櫻　淀樋口氏　しゆむ

草の戸の部屋住なれやをみなへし　備中　元定妻

紫のゆかりかゝりや松の藤　大坂遊女　薫

もみうらや袖の口紅花ごろも　伊勢松尾氏　新治妻

ねをきくにとやうのものや松の蝉　備前　了春妻

風の手はまゝ子つめり歟兒ざくら　伊勢 終

誰人のしめしぞ春の雪をうな　松坂 とよ

伐くべて左義長久よ松と竹　大坂 まむ

つま戀の聲から猫はとら毛かな　仝 吉

一八の花もひらける新地哉　江戸 好

うもれ木もわかやぎたつや花の春　池田 佐伯氏妻

ぬすまむとしのぶは竹のこかげかな　伏見 清右衛門妻

三ッものをかくや筆墨紙の春　木村氏 信

德利もやふればおとする霰酒　尼 址布

晝の間も花に添寐のこてふ哉　元貞妻

むらさきの上かうつくしかほよ花　大坂久勝妹 長

花のかほをそだてゝ見ばや鏡草　澁田見氏女

かめの酒祝へ蓬萊三箇日　京 良富母

子なるものに正月小袖を送るさて

きる小袖よきせいたけの筋かな　因州 玄旦母

前栽に出て

立ながら庭や五葉をかざり松　河内 正氏妻

顯致

聞しよりまさるや宇治の山ざくら　常平妻

ものがたりきくもおみやぞ伊勢櫻　伴貞女

天は父地にそだちてや兒櫻　正歳妻

愛子におくれて
ちりてうきや山ふところの兒ざくら　攝 頼重妻

姥が小唄をうたふをきゝて
みむつりと氣もわかやぐや姥櫻　仝 八才 正次女

小ざくらにつく短尺やかけ守　辛崎 秀高女

天人の羽衣かたつうすがすみ　備州 時雨母

殘る露や柳の髪のあぶら綿　河内 かん

くきらなく梢や庭の桐かしら　樋口氏 尼

朝倉はあを山椒の唐名かな　龜

なのらぬはかくれ啼かや時鳥　春元女

紅梅に染なす山のもみぢかな　生敬母 久

霜を誰鉧とは名をつけやきば　紀州 義重母

大晦日の雪
雪花は春まつけふのつかひかな　大還常夢女 六

姿見ずにつめるはいかにゆき女　京 よし

花のゑんか雪にねふしをしのび竹　河内屋妻

西風は花のかたきぞ美人草　京 政光母

車坂よりても見るや糸ざくら　京　かち

ゆふ月や尾花の波にほかけぶね　大和　光性尼

末期に
黄色なは佛とおほせをみなへし　竹田氏　善甫女

江戸にて辭世
こゝは穢土今ぞ淨土へゆき佛　陳甫女

粟の穂や身は數ならぬ女郎花　丹後栢原　すて

跋

莫愁菴鶯卿女史は、齒かはるころよりせうと小青軒の風流を見眞似聞まねて、をり／＼はをかしきくちずさびも出來たれば、九歳の秋其さえをこゝろみむと一とぢの句合を催ふして、そのよしあしを判じさするに、としはもゆかぬに最おもしろく評しき。おもふに此時既にはかせたるべききざしは顯はれたり。夫より日に月にすける心のたゆみなくて、をのこにも劣らぬかしこきにいたりぬれば、いぬる年　銅駝御殿へ執達をとげ、即座宗匠を申おろしけるに、ありがたくも公府女房の号をさへ免されける。いまだ簪もせざるにそのやさしき心ばせよりして、古く世に有ふれたる巨多の俳諧文に、あらゆるをうなの句ゝを書いだせる事凡三百余人にいたりぬ。みづからいへらく、支のしげきはわづらはしとてかたのごとき小冊となし、前中后の三篇にわかつとなむ。斯しんしちにいにしへをしたへるけなげさは、溫故知新の先言に的中して、一入殊勝におぼへぬれば、すゞろ後序に文手をとゞ、其いさほしをのべ、同志の人ゝにほのめかし侍るといふ。

七十二翁　何丸［月院］

梢磯漁者書

關清水物語

一・二　千當

關清水物語

われ年比、はい諧の道にわけいり、國〳〵のゆかしき隈〳〵をも、一たびは立越・探らまほしとおもへど、何某のいますには遠く遊ばずときゝて、このとし月を過しぬ。ある人いふ、さなん思はゞ大津の驛より、みやこ三條のあたりまでを折〳〵ゆきかひ、あるは逢坂の關などに日のなかば程づゝも休らひ、かの大納言の物ずきにならひ、往かふ人々の物語を聞とらば、おのづからゆかしきくま〳〵も見る心地せめといふに、とみに其事をおもひ立、ふところ紙・ふでの具などしたゝめてたち出侍る。比はきさらぎ關のあたりはまだ松風もすが〳〵しく、馬のすゞ音などいとさやかなりける。

たび人となれば雪ふる二月哉　干當
　雁みだれ飛いそのわか草　花陶
おなじ手に茶摘袷を染あげて　寸龍
　朝のこゝろのうつるかゞみ戸　當
あたらしき轂のならぶ月涼し　陶
　をうごに鮓のつとをかけ行　龍
川波に舟よ〳〵と呼ばれども　當
　鳩のよろこぶ米こほれたり　陶
一方は藪にもたるゝ板びさし　龍
　茶椀にしてはいかき赤樂　當
よしくれに軍の沙汰もなかりけり　陶
　遊女葬る鉦遠くなる　龍
さし足に何やら埋む松の間　當
　みゆきの注連の動く初汐　陶
小鳥は月がほしいと啼事か　龍
　うき世の花にけし植て置　當
筐山へひと重ざくらを折にやり　陶
　をくは皷のかすむかけ聲　龍

風呂焚の顏をよごしに蝶の來て　當
　あぶない井戸をまちなかに堀　陶
鳴神のいやがる神輿昇あるき　龍
　なます並べるともし火の下　當
山茶花のほろりと落る鷄の聲　陶
　清書見せに戻る七ツ子　龍
目のよさに百になる迠網をすき　當
　月夜〱にならす板琴　陶
元興寺の鐘がうなれば柳ちる　龍
　かきつばたさへ秋は一輪　當
誂の盃をかどに捨てをき　陶
　いたちとらへて哀がりける　龍
うた占もあはぬ時にはあはぬ也　當
　頭巾ながるゝかぜの加茂川　陶
したり顏に蔦のかけ行海老の売　龍、
　夕日のうつる犂の乘もの　當
この春は何がうらみで花おそき　陶
　蝶のふむ程龜の首出す　龍

一今はむかし、龍門の會に岱青ほとんど句なし。曉臺色をたゞして詮する所、させるわざにもならましう覺ゆ。岱青ははいかいやめにせらるべしやといふに、家に歸り夜もすがら五十句をつくり、東雲に暮雨が門をたゝく。句ごにみな妙ありとて、曉臺よろこび感ずる事かぎりなかりきとぞ。

元朝やくらきより人あらはるゝ　曉臺
乙鳥はみな親子かな夫婦哉　岱青
やみの夜やむつくり高き梅の花　許風
けふよりはちる花を見に歩行けり　桐五
啼ながらやみに埋まる蛙かな　魚村
しら梅やまだ降ものゝ定まらず　嵐翠
春の月竹はやさしき物にこそ　花陶
手の届くあたりに出たり松の月　鈍明
苗代に寒き竹田のゆふべ哉　河伯
黄鳥のしづかにしたる草木かな　無聖
寄つけぬ梅十分に咲にけり　金龜
鶯はどちらの枝ぞ梅の月　呉笠

春の雨どちらを見ても畑かな　素入
さる引に押るゝ佐屋の渡り哉　寸龍
盃のうへに往かふ胡蝶哉　花露
まつかぜや苔の中より啼蛙　巨盞
花の木やみなあはれなる雨の中　干當

一遠江の國にいとむづかしきやもふ人ありけり。近きあたりのくすし手を束て、せんすべなしといふ。折よくも琉球の名醫、その驛にたび寐せしを頼みにたのみて藥を乞ければ、とみにいへたり。此くすしいふやう、われ又ひとつのねがひあり。朱樹翁となんきこゆる人、爰ちかき程のよし、その短ざくをたびたまはゞ、是に過たる國のみやけやあるべきといひけるとぞ。

日の本はなべて櫻の木の間哉　士朗
わが國の鼻ばしら也不二の山　岳輅
佗しさに宿へかへれば梅の花　桂吾
笹の葉にまづふる春の小雪哉　天老
をく山や櫻につれて松葉ちる　松兒

行鴈の氣色をこぼす小笹哉　左雀
山影や何がほどけて春のかぜ　大阜
鶯の梅去て梅ながめ居る　隺人
蛙なく夜河や馬にひかれ來て　羅城
花咲て置處なきこゝろかな　大蘇
ちろ〳〵と目のくもりけり山櫻　野雀
蝶のこゝろかりて眠らば草の上　竹有
爰らかと雪のしら梅さがしけり　駬六
水に添てながるゝ春のこゝろ哉　臥央

一金谷、梅閒がもとめに應じて請す。謝するに大身の長刀をもてす。金こく嬉しがりて、

かき賃になぎなたたまふ師走哉

といひ〳〵大長刀うちかたげて出づ。梅閒うしろより、

頭巾よし辨慶に似たうしろ影

とぞいひけるとぞ。

梅の花目もあけぬ程ちる夜哉　干當
宿かれば月に枸杞つむあるじ哉　芳之

逢坂のうしつなぐ木も芽立けり　烏頂
しづかさの音梅に入覧かな　亞溪
蝶鳥のねぐら程あれ芒の芽　佳綾
塘から万歳もどる春のかぜ　古猿
爰までは波も屆かず磯若菜　蓬皐
鶯かと覗けば外の小鳥かな　馳州
一羽追へば二羽たつ雉子や麥の中　罷山
藪もたぬ家はまれなり朧月　鷲刕
蜂の巣も花の隣と成にけり　五來

一越の以南、洛にありて脚氣といふやまひ病けり。させる事にもみへねど、いづれ命にかゝる事になんあれば、見ぐるしきやう人々に見せんよりはとやおもひけん、桂川に身をしづめてむなしく成ける時、

天眞佛の仰によりて、以南を桂川のながれにすつる

そめ色の山をしるしに立をけば
わがなきあとはいつの昔ぞ

と書てのこし置けるとぞ。

春風におされて橋を渡りけり　桐五
なゝつの鐘のくもる菜の花　許風
家移りの心の先へ蛇の來て　干當
子を遊ばせる木馬なるらん　吳笠
よい形に瓢ふくるゝ秋の月　風
ちろ／＼光る萩の小嵐　五
じつとして居れば露けき世の中や　笠
高雄がために燒香もりつく　當
ほとゝぎす何がにくひぞ音羽山　五
つゝじに付て藪柑子さく　風
口の暮は酒によれとの笛をふき　當
蔓のかけたる大鍋を買　笠
うつそりとこちら見て居る子曳鹿　風
志賀の瓦を月に堀るとて　五
淺倉の刀をさすもやゝ寒き　笠
くらき處へ直すまな板　當
ゆさ／＼とかたげて來たる枝の花　五
川のむかひに芽ばる青草　風

雀等も戀の春よと啼まはり　當
なみだの枕ころがしてをく　笠
ちるはづの物なればとてけしの散　風
けふも一度はかゝるむら雨　五
あれを見よ又山姥が火をたくぞ　笠
耳のかゆきを搔すせき守　當
年寄らぬ藥が唐にあるならば　五
くち井ざくらの歸り花さく　風
押はかるうずめの神の御めぐみ　當
二日の月にいそぐ鮎賣　笠
はつ秋の氣色をつくる竹の上　風
西瓜の水の盆にこぼるゝ　五
人並に維摩拜みに寄合て　笠
かねがなるやら夜が明るやら　當
白馬が霞の中を飛ありき　五
はし錢ゆるす殿のいはひ日　風
二三分の花と沙汰する八重櫻　當
袴をたゝむ万歲が宿　笠

一この比なに波には、柿壺といへる俳諧の小室をつくりて、

まだ暮ぬうちより月の野梅哉　長齋
垣べりや今年花もつ梅一木　魯陰
梅がちに夜は明かゝる山路かな　國瑞
籠のわか茶何程もなや雪消て　奇淵
髭つらの水かゞ見ゝよ猫の戀　干當
鶯はまだ見えもせで初音哉　五趙
不斷來る。人も霞むや畑みち　桐栖

一ある日蓬皐亭に、闇の雪といへる酒をこふ乞食有けり。其さま赤裸なる腰に七寸斗のしぶ紙をぞまきける。あるじ望にまかせて銘酒壹升を出すに、しばしがうちにつくし、目もあやなくなり、はら鼓を叩て歌て云、世人皆醉り、吾獨醒たり。人のうへよしともいひて何かせんいろへばにごる山の井の水、といひ／＼歸りけるとぞ。

さゞ波や花に宿かる七虎　卓池
春の夜や忘れ／＼に鴨の聲　玉屑

朧より聲は出けり初かわず　若人
かへる雁書はそれとも思はざる　雲帶
牛の角花に落ぬも哀なり　如毛
このやうな闇にもちるか岸の梅　柳莊
淋しさは人にこそよれ啼蛙　蕉雨
青柳はつめたけれども延にけり　他弓
かへる鴈啼ばぞけふも見てやりぬ　左琴
けふの命花にあづけて來たりけり　干當
目をあけば日の暮てある櫻かな　丶
酒旗や豆腐和らぐ御代の春　巣兆
今すこしたしなくも哉菫草　一茶
余念なく春雨ふりぬ角田川　春蟻
春の水春のさゞ波いづこまで　完來
菜の花や海津はくもる青葉空　武陵
山吹の一重垣なら家買ん　泰昌
春の水まがり〳〵のおもしろや　成美

幻住庵のあれはつる事をなげきて、この程は七日七夜

もねぶらずと馱道がいふに、さなゝげきそ、雨もりも又おもしろしと、目きゝして宿とる月のたび人もやあるらんものを、おつる處がまほろしの栖ならずやとなだめき。

花菫あしたの鹿にふまれける　干當
ちりたがる花を抑へて日は遲し　雄淵
梅が香の吹散たの敷山の雲　馬年
きしる戸を明はなつたり春の朝　恒丸
梅がゝのすがたをいはゞ黑茶椀　素鄕
朝荒のはな〳〵しさよ春の海　雨蘭
梅の花人ごゝろほど匂ふべし　藍堂
明行や川波そゝぐ初櫻　文常
みのゝ毛のおもしろう吹柳哉　友鹿
川先の長う出けり春の月　五粒
山〳〵や霞をし出す鳥の聲　几頂
初鮒や沖の水ふく桶の中　歌雄
さし來るや夜汐になりて春の月　子孝
行春の日ぐれにほしき雁哉　淺見

わが家をはなれて見たり梅の花　秋守

一はりまの千明、不盡の山見て、おくの國まで下るとて來にけり。廿とせあまりの物語もし又此比の句なりとて、

見かけたる日さへ櫻はちりにけり

と書てわかれけるが、おくよりも歸りあふみの日野にてむなしく成ける。ちる櫻のほ句を記念にはしたりける。

深山木ときけば淋しきさくら哉　馱道
一棹に船は出て行柳かな　漁更
雪とふる櫻に八重はなかりけり　蘭蕙
藏びらき鳩米くひに這入たり　故常
米つきもみな元朝の男かな　千當
鯛の口にほこりかゝりて春は行　砂文
草の戸や花を尋る虻のこゑ　圓丈
かすみたつ城下の末や麥の原　青楓
藪の木は忘て居たり梅の花　岱呂
菜の花にいつ迄寒き水田かな　千影

一尾張の岱青、さゞ波をめぐり、堅田の米をかぶくろに入て歸り、家つとに粥を煮て、おの／＼をもてなしけるとぞ。

鴈行や若狹の山の見えぬ日に　千當
草の枕をうづむ菜のはな　士朗
子ども等が鞭ふる春や更ぬらん　卓池
窓のうしろの壁つくるなり　許風
やく束の月の出かゝる松の上　花陶
犬の吼つくあとの秋かぜ　嵐翠
手に物をのせて喰せる奈良の鹿　松兒
しづくながらの染糸を干す　賈牧
笹の葉の又散て來る朝朗　桐五
髪あぐる間も文讀で居る　當
をり柄の泪ぐさなり子規　朗
浪の中にも見ゆる三日月　池
梅檀の實をつぶ／＼とふみ歩行　翠
いとゞのやうな佛おがます　五
傘の雨に濡たる青むしろ　當

目籠をもれる蓬たんぽゝ　陶
世わすれに花うる尼と成にけり　兄
　戸を明てやる猫の通ひ路　朗
夕ぐれの外より早き須磨の里　風
　しばの烟のかゝる簑の毛　翠
十月の梅の梢に酒ふきて　朗
　瓢をたゝく乞食おかしき　陶
ある時は家鴨の中に立まじり　朗
　うへ殘したる早苗ながるゝ　五
桑折を出れば月夜の初にて　當
　猿も秋しる君ころもめせ　池
うき事を菊の晦にかくしつゝ　兄
　竹靜なる朝のともし火　五
ちら／＼と苔をくわへて啼雀　朗
　余吾の海邊はいかに淋しき　當
宿かりて旅人はみな寐られたり　兄
　栗つけに行牛を追出す　翠
ちる花を雪の嵐と見てのけて　朗
　柳をおこす壬生の入相　陶
鷺の寄る田螺の殼の生ぐさく　牧
　大げしきなる青雲の空　筆

鐘の聲田一枚ヅゝ霞けり　蒼虬
鶯の顏見やうなら松の月　共成
ついと行乙鳥も子の思ひかな　芦涯
しら魚や晝も朧の水の中　季謙
道ふた筋梅ある方へわかれけり　士卯
行鴈のこまかに成て仕舞けり　百池
なにうたふ木の間／＼の春の人　管鳥
山松にうつり行なり春の雨　岱李
春の野や手に提て行足袋の砂　茂良
春の夜の月は出たり馬のうへ　干當
遊ぶ氣で出る正月の梅寒し　馮月
梅が香や門より奥の長き事　若翁
柳先青し是から伊勢の春　椿堂
青柳の雫鮎にやなりぬべき　推己

子供等が一むしろ居て梅の花　木海
めづらしき花でもなくて梅の花　竹齋
花の沙汰なくて尊し不二の山　千阿
とかくして見はづす梅の朝日哉　葛三

一今はむかし、青阿法師が洛の寓居を訪ふに、三疊の疊は破れたれど、俳諧とさへいへばうれしがりて、三日三夜ぞあそびける。晝は土鍋の食をわかち、よるは五布のふとんをかりて、三布に客をぞもてなしける。

雁啼て寐せぬ縮嶋の薄月夜　青阿
なく鹿の身は朝露のたぐひ哉　干當
小雀の口のひろさよ秋のかぜ　少汝
雁なくや小海老のまじる芦の上　五雄
ひとり居れば一こゑ鹿の啼にけり　方明
逢坂や鳥は秋の閑古鳥　黄山
水海を嬉しがりけり角力取　宇洋
名月や千鳥啼べきよるのうみ　傘二
名月やくらぶるものは山と水　しう

釣人の所がへする野ぎく哉　梅間

一南部の一草、なにはにありしは七十あまりのとしなり。人々うち寄て、老後のおもひでいかにやといひければ、一草いふやう、八丈じまの小袖みつばかり引かさね、板がねを懷に入て、いとやすく〳〵と死たしといへば、みなおかしき事におもひ、しか〳〵の小袖きせて、しん町のくるわにぞ遊ばせけるとぞ。

草の戸や胡兒の朝はにぎはしき　一草
宵からの月でありしか朝の月　干當
硯洗ふ脊中にうつる旭かな　芹溪
山低し平安万戸月の出て　文山
ひとゝせをおもへば長し菊の花　起蝶
盆の月佛に近き光りかな　乙萑
柴一把あるぞきて啼けきり〳〵す　空阿
釣の餌に何もなき時百鳥の聲　田禾
よるの菊油かけなと呵りけり　芦丸
虫啼や夜干の魚の古むしろ　王洋

火ともしてあるじは居らずきりぎりす　丈左

蕣やはかなき蔓のいづこまで　月居

　良夜雨にかきくもりて、たれひとりとふ人もなし。さるとて又來るさしのけふならでは、今宵にあふことも、かけ橋のあやうき人の命ぞと、しばらくは戸ざし暫はあけはなちて、子ひとつの比にはなりぬ。

名月の雨にぬれたる疊かな　干當

一今はむかし東あふみに、燕の子やす貝もてる人ありけり。農のわざつたなしとて、此子安貝をある官家にさゝげて、かたなさしには成けり。さればうし馬も追はれねば鋤鍬もとられず、ひる中に大あくびして、あなうたてのさぶらひやな、もとの身こそ安けれといひけるとぞ。

此比の夢にも秋のゆふべかな　樗堂

江の上の雲はつめたし鴈のこゑ　無聖

山伏の通り筋なり萩芒　金龜

追のけて鹿の跡かる晩稻かな　干當

出代りの千世もと菊をもて來たり　、

花とては野菊のみなりまのあたり　鈍明

うら盆や雲は西へか東へか　寸龍

なき佗て松に鼻する男鹿哉　花陶

薄暮をはやくも啼か雨の鹿　嵐翠

秋の夜や起て見たれば雨がふる　桐五

むしろ戸に眩のつかへる礁かな　許風

一世には石のうへに住居といふ譬さへあるに、湖中沖の嶋は、やゝ廻り一里にもたらぬ所を、日ゝに石を切て西となく東となく賣出しける。ゆくすゑいかゞするこゝろざしに歟。

朝皃にけづりとらるゝこゝろ哉　巣居

年々に鹿を聞夜がふえにけり　己千

世にあればおなじ月日の案山子哉　干當

この宿はなんにもなくて鹿の聲　三光

のどけしや野分の跡の山の月　梅價
明ぬ夜のあけた氣色や花芒　雪雄
夕ぐれの氣色ふり出すすゝき哉　瑞馬
初かりとおもひしよりも夜半の雁　友國
朝皃の立どまる人を目かけ哉　尺艾
あさ露や　る寐たる草の鹿　蝸國
蓮はみな赤う咲けり秋のかぜ　舛六

一須磨をめぐりてひぢ笠雨のふりければ、海士が家は袖にもたらず月の雨　と朱樹翁はうたひ、こり須磨やとめてもくれぬ秋の暮　と方明はつぶやきて此關の清水に友寐す。

朝さかぬ蕣はなし朝な〳〵　士朗
露にうづもる西山の月　干當
この里は鹿の往來に壁破れて　騏道
塩のうへにも覆ふ松の葉　松兒
あわ雪のへつたりとふる夕暮に　許風
跡ふりむけば人おほろなり　魚村

木啄は春の名殘を啼やらん　方明
樓門高く水みどりにて　樂二
こけの花どこを盛りと見る事ぞ　嵐翠
寐そこなひたる機嫌おかしき　桐五
物思ひ武庫の嵐に吹通り　歸一
世は蛸壺の浮かひもなし　朗
月のある家を早くも鎖したり　當
けふはこほるゝ雨の萩はら　風
わが秋と雀は友を誘ひ合　兒
牛荷をおろす伊勢の塩魚　明
山の上に花なき宿はなかりけり　村
かすんで見えぬ枝川の水　翠

一多景嶋は見塔寺といふ一寺のみなり。あすの米盡たればとて磯邊に出、大きなる松明をふりまはすに、向ひの磯より米の支度調へて舟をよするとなん。

さま〴〵の風情を月のひと夜哉　鹿野
此比の雨にも月のきぬたかな　阿彥

夕やみにいく夜もまれて秋の月　素檗

夕ぐれや霧にせかれて天の川　壺伯

鴈啼や絶て又見る天の川　可都里

花の色を空にちらけて星今宵　干當

さゞ波となるや堅田のをとし水　鹿古

犬の子もほさるゝ數や芋頭　道彦

露ちるや朝の心のまぎれ行　乙二

一松室の仲算が琵琶や戀しかりけん、ある夜竹生嶋へぬす人のあまた來にけり。折ふし小僧のみなれば、寶のかぎり取集てものくふべしといふ。小僧かひ〴〵しく、貯たる瓜の香の物參らすべし、いざ磯邊に出てすゝがんとて、やがて賊等が乘來たりし舟にさほさし、彥根の領にわたり、からめて催しけるが、ことふねとてもなければ、賊等せんすべなくいけどられけるとぞ。

ついて來るやうに案山子の見ゆる夜を　闕叟

ひや〳〵と松に影をく菊の花　百非

啼鹿の式部が墓をめぐりけり　天民

栗の穗や峯の所が秋の雲　世竹

宮城野や只の草さへ萩明り　五答

朝寒の日の前にあり三上山　仙風

啼鹿のをしやりにけり根なし雲　松人

水の月棹さす方もなかりけり　春思

ゆく秋や川に流るゝ鷄頭花　無聖

礎うてば犬ののさ〳〵通りけり　金龜

出代の一夜も二夜も夜寒哉　鈍明

啼鹿の上に雲をく峠かな　干當

ひぐらしや松葉の沈む水の上　巢居

一ある人年久しく住なしたる家なれど、させる幸なしとて家相見せければ、しからざる所多しといふに、あまたこがねをかりて相よくなしたるに、其こがねの償ひかたなくて、ある夜みそかに家內相ぐし、いづくともなく逃行けるとぞ。

初鴈や客にかゝる古袷　吳笠

靜さは花の在所の芒かな　莫二

露寒み白き障子のひとへかな　又呼

秋かぜやしどろもどろの浪頭　浪貫

春もはや鴈にわかれのひとつ哉　文花

鴈啼や焚火のうつる水の上　鶴梁

薄より出てすゝきのあらし哉　呉山

秋の日の波こへ／＼て入にけり　桃下

海に向てちいさき家の月夜哉　旦ゝ

雨の萩これらを秋の夜明かな　半日房

朝寒やばせをの移る耳盥　啓風

ある日幻住庵に詣でゝ湖上を見れば、うらみ案の粟津より、ものゝふの矢橋へ通ふ舟、追／＼出づ。みな笠かぶり手拭うち覆ひて、日の光をさへいとふ身の、露の小舟に命をうかべて海底いくそばくぞや。風雲いづれ　契かある。たのしげなる笑語、きくになを哀ぞ深かりける。

秋かぜや輕き小笹の渡し舟　千當

一ある人年のよる事をきらひて、いつの年も四十なりといへり。又ある人長生したくば、われ既に八十あるは九十なりとおもふべし。年よりも堅固なりとて嬉しかるべしと。いづれが是か、いづれが非歟。

むだ事に身は老くれぬ菊の花　士朗

見ても／＼も折る日は出來ずきくの花　花陶

月のひかりを運ぶ松風　千當

あじろ木の近きを鴈の下り兼て　陶

扇に似たる瓦干すなり　當

茶が煮へて人の機嫌の揃ひける　陶

つぼみがちなるむめの麗　、

居眠りて馬を落なり啼蛙　當

雛の一夜の戀に成ゆく　陶

ともし火の風は情の付處　當

山田の空をはしるむら雨　陶

鳥捕の先へまはれば叱られて　當

まづ朔日の山茶花を切る　陶

吸物に工夫の付ぬ冬の月　當
壁迯とゞく鴉のうらなみ　陶
寐莚あむ事を親子のわたらひに　當
千代のもたれし瓢古びる　陶
飼付て置か茶毎の花に鳥　當
朝の霞をうづむ山間　丶
ながき日を長たらしくも鐘撞て　陶
啞にはおしき男なりけり　當
織かけの衣をひとへも袷にも　陶
小鍋かぶりの祭つれなき　當
笛賣がきのふに替る人形賣　陶
藏引こかす埃ちらかる　當
火を焚ば犬も尾をふる雪の上　陶
とろ／＼鈸をならす灌頂　當
下駄にまで油かけしとつぶやきて　陶
ちらして見せる庭のしら萩　當
琵琶彈が泣せに來たる晝の月　陶
秋はからびる珠州の塩鯛　當
かせやりの古きむしろを押へつけ　丶
漆にまけて蟹をこはがる　陶
毬もちを咽につめたる梓巫女　當
あんどう焦す鬪の家の雨　丶
人〻の花のこゝろをよみとめて　陶
春の名殘をかこふ獨活の芽　丶

附錄

しぐれ來ぬそこら戀しく出たれば　希言
茶汁にはおもひもよらず杜若　石毛
雲の上にあるや五月の浮御堂　千賀雄
あら海や今までありし三日の月　文角
うし馬も足をふみ込清水かな　双鳥
杜若さく時庵の夜明かな　呂一
浦山は千鳥も霞むひとつかな　末杞
かしこくも庵の留主居やきり／＼す　竹趣
虫の聲しづめつ松の露落て　鳥來

跋

投簪挂冠寄生雲水。野服葛巾付口烟月。其出家則輕ゝ行李一片箬笠。足以縱其行脚矣。其在家則寂ゝ破窓一縷茶煙。足以養其性情矣。此是誹歌者流之活計。何等之風流也。吾邑干當嘗嗜誹歌。近著此篇乞余一言。余未知誹歌何以贅一言。然叢話縷ゝ續成聯句。亦是風流之新手段也。故嘉其志之不凡尾以數字。于時文化己巳冬臘月廿一日寒梅洩春暗香滿窗

華月禪居士書　（印：棟所）

關の清水物語 二篇

われしきが菩提の綱手にもやと、ことしまたせきの清水に出て、ゆきゝのものがたりをきゝ、此道によれることどもをかいつくれば、七ひら八ひらとはなりぬ。かしこき人の見るべきものにはあらず。はた愚かなる人に見すべき物にもあらず。抱官守錢の論をやめて、ひとつの壺中に遊ばんとおもふ人の見ば、みせもやせんと禿筆にまかせてかくなむ。

ちる梅に走りまけたり手習兒　　干當
　かすみときめく端〱の家　　榛堂
材木のはへ場に猫の妻呼て　　當
　夜食仕舞へば去る賃搗　　堂
潤ひのちつとも見えぬ盆の月　　當
　二篭三篭ちぎる鬼灯　　堂

熱(發)つくる鳩をへらりとさし覗き　當
たちわづらひに顏のおもたき　堂
さむそらにむけど果さぬ染物屋　當
時相の葬はことづけてやる　堂
新浮が見たい／＼といひくらし　當
酒のきげんに掴むげぢ／＼　堂
月夜ほどめでたき物はなかりけり　當
柳田の水のどこへ落行　堂
綸行器にうつゝぬかして寄たかり　當
儒者になる子のしれる目のはり　堂
鶏の蚯蚓をつゝく花の空　當
くじらつかれの直る長閑さ　堂

一今はむかし、洞老翁といへるは東海の一畸にして、里俗かりにこの名を呼べり。天明なかばの頃小舟に棹さし去てふたゝび歸らず。籬嶋のあたりなる巖屈(窟)を栖とし、蠣ちふ貝の売をひろひ巖の上を覆ひ、みるめあるは石のりなんど苅敷、石の枕を高うして青天白日に鼾し、潮にロそゝぎては月の前に笛を樂しむ。其境界ひとへに世をいとふものゝ如く、われもと塩津の漁父なる事を忘れたる如し。しぞく・旧友訪はんとすれば、未然に察して跡をかくす。これや神つ代事代主の神、三保の崎に釣し給ひ、陶朱公が五湖に棹さすの類にはあらざめれど、やゝ天地海原の形勢をこゝろにとめたるものにして、老翁の名もまたおのづからかなへる成べし。

晝顏にまつものひとり松の月　士朗
瓜に一人酒に三人　千當
折々は船にとびこむ魚見えて　岳輅
こゑのからびる嶋の鶏　竹有
蔦のはの赤みがとれて幾日ふる　花陶
炮錄(礫)竃を起す初しも　朗
うれ兼る階子かついで歸るなり　當
鉦しづかなる葬のあとさき　輅
僞のはげかゝりたる峯の雲　有
雀の數に戀を占ふ　陶
蓬生の君が刀に露もちて　朗

松の際にも見ゆる夕月　當
秋のかぜ鹿の子ゆふ手も面白し　軺
たびをかたれば旅人が來る　有
松笠の莛三枚敷ひろげ　陶
杜曆をはさむ竹ぐし　朗
花になく鳥の眞似して暮すらん　當
彼岸一ぱいせゝる菊ばた　軺
ゆふ霞むものとは兼て富士の山　有
笹葉流して蟹を釣ばや　陶
九才で弓を射る子の手を引て　朗
一隅たらぬ蚊帳に寐にけり　當
紫陽花のはなの棵を唉かはり　軺
ふけてやみぬ

稲妻の所もかへず海の上　梅間
鳥どものくはへて行ぬ庵の牒　鹿野
こと〳〵となるやしぐれの馬の腹　槐翁
月千鳥けふの松ばはたき盡し　黄山

俳諧のかるみに出たり更衣　不轉
身の老をしるや水鶏の聾もくる　月底
水鳥の押よせて行あらしかな　可竹
暮てしばし春の日の道見ゆる哉　鱸亭
松かげやあるき〳〵もけふの月　千當

一ある日おくより僧ひとり來つ。うちつけに發句といふものは何のいゝぞやと問けるに、そも人の心の、花につけ鳥につけ、ありとあるものを見もし聞もしつるにまかせて、感じ動けるおもひをのぶるのみならん。こゝろのおきどころをあめつちと同じうしつれば、いへる事すべて風韻高し。五七五につゞりて連句のはじめにおけば、發句とはいふめり。
連句また何の謂かあるや。
これまたほ句の粧を添て脇とし、受て附、ならべてつく。あるは水上の瓢を押ごとく、薄月夜に梅の匂へるが如く、梨子くふ口もとの如しともいへり。變化の妙一朝一夕に述がたし。この道に入ては別に天地あるが

ごとし。

大空へゆくが雲雀の仕事哉　蕉雨

たのもしく過ぬ火串をしらぬうち　而后

旅人と見えるか花の尻からげ　雉啄

花ありとしりけり雲の歸る處　世南

やれうつた蠅は手をすり足をする　一茶

鷄頭の見えてさがすや舟切手　茶靜

煤はきぬ何時なりと梅の花　千當

一今はむかし、望月三彌といへる畫工ありけり。ある公卿へ召れけるに、席畫ことによければ御用ひあるべく、三彌といへる名のかろく聞ゆれば、何とかなが銘にしたゝむべきよし仰あれば、大日本鍛冶宗匠伊賀守藤原金光同町望月三彌と書けるよし。

青柳や上る下るの京の町　椿堂

竹植て夢の來處ふやしけり　茶彥

起合うて寒し咄のくらければ　太節

乙鳥の用なき門やかきつばた　桂丸

さぐらばや雨に火とぼす雜木原　宇洋

きれ紙鳶を追や淚ふむ處まで　世竹

むかしめく家に弓ゐる木槿かな　双虻

白雲は山のほまれか躑躅てる　廿古

あなづりて鹿のこへけり庵の垣　千當

一今はむかし、蕪村はじめて京うち參りしけるに、月しろき夜鳴(鴨)川の流に添つゝ二條を北のかたへ吟行しけるに、色黑くたけたかき法師の、墨の衣まくり手にして、堤あづまぶりの小哥聲をかしううたひ行行けるに、のもとより辻君とおぼしきが、つと走り出てたもとをひかへ、いとこゝろにくき御有さまかな、わが宿の草のまくら、露ばかりのいとま、などて厭ひ玉ふぞ、無下にはえこそ過しまいらせじと、月におもてをそむけてうちほのめきければ、ひが目にも見給ひつるものかな、われは比えの西塔何がしの坊に、坂本太郎と呼れたる顯蜜(密)の法師なり。さある尊き佛の御弟子を、いかにけがし奉らんや、かしこくもゆるしたばせと、ひた

わびに侘けれども、とかくにうけひかざりければ、法師今はとてたけたる聲うちあらゝげて、なんだ辨慶に對して理りしらぬ奇異のくせ物よと、やがて袖打はらひてあから足どうとふみならし、たゞはしりにはしりける。いと尊くおかしければ、

花芒ひと夜はなびけ武藏坊　蕪村
一木にて江のふり付る御かな　素律
鵜の聲に立直りけりしほれ芦　百非
今かした火の凉しさよ藪の道　若介
茶の花とうしろ合せの庵りかな　松宇
くい〳〵と付木つくなり冬の月　仙風
何してもよき世となりぬ虫の聲　淋山
庵のなく山宗の梅も咲ては　月奎
名月や常に見て居る庵の容　馬年
朝皃の手も付られぬさかりかな　雄淵
小田の鳫天津雁見て立にけり　千當
月の中よりおろすあきかぜ　一草

瓦干す家のぐるりは秋くれて　、
草はつ〳〵に水のながるゝ　當
乙の子が笛と笛とをふき合せ　、
蓋のない鍋鍋のない蓋　草
春深く覺ゆる人の山(油)斷さよ　、
墨吸にくる蝶をいたはる　當
此山は淺黃ざくらを花と見て　草
夕日せはしく叩く屋根板　當
いつ見ても枕元なる銅たらひ　草
火桶なで〳〵歸るうらかた　當
おもふとみな枯にけり草の月　草
黑き鳥居に鳥くゝとなく　當
朔日も三十日もおなじ僧の顏　草
瞬のまはりへ雨のもり來る　當
賣たとはしらずに桐の花さくや　草
梟かゝへて歸る子供等　當

一ある日蕾堂、鬼の念佛の繪に贊を乞けるに、玉の盃に

底なしと兼好には譏らるゝ共、こゝろに金鉄のつのなくば、百八の煩悩目にふれ耳にふれて、十が八九は魔境に落べし。

おにの目もかすまん花の七小町　千當
(綏)孩鶏鳴や著莪もあやめも秋の草　楚臼
世をやすく住ば水鶏の聲もくる　扇風
萩の門松にふる雨よそ／＼し　月哉
螢ひとつ見うしなひたり蔦の道　子孝
二人して立わかれ見る柳かな　曰人
舟の夢千鳥の雫かゝりけり　共成
村中のおもておこしや勝角力　百池
山道もこゝらが果か夢の蝶　金茱
やせ藪に月はとられて鳴水鶏　岱李
蚊帳出れば心さはがし月の前　乙彥
冬の夜や豆こぼしても雨の音　梅價
名月の早速見ゆるよし簾哉　奘芃
田を賣て手うてば鷹も歸りけり　雪雄
沙汰なしに汐は滿たり春の雨　蒼虬

一今はむかし枇杷園にて、大津の騏道が追福いとなまゝとて人ゝつどひぬ。前畧

けふの日のありとは鴎の浮巣守　士朗
　こゝろに寒き六月の芦　岳輅
笛吹の影となるまで松延て　千當
　南さがりの山に火とぼす　花陶
有明の庵と答へて戸もさゝず　竹有
　手のひらにつく稲の初花　騏六
桐のはをうちかへしたる秋の水　鹿野
　うつくしうなる寺の雑役　朗
いそがしきものは雀の五羽三羽　陶
　寐處にまで雪のちらつく　當
鍋塩をやく夕ぐれの薄けぶり　桂五
　藪の上から見ゆる星ざき　五雄

中略

けふ麥に花のさゞなみ匂ふかな　當
　蛙あつまる水の廣さに　六

文化六年午六月十八日

一順出來て文臺へ上ル
白あんまぢう三ツ、　茶出ル
花の前に膳出ル
角猪口つまみ大こん 瓜の香の物　こまず こきれ　汁牛房さゝがき
引而、平丸山葵わさび　飯
中酒　なすびでんがく
小いも　青ゆ　吸物南下の玉あられ 淺草のり
うなぎかばやき

一むかし三善長慶、連哥の句前になりける所へ、あはたゞし／＼文もてる使の來たりしが、みそかに見てうちうなづき、わが付句おはりて、只今子息討死のよししらせゆとて歸られけるとぞ。

苦桃のやにはむ空や雲の峯　秋擧
ゆるぎ出て朝日を受る田にし哉　井里
花鳥の世にせうとてぞ雨の降　閑齊
雪解の雨降ぬけてなく蛙　蕪中
青梅の落て黄ばむや苔の上　凡十
月も日もうとし螢のかくれ里　玄蛙

竹うへてもとの杜に眠りけり　沼人
後の月いつぞやの寺廣過る　千崖
鍵かりて明る庇あり梅の中　采(米)杞
人の手に渡せば霞む小笠哉　万籟
脊中干す日南かそうか冬の鳥　護物
風もつや火とぼし時の梅の花　千當

一むかし横川の尊勝阿闍梨は、祕藏の梅を伐て執着を拂はれしとかや。

いかめしき香や一輪の梅の花　卓池
二分咲て一分こぼしぬ萩の花　雪雄
膾つめたき八さくの膳　千當
燕の名殘のちりを掃出して　木海
庇架ふむ道に月のまたるゝ　蒼虬
西風のひやりと移る朴のはに　當
弓の稽古も濟がての聲　雄
折ふしは小石洗て手の荒る　虬
きのふの雨はけふの繼艸　荷七

あり〳〵と筑波の見ゆる別にて　虬
　年のよるまで鴆の糞買　當
年〻にふへるやうなり閑古鳥　乙雀
朝〻や身を朝顔の花の陰　起蝶
谷の戸にふたがる梅のさかり哉　青楓
九日の菊に成けり草の露　羅山
大道へ日くれて出たり稲の花　太兮
貧僧の梅は老木と成にけり　士明
花芒日の入る方がおもてかな　龜蹟
正月や猫の寒がる青疊　素廸
花見頃市過る間ぞもどかしき　午心
ひと本の芒も影を持にけり　千當

一姑射の夫木、四絃を負て大津の驛まで來たりしが、幻住菴の記をしらべにかけんとて、尾藏寺のいたゞきに露の莚一ひら敷、誰かれ三ッ四たり聞けり。悲しさいはんかたなし。いづれかまほろしの栖ならずやと、おもひ捨て伏ぬ、とうたひ終りて互に眼を押ぬぐへば、雲の中より雪をあざぶく麗人、琴をかゝへて出づ。かくて酌とる女あり、肴もてる童あり。夢かとばかり覺ゆるに、よく聞ば宇洋のもてなしなりき。

月の巣となりてつぼむか志賀の松　米彦
　湖水の秋をあらふ夕かぜ　千當
鴈打た人のうしろにふと立て　、
　草の中まで膳はこぶなり　彦
雨三粒盃なりの庵の屋根　、
　祝義の笛をならす朔日　當
髯太のはしに掛たる橋の錢　、
　惡心が膝に猿も寐に來よ　彦
うば玉の闇にちらつくけさ御前　當
　いまやなみだにかれる呉竹　彦
河豚なんど料るときけば霜寒み　當
　鴫かぢとれ千どり棹させ　彦
三日月の跡かたもなき岸の雲　當
　露にこゝろのあれる連哥師　彦

鳴うかと秋の蛙を手に乗せて　當
きくらげ汁の世に逢にけり　彥
酒はたを花の木末にくゝり置　當
蝶の媒人のなかだちをする　彥

ナチ
哥古がいゝし節句も近づけば　當
詞をさりて出る小童　彥
山の火はみな白波と成にけり　、
あられを拾ふ曉のにはとり　當
歩行／＼年とる人を高ぶらせ　彥
蝶ふき仕舞ふ風呂のさめ口　當
かたみやく煙は垣を吹ぬきて　彥
御衣めせ汐くもりする　當
孫抱て左近狐も出ぬらん　彥
蒲勒のつけにこかす椋の木　當
田楽の香にふくれたる月いく度　彥
まつむしきゝに家界てくる　當
摸て見よ瓢の銘は小菊丸　彥
莨蒻すきを茶にて串(マヽ)ふ　當
かやくきが鳴は莚の青いうち　彥
牛賣てから日よりかたまる　當
花に箔置たやうなる七曲り　彥
菫の汁もまれな柴の戸　當

左義長の跡もえ出る蕨かな　疎拯
水海を夜にして行や春の雁　共唎
名月の膝を過るや臍なかば　禾鄕
更ゆくや篩に聲ある天の川　成章
松しまの噺にへだつ蚊帳かな　文常
竹の子や明れば暮る露の中　中齊
鳩の聲巣を出る時の一はづみ　古猿
ころぶ子を起して行や鉢叩　米次
さはられぬ朝の風情や萩の花　春峯
初ざくら月のかゝらば消ぬべし　宇橋
朝皃につれて皆さく小艸哉　東若
帆の音のひゞきも夜は秋の聲　貨傑

加茂なる柊の杜にて

鳩になど化してなかぬか郭公　道彦
　嵐の色を添る青空　千當
とま船に風呂のけぶりをあつらへて　丶
　貞室ばかり秋紙子きる　彦
山ざとに名殘あらせる十三夜　丶
　ちるかひありて柳芽をふく　當
面かげの緒絶の橋に似たるぞや　丶
　おもひをつゝむ薄様の帋　彦
あいさつも山伏たちはそこ〳〵に　當
　簑にも榮耀つく世にぞなる　彦
手の古い踊見よなら西の京　當
　夕皃汁に菴の留どき　彦
長嘯が檽もつまぬ此月夜　當
　下戸をば人にいはぬ彦根衆　彦
辻堂に雪の梟を追込て　當
　庭訓の語をとなふ小謌市　彦
暮もせぬ花に灯とほすむとくさよ　當
　あくらを受る芝のもえ口　彦

鼠尾草や年〳〵折て腰かゞむ　舒六
踊まで嘉例にしたる名主かな　九皐
千鳥來る夜頭や梅の一あらし　菊住
信貴森のむしろ敷野や梅の花　奇淵
奈良は鐘の多い所よ春の空　梅日
夜と共に延てゆくなり夏木立　宗德
今年たつ惠方の跡かつばくらめ　國村
おなじ事みないひ來るや初しぐれ　楚岳
今朝みれば螢は柿の花でこそ　菊也
おもひつゝ寐しか朝戸に竹の雪　漫々
夢に見た鳥も鳴なり朝がすみ　闌當
寐て聞ば知た聲也蛃どなり　塞馬
木枯や貧の一燈かひ〳〵し　丘高
芥子提て鳥羽の車に追はれけり　榛堂
釣棹に聲のひゞくや子規　千當

一むかし山科の片邊りに、鬼ヶ嶽とかいへる太くたくましき相撲とりの、親ひとりもちたるありけり。大津へ出るごとに走井の餅三ツ四ツづゝみやげにしけるが、母かぎりなく悦び、かの鬼ヶ嶽の脊をなでつさすりついたわりけるとぞ。

植やうの背が氣に入小竹哉　沙鷗
出代やみじかき袖になく雀　團釋
行燈のくらき夜はなし菊の花　釣翁
來た道はまだ奥にして梅の花　菊塢
稻妻を追かぶせたり風の波　逸人
月影のはやかはりけり遲ざくら　春人
鎌磨でまつや山家の螢どき　路宅
薄ぎりに暮て立けり田の鳥　茂良
草らちやけふもわかるゝ鴈の聲　田美
かるゝほど風韻のつく柳かな　干當

一今はむかし、なごやに下れる事を思ひ出て、

馬士の髭に霜をく余寒かな　干當

日の出の遲き土山の春　士朗
むらすゞめ藪鶯をおはへきて　岳輅
飯の御座シにたゝむ松のは　砂文
かゝる夜を秋の月夜と申べし　方明
雨の祝ひの椒だはら釣る　當
鴈打て叱られて來た顏もせず　朗
あしたの淵と見ゆる砂川　輅
槇柏三とせ守たる宮處　當
筑紫の果へ墨賣に行　明
蟀の髭おもしろき冬の夜に　文
人むつかしと月もおほすよ　朗
うす〳〵と初雪の匂ふ草の丈　明
屑家〳〵のからす友よぶ　文
したゝかな笠を脊に負ふ釣の糸　朗
あけて來るとて燈火をけす　當
十分になれよと花をいそぐらん　大阜
物がたりめく竹のきさらぎ　少汝
乙鳥は來るより雲に氣色して　五雄

ざんぶと水へはいる牛追　明
小初瀬の鐘もきのふの今時分　文
影あり〳〵としのび音に泣　朗
黄菊ほどゆかしき色はなかりけり　汝
萩も焚ける草の戸の秋　阜
明石まで月に連出よ須磨の人　當
露の論する美濃の木因　雄
鹿笛は吹て見るさへもどかしく　輅
風も夕日も山に入けり　野秀
二度三度連哥の頭を持てきて　明
軒の雫に火桶はり居る　湖風
青艸の野邊に心や通ふらん　朗
いくつふへたる今朝の鷄　輅
繩すだれしほつて春ををしみつゝ　雄
田螺の売の風にほろつく　當
花の雲松はもとより朧にて　朗
盃ふたつ空のどかなり　汝

名月のさづけに出たり草まくら　鶯笠
雀までかしこし利根は麻どころ　栢翠
きり〴〵す餌をやろうにも薄月夜　士得
夕暮て松は風見るたより哉　平齊
たび人の袖ふる雨や女郎花　夙也
ぐるりから枯てかゝるや野の柳　几乙
さくら木は小町の果よ初しぐれ　大蕪
苔ふみの來るが病ぞ梅の花　星譜
蛙子に日はなが出來て松ばちる　猪来
隣から落て幅する一葉かな　千當

一むかし五十の跡さきなるおのこ、おもひものふた所にもてり。年わかきがいふ、君かしらの霜おほくなりぬ、妾いとまたまはんやと。このおのこ、しらかみぬき捨ぬ。かくて年まかりたるかたにゆきければ、君しらかみなくなりて若く見ゆれば、わがとしまかりたるにあきもやし玉ふらん、いとまたびてんやといふに、此男黒きかみぬきすてぬ。かく白きも黒きも髮みなくな

りて、女ふたりともいとま乞ていにけるとなん。

あきらめのつかぬ日暮ぞ花に鳥　蕙布
かしこさの鳥に過たりみそさゞゐ　久藏
神にして置や山根の大つばき　鸞太
水鳥の眠る間氷る深田かな　吐江
眞黑な山がくらまかほとゝぎす　金谷
陽炎やよき音を持し小田の雀　武陵
かゝるとき古郷に遠し初ざくら　菊所
元日のうまみや夜のあそびごと　虚白
新年や大小さして眞白髪　西月
雲少し山のはに見えて今朝の秋　琴州
揺ぬらす稚の露やかきつばた　青可
背戸口へまはる人ある野分かな　卦龍
盗まれし夜の涼しさや門の瓜　斗行
さは〳〵と木賊にさはぐ合羽哉　曾洛
御明しの圍爐裏に近き住居哉　石鹿
三月や薄着になれば日の暮る　文骨
立待や雨かとばかり松の露　庭雅
梅の木に月は残りてかんこ鳥　雪丸
來る雁に榎實こぼるゝ音のする　蘇山
夜が明て雀へわたす踊かな　千崖

蕉翁行脚の掟十八ケ条とやらんはいかにといへる人に

一再宿すべからず。あたゝめざる莚をおもふべし。

一腰に寸鉄たりとも帯すべからず。惣じて物の命をとる事なかれ。

一君父の讐あるものは門外に遊ぶべし。いたゞきふまぬの道、忍ざるの情あればなり。

一魚・鳥・獣の肉このみ食べからず。美食珍味にふける人は、他事にふれ安きものなり。菜根を咬て百事なすべき語を思ふべし。

一衣類・器財相應にすべし。過たるはよからず、足らざるもしからず。

一人の求めなきに己が句〳〵出すべからず。望みを背くもしからず。

一たとへ嶮岨の境たりとも、所勞の心おこすべからず。起らば途中より立歸るべし。

一馬駕に乘べからず。一枝の枯杖を己が補脚とおもふべし。

一好て酒を飮べからず。饗應により固辭しがたくとも、微醺にして止べし。亂に及ばずの節、迷亂起罪の戒、祭にもろみを用ゆるも、破るを憎てなり。酒に遠ざかる訓あり、愼めや。

一船錢・茶代忘るべからず。

一夕をおもひ旦を思べし。旦暮の行脚といふは好ざる事也。人に勞をかくる事なかれ。數すれば疎ぜらるゝの語を思ふべし。

一他の短をあげ、己が長をあらはす事なかれ。人を誹る事、己にほこるは、甚いやしき事なり。

一俳諧の外雜談すべからず。雜談出なば居眠して勞を養べし。

一女性の俳友にしたしむべからず。師にも弟子にもいらぬ事也。此道に親炙せば人を以て傳べし。惣て男女の道は嗣を立るのみなり。流蕩すれば心敦一ならず。此道は主一無適にしてなす。能〻己を省べし。

一主あるもの、一針・一草たりとも取べからず。山川・江澤にも主あり、愼めや。

一山川・旧跡したしく尋入べし。あらたに私の名を付る事なかれ。

一一字の師たりとも忘るゝことなかれ。一句の理をも解せず、人の師となる事なかれ。人に教るは、己をなしたる上の事なり。

一一宿・一飯の主もおろそかにおもふべからず。さりやとて媚諂ふ事なかれ。如斯の人は奴たり。此道に入ものは此道の人に交るべし。

雯ゆけとをしへられたる櫻かな　推己

きじ鳴やふまへごろなる道の艸　南峨

雉子なくや四五丁ひきしけふの汐　無隔

旅に寐た夜のおもぶきや朧月　翠實

柳吹朝や柳の上すべり　湧瀧

行過て渡しさがすや赤つばき　曉堂

冬の雲おくや木槿の花一ツ　椿年

朔日やから鮭買て驕顔　干當

一蕉翁十哲といへども其品わかれたるよし、いかゞといふに、其角の句法は活達にして作あり。嵐雪は水波の間を好めるに似て幽なる所に妙あり。去來はすなほにしてさびあり、實情深し。丈草は作に淋しみを交ゆ。惟然は句のおもてに俗ありて高みを望めり。許六はおかしみに作を加ふ。土芳は物あはきをこのめり。支考は雅俗を専にして多くは今日をいふ。杉風・野坡はこゝろひとつにして、只かるみに遊ぶとなん。この高子の風格をかゞみつべしと。

いの子さへしらで梅もつ男かな　千當
十六夜や舟でこそげる鍋の尻　羅泉
雁なくや膝まで上る夜の寒み　三千雄
ゆく末は波にまじるか草の露　木鷄
あすの花けふの花なり登り舟　佳呂
寒くあれば梅には道をかへて行　旦齊
袋から鼠走らすや霜の上　三志

一朱樹翁云、氣色を宗として作れる句は、おのづから余情あり、情を宗として作れるは第二義におつる。

ふる雪に漁村の烏かぞへけり　千當
身の上の網代なるらん網代守　、

此さかひにてわかつべし

兩眼にすゞし過たり須磨明石　十丈

萍の上にもをくかけさのつゆ　許風
月も日も花より出る山家かな　桐五
牛の尾にうたれて落ぬ秋の蠅　魚村
上ミ京の日はかたぶきぬ團賣　嵐翠
よき處に柱のありて夏の月　花陶
黄鳥はいつ頃なくぞ暦うり　麥海
鹿鳴やそつと見による子の寐兒　三千雄
手とほしに百足の登るあつさ哉　羅泉
順禮のゆかしがりけりかへるかり　糟鬼
かり家の拾ひものなり冬の梅　木鷄
蓼の實のひとつ落ても秋の情　九二
松ひと木貰てもどる小春かな　九布

童子教かぶつて戻る夜寒哉　松馴

釣棹で教へてくれぬ女郎花　如籟

鹿追へば罪なき鴫の迯にけり　安几

行秋や吹革にむかふ伊賀守　月堤

早酢の加減からつい櫻がり　爪佛

續幻住庵記

蕉翁の遺跡ををしみて雲(裡)坊といへるもの、石山の奥なる幻住菴を今の粟津に移せしも、はや昔がたりとはなりぬ。姑射の曉臺、頭根結かへて、死なん命死なば菫の花の露　と一稜の風腸を吐あらはせしより、四方の風客風になびく艸の如くなりしが、雲の上より召れて都へは登りき。青菴・騏道、軒端の雨もりをふせぎ、延のぼる壁の蔦をむしりて傳燈をかゝげたれども、老の波寄來たれば予に詫(詑)して、いほりの朽果ん事を歎くの外他なし。そもく われ志學の頃、曉臺此庵にさす鍋の湯をわかして、おもへ只心はなれて花もなし　と示されしより月に三日の暇をぬすみ、この椎の下露にぬるゝ年、よそ年にあまる。庵は琵琶湖の南にありて、われはひとつの漁村をへだつ。陸地をゆけば昔ながらの志賀の山櫻に袖をかざし、あるは鳰の浮巣にうかれて、一篇を宇洋・古猿の門前にとゞめ、此いほりに誘ひ、荏の露を拂ひ狐狸の跡をぬぐふて、しばく 俳諧を談ず。かへさはいつも碓尾が嶽・千丈が峯より吹送る嵐に、山田・矢橋もはや三更の月とはなりぬ。老の影うつさで嬉しの鏡山も、うしろめたくぞ思ふ。つらく 五十余年の夢、みじかしともいふべからず。ひとり秋風に白髪をふかれ、斜陽もまばゆくなりぬ。されどわれいまだ老たる母を荷ふて麥の秀たるをよろこび、此菴を朝夕のふしどゝもせざれば、こたび浪花の三津人、祖翁の徳を尊び、曉宗のゆかりをしたひ、かに角に身のおはり所にせんと乞けるにまかせて、翁のいさをのながゝれと祈るも、道に執するの心なんめり。かの甕を抱ける丈人よりは、縄に得して月をとる友にあたへて、後の光りを見んにはといふのみ。

世にふるはまたく芭蕉のしぐれかな

文政九年亥十月　　千當識

附錄

大藪の下苅濟て雲の峯　茂推
十六夜やきのふ馴染し人の顏　仙草
黄鳥のなくときゝるやしのぶ摺　閑那
みじか夜のあまりてふるか蔦の雨　素白
行列の濟て巢立や雀の子　汲波
蓋あけて天氣見て居る田螺かな　冬舟
水の音に付てまわれば初ざくら　洪石
山茶花や酒やといふも百姓家　雨塘
木鉠の鳴らぬしめりや鳴いとゞ　抱義
夜しぐれに一味つくや菜雜炊　佛朔
わが影にたはるゝ子あり盆の月　止水
黄鳥やうい〳〵しくも岩の鼻　書龍
泣やみし子や水風呂の落椿　少計
子規けぶりのやうな雨の中　辫山
起〻のあくび睦やかきつばた　雲石
若竹や窓に工夫のつくあした　文外
顏かえて二度折にやる柳かな　野楊

鐘一ツ撞て間のある柳かな　杜蓼
たくみなく降て過たる時雨哉　夢蝶
てら〳〵と西日さしけり鴫の腹　其岳
寒けれど鳥はいなず潮の跡　六英
月あける窓も明るやうめの花　文係
五月雨の蝶によごるゝ疊かな　可章
幮つりて居ると氣のせく隣哉　蕉良
干て仕舞斗が能やけしの露　大笥
寺町に百年余る柳かな　鷗里
手ぬぐひの田に吹ちりて凍かへる　曾夢
窓明てものありげなり春の月　理朝
細工場のあかりとらるゝ若葉哉　靑柯
息かけて見れば凍たる矢立哉　喜川
村中の桃は一度に咲にけり　梅子
鶯や人見ぬうちを朝ごゝろ　橋茶
咲たかといふても其ぬつばきかな　梅守
如月や海へさし出る山の影　蠶巢
枯芦の入札すんで初しぐれ　芭蕉堂執筆 祖鄕

美佐古鮓（みさごずし）

士由撰

鶚鮓集首言

魚鷹（ミサゴ）のいろくずを食し、或は鮓を貯ふ。信天翁（鳥の名也）、其余を餐となす。産を破り家を失へる我輩、亦人中の信天翁也。よて此集も、物哭るゝ友どちの醍醐味のくさぐさをかいつめたれば、斯標して其味の可不は諸見子の好悪に任す。延瑞が詩に云、波上魚鷹貪未飽　何曾餓死信天翁　是この間になめりと、信天翁士由、自卷首に題す。

維時文化戊寅春清明後二日

人情畢竟親愛栽

園の梅わが欲目ぢやといはれけり

鶚鮓集

仙臺　士由處人撰
友人　仙府馬年
門人　盛岡蘭卿　校

桐の芽の遲し一葉の秋に似ず　道彦

朝飯を過すや花に鐘がなる　成美

見るうちにちり行花となりに覓　久臧

初華や夫にも辯の胸噪ぎ　洞々

春の夜のくらさや客の立し跡　星譜

人の柳見て來て植し柳哉　一峨

たんと咲て寂しがらせよしでこぶし　女 雄嶋

行春や烟通しの柴の庵　花仙

春の夜の鴉はいつの神の子ぞ　三雄

不二もたぬ斗不足ぞ奥の春　卓堂

陽炎を吐や吸るや墓　宇考

春風やアマコマ走る帆かけ船　鈿蘭亭人

あまこまとは、あれこれといふ事ぢやといふておとす。

酒祈る槌なら打ん楪の花　國村
山吹のぶつさけて咲岩間哉　路猿
これらは新燕の題にかけ來し吟なり。
東風吹や猫も抄子も百千鳥　南山
何事ぞ花に蜂ふく寺の尼　乙二
一文の錢にも霞む船場かな　雄淵
折楪をくはいて渡る小川哉　買月
楪はやし外に郎の筋もなき　五荅
長閑さや鷺も鴉も寐ての事　子孝
聲捨て霞む心歟杉の鳩　太令
霞口や園密(蜜)柑のくづおれる　扇風
親ありや子ありや鴈のかへる聲　淸女
降れば漏庵と思ひと(マヽ)春の雨　龜丸
松風に乘て歸る歟礒の鴈　淸奐
見よ〳〵と柳は靑うなりにけり　月哉
梅に先つゝかけがまし初霞　少(彫)エ絲
春の雪消なば翌の花となれ　常婦
紫式部淸少納言藤の華　堇城

永日や愚に見ゆる竹柱　白規
鬪合せ〳〵てや嗁蛙　蛙黨
菜の花の直道すれば麥林寺　吳雪
今日限の春にまぶれて暮の鐘　東丸
世の中の盞とれとて歟嗁雲雀　有來
山吹や蓑着てくらす人の常　龜州
鶯や世を隙にして翌も來よ　露洞
松風に咽かはかして鳴蛙　聞角
箱根路や霞をつけて馬の行　露曉
藪かげの家の取所や殘る雪　雪窓
華七日遊べ心の佛達　竹止
どんな人もそらさぬ蝶の目もと哉　也邑
遊ぶやうに流れ行なり春の川　秋角
梅白し五文渡しの闇きより　東姿
雀抱て吹れ歩行かん春心　左圭
何時來ても留主な人なり茅花咲　翠居
四五尺で落るは老し雲雀かも　梅居
三文が代をふまへて嗁蛙　完車

世話やいたやうすや梅に月早し　二三雄
蝶飛や女も刀かつぐ旅　星詩
日落よと夜に入ようと花に鳥　星丸
清貧と見ゆる歟今日も落花ふむ　星山
行春や鷗の聲も常に似ず　星德
懐に入レて愛さん春の不二　雲志
小人閑居して隣の櫻伐にけり　士山
七十の今年も華に逐れけり　立富
鶯鳴や芽も出シさうな雪見杭　士彦
通りぬけて是又霞む塩家かな　巣樹
世事よりも繁くて嬉し花の事　少年 蟻窂
鶯や妻木の中の世捨道　百學
鶯に理屈をつけて聞にけり　天亮
魚によく酢のきく日也山笑ふ　春庵
つめたきは畳の癖歟梅の華　熊居
春の日の落盈れなり木の間雪　青牛
鶯に似た鳥せめて來りけり　士觀
づんぶりとぬれて帆ずれの柳哉　五長

見や知らで親しみよきは春の山　女 園翠
鶯の隙は寐て居たうちのみぞ　文哉
梅の月煩惱(啓)の我を笑ふの歟　菊堂
旅人の日とてなけれど薺咲　高松
浦波の明りあつめて寐ぬ蝶等　曙柳
兎角月にさはる余寒の放れ山　世竹
春雨の夜深くふるや淺香山　左來
庇崎や菫もつくるあまが畑　芙蓉
裸子や蘩の青みつけて來る　東原
どの島ぞ翌の乙鳥のわたる空　月村
辛き世やしばし粉米の花がくれ　笑鼠
鳥の心道〳〵借らん躑躅咲　章流
愛相は春の物なり母子さく　鄙丸
のつぺりと暮にかぶさる櫻かな　東翠
乘合は梅の華なり横渡し　素羊
蝶の來て艸によき名を付に兒　星國
いつの間に春が來たぞや鳥の聲　五ツ 鵬作
春の雨双林塔をぬらしけり　士由

若艸や隠し兒なる晝の月　魯卿
あたゝかになるや木の間の二年草　畫中
桃の日は桃咲御世に生れけり　魚珀
月も華も腹一ぱいの彌生哉　青湖
點滴のぬくとがらせん巣の雀　醉月
かざる世や旅めく雛の草鞋迄　玄圃
鳥さしが小竿の先に初櫻　斗興
鶯のけろりとしたる初音哉　春潭
春風や人なき奥の琴の音　古人卜囚
竹の葉にすべり／＼てちる椿　孤穴
牛つかふ人よ無骨に菫ふむ　とよ女
餝焚て十日も過し柳かな　孟皎
鶯は遲し迎ひに鷄をやれ　立明
薄暮をすく／＼春の月夜かな　立圓
老椿己が年程華持歟　琴丸
初花を掛乞兒で啼小鳥　志雄里
花に世をあづけて今日は七日哉　文人
塵の網せめてもれたし花二日　麥水

時鳥春から啼や勝士が里　古水
行水に物書ごとし春三月　輝湖
華の山やはり是等が別世界　鳳臺
花の中ちりかつ方に立まはる　葛父
青空や田螺の歩行小藪際　如山
春雨は野山の色の機嫌哉　庄山
柳吹着物輕し子等遊べ　如柳
墓の日の佛も華の機嫌かな　林々
假初の爪先も花に向に兒　桂舟
烟る日の笹葉によるや春の波　一岐
白猫は纒すてふ名も立けなり　北嵩
おのれ道に死ゝでも可也花の醉　布千
琵琶打の茅花が吹ば出て失る　桂林
分別にいとまやりつゝ柳さす　如水
宵闇の損が戻るぞ月の梅　東竜
鶯に饅頭喰る法性寺　下才道輔
橋立の蛙汲來る茶鍋かな　丁國
蔦の戸や最う霞うと飛雀　蘭路

花こ見て酒喰て居ん御客樣　四才 くら女

鶯の月に啼ぬぞ玉に瑕　双洏

秋保の溫泉にて

鶯と住や四五日世を捨て　蘭陵叟 亞雨

初乙鳥來るや是さへ夢合せ　丁口

白椿活て三人に足らぬ友　日升

人も斯うあれよ今年の艸若み　如平

花ながら杖に伐う歟山の藤　媟亭

鶯と我と賜合にけり　百古

一日は年より永し辛夷ちる　士山

世のさまや四月へ越る梅もあり　平角

樹もなくて涼し蹤の爲躰　北溟

晝からの月は出けり釣葱　英里

藻の華や澄きる水は風となる　防人

古麥の餅調すなり夏の菊　五松

山に寐し旅もありしを籠枕　谷村

風薫る枕のもとや尺時計　路猿

こは鳥出りちふ鮎の腹ふりほどき出たるくさ〴〵。

存在に明はなれたり夏の山　松徑

卯の華の月夜歟月の卯の花歟　古翠

暮るとて榾の中や蚊の噪　英李

此三章は福島の蘭叟が米澤日記のうちよりあぐ。

是や此罌粟にも戀の有さうな　蘭叟

開捨にすればふたゝび時鳥　文常

蝸牛そなたの家も重け也　有斐

杜若咲てさはれば側も咲　曰人

再仙府にかへりける時

木の下の空蟬聞に又戻る　且々

身老則衰也

夢にだも翁は見えね若葉吹　馬年

蚊の腹に露一粒は余るべし　百非

蓬野や嵐の空の時鳥　春魯

邂逅に和尙も出て薬摂かな　三醒

大針に物縫里や夏の菊　龜子

短夜や顏に來てつく艸の蠅　共道

何時迚も菊の香よろし夏の月　星園

蕣の蔓あらはれて雲の峯　星壽

子あり孫あり是からは唯夕涼み　女 晩翠

高くなけ母耳遠し時鳥　女 家月

幼きものゝもたる心いそぎに

蟬起よくらきに機を織きらん　女 鶯ゝ

月が出る道理で涼しおらが家　十二歳 發兎

多過てかすかに咲歟菱の花　如山

濡艸や百合見る人あはれ兒　巖水

耳の毛も風が吹也若楓　巖月

時鳥欲には月も雪もあれ　竹志

寂しさを後ろに置て閑古鳥　順女

昧の子の弓に射(躾)られな飛螢　松鄉

物の香のはづれ安さよ苔の華　女 當麻

入殘る月から暑し杉の蟬　嵐月

松蓋を盈さぬ日なし礒涼み　杉耳

釣惹夜は夜とて日にさはる　轉齊

家に船繋で寐たり雲の峯　五童

引ケば來る藻の薄暮や苔さへ　白阿夏 杜同

松の葉を塵にとる日や衣がへ　晋莪

罌粟一重我も一重に乘心　卜居

涼しさにはづまぬ迄の徘哉　士彦

いつの夜もみじかさう也筑波山　百學

奈良へ行人の多さや若楓　天亮

馬買に二日出けり時鳥　圃翠

霜や置庵と見たれば苔の華　心阿

卯の木咲のなんのと瀨田の夕月夜　世竹

夏の雲咲物ならば何の華　晋鳥

片空は蔺田の蔺曇郭公　不仙

不二の夜を汚し初る歟蚊遣艸　宜柳

饅鮓に足りるや紫蘇の種あまり　曉山

かはせみや船に火をかす西坐敷　盲 梅一

合歡ちるや鹿の道にも人通り　田二

卯の花のよすがとなりぬ闕の跡　北水

山越て遠音になりぬ杜宇　十三歳 綾丸

柄をぬかす嵐の傘や時鳥　凡年

月華の買置もせん郭公　壺天

はさかるや牡丹の根にも鑰かけ　東崎

行螢戻る螢を誘ひけり　徹之

一日は艸臥直せ郭公　富泉

我あたり牡丹十日も後れけり　珙次

花に花山家の夏に押こみぬ　東榮

竹凉し二親を端に寐せ申　立仙妻 守一

菖蒲咲や西根の闇を引かぶり　共舟

親ありと石竹賣が答へけり　少年 左立

短夜や寐ても月夜の人の數　同 鞍床

朔日を首途兒して蓁　方耕

樓にのほれば見ゆる田植かな　比布美

○水魚を知ず、魚又水を知ず。水は是紙、魚は是筆、魚自得、我も自得。

凉しさの限りや魚の水さはり　東皐

留主のふりして聞うぞや來よ水鷄　三寵

かつぎ込む戸にすほまるや夕牡丹　芳齊

押曬ひして芍藥にちられけり　士山

稲妻や京を見かへる馬の上　葛三

何處迄も秋をのさばれ萩芒　寥松

稲妻のあけくの闇や最上川　石海

一粒も後れずむすべ艸の露　不材

新鍬は片手に重し里の秋　大巣

世を捨る人眞似もがな萩芒　野松

秋のくれ十日に一度日は遲し　素檗

露寒し海の遠山見ゆる朝　蘭卿

鳴立や馬に教る橋の穴　琴雨

船かけて松に乘せうぞ秋の月　谷雄

灯せば兩方にある枯野かな　楪價

世の中に陷(諂)ひ過て曼珠沙華　芝山

彌助掉せ源兵衞ひけや月の船　足彥

右は秋風のまに／＼吹來したる発雲端に聞ゆ。

庭に出て物くふ里や萩の暮　古人 仙坡

めぐり逢ふ星の柱や不二の山　、巣居

艸の戸の徳や月見も好の儘　馬年

松島の月見し人歟馬に寐て　和節
芦の穂や先度の客の狀屆く　若溪更 舟居
蕣や翌は出て行船の綱　涼堂
琴絶てばいよ〳〵長し夜半の秋　成子
落栗の音や寒味も作り物　詔李
照月や人の中行桂川　巣樹
隣へは秋が來たやら早寐する　与竹
ばさつくや芦の葉裂ヶて秋に逢ふ　邑樵
老母艸など實にして足りぬ草の庵　稻乳
夜の底にある音のする芒かな　第二更 廿二
待宵は梅咲といふ夜にも似し　椿年
明がたき夜を乳囉ひの灯哉　柳雪
松の月仕立直してけふの月　三旦
點滴や秋海棠の浮沈み　桃英
徒臭き海老煮宿の殘暑哉　保知宇
秋寒や蝶の羽干浦の垣　隱 秀阿
一行の雁の落けり誰が所領　柳郊
松の月今となりては月の松　松柏

面白き夜寒や蟬も蚊も逃て　波心
あり〳〵と不二見ゆる日や鮎滿る　可樂
細〳〵と水一筋や萩渺ゝ　松路
誰が袖ぞ棚經よみの小風呂敷　杜雨
紅葉すな美しき過て世は憂に　女 玉蛾
美しき身の世ははやしちる紅葉　、桂扇
はせのぼる露の上にもある世哉　市陽
ぬく〳〵と秋の落つく野寺哉　曉水
能色の世を常にしてちる紅葉　東舟
賣つけや今朝に限りて菊遲し　樵歌
嬉しきは命なりけり秋の與　南楊
船つくや島の豆さへあてた家　祐素
馬下りの旅人も置扇かな　女 羅扇

丁丑の秋
待宵の空待つけしより、居待・寐待の品下りたる夜迄、清光こよなう打つゞきぬること、花月世界の好因緣ならずやとめづる〳〵、血鹿松島の苫家〳〵なさしのぞきて

老海士も覺へねかゝる月の秋　士山
菊遲し捨ての上の世事は是
山茶花を椿と聞も艸枕　蒼虬
節季候は風の牡丹の爲躰　太節
凩のこほれ物なり佐渡が島　對竹
十月の中の十日の寐坊かな　一茶
松臭き冬や筑波の裏日和　蘭卿
二ツ來て來ぬに劣るや鶺鴒　露超
鴨啼や日頃押合ふ家と竹　かつみ
明るみへ春が出るとてちる木の葉　北堂
物に飽て霜夜を覗く眼鏡かな　諫圃
僞は人間にありかへり華　菊也
凩や賣ずに戻る虎の皮　冥々
此くさ〴〵は枯蔦の慰これ、夫と投込たしせらそこなり。
何もなき藏や師走の三昧稽古　東阜
どれ〳〵がきのふ枯しぞ枯尾花　士山

冬枯や人の一期は不同なる　鷺英
藁焚て寛いぢるや胴帘子　三及
木炭焚てしまはふ雪が雨になる　二品
酒は身の花で有べし初時雨　杜同
磨く斧の光にも知る冬至哉　兎州
初雪と遁れぬ中よ浦の松　干必
世のさまや降れどもいかな海の雪　士竜
物申を衾もたけて答へけり　立富
華の木もむづかしげなし落葉には　立邦
鸛鳴松は枯野の主人かな　如筵
鶯を寐物語や雪の窓　文桂
十月の空こしらいて梨子も咲　一之
よい夜には三粒音聞時雨かな　丈葉
茶の華や庵のしだらに耻もなし　巾蛸
軒下も礒なり千鳥來て遊べ　簾客
澤山な千鳥二つにわかれけり　知羅
門叩人起ぬ人聲寒し　桃之
投かへすやうに又ふる霰かな　秀彦

枯蔦や何時でも遅き庵の飯　葛予
けなるくも月夜人なり寒念佛　天有
仕馴し千鳥も來ぬ歟笹霙　里有
雪に身を哭て置ても寒サかな　梅南
なし〳〵の山吹かざす時雨かな　乃十
茶の花や能笠持し山の家　有楊
節分の豆にも老はすべりけり　九十一翁 百兒
小春とは彌生の弟日和かな　石卯
寒ければ寒し柱の影法師　東榮
竹の葉のまた〳〵するや雪時雨　東舟
馬呵谺にまじる千鳥かな　其舟
衰ひや痩鴨囉ふ竹の奥　羽遊
若艸は有しむかし歟霜の菊　甁市
千鳥來て結句寐れぬ夜が多き　隨馬

こぼれかゝるさいふべき腹して、
俎板の上に鈎の光をおそれ、飛遁
れんさ身つくろひたる心のうち、
いかにかあらん。捨る此身は露斗
もおしかられど、せめて是にも聲
あらば必いふべきありさまなり。
あなうたてき人の鬼やさ、厨の中
た迯出侍りて

鱏も子に此世の明り見せたい歟　士由

眞柴引折たる山邊の庵に一夜を明
し侍るに、曉の袖のいさ白う成た
るぞ、芳野・嵐山なんどの木々の
下臥しけん心地なりけり。

花に似て拂ひにくさや榾の灰

咲世事は葬もあるに小手枕　士由
垣一枚の彌生をかしき　馬年
川舟を春野の端へ引あけて　由
月の支度にはやかゝるなり　年
三粒ふる雨にもまじる秋の露　由
歸おくれてかへる乙鳥　年
志賀山の眞柴夜からいぶしたて　由

當の御成とちがふ道觸　年
によつこりと出來あがりたる彌勒堂　由
波もて洗ふ顏のさめ〴〵　年
卯の華の七郎君と中捨　丶
粽ゆふ日の月はなに月　由
二人してくふ程づゝは囉ふなり　年
竹さへあれば京も住よき　由
けふ翌に天氣のかはる雲もなし　年
雀の居あまる處なるらむ　由
かへり花朝のあいだのそゝかしく　年
筏でおくる杣がはつ雪　由

鶯に起され驅て待もしつ　士由
薺の枕ちり初る朝　凡年
わや〳〵といふ間に春も過ぬらし　東崎
城の修覆の靜なりけり　波心
纜の波そはいする夏の月　梅南
螢負ふたる螢飛つく　壺天

蕪を眞菅の莚にとめつくし　有楊
額おもたく鰐口を鑄る　敬之
活佛最早御着と立噪ぎ　富泉
七濱富す魚あがる暮　可樂
けつそりと時雨るゝ露を吹なくし　東榮
蔦の手もとの秋はいそ〳〵　羽遊
浦島が屋敷の月もかけ仕舞　泝市
寐てもゆらるゝ駕の醉　蟻宰
漣の夜明嬉しと掬ひあげ　立富
扨も彌生の朔日の雲　蘭卿
唉花につきあたられて華の唉　琴丸
春のひかへに暮る法輪　執筆 共道
衛鳴口さへ夜から帆網よる　葛予
消惜みする片町の雪　知羅
桑摘の眠けざましに舞踏て　龜水
腰盃の何時かなくなる　士由
三日月の氣色を透す芦簾　桃之

ゆすれば落る柿ぞ淋しき　巾蛸
漸晴るゝ雨の垣穂に稲かけて　秀彥
二タ月ぶりの夕市にたつ　百古
夢にだもつれなき人を假面にうち　天亮
泣顔直せ磯歩行せよ　輝潮
百合の香の外に手段もなかり鳬　其聲
夜ぐまつくりに參る螢歟　素明
月過は綿の直さがる伏見脇　林々
召させかへたる蓑の秋風　竹止
書に見てしはにふとやらの萩に寐て　士山
もだせる華をやつと待とる　孟咬
野鼠も穴に居つかぬ春なれや　杉耳
霞みはぐれて見ゆる小鳥居　潜竜

後れてこさづかりたるせうそこ、此撰にもれたるなかこゝさいふ友がき、社裡のはひだりにのす。

江戸橋で鼻突合ふや郭公　燕市
野狐も聟に行けな時雨ふる　行脚 夕且
借牛は逃たになつて時雨けり　東峨
義經の脇掛松も雪解かな　淋山
榾の火や霜の艸鞋に煙たつ　女 しけき
鳩吹を聞て老し歟檜守　巨山
鶯の浮世は長し郭公　桂黛
綿ぬいたやうすに見ゆれ母雀　琴羅
淺茅野や惜しい處で啼千鳥　翠居
夏の夜を美しく寐て仕舞けり　羅州
何人の笛ぞ卯月の河原芝　梅英
宵闇に成て二日め時鳥　竹富
葉櫻をもてはやす沾の庵哉　文好
鷄と寐し初瀬も近し夏木立　橘雨
時鳥啼や疊の露臭き　古人 二蘭
窓蓋は閉ても置ず春寒み　雨鶏
啼鹿も留主の木の間歟蛩が子等　蘭舟
雲脚も都めくなり春の風　百且

若楓犬の飛脚も通りけり　素明
芍藥や紫かゝる朝筑波　亞万
雀等も袷着さうな天氣哉　其磐
最う梅が咲て歟隣噪しき　東州
眞ッ向に嵐打われ蜀魂　其圭
雀子の暮はぐれたる牡丹かな　少年 正三
糸遊やけそりとしたる月の顔　東雄
滿月や忝も華の客　潜竜
芦の芽やふいと飛來る蟹の泡　無底
あらましの春もすねたり藤の花　似山
足代の人の下行乙鳥かな　里雄
鶯啼や屋根の上まで淺茅原　桑蛙
馬鹿聟に網せられたる乙鳥哉　探虎
近づきのやうに來て啼水鷄哉　者來
白雪のたまるに減るや船の垢　五梅
奥山の杉を見はやせ冷し汁　北平
屓ふた子の寐顔に似たり花菫　たよ女
月夜とてみだりに散な犬櫻　行脚 加年

行鴈を見やう見眞似に鳴もたて　木鳳
涼しさや飛驒の匠が橋も嘘　永川
吹やうでふかぬは風の春ならめ　行脚 士祥
涼しさや月にも枕かし申せ　曙山
蠅淋し疊のかたき奥坐敷　壺山
雨になる朝や彼岸のあつめ汁　鷺溪
頓てちる花ともなりて惜まるゝ　橋州
春の雨或は地より降のぼる　月居

あが友に赤松和鳴ちふしれ人ありけり。みちのく伊具の郡円田といふ處に住て、眼科もて奥羽・關東・北國の間に名をとゞろかし、其余聲天下に高し。俳は松窓・金令舍の百棒を蒙りて頗卓見高致あり。しかれども無聲中の風雅に遊びて句を吐事稀なり。自淵明が無弦の琴に比す。偶吐所の物、笹谷峠にて、翌越ろ山さへ見へて秋の暮　月花の世にも海鼠の姿哉　やうのおかしきくさ〴〵少なからねば、つゝめども世の撰集等にもれ出る毎に嘆息していへらく、嗚呼素

志をあやまてりと。其世誹に異なる氣象、豈とふさまざらんや。おのれ又此集に其妻と嗣との吟をあげて此人に及ばざる物は、交淡うして水の如しといゝけん眞の知己なればなり。

山伏の法螺うつし行清水哉　和鳴 妻

寐はせまじ寐ゝば眠たし夏の月　同嗣 亞三

枝の鵜年取鮓も漬し顔　士山

磯山や櫻の陰のみさごずし　曉臺

此二章は次手おかしかればのす。

monotkijoe. tamano ienj no.
モノギヤト 寒 ノ 浦 ヘ

tabi no jadorini site voorlan
旅 ノ 宿 ニ シテ 和 蘭

Dno (Hendrik Doeff) Baas
陀 ノ ヘンデレキドウフ 殿

1816 april dertien dag
和蘭暦千八百十六年四月十三日

當

大日本文化十三年丙子三月十五日
通辞 子調 譯

彫刻　仙臺國分町　加志和屋正六

はたけせり

乙二編

（はたけせり）

旅すればそれさへうれし畑せり　乙二僧都、旅にありて此集をつくる發意なり。但し句の意は、徒にある〻薗生のはたけ芹佗しげにてもある世なりけり、といふ古うたをとりて、か〻るわびしきものをさへ、おもしろき事のかぎりとおもひふけりて、草紙の名にまでものせし作者のこ〻ろおして知るべし。あはれ薗生の畑芹、見るにさみしと打返して、かの文七が元結車の紺ひき歩みさする場なんど作るべからず、す〻き・かるかやしげる中に、で〻虫のもの閑なるたどりをも見知られなば、それぞ僧都の本意にもかなひ侍りなん。文化元年三月、せき屋のさとの花見がてらに、草の戸ほそを訪はれて集兆序レ之。

十時庵に行事六たび、さるほどに
雪と時雨と降かはりて

都鳥なるれば波のかもめかな　乙二
　柊うりにたちまじりつ〻　みち彦
紙雛の袖もかへさぬ風吹て　二
　淋しくぞなるかまつかの花　彦
山の月こ〻ろやすげに明るらし　二
　素湯焚ながら木兎をしかける　彦
さや〳〵と三昧堂の鐘が鳴り　二
　舟に別れてかへる傘松　彦
道きよむ人の間よりはしりぬけ　二
　あすの樽をおくりたりけり　彦
降空の雨ほど白きものはなし　二
　がくりと下りし金澤の秋　彦
いくたびか馬のはなひる月の夜に　二
　みそはぎひて〻妻をまつ宿　彦
何よりも哀に見ゆる漁笛　二

大井の今日に逢たてまつる　彦
ちる花は寒しと人の中出　二
桑子のはこを捨初るなり　彦
蛙なく垣根の岨もひる間にて　、
奥の一里のおもしろき旅　二
運慶がひとりの弟子に成すまし　彦
つばき火ともす冬は來にけり　二
夕がほのわら屋のやうな閨の戸に　彦
蟻にさゝれてうらむ琴持　二
栂の尾の橋の下道ほく／＼と　彦
霧をしづめる日がのつと出る　二
啼雀こゝにも城を置ヶとこそ　彦
老のこゝろにかなふ酒のみ　二
いかな／＼風も通さぬ月の前　彦
秋のとりまく可兒の大寺　二
淋しさにかゝし作りてさびしがり　彦
十日のきくの露やまつらん　二
古ゐほしほしきとならばまいらせう　彦
磯の小貝に下駄ならし行　二
花咲ば信田の里もあらはれて　彦
宿代かゆるはるのかた時　二

旭よき峰／＼かたれはちたゝき　大江丸
みなござれ何はなくとも梅わかな　長齋
明ほのを降かくしたる深雪哉　自樂
松引た人とし行や伊勢熊野　友國
つばめ往て秋が淋しう成にけり　瑞馬
ひた／＼と凉しうなりし峠かな　鷺雪
たとへ子がなくとてもあれ五形華　方中
よき人の門見て過る小はる哉　升六
こだまさへ花の中よりよしの山　月居
馬の尾の蠅もいぬめり大師講　喜齋
山風の吹て久しきつばきかな　一草
朝がすみほとけのはなも匂ふ也　桐栖
灯をともす軒の下までかれ野哉　呉來

雪と月と椿ぬすみの來る事よ　布舟
海士が子に礒菜をとはんすまの春　魯隱

雪となる雨や朱雀の小燈籠　重厚
秋の夜の哀にまけて寐たり鬼　蒼虬
明安き夜を淺澤のかきつばた　玉屑
雲雀なく菅田の水のかはきかな　柏翠
蜊むく小屋にも寐ばや三穗の月　芳之
十月や日ぐれ〳〵の西あかり　丈左
ちどりなくまでの水也帋屋川　騏道

旅にあれば物くふひまも梅の花　羅城
きのふ見しまゝにもあらず枯尾花　岳輅
掛乞にみなくはれし歟にし肴　梅間
世の中にたらぬ鳥也ほとゝぎす　松兒
嬉しきは時雨よ雪はおもしろき　李臺
はるかぜにふみこむ鳥のきげん哉　天老
身をつゝむ家は持たり冬の月　少汝

柿寺ややぶの中にも鳴ちどり　士朗

落葉して空の哀はやみにけり　柳莊
蠶の子のうつくしうなる若葉哉　希言
どこまでも見ゆる伏屋の柳かな　杜厚
秋風や角力もとらず大おとこ　艸司
花のやま誰が掃やら奇麗也　文兆
今の間に冴かへりけりをみなへし　蕉雨
有がたき清水の出る木下かな　壺伯
朝のすゝきなま〳〵しくも匂けり　素檗
夕波をもつて出けりはるの月　若人
よき里や門口までも早稲日和　虎杖
糸遊やほどよくならぶ山の形　吐丈
永き日の庵の守する菴かな　伯先
花見にとうちこぞり行田家かな　竹摩
柿の色遠山松もさむくなる　如毛
寒あけの朝寢を起すとなり哉　雲帶
からす來て何ともせぬや萩の花　可都里

晝からの日はよく照てきくの花　浸ゝ

見ぐるしき旅のこゝろよはるの雨　卓池

木のもとを定ればちる櫻かな　椿堂

蛤のおなじふたつもなかりけり　青川

たやすくも時雨そめけり山の家　嵐外

さりとてはかすむもの也海士が業　雀非

藻のはなに捨ては拾ふ命かな　遲月

けさのはるどこぞに誰ぞ草まくら　樗堂

舟中

さとの灯の古きすがたよすまの月　莫二

杜若山路わづらふひまもなし　碩布

願あるうき世か花に番ぶくろ　星布

若竹を杖にもいざやふしみまで　双烏

なの花や薺のはなは戀をもつ　柴居

有明の峰の高きに野尻の池の深きも、唯有一路の雪の月なり。

何やかや氷の下に枯にけり　加玉

皿の雪木に居る鳥も見へてふる　雨塘

片時もおくれぬふりや野萩咲　成之

松風の下をふくなりはるの風　眉尺

柿賣のいとま乞する月夜かな　葛三

暮かねて月に成けりふじの雲　宇瓊

秋の日もしらぬ男歟松葉かき　幽嘯

うぐひすも鳩も來にけり晝の空　何尺

小雀のうめもさきけりむくさの屋　共靜

みじか夜はとてもみじかしほとゝぎす　喜年

うま〳〵と袖にかけたり春の月　左琴

すみかへる庵はあれどもすみれ草　岐東

ふたつ啼て戀もこもらぬ水鷄哉　子臧

萩持て出どころもなき菴也　子鎌

牧方の馬にふまれな朝ほたる　青市

青嵐ふくや小寺の古茶釜　里叟

面白う春のたるむや雪一日　路丈

溫石のさめしもしらずあかし浮　吾長

鈴むしや山根の橋はいつかける　野松

ある人のすなるよきくの虫供養　五明
おのが世のほだしは多し秋の月　河道
飛鳥の一まきおりよはるの山　文袋
行鴈やひくきはひくき山の皺　巨洲
戀鹿の波をかぶりてもどり兒　祖六
月雪の年もなごりや鐘のかず　花耕
初ざくら戀のうらみのうつくしき　丈二
澁柿のおせばつぶれてなく千鳥　爾竜
おぼろ夜やはことり啼て雨となる　呉石
待宵や汐にとられし海士が門　長玄
行としの馬に付たる木履かな　寒江
六月や夜を見にゆかば日和山　左母里
包尾の鯛のどかなる都かな　韋之
鶯やうめのつぼみを戀にして　几峰
園わけの神もいましてほとゝぎす　とよ女
置しもやみなうら枯の碓氷山　北明
苗代や御師をやどせし門の月　五弄

三崎山
秋風の尾ながは鷹に追れけり　三夕
兀山のはるの月を吹あらし哉　桃吏
御子等子の梅見て來たかなづな賣　龜汀
はつ花の人いつはりをいふ世也　對阿
古園やうめにぬれたる鳩のはし　雪仙

はし書略
松島のはつ日を座し朝日哉　長翠
片照や人にふまるゝ河原萩　田山
茅苅のなぐり立けり冬日影　掌石
雁鴨の連まちするか片渚　百梼
出て見ても〳〵霜の天の川　龜白
橘の軒にもさはぐあられ哉　三濤
萩よりも尾華はやすき枯ざまよ　眞沙支
筧まで蔦のとぢたる山家がな　道澄
明いそぐ夜を永くさし五位の聲　共丈

奈良へ行日はなの花にかぶれけり　　　　　　　　　　　　　乘蝶
木の芽して風ひきおゝき世界哉　　　　　　　　　　　　　杵臼
菜屑はむ家鴨は水に時雨たり　　　　　　　　　　　　　五棟
永き日や素湯ひとつなき藪の家　　　　　　　　　　　　　六華
みのむしは虫の外なる師走哉　　　　　　　　　　　　　南桑

蝶鳥のちいさき眼にも秋のかぜ　　　　　　　　　　　　　詠歸
はる風や子の追ありくかんな屑　　　　　　　　　　　　　曉烏
朔日の日より先いふ小はるかな　　　　　　　　　　　　　宇明
啼ちどり酒ぬす人も來ざりけり　　　　　　　　　　　　　吳水
冥加とは衞きく夜の寢酒哉　　　　　　　　　　　　　　　看車
滿月やどこのうらまで鳴千鳥　　　　　　　　　　　　　風泉
落葉して何やらたらぬ小寺哉　　　　　　　　　　　　　俚言
松が枝におさるゝ家の小春かな　　　　　　　　　　　　　九皐
木まくらも二つとはなし蔦の宿　　　　　　　　　　　　　布什
小兎を追なくしけり畫の露　　　　　　　　　　　　　　　射毛
赤本もはるのもの也呼子どり　　　　　　　　　　　　　　玉珂
うき鷗のどけきものにきはまりぬ　　　　　　　　　　　　幸內

門柳夢見るやうにのびる也　　　　　　　　　　　　　　　壺半
若草や溜井の水のいきかへり　　　　　　　　　　　　　　井德
降雨に猶しづまるやはるの水　　　　　　　　　　　　　　也寥
朝とくにわらふとなりやはるの雪　　　　　　　　　　　　一瓢
菜の花や忘物して二度歸る　　　　　　　　　　　　　　　浦人
腰窻に日のさす嬉し海苔の味　　　　　　　　　　　　　　萊波
夕かげや茶木畑も接穗どき　　　　　　　　　　　　　　　撰蝶
かすむまで千鳥追けりはるの磯　　　　　　　　　　　　　洪水
扇さして時めく人の余寒かな　　　　　　　　　　　　　　種玉
雛の音をわきて聞なりはるの人　　　　　　　　　　　　　松風
春の月梅若もどりよき頃ぞ　　　　　　　　　　　　　　　弗人
琴の音もさまたげぬ也鳴かはづ　　　　　　　　　　　　　洗耳
日あたりや里萬歲が高木履　　　　　　　　　　　　　　　笋露
芦の芽もたゞはおかぬや鳴からす　　　　　　　　　　　　玄ゝ

あらたまる梅よ月夜よ我は何　　　　　　　　　　　　　　其堂
こと繁き松のこゝろよまつの雪　　　　　　　　　　　　　完來
かけ稲のぞんざいなるをけしき哉　　　　　　　　　　　　寸來

峰の松雨こぼすまでかすみけり　春蟻
麻買の死なれた塚や麻の中　梅壽
梟もかへる春なれつばきさく　自來
置しもの門にもたばや鶴見橋　暮玖
こゝろにもあらでしづけしほたる賣　在江戸 南岳
白周庵にとまりて
みじか夜や蚕の蝶のはなしせん　仝 美敬
市の雛花の戀しき御皃かな　濱藻
たつ鷺のたゞおろかさや汐干潟　其月
焚とりて尚〳〵くろき小窓かな　白應
天の川淺草寺のうしろかな　梅夫
青空を家ごとに持てころもがえ　白園
きのふ寐し嵯峨山みゆるはるの雨　一茶
よしきりの巢を見に來る讀書哉　恒丸
物喰ふ口の小にくしきり〳〵す　一蕙
蕾がほのはつ花見ゆる小雨かな　只兮
水仙も過たる安房歟なくちどり　雪人

百合の根の白きも寒し臺どころ　九藏
ほとけにも松はゆるさね立しきみ　輕舟
夕風や御秡の鈴もふりあへず　吳杉
月の輪もふる歟時雨の筏乘　夢樂
遲き日や鳫も萬歳もかへる影　許一
ゆふだちに眼もさまさずやあすならふ　應ゝ
里並や杓子くれても春をいふ　無説
引鴨や朝和つゞく舟のみち　胡準
舟木伐ると聞さへおそき日頃哉　みち彦

人の交りは蜜のごとくならんより、澤澤水の流とゞまらず、物にしたがひて西すべく、ひんがしすべきこそ嬉しけれ。一掬して無味のあぢはひをあましさす。これは水をもて水に投ずるに誰の人か其さかひを見ん。我しらけたるたぶさ髪は、ふたりの入道たちに姿はかは

れども心情さらに隔なし。けふの踏青や、句をいひ、つばなぬき、酒のみなど、おもひ／＼の遊も日いたく西におつれば、例の草堂にかしらつどへて、ひさつふさんを奩合ふ。是日々のおもむきなり。

はる風のあとさきもみな咄かな　成美
うめの木下の夜はなかりけり　乙二
芦の芽の錐もかくさぬ波よせて　巣兆
小雨を袖にかへるさる引　美
とり／＼に榻かきすえる朝の月　二
扇のやうに秋のひろがり　兆
親子住山下家のきく節句　美
木をゆるがして油實をとる　二
布施にひく馬の白きも小淋しや　兆
雲の影おく佐屋の十代田　恒丸
翠えらむ門の扉を立かけて　二
粽ほどくもおもしろき夜に　美
岩梨の月に空也の肥るらん　丸

わたり初する橋の水音　兆
泥足の鷄を大事にかゝえ行　美
三井の別所のわか茶うつとて　二
ちればさく花の梢のつき揃ひ　兆
紙鳶の繪の具のかはくさむしろ　丸

鍋の尻かきに出ても啼ちどり　浙江
夏の月ぬれくさりてぞ光りける　心匪
星ひとつ木槿一輪艸の庵　任只
うぐひすのものにして置小家哉　双樹
夏の夜を毎日松のあさ日かな　成美

羈中

わら苆やまなこに暑き向ふ山　東子
はるの野やたま／＼見ゆる刀さし　和調

東子みちのくへ行を送りて

ゆゝしさの出立もはるの小笠哉　臥梅

三日月をとくまるめるや春の風　南山
捨人や露の旭の蚤せゝり　國村
ちる花のかげより見ゆる田打哉　里江
我園に入れば我もの雪の鳥　野遊
おもしろうかげをつくるや若楓　夫山

多摩の郡に入て

むさし野に垣根むすびて庵處　柳翠
水鳥にはたけのおゝき在所哉　桑娥
とんどたくほこりの先の柳かな　燕市
薄氷や水屋の下の店がらし　莚菴
機織のさぞいそぐらんちるこのは　しげ女
名月や高きところに琵琶法師　一雨
すゝ掃の日も在おりる門田かな　路川
杉原やこがらし吹てうつくしき　語竹
うめが香に朝起すれば窓の雪　青花
浦山の風かほる也江湖部屋　麥二
名月や蛤のなくながしもと　三壽
野の柳同じすがたもなかりけり　豆箕

草麥の露にさめたるねぶけ哉　李喬
合歡に來て光のうすき螢かな　阿陵
かた丘の日は兀て來る穂麥哉　有麥
信濃路や人徑するはるの風　三巴
楪竹もたはめば雪の雀かな　巣兆
華つくや深山分出るぬれうつぼ　みちのく鬼子
地におりて鳴てきかせよほとゝぎす　丶
うぐひすの居處ゆかし秋の雨　鬼孫
とし蔭が行衛聞ばや冬木立　丶
人の扇ゆかしとおもふ折もあり　冥ゝ
うぐひすも子を持ばこそ春をまて　秋夫

戀

佐渡山の月を見果る浮身哉　萬象
泣やまぬ子をしたのまん傀儡師　吾石
永き日の旭さしけり鳥の籠　与人

はるの夜の富に飽てぞ茶筌挽　似水
松の木のそれさへ露にしたり皃　冥也

松窓が母の喪にこもると聞て申おくる

この秋はとかくに月を見たまふな　西河
しぐるゝや夫だけもなきちぎれ雲　踈蛍
木のもとや雨のけあげのわれもかう　五峰
柿もみぢ馬はいくつもはなれ居て　露秀
ものぐさき我を笑ふ歟春の山　安藤氏 子直
空也忌やよく似し人のふたり行　三里
山あらめきくうる人の歸る道　雨考
いくたびぞ蚕にかけるすり火打　東娥
秋の日のほそきにならへ柿なます　平角
夏川や蜷にすみきる水の垢　雞路
六月の潮さし來る芝生かな　春岱
あかつきや雪の嶋根の鳥くもり　蘭翠

寢てしらぬ人は若きぞ野分ふく　彦貫
誰やらが先へ來てゐる若葉哉　八風
ありあけし菅のとめ火よ初がすみ　英里
露さぶく戀まさりけり遠火影　東裾
蝙蝠よ來ん世は雀歟うぐひすか　素郷
かたぶくは月のくせなり鹿の聲　雄淵
篠の子のやすくも過る日數かな　卮言
大風やきじのかしらに日のもるゝ　亞兮
猿町の人とよばれて降時雨　了童
ひとり居や雨のよせ戸の菊の花　義平
さゞ波にぬれて咲たかけしの華　阜洋
うぐひすや山の厠に霜みゆる　百非
折てやるほどに咲けりうめのはな　會外

洞月が新室、あるじにかはりて

來てかたれ夜寒の庭の楢かしは　年ゞ
花の空聲なき鳥はなかりけり　買月
うぐひすのもどる時分ぞ汁たかん　北鳳

乙の子は椿折けり梅のはな　广ゝ

ある人南部に行を送りて

夏山を見てたつあとのこゝろかな　南山

おのれのみあらしに逢りをみなへし　呑溟

麥の秋晝はひるなり月夜なり　白居

はな蓼や淋しさ過て夜見ゆる　鉄船

鼠ども庇に米なし柳ちる　笘菴

春の夜を鳴さましたる野鴨哉　文卿

うす雲が來てもねぶるや合歡の花　城山

草の戸の百合に客ある夕かな　楚川

あとじさる方もすみれぞしのぶ山　巢居

臼ほりに樒の匂ふ冬至かな　栢翠

すゞ風や泣子のこゝろあともなき　紫石

來たほどはみな闇へけり夜の鴫　美都良

影となる草ふみ込な山しみづ　旭翠

なの花に藻屑なげ越流かな　玉皃

茶をさます風がふく也蚕時　蓬山

明暮の水汲みちのぬかご哉　芳之

瑞鳳禪刹にて

帋衣着て笑顔拜まん寒山寺　蕣林

あすからは朝の間に見ん秋の山　曰人

七夕の灯をかき立よ草のやど　無外

蚊のくふもしらじ雀の小さかもり　無底

瓜にまで鳴子引けりはたけもち　柯亭

鹿のあとつぶ／＼雨の降にけり　蓑虫

風くらし麥ほる鳥のかへる藪　沙曉

さま／＼に卯月も暮ぬ紫蘇の汁　石丈

山の井に柄杓もなくて秋の雨　竹冠

さくらにもとまらで春の入日哉　菊路

笈のほとけうめの旭に逢給ふ　桃巷

淋しみをけだし持けり青むしろ　旭水

吹風のやどると見ゆるさくらかな　寛水

越後抖藪(擻)のとき

噓の秋も六日ぞ宵のそら　李嘉

夏草をむすびあつめて旅寢哉　無樂

芋植る間にも火をたく小家かな　澤鷺

ちる芦の淀野と申せ風ぐもり　雲路

山鳥の寐處までもきくの秋　茂女

せみ啼やまなこふさげば腹の中　尺山

麥蘿翁は松窗の父なり。此翁を招きむかへたりし清淨庵といふ所あり。終焉のあさゝへなつかしさて、折〳〵來るごとにかしこに伴ふて、あはれがらせけるも、十とせ六ッの年月をかさむたるけふは、かたみに黑かりし髮の白くのみ見えて

淋しさの古うもならずかんこ鳥　曉桂

梨の大木の苔をおがむ日　乙二

碇うつくろがね工まいりけり　竹冠

行器の房の片さがりして　澤鷺

有明を七夜見せうぞたね瓢　旭水

菊はむむしも鳴といふ秋　菊路

名月や延てはすごきなめくじり　竹路

つりがね草かりこぼされて水の上　丶

ほとゝぎすあらしの中の家二ッ　麥二

蔦かづら思ひもかけぬ酒屋哉　麥蘿

かれ萩や松一木ある谷の坊　懸車

雉なくや繪にもかゝれぬ朝がすみ　寸雅

笛吹をさそひ出したる御秡哉　白泉

茅の輪ぬけて松もほどなき唐崎ぞ　亞笛

はつ冬や家鴨ののぞく草の窻　桑布

ちるは〳〵薄柹着たる人もはな　且茄

寐るといへば隣翁もどる月夜哉　石井氏君美

こちらにも戸を付めされ萩の花　海樂

都去て麥うつ里の古井かな　關城

鶏のぬれてありくや紅あかざ　陽魚
うぐひすの野うつりしてや淺香山　素月
ちる花や小雨のからむ夕げしき　硯月
澪竹やちら〳〵と鳫の啼わたる　子直
松風の音もほしげぞたく蚊遣　文沖
蕪川をとゞめて
寢てかたれあかざの露ののぼるまで　巴水
胡鬼の子やとり殘されて日のあたる　柳女
大としは鶯も寢ぬ夜なるべし　可領
ちがや野にかくれかねし歟片鶉　空明
柿園を夜毎にはやせ鉢たゝき　巨山
時雨〳〵多賀の藪守物とはむ　可遊女
松の葉や一霜はれし窻の山　布席
ちさき鳥の脛にもかゝる春日哉　蕪川
行〳〵て翌はいづくの初鳫ぞ　藏六
はつ花になり行軒の雫かな　不休
つゝ鳥や岨の立木に鳩の居て　星眉

滿月をしぐれべうとて寐ざり皃　雨舫
姫の國にあるべきもの歟杉茶畑　羅洲
三日月の爪先くらし鮓の壓　八十翁 花仙
うつくしき夜に別れてや秋のたつ　松鴎
雞の遠音しづけし杉の露　雄飛
竹に書墨もかはかず風かほる　氷壺
小田の水吹かけられて立きじ歟　文梁
山に住からすの糞かきくの露　桂蘿
鷹飛す男をよそに雪見かな　沙鷗
ほき〳〵と萩折る人よ何ごゝろ　英二
酒のめと我にいふた歟かんこ鳥　麥洲
さればいのち〳〵よ冬つばき　岡帋
むら雨の礒に見てよし一ツ鳫　菱湖
十月もうしろにすまじ菊の花　素來
すびつさへおぼろ立けり暮の月　鳫門

矢篦伐の音に眼さまして春の鹿　俊左
重陽の雨はふる也藪の家　朝窓
明星ののつこす家やわか楓　素菊女
望の夜の乙雪やたが願ひ事　鳥秀
脛の毛のはづかしうなる清水かな　方壺
田植ならうやまひ申せぬれ佛　橋圃

きよ女のもとにとゞめられまいらせて

あり明になるまで花のやどり哉　春翠女
さゝ百合や波こす風の吹あたり　菊車女
五月雨や湯殿參りの迎ひ馬　仙兆
すみれ野になげわたしたり門の橋　勝丸

しばらく駒形堂のほとりにありて

牡丹さく人の脊戸也すみだ川　子行
虫なくやわたればうごく橋の月　三径
龍膽のとがりてつよき匂かな　蓬寸
寂として不二見る寺やつばき咲　知中

最上川舟中

水の上の夜もみじかしと申けり　蘭丈
望潮に吹かつはるのあらし哉　露英
梶の葉やかゞみにうつる雨の宿　一鳥
合歡の香をすくひまぜたる夜網哉　二蘭
生海鼠干旭出たり家のかげ　和鳴
三日月や連歌して行舟のうへ　橘雨
うぐひすの老をなぐさめ苔の華　和道

ある人に文鱗が句を戯れて

古はかま三夜さの月にぬかずあれ　季在
はる雨や海に遠山あるところ　露超
春の水山のはづれや木のはづれ　素蝶
すみれより一きはあまし木瓜の露　白兎

出羽三山順禮

山一日おりて一日の秋の風　麥因
妻子ある隱者あはれめけしの花　路芳

うぐひすを見て居れば降あられ哉　蘿橋
芹の月ちかくなるほどあはれなり　呂蝶
ちるはなやほとけ御前が笠のうへ　風後

三日月に鐘ももたぬよ埜寺　梅左
あめの春御傘かざゝぬ菴もなし　渚弓
星ひとつみゆるも寒し藪の奥　維新
竹に聞雨一時やひやし瓜　琴二
花の香に羽せゝりしけき鴉哉　桃ゝ

不忘山中

夜ざくらを伐事なかれ天狗達　青良

面かぶる子のあしもとの柳かな　春魯
とくさかるこゝろの外の寒かな　一鼠
玉苗のくづれしさまやしのぶ山　李光
わや／＼と宿は帆をぬふ月夜哉　柯園
屋根にさす日もわすれずよつゝじ賣　釣翁
さかづきのおそき人さへ春嬉し　五澄

ある時はかきけすやうに池の鴨　文翠
名どころの野ともしらずやかざりたく　文何
芹のほの波に落さぬ月夜哉　一瓢
人の子の鵜舟の旭おがみけり　西琵
酒の泡こぼして宿のさぶさかな　青牛

二月の閏あるとしの彌生

咲いそぎして桃のちる三日哉　湖秀
鹿の子／＼浦人へるぞ寐にかへれ　はる雄女
うそつきも誠は寒し冬木立　古橋
鴫なくや浅き檜原のへだて垣　瓜雄
弓とりも眠がるものよはるの月　柳城
我いほは露の根なれや虫の聲　乙朝
稲の香に松風あまき夕かな　壺春

疎林曲溪のほとりに、世をのがれ住て

元日も粥焚おろす小鍋かな　素兮
山鳩の聲よりとしの暮にけり　ゝ
苗代の注連にも夜の殘りけり　寸坡

雛は空も思はじ若楓　斗水
中山の松のたよりも月夜かな　壺中
咲かけて我をまちし歟澤桔梗　淙石

歌には暮春の題にのせはべれば

とても減る春にはよむなかきつばた　双魚
鴫なくやありきあたりし岸の菊　一水
茂りけりどの家見ても庵らしき　五岳
費事と覺へぬ花のあるじ哉　乙鷺
青葉山や初ほとゝぎす家ひとつ　旭舎女
雨三粒ふればかゝしの古にけり　文窓
庵ふたつもつ人も蚊にくはれけり　つよ女
梅守が鎖ぬすまれし寒かな　呉峰

江村曳杖

芦の家に小鍋かけたりむら霞　曳尾
うす暮をめでたくしたり時鳥　きよ女
鮎桶にとり付やすき松葉哉　巴陸
なしの花ちる歟鼠のかくれ里　一二
凉しいか夜も笛ふく蓬原　青莎

うぐひすのにくまれ業よ楮うち　箋月

旅のころ

見るうちに淋しうなるな須磨の春　大呂

此君亭即事

しぐれけりほち〳〵高き竹の節　乙二
殘る黄菊はみな酒になれ　文卿
草まくら母衣負ふ人を見に出て　笞庵
門のうちまでさして來る潮　芳之
いかい事かうろぎはなす有明に　卿
ふくべのはなのさりげなく咲　二
伊勢使行〳〵露の置ければ　之
遣入るほどの家に物よむ　庵
涌もせで捨たる鉄漿の恐しや　二
むすべばとける松も戀ぐさ　卿
袷着る夏はひと時永平寺　庵
月にうしろを見するつゝ鳥　之

火をもやすたびに笹葉をかきあつめ　卿
　佐野田を射こす矢をとりに行　二
足利の翁が富をうらやみて　之
　廂ひたゝれの袖あはすもの　庇
吹風も花の木の間をつくるらん　卿
　水すむ方へまはる若鷺　二

雪解を見はりて居るや岨の鳩　みち彦
　かすむ空にもなくならぬ月　乙二
夏ちかくしがらき笠を賣歩行　彦
　小舟をかりる小西來山　二
ひは〱と松葉焚香に夜の更て　彦
　砥形のもちの粉をこぼす也　二
舞ふ鶴もめでたき數にかぞひあけ　彦
　出羽の羽黒にわらじつゞくる　二
七月は茄子の味もあはれにて　彦
　櫛笥のふたのあはぬあり明　二

我なれやはかまもとらぬ糸すゝき　彦
　波のかゝりし墓掃に行　二
塞翁が馬ももどりし冬のおく　彦
　鴨が啼てもゝゆるとぼし火　斗水
醒が井は世にありがたき處也　青莎
　むしろにあまる露の青うめ　大呂
さま〲とはこぶけしき歟年の華　きよ女
　すゝり抱てかけおりる山　春魯

朝がほの遠山色に咲にけり　巣居
松風に狐の老る月の夜歟　可領
人の子をもらひに來たり里の花　桃子
　はつ音きゝし日は
酒でよぶ使も來たりほとゝぎす　竹冠
萩よりも野ぎくに寒し水明り　無底
正月も木葉たく家の椿かな　柯亭
松ちるや大河にうつる屋根の上　李光

尾上越鴨すら月はうれしい歟　青莎
ちさのとう去來が留主の戸は立ず　寸雅
行はるや夕波かゝる山のすそ　海樂

伊勢道中

雲津まで吹つゞけよや春の風　李臺
はしふともゆふ暮もちし九月哉　石丈
その原や雪の中にもうつ砧　陽魚
せみ鳴やふみつゝ過る柿の花　一簫
日のさしてあはれ也けり白椿　雨舫
しぐるゝにまだ歸らぬか菴の鶴　二蘭
家鳩のあしあとにちるさくら哉　梨岐

六浦夜泊

夜しぐれや鐘なるところ稱名寺　冥々
思ふにも見るにも雪の高根かな　三徑
つぶら寢て起ては華に追れけり　無外
旅人も見ゆる山路の穗麥かな　年々
麥蒔て雀も來さうな月夜也　露超
酒賣が居らずもこゝぞ松の月　橘雨

萬歳や小高き山をかすみ來る　烏秀
行春のこれをくゞる歟笛の孔　無樂
六月の人の中なる筧かな　美都良
人なくて穗垣の雪のこぼれけり　双湖

ゆりあけといふ濱にて

魚くさきむしろ敷也初あらし　柯國
きえさうな夏の月夜やみゝず鳴　蛙眠
はしたなの身に添ふ月の光かな　可遊女
鴈がねや波を見る時さはぐもの　菱魚
雪に焚松葉に富る小寺かな　城山
みじか夜の春戸まで來たか雀の糞　且茄
行はるのけだかく成ぬ烏の聲　蓬寸

塩がま奏者の宮に詣づ

馬もたでおくれたまふな神の旅　楚川
葛はなや筏ならべてめし畑　蕪川
づんぶりとぬれて居ながら荻の聲　柳女
うめ柳世は木がくれて見ゆる也　雄淵
暮おそし高み低みの山の松　雲路

むぐら屋の木履の高き寒かな　桑布

酒田ある人の荘にて

月山の雪いつきゆるかきつばた　蘭丈

はる雨の降ならべたる小松かな　旭水

菊咲て脊戸ともなしや小松川　布席

御牧野のますほの薄枯にけり　瓜雄

苗つけし馬おどろきぬひとつ雷　桂蘿

山鳥のねぐらたゝむ歟朝がすみ　文沖

西遊のころ

茶筌賣京の御秡に老といふ　恒丸

觀音三十四所巡拜の時

麻畑やとぼしつけたる奥ちゝぶ　管菴

朝皃やせまい處にあらし吹　麥洲

降ものとおもへば雪はちるものよ　和鳴

庭訓の小竹筒さげて花見哉　維新

善キ人にあらざるはなし月一夜　素來

波かづく甕の調度歟番雛　素菊女

蚊屋にさす月もぬらさで根なし雨　澤鷺

華にさへいびつ形也庵の月　菊路

竹むしろを人のうばひもて往て、え返さゞりければ

さす月に思ひかへけり古すだれ　亘山

龍膽や山下水のあかりさき　釣翁

餅つきにわらぢもらひし旅路哉　尺山

あつき日のいのちかくさば小萩原　蓬山

あらましに春の事すむ月夜かな　乙調

鷺白し小鴨は波を浮ありき　雄飛

紙燭してにげなし雪のいとま乞　岡虎

雛の翁鄙の翁にはなかりけり　英二

名月をぬらさでかへせ雨の雲　春翠女

馬かりて夜はうすあかり杜宇　羅洲

三井寺やまづ〳〵梅のさかりなる　松嶋

あらぬのゝ豆腐しぼりも月こよひ　文梁

梅もたぬ小家もめぐれ竈拂　懸車

家舟のかゞみつめたし蚊の名殘　呉峰

都に歸る親友を送り出て

蚊のおとを淺香の雨にうたれけり　鑁月
赤子にも寐ぬくせつくよ秋の月　斗水
はらみ鹿ちる木瓜よりも哀也　壺中
醫王寺の夕鐘なるぞ苗はこび　子行
西行に關すゑられつ冬の閑　文窓
馬取のはゝきしてけり露時雨　渚弓
何思ふ冬の月夜の西山家　季雀
こぼれうめふみて雀の孕し歟　巵言
ひとつ家の鴈きかぬ夜もなかり鳧　桃巷
椎のはな一しめりして風のふく　白泉

とま庵がもとにて

ひつかぶるふすまの音や客あるじ　文卿
元日や折人もなきうめのはな　蘇林
梅の月にさかづきひとつ巾度　朝窓
崎風にうしろつんむく小鹿かな　古橘
箕にはこぶものにはあらじ夏の榓　巴陸
淸水わく野中の町の日なた哉　一水
庵ほしや木瓜の花ちる山の裾　星眉

川嶋や暮ても見ゆる萩の花　氷壺
沓買ふもはづかしからね花ざかり　壺春

江都寓居

雞しめるやつさへ富士にほこりけり　濟美
鴈鴨のさはぎ馴たる時雨かな　空明
松風も眼にしむ空よ芙蓉咲　曳尾
我やどは瞺つめたく月白し　和道
青空やよく寐て起し宿のけし　五澄
山かすむあしたや馬をかりに來る　沙鷗
來ぬ人の夜の數にちる銀杏哉　梅左
こがらめや菴の茶の花つぼむころ　柳城
蓬萊の山にもふる歟初しぐれ　きよ女

人丸のやしろにて

ほのぼのを守りたまへや旅のはる　大呂
しぐるゝやひとり寐る世の人と寐る　春魯
蜊とらば波の雛鶴居もすまじ　夜來
我老ぬしぐるゝ中に柚も黄也　麥蘿

附録

一先ほ句をつくらんと思はゞ、何の題にてもあれ、たとへば時鳥ならば夜明・ともし火・鐘・鷄・月・まくら・雨・待あかしたるなど、百人が百人に思よるべき景物を、百年の今日に引出して、かくより外にはつくらぬものと覺たる迷を打やぶる事、作者大(第)一の心得なるべき歟。

一字の眼目の處なくたゞ事を作り立たるは、取にたらぬ事と氣象張て嘲ゝすべし。この氣象を立ざる時は、十七字つくりのはいかい師にて、むかしなつかしき心も見へざるべし。若亦かゝる古くさき趣向と道具を遣ふ時は、五七五のうちかならず言葉のぬしに成ところあらざれば、我句にはなりかねるぞと豪强にくるしみて後、上手達の容易ならざる骨折にて、一句にせし處を合点すべし。ある人予にいふ、翁の、海くれて鴨の聲ほのかに白し　とありし句は、海暮てほのかに白し鴨の聲　とありてもおなじ心の句なるべしといへるごとき、則十七字作りの論にて、むかしに遠き心より句作といふ事を辨ざるは、頗無念の至りなるべし。

一許六曰、ほ句は取合せて作する時は、句おゝく出來るもの也。初學の輩これを思ふべし。功者に及ては取合・不取合の論にはあらず。又發句は題の曲輪を飛出て作るべし。くるわのうちにはなきもの也。自然廓の中にあるは天然にしてまれなり。去來曰、ほくは曲輪の中になきものにあらず。殊に卽興感偶する物は、多は內にあり。しかれども常に案ずるに內はすくなく、おゝくは古人の糟粕なり。千里にかけ出て吟ずる時は、句多きのみならず、第一等類をのがる。初學の尤おもふべきところ也といへるを深く味べし。

一風雅の意は詩歌・連俳古今同じ事にて、古人の樂處を味〳〵て其境にふみ込ゆ事也。其上は句をつくり立る骨折と修行とを見覺て、其後はじめておのれ〳〵が腹の見へて、なつかしき遊び所の句が出來るやうあるべし。むかふへのみ題を置て、繪師の其もの〳〵のすがたをうつしとるごとくつくり立る時は、名月や湖水にうかぶ七小町　ちる花は酒ぬす人よ〳〵　などゝいふ句にいたりて、幽玄のあそび所さらにわかり難かるべし。

いかんとなれば、我胸中のみをたのみて、古人に才をかりるといふ處を學ざる故なり。はせを翁も句のからびたる事は、杜律・山家集を枕藉ありし故也と、此道の先達も申おかれたる也。古人のあとをふむべからず、古人の求たる處をもとむべしといへる語は尊し。あとをふまずして求たる處を求れば、いつとても我ものゝ句作なるべし。

先にいふ古き趣向の句は、五七五のうちにて言葉のぬしになるやうにつくるべしといへるをまちがひて、さしてなき言葉、さしてなきこゝろを妙なりとあやまる事多し。又あり〳〵と仕立たる句に、むかし・今の上手達の千鍛百錬して後いゝ出せるをしらず、さもこゝろやすげに見やり聞やりて、中品の位にもいたらず、似て非なる我句をよしとする事あり。我にひいきさへつかば、俳魔とおもふべし。句はつくられぬものと覺て、古人がなつかしくなるやうにありたし。爰に古き趣向の句作に圏点をつけたる所〳〵を味て、古人の心を用たるを見るべし。亦十七字にみな圏点を付たる句もあり。

趣向のぬしの句

初しぐれ猿も小蓑をほしげ也　はせを
白けしやしぐれの花の咲つらん　、
毛ごろもにつゝみてぬくし鴨の脚　、
青あらし吹やたばこのきざみよし　嵐雪
兼好もむしろ織けりはなざかり　、
木枯や馬も餅くふうつの山　其角
手を切ていよ〳〵憎し鰒のつら　、
笠の緒の跡すさまじや秋の月　丈艸
夕立にはしりおりるや竹の蟻　、
都にも住まじりけり角力とり　去來
佐保ひめやふかひの面いかならむ　鼠彈
兄弟のいろはあげけり花の時　、

とりはなしたる趣向の句

あぢさゐや三嶋を通る山つゞき　野梅
八九月風やいづこのほらの貝　嵐雪
名月の出るや五十一箇條　芭蕉

右、武藏守泰時、仁愛を先とし、政以去欲先とす、とはし書あり。

あり〱と仕立たる句

峰の雲すこしは花もまじるべし　野水
なのはなや一本咲し松のもと　宗因
庭の夜もみじかく成ぬ少しづゝ　嵐雪
雨の日や門さげて行かきつばた　信徳
蚰のきぬぬぎてかけたる櫻かな　許六
冷〱と壁をふまへて晝ね哉　芭蕉

古き趣向ながら、五七五の内にて言葉のぬしになりて、我物になりたる句

烏賊賣の聲まぎらはしほとゝぎす　はせを
花咲て七日鶴見る麓かな　、
霜の後なでしこ咲る火桶かな　、
冬がれの礒にけさ見るとさか哉　、
節季ゆを雀のわらふ出立かな　、
あら海や佐渡に横たふ天の川　、
ほたる火や蟹のあらせし庭のへり　丈草
友づれの舟に乘つかぬ夜寒哉　、
菜種賣たくや野風のほとゝぎす　、
水底を見て來た皃の小鴨かな　、
脊戸口の入江にのぼる千鳥哉　、
啼ぬ間よ空一ぱいのほとゝぎす　、

病中

山雀もはな見もどり歟まくら元　、
それよりして夜明がらすや時鳥　其角
年寒し若葉の雲の朝ぼらけ　、
夕立やいなごちいさき草の原　、
大せつな夜は明にけり天の川　、
紅にうちはの房の匂かな　、
酒買に行歟雨夜の鴈ひとつ　、
笹の葉に枕付てやほし祭　、
すむ月や髭を立たるきり〲す　、
炭がまや煙をぬけば猿の聲　、
朝がほや夜はむぐらのはくち者　去來
うぐひすもやゝ受太刀やほとゝぎす　、
うのはなのたえ間扣ん闇の門　、

山雀の里かせぎするしぐれ哉　　、
ひとり寐もよき宿とらん初子の日　　、
くわらくと猫の登やうめのはな　　許六
清水の上から出たり春の月　　、
血をこほす手負の鹿や花すゝき　　、
初雪や鰒で死んだる人の墓　　、
花ながら切こむ里の菜汁かな　　尚白

右の三句、花すゝき、はつ雪、花ながら　と置たる意を味ふべし。

夕皃の屋根に桶ほす雫かな　　、
名月は蜂も及ばぬ梢かな　　嵐雪
爐びらきの日をしめし野の土菜哉　　、
松風の里は籾するしぐれ哉　　、
萍に何をくふやら池の鴨　　、
きく貰ふは又棊にまけし人やらん　　、
露の玉いくつ持たるすゝきぞや　　鬼貫
秋の野を遊びほうけしすゝき哉　　李由
なのはなを身うちにつけて鳴蛙　　、

居りよさに河原鶸來る小なばたけ　　支考
きよつとしてあられに立や鹿の角　　、
そばの花まちてや立る岡の松　　、
三日月や闇に上たる鹿の角　　野坡
靜さや梅の苔すふ秋の蜂　　、
赤子なく家に人なしうめの花　　、
寒聲を引づる松のあらし哉　　李由
鮫あらふさゝらの音の寒かな　　木導
鵙なくやいつかあからむ柚のかしら　　野水
いつまでか雪にまぶれて鳴ちどり　　千那
誰がいひし南天の花の時ほとゝぎす　　信徳
うすぐもりけだかく花の林かな　　、
蚯蚓啼聲や堅田の蜑が家　　昌房
來る秋やすみよし浦の足のあと　　來山
草の葉や足の折たるきりくす　　荷兮
我形も哀に見ゆる枯野かな　　尼智月
舟くの小松に雪の殘りけり　　旦藁
うら白もはみちる神のうまや哉　　胡及

あの聲や露にむせたるきりぎりす　從吾

綿ぬきは松風聞に行ころか　野水

元朝や何となけれど遲ざくら　路通

あさがほやいのちとらるゝうごろもち　童次

何魚のかざしに置んきくの枝　曾良

天のしたしろしめすおゝむ心にも、蟬の小川の流と山法師が心とは、まかせたまはざりしとかや。恒河の沙にたくらべてみ手多き圓通薩埵も、すくひ余し給はむほどのひもかゞみのどけき御代につくり出るほ句共を、ひとつひとつにいかでかは一つ心にまかせてむ。もとより人心面のごとくならずやとて、此集に鏑矢射かけむやからは、天邪鬼が子孫にて有べきなり。それ人の面のさまざまなる中に、鼻といふ物のあらずば、北辰のおはしまさずして、もろ星のむかふ方をうしなはせ玉はむごとく、目も口もすはる處に迷ふなめり。金牛も龍馬もこの鼻をとられてこそ、すやゝゝとはひかるゝなれや。衣を着に領あり、劍をぬくに柄あるためし、何の事にかは云ざるべき。さてこのためしを得度せざらむ人の作句を、とりどなき句とも、魂なき句とも、又鼻なしとも申はべるを、わすれずも山にわすれぬ五十年の修行しはべりて、乙二とよばるゝ乙二が金剛力を出して押つけたる爪じるしは、皆その句ゝの鼻とも、とりどとも見べき大事の大事のけじめには

べれば、自今以後自己のかゞみとなし、千變万化にわたる句作の間にも、鼻と云物を失念して生れ來たらむ人のおもては、いかばかりとりどなからむと、菅沼のすげの根白くまがらぬこゝろもて、くはしく思玉はゞ、天邪鬼が射矢のたねも盡て、六祖の杵の鼻つやゝゝとさとり出たまふべきぞかし。返すがへすも心得違まじ。ましておのがすける一枚田に、まかせ過たる堰水なりなど、あさましく見おろし給ふとなかれ、穴かしこ。

愚毫みち彥

俳諧廻文帖

素丏著

廻文俳諧序　〔奧華山觀月〕

俳諧者ハ。自ニ連歌ニ。而生ズ。連歌者ハ。自ニ和歌ニ。而一變ス。和歌者ハ。與レ詩同レ意ノ也。故ニ曰詩ハ言レ志ヲ。歌ハ永レ言ヲ。至レバ言ニ其志ヲ。則詩歌連俳無レ異ナル也。詩ニ有ニ國風ニ。歌ニ有ニ萬葉ニ。而雖ニ上古之志ト。而亦以テ得レ見ルコトヲ之矣。百有餘年前。有ニ芭蕉桃青ナル者ニ。深ク志ス於俳諧ニ。一ニ變シ古ノ體ヲ。風ニ靡ス一時ヲ。以テ大ニ鳴ル於當世ニ也。世ノ人謂ニ之ヲ正風ト矣。今復タ西湖ニ。有ニ素更ト云フ者ニ。專ラ本ヅキ于正風ニ。委ス志ヲ於其道ニ。竟ニ至ル其極ニ矣。近頃ロ戲ニ飜ニ案ノ一ノ體ヲ也。其體倣テ和歌之廻文ニ。而ノ爲ス長短之俳句ノ。終ニ至ル五百有餘言ニ也。以テ爲ス小冊ト而自ラ齎ス。以テ爲ス孤客獨笑之資ト也。予今茲ニ。北遊シテ至ル丹後宮津ニ。一日有レ客懷ニシ彼ノ一小冊ヲ。而來テ以テ示レ予ニ。且乞フ序ヲ。予以テ閲ス焉。其滑稽實ニ可レ解ク頤ヲ也。如ハ佛印ノ之於ニ東坡之詩ニ也。黃備子ノ之於ニ野馬臺之詩ニ也。則チ副ハ備シ其顛倒ヲ。錯ニ五ス其句讀ヲ。以テ使ム下ニ讀者ヲシテ難上ラ讀マ焉。如レ廻ノ文ノ則不レ然。自リ首至レ尾ニ。亦自リ尾至レ首ニ。字字無レ違ヒ。意志能ク通ズ。使ムレ讀ム者ヲシテ易カラ讀焉。其狀チ如ク環之周旋スルガ。其巧ミナルコト如ニ棘ノ刺ニ刻メルガ猴ヲ也。公輸子之巧ミ江師之辨。又以テ可レ比而已。夫レ詩之國風。歌之萬葉。聖人賢士之所ニ撰ズル。而所ニ以レ使シテ天下後世ニ。察シ上尙之風ヲ。觀セ中古代之俗ヲ也。桃青之正風。志溢レ於言外ニ。情透ル於骨ニ也。素更ガ之滑稽モ。亦達ス物之情ニ。的ス人之志ニ。以テ侍シ坐ス高貴ニ者。誦ス之。而以テ足ル備ル於俳優ニ而已

文化己巳歲秋七月書于丹后宮津客舍

陸奥華峯　島芳國子則識

〔島芳國〕〔子則〕

廻文俳諧之歌仙

素更吟

折な枝鶯ひくう妙なるを
　梅咲なかわ和哥慰めむ
出しか雛小隅の翠簾を靡して
　長き續きの軒つつきかな
月の下野もよき四方の友の來つ
　寛た間や山田色つく
鹿そ聞しりてそ照し木ゝそかし
　さは占ははたから噂
告たしと待間に間妻年闌つ
　それすはなとか門なわすれそ
我庵を慕ははわたし大井川
　白罌粟眞隅見清しけらし
婢退つ地築引土月の隙
　蚯蚓啼をと遠くなす耳
筆好た餘伎ある秋よ旅すてふ
　供の入しは走井のもと
花忩き盃司きそ爲奈は
　坂の春邊そ添る羽の笠
出替をすれは身贖す折わかて
　はすかしめつゝ包めしかすは
我立た岸にも錦龍田川
　狸威よよし遠碪
手疵ちう相撲場踏す打過て
　訪來寄たか語り能人
氣な採な乘は矢橋の波もなき
　隔つ地も侘琵琶持つたへ
年經とも町下落間元臥戸
　君の敬らし白髭の神酒
來つ野路もうそ寒さそう望の月
　通り鳴子の殘るなり音
さわ惑茸狩かけた暇業
　わからて夫か彼そ寺かわ
淀城の隔をつたへ狼烟とよ
　そこの地は貸似我蜂の子そ

香やひらき備る花そ寄羅美か
　友の曳かな長き日のもと

其二

とちらへか引鶴月日歸らちと
　東風吹ましを押まかふ兒
出島過見透霞氣すまして
　列白萩の軒はらしつれ
家中もと皆寄世なみともかない
　持は鳴子の殘る繩手も
廻りたはそれまて稀そ渡り濱
　宿るてもこそそこも照とや
体ありと隔日の此隙とり飽亭
　別れす和士と年わすれかわ
語り津ゝ折節風俗を綴りたか
　坂路は踏す相撲場ちかさ
しつまりつ長き月かな釣貧し
　帆影秋寒汚穢き明顏

夫とても得しをは教え以て何れそ
　居場もやすく葛屋も春を
天もみな花見そ皆は並もんて
　今日延木曾を遲き日の更
寄は誰走入しは傍よ
　鳥瀬飛人ややすらか
鳥羽路かわ妙みよ三枝わかち鳩
　昨日原こそそこらは卯の木
知なまし夫から彼そ島なれし
　折の至れははれた祈を
此相圖見れは憐みついあの子
　主に替へき消床に憂し
遠僑も野しら嵐の森の音
　宿り時しに錦鳥とや
佗とめく臨時の眞利汲と月
　菊に久しき岸古にくき
出し床に疎しう慈童莞爾として
　留主守もするゝ

品は添通り折をと虚言咄
　積逃ときゆ雪解の水
わかちなは來て見ん滿き花地かわ
　坂と野もかな中も長閑さ

其三

主なれは樂さす櫻曠なしぬ
　門野そ答う唄こそ長閑
出來つるは何もかもになる春盡て
　白砂取りを折となすらし
能音の離つゝ月の能登沖よ
　長旅陸路ちかく引板かな
畑守とすへき秋經すとりもたは
　姫のそみよき清みその隙
陪卒と知らす召らし蝦も偶
　駒驚破あらく鞍あはす馬子
元彼そ音のこの戸を夫かとも
　來着涼しき岸濯月

四方和波を釣名もなりつ翁もよ
　休面白し城下順風
縫あけてくたしの支度出來あいぬ
　若菜摘しをおし待半
しろしなは山また儘や花しろし
　そう口餘の子か籠の呼鶯
泥龜を得てそと袖え御目かろと
　我なす業の野澤沙川
戸越とそ霙馴そみ外仕事
　顏のしなははなし濱かね
闇の香そ敵解たか曾我の宮
　つたふそあまた適遊ふ田鶴
信貴の地をひとたひ縱令落退し
　今やすらかはわからすやまい
それもかな叶相中なか洩そ
　皆囁の軒や漣
しらけりな時つも月となりけらし
　踏すれさこそそこ左禮相撲

身の友を託し兒か藜蘆の實
二階訛しう憂琵琶いかに
邂逅や訪ひと日風与やわらくわ
鳥歸るとも戻るへかりと
筆すらも學ん花間洩すてふ
眺そみしに虹見そめかな

其四

中は川野もとも〳〵の若葉かな
杉戸乏しき岸郭公
出入とひ安きに寄すや獨居て
杖をひかしめ召か日を得つ
ゆつたりと置津ゝ月をとりた露
かいわり菜つみ滿作業か
平淡そ時をも狹とそみならひ
見しか綱手と戸出懐しみ
戻るへき好積しよ消るとも
我留主待う諫ますするかわ
さわ難をもちた育も女業
着風俗はそれや破そわりなき
若退つ氣さすも洲崎月の霜
能舛買て町家住居よ
出窓とい添る四方そ遁馬まて
然網元そ外面見飽し
思なは解て待人華紐を
春邊そ蕊に匂いそへるは
雉子飛山の端の間やふと過き
曾爾か野邊のを尾上の鐘そ
年は氣に順かたし賑しと
珍らしことを男しらす女
笑し數冷たさためつ透し見え
外待うたわ綿打窓そ
世に遂仕合はあし深谷よ
いつかと宇治を落人かつい
續立も名高刀もつたれは
長き夜の來つ月の能かな

有無沙汰はしらけにけらし肌寒う
　間引菜ひとつつとひなき隙
うかむ笑野路高舘の見え向う
　戻すはあしう牛あはす友
そこも適訪寄宵とまたもこそ
　繪踏すまして出し眞隅笛
敷砂はきよみそ見能花透し
　日そあて倦閑門の手遊

其五

慕えうた湖うつみ田植出し
　共眠かも藻刈舟もと
手次見す補佐身の操澄きつて
　來そいは陸路近くはいそき
望月の影さす酒か離つ地も
　鹿すら鳴を奥ならすかし
共に列紅葉待見も連にもと
　面師うとくさ咲冬至梅

正〳〵よ落着辻を夜さま〳〵
　更つのつとひ一のつらさ
住ともか借つ縺そ香もとめす
　幽なれまも揉れ流か
三ケ月の玉川かまた軒つ上
　普請仕すまし仕增新澁
攝待をとも功德もと追達勢
　下のたゝしき木下憑し
山の名はわかれ夫かわ花の間や
　かへる春邊か〳〵
留主もせよ野路越東風の寄もする
　今すらあるし知荒住居
敵の地を來つ術盡落退て
　似た影綾の野や明方に
過と訪それもやもれそ郭公
　老曾の杜の乘物そひを
不意の間途中にかなと人のいふ
　余所に見なしもしな身にそよ

末ありて壬生の此文とりあへす
ひた月毎に二度漕つたひ
浦輪浮時ある秋と誰笑う
並松つゝき来つゝつまみ菜
鶯子啼とき〳〵な越ひくう
晴あかりとや宿りかあれは
隔つかな戸出は綱手と中つ絶
間やいよ籔もゝふ彌生山
元ひと日花にそ似なは人〳〵も
今日もしれかわ別れ霜更

其六

須磨和波を出し折おして沖鱠
日そあな更と遂船遊ひ
賑ふそ土地すら筋と添脇に
梨取あはせ世話ありとしな
利な釋つ咄す眞砂は月となり
鷄蒔餌して出し驛間佗

若訪て宮はと早み調度しも
足方得と取哥加留多
増文か綴りなりつゝ紙衾
白雪と積水と消らし
我丸いねかわしわかね入間川
きつるか陸を落かゝる月
下り度を一統と對踊り笠
友しる秋の軒主もと
宿りかは結老住はかりとや
延日笑顔と十日蛭子の
品もみな花降船場波もなし
皿川軒を荻の若葉そ
なとすとも鹿の子遁し戻すとな
はかない脇に賑いなかは
彦八も今日また儲持運飛
眺ある地を落る雨かな
濡染のさし足あしさ而已しれぬ
言葉優しう憂さやは床

九十九髮うとまれ惑う身か藻屑
　眞向うをいさ塞翁か馬
筆号居空爭い見さすてふ
　品は似つも持錢はなし
月も訪時つ暑きと人もきつ
　瀬數過つゝ續き涼風
御頭も取手みてりと洩し顏
　元杣屋をと遠山外も
よしまたはそこ家居こそ移徙よ
　着なし舞初目そ隙しなき
添へ算ひして花果し日そ替そ
　音波乘は春の湊を

其七

中抑は柴の戸のはし芭蕉かな
　告ん窻もと友と滿月
照つ瀬はひたこそこたひ鯊釣て
汐と氷とそ外津見通し

めくりつゝ書とる時か綴りくめ
　そこ日間や音遠山彥そ
彼妻子付人引つ小松野か
　接木すまして出嶋過來つ
居ましきは蝦逃門掃しまい
　品借つ問音信そなし
せかるゝもはつとひとつはもるゝ風
　風呂敷ときつ月時白ふ
若莨みすます眞隅木幡かわ
　目先あやうき急や秋雨
世な慕ふ折こそ垢離を二品よ
　誓そあるは春遊ひかち
弓と名は常から兼つ華と見ゆ
　五加木摘地の後六きこう
夏衣江戸から門え諸小綱
　駒の越なみ孤の馬子
借同士と語り寄たか年取か
　雪の光りも守甲斐の消

世に逢た奥ならなくを竹戸によ
　共の井洗裏相のもと
白浪の間や瀧田山而已ならし
　瓜音祕して出し人を待
疑はいわちあちわい侘かたう
　冷と束を男鹿ひとつぞ
氣そおきつ延たる旅の月遅き
　暮秋のいそき來そいの潮
仕流れな澤の共業馴悲し
　永留主の嚢(マヽ)を御物するかな
駕の戸をしらせ見せらし乙の子か
　二の替りとも戻り若野に
惜みつゝ名はそれそ花包しを
　指舞寄は春よ隙波

其八

見よ開つ折から鴈を月清み
　友の古酒と解座木の下

出來し業はやき柿屋は淡し來て
　分るゝ川の野は枯るかわ
岸は出し續き築つゝ慕しき
　靜なれとも戻れ長通次
召かそい松ある東いそかしめ
　弓取は名そ備りとみゆ
しれ惑う僞りはつい被疎し
　翠簾本をまつ爪音も澄
戻すかと思ひの紐を解すとも
　村坂馴染虫啼さらむ
來つ送り騎た二人の陸を月
　新絹ともに荷元抽し
調度までひたすら數度手惑ふて
　今日とこそれは曠そ壽け
見透しぬ繩手にて花ぬし霞
　鶯も木にこそそこに來もそう
町あひよ畑打うたは呼あふて
　我もと人や雇伴かわ

參るとも千度そ常陸戻る今
よしある窻と逼る足よ
寒冷は來し日淋しき俳連哥
時に隔の後絶にきと
磨すま見しより好十寸鏡
瘦もおなし品を守瀬や
消れ彼の白か罪通れ行
通路次あたし下網代打
島八重よ退つも月の夜邊やまし
やとれは萩の軒端はれとや
弟子醫ます賑ふわきに住居して
見し程すらも減す乏しみ
築地まて全う建間出待いつ
空霞かな中身すからそ
叶ひなは迻りて陸を花日半
皆もと乘は春のとも波

其九

長月と風与いひ厭ふ時つかな
似たる二人か刈田降谷
出し親子藥堀すく小屋をして
談りあふこと左右ありたか
玉兎はや寒やは來添うまた
立れ彼木とときの枯鳶
隔りな土地ふる淵となり湛
靜とときかす簀垣鈍し
やすらかは影も重けかわからすや
そこはらさする留主さらはこそ
能かれ彼通傳すら捨つ通家よ
履の間や山の端〱
くきらかな啼つゝ月な乍聞
積瀬は与う哥合滿
紫の形見而已誰除去無
待たいさその野そさいたつま
違なは通さむ嵯峨の花筏
春のなかはに假名乘は

時よ辛苦夫なり馴そ軍書記と
　包豐な中緩みつゝ
下里も隣借抔元沙汰し
　君にひかれて出れ買に神酒
增ふまし女の難をしまふさ广
　浮ふ一興うけつい深う
降はこそ居籠雨乞底拂ふ
　掃除觸たり渡れ武州そ
義詞につれ唐衣列錦
　像の來あゆみ見ゆ秋のうさ
背月を友まつ間もと沖津波
　冬隣とや宿りなと結
坂越つをりたあたりを杖小笠
　出す守と共髻りも捨て
傳りの式を仰きし法はたつ
　陸遠近の後東風送り
隔ちなは好とも遂す花地絕
　佳なる端家は囃春詠

其十

神の留主ひた哥唄ひするのみか
　戸さし降雪きゆる無事里
照はこそ飛立旅と底はれて
　月そとよ今日更よとそ來つ
汐時後荻崎〱を漕通し
　虫中原よ奇(寄)はかなしむ
惜まれぬ其身の濃そ濡ましを
　三間いかかこそそこか垣間見
不圖入を勾引は咎折厭ふ
　落かゝりつゝ綴り加賀路を
育ある元祕人も居當たそ
　甃その望たゝしい
短夜を月なほ和波つ游しみ
　宿り遂ぬは羽拔鳥とや
隔つとも分ち道かは元傳へ
　雛荷急の軒そい荷ひ
曠なしき富なは花見時しなれは

嵯峩と野の宮閣の長閑さ
田は増て川崎澤か出島畑
さしもの束根はたのもしさ
空城も久守も古諸白髪
やとすら借む羣烏とや
しらぬ火のおしく筑紫を延ぬらし
雨守りの法も完ふ
次第をき乙子もことを競出し
死を幸そ素意は功し
氣味わるう道占打見得わ右
能踊友戻遠きよ
四海みな月の名の來つ並居賀し
鳰鳫鳴と時しり顔に
出しの笘縫破つも寛の下
日繰すくれは晴藥喰
片意地もいつから歎つい用たか
した萠續き來つ杖持し
元の名は隠さす咲か花の友

堅田遊ひの延そ暖

其十一

袴着よいさめ媚さい能間かは
雪晴度にて手にとれは消
出し小窓水瀬風次笘こして
藻にか啼しむ虫か中にも
坂退つ遙光るは月の暈
たつきあやしき岸や秌蔦
枚方の續き往つゝ野田から干
八十次めてたう哥て召そや
勾欄そ馴添それな染し場を
外の亂も洩た身の徒そ
せくとを德ならなくと男癖
唄けはしき岸へ葉鶏頭
燕らそ歸るなるへか空目址
軒告あやは早明月の
急きつゝまたこそ貂衍續きそい

列町も清き御忌詣て連
花滿は隣よりなと却含なは
見透うらそ空うすかすみ
杖曳つ伸そ遊ひの次日得つ
以後旅次飛よ呼鳴鵯
傳えたか貧しらし枇杷片枝立
木柴のしなみみな忍はしき
向ふ閭出し夫婦して屋根葺む
砂山崩き築間やなす
老をそよ經松まるふよそをひを
我君ともよ世も富きかは
得罷りと御座まし場を執構え
下り居待はや八幡まいりを
夏の野も來つゝ滿月物のつな
かく辻守と鶏(鷄)つく賦
毎度とも當り撰りたか元と今
日頃よろこひく
佗らすやひたものも旅路詳は
鼓師なるは春なしみつゝ
花下は出逢ぬ居あて渡しなは
櫻鯎をおひく浦草

其十二

餅搗のどさつきつ里逃つ地も
木柴狹しと年は世話しき
弟子か日々副經笛そ響かして
告ん端の間や山の半月
戻る帆の江崎秋さえ登るとも
通るか雁よ寄(寄)かゝるをと
憂惑う和子から駕わ疎ましう
先のひよ地の後呼の妻
しまらすは元夫そとも忘らまし
罪の祈も森の井の氷
分ち見も蔦しるしたつ紅葉かわ
疾刈とらは原鳥頭草
ふた月の今すら住居軒つたふ

次第佗つも持琵琶出し
生田野そ不圖折を訪共類
やすらかな身と富無からすや
急もと花しらしなは友きそい
春住得しを敎見するは
雉子や文字添書かへそ別業
通り眞向は勵む鞠おと
世話あいか古金かるふ買合せ
能舛取か借戸住居よ
續き口に山越駒や二疋宛
されはあの野も物の哀れさ
轉すとも災業わもとすんて
屛重門え緣もうちいへ
二位馴具椅いまかは紅に
新絹見よと藤動抽し
夜半か月浮むや向う木津川よ
柚木あやしう憂や秋間そ
取し圖の世界の威風のつしりと

希有若干と德はこそうけ
御假屋はひら並ならひ時行神
菫摘しき岸間連見す
花陸をいそかすかそい送りなは
香や越門の假閑すこやか

其百韻

杜若續咲つゝ田は次か
舞〱虫な馴染隙〱
天と人はれついつれは鳶飛て
風間やもれそ夫も山坂
岸脇に皆家居なみ賑わしき
中通路こししころうつかな
月折とわりなきなりは取還つ
罌粟蒔小野そ園をくましけ
添束弓鎗やみゆ松あいそ
わかれしものと殿もしれかわ

實のれかな願はひかね流れの身
老のさためつ冷たさの日を
遠のしをしてもとも出し鶯の音
樂また唄ひたうたまくら
何に誰聞かき書き片二階
友の子のきつ月の此下
そこと今虫撰得しむ毎度こそ
ばたりたわりと鳥渡りたは
御入間とやは川ゝやとまり居を
霞汲つゝ堤くみすか
花しらて土佐のこの里照しなは
八十路経笠下り藤そや
世に鳴か何れ洩つい假名によ
碎ついとも基つけたく
さし足も木蔭竹垣もしあしさ
縺凌を奥のしれつも
慎つ折の祈を積しつゝ
人の柄よき清らかの間

面白し砂場見はなす城下を
門波すたひ浸みなとか
師走かな何からかにな流す端
寄も世話しと年はせ守よ
いつもこそ叫しなしなはそこもつい
戻る中戸の長閑なる友
そも時つ霞てみすか月ともそ
樂さへやもの野も八重櫻
山いくつ紀の路道の記次今や
訪便りさえ得さりよ旅と
ふと居そみ泣す寄縋な身そいとふ
まさしうもれそ夫もうしさま
利なるかわ説時得とわかるなり
莞設今日孫に子に
佐は傳へ鳩吹ふとはへたつ業
斯さいせくも木犀咲歟
月おしさなとかは門な鎖置つ
二人相訪ひと居ありたふ

差渡し演たる妙のしたわしさ
　鹿落角の野の辻おかし
花代を楚地越東風そ凪しなは
　出にし獨活山間や同時にて
宿しては御事も何處を果しとや
　消るなりまた留りなる雪
冬の松なとよ千代とな妻のゆふ
　品も(密)蜜事よよし罪もなし
出來節と遁なれかの年耽て
　業なかれとも戻れ金澤
土地唄はかへす田末か畑打と
　梅媚秀つい日ゝこめむ
蜂の巣な何處か我子となす後は
　まこふ岡部の野邊か追駒
柴まとひ軒片垣の一廻し
　夕畑たつかわ分つ竹植
時つもそ葛水見透そも月と
　中堰つ下もし附瀬かな

大方に夫かとかれそ似た顔を
　續き龜鏡な内外聞つゝ
北國よさはうき尊世にくたき
　今朝のも物か彼桃の酒
門間野そ笑し富士見え其圓
　行春もとや宿守は悔
賑いつ寄たあたりよつい脇に
　蓑虫啼かかくなしむのみ
出しか月橋と今年は氣附して
　別れは秋の軒哀れかわ
路次向ふ折戸獨りを深蓮
　筆々呼間舞よ蝶ゝ
備りと見とるなる富鳥花そ
　春邊の身業氣清演るは
(寄)奇去し名所ことな知らさりよ
　闇かやひらき奇羅美やか宮
抑觸つ詣し町も連ふしを
　本間登せは颯帆の眞艫

世に惑い鰻あきなういとまによ
　不圖來し彼そそれかしき問ふ
折返す諸戀衣すへかりを
　舞し日又の給しひま
元こそなしれは哀しなそことも
　離面の道を落身の馴つ
啄木鳥よ渉しの下は能續き
　岩茸取を折遂貯い
書つ誰我眉山古か片月か
　今朝からか酒〱
却舍しと末そかそえす年滿は
　訪も間れて出連は友人
靜さを望住其長か通次
　日頃齡の延はよろくひ
先瀧と淸水見よき時たつま
　やふいりおりを折〱いふや
躑花そ琴の音の床そなはりつ
　白砂や門の長閑安らし

旅のすさみ

竹齊に似たる徒にはあらず、又杖と笠とは西行に似たりといひし人のまねせしにもあらねども、我さとを立いづる時しは、初雁がねにうちむかひたるこの國に、名にしあふ天の橋立、徐に風吹來る入江に釣たるゝ翁あり。今宵の月に酒酌て哥唄ふ小舟を余所に漕わたり、次の日樗てふ峯に眺望す。ひとたびは鶯もものいふ与謝の海とながめし人もおもひいでゝ行程に、泊〱もかさなり、松江の波もいと靜に影を浸す玉壺樓にいたりぬ。あるじはひねもす公のことをしめす人なれど、そのいとまに六藝にわたり、人の師となること數をしらず。四方の物語りに更る夜もつもり、年もはや暮行て、また立歸る春の軒端に鶯もおとづれ、永き日のつれ〲に、おのれをわすれしくさ〲書ちらしたる物に、筆をくはへたまへかしと、ひたもの窻の下に投やりて過し。頃は文化五とせの數そい、淡海の西のほとりに老をまつものは素史なりぬ。

　長ことを演る春邊の男かな

廻文帖跋

西湖の素更は、花開門の俳諧にならひ、後正風体に移り、予友とし語ること年あり。文化辰のはつ春更來りていふ、今年橋立の邊り春の深雪に旅寐して、獨り灯のもとに筆とり、戯に回文のほ句を作り、それが脇句をならべもて行ば、我ながらをかしくも物くるはし。されど笑を催す程にもとひそかに見す。かんなのたがへるもあなれど意つらぬき聞え、覺ず手を拍しぬ。其のち更旅の寐ざめ、月毎に一卷をつくり、此春百韻を添へて獨り笑ふ。古より和哥の家〳〵に廻文ありて、長き夜の哥きく日こその詠は兒童もしれり。晋子廻文のほくあれば又風雅の一体なり。かゝること好む人の此卷ゝ能き調を譽め、聞えざる句を捨選たまふも一興ならんか。此頃書肆何某の乞にまかせて櫻木に彫しむ。よて其趣を記すものは丹後松江の磯邊に住る

貞諒 山本子英 貞諒

蕉門書林

皇都寺町通二條

橘屋治兵衛梓

繪哥仙

宜麥編

推慮シタル意

はつ雛や
衛士の篝の
いかばかり

年あらたまる

海山の凪

賜、元日ノ天地ノ姿

第三、一轉ノ人

子供等の
前髪とるは
長閑にて

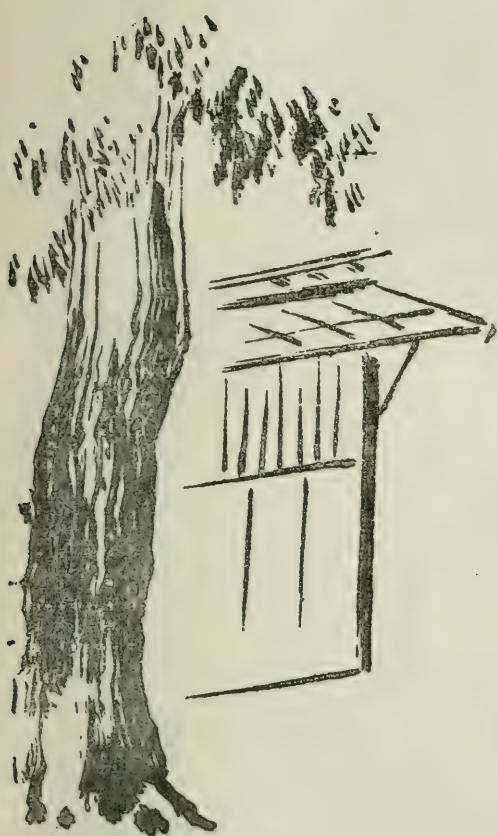
子共の變化武家

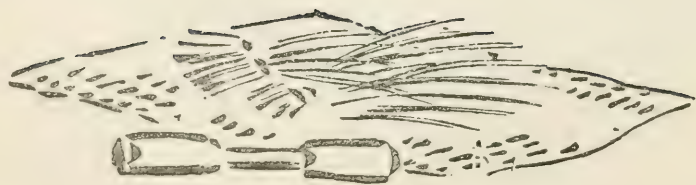
鞱も面もかゝる板羽目

場の景色

散はてぬ樗の花の薄月夜

場の變化

田家

蚯蚓啼なる
麥藁の下

あたりの場
上の太子

太子ノ寺ノ用ノ附

ふた叺上の太子の
錢買て

あたりノ風情

戻す
ばかりに
ちま〱と
夜着

夜着の變化

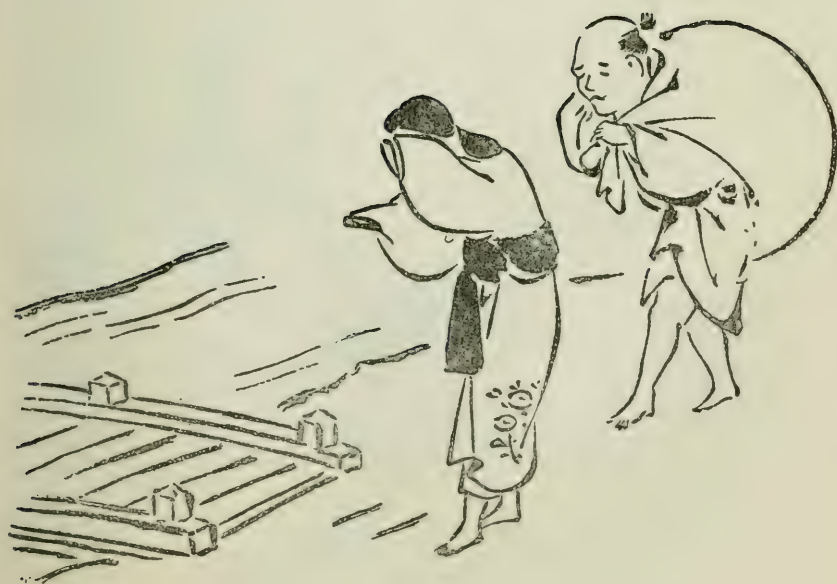
去り荷

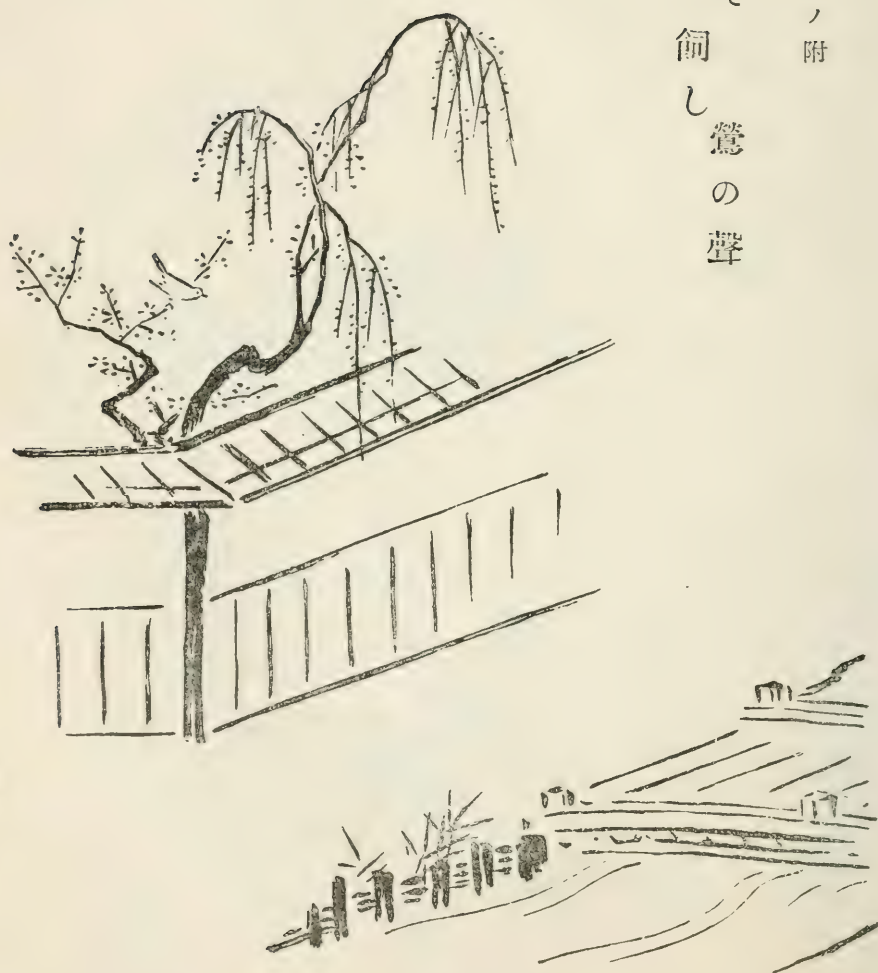
離別状の
天氣宵から
替けり

共人の姿の變化

假の小橋のゆれる汐先

小橋の變化

初花や桃や柳の下屋敷

はなして飼し鶯の聲

仲ビノ附

鶯ノ居所ノ變化

木藥屋此春甥を貰ひける

共内ノ變化

迎附

朝鮮人に伸上る人

變化ノ場

松原の煎豆匂ふ下莚

景色

晝へ廻りし山の端の月

山の端の起情
居所用の附

源氏繪の
屏風に
秋の
風いれて

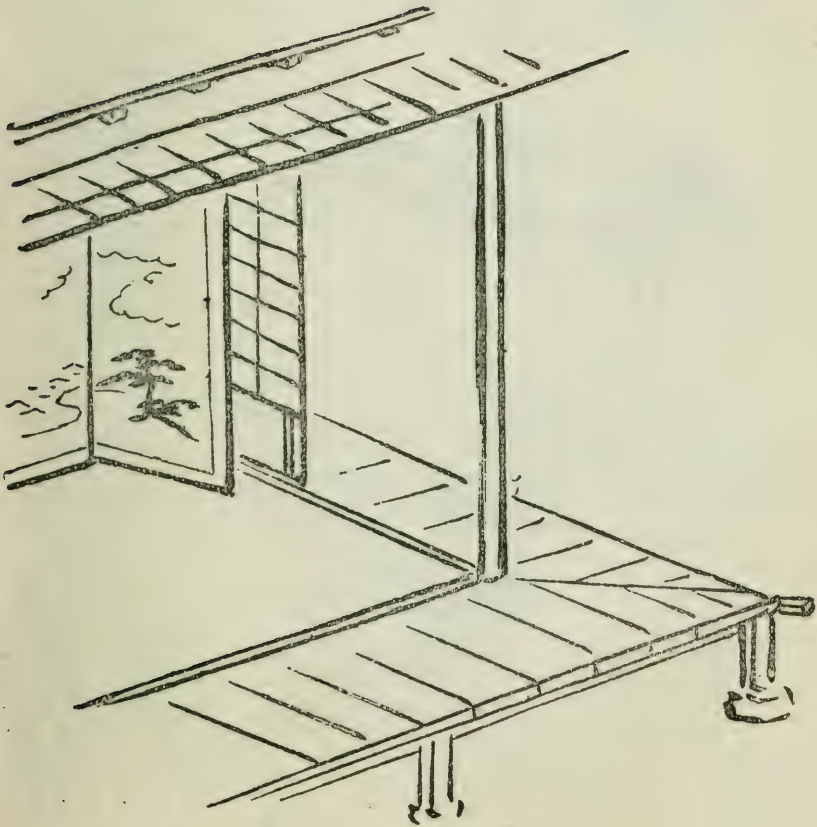
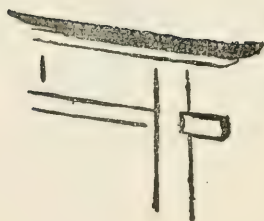
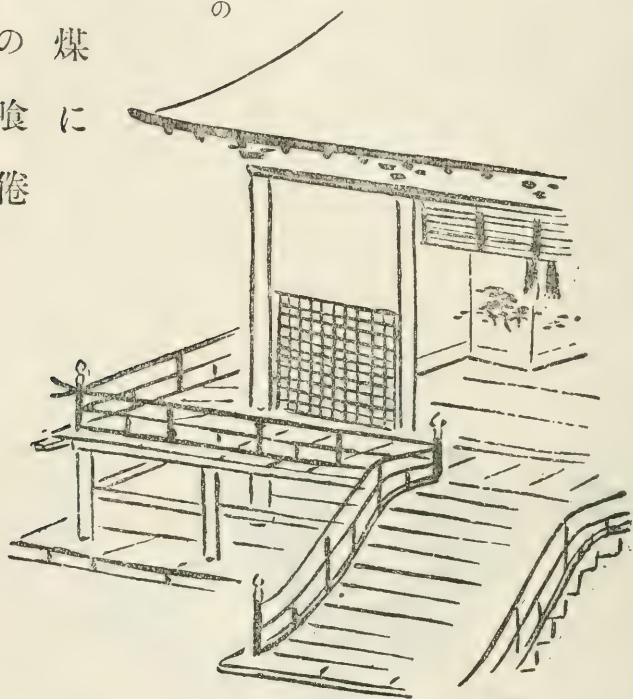
屏風の變化

北野社の（寄）奇附

北野の煤に

餅の喰倦

變化北野ノ途中

行逢て扨もく〳〵のひと昔

共人ノ姿

長い大小今に好るゝ

内に入れたる變化

朝露のひらかぬ
内がかきつばた

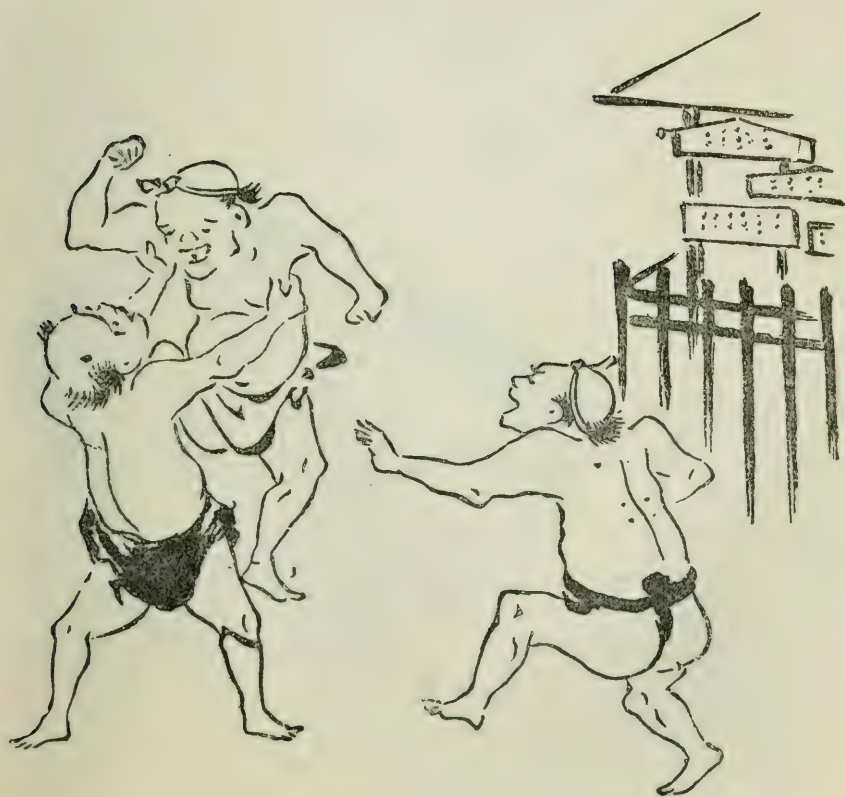
かきつばたノ變化

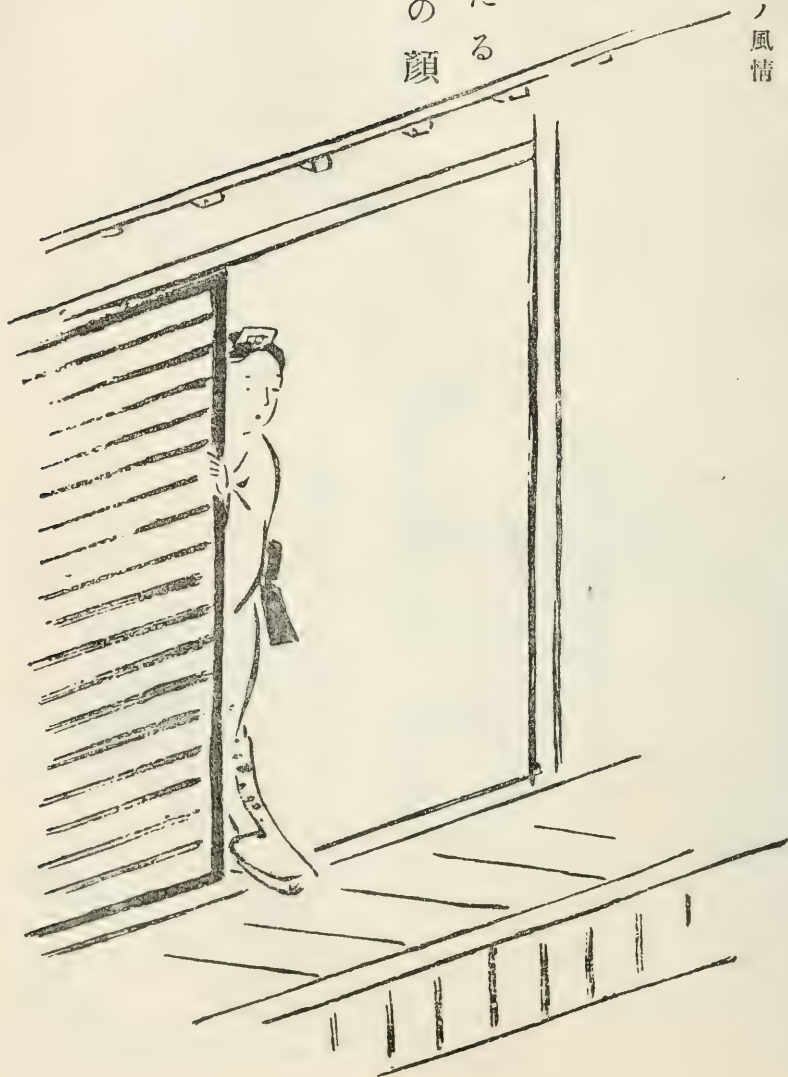
子を摺る鯉の草にばた〱

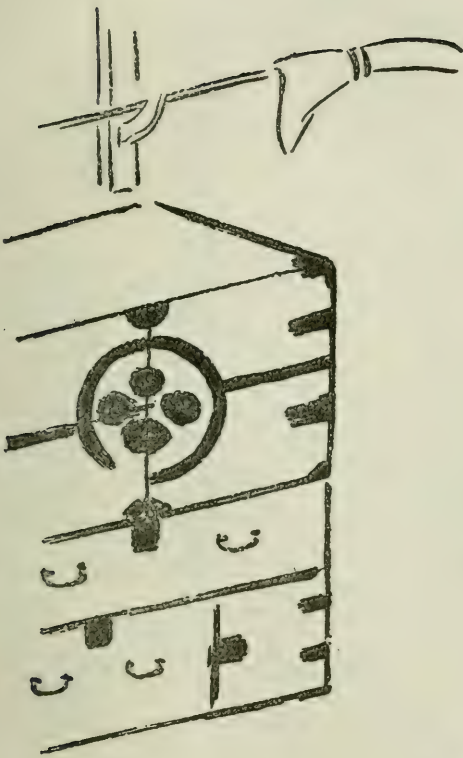
其場
馬の施行

千疋の
馬來る每に
豆くれて

馬ノ變化
大津

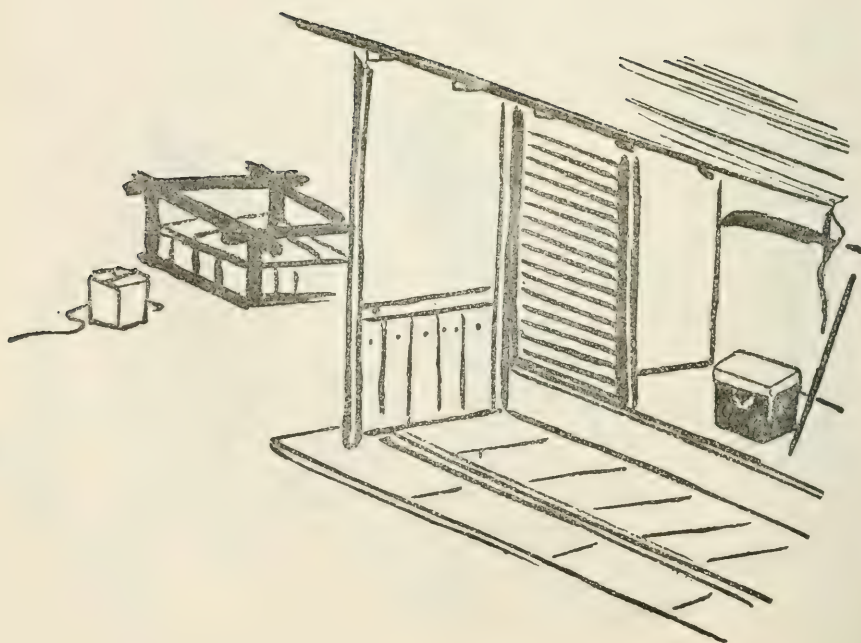
大津の
喧嘩不斷
也けり

大津ノ町ノ風情

まいら戸に
半分見たる
嫁の顔

變化武家

簞笥の上にかゝる長刀

變化醫者

さま〴〵の採藥
洗ふ井戸のはた

場の景色

霧に包し
有明の西

起情軍

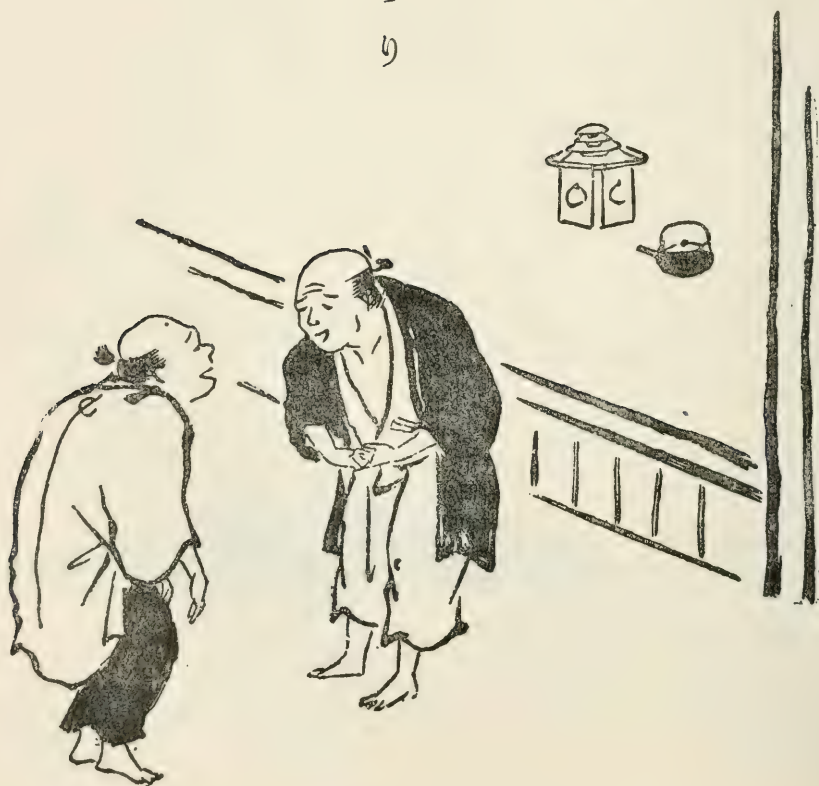
初鷹に落ぬ　軍のひと評義

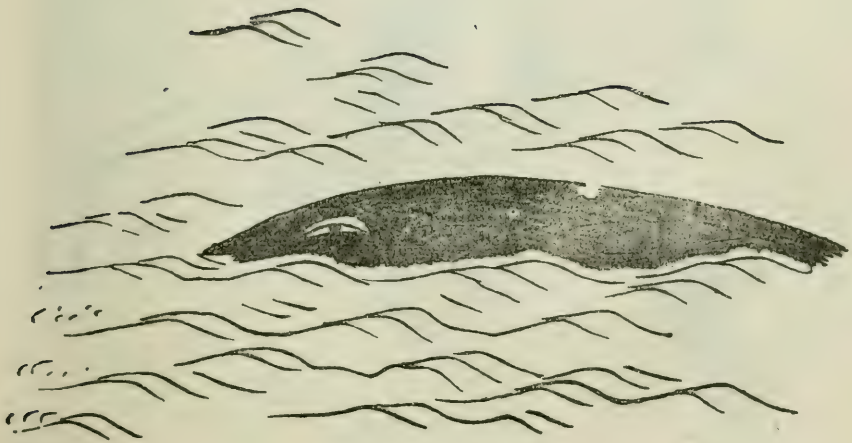
用の附

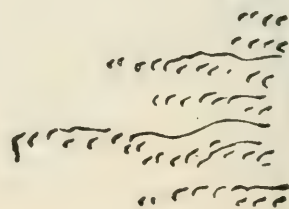
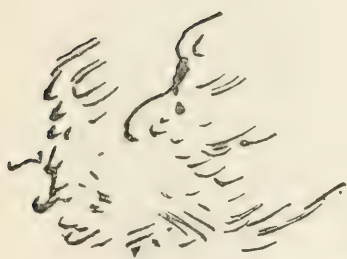
謡が濟て　引る土器

變化

田家ノ婚禮

百姓の羽織
扇に
立かゝり

共人ノ
姿ノ變化

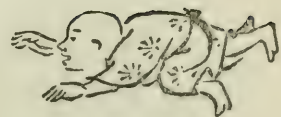
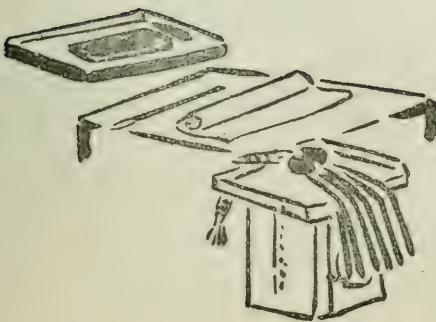
廿五間の鯨訴ふ

場ノ附

うちくべる
木の根
枝葉の
ほつ〳〵と

木を焚く
變化峯入

宮も草鞋の
花敷かせッゝ

内に入れたる
變化本陣
迎附
ぶり〳〵を捨て
硯に這習ひ

硯ノ變化
市中ノ書初

熨斗の
押への
丁度分銅

初雛や衛士の篝のいかばかり　宜　麥
年あらたまる海山の風　午　長
子共等の前髪さるは長閑にて　仝
絹も酉もかゝる板羽目　麥
散はてぬ櫻の花の薄月夜　長
蝍蛆鳴なる麥藁の下　麥

ウ
ふた臥上の太子の錢買て　仝
戻すばかりにちま〳〵さ夜着　長
離別狀の天氣宵から替けり　麥
假の小橋のゆれる汐先　長
初花や桃や柳の下屋敷　麥
はなして飼し鶯の聲　長
水茶屋此春賜な貰ひける　麥
朝鮮人に伸上る人　長
松原の煎豆匂ふ下蓮　麥
畫へ廻りし山の端の月　長
源氏繪の屛風に秋の風いれて　麥

ナ
北野ゝ煤に餅の喰倦　長
行逢て扨も〳〵のひさ昔　仝
長い大小今に好るゝ　麥
朝露のひらかぬ内が杜若　長
子を摺る鯉の草にばた〳〵　麥
千疋の馬來る毎に豆くれて　長
大津の喧嘩不斷也けり　麥
まいら戸に半分見たる娵の顔　長
簞笥の上にかゝる畏刀　麥
さま〳〵の採薬洗ふ井戸のはた　長
霧に包し有明の西　麥
初鴈に落ぬ軍のひさ評義　長
謠が濟て土器　麥

ナウ
百姓の羽織扇に立かゝり　仝
廿五間の鯨訴ふ　長
うちくへる木の根枝葉のほつ〳〵さ　麥
宮も草鞋の花散かせッヽ　長
ぶり〳〵な捨て硯に遣習ひ　仝
熨斗の押への丁度分銅　麥

折ふしの時鳥を附す

中の戸に客ある如しほとゝぎす　白芝
一ぱいの帆に横たふや時鳥　巻之
口上の中のとぎれや子規　全
相裁もよき日也けり杜鵑　志厚
曉のたゝらの方へほとゝぎす　宜冬
堀川の丈もこらすな時鳥　箕山
子規橋杭ばかり殘りけり　月齋
盜人をとらへて聞かせ時鳥　棧馬
ほとゝぎすとに男の子也けり　馭羊
かきつばた哥舞伎も染よ子規　桂二
新麥を踊越えおどりこえほとゝぎす　午長
時鳥ほたんちらすは手際也　宜麥

門松收る後、午長ぬしの哥仙三十六句を繪にかきて、附句おもひ立り。よき哉〳〵。予も其心あり。日をかさね月を越し、時鳥しば〳〵過る頃、吟滿ぬれば、かの圓乘子の筆を賴て、荒增のかたちを、遠き境までも初心の輩に附安からん爲をねぎて、さくら木にのせ、道の栞に成べきを約し侍ぬ。

文化七午のさし　宜麥

（校訂者曰、この序文は卷初にあれどしさ繪の都合にてこゝに載せたり）

續繪歌仙（ぞくゑかせん）

甲・乙

宜麥編

（續繪哥仙 甲）

とふりにたれど芭蕉の道は、盛唐・三代集・宗祇・此三ツを元祿に至り、我家の今日俗談・平話・洒落に和らげ、はいかいに古人なしの詞より、附意前句に乘ていでず、前句・附句逆らふ内にをのづと機嫌笑めるが如く、一卷のしらべ連綿として姿と〱く繪をなせり。今もいにしへをかんがへぬる人〱も少からず、一朝一夕の興になしぬる人〱も亦少からじ。在世しめし置れし句の癖・句の病・精神入ざる句・禁句・凡情の句・前句の噂・前句の再釋・糟粕の句・新古無差別の句など取捨し、後夜の柱も姿つがざらめやはと、繪哥仙に續き、新古の卷を梓に行ふいとぐちを引侍る事しかり。

文化八未のさし

宜麥

安〳〵と出ていざよふ月の雲

臨打添

舟を幷べて置わたす露

第三一轉、萩

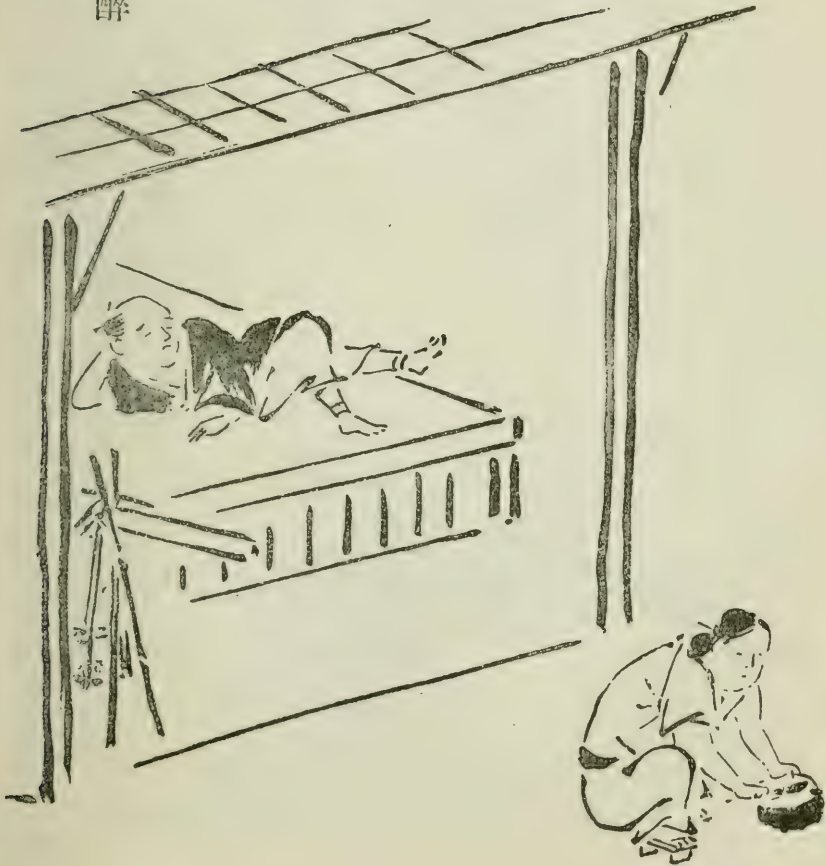
ひらめきて咲も

揃ぬ萩の葉に

場ノ用

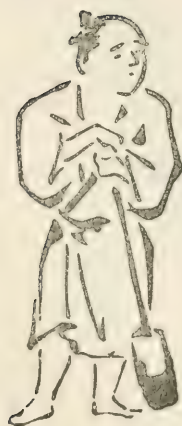
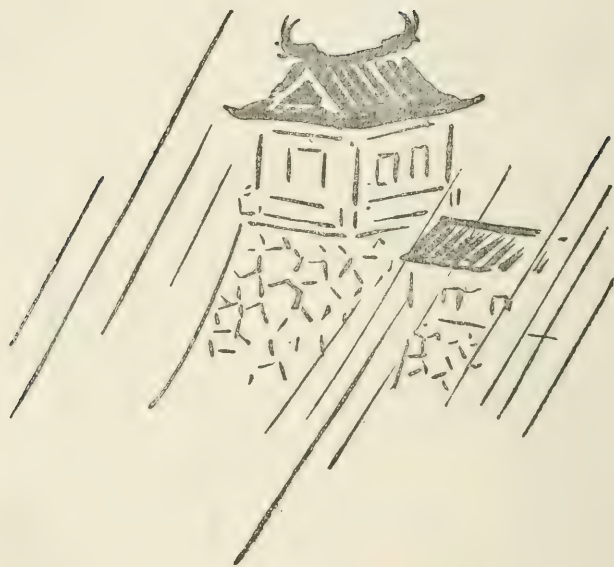
鍋こそげたる音のせわしき

變化立場

とろ〱と眠れば直る駕の酔

場ヲ定メタル附

城取廻す夕立の影

起情ノ用

我ものに手馴る鋤の心よき

場ノ變化

石の鳥居の

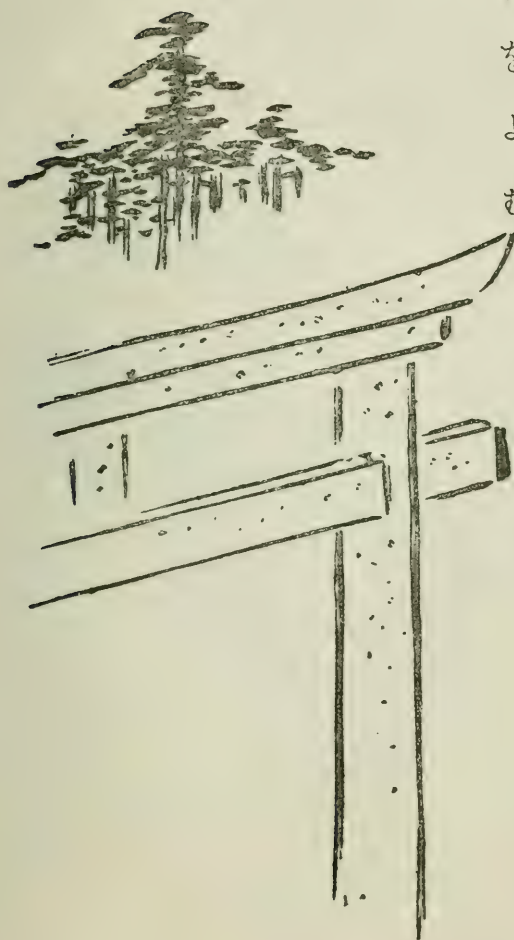
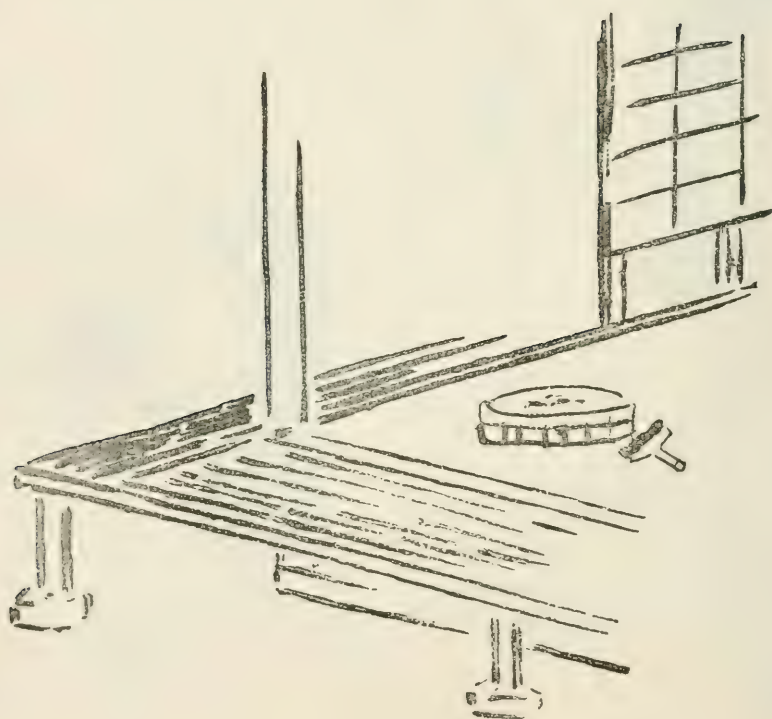
書付をよむ

景色

鸛鶴の

森を見かけて

きほひ行

起情
用ノ附

衾作りし
日は
しぐれけり

變化學寮ノ附

拍子木に物喰ふ

僧の打連て

景色

瀧を隔る谷の大竹

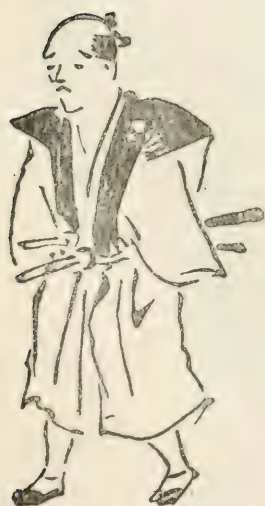
起情田家

月影にこなし置たる臼の上

伸ビノ附

只ちら〳〵ときり〳〵す啼

起情

粘こはき袴に秋を打うらみ

其人ノ上

鬢の白髪を今朝見付たり

變化ノ姿

年〳〵の花に

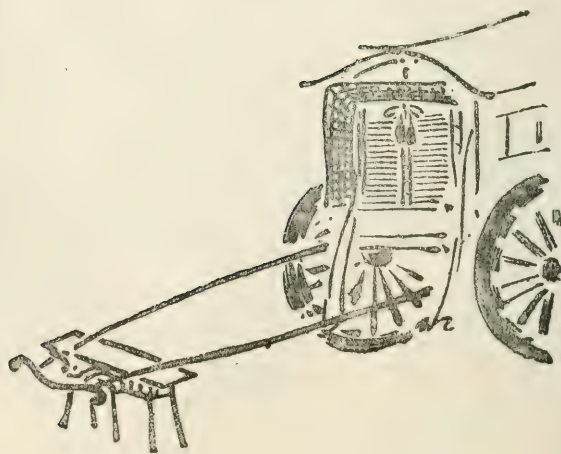
幷びし友の數

雲上ノ伸ビ

きしる車も
せかぬ春の日

こなしの附方

鳶の巣の下は
芥を吹落し

起情

吽く事のもろき聲也

妾ノ變化ノ用

なげきツヽ
文書うちは
戸をさして

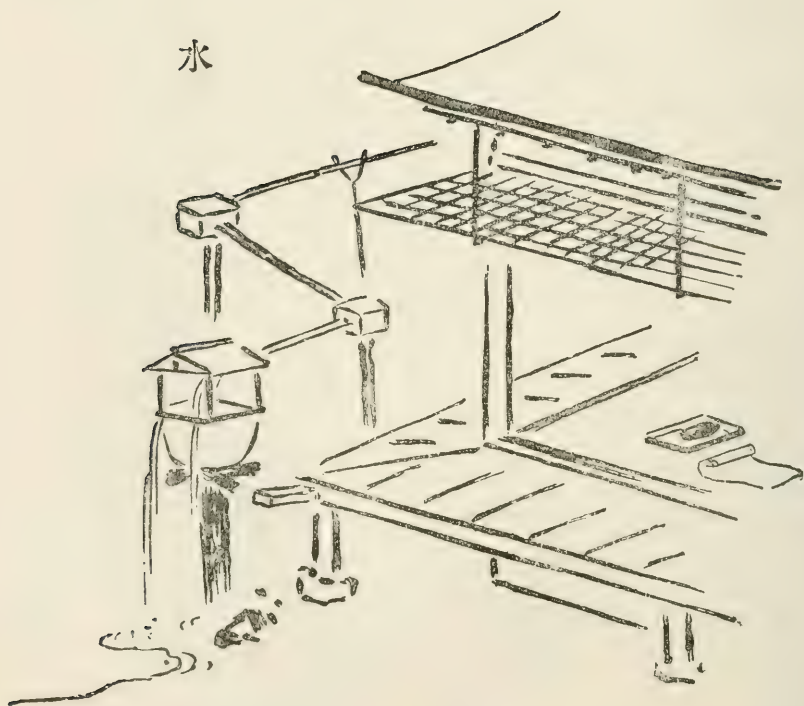
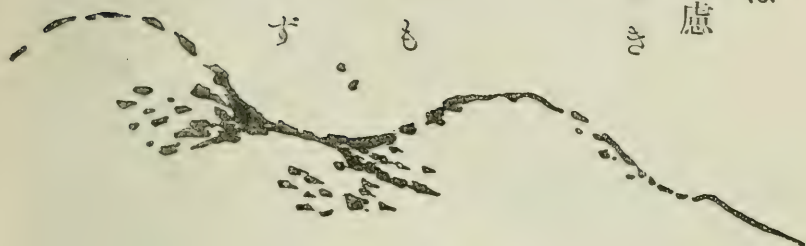
其場

いくらの山に
添ふて來る水

起情

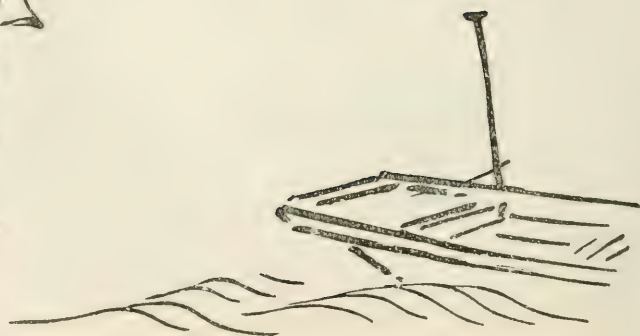
片嗅き人は
かならず遠慮
なき

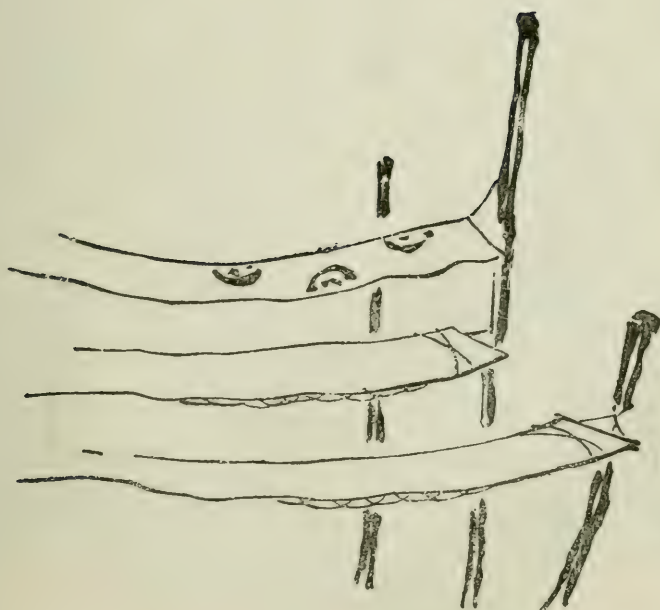
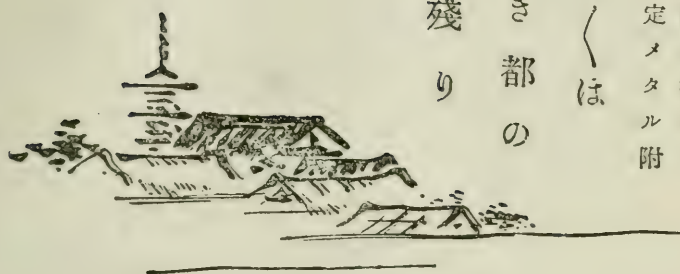
共姿

せめて
しばしも
きせる
はなさず

共人ノ變化

風やみて流るゝ
まゝの渡し舟

川ノ付

只ひとしほと頼む染物

前ノ場ヲ
定メタル附

はし〳〵は
古き都の
荒殘り

旧都ヲ向附ニシタル附方

月見を當に
やがて旅だつ

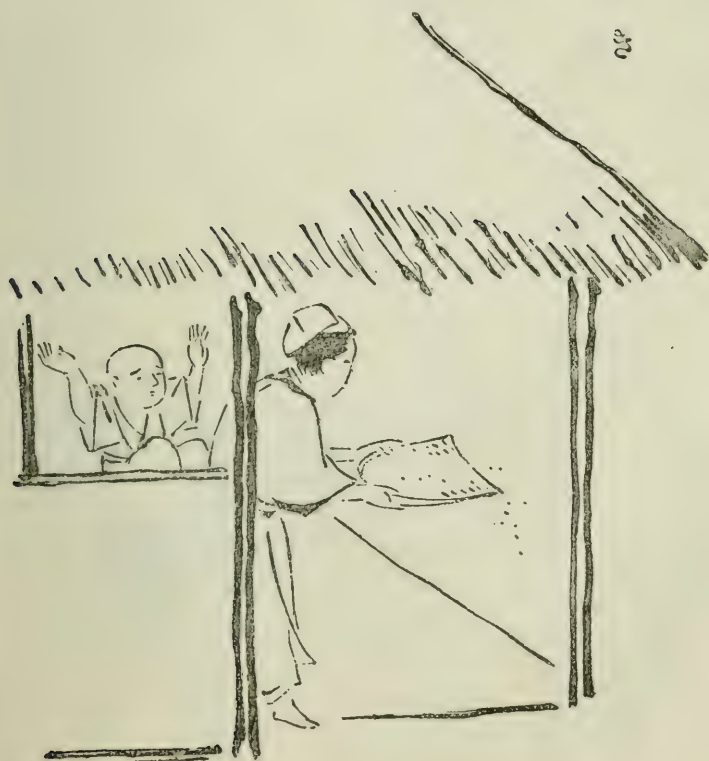
途中ノ姿

秋風に網の
岩やく石の竈

あたりの田家

粟ひる糠の
夕部さびしき

内ノ風情

片輪なる
子はあはれさに
捨殘し

變化武門子ニ對シタル

出陣ノさま

身細き太刀の

そる方を見よ

前ノ風情

長椽に銀土器を

うちくだき

時分

時鳥啼て夜は明にけり

變化ノ姿

職人の品あらはせる花の陰

仲ビ

南おもてに

めぐむ若草

安〳〵と出ていざよふ月の雲　芭蕉
　舟を并べて置わたす露　成秀
ひらめきて咲も揃ぬ萩の葉に　路通
　鍋こそげたる音のせわしき　丈草
ころ〳〵と眠れば直る駕の醉　惟然
　城取廻すゆふだちの影　猪睡

ウ

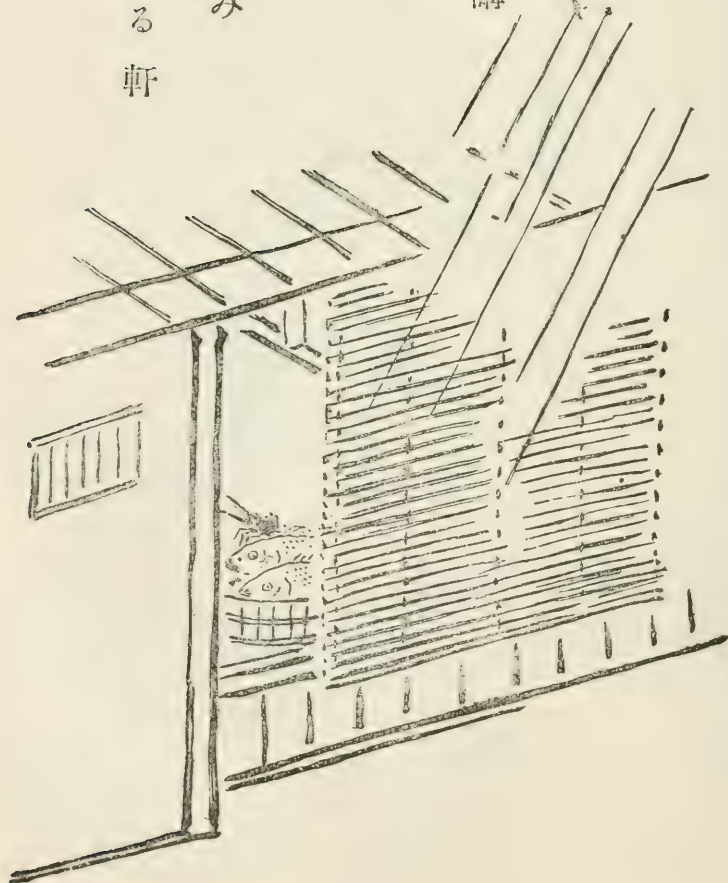
我ものに手馴る鋤の心よき　正則
　石の鳥居の書付をよむ　楚江
鶺鴒の森を見かけてきほひ行　勝重
　粂作りし日は時雨けり　莘香
拍子木に物喰ふ僧の打連て　兎苓
　瀧を隔る谷の大竹　正秀
刀影にこなし置たる臼の上　則
　只ちら〳〵とさきり〳〵す啼　重氏
粘こはき袴に秋を打うらみ　重古
　鬢の白髪を今朝見付たり　蕉
年〳〵の花に并びし友の數　草
　きしろ車もせかぬ春の日　則

ナ

蔦の葉の下は茶を吹落し　睡
　吼く事のもろき聲也　正幸
なげきツゝ文書うちは戸をさして　江
　いくらの山に添ふて來る水　苓
片嗅き人はかならず遠慮なき　香
　せめてしばしもきせるはなさず　然
風やみて流るゝまゝの渡し舟　秀
　只ひとしほと頼む染物　通
はし〳〵は古き都の荒殘り　紫萊
　月見を當にやがて旅だつ　草
秋風に網の岩やく石の竈　苓
　栗ひろ糠の夕部さびしき　睡
片輪なる子はあはれさに捨殘し　通
　身細き太刀のそる方を見よ　重成
長椽に銀土器を打くだき　柳沅
　時鳥鳴て夜は明にけり　秀
職人の品あらはせる花の陰　絃五
　南おもてにめぐむ若草　香

振賣の
鴈あはれ也
夷講

脇居所打添

降てはやすみ
時雨する軒

第三一轉、普請

番匠が樫の小節を引かねて

變化山方ノ番匠

片兀山に月を見る哉

人の變化

好物の餅を
絶さぬ秋の風

國ノ一字變化
武家用ノ附

割木の安き
國の露霜

變化新舟獵船
對シタル姿

網の者
近づき舟に
聲かけて

天相ノ附

星さへ見えず
廿八日

見出シノ附

ひだるきは

殊軍の

大事也

こなしノ附方

淡氣の雪に

雜談もせぬ

變化ノ姿

明しらむ箱
てうちんを吹消して

其人ノ上

肩臂(癖)にはる
湯屋の膏藥

人ノ變化

上おきの干葉刻むもうはの空

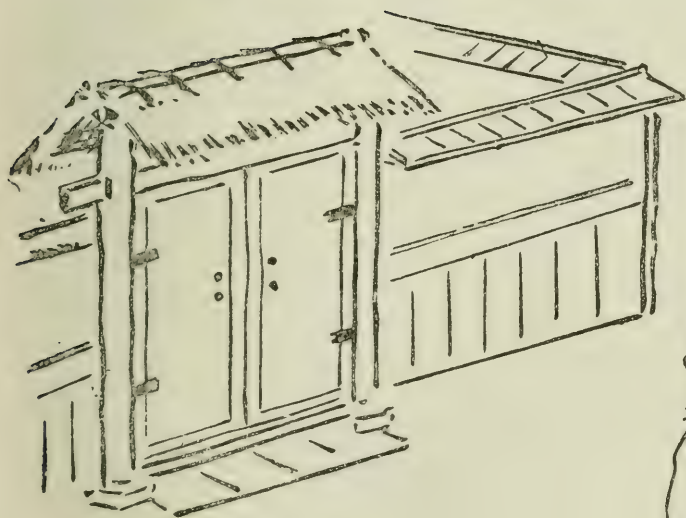
人ヲ迎ハセタル變化

馬に出ぬ日は内で戀する

迎附

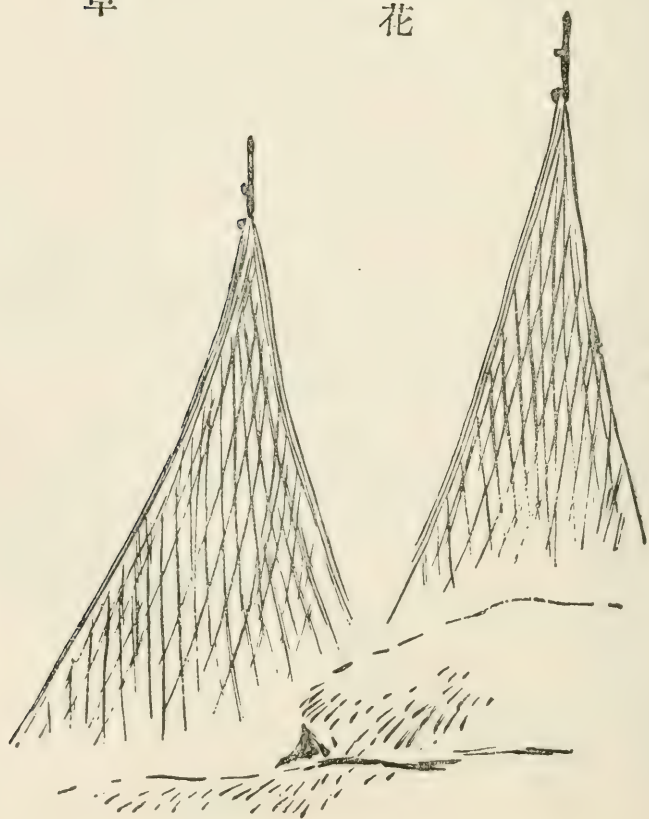
紿賣の七ツ下りを音づれて

居所の變化

塀に門ある五十石取

場ヲ定メタル附

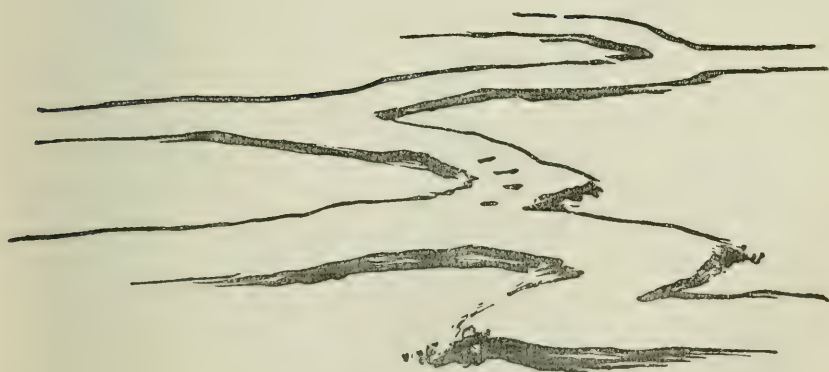
此島の餓鬼も
手を摺月と花

伸ビ

砂にぬくみの
うつる春草

場ノ變化

新畠の糞もおちつく雪の上

場ノ人ノ姿

吹とられたる笠取に行

笠ノ變化ノ場

川越の帶しの
水をあぶな
がり

あたりヲ
三州生田
平地ノ御坊ト
定メタル附

平地の寺の
薄き藪垣

用ノ附

干物を日向の
方へいざらせて

家ノ變化

用ノ附

鹽出す鴨の
苞ほどく也

前ヲ京地ニ

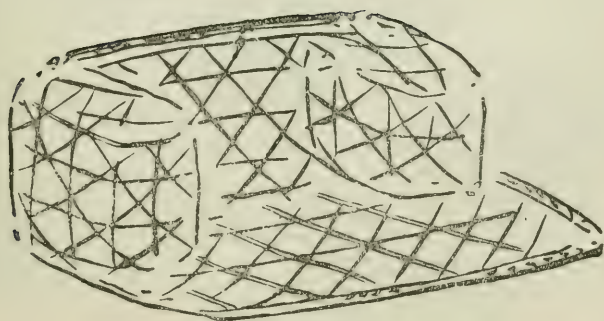
定メタル附

算用に浮世を
立る京住居

内ノ風情
句ノ意多産

又沙汰なしに
泿よろこぶ 産

時節

ごたくたと
大晦日も
四ツのかね

武家町家共ニ
世話ノ附

無筆の好む
狀の後先

用ノ變化

中よくて朋輩合の
借いらゐ

變化ノ姿

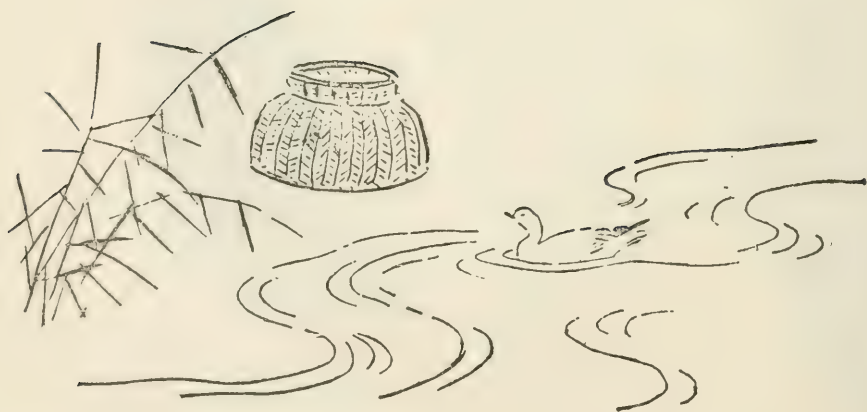
壁をたゝきて寐せぬ夕月

あたりの景色

風やみて秋の鷗の尻さがり

場ノ風情

鯉の鳴子の

縄をひかゆる

場ノ變化

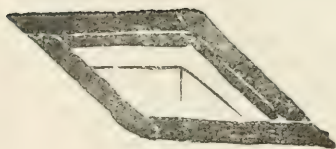
ちらほらと米の揚場の
行戻

場ヲ定メタル附

日黑參の
連のねちみやく

時節

どこもかも花の三月中時分

起情爐ノ名殘

輪炭の塵をはらふ春風

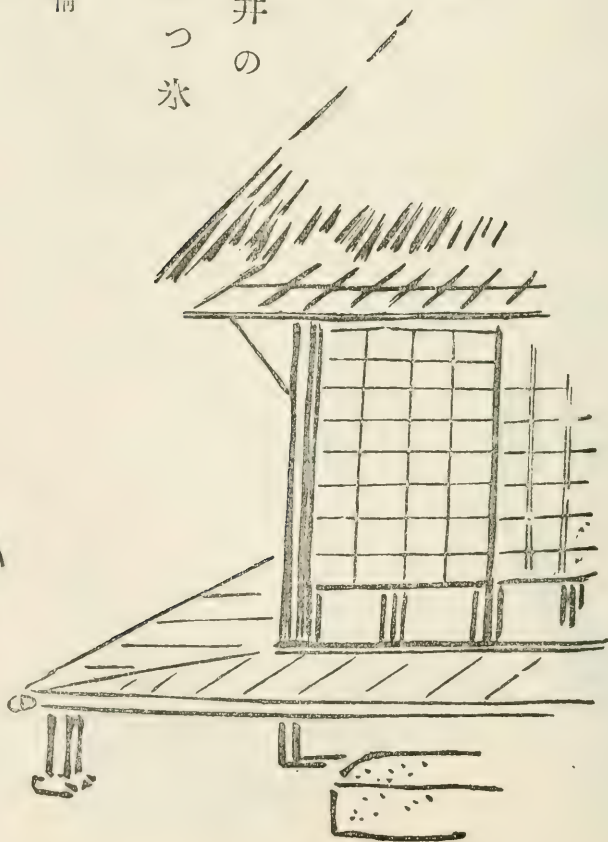
振賣の鴈あはれ也夷講　芭蕉
　降てはやすみ時雨する軒　野坡
番匠が樫の小節を引かねて　孤屋
　片兀山に月を見る哉　利牛
好物の餅を絶さぬ秋の風　坡
　割木の安き國の露霜　蕉
（ウ）網の者近づき舟に聲かけて　牛
　星さへ見えず廿八日　屋
ひだるきは殊軍の大事也　蕉
　淡氣の雪に雜談もせぬ　坡
明しらむ籠てうちんを吹消して　屋
　肩臂にはる湯屋の膏藥　牛
上おきの干葉刻むもうはの空　坡
　馬に出ぬ日は內で戀する　蕉
絈（カセ）買の七ツ下りを音づれて　牛
　塀に門ある五十石取　屋
此島の餓鬼も手を摺月と花　蕉
　砂にぬくみのうつる春草　坡
（ナ）新島の籬もおちつく雪の上　屋
　吹さられたる笠取に行　牛
川越の帶しの水をあぶながり　坡
　平地の寺の薄き藪垣　蕉
干物を日向の方へいざらせて　牛
　塩出す鴨の苞ほごく也　屋
算用に浮世を立る京住居　蕉
　又沙汰なしに娵の產（ヨロコブ）　坡
ごたくたと大晦日も四ツのかね　屋
　無筆の好む狀の跡先　牛
中よくて朋輩合の借いらゐ　坡
　壁をたゝきて寐せぬ夕月　蕉
（ナウ）風やみて秋の鷗の尻さがり　牛
　鯉の鳴子の綱をひかゆる　屋
ちらほらと米の揚場の行戾　蕉
　目黑參の連のねちみやく　坡
ごこもかも花の三月中時分　屋
　輪炭の塵をはらふ春風　牛

（續繪哥仙 乙）

芹焼は体
すそ輪の田井の
初氷は用ノ詞也

芹焼や
すそ輪の田井の
はつ氷

脇打添風情

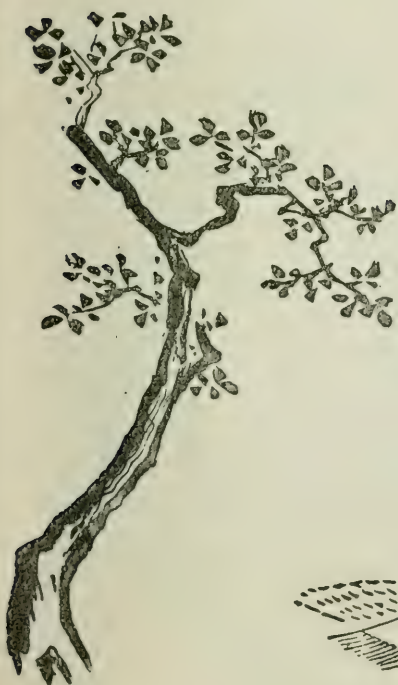
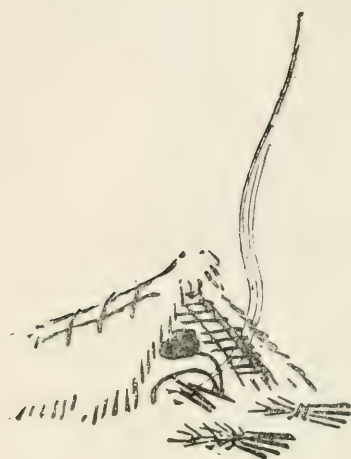
拳も寒し
卵うむ雛

第三、一轉機

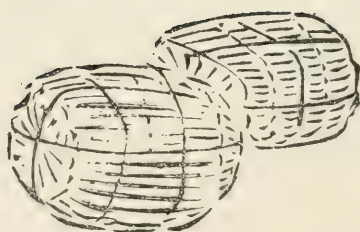
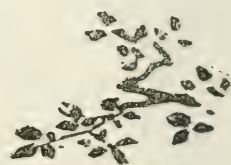
織下す絹を筵に　ひろ取て

居所の變化

折〳〵涼む裏の　柿の木

あたりの風情

薄月夜　鰯俵の　腥く

場の變化

汐くむ牛を
見えぬ朝霧

起情

露霜の小村に

鉦をたゝき入

變化ノ場

榎の木の末に

殘る注連繩

景色

あさり飛

土くれ鳩の

賑しく

場ノ變化
開發

堀は開きにならぬ石原

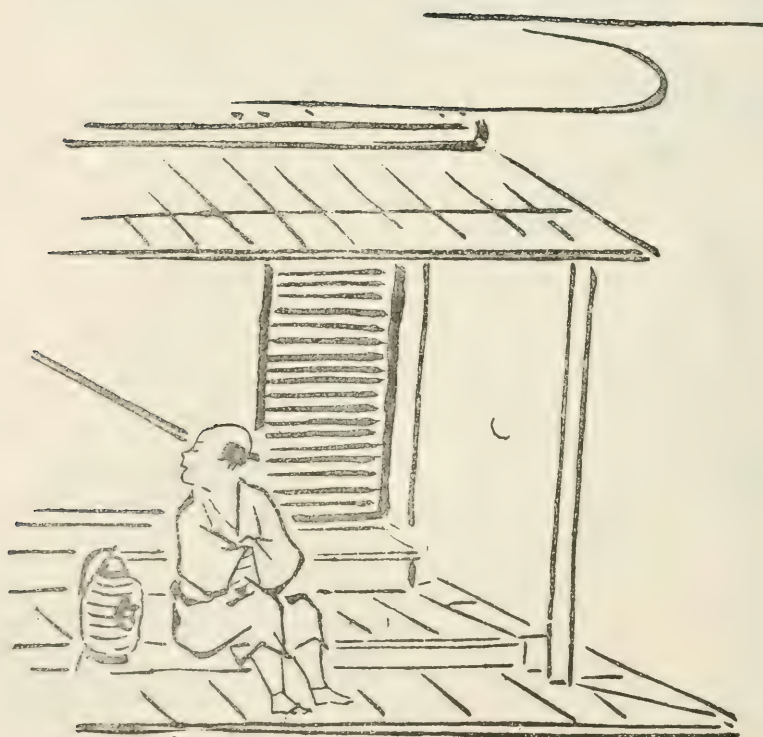
場ノ風情

日盛は孫に吸筒提させて

和田秩父とも
ひとり若黨

時代ノ變化

内ニ入タル變化

掛乞の來ては
詞をあらしけり

掛乞ノ變化

余所より暗き

月の枝折戸

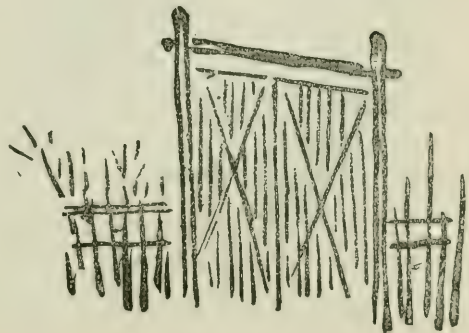
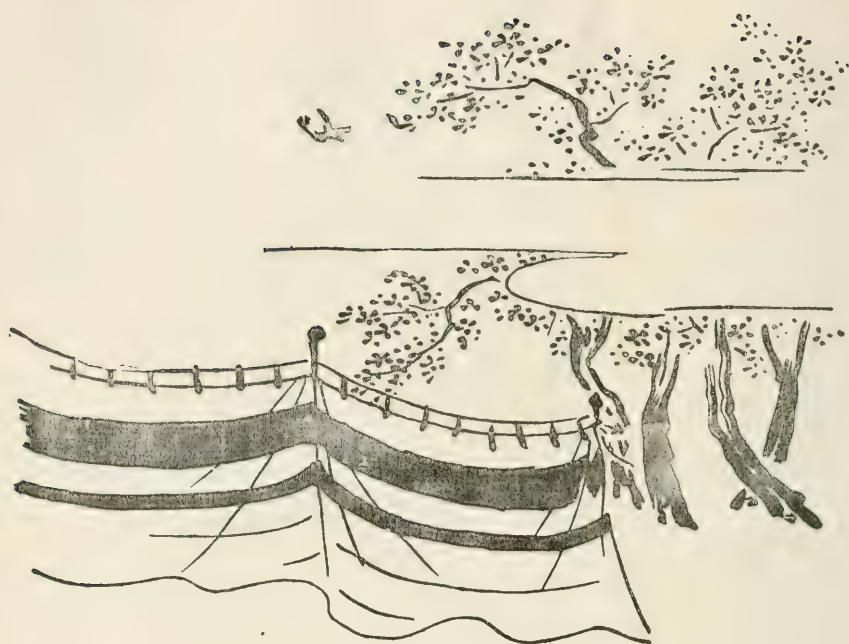
前ノ人

虫とりこしらで

甞の雁れて

場

松も薄も

念佛のたね

場ノ變化

富めば猶
命也けり
花の陰

用ノ附

破籠は
さめぬ
鶯の聲

破籠ノ變化

雪國は

春迄馬も

繫れて

共内ノ用ノ附

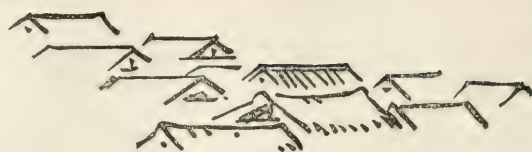
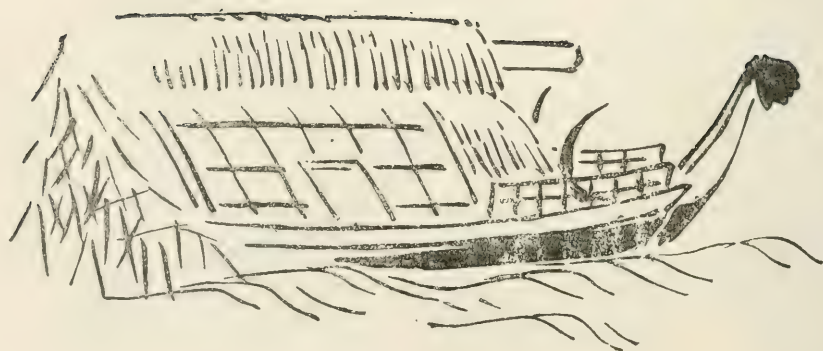
日記つまりし

一帖の紙

日記ノ變化

旅瘡や
長き五月の
船泊

前ヲ商人ト見テ向附

名殘をかせぐ
安藝の廣島

廣島ノ變化
世話ノ附

音信は
見しらぬ
伯母も
懷しく

前ノ見出シノ
附

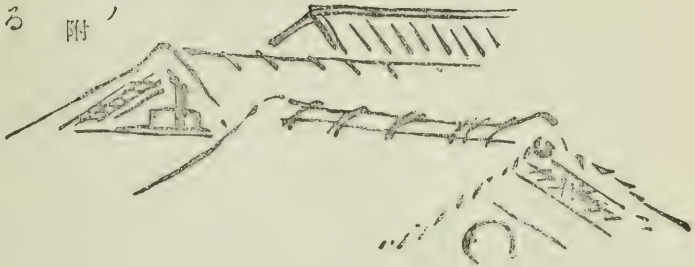
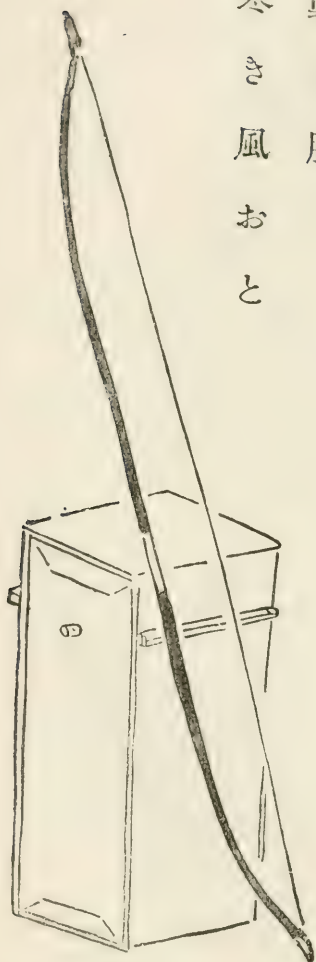
元米はかる
酒の奥殿

前ノ世話ノ附

焼(タキ)立て庭に
軆する暮の月

變化武家

巻藁も肌
寒き風おと

寄聟ハ舅へ始テ來タルヲ云

寄聟は

假諸太夫に

よそほひて

古代ニ取なしたる

附方

うき名を

辰の市で

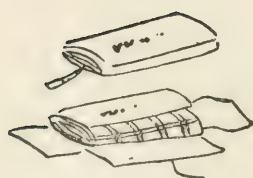
戀する

變化市ノ風情

よい縞と模様を
譽て詠やり

內ノ風情

葉茶壺なをす床の片隅

用ノ附

ほとゝぎす
すはやと蚊屋を
釣かけて

變化羈旅

湖水もしらむ
瀬田の朝駕

仲ビ

薄雪の
上に霞の
ころ〳〵と

起情商人

俵の塵をたゝく荒物

折花に子供のすがる袋町

場ノ姿

あたりの變化

若松植る天神の宮

芹燒やすそ輪の田井の初氷　芭蕉
　挙も寒し卵うむ雞　濁子
織下す絹な莚にひろ取て　涼葉
　折〱涼む裏の柹の木　蕉
薄月夜鰯俵の腥く　子
　汐くむ牛も見えぬ朝霧　葉

ウ

露霜の小村に鉦なたゝき入　蕉
　榎の木の末に殘る注連繩　子
あさり飛上くれ鳩の賑しく　葉
　堀は開きにならぬ石原　蕉
日盛は孫に吸筒提させて　子
　和田秩父ともひさり若黨　葉
掛乞の來ては詞なあらしけり　蕉
　余所より暗き月の枝折戸　子
虫さりさしらで蟹の雇れて　葉
　松も薄も念佛のたれ　蕉
富めば猶命也けり花の陰　子
　破籠はさめぬ鶯の聲　葉
雪國は春迄馬も繋れて　蕉
　日記つまりし一帖の帋　葉
旅狩や長き五月の船泊　子
　名殘なかせぐ安藝の廣島　蕉
音信は見しらぬ伯母も懷しく　葉
　元米はかゝる酒の奥殿　子
燒立て庭に鱈する暮の月　蕉
　卷藁も肌寒き風おと　葉
寄聟は假諸太夫によそほひて　子
　うき名な辰の市で戀する　蕉
よい縞さ模様な誉て詠やり　葉
　葉茶壺ななす床の片隅　子

ナウ

ほさゝぎすすはやさ蚊屋な釣かけて　蕉
　湖水もしらむ瀨田の朝駕　葉
薄雪の上に霰のころ〱さ　子
　俵の塵なたゝく荒物　蕉
折花に子供のすがる袋町　葉
　若松植る天神の宮　子

春に明る
ひと際ならん
君が波

脇打添
雀の下りて
長閑也けり

第三、一轉

いかのぼせ
はうない顔の
集りて

變化武家

はさみし帶の
品見ゆるなれ

内ニ入タル用

ぐら〳〵と煮える臺笥の月こぼれ

栗取込し宿の入口

前ヲ本陣ト定ムル附

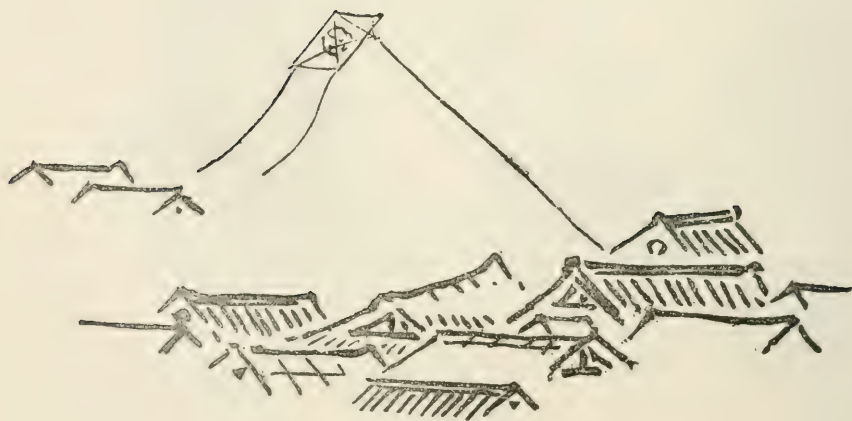
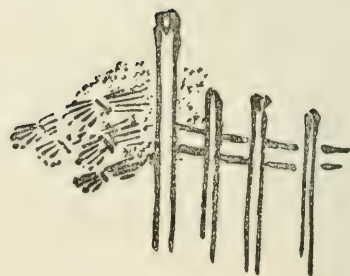
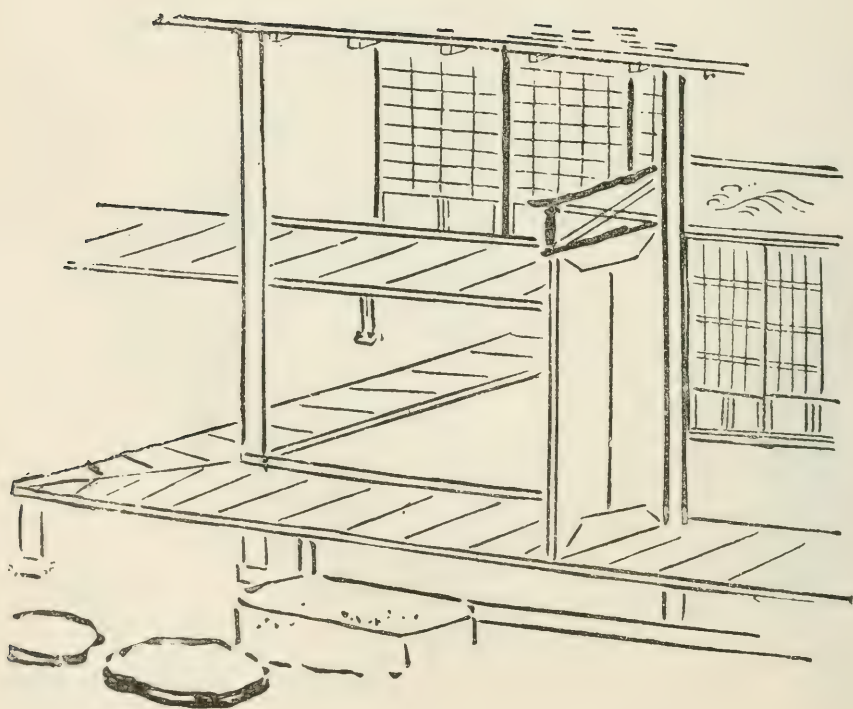
起情ノ用

新しき釣がね見んと秋の風

其人

角力の負は誰も名乘ず

時代ノ變化

夕凪の肴

色〳〵粧坂

内ノ風情

空炷わたる竹のくれ椽

仲ビ
數奇屋

來て居るか居ぬか左官の靜也

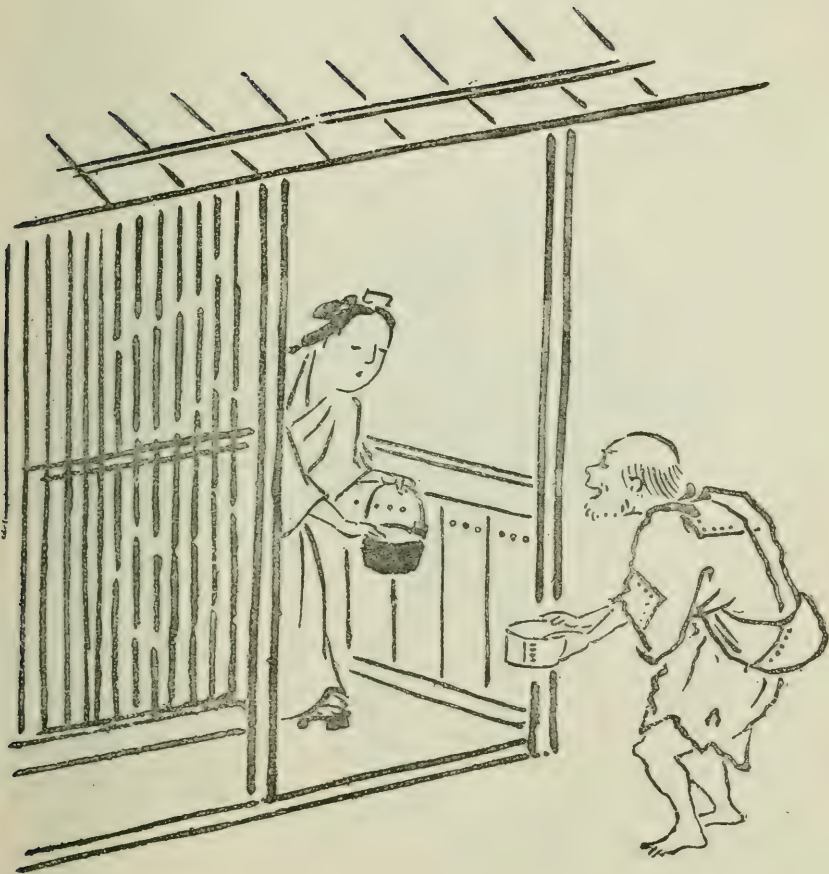
其人變化ノ場
伊勢齋宮ノ繪馬
行疫神ヲなだむるわざ也

繪馬を
かける
星のくら闇

時節

うちはぢく
石地の霰
其まゝに

起情　京ノ町

粥遣うとて古風残れり

あたりノ風情

月花の
けふの道法
早出して

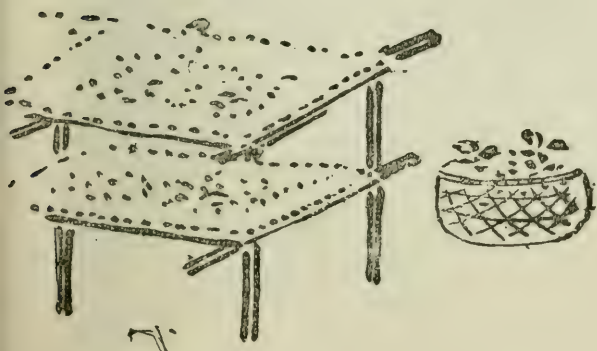
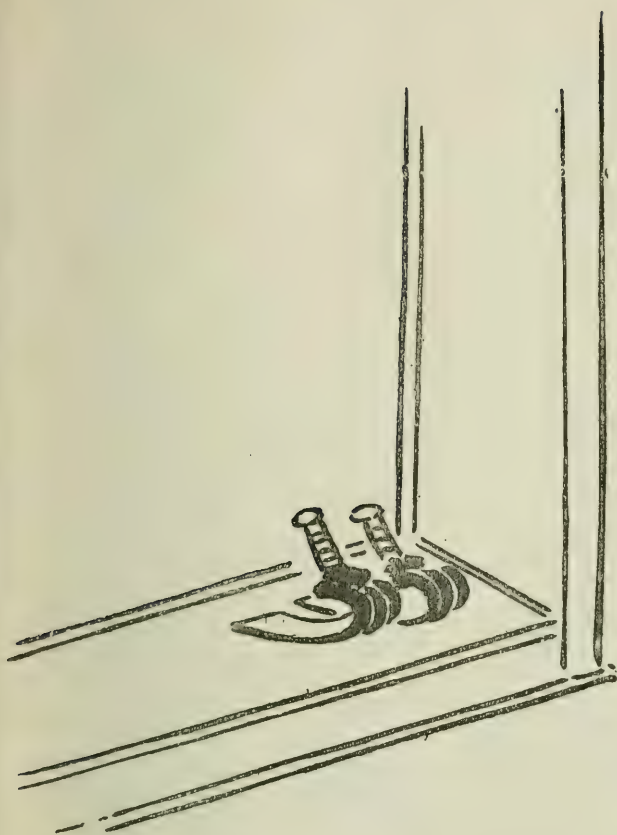
仲ビ

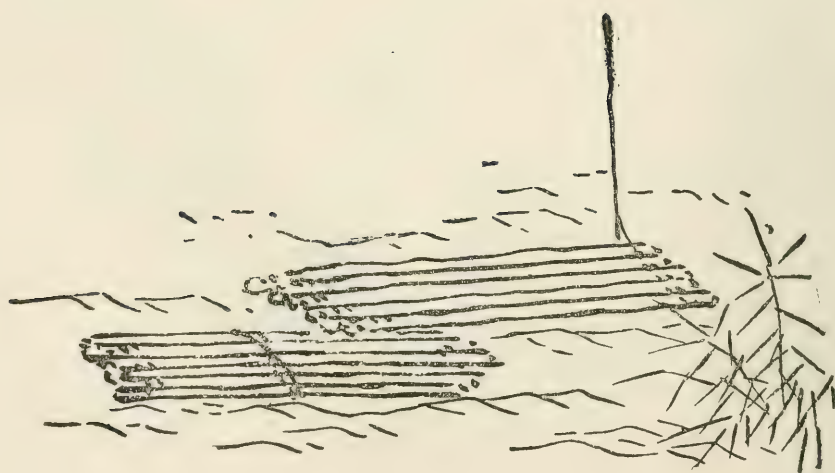
母の機嫌の
雉子にさへぐ

内ニ入タル變化

床の間に

蠶の内の

鞍鐙

あたりノ
用ノ附

濁もよしと
筏組せん

景色

駈登る

谷の

小猿の

打みだれ

あたりノ起情
余情湯治

はたちの
髪を洗ふ
涼しさ

變化ノ用

宵の月
躍編笠
うかしたて

共場

木槿の内の廣き門前

あたりノ居所ノ
變化

汗したる借馬もどりし

大盥

世話ノ附

國の便ぞ小酒買べく

人ノ變化

佛檀（壇）にこたつ蒲團をはねかへし

其場

とめこかしの

詞取

ひらかぬ

梅を

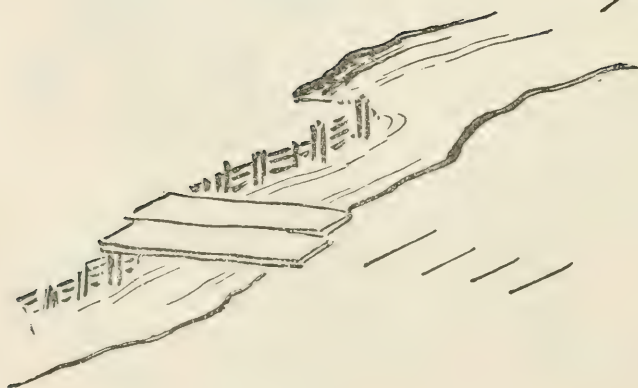
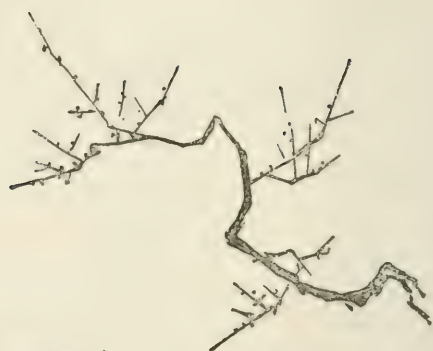
折にこそ

よれ

其人

棚橋の

謠も花の

春なれや

變化ノ用

骨繪して

夷呼あふ

内ノ風情

持傳ふ

墨繪の

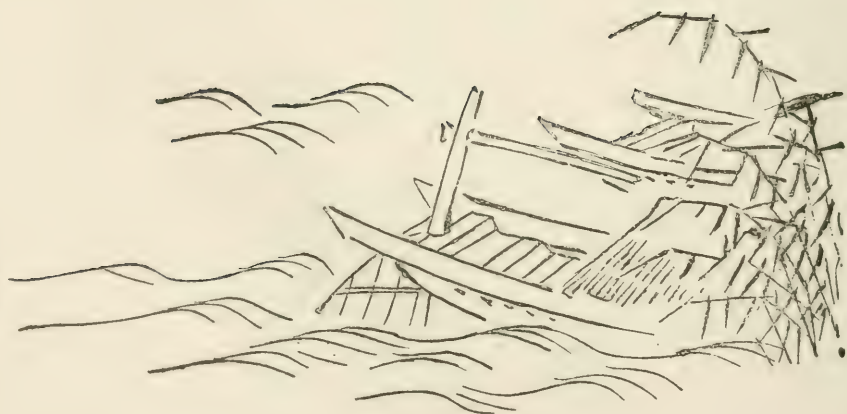
布袋

二幅迄

前ノ用變化

舟から舟の
日記四五册

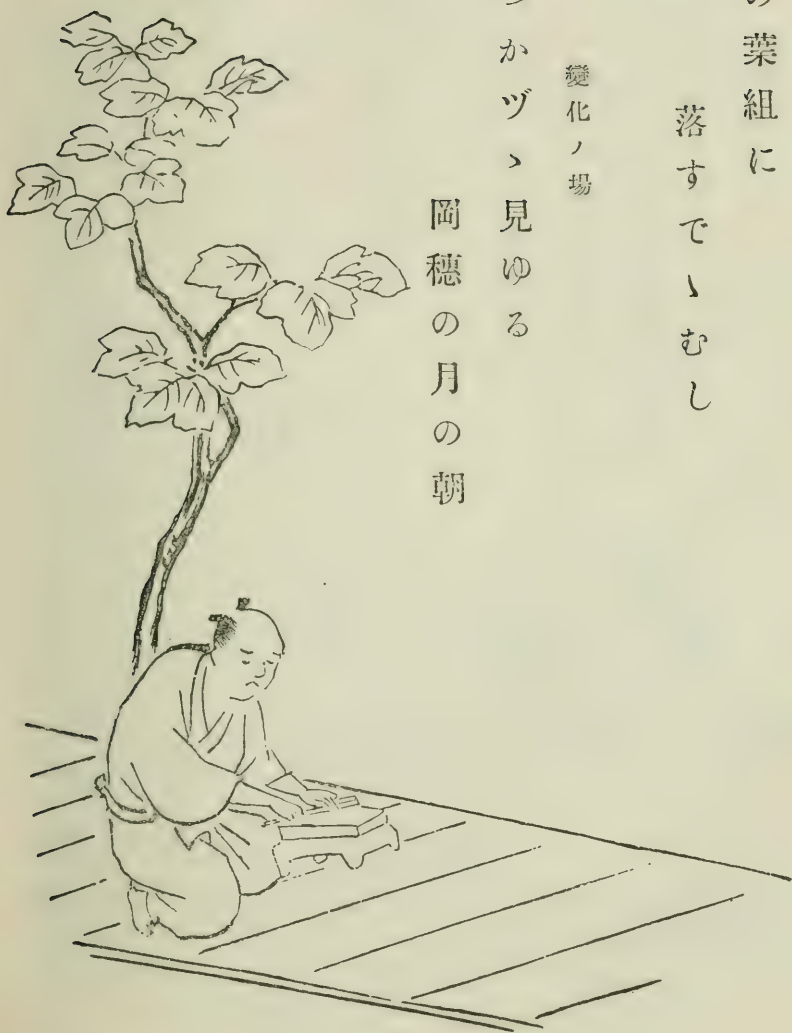
船ノ中ノさま

剃力(刀)の銹も
此程雨の脚

變化居所

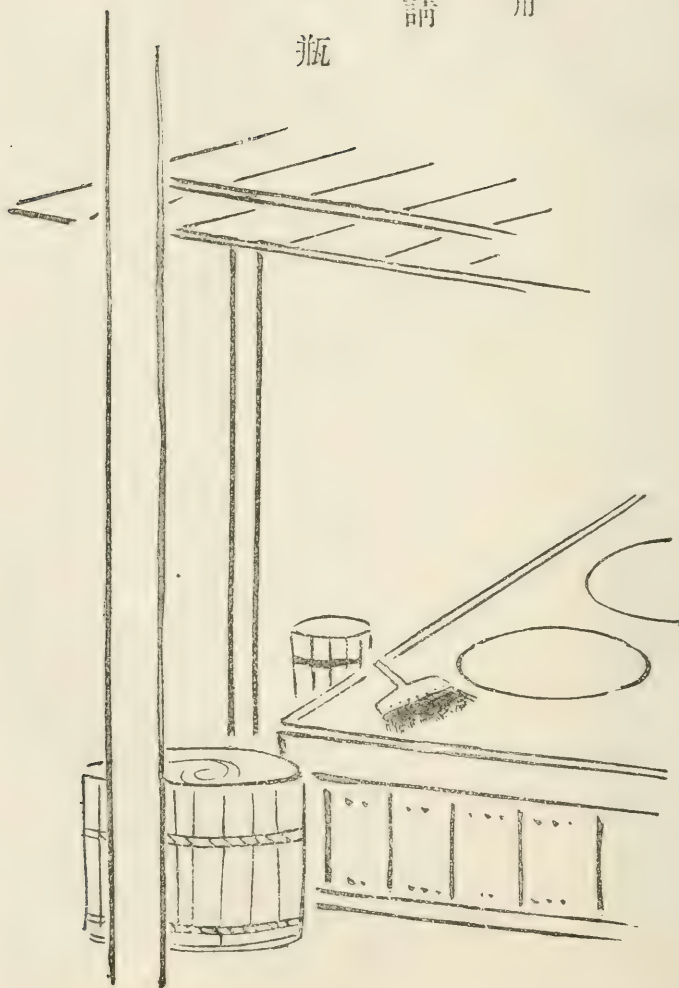
桐の葉組に
落すてゝむし

變化ノ場

わづかヅゝ見ゆる
岡穗の月の朝

起情。

居所ノ用

秋より普請

はだつ藍瓶

變化市中

とことはに
家鴨の聲の
米通し

武家ノ變化

稻荷秋葉を
祭る
長馬場

春に明るひさ際ならん君が波　宜麥
雀の下りて長閑也けり　青牛
いかのぼせほうない顔の集りて　富竹
はさみし帶の品見ゆるなれ　寄山
ぐら〳〵さ煮える臺笥の月こぼれ　方鳩
栗取込し宿の入口　野乙

ウ

新しき釣がね見んさ秋の風　右左
角力の負は誰も名乘ず　宜冬
夕風の肴色〳〵雑坂　旦中
空灶わたる竹のくれ椽　松成
來て居るか居ぬか左官の靜也　蕖山
繪馬をかける星のくら闇　百鏡
うちはぢく石地の霰其まゝに　几石
粥遣うさて古風殘れり　雪傘
月花のけふの道法早出して　月齋
母の機嫌の雉子にさへ〳〵　壽交
床の間に蚕の内の鞍鐙　桂二
濁もよしさ筏組せん　丘窓

ナ

駈登る谷の小猿の打みだれ　牛長
はたちの髪を洗ふ凉しさ　魚明

宵の月躍編笠うかしたて　丁輔
木槿の内の廣き門前　雀步
汗したる借馬もごりし大盥　一之
國の便ぞ小酒買べく　角字
佛檀にこたつ蒲團をはねかへし　渡風
ひらかぬ梅を折にこそよれ　巴行
棚橋の謠も花の春なれや　馭羊
骨鱠して爽呼あふ　東蟻
持傳ふ墨繪の布袋二幅迄　萬夫
舟から舟の日記四五册　吐峯

ナウ

剃刀の銹も此程雨の脚　令恭
桐の葉組に落すでゝむし　棧馬
わづかヅゝ見ゆる岡穗の月の朝　叟和
秋より普請はだつ藍瓶　其奥
ここさはに家鴨の聲の米通し　草石
稻荷秋葉を祭る長馬場　執筆

彫工　朝倉宇八

通説

本大系は三つの時代に支點を置いて編錄したので、一は芭蕉時代、二は蕪村時代、三は一茶時代といふ名を以て分つた。芭蕉時代とても、たとへば羅馬時代といふ風に、芭蕉帝國が其當時全俳壇の覇權を握つた譯ではないが、貞享元祿年間に於て、芭蕉及び其一門の句風が截然たる一紀元を劃するほどに、新しい時代を作り上げた事の功績は顯著であるから、其時代を芭蕉時代と稱することは問題のない處である。次に、蕪村時代といふ言葉には問題が起らう、何故ならば明和安永天明の中興期に於て奮起したものには、蓼太あり、白雄あり、樗良あり、太祇あり、曉臺あり、獨り蕪村の天下ではないのみならず、蕪村はむしろ獨善的であり、隱遁的ですらあつた。俳壇的勢力といふ點を以て云へば蓼太に及ばなかつたであらうし、時代的轉向といふ點でも蕪村一人が原動的位置を占めた譯ではない。けれども、其等の中興諸家を藝術的に批判するならば、蕪村は嶄然として獨り高く頭角をあらはしてゐる。若し、其時代から蕪村を失つたとしたらば全く索漠たるものにならうが、蕪村さへ殘しておけば他の諸家を隱しても左程さびしくなからう。其位な蕪村の大きさはある。蕪村時代といふ名は決して不當ではない。尤も之は藝術批判的に見て初めて云はるべき事であるから、其批判の眼が正鵠を得る程に時代を離れたる今日の私達の立場からこそ斯く斷定される事なのである。

　ところで、次の一茶時代といふ事は一層問題になる言葉である。こゝに一茶時代と稱する寛政享和文化文政の頃に於ては、俳壇を通じて之といふ中心人物がない、さりとて群雄割據といふべき英雄もゐない、群小散在といふ有樣で

ある。蕪村時代に於ては、支麥の卑俗なる俳風を一掃して、芭蕉の高雅に復歸しようといふ道を愛護する精神が燃えてゐたが、寛政享和以後に於ては、芭蕉の頃の古蹟を保存しようといふ跡を愛護する趣味が盛になつた、それほどに俳人の氣持の上の大きな相違がある。幻住庵の跡、落柿舍の跡、今日庵の跡、鴫立庵の跡等等が興され、其處に庵主がをさまつて各好い氣持になつてゐたのである。全俳壇を捲席せんとする程の勇氣のある者もなく、廣く師表として仰がれる程の德望ある者もない。一茶は、さうした中に初め江戸にあつて葛飾派に屬してゐたが、其句風に異色のある所が嫌はれがちなので(他の原因もあるが)、遂に故鄕なる信州へ引き籠つてしまつた。一茶は當時の大立物ではさら〱なく、流行作家とさへ云ひ得なかつた。たゞ、人間が面白いのと句が變つてゐるので、俳壇でも注意されてゐたし、同趣味者の間には尊敬されてゐたといふに過ぎない。その一茶が、こゝに一茶時代といふ名を負はされようとは、其當時の何人も(恐らくは彼自身も)思ひ設けなかつた事であらう。又今日に於てさへも、一茶時代といふ名を以て其時代を代表せしめることの當否に就ては、議論のある事であらう。然し、其議論をする人とても、此時代に何といふ名を冠すべきかといふ事には困るであらう。蕪村時代には中興といふ名も當るけれども、此時代には其に對すべき內容もない。其程に、此時代は殆んど特色なき時代である。その特色なき時代にあつて、非常に特色ある作家こそ一茶なのである。で、「作家として」と「時代として」とは違ふけれども、つまびらかに一茶の作風を見れば――此事は『一茶一代集』通說に述べる――時代的にさうなるべき必然的の傾向が認められる。而して、其時代から次の時代に向つての影響といふ點を見れば、蕪村が明治時代の子規一派の作風に影響を與へたと同樣に、一茶が大正時代の新興俳風にかなりの影響を與へてゐるのは事實である。此倒敍的の見方からして、一茶をして其時代の代表者と見ることは決して不妥當でないと私は考へるのである。

さて、上にも述べたやうに、時代として殆ど特色なき此時代に、强て特色を求めるならば、私は第一に「安易性」といふことを擧げたい。「安易性」とは氣樂さである、肩のはらぬことである。芭蕉も蕪村も俳諧に遊ぶとは云つたが其遊びには道としての、又、藝術としての眞劍さがあつた、その眞劍さが此時代にはなくなつた、たゞ句作して樂しめばいゝといふ風である　此時代に覇氣のある作家が出なかつたのも、藝道的眞劍味の不足からである。然し、際立つたる英傑の居ないといふ事はお互に樂しむ上から云へば却て好都合なので、誰もがドングリなればこそ、誰もが仲好くつきあひえたのである。そこで此時代の特色として、第二に「親和性」といふことを擧げたい。各自が樂しむといふ所で折合つてゐるから、主義主張といふやうな角が立つて來ない、又、人の上に立たう〳〵とする覇氣がないから爭論や泥仕合がない、系統的に云へば流派を異にする人達でも、風交を結んで親しむといふ風である。そこで、左樣にお互に親しみ樂しむといふ氣持を以て俳句を取扱つてゆく上から、遂には俳句を以て一つのなぐさみとする、もてあそびとするといふ所へ墮ちてゆくことも自然の趨勢である。卽ち、此時代の特色として、第三に「遊戲的」といふことを擧げたい。こゝで遊戲的といふのは、道として樂しむ、藝術に遊ぶといふ氣持よりも一段と低い所の安易さや面白さを主とする氣持を指すのであつて、此氣持から作られたものは勿論、正しい意味で藝術といふことは出來ないが、其作品よりも其人が俳句を取扱ふ態度に於て、此の遊戲的といふことを私は指摘したく、斯うした所から俳句が墮落してゆく所を戒めたいのである。要するに、安易性であり、親和性があり、遂には遊戲的にすら傾いた此時代は俳句史上の無風帶であつて、俳壇的に記錄すべき事蹟がなく、而して其無風的なる惰氣が次の天保時代の月並風に入る素地となつたといふことも否めまい。たゞ一人、一茶が自分の道を歩いた事を別にして——。

次に本卷に收めたる俳書の一冊々々に就て逐次的に寸評的なる印象を書かう。

「つの文字」(六林著)は、いろは四十七字を一字づゝ用ひて詩でも歌でも俳諧でも作つたもので、

試筆三つ物

ふで（筆）はしめ（始）いろ（色）やはら（和）けるかな（假名）よりぞ

ゆき（雪）おれ（折）まと（窓）のゐほ（庵）へうくひす（鶯）

たつね（尋）ゑむ（得）みえ（見）もせぬ京をあさこち（朝東風）に

斯んな風に漢詩ですらも音讀して此式でゆく。恐ろしい文字並べの天才もあつたもので、現代に出たらば萬朝報の「と歌の懸賞もとつたであらうし、クロスワードなども上手だつたに違ひない。之を俳書の中に收めるのも、ちとをかしりな」いが、後にある「俳諧廻文帖」と共に、俳句を中心にした人士の趣味が一體に遊戯的傾向を帶びて來ようとする前驅として好適なる一例證である。

「松のそなた」(紫曉撰)は蕪村沒後とは云へ、夜半亭一門の句がやはり輝いてゐる。夕陽落ちて後の餘映の如き美しさがある。

睡氣さす魔を蹴て行や子規　几董

鶯や日の出の後の霜くもり　同

大名をとめて蘇鐵の月夜かな　田福

野はづれの酒屋起たり雉の聲　百池

海棠や雨をはらめる月二夜　紫曉

外に

角上て牛人を見る夏野かな　青蘿

「さきつる」(亭編)には江戸方面の作家の方が振つてゐる。

塊に並びて啼る蛙かな　京　亭

出立て見れば夜深き柳かな　東都　完來

猿曳の肩に猿なく時雨哉　八王子　星布

夕霜やいつもの所に灯のみゆる　東都　一茶

こゝに一茶の句が見える、此書が梓行された寛政十二年は一茶三十八歳、「父の終焉日記」を書いた前年である。

「新華摘」は編者、騏道が「貫之は一首を廿日に詠じ、公任卿はほの〴〵の歌を三とせ案じ給へり、老太祇が三都集も千日にしてなれりとかや、不用意にしてうるといふも能く沈思のうへなるべし、さはなりといへどもまた何かせむ、一句一章のみやびこそあらまほし」といふ意氣込を以て、日課的に句作したものであるが、彼の句にも同輩の作にも悪く複雑な趣向を捉へようとした人事句が多い。蓋し、之は課題的な句作を試る事から當然に來べき弊なので、蕪村の「お手打の夫婦なりしを更衣」の如きも、其一例だが、さすがに蕪村は其力量を以てして、之を俗におとすことから救つてゐる、但し之を模したものは危い。

世帯する身になりそめて一夜葺　騏道

蚕のきぬた其夜は海も静也　同

みごもりの夢見しあすを更衣　經一

見込なき女となりぬ麥の秋　筑前 士澤

「はりまあんご」(瓜坊撰)は播磨の青蘿を訪ねた瓜坊が青蘿の手許に集つてゐた草稿から拾ひあつめたものといふが佳作は少いやうである。

后の月蕎麥に時雨の間もあらぬ　青蘿

うら盆や經讀み捨る草の中　瓜坊

「落柿舍日記」(重厚編)に依ると、安永の頃、嵯峨の落柿舍に既に「所の人だに其跡をしらずなりにき」とある。尤も去來存命中の句は

落柿舍すたれたるころ

澁柿はかみのかたさよ明屋しき　丈草

(上略)かの落柿舍もうちこぼす由

やがてちる柿の紅葉も寢間の跡　去來

とあつて、打毀たれたのであるが、其跡が七十年程の間にもう何處か解らぬとは餘りである。重厚が其跡を復興することを發願した心持もうれしい。山本村に弘源寺の跡といふのがあつて、今も柿の古木數株あり、「柿ぬしや梢はちかきあらし山」といふ風趣も備つてゐるので、所は其處と定め、菊亭殿の御庭の御腰掛一字を乞うて移したといふ事が序に見える。其も亦頽廢して、今日、存する所の落柿舍は、其から又ずつと後のものである。

其於落柿舍興行、去來忌懐舊之俳諧

柿買に間れてかたるむかしかな　重厚

色紙まくれし壁の秋風　規慶

夕づくよしだいにあかく影すみて　蝶夢

「鶉風呂」の編者、呂蛤は夜半亭嫡流の人だが、其句風は蕪村の骨髓と離れる事が遠い。此集に擧げてゐる几董の句も好くない、几董自身の句境が蕪村の歿後、甘くなつて來たのでもあらうが、編者呂蛤の眼のつけ所が低いから、しぜん自分の師の低い句を擧げたのであらう。

人も哭く鰹の血合ほとゝぎす　几董

雨の夜や操崩るゝ女郎花　同

萬歳の中へ和尚の御慶かな　呂蛤

杜宇月はむかしのありどころ　同

斯くて、中興時代にあれほど緊張してゐた京都の俳壇がだん／＼ずり下つてゆく。之に反して「淺草はうご」（成美編）には江戸俳壇の新興的氣力がほの見える。一茶時代の俳壇が一體に安易性であり、ディレッタンチツシである中に、成美は代表的なるディレッタントである。こゝに代表的とは好い意味に於てゞある。夜半亭とか雪中庵とかいふ傳統が職業的の看牌になることから藝術的には低下してゆく時代にあつては、俳諧を以て食はずともいゝ成美のやうなディレッタントが新しい清涼の氣を吹き込む者となるのである。

淺草は額のうへの柳かな　金翠

元結車に小風ふく春　成美

殼あさりかげろふくさく蝿出て　心匪

發句では無名の人に好い句がある。

山吹や煩ふ兒を馬だより　梅夫

鳩啼や椿の花に雨が降る　汀鳬

茶の花になれて小鳥の朝日かな　尺艾

「俳諧鼠道行」(成美編)には

夜あけまでぐあひのわるきふとん哉　一茶

が一句ある、好い句とは思へないが、一茶の風調にはなつてきてゐる。此「鼠道行」は句を集めるよりも其角の戯文「光陰鼠の道行」といふものに節付したものを披露したいといふのが上梓の動機であつて、そこにも此時代の特色たる遊戯的氣分がうかゞはれるが、次の

「德萬歲」(巢兆編)に、集中には作者の名を載せず、目次と對照して初めて判るといふ編輯法をとつたのは、有名無名といふ幻覺を取去つて、作品本位に味はせようといふのが、主眼だと編者は云ふが、誰の作かといふことを一寸考へさせたり當てさせたりするやうな興味をもたせた氣持がない事もあるまい、そこにやはり遊戲氣分が出てゐるといへよう。題からして「品さだめ」とある。當今、俳句雜誌で行ふ「一句集」の嚆矢だとも見られよう。通讀した所では、

竹の雨降や月夜のかたつぶり　雲帶

五月雨や何はこびくる軒の蜂　午心

「せき屋でう」(巢兆)は毎丁に繪が挿んであつて、句集を編む氣持でも、其を讀む氣持でも、氣輕に面白く、其を以

て親しみあふものにする、慰むものにするといふ傾向がだん〳〵明かである。

菫野や見かけて遠き山一つ　路川

「水薦刈」（柳荘編）は信濃國句集ともいふべきもの、古人の作を主として採つたとは云へ、後世では信濃の俳壇を背負つて立つた一茶の句が見えないのが皮肉のやうでもある。寛政六年だから、一茶は四國邊を行脚中であつたらうか。

「何袋」（一峨編）には、一峨が橋町に芭蕉の遺跡をなつかしんで今日庵を再興するといふ事に隨喜して、一茶が此集の序を書いてゐる。當時（文化九年）一茶は成美の家などに客ともなく遊んでゐた頃だが、江戸の俳壇では相當に認められてゐた事はわかる。

春の草お七が墓に人見ゆる　成美
花さけや佛法わたる蝦夷が嶋　一茶
蝸牛足も手も出せ月夜なる　寥松

「夫古今」（太節撰）からは、成美、太節、一茶等の歌仙を見たい。その一節

乘ものゝ人の涙を鳥が啼　太節
　二度あふまじとわたす榊葉　一茶
夏の夜の水臭きまで更かゝる　成美

「西歌仙」（一瓢著）は、一瓢の發句に尾張の士朗が脇をつけたのを始めとして、伊勢、近江、京、大阪、中國、四國、九州と各地の俳人が一句づゝ付けて行つて長崎の幽嘯で三十六句目の滿卷になつたものを主にして斯く名けた。今日、

流行する廻覽集のはじまりだと見ると面白い。之を其頃はすべて飛脚でやつたのだから、ずゐぶん暢氣な遊びであつた譯である。又此集に載せた發句は凡て國別にしてあるが、能くもこれだけの地方に交遊の手をひろげてゐたものだと思ふ位である。

去年の冬、わが物見塚に旅寐せし信濃の一茶が、たぬきの夜話といふは

鳶ひよろひよろ神も御立げな　一茶
ちれ〳〵もみぢぬさのかはりに　一瓢
大草鞋小草鞋足にくらべ見て　同
一番ぶねにはふるぶちねこ　茶
あくた火もそれ名月ぞ名月ぞ　同

一茶と一瓢との附合を見ると、好く呼吸が合つてゐる。多分、此二人は氣持の上でも、よく合つてをり、平生大の仲好しであつたに違ひない。

「物見塚記」（一瓢編）にある此二人の連吟も面白い。

をしまれて死るは人のまうけ物　瓢
そのきさらぎの見事なる空　茶
うめぼしの核をはうるも花ごゝろ　瓢
文化八年日暮里の春　茶

揚げ句、文化八年は其作の年、日暮里は一瓢の寺のある處である。一瓢と一茶と、其號からして、相棒的な名付け方ではないか。一茶が少年にして江戸に出でた折、暫く寄寓してゐたといふ寺が或は一瓢の寺かもしれぬとしたらば、一茶といふ雅號も一瓢にあやかつたものじやないかと思はれぬでもない。但し之は一寸した私の憶測にすぎないことだが――。

「的中集」(洞々撰)も地方的によく句を貰ひあつめてある。

旅人の馬のり替るかれ野かな　　多代女

此句が特に好いといふ程ではないが、多代女は當時の女流作家として注意すべき人である。

「世美冢」(白老編)には佛頂和尙より芭蕉に傳へたといふ竹如意の圖をあらはしてゐる。「物見塚」には本行寺番神堂にある道灌公志願の鍔口の圖が出てゐる。斯うした考古的趣味が當時の俳壇には盛んになつてきたことが解る、之もディレツタンチズムの一面である。「世美冢」中の句、

それでこそ御杜宇松に月　　一茶

なか〳〵に人と生れて秋の暮　　同

「寂砂子集」(太節編)は東北の遍歷、三年餘にして江戸に戻り

秋風やもどる處も旅の宿　　太節

と吟じた其記行を主にしたものだが、柏原に一茶を訪ふた折の記に

一茶法師が菴は、古き都なつかしき柏原といふ處也、互に露の命のつゝがなきをよろこび、さ

すがに年のかたむくをかこち、なきみ笑ひみ萬
うち忘て、そこに一碗の粥をわかつ事五日

なす事のへるにつけても秋の月　太笻
ちる芒寒くなるのが目にみゆる　一茶

須賀川では多代女をも訪うてゐる。

三日月や客の出てゆく松の中　多代女

「みはしら」（百堂編）は諏訪の御柱祭に因んだ題名だけあつて、百堂が信濃の人々と交遊して得た所の收獲が多く收められてゐる。

善光寺
蓮の香にはさまれて夜を明しけり　百堂
鳴けほとゝぎす天下泰平　文路
ともかくも瓢のうちの世界にて　一茶

「麻刈集」（士朗編）の名古屋の枇杷園士朗は此時代にあつて屈指の作家である。人としての德望もあり、研究方面にも委しく、江戸の隨齋成美と双璧たるべき人だが、句作は成美よりも一段と上であるやうに見える。

馬上吟
冬の日の猶うつくしや石部山　士朗
幼子の夜中遊びや春の雨　同

啼やめば水鶏見えけりちらほらと　　同

「雀芝」（道彥著）は、その士朗が岡崎の卓池と連立つて、江戶見物に來た記を道彥が書いたもの、

一、珍客江戶見物之事
一、發句贈答無用之事
一、席上書請停止之事
一、人品令不論貴賤事

三月八日　　金令舍執事

と道彥の家の承塵に張り出してあつたといふから、彼等の交遊氣分は想像がつく。墨田川に遊んでは「いやがうへにつどひくる風客、三つの舟にゑいしれて飼り合たれば詩も歌もしるさずなりぬ」とある。二人が江戶の春の印象は

ちる花は皆人につく上野哉　　卓池
我人が見ても目出たきさくら哉　　士朗

「斧の柄」（乙二著）は松前紀行である。アイノの風俗などが當地の俳人の眼にどう映つたか、鰊の大群の來るめづらしい話なども書いてある。

海外にありて

このやうに菖蒲葺ても寒さかな　　乙二
旅のこゝろは芥子かよる藻か　　布席
浦島が子のたよりなきこころなれや　　二

更ぬけしきに出ておはす月　席

海外にありてといふ前書も注意される。

「花見二郎」(升六編)は吉野、初瀬、嵐山等の花の歌仙を中心にしたものだが、其外にある發句の無名作家の作に秀でたものがたまく目につく。

山さむく海寒く梅の咲てある　矩竜(サカイ)

てふくにけぶりのかゝる燒野かな　一透

「俳諧新深川」(升六撰)に於ても、同樣に其中の無名作家の發句を特に擧げておきたいと思ふ。

黑谷は夏深くなる月夜かな　松榮

あら海の音も夜にする火桶哉　馬來

寒ければ千鳥は夜の物といふ　湖水

かれ竹のからく年は暮に鳬　甫水

「新かはづ合」(奇淵編)は貞享の「蛙合」に倣ふたものだけれども、編者がいゝ加減に一つく取組をこしらへて、これもこちらで頼んだ一人々々の判者に行司になつて貰ふといふのだから、大分に興味本位になつてゐることは爭はれない。判者は必ずしも其人の師である必要はないとしても、其道に於て信賴し得る人であつてこそ、初めて批判といふ事が藝術的に生きるのではないか。さもなくば、夜角力式の遊びと變りはない。

「女百人一句」(鶯卵女撰)なども、編者は案外にきまじめなのかもしれぬけれども、出來た上で見ても、又、味ふ方から云つても、興味本位のものといふ以上に出てゐないと思ふ。

「關清水物語」(千當著) は俳諧俳句の外にいろ〳〵の面白い聞書を書いたもので、大江丸の「はいかい袋」とも似てゐるけれども「關清水物語」の方が一層、興味本位である點はやはり此時代だからである。五十を過ぎた男が妾を二人持つてゐた、若き妾が云ふに、君は白髪が多くなつた、暇を下さい、其男は白髪を皆抜捨てた、すると老いた妾が云ふに、君は白髪がなく若く見える、自分のやうな年よつたものはお厭であらう、暇を下さい、其男は黒い髪を抜捨てた、とう〳〵丸坊主になつたので、妾は二人とも去つてしまつたといふ、俳諧とは何の關係のない小話のやうな事まで書込んである。「世美家」に、やはり途上の聞書として、儒家何某の辭世だとて「あめつちやいかるおせはになりました」といふ句を感嘆して卷末に記してあるのも、同じく此時代の俳家の趣味、此時代の俳書の氣易さである。

「美佐古鮓」(士由撰)に

春風やアマコマ走る帆かけ船　和蘭陀人

(あまこまとはあれこれといふ事ぢやといふにておこす)

其語だけ和蘭陀語を使ふにも當るまいと思ふけれども、斯ういふ事も、當時、興味を主とした俳壇人の好い話柄になつたものであらう。「斧の柄」にも發句のアイヌ語譯がつけてあつた。

けさ虹をかけしともいふ柳かな　乙二

(ニシヤツタ　トヨツ　アツケ　イタキ　シユ〳〵)

之も同じ時代の趣味である。

「はたけせり」(乙二編)は「旅すればそれさへうれし畑せり」の句意で、旅にありて此集をつくる心だといふ。當時の名家の名も大抵並んでゐるけれども、

秋風の尾ながは鷹に追れけり　三夕

六月の潮さし來る芝生かな　春岱

五月雨や湯取まいりの迎ひ馬　仙兆

寂として不二見る寺やつばき咲　知十

はる雨や海に遠山あるところ　露超

是等の無名作家に私は注意したいと思ふ。此附錄に乙二が云うてゐる「我にひゝきつかば俳魔とおもふべし、句はつくられぬものと覺て、古人がなつかしくなるやうにありたし」との言は、一部の眞實はあるけれども、一體に創作的熱情の冷却してゐる此時代の俳人の氣持を云つたものでもある。

「俳諧廻文帖」（素更著）は此集の初めに出した「つの文字」と共に、俳諧を文字つなぎの遊戲とする傾向のどんづまりであつて、よくも爰まで考へついたものであり、又、好くも斯う上手に出來たものである。

中は川野もとも〳〵の若葉かな（ナカハカワノモトモトモノワカハカナ）

杉戸乏しき岸時鳥（スキトトホシキキシホトトキス）

出入とひ安きに寄すや獨居て（テイリトヒヤスキニキスヤヒトリイテ）

三十六句はおろかな事、之を百韻までつゞけて上から讀んでも下から讀んでも同じだといふのだから、其技巧驚くべしといふよりも、さうした事に工夫をこらしてゐるひま人の馬鹿らしさが先づ感じられる。かういふのは私が文化年間に生れなかつた爲であらうか――。

「繪哥仙」「續繪哥仙」（宜麥編）は、俳諧一卷のしらべは連綿として悉く繪をなすべきものであるといふ見方から、俳諧の歌仙一句一句の繪化を繪畫を以て註したものである。一體、當時は凡て書物の上に挿繪を用ふる事が流行した、其傾向の一つとも云へるし、又之は勿論初心の人の手引ではあらうが、斯くまで平易通俗なる書物を要したといふ事、又、其を喜んだ俳壇の人達の氣持――そこにも此一茶時代の特色が反映されてゐると見て差支ない。通俗と卑近との關係、大衆趣味と月並趣味との關係等に就ては別に改めて書くべき機會を待つ。（荻原井泉水）

昭和二年六月五日印刷
昭和二年六月十日發行

非賣品

日本俳書大系

13

著作者　神田豐穗

發行者　神田豐穗
東京市日本橋區數寄屋町一番地

印刷者　谷口熊之助
東京市牛込區早稻田鶴卷町四〇三

印刷所　春秋社印刷所

發行所
東京市日本橋區數寄屋町・春秋社內
日本俳書大系刊行會
振替東京二六八七二・電話大手二一二四
二二二四